

毛合清水（3）遺跡 北熊ノ沢（2）遺跡

－八戸環状線道路建設事業（天久岱工区）に伴う遺跡発掘調査報告－

2024年3月

青森県教育委員会



毛合清水(3)遺跡・北熊ノ沢(2)遺跡 遠景(南西→)



毛合清水(3)遺跡・北熊ノ沢(2)遺跡 遠景(南→)



調査区全景(南→)



竪穴建物跡出土 土師器

巻頭写真2 毛合清水(3)遺跡



平安時代の遺構 調査状況(左が北)



竪穴建物跡出土 土師器



第7号竖穴建物跡 炭化材検出(上が北西)



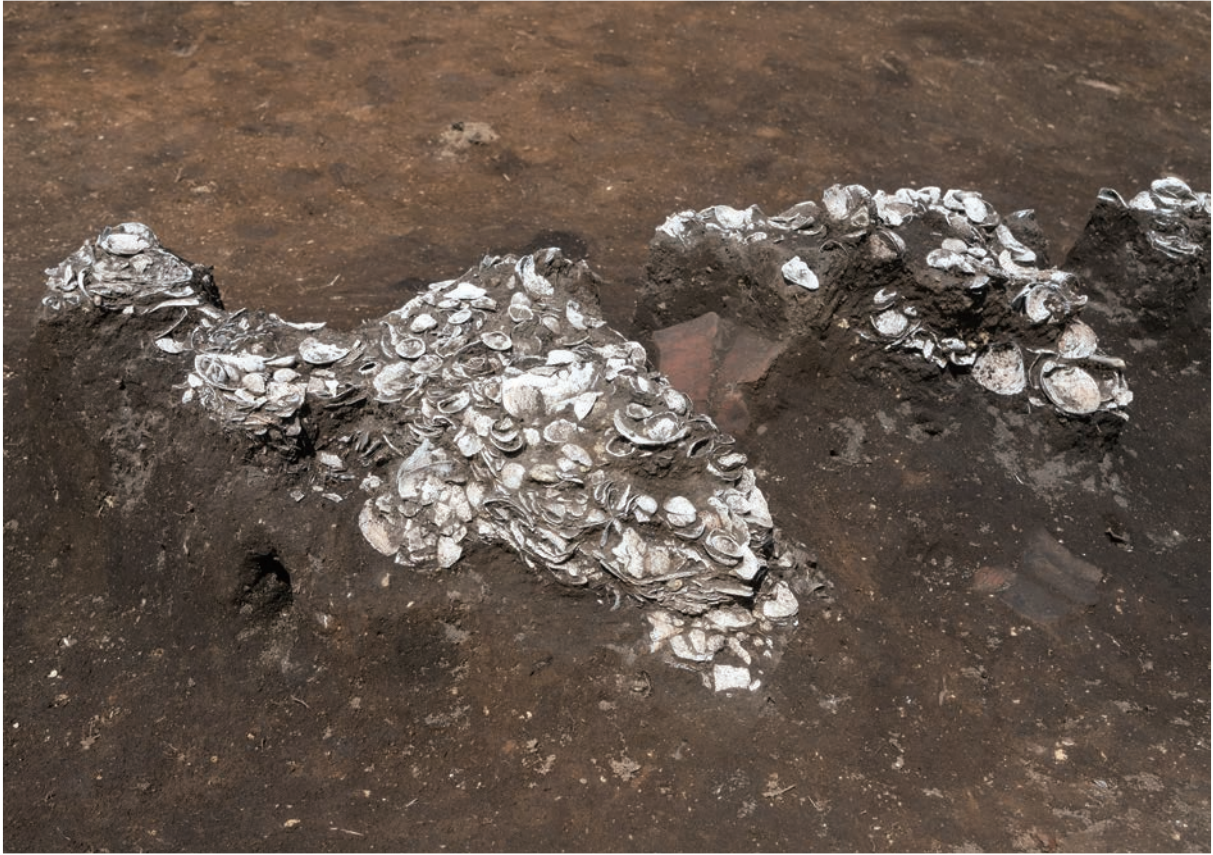
第7号竖穴建物跡 カマド(南東→)



第9号竖穴建物跡 空撮(下が北)



第9号竖穴建物跡 出土遺物



第3号貝殻集中地点 検出(南→)



第3号貝殻集中地点 出土遺物

序

青森県埋蔵文化財調査センターでは、令和4年度に八戸環状線道路建設事業（天久岱工区）予定地内に所在する毛合清水(3)遺跡・北熊ノ沢(2)遺跡の発掘調査を実施しました。

発掘調査の結果、毛合清水(3)遺跡では飛鳥～奈良時代の竪穴建物跡や縄文時代の溝状の落とし穴を検出し、飛鳥～奈良時代は集落、縄文時代は狩猟場であったことが判明しました。

北熊ノ沢(2)遺跡では平安時代の竪穴建物跡・掘立柱建物跡や縄文時代の円形・溝状の落とし穴、貝殻集中地点等を検出しました。中でも貝殻集中地点から出土した貝類からは、当時の生業活動の一端を知ることができる成果となりました。

本報告書は、これらの調査成果をまとめたものです。この調査成果が今後、埋蔵文化財の保護のために広く活用され、また地域の歴史を理解する一助となることを期待します。

最後に、日頃から埋蔵文化財の保護に対して御理解をいただいている青森県県土整備部道路課に厚くお礼申し上げますとともに、発掘調査の実施と調査報告書の作成にあたり、御指導、御協力をいただきました八戸市教育委員会をはじめとする関係各位に対し、心から感謝申し上げます。

令和6年3月

青森県埋蔵文化財調査センター
所 長 渡 部 泰 雄

例 言・凡 例

1 本書は、青森県県土整備部道路課による八戸環状線道路建設事業（天久岱工区）に伴い、青森県埋蔵文化財調査センターが令和4年度に発掘調査を実施した、八戸市毛合清水(3)遺跡、北熊ノ沢(2)遺跡の発掘調査報告書である。発掘調査の対象面積と発掘面積は以下のとおりである。

毛合清水(3)遺跡 対象面積は6,300m² 発掘面積は5,403m²

北熊ノ沢(2)遺跡 対象面積は7,000m² 発掘面積は5,492m²

2 遺跡の所在地及び青森県遺跡番号は以下のとおりである。

毛合清水(3)遺跡 青森県八戸市大字尻内町字毛合清水、北熊ノ沢 青森県遺跡番号 203122

北熊ノ沢(2)遺跡 青森県八戸市大字尻内町字北熊ノ沢 青森県遺跡番号 203520

3 発掘調査及び整理・報告書作成の経費は発掘調査を委託した青森県県土整備部道路課が負担した。

4 発掘調査から整理・報告書作成までの期間は、以下のとおりである。

発掘調査期間 令和4年5月10日～令和4年10月28日

整理・報告書作成期間 令和5年4月1日～令和6年3月31日

5 本報告書は、青森県埋蔵文化財調査センターが編集し、青森県教育委員会が作成した。執筆と編集は第1編を齋藤正文化財保護主幹、第2編を齋藤正文化財保護主幹、平山明寿文化財保護主幹、第3編を小山浩平文化財保護主幹、平山明寿文化財保護主幹、中門亮太文化財保護主査が担当した。また、依頼原稿については文頭に執筆者名を記した。

6 発掘調査成果の一部は、発掘調査報告会等において公表しているが、これらと本書の内容が異なる場合は、本書が優先する。

7 発掘調査から整理・報告書作成にあたり、以下の業務については委託により実施した。

基準点測量、遺構測量 株式会社 青秋

空中写真撮影、遺物写真撮影 有限会社 無限

金属製品の保存処理 株式会社 吉田生物研究所

微細遺物抽出 株式会社 イビソク

動物遺体の同定、樹種同定・放射性炭素年代測定 株式会社パレオ・ラボ

放射性炭素年代測定 株式会社 加速器分析研究所

石器実測委託 株式会社 アルカ

遺物写真切り抜き・画像回転、礫石器展開図作成 株式会社知立造園CUBIC事業部青森営業所

8 石器等の石質鑑定、地形と地質及び火山灰分析の原稿執筆は国立大学法人弘前大学大学院理工学研究科講師 佐々木実氏に依頼した。

9 本書に掲載した遺跡位置図等は、国土地理院発行の「電子地形図 25000」『苫米地』『八戸西部』を合成・加工して使用した。

10 測量原点の座標値は、世界測地系(JGD2011)に基づく平面直角座標第X系による。

11 挿図中の方位は、世界測地系(JGD2011)の座標北を示している。

12 実測図等の図版の縮尺は挿図毎にスケール等を示した。

13 遺構については、その種類を示す略号と検出順に算用数字の通し番号を付した。遺構に使用した略号は次のとおりである。SI－竪穴建物跡 SB－掘立柱建物跡 SK－土坑 SV－溝状土坑 SN－焼土遺構 SP－柱穴 Pit－建物内柱穴、逆茂木痕

14 遺構実測図の土層断面図等には、水準点を基にした海拔標高を付した。

15 遺構実測図の縮尺は、原則として1/60に統一し、挿図毎にスケールを示した。また4mグリッド交点杭と杭名を記載したが、図上に4mグリッド交点杭が掲載されない場合には、近隣の4mグリッド杭から任意に計測した点を掲載した(例：『IH-34 から北に2m、東に1m』→IH-34グリッド交点杭から、北に2m、東に1mの点であることを示す)。

16 基本土層の層序番号にはローマ数字を、遺構内堆積土の層序番号には算用数字を使用した。

17 本書に使用した網掛け等の指示は、以下のとおりである。

【遺構】 ：崩落粘土 ：火山灰 ：焼土・火床面 ：硬化面
：柱痕

【遺物：土師器】 ：内面黒色処理 ：スス付着範囲

【遺物：羽口】 ：被熱範囲(弱) ：被熱範囲(中) ：被熱範囲(強)

【遺物：石器】 ：磨り ：光沢 ：黒色付着物

●：土器 ○：土製品 ■：須恵器 ★：鉄製品 ▲：石器 △：石製品 ◆：サンプル

18 遺物は、取り上げ順にその種類を示す略号と通し番号を付した。遺物に使用した略号は、次のとおりである。P－土器 S－石器 C－炭化物 土－土製品

19 遺物実測図には、挿図毎に1から通し番号を付した。

20 遺物実測図の縮尺は、原則として剥片石器・製品類・礫石器の一部は1/2、その他は1/3に統一し、挿図毎にスケール等を示した。

21 遺物観察表の土器観察表内の()内数値は口径・底径は復元値、器高は残存値である。

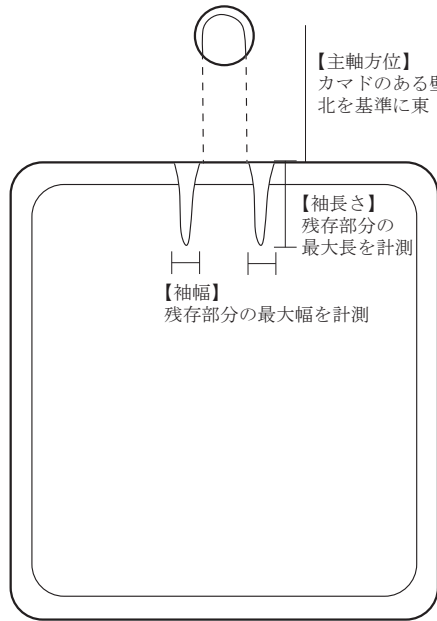
22 遺物写真の各番号は、遺物実測図と共通番号を付した。また、縮尺は遺物図版に準拠した。

23 発掘調査及び整理・報告書作成における出土品、実測図、写真等は、現在、青森県埋蔵文化財調査センターが保管している。

24 発掘調査及び整理、報告書作成に際し、下記の機関及び方々から御協力、御指導を得た(敬称略、順不同)

八戸市埋蔵文化財センター 是川縄文館 上ノ山 拓己 斉藤 慶吏 杉山 陽亮

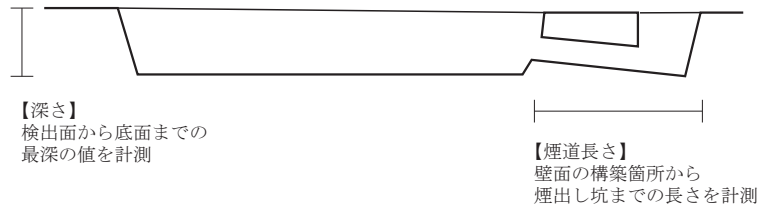
竪穴建物跡 平面図



【平面規模：長軸・短軸】
上端長さを計測
完全に計測できない事例は括弧書きとし、計測可能範囲で長い方を便宜的に長軸とする

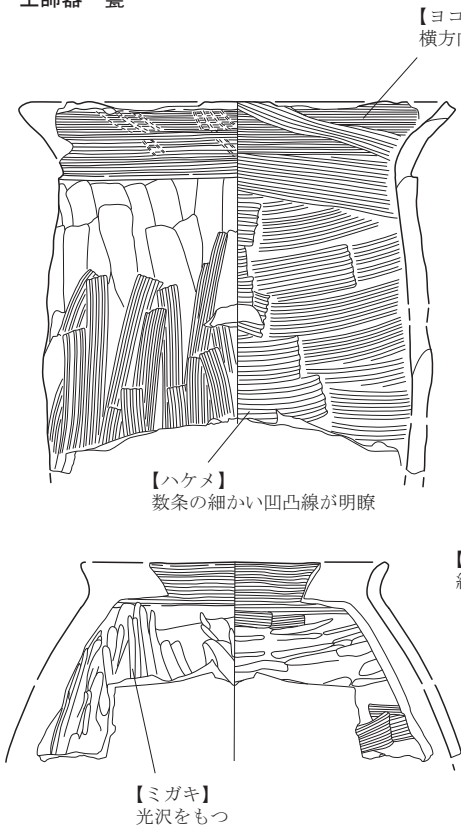
【平面規模：面積】
下端範囲を計測
完全に計測できない事例は括弧書き

竪穴建物跡 断面図

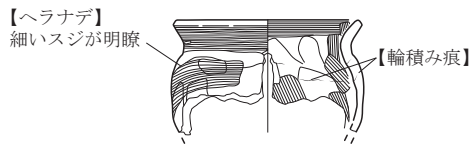
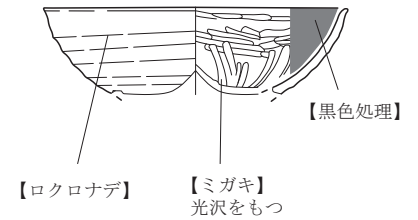


建物跡の計測基準

土師器 甕



土師器 坏



土師器実測図凡例

目次

巻頭写真

序

例言・凡例

目次・挿図目次・表目次・写真図版目次

第1編 調査の概要と遺跡の環境

第1章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

第2節 調査の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

第3節 調査及び整理体制・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4

第4節 発掘・整理作業経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5

第2章 遺跡の環境

第1節 遺跡周辺の歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7

第2節 毛合清水(3)遺跡外の地形・地質・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11

第3節 基本土層・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 14

第2編 毛合清水(3)遺跡

第1章 検出遺構と出土遺物

第1節 概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 15

第2節 竪穴建物跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 15

第3節 土坑・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 23

第4節 溝状土坑・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 32

第5節 遺構外出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 43

第2章 自然科学分析

第1節 放射性炭素年代測定・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 49

第2節 炭化材の樹種同定・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 52

第3章 総括・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 54

引用・参考文献・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 55

遺構計測表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 56

遺物観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 57

写真図版・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 60

第3編 北熊ノ沢(2)遺跡

第1章 検出遺構と出土遺物

第1節 概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 81

第2節 竪穴建物跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 83

第3節 掘立柱建物跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 135

第4節 土坑・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 139

第5節 溝状土坑・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 160

第6節 焼土遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 175

第7節 柱穴・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 178

第8節 貝殻集中地点・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 178

第9節 遺構外出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 181

第2章 自然科学分析	
第1節 放射性炭素年代測定1	205
第2節 放射性炭素年代測定2	209
第3節 放射性炭素年代測定3	213
第4節 出土炭化材の樹種同定1	216
第5節 出土炭化材の樹種同定2	219
第6節 北熊ノ沢(2)遺跡出土の動物遺体	222
第7節 火山灰同定	226
第3章 総括	
第1節 縄文時代	229
第2節 平安時代	234
第3節 北熊ノ沢(2)遺跡で検出された焼失竪穴建物跡の復元検討	239
第4節 まとめ	247
引用・参考文献	248
遺構計測表	249
遺物観察表	249
写真図版	265

報告書抄録

奥付

挿図目次

図1	遺跡位置図……………	2	図34	第3号竪穴建物跡出土遺物(3)…	96
図2	毛合清水(3)遺跡・北熊ノ沢(2)遺跡 路線図……………	3	図35	第4号竪穴建物跡・出土遺物……	98
図3	周辺の遺跡……………	10	図36	第5号竪穴建物跡(1)……………	100
図4	基本土層図……………	14	図37	第5号竪穴建物跡(2)・第5号竪穴 建物跡出土遺物(1)……………	101
図5	遺構配置図・調査区……………	16	図38	第5号竪穴建物跡出土遺物(2)…	102
図6	第1号竪穴建物跡(1)……………	17	図39	第6号竪穴建物跡……………	104
図7	第1号竪穴建物跡(2)……………	18	図40	第6号竪穴建物跡出土遺物……	105
図8	第1号竪穴建物跡(3)……………	19	図41	第7号竪穴建物跡(1)……………	107
図9	第1号竪穴建物跡出土遺物……	20	図42	第7号竪穴建物跡(2)……………	108
図10	第2号竪穴建物跡・第3号竪穴建物跡、 第3号竪穴建物跡出土遺物……	22	図43	第7号竪穴建物跡(3)……………	109
図11	土坑(1)……………	28	図44	第7号竪穴建物跡出土遺物(1)…	110
図12	土坑(2)……………	29	図45	第7号竪穴建物跡出土遺物(2)…	111
図13	土坑(3)……………	30	図46	第8号竪穴建物跡(1)……………	113
図14	土坑出土遺物……………	31	図47	第8号竪穴建物跡(2)……………	114
図15	溝状土坑(1)……………	38	図48	第8号竪穴建物跡出土遺物……	115
図16	溝状土坑(2)……………	39	図49	第9号竪穴建物跡(1)……………	122
図17	溝状土坑(3)……………	40	図50	第9号竪穴建物跡(2)……………	123
図18	溝状土坑(4)……………	41	図51	第9号竪穴建物跡(3)……………	124
図19	溝状土坑(5)……………	42	図52	第9号竪穴建物跡(4)……………	125
図20	遺構外出土土器(1)……………	45	図53	第9号竪穴建物跡(5)……………	126
図21	遺構外出土土器(2)……………	46	図54	第9号竪穴建物跡出土遺物(1)…	127
図22	遺構外出土石器(1)……………	47	図55	第9号竪穴建物跡出土遺物(2)…	128
図23	遺構外出土石器(2)……………	48	図56	第9号竪穴建物跡出土遺物(3)…	129
図24	北熊ノ沢(2)遺跡 遺構配置図…	82	図57	第9号竪穴建物跡出土遺物(4)…	130
図25	第1号竪穴建物跡(1)……………	85	図58	第9号竪穴建物跡出土遺物(5)…	131
図26	第1号竪穴建物跡(2)・第1号竪穴 建物跡出土遺物(1)……………	86	図59	第9号竪穴建物跡出土遺物(6)…	132
図27	第1号竪穴建物跡出土遺物(2)…	87	図60	第9号竪穴建物跡出土遺物(7)…	133
図28	第2号竪穴建物跡(1)……………	89	図61	第9号竪穴建物跡出土遺物(8)…	134
図29	第2号竪穴建物跡(2)……………	90	図62	掘立柱建物跡(1)……………	136
図30	第2号竪穴建物跡出土遺物……	91	図63	掘立柱建物跡(2)……………	137
図31	第3号竪穴建物跡(1)……………	93	図64	掘立柱建物跡(3)・掘立柱建物跡 出土遺物……………	138
図32	第3号竪穴建物跡(2)・第3号竪穴 建物跡出土遺物(1)……………	94	図65	土坑(1)……………	152
図33	第3号竪穴建物跡出土遺物(2)…	95	図66	土坑(2)……………	153
			図67	土坑(3)……………	154
			図68	土坑(4)……………	155

図69	土坑(5)……………	156	図89	遺構外出土石器(1)……………	194
図70	土坑出土遺物(1)……………	157	図90	遺構外出土石器(2)……………	195
図71	土坑出土遺物(2)……………	158	図91	遺構外出土石器(3)……………	196
図72	土坑出土遺物(3)……………	159	図92	遺構外出土石器(4)……………	197
図73	溝状土坑(1)……………	168	図93	遺構外出土石器(5)……………	198
図74	溝状土坑(2)……………	169	図94	遺構外出土石器(6)……………	199
図75	溝状土坑(3)……………	170	図95	遺構外出土石器(7)……………	200
図76	溝状土坑(4)……………	171	図96	遺構外出土石器(8)……………	201
図77	溝状土坑(5)……………	172	図97	遺構外出土石器(9)……………	202
図78	溝状土坑出土遺物(1)……………	173	図98	遺構外出土石器(10)……………	203
図79	溝状土坑出土遺物(2)……………	174	図99	遺構外出土石器(11)・遺構外出土製品 ・遺構外出土石製品……………	204
図80	焼土遺構・出土遺物……………	177	図100	北熊ノ沢(2)遺跡及び周辺遺跡出土の 貝類組成……………	231
図81	第3号貝殻集中地点……………	179	図101	北熊ノ沢(2)遺跡及び周辺遺跡 出土貝類の殻長分布……………	233
図82	第3号貝殻集中地点出土遺物……………	180	図102	北熊ノ沢(2)遺跡 竪穴建物跡 集成……………	235
図83	遺構外出土石器(1)……………	185	図103	北熊ノ沢(2)遺跡 出土土師器 集成……………	237
図84	遺構外出土石器(2)……………	186			
図85	遺構外出土石器(3)……………	187			
図86	遺構外出土石器(4)……………	188			
図87	遺構外出土石器(5)……………	189			
図88	遺構外出土石器(6)……………	190			

表目次

表1	周辺の遺跡……………	9	表10	柱穴計測表……………	249
表2	毛合清水(3)遺跡遺構計測表……………	56	表11	縄文土器観察表……………	249
表3	土師器観察表……………	57	表12	平安時代土器観察表……………	256
表4	土製品観察表……………	57	表13	土製品観察表……………	261
表5	鉄製品観察表……………	57	表14	石器・石製品観察表……………	261
表6	縄文土器観察表……………	58	表15	鉄製品観察表……………	264
表7	石器観察表……………	59	表16	羽口観察表……………	264
表8	I 2群土器 口縁部分類……………	230	表17	鉄生産関連遺物観察表……………	264
表9	竪穴建物跡計測表……………	249			

写真図版目次

巻頭写真1 遺跡遠景	巻頭写真4 北熊ノ沢(2)遺跡 検出遺構と出土遺物(2)
毛合清水(3)遺跡・北熊ノ沢(2)遺跡 遠景	第7号竪穴建物跡 炭化材検出
毛合清水(3)遺跡・北熊ノ沢(2)遺跡 遠景	第7号竪穴建物跡 カマド
巻頭写真2 毛合清水(3)遺跡	巻頭写真5 北熊ノ沢(2)遺跡 検出遺構と出土遺物(3)
調査区全景	第9号竪穴建物跡 空撮
竪穴建物跡出土 土師器	第9号竪穴建物跡 出土遺物
巻頭写真3 北熊ノ沢(2)遺跡 検出遺構と出土遺物(1)	巻頭写真6 北熊ノ沢(2)遺跡 検出遺構と出土遺物(4)
平安時代の遺構 調査状況	第3号貝殻集中地点 検出
竪穴建物跡出土 土師器	第3号貝殻集中地点 出土遺物
写真1 調査区・基本土層…………… 60	写真25 第2号竪穴建物跡(2)・第3号竪穴
写真2 第1号竪穴建物跡(1)…………… 61	建物跡(1)…………… 268
写真3 第1号竪穴建物跡(2)…………… 62	写真26 第3号竪穴建物跡(2)…………… 269
写真4 第2・3号竪穴建物跡…………… 63	写真27 第4号竪穴建物跡・第5号竪穴建物
写真5 土坑(1)…………… 64	跡(1)…………… 270
写真6 土坑(2)…………… 65	写真28 第5号竪穴建物跡(2)…………… 271
写真7 土坑(3)…………… 66	写真29 第6号竪穴建物跡…………… 272
写真8 土坑(4)…………… 67	写真30 第7号竪穴建物跡(1)…………… 273
写真9 土坑(5)…………… 68	写真31 第7号竪穴建物跡(2)…………… 274
写真10 溝状土坑(1)…………… 69	写真32 第7号竪穴建物跡(3)…………… 275
写真11 溝状土坑(2)…………… 70	写真33 第8号竪穴建物跡(1)…………… 276
写真12 溝状土坑(3)…………… 71	写真34 第8号竪穴建物跡(2)…………… 277
写真13 溝状土坑(4)…………… 72	写真35 第9号竪穴建物跡(1)…………… 278
写真14 溝状土坑(5)…………… 73	写真36 第9号竪穴建物跡(2)…………… 279
写真15 溝状土坑(6)…………… 74	写真37 第9号竪穴建物跡(3)…………… 280
写真16 溝状土坑(7)…………… 75	写真38 第9号竪穴建物跡(4)…………… 281
写真17 調査状況…………… 76	写真39 第9号竪穴建物跡(5)…………… 282
写真18 第1号竪穴建物跡出土遺物…………… 77	写真40 第9号竪穴建物跡(6)…………… 283
写真19 第3号竪穴建物跡、第1・10・12	写真41 掘立柱建物跡(1)…………… 284
・15号土坑、遺構外出土遺物(1)…………… 78	写真42 掘立柱建物跡(2)・土坑(1)…………… 285
写真20 遺構外出土遺物(2)…………… 79	写真43 土坑(2)…………… 286
写真21 遺構外出土遺物(3)…………… 80	写真44 土坑(3)…………… 287
写真22 第1号竪穴建物跡(1)…………… 265	写真45 土坑(4)…………… 288
写真23 第1号竪穴建物跡(2)…………… 266	写真46 土坑(5)…………… 289
写真24 第2号竪穴建物跡(1)…………… 267	写真47 土坑(6)…………… 290

写真48	土坑(7)·····	291	写真68	第3号竖穴建物跡出土遺物(2)·第4号竖穴建物跡出土遺物·····	311
写真49	土坑(8)·····	292	写真69	第5号竖穴建物跡·第6号竖穴建物跡·第7号竖穴建物跡出土遺物(1)··	312
写真50	土坑(9)·····	293	写真70	第7号竖穴建物跡出土遺物(2)·····	313
写真51	土坑(10)·····	294	写真71	第8号竖穴建物跡·第9号竖穴建物跡出土遺物(1)·····	314
写真52	土坑(11)·····	295	写真72	第9号竖穴建物跡出土遺物(2)·····	315
写真53	溝状土坑(1)·····	296	写真73	第9号竖穴建物跡出土遺物(3)·····	316
写真54	溝状土坑(2)·····	297	写真74	第9号竖穴建物跡出土遺物(4)·····	317
写真55	溝状土坑(3)·····	298	写真75	土坑出土遺物(1)·····	318
写真56	溝状土坑(4)·····	299	写真76	土坑出土遺物(2)·溝状土坑出土遺物·貝殼集中地点出土遺物·····	319
写真57	溝状土坑(5)·····	300	写真77	遺構外出土土器(1)·····	320
写真58	溝状土坑(6)·····	301	写真78	遺構外出土土器(2)·····	321
写真59	溝状土坑(7)·····	302	写真79	遺構外出土土器(3)·····	322
写真60	溝状土坑(8)·····	303	写真80	遺構外出土石器(1)·····	323
写真61	溝状土坑(9)·····	304	写真81	遺構外出土石器(2)·····	324
写真62	焼土遺構(1)·····	305	写真82	遺構外出土石器(3)·····	325
写真63	焼土遺構(2)·····	306	写真83	遺構外出土石器(4)·遺構外出土土製品·遺構外出土石製品·····	326
写真64	焼土遺構(3)·貝殼集中地点(1)··	307			
写真65	貝殼集中地点(2)·····	308			
写真66	第1号竖穴建物跡出土遺物·····	309			
写真67	第2号竖穴建物跡·第3号竖穴建物跡出土遺物(1)·····	310			

第1編 調査の概要と遺跡の環境

第1章 調査の概要

第1節 調査に至る経過

八戸環状線道路建設事業（天久岱工区）予定地内に所在する埋蔵文化財の取扱いについては、平成25年度から青森県県土整備部道路課（以下、県土整備部道路課）及び三八地域県民局地域整備部と青森県教育庁文化財保護課（以下、文化財保護課）が継続的に協議を行っており、当該事業予定地内に所在する遺跡については、買収及び上物撤去等の環境が整い次第、試掘調査を実施することとしていた。

令和2年11月に、試掘環境が整った当該事業予定地内を文化財保護課が試掘調査を実施したところ、事業予定地内で遺構・遺物が確認されたことから、その区域は周知の埋蔵文化財包蔵地（毛合清水(3)遺跡及び北熊ノ沢(2)遺跡）として範囲変更がなされ、毛合清水(3)遺跡では杭No.196～199間、北熊ノ沢(2)遺跡では杭No.202～210間について、工事着手前の本発掘調査が必要と判断された。

この結果を受け、再度、県土整備部道路課と文化財保護課との間で協議を行ったが遺跡の現状保存が困難であることから、工事優先箇所や他調査事業との調整を経て、発掘調査を令和4年度に実施する計画とし、青森県埋蔵文化財調査センターが調査を担当することとなった。

毛合清水(3)遺跡及び北熊ノ沢(2)遺跡については、令和4年2月4日付け三県局整備第703号で三八地域県民局長から文化財保護法第94条第1項の土木工事等のための発掘に関する通知がなされ、青森県教育委員会教育長が同年4月12日付け青教文第80号で工事着手前の本発掘調査(記録保存調査)の実施を通知している。(神)

第2節 調査の方法

1 発掘調査の方法

令和2年度に行われた文化財保護課による試掘調査の結果、古代の竪穴建物跡や土坑、縄文時代の遺物が確認された（青森県教育委員会2021）。試掘結果を踏まえ集落の時期・構造等を把握できるように発掘調査を進めた。

[測量基準点・水準点の設置・グリッド設定] 遺構測量に用いた測量基準点及び水準原点は委託により調査区内に4級基準点を7点打設した。基準点からの測量に支障が生じた場合、調査区内の任意点に座標を移動し使用した。グリッドは世界測地系による国土座標値を基準として4×4mに設定した。原点は平面直角座標第X系のX=58920、Y=50240とした。各グリッドは西から東方向にローマ数字（Ⅰ～Ⅱ）とアルファベット（A～Y）を、南から北方向に算用数字を1から付し、南西隅の組み合わせで呼称した。

[基本土層] 上位からⅠ層、Ⅱ層とローマ数字を付け、必要に応じて小文字のアルファベットを付け細分した。

[表土等の調査] 試掘調査の成果を踏まえ、状況を確認しながら重機を使用し、省力化を図るように



図1 遺跡位置図

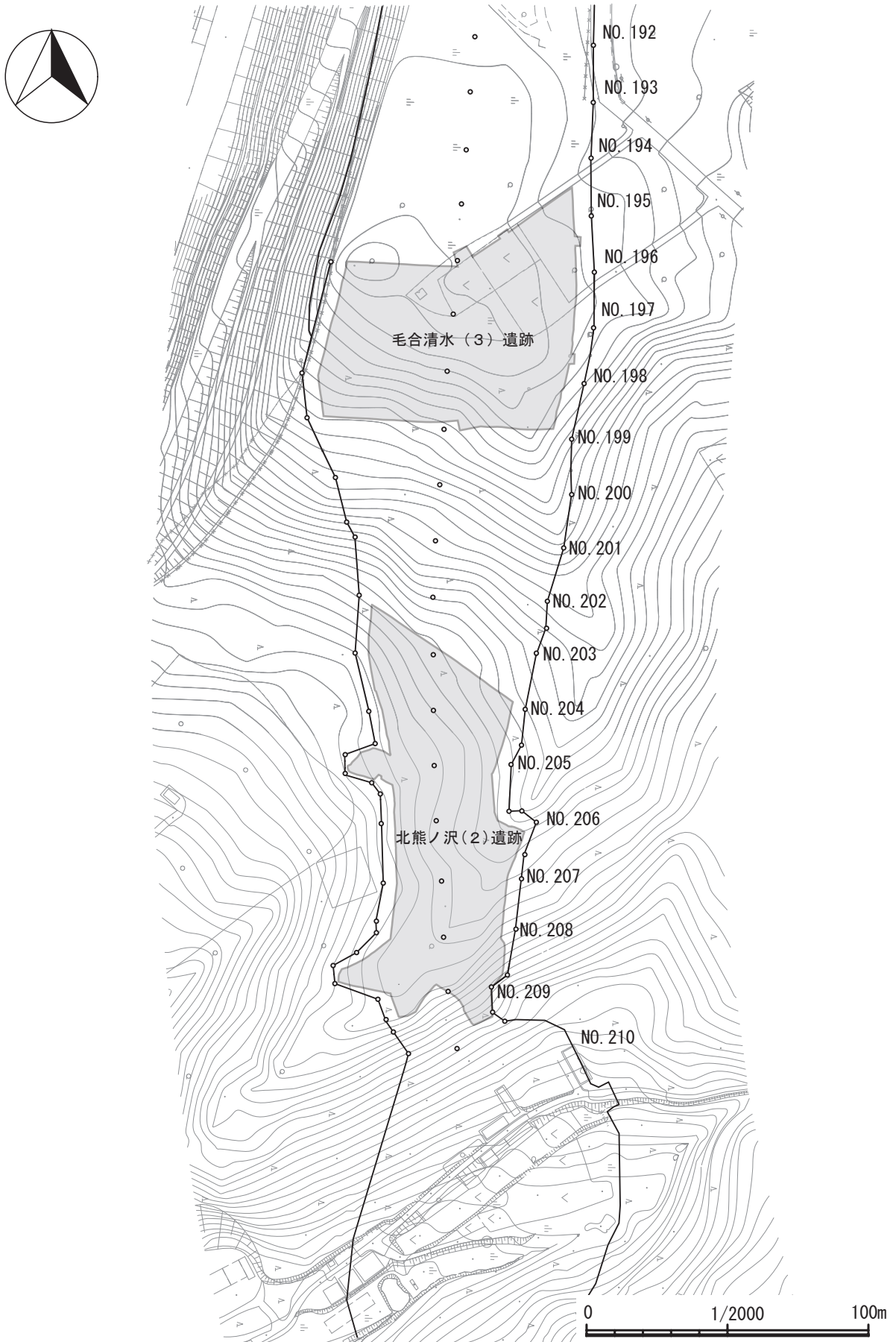


図2 毛合清水(3)遺跡・北熊ノ沢(2)遺跡 路線図

努めた。表土から遺構確認面までの土層から出土した遺物は、適宜層位毎に取り上げた。

[遺構の調査] 検出遺構には、原則として確認順に種類別の遺構番号を付して精査した。堆積土層観察用のセクションベルトは、遺構の形態や大きさ等に応じて基本的に4分割又は2分割で設定した。遺構内の堆積土層には、算用数字を付けて、基本土層と区別した。遺構測量は委託で実施し、遺構の平面図、土層断面図、遺構配置図の作成はトータルステーションによる計測を行った。等高線作成は「3Dレーザースキャナー計測」により行った。遺構内の出土遺物は、遺構単位で層位毎や堆積土一括で取り上げたが、床面・底面の出土遺物については、必要に応じて縮尺1/20のドットマップ図や形状実測図を作成した。

[写真撮影] 原則として35mmモノクロームフィルム、35mmカラーリバーサルフィルム、および約2,620万画素のデジタルカメラ、1,605万画素のコンパクトデジタルカメラを併用し、発掘作業状況、土層の堆積状況、遺物の出土状況、遺構の検出・精査状況、完掘後の全景等を記録した。なお、調査区の遠景等は委託でドローンにより撮影した。

2 整理・報告書作成作業の方法

[図面類の整理] 調査で作成した遺構の平面図と土層断面図の調整は、株式会社CUBIC製「遺構くん」(遺構実測支援システム)で行った。各図面の測量点等については、エクセルファイル(.xlsx形式及び.csv形式)でHDD及び長期保存用ブルーレイディスクに保存した。

[写真類の整理] 35mmモノクロームフィルムと35mmカラーリバーサルフィルムは撮影日順に整理してネガアルバムに収納した。デジタル写真は撮影内容を示すファイル名に変更した上で遺構順に整理し、HDD及び長期保存用ブルーレイディスクに保存した。

[遺物の洗浄・注記] 調査年度、遺跡名、出土区・遺構名、層位等を略記したが、剥片等の直接注記できないものは、カードと共に収納するポリ袋に注記した。

[報告書掲載遺物の選別] 遺構の構築・廃絶時期等を示す遺物、帰属時代・型式・器種等の分かる遺物等を分類・選別した。

[遺物の観察・図化] 資料は表面を十分に観察した上で、各遺物の特徴を適切に分かり易く表現するように図化し、観察表を作成した。

[遺物の写真撮影] 写真撮影は委託により行い、質感や製作技法等を表現するよう留意して撮影した。遺物写真の切り抜きも委託により行った。

[自然科学分析] 委託・依頼により実施した(詳細は例言参照)。

[遺物のトレース・拓本の切り抜き・版下作成] 遺物のトレースは、Adobe社製「Illustrator」、拓本の切り抜きはAdobe社製「Photoshop」、図版の版下作成はAdobe社製「Illustrator」・「InDesign」を用いた。

第3節 調査及び整理体制

1 発掘調査体制

調査担当者 青森県埋蔵文化財調査センター

所長

和田 和男(現青森県総合学校教育センター所長)

総務GM	油布 恵美（現青森県立図書館奉仕課長）
調査第一GM	鈴木 和子
調査第一SM	齋藤 正（発掘調査担当者 現調査第二SM）
文化財保護主幹	平山 明寿（発掘調査担当者）
文化財保護主幹	小山 浩平（発掘調査担当者）
文化財保護主幹	小田川 哲彦（発掘調査担当者）
文化財保護主査	中門 亮太（発掘調査担当者）

専門的事項に関する指導・助言

調査員	上條 信彦	国立大学法人弘前大学人文社会科学部教授（考古学）
〃	宇部 則保	八戸市埋蔵文化財調査センター是川縄文館発掘専門員（考古学）
〃	佐々木 実	国立大学法人弘前大学大学院理工学研究科講師（地質学）
〃	中村 隼人	八戸市博物館史跡根城整備専門員（建築学）

2 整理作業体制

整理主体 青森県埋蔵文化財調査センター

所長	渡部 泰雄
次長	稲葉 克徳
総務GM	佐藤 真理
調査第二GM	神 康夫
調査第二SM	齋藤 正（報告書作成担当者）
文化財保護主幹	平山 明寿（報告書作成担当者）
文化財保護主幹	小山 浩平（報告書作成担当者）
文化財保護主査	中門 亮太（報告書作成担当者）

専門的事項に関する指導・助言

調査員	上條 信彦	国立大学法人弘前大学人文社会科学部教授（考古学）
〃	宇部 則保	八戸市埋蔵文化財調査センター是川縄文館発掘専門員（考古学）
〃	佐々木 実	国立大学法人弘前大学大学院理工学研究科講師（地質学）
〃	中村 隼人	八戸市博物館史跡根城整備専門員（建築学）

第4節 発掘・整理作業経過

1 発掘作業の経過

発掘調査は、令和4年5月10日から10月28日までの期間で行った。各遺跡の発掘作業の経過は以下のとおりである。

（毛合清水(3)遺跡）

5月10日	重機を使用して調査区北東側から表土を掘削し、遺構確認を行った。
5月18日	竪穴建物跡が杭No.196の北側へ延びていたため、協議を行った。結果、調査区を杭No.196のセンター杭から北東側へ拡張することとなった。

- 5月下旬 北東側へ調査区を拡張したところ、新たな遺構を検出したため、さらに拡張した。
- 6月上旬～ 調査区西側の遺構精査を行った。
- 6月下旬 重機を使用して調査区中央の表土を掘削し、遺構確認を行った。調査区西側の遺構精査が終了したので、重機を使用してⅡ層を掘削し、下層の遺構確認を行った。
- 7月上旬 調査区中央部の遺構確認を継続しつつ、調査区東側の遺構精査を開始した。
- 7月下旬 調査区東側の遺構精査をほぼ終了し、Ⅱ層から下位については、縄文時代前期の遺物が出土することを確認したため、人力により掘削し遺構検出及び精査を行った。
- 8月25日 高所作業車とドローンを用いて調査区を撮影した。佐々木調査員による地形・地質の現地鑑定を受けた。
- 10月28日 全ての発掘調査が終了し、現地から撤収した。

(北熊ノ沢(2)遺跡)

- 5月10日 調査区北側斜面からトレンチ掘削により、遺構確認を行った。
- 5月12日～ 重機を使用して調査区南側斜面、北側斜面の表土を掘削し、遺構検出を行った。
- 5月下旬 重機を使用して平場部分の表土を掘削を開始した。
- 5月下旬 調査区北側斜面と南側斜面の一部の調査を終了した。
- 6月上旬 平場部分の遺構確認を行い、縄文時代と平安時代の遺構を検出した。
- 6月下旬 調査区南東側へ遺物包含層が延びていたため、調査区拡張について協議を行った。
- 7月中旬 平場部分の検出遺構の精査を開始した。
- 7月27日 普及事業「夏休みに考古学者になろう」を実施した。
- 8月24日 ドローンを用いて調査区を撮影した。
- 8月25日 佐々木調査員による地形・地質の現地鑑定を受けた。
- 9月上旬 平場部分の遺構精査を継続しながら、調査区の拡張をした南東側斜面の表土除去、遺構精査を行った。
- 9月6・27日 中村調査員による建物跡についての現地鑑定を受けた。
- 9月30日 ドローンを用いて調査区を撮影した。
- 10月13・14日 現地見学会を開催した
- 10月21日 ドローンを用いて調査区を撮影した。
- 10月28日 全ての発掘調査が終了し、現地から撤収した。

2 整理・報告書作成作業の経過

整理・報告書作成作業は遺物の水洗い・注記作業、写真類や遺構データの整理作業など調査年度内に行ったものもあるが、主として令和5年4月1日から令和6年3月31日までの期間で行った。

4～6月 出土遺物の計量・接合・復元作業を行った。6月下旬に土器や剥片石器等の写真撮影を行った。炭化材の樹種同定及び炭素年代測定、動物遺体同定を株式会社パレオ・ラボに委託した。金属製品の保存処理を株式会社吉田生物研究所に委託した。

7～8月 出土遺物の拓本・図化作業を行った。石器の実測を株式会社アルカに委託した。礫石器

の展開図作成を株式会社知立造園CUBIC事業部青森営業所に委託した。

10～11月 遺物のデジタルトレース作業を行い、各種図版を作成した。併せて報告書掲載遺物観察表の作成を行った。11月中旬に礫石器や金属製品の写真撮影を実施した。炭化材の年代測定を株式会社加速器分析研究所に委託した。

12～2月 12月11日・25日に佐々木実調査員に石質鑑定を依頼した。12月下旬に遺物の集合写真撮影を行った。原稿の執筆をすすめ、遺構図版、遺物図版、写真図版等を作成し、報告書の割付・編集を行い入稿した。

3月 3度の校正を経て報告書を刊行し、記録類、出土遺物等を整理して収納した。（齋藤）

第2章 遺跡の環境

第1節 遺跡周辺の歴史的環境

毛合清水(3)遺跡・北熊ノ沢(2)遺跡は八戸市役所から北西へ約5.5km、馬淵川と五戸川に挟まれた段丘上に立地している。調査区内の標高は、毛合清水(3)遺跡が約76.8～84.0m、北熊ノ沢(2)遺跡が約46.8～69.0mである。図3に両遺跡周辺の遺跡を示した。馬淵川と五戸川に挟まれた段丘上や馬淵川流域に数多くの遺跡が存在している。この地域では、東北新幹線や八戸自動車道、県道建設等の開発事業に伴い発掘調査が実施されており、数多くの調査成果が挙げられている。ここでは縄文時代～近世の遺跡について概観することとする。

縄文時代草創期は和野前山遺跡から爪形文土器が出土している。馬淵川流域では櫛引遺跡から竪穴建物跡、土坑を検出し、爪形文土器、多縄文系土器が出土している。なお、多縄文系土器は令和5年に国の重要文化財に指定された。

縄文時代早期に入ると遺構や遺物が確認される遺跡が増加する。早期前葉は日計遺跡から押型文土器が出土し、「日計式土器」の標式遺跡として知られる。周辺の見立山(2)遺跡や売場遺跡からは、日計式期の竪穴建物跡を検出している。和野前山遺跡や根城跡、鳥ノ木沢遺跡からも日計式土器が出土している。

早期中葉は売場遺跡から螢沢AⅡ式期、物見台式期、ムシリⅠ式期の竪穴建物跡、馬淵川流域では櫛引遺跡で鳥木沢式期の竪穴建物跡を検出している。遺物は和野前山遺跡、見立山(2)遺跡、根岸山添遺跡、売場遺跡、根城跡、休場遺跡、鶉窪遺跡、田面木平(1)遺跡、鳥ノ木沢遺跡、櫛引遺跡から出土している。早期後葉は見立山(2)遺跡、史跡長七谷地貝塚、売場遺跡、和野前山遺跡、田面木遺跡で竪穴建物跡を検出している。なかでも、史跡長七谷地貝塚は早期後葉を代表する貝塚を伴う集落である。貝塚からは大量の貝類や魚骨が出土している。貝類はハマグリ、オオノガイの比率が非常に高く、内湾性の貝が出土している。魚骨は約20種類が確認されている。代表的なものとしてスズキ、クロダイ、カツオ、サバ、ヒラメがある。また、銚頭、刺突具、骨針、結合釣針等や石錘が出土しており、食料事情や漁労活動を伝える遺跡である。早期から前期前葉に属する円形の落とし穴は見立山(2)遺跡、櫛引遺跡、上野平(3)遺跡、鶉窪遺跡、鳥ノ木沢遺跡などで確認できる。

縄文時代前期は史跡長七谷地貝塚から出土した前期初頭の土器が「長七谷地Ⅲ群土器」と呼ばれて標式的な資料となっている。売場遺跡からは竪穴建物跡、和野前山遺跡では捨て場が確認されている。

馬淵川流域の酒美平遺跡からは前期前葉の早稲田6類期の竪穴建物跡、昼場遺跡では長七谷地Ⅲ群土器期の土坑墓と考えられる土坑群が検出されている。

縄文時代中期は前葉の遺跡として笹ノ沢(3)遺跡がある。円筒上層a式期の竪穴建物跡がまとまって検出され、硬玉や琥珀、黒曜石など他地域から運ばれてきた遺物も出土しており拠点的な集落と考えられている。根岸山添遺跡でも、円筒上層a式の土器が出土している。中期後葉は馬淵川右岸では丹後谷地(1)・(2)遺跡、田面木平(1)遺跡で大木10式並行期の竪穴建物跡を検出している。

中期後葉から後期に属する溝状土坑は史跡長七谷地貝塚、売場遺跡、和野前山遺跡、岩ノ沢平遺跡、櫛引遺跡で確認できる。

縄文時代後期は根岸山添遺跡で土器埋設遺構を検出し、初頭の牛ヶ沢式ないし沖附式に比定される土器が出土している。馬淵川流域においては、田面木平(1)遺跡で後期初頭から中葉の竪穴建物跡、丹後谷地(1)・(2)遺跡では後期初頭から後葉の竪穴建物跡が検出されており、集落が営まれた。丹後平(2)遺跡・酒美平遺跡でも竪穴建物跡や遺物が確認されている。

縄文時代晩期は、馬淵川流域の八幡遺跡から晩期前葉の竪穴建物跡や捨て場、土坑墓等が検出されているのみで不明な点が多い。

弥生時代は長七谷地遺跡や根岸山添遺跡から中期～後期の土器が出土しているが、集落の様相は不明である。馬淵川流域の八幡遺跡や田面木平(1)遺跡、八戸城跡では前期の竪穴建物跡が検出されている。また、八戸城跡から土偶形容器が出土している。この他、上野平(3)遺跡から前期、根城跡と昼場遺跡からは後期の土器が出土しているが集落は確認されていない。

続縄文時代・古墳時代は、笹ノ沢(3)遺跡から土師器、黒曜石が出土している。馬淵川流域の盲堤沢(3)遺跡では土坑から後北C2・D式の深鉢形土器が出土している。八戸城跡の土坑からは5世紀後半とみられる須恵器の^{はそう}甕と赤い顔料が塗られた土師器坏が出土している。

飛鳥時代は馬淵川流域の田面木平(1)遺跡、湯浅屋新田(2)遺跡、丹後谷地(1)遺跡、盲堤沢(3)遺跡、酒美平遺跡等において集落跡が確認されている。墓は鹿島沢古墳群があり、馬淵川の平野を見渡せる段丘上に築かれ、馬具の飾り金具である杏葉や金銅製金具等が出土している。また、史跡丹後平古墳群は出土遺物より7世紀後半から9世紀後半まで継続し、被葬者が中央政権と何らかの関係を有した豪族の墓と考えられている。遺物は金装獅嚙三累環頭大刀柄頭、鈔帯金具、和同開珎などが出土している。なお、平成30年に国の重要文化財に指定された。

奈良時代は、毛合清水(1)・(2)遺跡、根岸山添遺跡、見立山(2)遺跡、笹ノ沢(6)遺跡等で集落が確認されている。馬淵川流域には櫛引遺跡、八幡遺跡、田面木遺跡、法霊林遺跡等が所在する。

平安時代は和野前山遺跡、見立山(2)遺跡、売場遺跡、林ノ前遺跡、大仏遺跡、岩ノ沢平遺跡、馬淵川流域には櫛引遺跡、法霊林遺跡、八幡遺跡、田面木遺跡等で集落が確認されている。岩ノ沢平遺跡では9～10世紀の集落が確認されている。櫛引遺跡では9世紀～10世紀前葉の集落が確認されている。法霊林遺跡では9世紀初頭の大型竪穴建物跡のカマド煙出しピットから方頭大刀が刺さった状態で出土しており、全国的に極めて珍しい例である。これらの遺跡からは鍛冶関連遺構を検出し、羽口や鉄滓等の遺物が出土している。

平安時代後半には、林ノ前遺跡や熊野堂遺跡のように集落に壕や大溝を巡らし「防御性集落」や「環壕集落」と呼ばれる集落が現れる。墓としては殿見遺跡があり9世紀後半を中心とする多数の円形周

溝墓を検出している。

中世は大仏遺跡で掘立柱建物跡、竪穴建物跡、井戸跡等、馬淵川流域では上野遺跡から掘立柱建物跡、竪穴建物跡が確認されている。城館としては根城南部氏の居城である根城跡がある。本丸跡は発掘調査の成果に基づいて復原され「史跡根城の広場」として一般公開されている。櫛引城跡（櫛引遺跡）は現地踏査により曲輪や堀跡が確認されている。

近世では八幡遺跡から「南部一ノ宮」と称される櫛引八幡宮に付属する普門院に関連する建物跡が検出されている。八戸城は八戸藩の城跡であり、土塁跡や門跡等が検出されている。（齋藤）

表1 周辺の遺跡

遺跡番号	遺跡名	時代	種別
203122	毛合清水(3)遺跡	縄文(前・後)、奈良	集落跡
203520	北熊ノ沢(2)遺跡	縄文(早)、平安	集落跡
203025	鹿島沢古墳	縄文、飛鳥、奈良、平安	古墳
203026	八幡遺跡	縄文(晩)、弥生(前)、奈良、平安、中世、近世	集落跡、社寺跡
203027	日計遺跡	縄文(早)	散布地
203028	史跡長七谷地貝塚	縄文(早・後)、弥生	貝塚、集落跡
203034	田面木遺跡	縄文(早・前・中・後・晩)、弥生、奈良、平安	集落跡
203041	笹ノ沢(2)遺跡	縄文(前・中)	集落跡
203042	笹ノ沢(3)遺跡	縄文(早・前・中・後)	集落跡
203050	泉沢(3)遺跡	縄文(早・前・中・後)、奈良、平安	集落跡
203053	岩ノ沢平遺跡	奈良、平安	集落跡
203054	大仏遺跡	縄文、平安、中世	集落跡、城館跡
203055	和野前山遺跡	縄文(早・前・中・後・晩)、弥生、奈良、平安	集落跡
203057	売場遺跡	縄文(早・前・晩)、奈良、平安	集落跡
203059	昼場遺跡	縄文(前・中・後・晩)、弥生	散布地
203064	史跡根城跡	縄文(早)、弥生(前)、奈良、平安、中世、近世	集落跡、城館跡
203075	盲堤沢(3)遺跡	縄文(後)	集落跡
203077	酒美平遺跡	縄文(早・前・中・後)、飛鳥、奈良、平安	集落跡
203081	鶉窪遺跡	縄文(後)、弥生、奈良	集落跡
203091	湯浅屋新田(2)遺跡	縄文(前)、飛鳥、平安	散布地、集落跡
203094	丹後谷地(1)遺跡	縄文(前・中・後)、平安	集落跡
203095	丹後谷地(2)遺跡	縄文(後)、平安	集落跡
203096	丹後平(2)遺跡	縄文(前・後)、平安	散布地
203103	田面木平(1)遺跡	縄文(後)、平安	集落跡
203105	鳥ノ木沢遺跡	縄文(後)	散布地
203114	見立山(2)遺跡	縄文(早・前・後)、続縄文、奈良、平安	散布地、集落跡
203120	毛合清水(1)遺跡	縄文(前・後)、奈良、平安	集落跡
203121	毛合清水(2)遺跡	縄文(前)、奈良	散布地、集落跡
203129	林ノ前遺跡	縄文(早・前・中・後・晩)、平安、中世、近世	集落跡
203150	櫛引遺跡	縄文(草・早・前・中・後・晩)、奈良、平安、中世、近世	集落跡、城館跡
203180	法霊林遺跡	縄文・奈良・平安	集落跡
203181	八戸城跡	縄文(早)、弥生、古墳、近世、近代	城館跡
203195	熊野堂遺跡	縄文、弥生、奈良、平安	集落跡
203203	根岸山添遺跡	縄文(後)、弥生(中・後)、奈良	散布地、集落跡
203216	上野遺跡	縄文(早・前・後)、平安、中世、近世	集落跡
203245	休場遺跡	縄文(早・後)、平安	散布地
203253	殿見遺跡	縄文(後)、奈良、平安	散布地、古墳
203254	史跡丹後平古墳群	古墳、奈良	古墳
203264	上野平(3)遺跡	縄文(後)、平安	散布地
203267	人首沢遺跡	縄文(後)、奈良、平安	集落跡
203525	笹ノ沢(6)遺跡	縄文、奈良、平安	集落跡

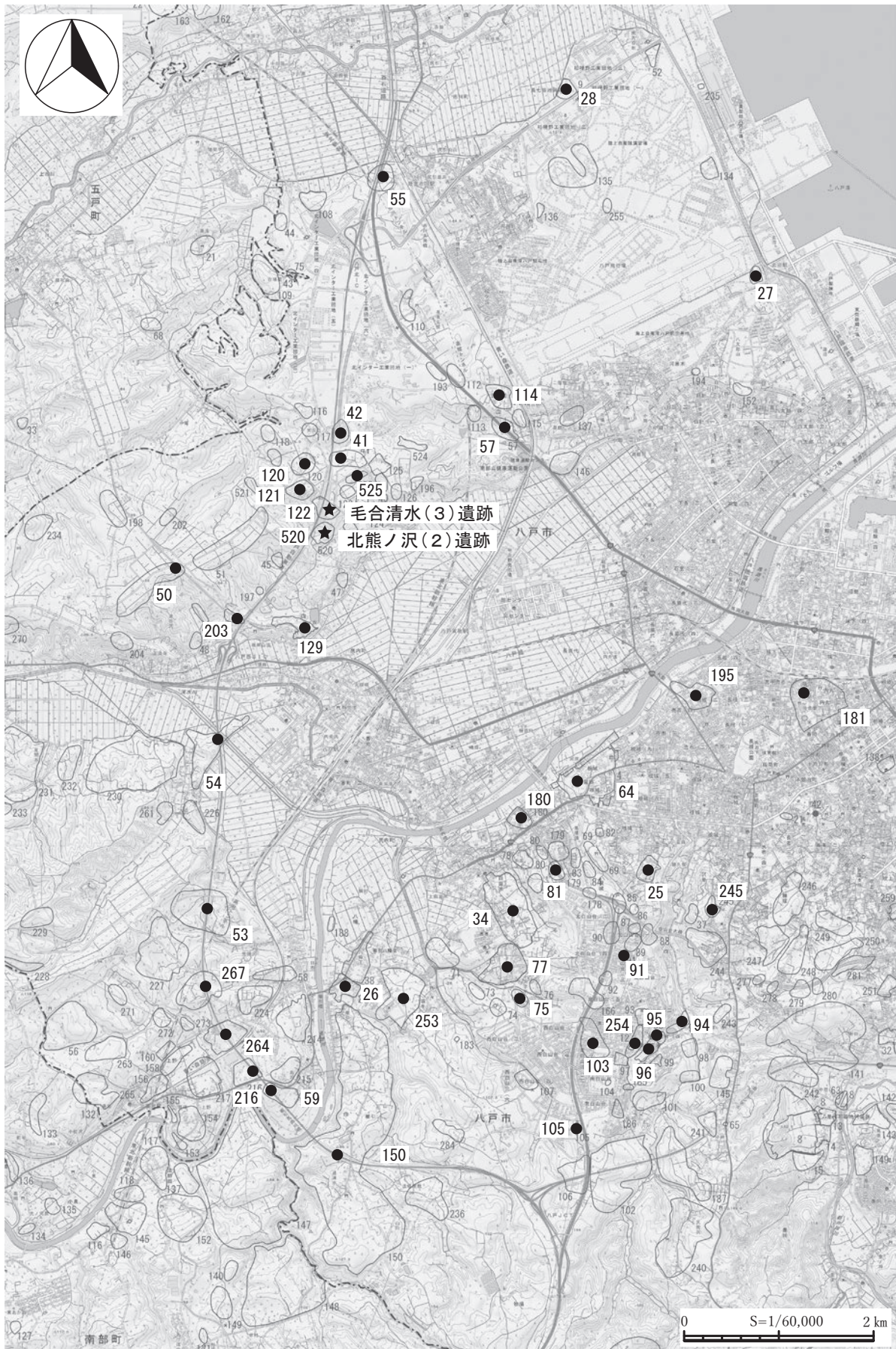


図3 周辺の遺跡

第2節 毛合清水(3)遺跡外の地形・地質

弘前大学大学院・理工学研究科 佐々木 実

1 位置および地形

毛合清水(3)遺跡および隣接する北熊ノ沢(2)遺跡は、馬淵川左岸に位置する。遺跡周辺の地形図および地形段彩陰影図を図1に示す。遺跡周辺を含む馬淵川流域には明瞭な段丘地形が認められ、毛合清水(3)遺跡は標高70~90mの段丘面上に位置し、北熊ノ沢(2)遺跡は標高30~50mの段丘面上にある。両者の段丘面は、宮内(1985)では高位面が「天狗岱面」、低位面が「高館面」、松山(1983)を引用した川村・堀田(2001)では高位面が「野場段丘」、低位面が「高館段丘及び種市段丘」とされている。

2 毛合清水(3)遺跡の地質

毛合清水(3)遺跡において地層断面の観察を行い柱状図を作成した。観察した断面においては上位からI~XVIの土層区分が行われている。写真および柱状図を図2に示す。

地層中には火山灰質土壌中に複数の軽石凝灰岩および粗粒凝灰岩層が認められる。【A】および【B】は降下軽石堆積物、【C】は火砕流堆積物と判断される。各層から試料を採取し、粒径250μm以下に粉碎しスミアスライドにより苦鉄質鉱物を観察した。いずれも直方輝石と普通輝石を含み、【A】のみ微量の普通角閃石を含む。【A】から粒径1cm以上の軽石粒子を選び、粉碎し蛍光X線分析により主要成分全岩化学組成を測定した。結果の一部を図3に示す。

3 軽石凝灰岩の対比

観察した断面において明確に火山碎屑物として認められるうちで最上位の層である【A】は、普通角閃石を含むことから十和田火山八戸降下軽石と推定される。全岩化学組成は佐々木(2019)で測定された館遺跡の軽石Bと類似した組成を示す。軽石Bは八戸降下軽石のうちで比較的SiO₂含有が乏しいものと解釈されていることから、【A】は八戸降下軽石に対比される。下位【B】は噴火エピソードMの米田1軽石(工藤, 2022)、【C】は大不動火砕流堆積物に対比される可能性が考えられるが、データが不十分のため不確実である。宮内(1985)は「天狗岱面」をこれらよりも下位のテフラに覆われているとしていることから、上記の対比とは矛盾しない。

引用文献

- 川村 正・堀田報誠(2001) 青森県史 自然編 地学, 第1章 大地の風貌(地形), 4.4 県東部の大地, 青森県史編さん自然部会, 青森県. 70-72.
- 工藤 崇(2019) 十和田地域の地質, 第7章 十和田火山噴出物(中部更新統~完新統), 地域地質報告(5万分の1地質図幅). 産総研地質調査総合センター, 114-154.
- 工藤 崇(2022) 十和田火山、噴火エピソードMの噴出物層序と噴火推移. 地質学雑誌, 128, 109-127.

松山 力 (1983) 八戸の地質. 八戸文化財シリーズ, 八戸市教育委員会, 24, 60p.

宮内崇裕 (1985) 上北平野の段丘と第四紀地殻変動. 地理学評論, Ser. A, 58, 492-515.

佐々木 実 (2019) 西張(3)遺跡及び館遺跡の地形・地質について. 青森県埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書.

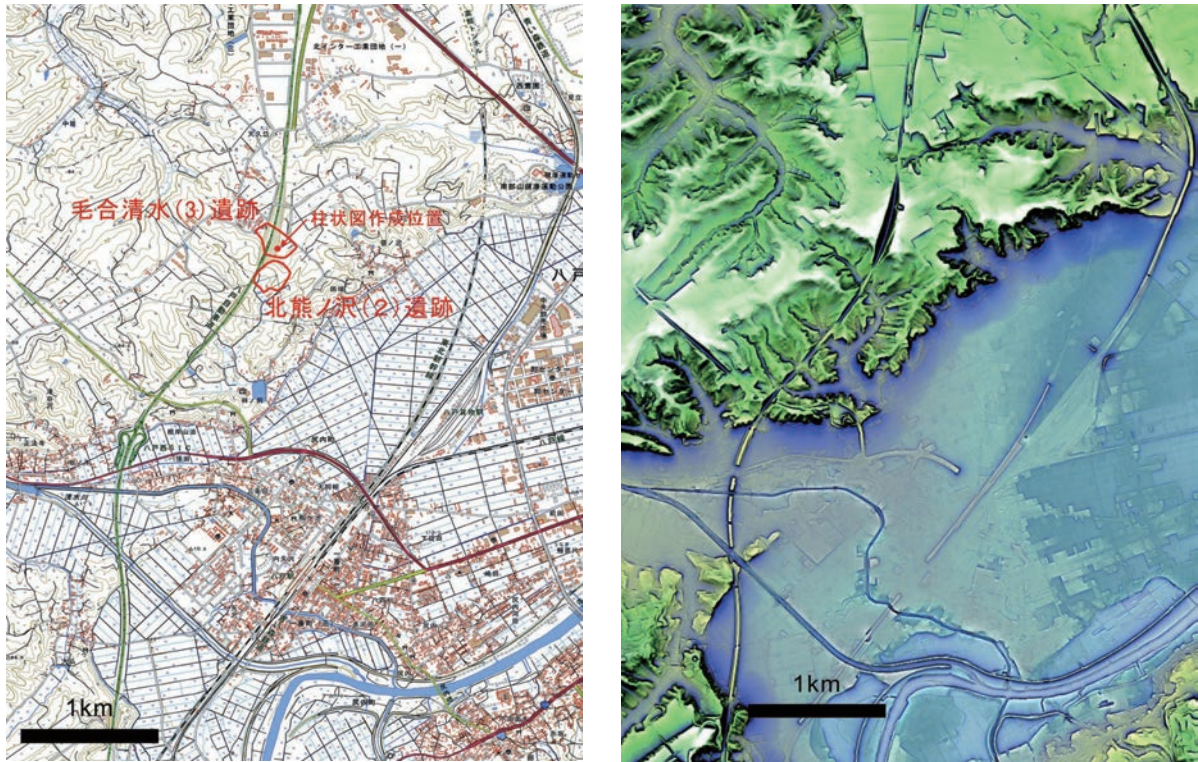


図 1

(a) 毛合清水(3)遺跡および北熊ノ沢(2)遺跡周辺の地形図.

国土地理院「地理院地図」(<https://maps.gsi.go.jp/>) のデータから, 「カシミール3D」(<http://www.kashmir3d.com/>) により作成.

(b) 毛合清水(3)遺跡および隣接する北熊ノ沢(2)遺跡周辺の地形段彩陰影図.

「カシミール3D」(<http://www.kashmir3d.com/>) の「スーパー地形セット」により作成.

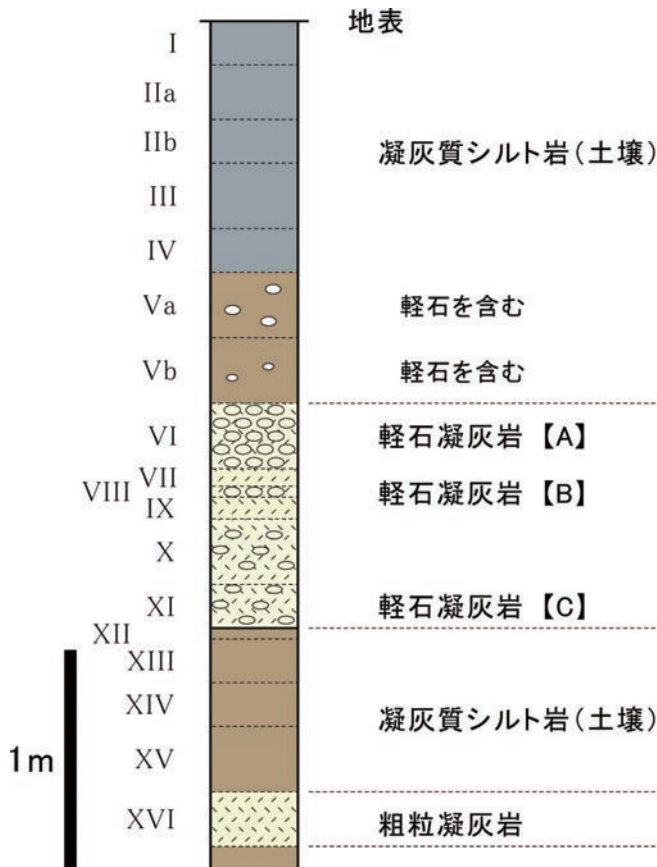


図2 (a) 地質柱状図

(b) 露頭写真 折尺は全長1m

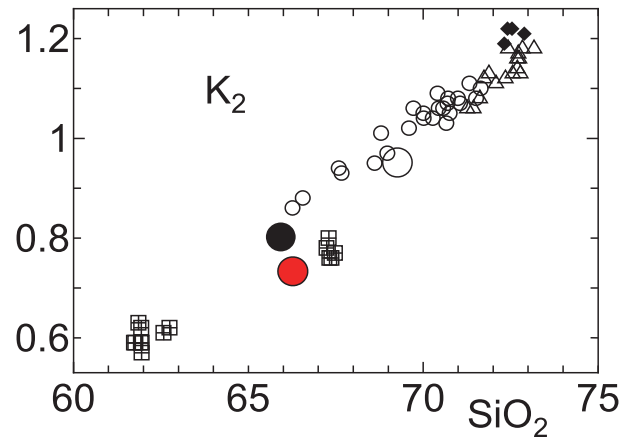
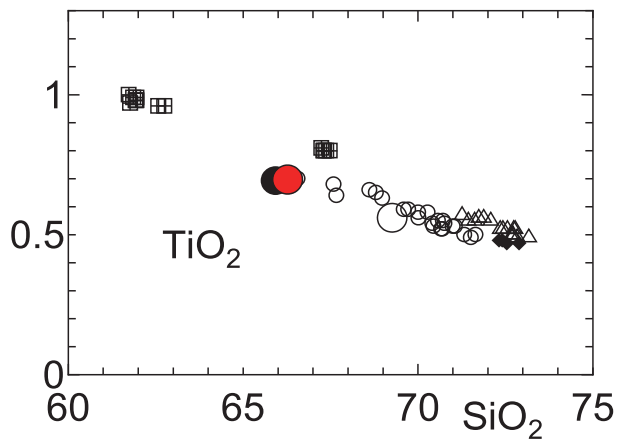
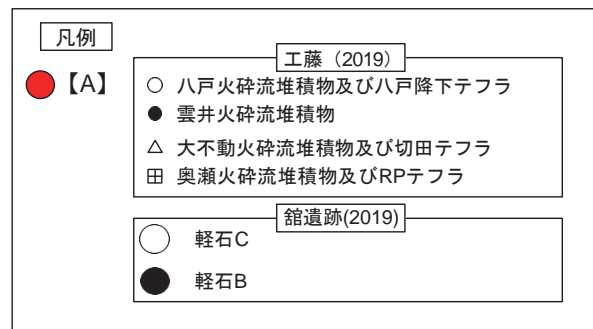


図3 【A】の軽石の全岩化学組成

工藤 (2019) による十和田火山カルデラ形成期噴出物の組成との比較、および2019年度報告書の館遺跡の軽石BおよびCの組成との比較を示す。【A】軽石および軽石Bは八戸火砕流堆積物及び八戸降下テフラのSiO₂に乏しい側の延長に位置し、大不動火砕流堆積物及び切田テフラ、雲井火砕流堆積物 (工藤, 2019) とは組成が異なる。



第3節 基本土層

基本土層は毛合清水(3)遺跡ではK-74・75グリッド、北熊ノ沢(2)遺跡はV・W-16グリッドで観察した(位置は毛合清水(3)遺跡は図5、北熊ノ沢(2)遺跡は図24に記載)。以下に土層を記述する。

第I層 10YR3/1 黒褐色土 シルト質 表土層である。

第II層 黒色土主体で場所により2層に分層可能である。

第II a層 10YR1.7/1 黒色土 シルト質 粒径3mmの十和田b軽石を含む。

第II b層 10YR2/1 黒色土 シルト質 中礫軽石を含む。

第III層 10YR3/2 黒褐色土 シルト質 中礫軽石を多量に含む。北熊ノ沢(2)遺跡では欠層。

第IV層 10YR3/3 暗褐色土 シルト質 黄褐色軽石を含む。漸移層。

第V層 褐色土～黄褐色土主体で2層に分層した。

第V a層 10YR4/6 褐色土 粒径3mmの黄褐色軽石を含む。

第V b層 10YR5/6 黄褐色土 粒径3mmの南部軽石を含む。

第VI層 10YR6/4 にぶい黄橙色軽石 八戸火山灰第VI層に相当。

第VII層 2.5Y5/4 黄褐色土 砂質 八戸火山灰第V層。

第VIII層 10YR6/4 にぶい黄橙色軽石 八戸火山灰第IV層に相当。

第IX層 2.5Y6/2 灰黄色土 砂質 八戸火山灰第III層に相当。

第X層 10YR7/2 にぶい黄橙色土 粘土質 八戸火山灰第III層ないし第I層に相当。

第X I層 10YR8/1 灰白色土 火山灰層 八戸火山灰第I層に相当。

第X II層 5YR4/1 褐灰色粘土 粘土質 八戸火山灰降下以前の風化帯に相当。

第X III層 7.5YR5/8 明褐色土 粘土質 高館火山灰層の最上部。

第X IV層 7.5YR7/6 橙色土 粘土質。

第X V層 7.5YR5/6 明褐色土 粘土質。

第X VI層 10YR5/2 灰黄褐色土 砂質。

(齋藤)

毛合清水(3)遺跡 基本土層図

北熊ノ沢(2)遺跡 基本土層図

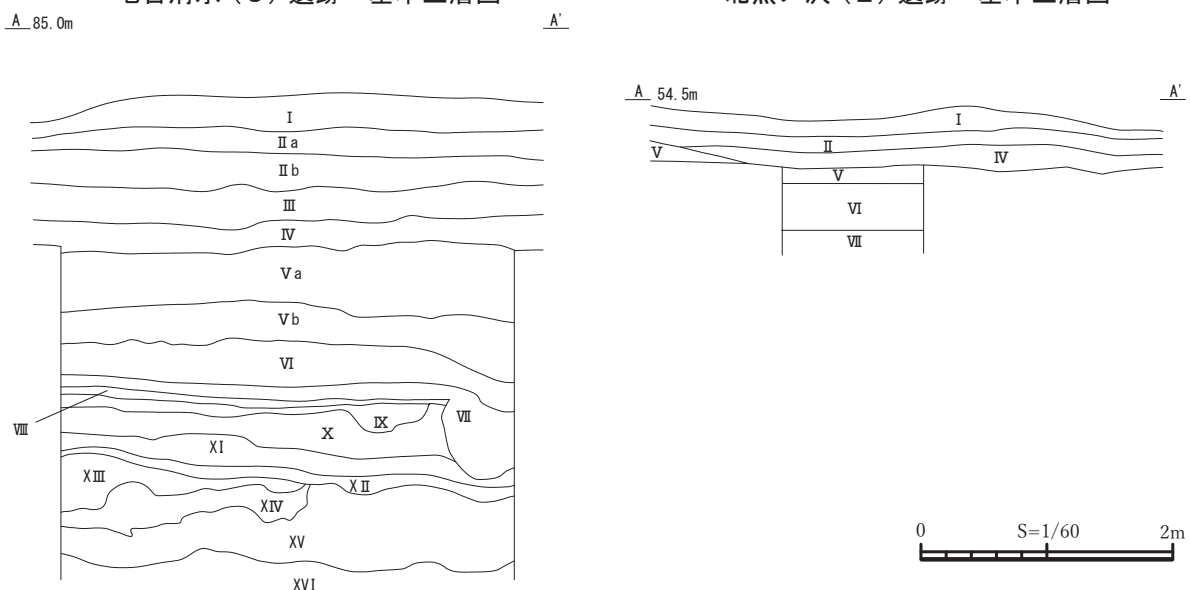


図4 基本土層図

第2編 毛合清水(3)遺跡

第1章 検出遺構と出土遺物

第1節 概要

毛合清水(3)遺跡の調査区は、工事用幅杭No. 195～199の範囲にある(図5)。当初の調査範囲は杭No. 196からの予定であったが、杭No. 196以北に第1号竪穴建物跡が延びることを確認したため、北東側に調査区を拡張したところ、さらに遺構を検出した。このため杭No. 195まで延長した。

検出した遺構は竪穴建物跡3棟、土坑18基、溝状土坑21基である。調査区の標高は76.8～84.0mである。調査区北側は標高80.8～84.0mで西側から東側に向かって緩やかに傾斜して中央部から平坦面となる。調査区の南西側及び南東側は斜面地である。飛鳥～奈良時代の竪穴建物跡、土坑、溝状土坑が平坦面及び緩斜面に構築されている。南西側の斜面にフラスコ状土坑と溝状土坑、南東側の平坦面の縁から斜面にかけては溝状土坑が分布する。遺物は、縄文時代の土器・石器、奈良時代の土器・土製品・鉄製品が計11箱出土した。

調査区の西側は八戸市教育委員会が八戸自動車道建設事業に伴い発掘調査を行っており、奈良時代の竪穴建物跡と円形周溝、縄文時代前期初頭の集石遺構や土坑、溝状土坑が確認されている(八戸市教育委員会2000)。

第2節 竪穴建物跡

竪穴建物跡は調査区北側で3棟検出した。溝状土坑と重複するものがあるが、竪穴建物跡同士で重複するものはない。以下に検出した遺構番号順に記載する。

第1号竪穴建物跡(SI01、図6～9、写真2、3、18)

[位置・確認] Y～IB-75～77グリッド、標高約81.6～81.8mの平坦面に位置し、第Ⅱ層中で確認した。北壁の中央部が後世の攪乱を受けている。

[規模・平面形] 平面形は南北長632cm、東西長617cmの隅丸方形で、床面積は30.7㎡である。深さは、最大66cmである。壁は東壁は開き気味に立ち上がり、南・西壁は垂直気味に立ち上がる。主軸方向は、N-27°-Wである。

[堆積土] 10層に分層した。黒色土や黒褐色土を主体とした自然堆積である。

[床面・壁溝] 床面は浮石が混合する掘方埋土で、厚さは10cm程度である。南西壁側の床の一部が幅約70～110cm、長さ約90cmの範囲で段差があり、出入口の可能性はある。ここから硬化面が逆L字状にPit5～7の東側とカマド東側にかけて確認できた。硬化面の範囲は南西壁からPit7の東側までは幅60～80cm、長さ470cm、カマド東側は幅20～65cm、長さ120cmである。壁溝はカマド周辺を除き、壁に沿って全周する。幅は約6～8cm、深さは約5～8cmである。

[カマド] 北壁中央で検出したが、後世の攪乱により大きく破壊されている。右袖と煙道の一部、煙出坑、火床面が遺存する。袖の長さは90cm、幅は30cmである。煙道の残存する長さは90cm、幅は38cm

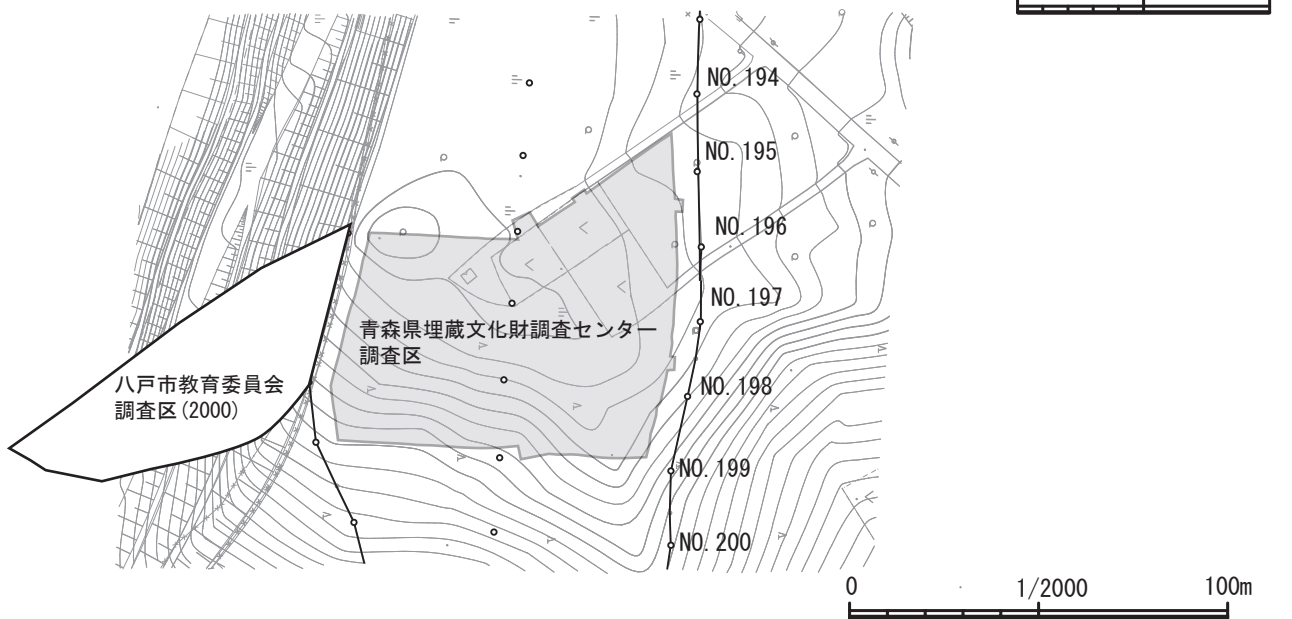
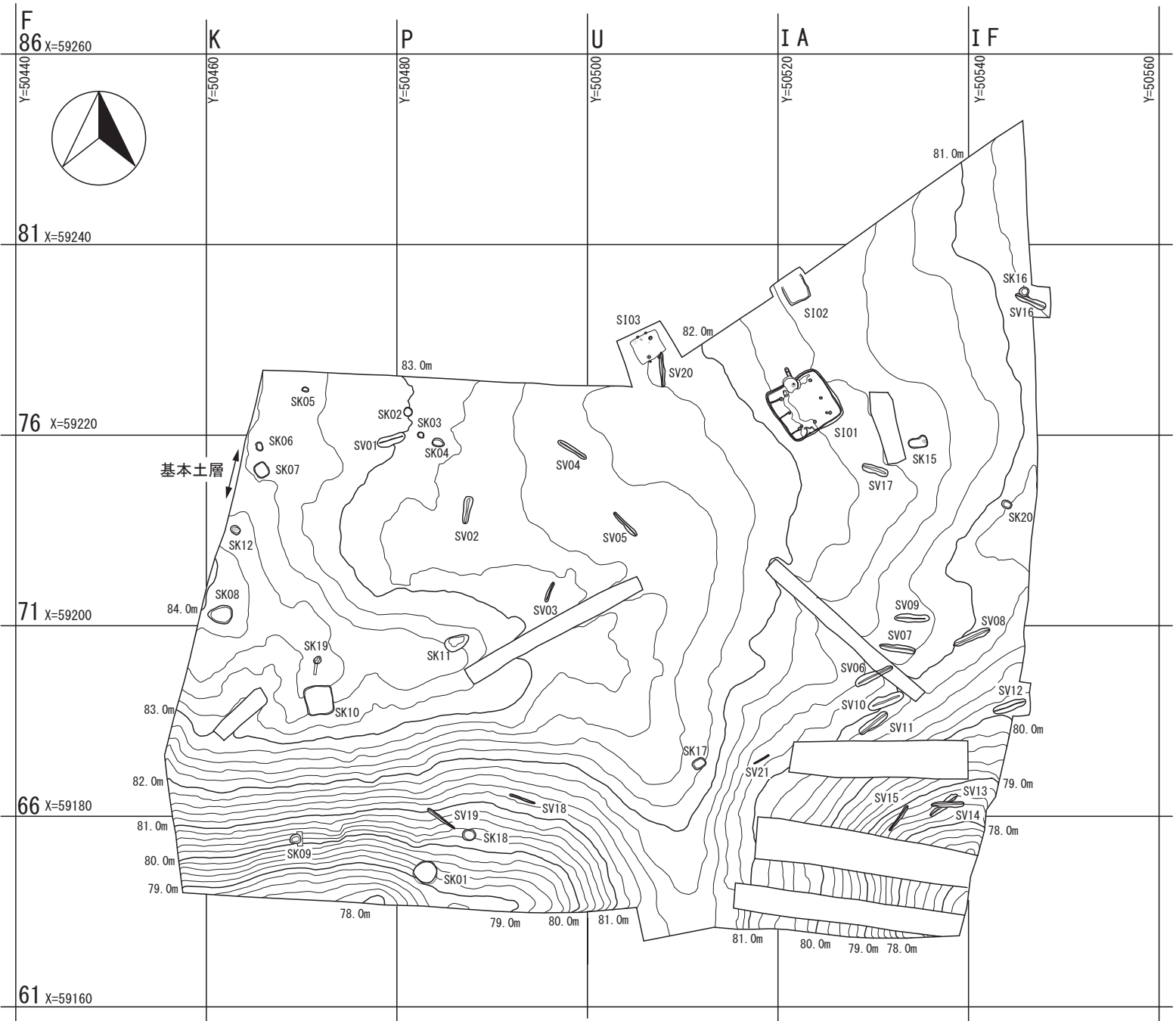


図5 遺構配置図・調査区

SI01

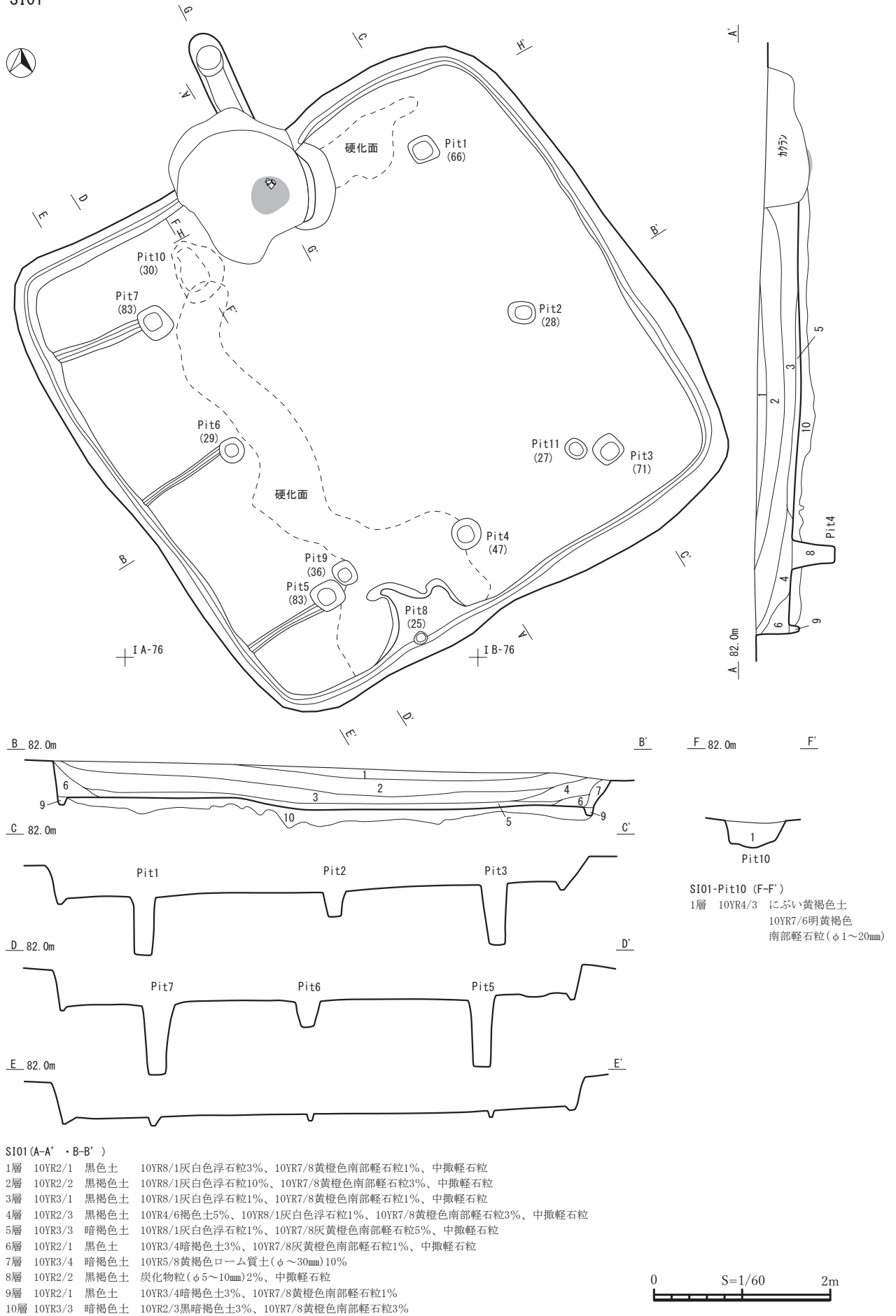


図6 第1号竪穴建物跡(1)

SI01

炭化材・遺物出土状況

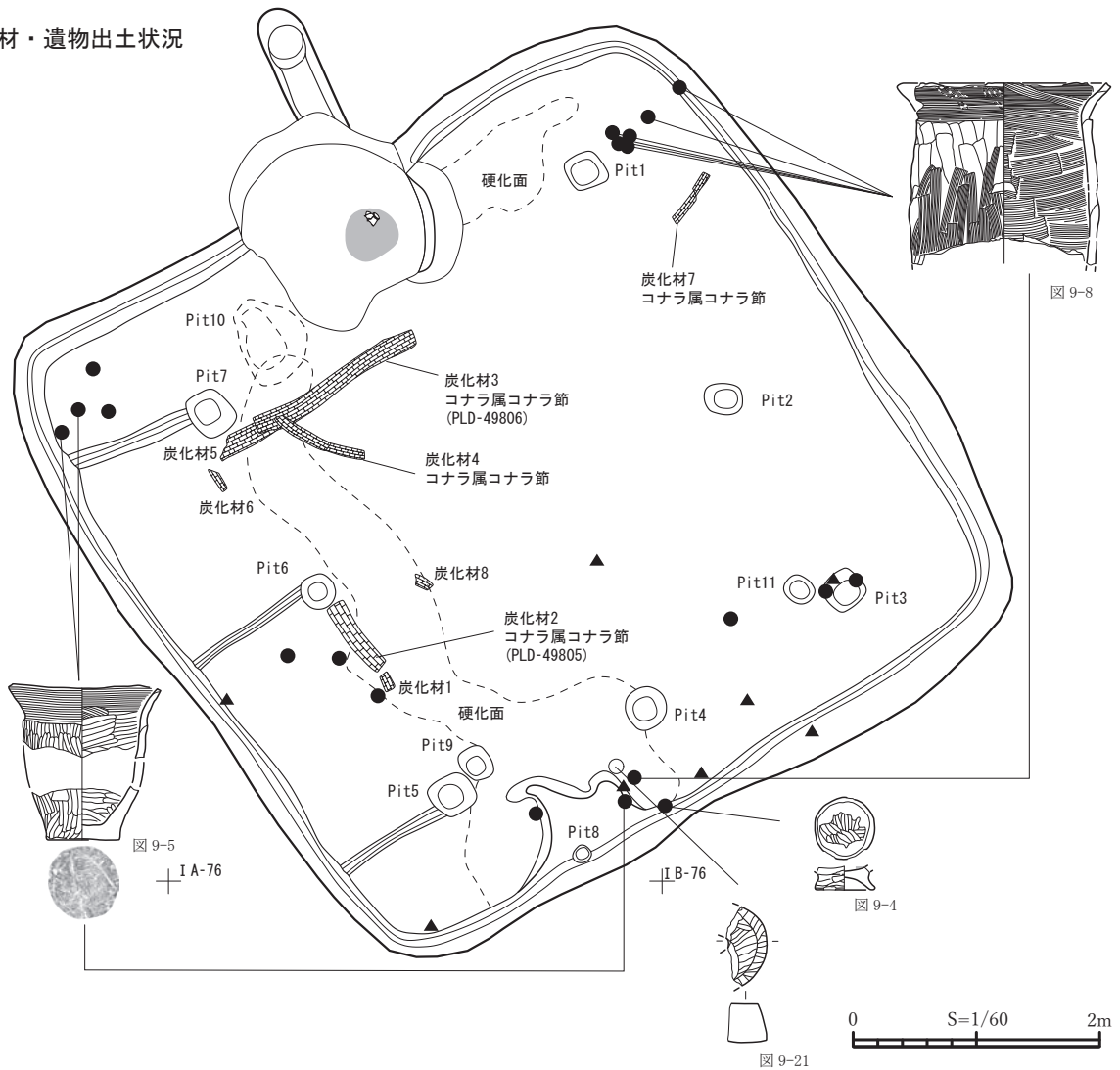


図7 第1号竪穴建物跡(2)

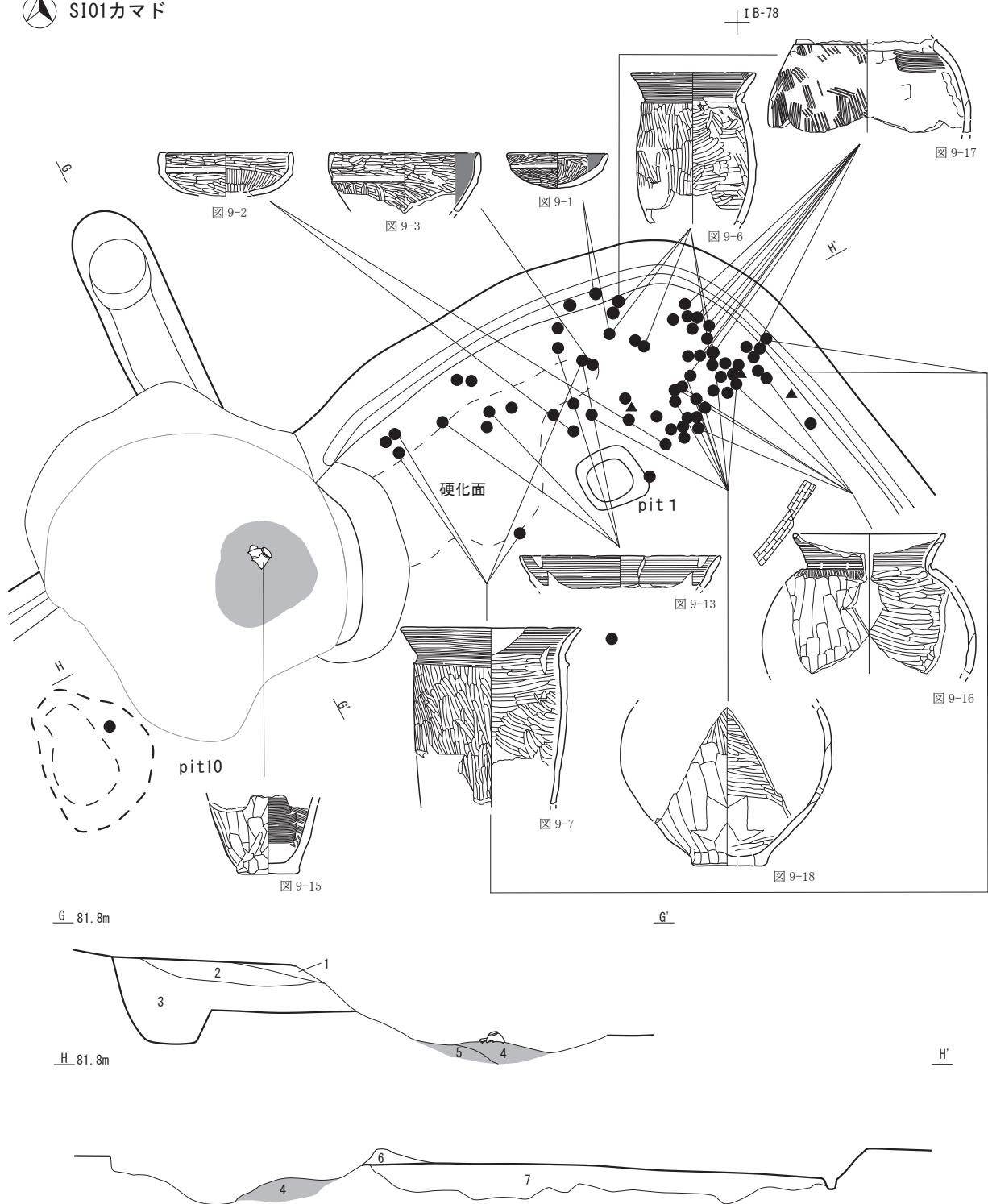
である。煙出坑は32×30cm、深さ16cmである。火床面は長軸42cm×短軸37cmの楕円形で、深さは10cmである。火床面上には甕の底部が倒立状態で出土しており、支脚として使用したと考えられる。

[柱穴] 11基検出した。Pit 1～9、11を床面、Pit10を床下で確認した。規模はPit 1 : 29×29cm、深さ66cm、Pit 2 : 31×25cm、深さ28cm、Pit 3 : 31×30cm、深さ71cm、Pit 4 : 33×32cm、深さ47cm、Pit 5 : 35×31cm、深さ83cm、Pit 6 : 28×27cm、深さ29cm、Pit 7 : 37×33cm、深さ83cm、Pit 8 : 15×14cm、深さ25cm、Pit 9 : 27×24cm、深さ36cm、Pit10 : 70×54、深さ30cm、Pit11 : 24×21cm、深さ27cmである。Pit 1・3・5・7が配置から支柱穴と考えられる。支柱穴間をほぼ等分する位置にはPit 2・4・6がある。Pit 8は出入口に関連する柱穴と考えられる。

[付属施設] 西側の壁溝からPit 5～7に直交する溝を3条検出した。長さは約90～103cm、幅は約7～14cm、深さは約6～8cmである。間仕切り溝と考えられる。

[炭化材] 建物跡の東・西側で炭化材を検出した。これらの材は厚さ約2～3cmの板状で重なっているものもある。樹種同定の結果、全てコナラ属コナラ節であった(第2章第2節)。

SI01カマド



SI01カマド(G-G'・H-H')

- 1層 10YR3/3 暗褐色土 10YR8/3浅黄橙粘土破砕塊、十和田a(φ1~5mm)1%、中礫軽石粒
- 2層 10YR6/2 灰黄褐色土 10YR7/1~7/4にぶい黄橙粘土に第II層黒褐色土と4/4褐色土の混合土 7. 5YR6/8橙色焼土破砕塊、炭化物粒、中礫軽石粒
- 3層 10YR4/1 褐灰色土 10YR7/1~7/4にぶい黄橙粘土に第II層黒褐色土と4/4褐色土の混合土、焼土粒、炭化物粒、中礫軽石
- 4層 2. 5YR5/8 明赤褐色土 火床面
- 5層 10YR6/6 明黄褐色土 火床面
- 6層 10YR5/2 灰黄褐色土 10YR7/1~7/3灰白色粘土と黒色土及び褐色土の混合土
- 7層 10YR2/2 黒褐色土 10YR2/1黒色土と10YR4/6褐色土、10YR5/6明黄褐色ローーム質土破砕塊の混合土(貼床)

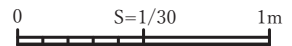


図8 第1号竪穴建物跡(3)

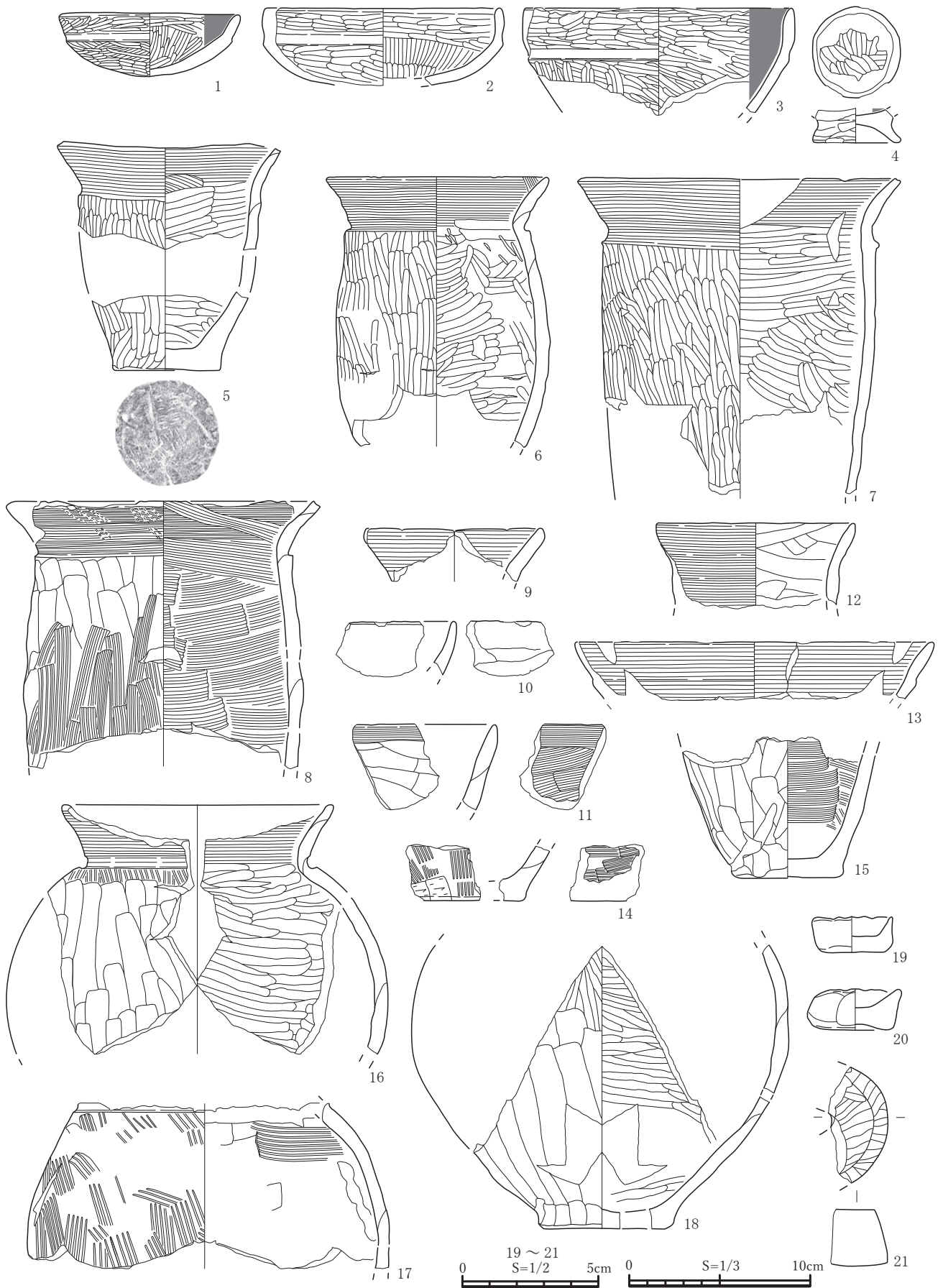


图9 第1号竖穴建物跡出土遺物

[出土遺物] 土師器1, 139g、土製品31g、縄文土器342gが出土した。底面出土遺物は建物跡北東側と北西側に集中している。図9-1～3は坏であり体部に段を有する。1は口径10cm。口縁は内傾している。丸底で外面はミガキによる調整がおこなわれ、内面はミガキ後に黒色処理されている。2は推定口径が13.1cmである。被熱により黒色処理が消失している。3は推定口径が14.9cmである。外面はミガキによる調整がおこなわれ、内面はミガキ後に黒色処理されている。4は高台坏の台部である。台部外面はミガキ調整がされている。坏部内面にミガキ調整と黒色処理がされている。5～15は甕である。5は小型甕である。頸部に段を有している。口縁部内外面はヨコナデ、胴部はミガキ調整がされている。底面には幅約3mmの工具痕が4列確認できる。6～8は頸部に段を有している。6・7は口縁部内外面はヨコナデ、胴部はミガキ調整がされている。8は口縁部内外面はヨコナデ・ナデ、胴部はナデ・ハケメ調整がなされている。第15号土坑出土の土師器片と遺構間接合した。9～13は口縁部片でヨコナデがされている。14・15は底部片である。14は内外面がハケメ、15は支脚に転用されたもので器面に被熱による損傷が見られる。外面がナデ、内面はハケメ調整がされている。16～18は球形胴甕である。16・17は頸部に段を有する。16は口縁部の内外面ともにナデ調整がされている。胴部は外面がハケメ後にナデ調整、内面はミガキがされている。17は胴部片で内外面ともにハケメ調整がされている。18は胴部から底部片で外面はミガキ後にナデ、内面はミガキがされている。19・20はミニチュア土器である。21はミガキが施されている破損した土製紡錘車である。

[小結] 出入口、間仕切り、硬化面が顕著に残る建物跡である。帰属時期は、出土遺物から7世紀後葉～8世紀前葉の年代が考えられ、炭化材の年代測定結果（第2章第1節）ともほぼ符号する。

(齋藤)

第2号堅穴建物跡 (SI02、図10 写真4)

[位置・確認] I A -79・80グリッド、標高約81.6mの平坦面に位置し、第II層中で確認した。重複する遺構はない。

[規模・平面形] 建物跡北側が調査区外に延びていたため、調査区を拡張して形状を把握しようとしたが、北側は検出できなかった。残存している部分での計測規模は長軸が254cm、短軸は220cmである。

[堆積土] 堆積状況は記録できていない。

[床面・壁溝] 床面は貼床により、ほぼ平坦に整えられている。壁溝はなし。

[カマド・柱穴・付属施設・炭化材] 確認されなかった。

[出土遺物] 出土していない。

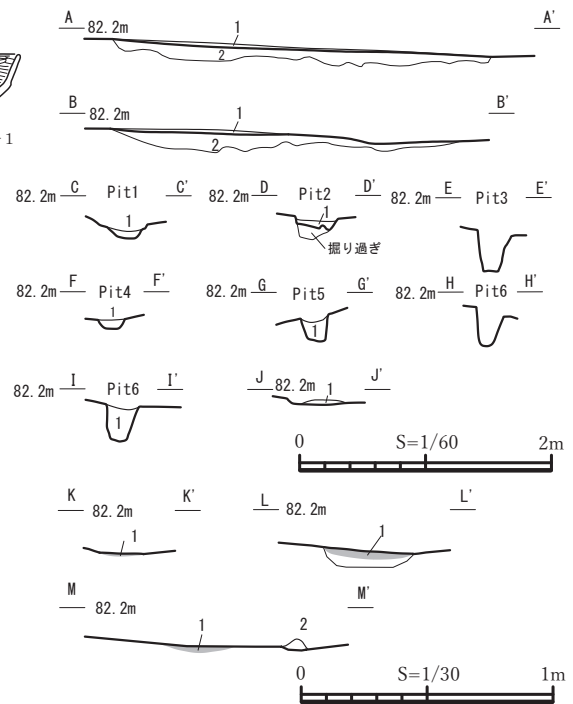
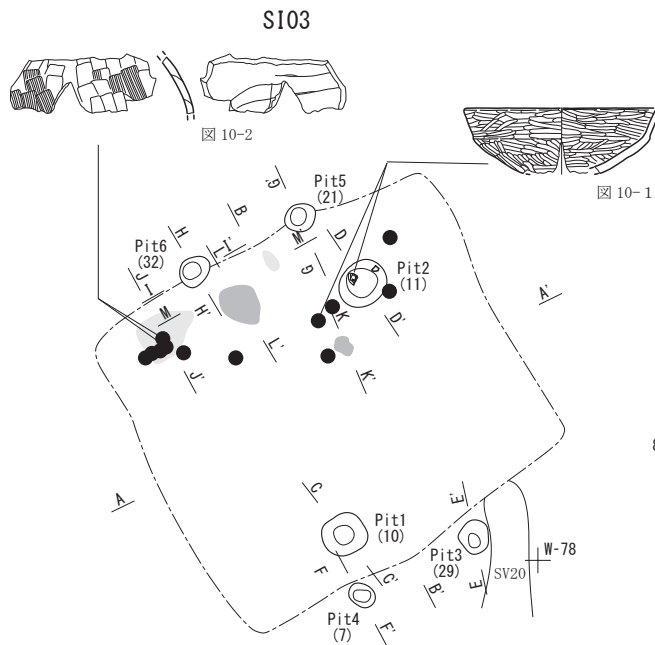
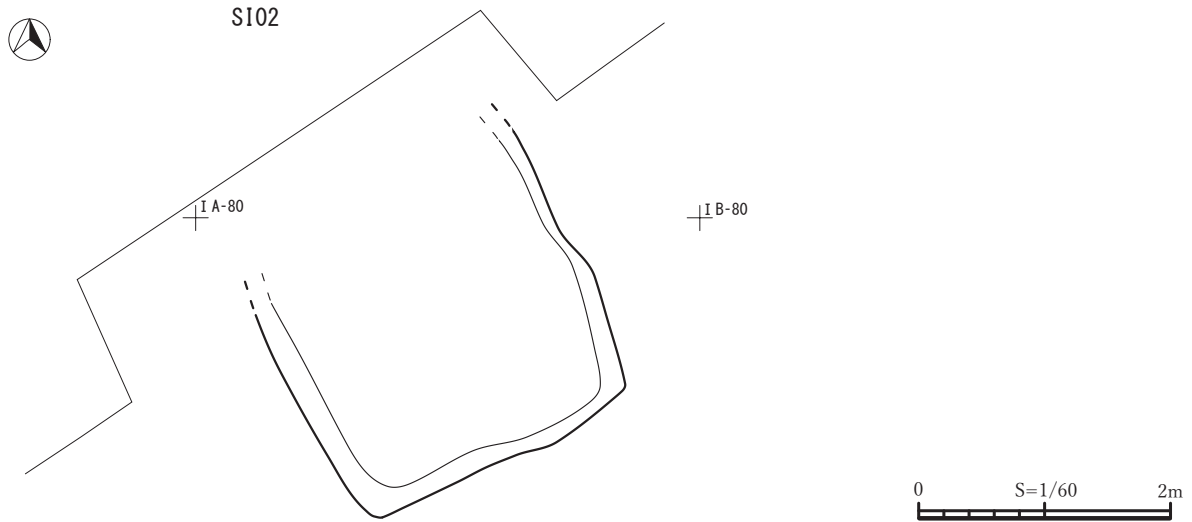
[小結] 出土遺物がなく、詳細は不明である。近接する第1・3号堅穴建物跡とその位置関係から奈良時代に帰属する可能性がある。

(齋藤)

第3号堅穴建物跡 (SI03、図10 写真4、19)

[位置・確認] 調査区北端V-77・78、W-78グリッドに位置する。標高約82.2mの第V a層面で確認した。検出面付近までに及ぶ土地改変によって堅穴部のほとんどが消失しており、床面付近の堆積土の一部と貼床しか残存していなかった。第20号溝状土坑と重複し、本遺構の方が新しい。

[規模・平面形] 残存していた貼床の平面形は隅丸長方形で、規模は長軸300×短軸277cm・貼床の面



S103(A-A'・B-B')

- 1層 10YR2/1 黒色土 10YR3/3 暗褐色土ブロック (φ~7mm)3%、炭化物粒 (φ~3mm)2%、砂礫 (φ~2mm)2%混合
- 2層 10YR3/3 暗褐色土 10YR6/6 明黄褐色浮石 (φ~2mm)1%混合。貼床

S103-Pit1 (C-C')

- 1層 10YR2/2 黒褐色土 10YR4/4 褐色土ブロックとの混合土

S103-Pit2 (D-D')

- 1層 10YR2/1 黒色土 10YR3/2 黒褐色土粒 (φ~5mm)2%、小礫 (φ~2mm)1%

S103-Pit3・4・5・6 (E-E'・F-F'・G-G'・H-H'・I-I')

- 1層 10YR3/1 黒褐色土 10YR4/4 褐色土粒 (φ~5mm)2%、10YR8/4 浅黄橙土ブロック (φ~15mm)3%混合

S103 粘土 (J-J')

- 1層 10YR4/2 灰黄褐色粘土 焼土粒 (φ~2mm)1%、炭化物粒 (φ~2mm)1%混合

S103 焼土 (K-K')

- 1層 5YR2/3 極暗赤褐色土 5YR8/2 灰白色浮石 (φ~5mm)1%混合

S103 カマド (L-L'・M-M')

- 1層 5YR5/6 明赤褐色土 5YR8/3 淡橙色浮石 (φ~2mm)1%混合
- 2層 10YR4/44 褐色粘土 10YR5/6 淡黄褐色土との混合土

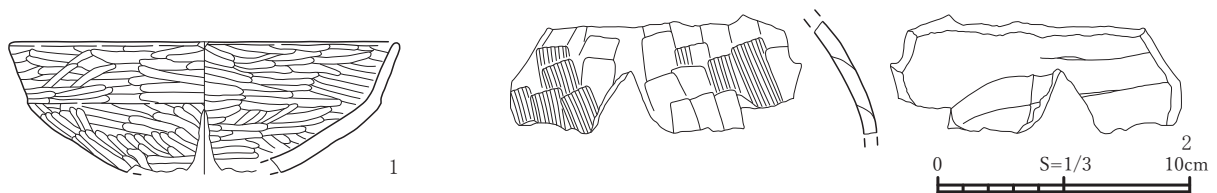


図10 第2号竪穴建物跡・第3号竪穴建物跡、第3号竪穴建物跡出土遺物

積は8.0m²である。確認できた範囲での堆積土の厚さは3cm、掘方の深さは15cmである。建物跡の断面形状は不明である。貼床の北西辺を基準とした場合、主軸方位はN-28°-Wである。

[堆積土] 掘方埋土を含め2層に分けられる。

[床面・壁溝] 床面は第V a層のローム塊が多量に混合する掘方埋土で、傾斜が認められるものの、本来の床面が欠失している可能性もある。壁溝は検出されなかった。

[カマド] 北西壁のほぼ中央で火床面を検出したことから、ここにカマドが構築されていたと考えられる。火床面の規模は39×30cm、厚さ3cmである。カマド煙道は消失しており、構造は不明である。火床面の右側には19×10cm、厚さ4cmの範囲で粘土が確認された。カマド袖(右袖)の残存と推定される。また、火床面の左、貼床の北西隅に51×37cm・厚さ4cmの範囲で粘土が確認された。こちらはカマド廃絶の際に廃棄されたカマド構築土と思われる。

[柱穴] 柱穴は6基確認された。それぞれの規模は、Pit 1 : 37×35cm、深さ10cm、Pit 2 : 40×34cm、深さ11cm、Pit 3 : 27×24cm、深さ29cm、Pit 4 : 22×17cm、深さ7cm、Pit 5 : 26×23cm、深さ21cm、Pit 6 : 27×22cm、深さ32cmである。小規模なPit 3～6は、Pit 3・4、Pit 5・6が2基1対で貼床範囲の短軸側端部に配置されている。

[付属施設] 床面中央部に18×14cmの不整形な被熱痕を検出した。焼成厚は1cmである。地床炉の可能性もあるが詳細は不明である。

[炭化材] 出土しなかった。

[出土遺物] 堆積土第1層と掘方埋土から土師器片337gが出土した。建物跡の北半、特にPit 2内やその周辺、北西隅の粘土周辺からである。図10-1は坏である。Pit 2と床面出土のものが接合した。底部を欠失しているが、丸底と推定される。口縁部は外反し、胴部との境に段が認められる。器面調整は、内外面ともに横位のミガキが施されている。器面および断面が赤化しており、被熱による損傷を受けていると考えられる。内面に黒色処理は認められないが、ミガキ調整が施されていることから、本来は黒色処理されていたものと思われる。被熱によって吸着していた炭素が消散したものと推定される。2は球胴甕の肩部である。外面調整はハケメが施されている。内面に輪積痕が認められる。器面は脆く、摩耗しており、被熱による損傷を受けていると思われる。

[小結] 小規模な建物跡であるが、ほとんどが消失しており、諸情報に欠ける。出土遺物から7世紀後葉～8世紀前葉の年代が考えられる。(平山)

第3節 土坑

土坑は18基を検出した。遺物が出土した土坑は4基である。構築時期は出土遺物や検出層位に基づき、奈良時代2基、縄文時代2基、構築時期不明14基である。奈良時代の土坑をはじめ、多くの土坑が標高82.2～84.0mに分布して、縄文時代のフラスコ状土坑と時期不明の土坑2基が標高79.0～82.0mに分布する。以下、遺構番号順に記載していく。第13・14号土坑は精査の結果、欠番にした。

第1号土坑 (SK01、図11・14、写真5・19)

[位置・確認] P-64グリッド、標高約79.0～79.7mの斜面に位置し、第V層中で確認した。重複する遺構はない。

[形状・規模] 平面形状は長軸245cm、短軸232cmの不整円形で、深さは最大163cmを測る。断面形状はオーバーハングし、フラスコ形を呈する。

[堆積土] 16層に分層した。暗褐色土、にぶい黄褐色土を主体とした自然堆積である。

[出土遺物] 堆積土中から縄文土器が101g出土した。図14-1～3は確認面及び堆積土から出土した土器である。1、2は隆帯とLRの縦回転が施される。3は沈線が施された後、RLが充填される。

[小結] 出土遺物から縄文時代中期の土坑と考えられる。

第2号土坑 (SK02、図11、写真5)

[位置・確認] P-76グリッド、標高約83.0mの平坦面に位置し、第Ⅱ層中で確認した。重複する遺構はない。

[形状・規模] 平面形状は長軸96cm、短軸90cmの円形で、深さは最大16cmを測る。断面形状は逆台形を呈する。

[堆積土] 単層で黒色土を主体とした自然堆積である。

[出土遺物] なし。

[小結] 出土遺物がなく、構築時期などの詳細は不明である。

第3号土坑 (SK03、図11 写真5)

[位置・確認] P-75グリッド、標高約82.9mの平坦面に位置し、第Ⅲ層中で確認した。重複する遺構はない。

[形状・規模] 平面形状は長軸73cm、短軸61cmの楕円形で、深さは最大12cmを測る。断面形状は逆台形を呈する。

[堆積土] 単層で黒色土を主体とした自然堆積である。

[出土遺物] なし。

[小結] 出土遺物がなく、構築時期などの詳細は不明である。

第4号土坑 (SK04、図11、写真5)

[位置・確認] Q-75グリッド、標高約82.8mの平坦面に位置し、第Ⅲ層中で確認した。重複する遺構はない。

[形状・規模] 平面形状は長軸127cm、短軸88cmの長楕円形で、深さは最大16cmを測る。断面形状は皿状である。

[堆積土] 2層に分層した。黒色土、黒褐色土を主体とした自然堆積である。

[出土遺物] なし。

[小結] 出土遺物がなく、構築時期などの詳細は不明である。

第5号土坑 (SK05、図11、写真6)

[位置・確認] M-77グリッド、標高約83.2～83.3mの平坦面に位置し、第Ⅲ層で確認した。重複する遺構はない。

[形状・規模] 平面形状は長軸68cm、短軸49cmの長楕円形で、深さは最大17cmを測る。断面形状は逆台形を呈する。

[堆積土] 2層に分層した。黒褐色土を主体とした自然堆積である。

[出土遺物] なし。

[小結] 出土遺物がなく、構築時期などの詳細は不明である。

第6号土坑 (SK06、図11、写真6)

[位置・確認] L-75グリッド、標高約83.3mの平坦面に位置し、第Ⅲ層中で確認した。重複する遺構はない。

[形状・規模] 平面形状は長軸96cm、短軸67cmの楕円形で、深さは最大35cmを測る。断面形状は箱形を呈する。

[堆積土] 2層に分層した。黒褐色土を主体とした自然堆積である。

[出土遺物] なし。

[小結] 出土遺物がなく、構築時期などの詳細は不明である。

第7号土坑 (SK07 図11、写真6)

[位置・確認] L-74・75グリッド、標高約83.3～83.4mの平坦面に位置し、第Ⅲ層中で確認した。重複する遺構はない。

[形状・規模] 平面形状は長軸157cm、短軸140cmの隅丸方形で、深さは最大43cmである。断面形状は逆台形状を呈する。底面は掘方埋土でほぼ平坦につくられている。

[堆積土] 2層に分層した。黒褐色土を主体とした自然堆積である。

[出土遺物] なし。

[小結] 出土遺物がなく、構築時期などの詳細は不明である。

第8号土坑 (SK08、図12、写真6)

[位置・確認] K-71グリッド、標高約83.6～83.8mの平坦面に位置し、第Ⅲ層で確認した。重複する遺構はない。

[形状・規模] 平面形状は長軸255cm、短軸191cmの不整楕円形で、深さは最大で32cmを測る。断面形状は皿形を呈する。

[堆積土] 4層に分層した。黒褐色土、褐色土を主体とした自然堆積である。

[出土遺物] なし。

[小結] 出土遺物がなく、構築時期などの詳細は不明である。

第9号土坑 (SK09、図12、写真7)

[位置・確認] M-65グリッド、標高約79.9～80.4mの斜面に位置し、第Ⅴ層中で確認した。重複する遺構はない。

[形状・規模] 平面形状は長軸113cm、短軸96cmの不整楕円形で深さは最大98cmを測る。断面形状は逆台形を呈する。

[堆積土] 4層に分層した。黄橙色土を主体とした自然堆積である。

[出土遺物] なし。

[小結] 出土遺物がなく、構築時期などの詳細は不明である。

第10号土坑 (SK10、図12、写真7・19)

[位置・確認] M・N-68・69グリッド、標高約83.2～83.6mの斜面に位置し、第V層中で確認した。重複する遺構はない。

[形状・規模] 平面形状は長軸301cm、短軸284cmの隅丸方形で、深さは最大44cmを測る。断面形状は逆台形を呈する。

[堆積土] 3層に分層した。暗褐色土を主体とした自然堆積である。

[出土遺物] 鎌が出土している (図14-4)。また、掲載はしていないが土師器片が14g出土している。

[小結] 出土遺物から奈良時代の土坑と考えられる。

第11号土坑 (SK11、図12、写真7)

[位置・確認] Q-70グリッド、標高約83.2～83.4mの斜面に位置し、第V層中で確認した。風倒木と重複して、本遺構が新しい。

[形状・規模] 平面形状は長軸264cm、短軸151cmの長楕円形で、深さは最大92cmを測る。断面形状は逆台形を呈する。

[堆積土] 5層に分層した。黒褐色土、黒色土を主体とした自然堆積である。

[出土遺物] なし。

[小結] 出土遺物がなく、構築時期などの詳細は不明である。

第12号土坑 (SK12、図13、14、写真7・8・19)

[位置・確認] K-73グリッド、標高約83.4mの平坦面に位置し、第IV層中で確認した。重複する遺構はない。

[形状・規模] 平面形は長軸105cm、短軸87cmの楕円形で、深さは最大31cmを測る。断面形は逆台形を呈する。

[堆積土] 4層に分層した。1～3層は黒褐色土を主体とし、自然堆積である。北西側の底面が71cm×45cmの範囲で被熱しており、深さは1.6cmである。

[出土遺物] 堆積土中から縄文土器が245g出土している。14-5は小型の深鉢形土器で上半には結束第1種が横位に回転施文されている。下半はランダムな方向に回転施文されている。

[小結] 出土遺物から縄文時代前期前葉の土坑と考えられる。

第15号土坑 (SK15、図13、14、写真8・19)

[位置・確認] I D-75グリッド、標高約81.4～81.5mの平坦面に位置し、第III層中で確認した。重複する遺構はない。

[形状・規模] 平面形状は長軸198cm、短軸104cmの隅丸長方形で、深さは最大30cmを測る。断面形状は逆台形を呈する。

[堆積土] 単層で黒色土を主体とした自然堆積である。

[炭化材] 堆積土から炭化材を検出した。樹種同定の結果、全てコナラ属コナラ節であった（第2章第2節）。

[出土遺物] 堆積土中から土師器403gが出土した。14-6～8は甕の底部である。6は外面ヘラケズリ、内面ナゲ調整、7は外面ハケメ調整、8は内外面にミガキ調整が施されている。また、第1号竪穴建物跡出土遺物と接合した土師器片もある（図9-8）。

[小結] 出土遺物から7世紀後葉～8世紀前葉の構築時期が考えられ、炭化材の年代測定結果（第2章第1節）ともほぼ符号する。

第16号土坑（SK16、図13、写真8）

[位置・確認] I G-79グリッド、標高約80.7～80.8mの平坦面に位置し、第Ⅲ層中で確認した。第16号溝状土坑と重複し、本遺構が新しい。

[形状・規模] 平面形状は長軸101cm、短軸96cmの円形である。深さは最大37cmである。断面形状は逆台形である。

[堆積土] 2層に分層した。黒色土、黒褐色土を主体とした自然堆積である。

[出土遺物] なし。

[小結] 出土遺物がなく、構築時期などの詳細は不明である。

第17号土坑（SK17、図13、写真9）

[位置・確認] W・X-67グリッド、標高約82.2～82.3mの平坦面に位置し、第Ⅴ層中で確認した。重複する遺構はない。

[形状・規模] 平面形状は長軸138cm、短軸103cmの隅丸長方形で、深さは最大32cmである。断面形状は皿形である。

[堆積土] 2層に分層した。黒色土、暗褐色土を主体とした自然堆積である。

[出土遺物] なし。

[小結] 出土遺物がなく、構築時期などの詳細は不明である。

第18号土坑（SK18、図13、写真9）

[位置・確認] Q-65グリッド、標高約80.0～80.3mの斜面に位置し、第Ⅴb層中で確認した。重複する遺構はない。

[形状・規模] 平面形状は長軸138cm、短軸116cmの楕円形で、深さは最大55cmを測る。断面形状は箱形を呈する。

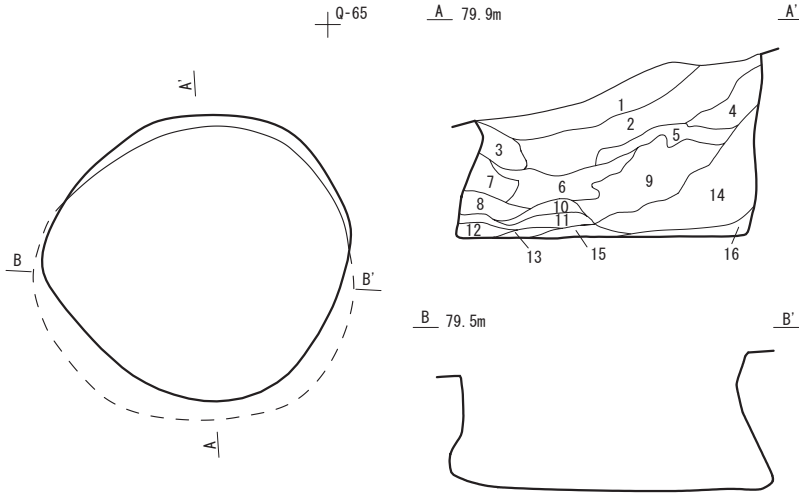
[堆積土] 5層に分層した。黒色土、黒褐色土、暗褐色土を主体として自然堆積である。

[出土遺物] なし。

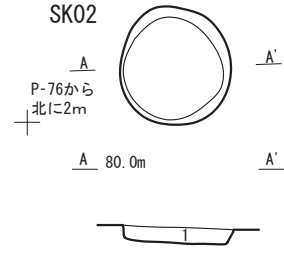
[小結] 出土遺物がなく、構築時期などの詳細は不明である。



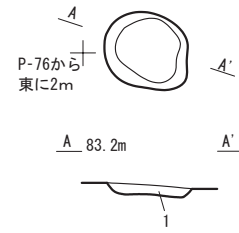
SK01



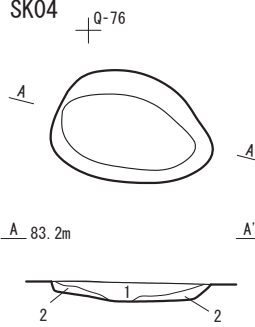
SK02



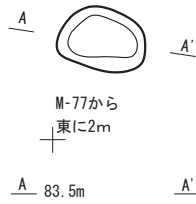
SK03



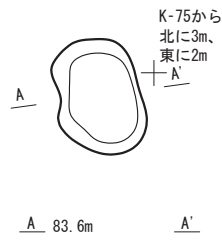
SK04



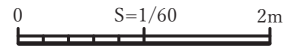
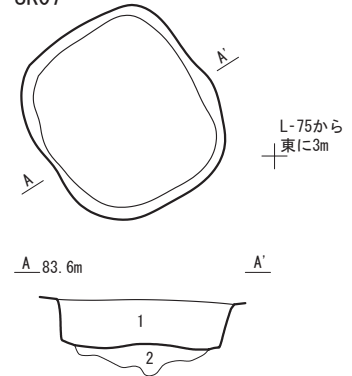
SK05



SK06



SK07



SK01 (A-A'・B-B')

- | | | |
|-----|------------------|---|
| 1層 | 10YR4/3 にぶい黄褐色土 | 中掬軽石粒(φ0.5~1mm)30%、南部軽石粒(φ2~10mm)1% |
| 2層 | 10YR3/3 暗褐色土 | 10Y2/1黒色土塊混合、中掬軽石粒(φ0.5~1mm)20%南部軽石粒(φ2~10mm)2% |
| 3層 | 10YR4/6 褐色土 | 中掬軽石粒(φ0.5~1mm)10%、南部軽石粒(φ3~5mm)5% |
| 4層 | 10YR5/8 黄褐色ローム質土 | 第V層の塊、堅く緻密 |
| 5層 | 10YR3/2 黒褐色土 | 中掬軽石粒(φ0.5~1mm)20%、第V層破砕塊(φ50mm) |
| 6層 | 10YR3/4 暗褐色土 | 中掬軽石粒(φ0.5~1mm)20%、南部軽石粒(φ2~10mm)30% |
| 7層 | 10YR5/4 にぶい黄褐色土 | 第V層と第VI層の混合土、10YR2/1黒色土極少量 |
| 8層 | 10YR6/2 灰黄褐色土 | 10YR3/2黒褐色土5% |
| 9層 | 10YR5/8 黄褐色土 | 第V層の破砕土塊 |
| 10層 | 10YR3/3 暗褐色土 | 第V層の破砕土塊10%、中掬軽石粒20% |
| 11層 | 10YR4/3 にぶい黄褐色土 | 第V層の破砕土塊(φ30~50mm)、中掬軽石粒20% |
| 12層 | 10YR6/2 灰黄褐色粘質土 | |
| 13層 | 10YR5/2 灰黄褐色土 | 破砕土塊、10YR2/1黒色土粒混合。 |
| 14層 | 7.5YR5/8 明褐色粘質土 | 10YR5/2灰黄褐色粘土、5YR5/1褐灰色粘土(第VII層)塊混合 |
| 15層 | 10YR4/6 褐色土 | 10YR2/1黒色土塊(φ3~10mm)と第VI層の混合 |
| 16層 | 7.5YR5/6 明褐色粘質土 | 第VIII層の崩落土 |

SK02 (A-A')

- 1層 10YR2/1 黒色土 10YR5/1褐色土3%、炭化物粒(φ~5mm)1%

SK03 (A-A')

- 1層 10YR2/1 黒色土 10YR3/3暗褐色土3%、炭化物粒(φ~5mm)1%

SK04 (A-A')

- 1層 10YR2/1 黒色土 中掬軽石粒3%、炭化物粒(φ~10mm)1%
2層 10YR3/2 黒褐色土 中掬軽石粒1%

SK05 (A-A')

- 1層 10YR2/1 黒色土 中掬軽石粒3%、炭化物粒(φ~10mm)1%
2層 10YR3/2 黒褐色土 中掬軽石粒1%

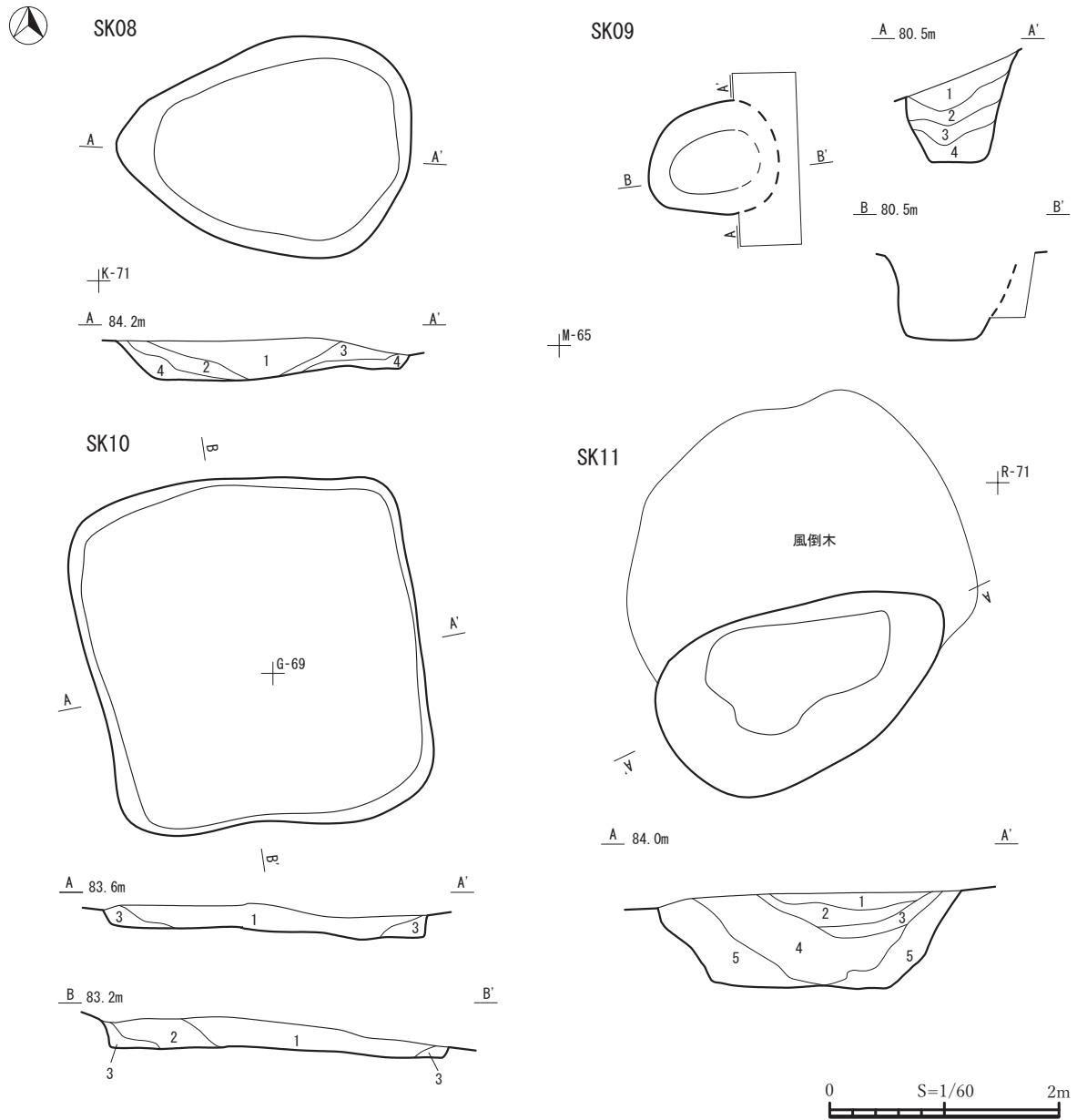
SK06 (A-A')

- 1層 10YR2/2 黒褐色土 中掬軽石粒3%、炭化物粒(φ~10mm)3%
2層 10YR2/3 黒褐色土 10YR5/6黄褐色ローム質土下位(φ7~15mm)2%、
中掬軽石、南部軽石(φ5~10mm)2%

SK07 (A-A')

- 1層 10YR2/2 黒褐色土 南部軽石粒(φ1~5mm)2%
2層 10YR3/3 暗褐色土 10YR2/1黒色土と10YR4/4褐色土(IV層)の混合土

図11 土坑(1)



SK08 (A-A')

- 1層 10YR3/2 黒褐色土 10YR2/1黒色土と10YR4/6褐色ローム質土(IV層)の混合土、中礫軽石多量混入、検出面状に炭化物粒
- 2層 10YR4/4 褐色土 10YR2/1黒色土と10YR4/6褐色ローム質土(IV層)の混合土、褐色土割合大、中礫軽石混入
- 3層 10YR4/6 褐色土 10YR2/1黒色土塊(φ10~20mm)3%、中礫軽石20%混合
- 4層 10YR4/6 褐色土 中礫軽石少量、南部軽石粒(φ1~10mm)2%混合

SK09 (A-A')

- 1層 10YR3/1 黒褐色土 中礫軽石粒20%、南部軽石粒(φ10~30mm)5%斑に混合
- 2層 10YR6/3 褐色土 にぶい黄褐色ローム質土 10YR3/1黒褐色土と(φ5~10mm)炭粒2%、φ10mm焼土粒1%混合
- 3層 10YR6/6 明黄褐色土 10YR3/1黒褐色土(φ5~10mm)炭粒2%、φ10mm焼土粒1%
- 4層 10YR7/2 にぶい黄褐色粘質土 10YR7/6明黄褐色粘質土混合

SK10 (A-A'・B-B')

- 1層 10YR2/2 黒褐色土 10YR4/4暗褐色土5%、10YR8/1灰白色浮石粒(十和田a火山灰φ1~5mm)3%、中礫軽石粒5%混合
- 2層 10YR3/3 暗褐色土 10YR4/2灰黄褐色ローム質土塊(φ~100mm)2%、中礫軽石粒10%、南部軽石(φ~5mm)3%混合
- 3層 10YR5/6 黄褐色土 10YR3/2褐色土2%、中礫軽石粒、南部軽石粒(φ~5mm)10%混合

SK11 (A-A')

- 1層 10YR2/2 黒褐色土 10YR4/4暗褐色土5%、10YR8/1灰白色浮石粒5%
- 2層 10YR2/1 黒色土 南部軽石5%
- 3層 7.5YR6/4 にぶい橙色土 10YR2/2黒褐色土5%
- 4層 10YR2/2 黒褐色土 10YR8/6黄褐色土5%
- 5層 10YR3/1 黒褐色土 10YR4/4褐色土10%

図12 土坑(2)

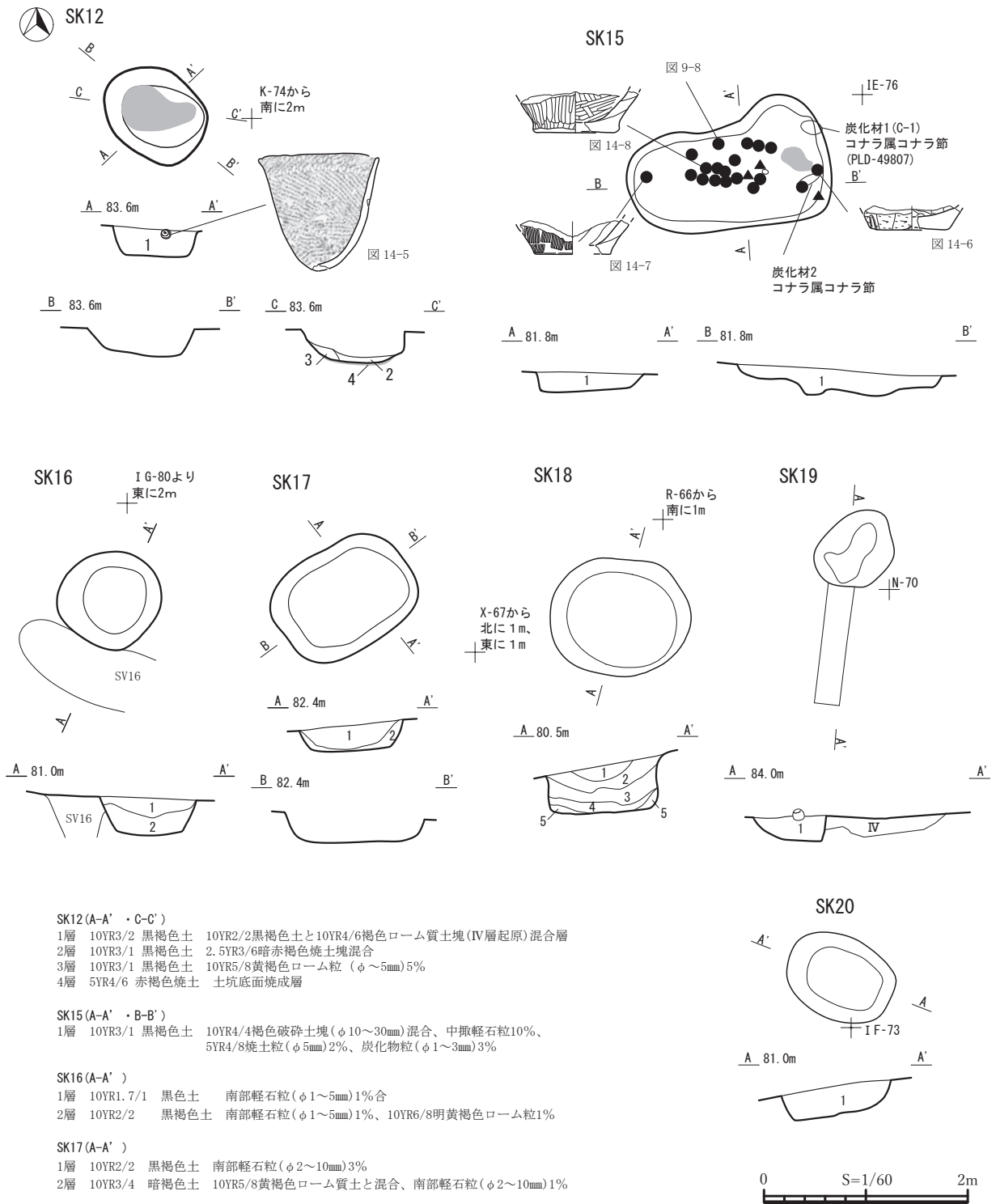


図13 土坑(3)

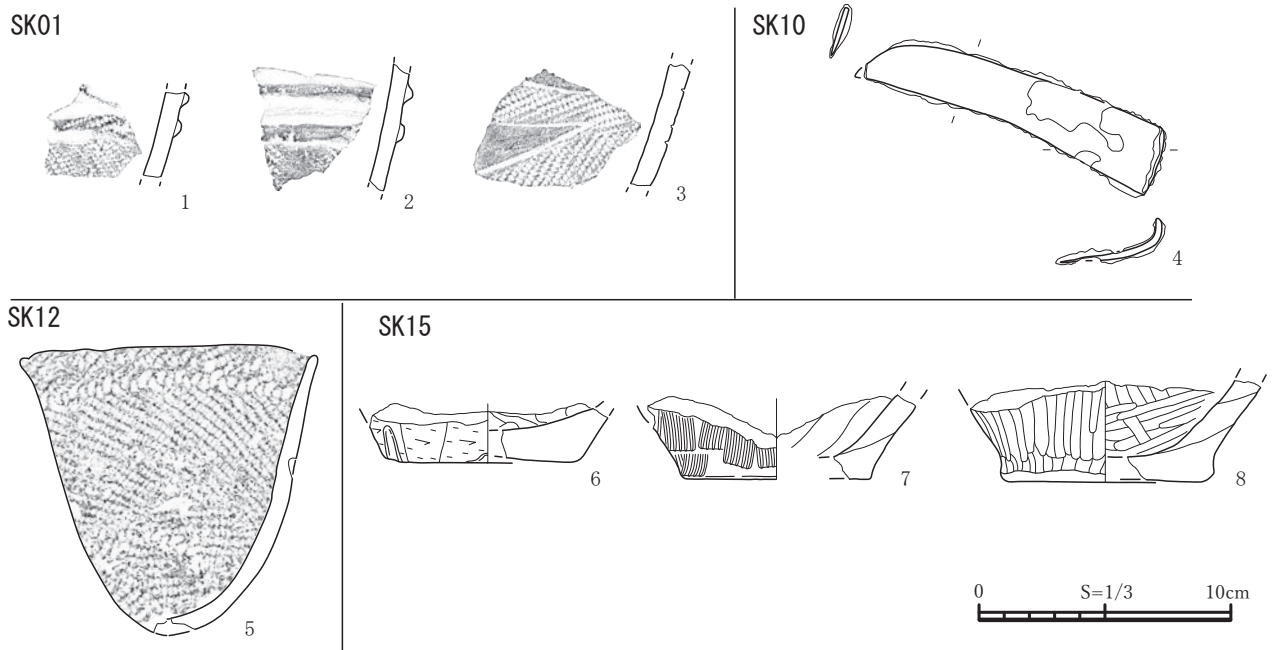


図14 土坑出土遺物

第19号土坑 (SK19、図13、写真9)

[位置・確認] M-70グリッド、標高約83.6mの平坦面に位置し、第IV層中で確認した。重複する遺構はない。

[形状・規模] 平面形状は長軸86cm、短軸66cmの不整楕円形であり、深さは最大27cmを測る。断面形状は北壁が緩やかに立ち上がり、南壁はやや垂直に立ち上がる。

[堆積土] 単層で褐色土を主体とした自然堆積である。

[出土遺物] なし。

[小結] 出土遺物がなく、構築時期などの詳細は不明である。

第20号土坑 (SK20、図13、写真9)

[位置・確認] I F-74・75グリッド、標高約80.6～80.8mの平坦面に位置し、第IV層中で確認した。重複する遺構はない。

[形状・規模] 平面形状は長軸107cm、短軸82cmの楕円形であり、深さは最大42cmを測る。断面形状は皿形である。

[堆積土] 単層で黒褐色土を主体とした自然堆積である。

[出土遺物] なし。

[小結] 出土遺物がなく、構築時期などの詳細は不明である。

(齋藤)

第4節 溝状土坑

溝状土坑は総数21基を検出した。南東斜面に多く構築されている。以下に検出した遺構番号順に記載する。

第1号溝状土坑 (SV01、図15、写真10)

[位置・確認] O・P-75グリッドに位置する。標高約83.1mの第IV層面で確認した。

[重複] なし。

[形状・規模] 平面形状は楕円形を呈する。規模は開口部の長軸302cm、短軸92cm、底面の長軸は259cm、短軸は7cmである。深さは169cmである。底面には起伏がみられる。長軸の断面形は両端が直立する箱形で、短軸の断面形は中位から開くY字状である。長軸方向はN-73.3°-Eである。

[堆積土] 黒褐色土を主体として8層に分層した。自然堆積と考えられる。

[出土遺物] なし。

[小結] 出土遺物がなく、構築時期などの詳細は不明である。

第2号溝状土坑 (SV02、図15、写真10)

[位置・確認] Q-73・74グリッドに位置する。標高約82.7mの第IV層面で確認した。

[重複] なし。

[形状・規模] 楕円形を呈する。規模は開口部の長軸287cm、短軸66cm、底面の長軸は261cm、短軸は14cmである。深さは130cmである。底面は平坦である。長軸の断面形は両端が直立する箱形で、短軸の断面形は中位で開くY字状である。長軸方向はN-10.5°-Eである。

[堆積土] 黒褐色土を主体として6層に分層した。自然堆積と考えられる。

[出土遺物] なし。

[小結] 出土遺物がなく、構築時期などの詳細は不明である。

第3号溝状土坑 (SV03、図15、写真10)

[位置・確認] S・T-71、T-72グリッドに位置する。標高約82.8～83mの第IV層面で確認した。

[重複] なし。

[形状・規模] 平面形状は楕円形を呈する。規模は開口部の長軸220cm、短軸33cm、底面の長軸は195cm、短軸は7cmである。深さは77cmである。底面はほぼ平坦である。長軸断面形は両端が開く逆台形状で、短軸の断面形はV字状である。長軸方向はN-21.1°-Eである。

[堆積土] 黒褐色土を主体として4層に分層した。自然堆積と考えられる。

[出土遺物] なし。

[小結] 出土遺物がなく、構築時期などの詳細は不明である。

第4号溝状土坑 (SV04、図15、写真11)

[位置・確認] T-75グリッドに位置する。標高約82.5mの第IV層面で確認した。

[重複] なし。

[形状・規模] 平面形状は楕円形を呈する。規模は開口部の長軸345cm、短軸52cm、底面の長軸は310cm、短軸は5cmである。深さは121cmである。底面には起伏がある。長軸の断面形は両端が開く逆台形状で、短軸の断面形はV字状である。長軸方向はN-58.0°-Wである。

[堆積土] 黒褐色土を主体として6層に分層した。自然堆積と考えられる。

[出土遺物] なし。

[小結] 出土遺物がなく、構築時期などの詳細は不明である。

第5号溝状土坑 (SV05、図16、写真11)

[位置・確認] U・V-73グリッドに位置する。標高約82.4mの第IV層面で確認した。

[重複] なし。

[形状・規模] 平面形状は長楕円形を呈する。規模は開口部の長軸336cm、短軸39cm、底面の長軸は326cm、短軸は7cmである。深さは97cmである。底面にはやや起伏がみられる。長軸断面形は両端が直立する箱形で、短軸の断面形は底面から中位で開くY字状である。長軸方向はN-44.2°-Wである。

[堆積土] 暗褐色土を主体として8層に分層した。自然堆積と考えられる。

[出土遺物] なし。

[小結] 出土遺物がなく、構築時期などの詳細は不明である。

第6号溝状土坑 (SV06、図16、写真11)

[位置・確認] I C-69グリッドに位置する。標高約81.0～81.3mの第IV層面で確認した。

[重複] なし。

[形状・規模] 平面形状は楕円形を呈する。規模は開口部の長軸428cm、短軸78cm、底面の長軸は397cm、短軸は13cmである。深さは137cmである。底面は中央から両端に向かって緩やかに傾斜している。長軸断面形は両端が直立する箱形で、短軸断面形は中位で開くY字状である。長軸方向はN-63.5°-Eである。

[堆積土] 黒色土、黒褐色土を主体として7層に分層した。自然堆積と考えられる。

[出土遺物] なし。

[小結] 出土遺物がなく、構築時期などの詳細は不明である。

第7号溝状土坑 (SV07、図16、写真12)

[位置・確認] I C・D-70グリッドに位置する。標高約81.1～81.3mの第IV層面で確認した。

[重複] なし。

[形状・規模] 平面形状は楕円形を呈する。規模は開口部の長軸377cm、短軸73cm、底面の長軸は380cm、短軸は9cmである。深さは107cmである。底面は中央から東端に緩やかに傾斜している。長軸断面形は両端部がオーバーハングしたフラスコ状であり、短軸断面形はV字状である。長軸方向はN-80.9°-Wである。

[堆積土] 黒色土、黒褐色土を主体として7層に分層した。自然堆積と考えられる。

[出土遺物] なし。

[小結] 出土遺物がなく、構築時期などの詳細は不明である。

第8号溝状土坑 (SV08、図16、写真12)

[位置・確認] I E・F-70グリッドに位置する。標高約80.8～81.0mの第IV層面で確認した。

[重複] なし。

[形状・規模] 平面形状は楕円形を呈する。規模は開口部の長軸402cm、短軸74cm、底面の長軸は408cm、短軸は20cmである。深さは167cmである。底面は東端に向かって傾斜している。長軸断面形は西側がオーバーハングしたフラスコ状であり、東側は直立する。短軸断面形は中位で開くY字状である。長軸方向はN-66.1°-Eである。

[堆積土] 黒色土、黒褐色土を主体として7層に分層した。自然堆積と考えられる。

[出土遺物] なし。

[小結] 出土遺物がなく、構築時期などの詳細は不明である。

第9号溝状土坑 (SV09、図17、写真12)

[位置・確認] I D-71グリッドに位置する。標高約81.1～81.3mの第V層面で確認した。

[重複] なし。

[形状・規模] 楕円形を呈する。規模は開口部の長軸363cm、短軸73cm、底面の長軸は303cm、短軸は10cmである。深さは134cmである。底面は東端に向かい傾斜している。長軸断面形は両端が開く逆台形状で、短軸断面形は中位で開くY字状である。長軸方向はN-88.8°-Wである。

[堆積土] 黒色土、黒褐色土を主体として8層に分層した。自然堆積と考えられる。

[出土遺物] なし。

[小結] 出土遺物がなく、構築時期などの詳細は不明である。

第10号溝状土坑 (SV10、図17、写真13)

[位置・確認] I C・D-68・69グリッドに位置する。標高約81.0mの第IV層面で確認した。

[重複] なし。

[形状・規模] 平面形状は楕円形を呈する。規模は開口部の長軸392cm、短軸100cm、底面の長軸は303cm、短軸は13cmである。深さは146cmである。底面はほぼ平坦である。長軸断面形は両端が開く逆台形状で、短軸断面形は中位で開くY字状である。長軸方向はN-68.9°-Eである。

[堆積土] 黒褐色土、明黄褐色土を主体として9層に分層した。自然堆積と考えられる。

[出土遺物] なし。

[小結] 出土遺物がなく、構築時期などの詳細は不明である。

第11号溝状土坑 (SV11、図17、写真13)

[位置・確認] I C-68グリッドに位置する。標高約81.0mの第IV層面で確認した。

[重複] なし。

[形状・規模] 平面形状は楕円形を呈する。規模は開口部の長軸355cm、短軸83cm、底面の長軸は342cm、短軸は13cmである。深さは139cmである。底面はやや起伏がある。長軸断面形はほぼ直立する箱状であり、短軸断面形は中位で開くY字状である。長軸方向はN-52.3°-Eである。

[堆積土] 黒褐色土を主体として7層に分層した。自然堆積と考えられる。

[出土遺物] なし。

[小結] 出土遺物がなく、構築時期などの詳細は不明である。

第12号溝状土坑 (SV12、図17、写真13)

[位置・確認] I F・G-68グリッドに位置する。標高約80.0mの第V層面で確認した。

[重複] なし。

[形状・規模] 平面形状は楕円形を呈する。規模は開口部の長軸356cm、短軸93cm、底面の長軸は335cm、短軸は8cmである。深さは163cmである。底面は東端に向かい緩やかに傾斜している。長軸断面形はほぼ直立する箱状であり、短軸断面形はY字状である。長軸方向はN-71.0°-Eである。

[堆積土] 黒褐色土を主体として7層に分層した。自然堆積と考えられる。

[出土遺物] なし。

[小結] 出土遺物がなく、構築時期などの詳細は不明である。

第13号溝状土坑 (SV13、図18、写真14)

[位置・確認] I E-66グリッドに位置する。標高約78.3~78.6mの第IV層面で確認した。

[重複] 第14号溝状土坑と重複し、本遺構が古い。

[形状・規模] 平面形状は楕円形を呈する。規模は開口部の長軸356cm、短軸54cm、底面の長軸は340cm、短軸は14cmである。深さは123cmである。底面は起伏がみられる。長軸断面形はほぼ直立する箱状であり、短軸断面形はV字状である。長軸方向はN-53.5°-Eである。

[堆積土] 黒褐色土を主体として10層に分層した。自然堆積と考えられる。

[出土遺物] なし。

[小結] 出土遺物がなく、構築時期などの詳細は不明である。

第14号溝状土坑 (SV14、図18、写真14)

[位置・確認] I E-66グリッドに位置する。標高約78.3~78.6mの第IV層面で確認した。

[重複] 第13号溝状土坑と重複し、本遺構が新しい。

[形状・規模] 平面形状は楕円形を呈する。規模は開口部の長軸344cm、短軸55cm、底面の長軸は347cm、短軸は12cmである。深さは170cmである。底面は中央から両端に向け緩やかに傾斜している。長軸断面形はオーバーハングしたフラスコ状であり、短軸断面形はY字状である。長軸方向はN-87.7°-Eである。

[堆積土] 黒褐色土を主体として9層に分層した。自然堆積と考えられる。

[出土遺物] なし。

[小結] 出土遺物がなく、構築時期などの詳細は不明である。

第15号溝状土坑 (SV15、図18、写真15)

[位置・確認] I D-65・66グリッドに位置する。標高約78.4～78.9mの第IV層面で確認した。

[重複] なし。

[形状・規模] 平面形状は楕円形を呈する。規模は開口部の長軸324cm、短軸37cm、底面の長軸は319cm、短軸は7cmである。深さは128cmである。底面は平坦である。長軸断面形はほぼ直立する箱状であり、短軸の断面形はU字形である。長軸方向はN-36.7°-Eである。

[堆積土] 黒色土、黒褐色土を主体として5層に分層した。自然堆積と考えられる。

[出土遺物] なし。

[小結] 出土遺物がなく、構築時期などの詳細は不明である。

第16号溝状土坑 (SV16、図18、写真15)

[位置・確認] I G-79グリッドに位置する。標高約80.6～80.8mの第III層面で確認した。

[重複] 第16号土坑と重複して本遺構が古い。

[形状・規模] 平面形状は楕円形を呈する。規模は開口部の長軸339cm、短軸70cm、底面の長軸は324cm、短軸は14cmである。深さは142cmである。底面はやや起伏がみられる。長軸の断面形はややオーバーハングしたフラスコ状であり、短軸断面形はV字形である。長軸方向はN-66.8°-Wである。

[堆積土] 黒褐色土を主体として7層に分層した。自然堆積と考えられる。

[出土遺物] なし。

[小結] 出土遺物がなく、構築時期などの詳細は不明である。

第17号溝状土坑 (SV17、図19、写真15)

[位置・確認] I C-74・75グリッドに位置する。標高約81.5mの第III層面で確認した。

[重複] なし。

[形状・規模] 平面形状は楕円形を呈する。規模は開口部の長軸279cm、短軸83cm、底面の長軸は249cm、短軸は16cmである。深さは146cmである。底面は西側がやや傾斜している。長軸断面形はほぼ直立する箱状であり、短軸断面形はY字状である。長軸方向はN-71.1°-Wである。

[堆積土] 黒褐色土、暗褐色土を主体として10層に分層した。自然堆積と考えられる。

[出土遺物] なし。

[小結] 出土遺物がなく、構築時期などの詳細は不明である。

第18号溝状土坑 (SV18、図19、写真16)

[位置・確認] S-66グリッドに位置する。標高約81.3mの第V層面で確認した。

[重複] なし。

[形状・規模] 平面形状は楕円形を呈する。規模は開口部の長軸280cm、短軸20cm、底面の長軸は256cm、短軸は13cmである。深さは56cmである。底面はやや起伏がみられ、西端に傾斜している。長軸断面形

は両端が開く逆台形状で、短軸の断面形はU字形である。長軸方向はN-71.1°-Wである。

[堆積土] 黄褐色土の単層である。自然堆積と考えられる。

[出土遺物] なし。

[小結] 出土遺物がなく、構築時期などの詳細は不明である。

第19号溝状土坑 (SV19、図19、写真16)

[位置・確認] P-66～Q-65グリッドに位置する。標高約80.3～81.1mの第V層面で確認した。

[重複] なし。

[形状・規模] 平面形状は楕円形を呈する。規模は開口部の長軸353cm、短軸38cm、底面の長軸は334cm、短軸は12cmである。深さは135cmである。底面は西側から東側に傾斜している。長軸断面形は両端が開く逆台形状で、短軸の断面形は西側に傾くY字状である。長軸方向はN-53.3°-Wである。

[堆積土] にぶい黄褐色土を主体とした5層に分層した。自然堆積と考えられる。

[出土遺物] なし。

[小結] 出土遺物がなく、構築時期などの詳細は不明である。

第20号溝状土坑 (SV20、図19、写真16)

[位置・確認] V-77グリッドに位置する。標高約82.0mの第Ⅲ層面で確認した。

[重複] 第3号竪穴建物跡と重複して、本遺構が古い。

[形状・規模] 平面形状は楕円形を呈する。規模は開口部の長軸357cm、短軸53cm、底面の長軸は358cm、短軸は9cmである。深さは94cmである。底面は平坦である。長軸断面形は北側の端部がオーバーハングしたフラスコ状であり、南側の端部はほぼ直立する。短軸の断面形はV字形である。長軸方向はN-3.77°-Wである。

[堆積土] 黒褐色土を主体とした5層に分層した。自然堆積と考えられる。

[出土遺物] なし。

[小結] 出土遺物がなく、構築時期などの詳細は不明である。

第21号溝状土坑 (SV21、図19、写真16)

[位置・確認] Y-67グリッドに位置する。標高約81.0～81.2mの第IV層面で確認した。

[重複] 攪乱と重複して、本遺構が古い。

[形状・規模] 楕円形を呈する。規模は開口部の長軸(183)cm、短軸17cm、底面の長軸は(177)cm、短軸は7cmである。深さは59cmである。底面はやや起伏がみられる。長軸の断面形は両端が開く逆台形状で、短軸断面形はV字状である。長軸方向はN-60.3°-Eである。

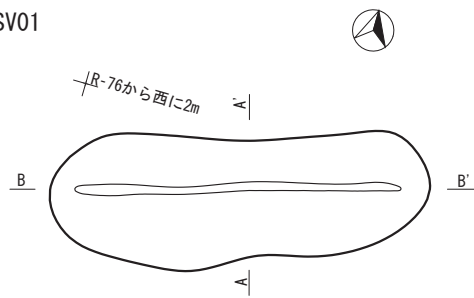
[堆積土] 黒褐色土を主体とした4層に分層した。自然堆積と考えられる。

[出土遺物] なし。

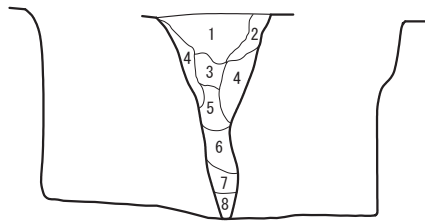
[小結] 出土遺物がなく、構築時期などの詳細は不明である。

(齋藤)

SV01

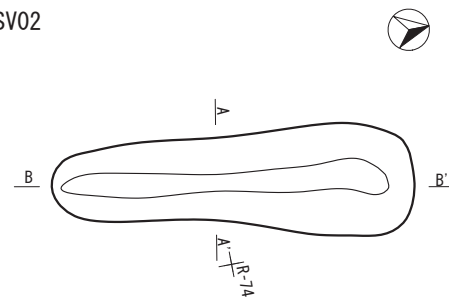


B 83.3m A 83.3m A' B'

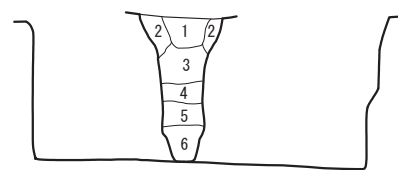


- SV01 (A-A')
- 1層 10YR2/1 黒色土 中礫軽石粒5%混合
 - 2層 10YR2/3 黒褐色土
 - 3層 10YR3/2 黒褐色土
 - 4層 10YR4/4 褐色土 10YR2/2黒褐色土5%混合
 - 5層 10YR3/1 黒褐色土 10YR4/4褐色土塊(φ~100mm)10%混合
 - 6層 10YR3/2 黒褐色土 10YR4/4褐色土塊(φ~100mm)3%混合
 - 7層 10YR2/2 黒褐色土 10YR4/4褐色土塊(φ~100mm)1%混合
 - 8層 10YR3/3 暗褐色土 10YR2/1黒色土混合

SV02

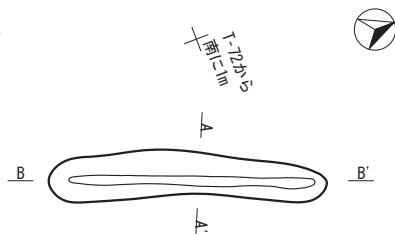


B 83.0m A 83.0m A' B'

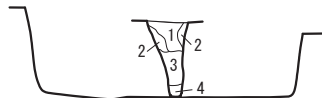


- SV02 (A-A')
- 1層 10YR2/1 黒色土 中礫軽石粒5%混合
 - 2層 10YR3/2 黒褐色土 10YR4/4褐色土2%、中礫軽石粒10%混合
 - 3層 10YR3/1 黒褐色土 10YR4/6褐色土3%、中礫軽石粒5%混合
 - 4層 10YR2/2 黒褐色土 10YR4/6褐色土5%、中礫軽石粒2%混合
 - 5層 10YR2/2 黒褐色土 10YR4/4褐色土塊10%混合
 - 6層 10YR3/3 暗褐色土 10YR2/1黒色土混合

SV03

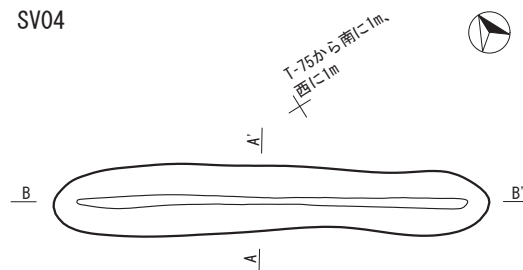


B 83.2m A 83.2m A' B'

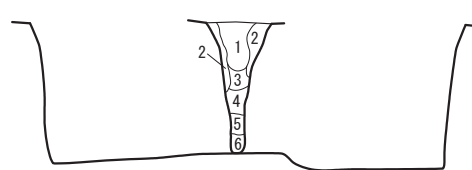


- SV03 (A-A')
- 1層 10YR2/1 黒色土 中礫軽石粒5%混合
 - 2層 10YR2/2 黒褐色土 10YR4/4褐色土2%、中礫軽石粒10%混合
 - 3層 10YR3/1 黒褐色土 10YR4/6褐色土3%、中礫軽石粒5%混合
 - 4層 10YR3/2 黒褐色土 10YR4/6褐色土5%、中礫軽石粒2%混合

SV04



B 82.8m A 82.8m A' B'



- SV04 (A-A')
- 1層 10YR2/1 黒色土 中礫軽石粒10%混合
 - 2層 10YR2/2 黒褐色土 10YR4/4褐色土2%、中礫軽石粒7%混合
 - 3層 10YR2/1 黒褐色土 10YR4/6褐色土3%、中礫軽石粒5%混合
 - 4層 10YR3/2 黒褐色土 10YR4/6褐色土5%、中礫軽石粒2%混合
 - 5層 10YR3/3 暗褐色土 10YR4/4褐色土塊10%混合
 - 6層 10YR2/2 暗褐色土 10YR5/6黄褐色ローム質土3%、10YR2/1黒色土20%混合

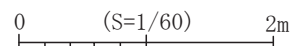
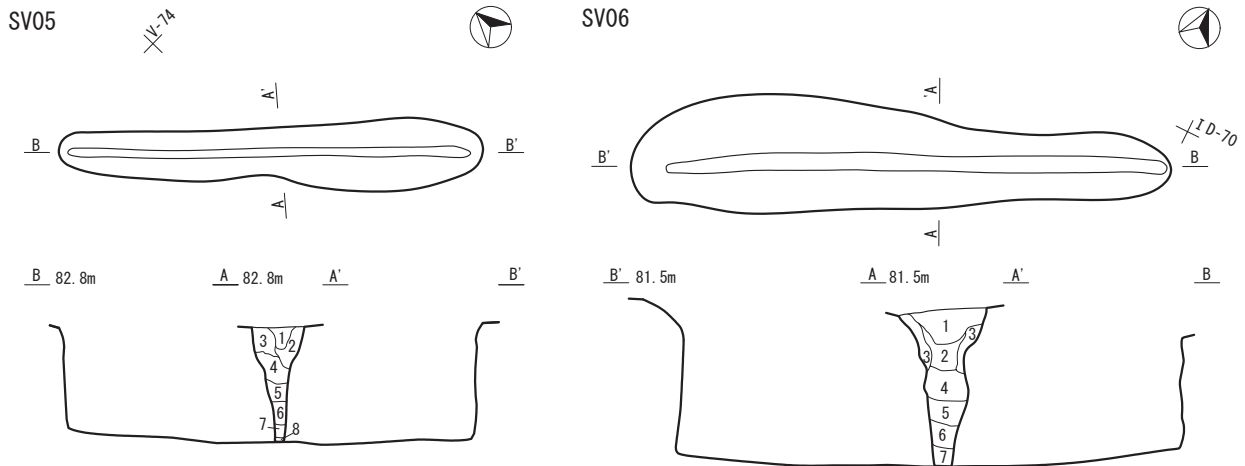


図15 溝状土坑(1)



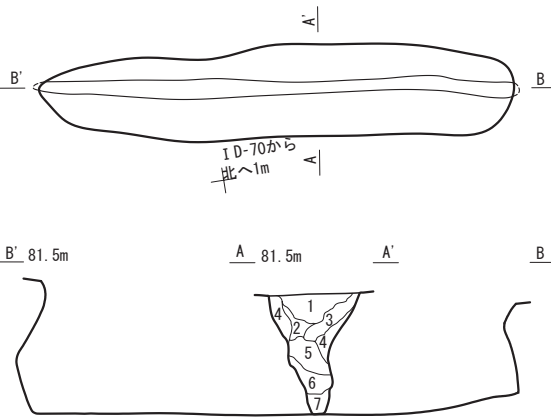
SV05 (A-A')

- 1層 10YR2/1 黒色土 中掬軽石粒(φ0.5~1mm)30%混合
- 2層 10YR3/3 暗褐色土 10YR5/4にぶい黄褐色ローム質土(IV層崩落土塊)、10YR7/6明黄褐色粘質土混合、中掬軽石粒、南部軽石粒2%混合
- 3層 10YR3/1 黒褐色土 中掬軽石粒(φ0.5~1mm)20%混合
- 4層 10YR3/2 黒褐色土 10YR5/4にぶい黄褐色ローム質土(IV層崩落土塊)、中掬軽石粒20%混合
- 5層 10YR4/4 褐色土 10YR5/4にぶい黄褐色ローム質土(IV層崩落土塊)、中掬軽石粒、南部浮石粒2%混合
- 6層 10YR3/4 暗褐色土 中掬軽石粒(φ0.5~1mm)30%混合
- 7層 10YR6/4 にぶい黄橙色土 第V層周壁崩落土
- 8層 10YR2/1 黒色土 初期堆積土、薄層

SV06 (A-A')

- 1層 10YR2/1 黒色土 中掬軽石粒10%混合
- 2層 10YR2/2 黒褐色土 10YR4/4褐色土2%、中掬軽石粒7%混合
- 3層 10YR4/6 褐色土 10YR3/1黒色土粒(φ~1mm)10%混合、周壁崩落土主体の堆積土
- 4層 10YR3/2 黒褐色土 10YR4/4褐色土2%混合、一部にローム塊(φ~60mm)混入
- 5層 10YR5/6 黄褐色土 10YR3/2暗色土粒(φ~1mm)10%混合、周壁崩落土主体の堆積土
- 6層 10YR4/6 褐色土 10YR5/8黄褐色ローム粒(φ~10mm)5%混合、自然流入土に周壁崩落土混入
- 7層 10YR6/4 にぶい黄橙色土 10YR7/6黄褐色粘質土多量混合、周壁方角土主体の堆積土、初期堆積土(黒色土)に崩落土混入

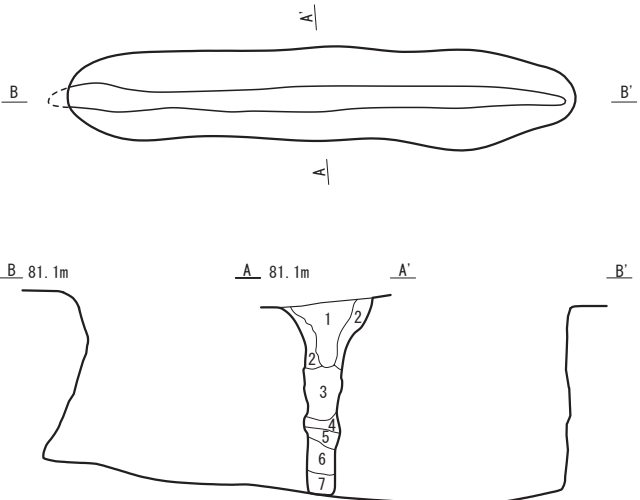
SV07



SV07 (A-A')

- 1層 10YR2/1 黒色土 中掬軽石粒5%混合
- 2層 10YR3/2 黒褐色土 10YR4/4褐色土2%、中掬軽石粒10%混合
- 3層 10YR2/2 黒褐色土 10YR4/6褐色土3%、中掬軽石粒5%混合
- 4層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 10YR5/8黄褐色ローム塊(φ~100mm)20%混合、周壁崩落土、斑状に混合
- 5層 10YR3/2 黒褐色土 10YR5/6黄褐色ローム塊(φ~50mm)3%混合
- 6層 10YR3/3 暗褐色土 10YR2/1黒色土粒(φ~1mm)2%、中掬軽石粒10%混合
- 7層 10YR2/2 黒褐色土 10YR5/8黄褐色ローム粒(φ~5mm)3%混合、初期堆積土

SV08



SV08 (A-A')

- 1層 10YR2/1 黒色土 10YR5/6黄褐色ローム質土3%、中掬軽石粒20%混合
- 2層 10YR3/2 黒褐色土 10YR4/4褐色土5%、中掬軽石粒20%混合
- 3層 10YR2/3 黒褐色土 10YR5/4にぶい黄褐色ローム塊(φ~20mm)20%、中掬軽石粒10%、南部軽石粒(φ5~15mm)3%混合
- 4層 10YR3/2 黒褐色土 10YR5/4にぶい黄褐色ローム塊(φ~10mm)10%、中掬軽石粒5%、南部軽石粒(φ1~10mm)2%混合
- 5層 10YR3/1 黒褐色土 10YR4/3にぶい黄褐色ローム塊(φ~10mm)10%、中掬軽石粒10%、南部軽石粒(φ5~15mm)3%混合
- 6層 10YR3/4 暗褐色土 10YR4/4褐色土塊(φ~50mm)20%混合
- 7層 10YR2/3 黒褐色土 10YR3/4暗褐色土粒(φ~5mm)20%混合

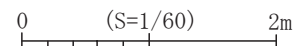
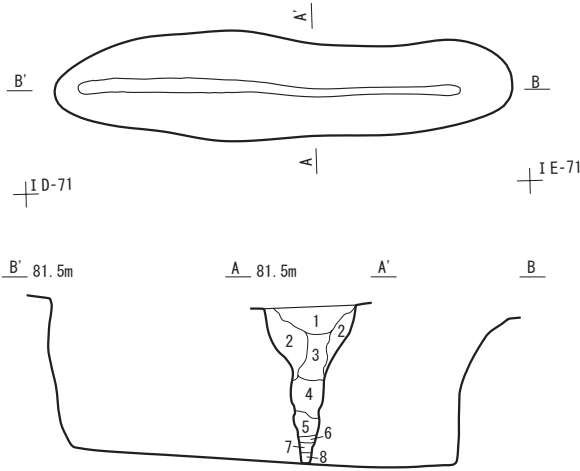


図16 溝状土坑(2)

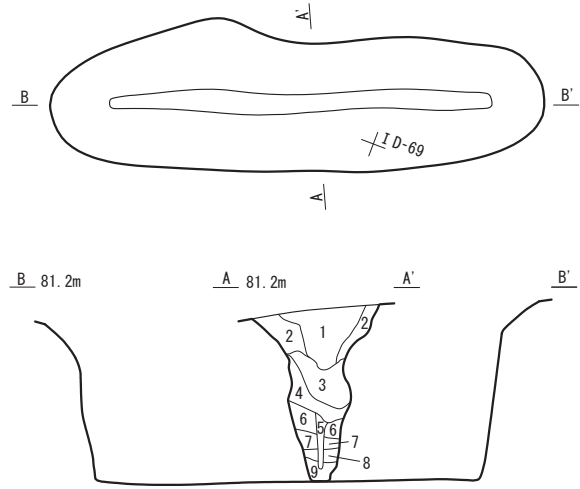
SV09



SV09 (A-A')

- | | | | |
|----|---------|------|---|
| 1層 | 10YR2/1 | 黒色土 | 中撒軽石粒5%混合 |
| 2層 | 10YR2/3 | 黒褐色土 | 10YR4/4褐色土2%、中撒軽石粒10%混合 |
| 3層 | 10YR3/1 | 黒褐色土 | 10YR4/6褐色土3%、中撒軽石粒5%混合 |
| 4層 | 10YR3/2 | 黒褐色土 | 10YR5/8黄褐色ローム塊(φ~100mm)20%混合
周壁崩落土、斑状に混合 |
| 5層 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | 10YR5/6黄褐色ローム塊(φ~50mm)3%混合 |
| 6層 | 10YR5/6 | 黄褐色土 | 10YR2/1黒色土粒(φ~1mm)2%、中撒軽石粒10%混合 |
| 7層 | 10YR3/2 | 黒褐色土 | 10YR4/6褐色土3%、中撒軽石粒5%混合 |
| 8層 | 10YR3/1 | 黒褐色土 | 10YR5/8黄褐色ローム粒(φ~20mm)10%混合、
初期堆積土 |

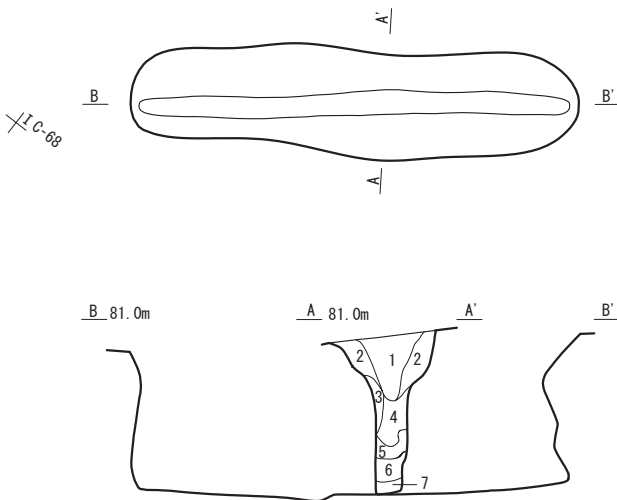
SV10



SV10 (A-A')

- | | | | |
|----|---------|---------|--|
| 1層 | 10YR2/1 | 黒色土 | 南部軽石粒(φ 1~5mm)3%、中撒軽石粒混合 |
| 2層 | 10YR2/3 | 黒褐色土 | 南部軽石粒(φ 1~5mm)10%、中撒軽石粒混合 |
| 3層 | 10YR3/1 | 黒褐色土 | 10YR8/8黄褐色南部軽石粒(φ 1~5mm)1%、10YR6/8明黄
褐色ローム質土10%、中撒軽石粒混合 |
| 4層 | 10YR4/6 | 褐色土 | 10YR7/8黄褐色南部軽石粒(φ 5~10mm)1%、中撒軽石粒
混合 |
| 5層 | 10YR4/3 | にぶい黄褐色土 | 10YR7/2にぶい黄褐色粘土粒(φ~10mm)10%混合 |
| 6層 | 10YR6/8 | 明黄褐色土 | 10YR7/2にぶい黄褐色粘土粒(φ~10mm)混合。 |
| 7層 | 10YR6/6 | 明黄褐色土 | 10YR7/1灰白色粘土粒(φ~10mm)混合、10YR7/6
黄褐色南部軽石粒(φ 1~5mm)5%混合 |
| 8層 | 10YR7/4 | にぶい黄褐色土 | 10YR3/2黒褐色土粒混合 |
| 9層 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | 10YR7/1灰白色粘土粒(φ~10mm)混合 |

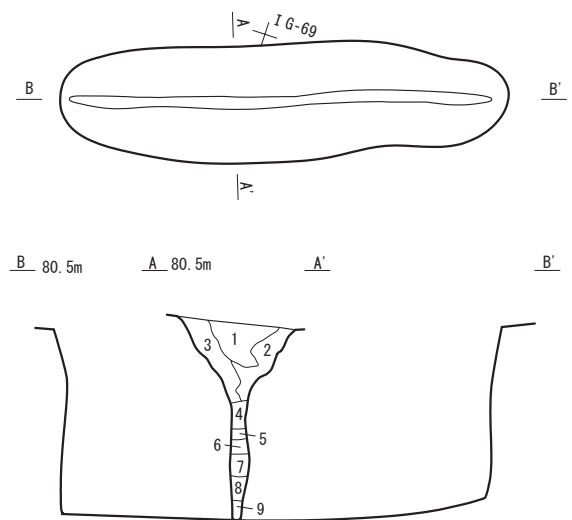
SV11



SV11 (A-A')

- | | | | |
|----|---------|------|---|
| 1層 | 10YR2/1 | 黒色土 | 10YR5/6黄褐色ローム質土5%、中撒軽石粒20%混合 |
| 2層 | 10YR2/3 | 黒褐色土 | 10YR3/3暗褐色土塊(φ~20mm)20%混合、周壁崩落土
混合の堆積土 |
| 3層 | 10YR4/4 | 褐色土 | 10YR2/1黒色土混合 |
| 4層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | 10YR5/6黄褐色ローム質土10%、中撒軽石粒20%混合 |
| 5層 | 10YR5/6 | 黄褐色土 | 10YR3/2黒褐色土5%、南部軽石粒(φ~5mm)2%混合 |
| 6層 | 10YR3/1 | 黒褐色土 | 10YR4/4褐色土2%、南部軽石粒(φ~5mm)5%混合 |
| 7層 | 10YR2/1 | 黒色土 | 10YR4/3にぶい褐色土3%、南部軽石粒(φ~5mm)2%混合 |

SV12



SV12 (A-A')

- | | | | |
|----|---------|---------|---|
| 1層 | 10YR3/1 | 黒褐色土 | 中撒軽石粒(φ 0.5~1mm)15%混合 |
| 2層 | 10YR4/3 | にぶい黄褐色土 | 10YR2/1黒色土粒(φ~1mm)2%、中撒軽石粒5%、
南部軽石粒(φ 5~15mm)10%混合 |
| 3層 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | 10YR2/2黒褐色土3%、南部軽石粒(φ~10mm) 1%混合 |
| 4層 | 10YR4/4 | 褐色土 | 10YR3/2黒褐色土5%、南部軽石粒(φ~5mm)3%混合 |
| 5層 | 10YR3/1 | 黒褐色土 | 10YR5/6黄褐色ローム質土5%、南部軽石粒(φ~10mm)
3%混合 |
| 6層 | 10YR5/6 | 黄褐色土 | 10YR3/3暗褐色土5%、南部軽石粒(φ~5mm)2%混合 |
| 7層 | 10YR2/1 | 黒色土 | 10YR4/3にぶい褐色土 3%、南部軽石粒(φ~5mm)2%混合 |
| 8層 | 10YR4/4 | 褐色土 | 10YR6/2灰黄褐色ローム破砕塊(φ~50mm)3%混合 |
| 9層 | 10YR3/2 | 黒褐色土 | 10YR2/1黒色土粒混合 |

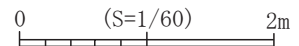
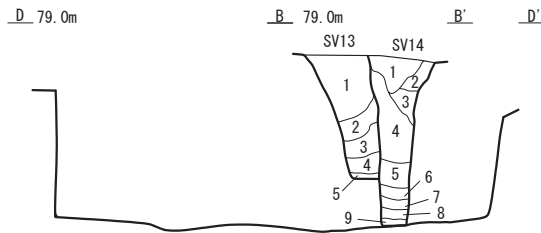
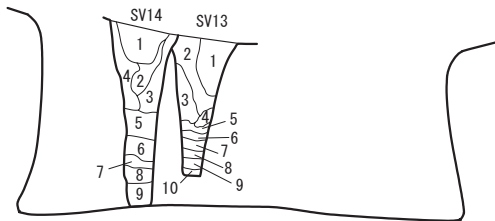
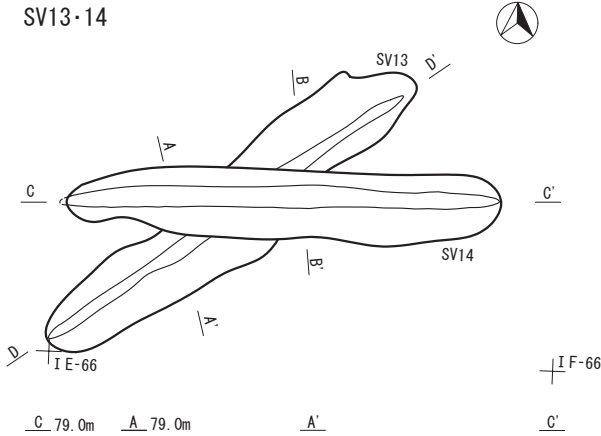
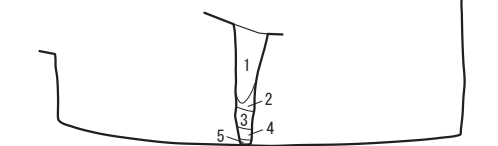
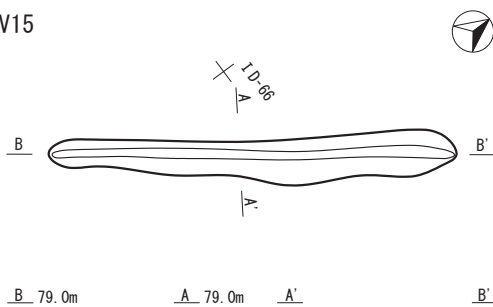


図17 溝状土坑(3)

SV13-14



SV15



SV15(A-A')

- | | | |
|----|--------------|---|
| 1層 | 10YR2/1 黒色土 | 10YR8/8黄橙色南部軽石粒(φ1~5mm)3%、中掀軽石粒混合 |
| 2層 | 10YR3/3 暗褐色土 | 10YR7/6黄橙色南部軽石粒(φ1~5mm)10%、中掀軽石粒混合 |
| 3層 | 10YR2/2 黒褐色土 | 10YR8/8黄橙色南部軽石粒(φ1~5mm)1%、10YR6/8明黄褐色ローム質土10%、中掀軽石粒混合 |
| 4層 | 10YR2/1 黒色土 | 10YR5/8黄褐色ローム質土塊(φ~30mm)10%混合、周壁崩落土混入 |
| 5層 | 10YR2/3 黒褐色土 | 10YR4/6褐色ローム質土粒混合 |

SV13(A-A')

- | | | |
|-----|---------------|---|
| 1層 | 10YR3/3 暗褐色土 | 10YR2/2黒色土2%、中掀軽石粒5%、南部軽石粒(φ5~15mm)5%混合 |
| 2層 | 10YR3/1 黒褐色土 | 10YR2/2黒褐色土5%、南部軽石粒(φ~10mm)3%混合 |
| 3層 | 10YR3/3 暗褐色土 | 南部軽石粒(φ~5mm)3%混合 |
| 4層 | 10YR5/6 黄褐色土 | 10YR2/2黒褐色土5%、南部軽石粒(φ~5mm)2%混合 |
| 5層 | 10YR2/2 黒褐色土 | 10YR3/4暗褐色土粒(φ~5mm)20%混合 |
| 6層 | 10YR4/4 褐色土 | 10YR2/2黒褐色土5%混合 |
| 7層 | 10YR3/1 黒褐色土 | |
| 8層 | 10YR4/4 褐色土 | 10YR2/1黒色土粒混合 |
| 9層 | 10YR2/2 黒褐色土 | 10YR4/4褐色土2%、南部軽石粒(φ~5mm)5%混合 |
| 10層 | 10YR6/2 灰黄褐色土 | 10YR2/1黒色土粒混合 |

SV13(B-B')

- | | | |
|----|--------------|--|
| 1層 | 10YR2/2 黒褐色土 | 10YR4/3にぶい黄褐色ローム塊(φ~10mm)10%、中掀軽石粒10%、南部軽石粒(φ5~15mm)3%混合 |
| 2層 | 10YR3/1 黒褐色土 | 10YR3/2黒褐色土5%、南部軽石粒(φ~5mm)3%混合 |
| 3層 | 10YR5/6 黄褐色土 | 10YR2/2黒褐色土5%混合、南部軽石粒(φ5~10mm)5%混合 |
| 4層 | 10YR5/8 黄褐色土 | 10YR2/2黒褐色土10%混合 |
| 5層 | 10YR2/2 黒褐色土 | 10YR4/4黄褐色土3%、中掀軽石粒10%、南部軽石粒(φ~5mm)3%混合 |

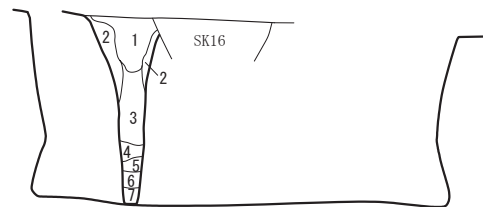
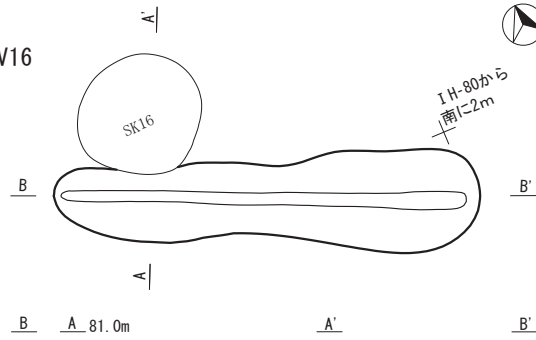
SV14(A-A')

- | | | |
|----|--------------|--|
| 1層 | 10YR3/1 黒褐色土 | 10YR4/3にぶい黄褐色ローム塊(φ~10mm)10%、中掀軽石粒10%、南部軽石粒(φ5~15mm)3%混合 |
| 2層 | 10YR2/1 黒色土 | |
| 3層 | 10YR3/3 暗褐色土 | 10YR4/4黄褐色土3%、中掀軽石粒10%、南部軽石粒(φ~5mm)3%混合 |
| 4層 | 10YR3/2 黒褐色土 | 中掀軽石粒10%、南部軽石粒(φ~5mm)1%混合 |
| 5層 | 10YR2/1 黒色土 | 10YR4/4黄褐色土3%、中掀軽石粒10%、南部軽石粒(φ~5mm)3%混合 |
| 6層 | 10YR4/4 褐色土 | 10YR2/2黒褐色土5%、南部軽石粒(φ~5mm)2%混合 |
| 7層 | 10YR2/2 黒褐色土 | 10YR3/2黒褐色土5%、南部軽石粒(φ~5mm)3%混合 |
| 8層 | 10YR4/4 褐色土 | 10YR2/2黒褐色土2%混合 |
| 9層 | 10YR2/2 黒褐色土 | 10YR4/4黄褐色土3%、中掀軽石粒5%混合 |

SV14(B-B')

- | | | |
|----|--------------|--|
| 1層 | 10YR2/2 黒褐色土 | 10YR4/3にぶい黄褐色ローム塊(φ~10mm)10%、中掀軽石粒10%、南部軽石粒(φ5~15mm)3%混合 |
| 2層 | 10YR3/2 黒褐色土 | 10YR4/4黄褐色土3%、中掀軽石粒10%、南部軽石粒(φ~5mm)3%混合 |
| 3層 | 10YR2/1 黒色土 | 10YR3/3暗褐色土2%混合 |
| 4層 | 10YR3/2 黒褐色土 | 10YR5/6黄褐色ローム質土5%、南部軽石粒(φ~10mm)3%混合 |
| 5層 | 10YR2/1 黒色土 | 10YR4/4黄褐色土3%、中掀軽石粒10%、南部軽石粒(φ~5mm)3%混合 |
| 6層 | 10YR4/4 褐色土 | 10YR2/2黒褐色土5%、南部軽石粒(φ~5mm)2%混合 |
| 7層 | 10YR2/2 黒褐色土 | 10YR3/2黒褐色土5%、南部軽石粒(φ~5mm)3%混合 |
| 8層 | 10YR4/4 褐色土 | 10YR2/2黒褐色土2%混合 |
| 9層 | 10YR2/2 黒褐色土 | 10YR4/4黄褐色土3%、中掀軽石粒5%混合 |

SV16



SV16(A-A')

- | | | |
|----|--------------|---|
| 1層 | 10YR2/1 黒色土 | 10YR8/8黄橙色南部軽石粒(φ1~5mm)3%、中掀軽石粒混合 |
| 2層 | 10YR3/2 黒褐色土 | 10YR7/6黄橙色南部軽石粒(φ1~5mm)10%、中掀軽石粒混合 |
| 3層 | 10YR3/1 黒褐色土 | 10YR8/8黄橙色南部軽石粒(φ1~5mm)1%、10YR6/8明黄褐色ローム質土10%、中掀軽石粒混合 |
| 4層 | 10YR3/3 暗褐色土 | 10YR7/8黄橙色南部軽石粒(φ5~10mm)1%、中掀軽石粒混合 |
| 5層 | 10YR2/2 黒褐色土 | 10YR7/6黄橙色南部軽石粒(φ1~5mm)10%混合 |
| 6層 | 10YR2/3 黒褐色土 | 10YR7/2にぶい黄褐色粘土粒(φ~10mm)混合 |
| 7層 | 10YR2/1 黒色土 | 10YR6/8黄褐色南部軽石粒(φ5~10mm)10%、10YR6/1灰褐色粘土粒混合 |

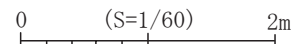
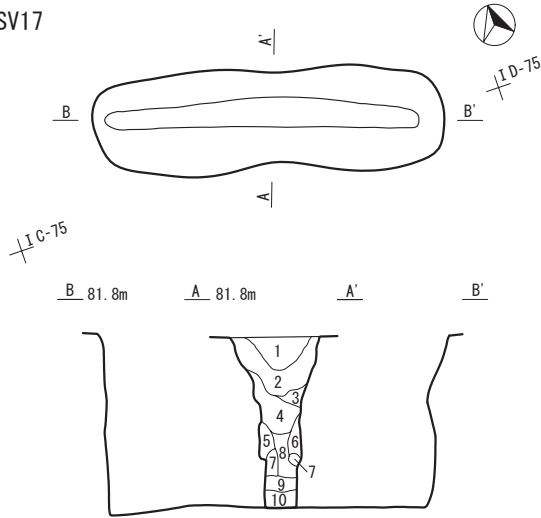


図18 溝状土坑(4)

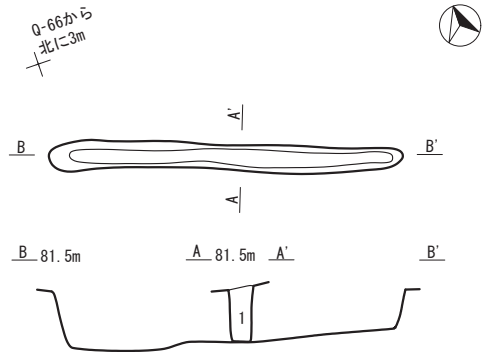
SV17



SV17 (A-A')

- 1層 10YR2/1 黒色土 中礫軽石粒(φ0.5~1mm)15%混合
- 2層 10YR3/2 黒褐色土 10YR4/3にぶい黄褐色土(破砕塊)2%、中礫軽石粒(φ0.5~1mm)15%混合
- 3層 10YR5/6 黄褐色土 10YR6/8明黄褐色ローム破砕塊(φ~50mm)と10YR2/2黒褐色土混合
- 4層 10YR3/3 暗褐色土 10YR4/4褐色土と2/1黒色土混合
- 5層 10YR4/6 褐色土 10YR6/8明黄褐色ローム破砕塊(φ~50mm)と10YR2/2黒褐色土混合
- 6層 10YR3/4 暗褐色土 10YR2/1黒色土塊と5/8黄褐色南部軽石粒(φ3~10mm)混合
- 7層 10YR6/8 明黄褐色土塊 (φ5~30mm)
- 8層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 10YR6/8明黄褐色ローム塊(φ~10mm)10%混合
- 9層 10YR3/2 黒褐色土 10YR5/8黄褐色南部軽石粒(φ~10mm)5%混合
- 10層 10YR6/6 明黄褐色土 10YR6/6南部軽石粒(φ~10mm)、10YR2/1黒色土2%混合、周壁の崩落初期堆積土

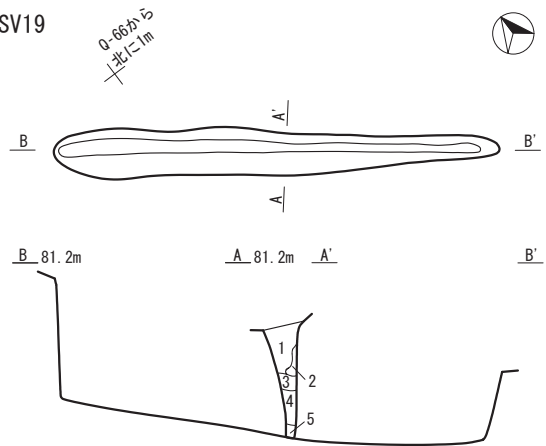
SV18



SV18 (A-A')

- 1層 10YR5/6 黄褐色土 10YR5/8黄褐色南部軽石粒(φ~10mm)5%

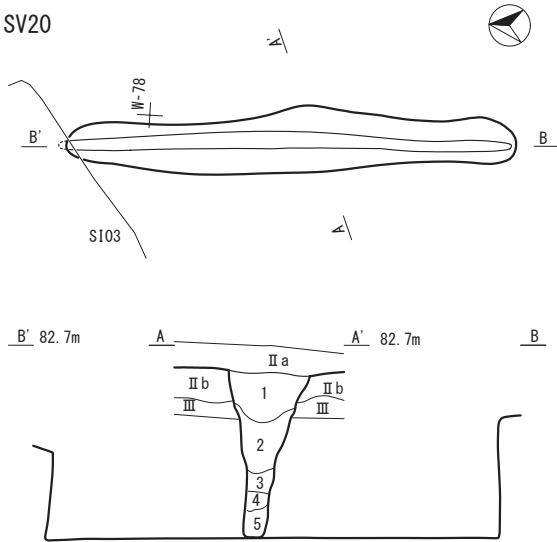
SV19



SV19 (A-A')

- 1層 10YR3/3 暗褐色土 10YR2/1黒色土粒(φ~1mm)2%、中礫軽石粒5%、南部軽石粒(φ5~15mm)10%混合
- 2層 10YR5/6 黄褐色土 10YR3/2黒褐色土2%、南部軽石粒(φ~5mm)2%混合
- 3層 10YR5/4 にぶい黄褐色土 10YR6/8明黄褐色ローム土(φ~50mm)20%混合、周壁崩落土混合層
- 4層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 10YR5/8黄褐色ローム土(φ~30mm)5%混合
- 5層 10YR5/4 にぶい黄褐色土 10YR2/2黒褐色土10%混合

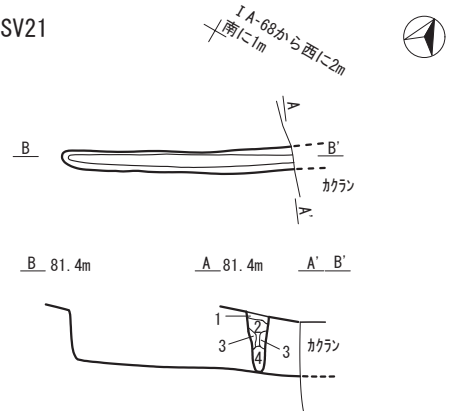
SV20



SV20 (A-A')

- 1層 10YR3/1 黒褐色土 中礫軽石粒(φ0.5~1mm)15%混合、南部軽石粒(φ5~15mm)10%混合
- 2層 10YR3/2 黒褐色土 中礫軽石粒(φ0.5~1mm)15%、壁際10YR4/6褐色土粒、下位層理10YR6/8明褐色破砕塊混入
- 3層 10YR2/2 黒褐色土 中礫軽石粒(φ0.5~1mm)混合、壁際に6/9明褐色土粒2%混入
- 4層 10YR3/4 暗褐色土 10YR4/4褐色土粒と10YR2/1黒色土30%混合
- 5層 10YR2/2 黒褐色土 10YR6/8明黄褐色ローム塊(φ~10mm)10%混合

SV21



SV21 (A-A')

- 1層 10YR2/1 黒色土 中礫軽石粒(φ0.5~1mm)30%混合
- 2層 10YR3/2 黒褐色土 10YR2/1黒色土と4/4褐色土塊混合、中礫軽石粒(φ0.5~1mm)10%混合
- 3層 10YR4/4 褐色土 第四層、周壁崩落土
- 4層 10YR3/3 暗褐色土 10YR2/1黒色土と4/4褐色土塊混合、中礫軽石粒混合

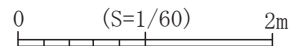


図19 溝状土坑 (5)

第5節 遺構外出土遺物

遺構外出土遺物は、土器が段ボール箱3箱、石器が5箱の出土である。飛鳥～奈良時代の遺構から出土した縄文時代の遺物についてもあわせて記載する。

土器は調査区西側のI A～I G-71～80グリッドから多くが出土している。出土層位は第Ⅲ層である。土器の主体をしめるのは縄文時代前期前葉である。

石器については、形態的特徴などから詳細な時期を特定できるものはないが、出土位置や層位は縄文土器と同様な傾向であることから、大半のものが、その時期に帰属するものと思われる。

1 縄文土器 (図20・21)

縄文時代早期 (図20-1～3)

1は胴部片で2段の爪形刺突が施される。文様から白浜式と考えられる。2は幅2mm程度の円形刺突が施される。3は内外面無文で口唇部に工具による刻目が施される。内面に指頭圧痕、ナデ痕が見られる。2及び3の土器形式は不明である。

縄文時代前期前葉 (図20-4～図21-28)

沈線を施文するもの(図20-4・5)と縄文のみ施文するもの(図20-6～図21-28)がある。4は小型の土器の底部付近の破片で沈線を斜位方向での交差施文をしている。5は小型の鉢形土器で口縁部から胴部までに斜位の沈線文が施され、胴部から底部にかけては縦位にも施されている。内面はナデが見られる。6は口縁部から胴部片、7は口縁部片、8は胴部から底部であり底部は乳房状の尖底となっている。LRが横位に回転施文されている。これらは同一グリッド及び近接しているグリッドからの出土であることから同一個体の可能性が高い。9は口縁部と胴部の一部を欠くがほぼ完形の深鉢形土器である。LRを横位、斜位に重複施文している。口縁部直下には補修孔が見られる。

図21-1～19は口縁部片である。文様はLRやRL、RLRが施文される。胎土には繊維や石英、小礫が含まれている。1は補修孔が見られる。4はRLRが施文されている。5と6は0段多条LRを横位に施文している。6は口唇部にも施文されている。11はLRを横、縦に施文している。12と16は口縁部に原体の末端の痕跡が残る。19はLRを横位と縦位に施文している。20～28は底部片であり、底部の形状は丸底に乳房状の尖底部がつく。文様はLRが横位に施文される。

縄文時代中期以降 (図21-29)

29は胴部片でLR施文後に隆帯を貼り付け、隆帯上にRL原体を縦位に回転している。

時期不明の土器 (図21-30、31)

30・31は底部片である。胎土には繊維は含まれていない。30は外面に指頭圧痕が見られ、底面に網代圧痕が観察できる。31は無文である。詳細な時期は不明であるが中期末以降の可能性はある。

2 石器 (図22・23)

剥片石器

石鏃 (図22-1～5)

5点出土している。基部の形態から無茎鏃と有茎鏃に分けられる。1～4は無茎平基鏃で1と3は

先端を破損している。5は凸基有茎鏃である。いずれも石材は珪質頁岩を素材としている。

石錐 (図22-6)

1点出土した。6は両面の調整により棒状に形状が整えられている。錐部の先端は破損している。石材は珪質頁岩を素材としている。

石匙 (図22-7)

1点出土した。7は縦長剥片を素材とし、右側縁に急角度の刃部を作り出している。石材は珪質頁岩である。

微細剥離を有する剥片 (図22-8・9)

2点出土した。8・9は右側縁に微細剥離が施されている。石材は珪質頁岩である。

両極剥片 (図22-10)

1点出土した。平面形は長形状で、断面形は端部が尖る方形である。下端部に微細剥離痕が顕著であり、楔形石器として使用された可能性がある。石材は珪質頁岩である。

剥片

図示していないが15点、70g出土した。石材は珪質頁岩を主体とするが、ほかに安山岩、粗粒玄武岩、砂岩がある。

礫石器

磨製石斧 (図22-11・12)

7点出土し、2点を図示した。他は破碎した小破片である。2点共に刃部片で、11の基部側剥離は破損後の再調整と思われる。12も基部を破損している。裏面のみ研磨されており、製作途中に破損した可能性がある。石材は11が閃緑岩、12は粗粒玄武岩である。

磨石 (図22-13～18)

13点出土し、6点を図示した。以下のように分類した。

I類 三角柱状磨石 (13)

一稜線を使用している。石材は砂岩である。

II類 側縁を使用しているもの (14～16)

一側縁を使用している。石材は14が砂岩、15・16は安山岩である。

III類 両面を使用しているもの (17・18)

両方とも顕著に摩耗している。石材は17がひん岩、18はデイサイトである。

敲石 (図23)

総数24点出土し、11点を図示した。敲打により器面のほぼ中央が変色し、わずかに凹んでいる程度のものが大半で、明確な敲打痕が形成されているものはほとんどない。以下のように細分した。

I類 片面を使用しているもの (1～5)

石材は2が砂岩、それ以外は安山岩である。

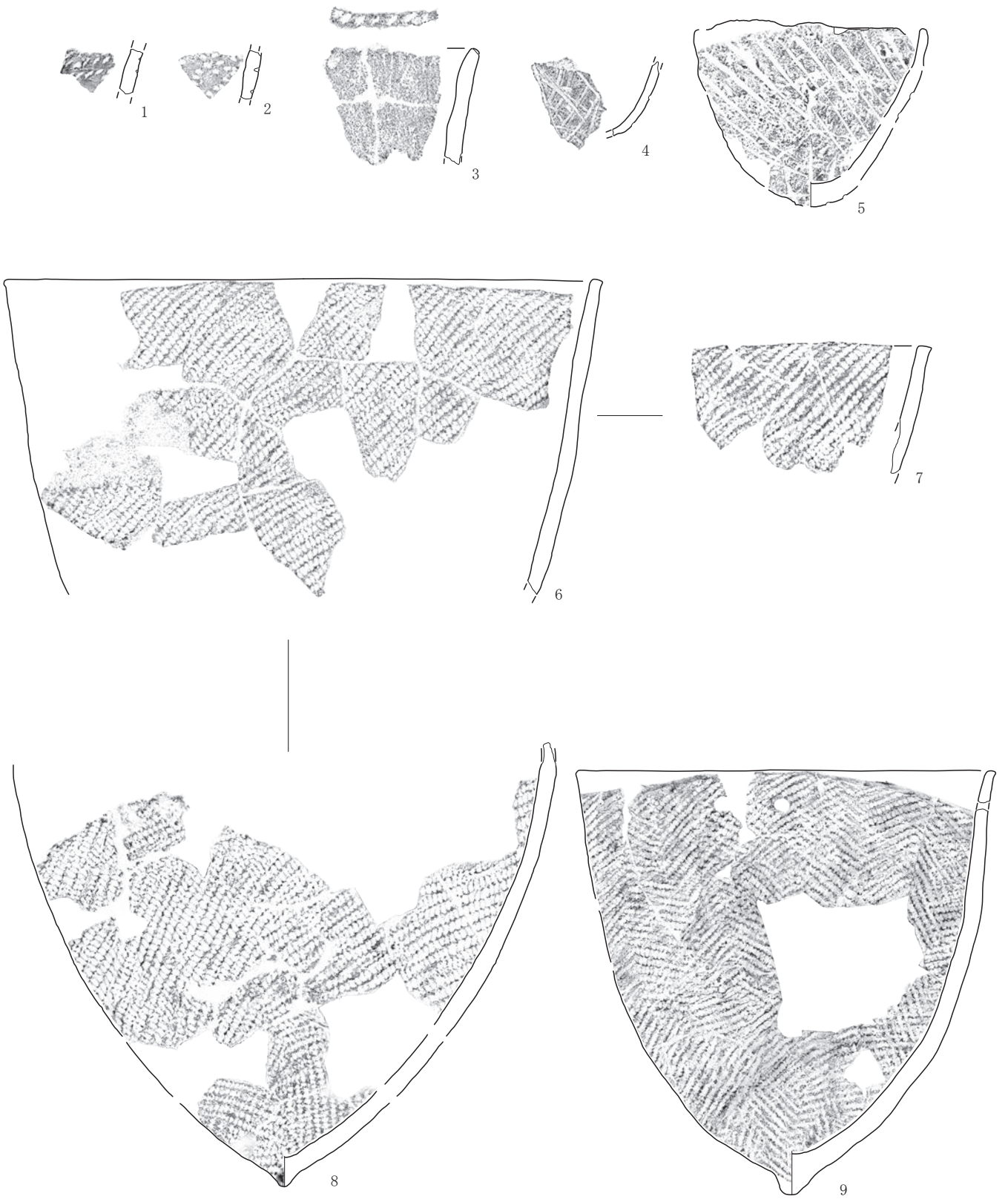
II類 両面を使用しているもの (6～9)

9は端部も使用している。石材は全て安山岩である。

III類 端部を使用しているもの (10・11)

端部に敲打痕が明瞭に見られる。石材は10がデイサイト、11が砂岩である。

(齋藤)



0 S=1/3 10cm

図20 遺構外出土土器（1）



図21 遺構外出土土器(2)



図22 遺構外出土石器 (1)



図23 遺構外出土石器(2)

第2章 自然科学分析

第1節 放射性炭素年代測定

株式会社パレオ・ラボ

1 はじめに

八戸市の毛合清水(3)遺跡から出土した炭化材について、加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定を行った。

2 試料と方法

試料は、SI01から2点とSK15から1点の合計3点である。いずれも最終形成年輪は残存しておらず、部位不明であった。調査所見による遺構の推定時期は、8世紀中葉～後葉である。

測定試料の情報、調製データは表1のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計(パレオ・ラボ、コンパクトAMS: NEC製 1.5SDH)を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

表1 測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	考古学的手法による推定時期	前処理データ	前処理
PLD-49805	遺構:SI01 層位:床面 遺物 No.SI01-C-2 試料 No.1	種類:炭化材(コナラ属コナラ節) 試料の性状:最終形成年輪以外、 部位不明 状態:dry	8世紀中葉 ～後葉	前処理前重量:41.71mg 燃焼量:5.61mg 精製炭素量:3.33mg 炭素回収量:1.00mg	超音波洗浄 有機溶剤処理:アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム:1.0 mol/L, 塩酸:1.2 mol/L)
PLD-49806	遺構:SI01 層位:床面 遺物 No.SI01-C-3 試料 No.2	種類:炭化材(コナラ属コナラ節) 試料の性状:最終形成年輪以外、 部位不明 状態:dry	8世紀中葉 ～後葉	前処理前重量:87.88mg 燃焼量:5.64mg 精製炭素量:3.34mg 炭素回収量:0.98mg	超音波洗浄 有機溶剤処理:アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム:1.0 mol/L, 塩酸:1.2 mol/L)
PLD-49807	遺構:SK15 層位:堆積土 遺物 No.SK15-C-1 試料 No.5	種類:炭化材(コナラ属コナラ節) 試料の性状:最終形成年輪以外、 部位不明 状態:dry	8世紀中葉 ～後葉	前処理前重量:77.83mg 燃焼量:5.59mg 精製炭素量:3.27mg 炭素回収量:0.99mg	超音波洗浄 有機溶剤処理:アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム:1.0 mol/L, 塩酸:1.2 mol/L)

3 結果

表2に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した¹⁴C年代、図1に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

¹⁴C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代(yrBP)の算出には、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差($\pm 1\sigma$)は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の¹⁴C年代がその¹⁴C年代誤差内に入る確率が68.27%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

表2 放射性炭素年代測定および暦年校正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年校正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に校正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-49805 試料 No.1	-26.98 \pm 0.18	1404 \pm 20	1405 \pm 20	609-619 cal AD (18.14%) 640-656 cal AD (50.13%)	605-660 cal AD (95.45%)
PLD-49806 試料 No.2	-27.62 \pm 0.17	1258 \pm 20	1260 \pm 20	686-742 cal AD (64.81%) 762-764 cal AD (1.45%) 772-774 cal AD (2.01%)	674-752 cal AD (73.39%) 757-775 cal AD (9.04%) 789-825 cal AD (13.01%)
PLD-49807 試料 No.5	-27.32 \pm 0.18	1283 \pm 20	1285 \pm 20	677-706 cal AD (32.52%) 727-730 cal AD (3.05%) 737-751 cal AD (15.49%) 758-773 cal AD (17.21%)	671-709 cal AD (39.07%) 711-774 cal AD (56.38%)

暦年校正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い (^{14}C の半減期5730 \pm 40年) を校正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年校正にはOxCal4.4 (校正曲線データ: IntCal20) を使用した。なお、1 σ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する68.27%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2 σ 暦年代

範囲は95.45%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年校正曲線を示す。

4 考察

以下、各試料の暦年校正結果のうち2 σ 暦年代範囲 (確率95.45%) に着目して結果を整理する。

SI01の試料No.1 (遺物No. SI01-C-2: PLD-49805) は、605-660 cal AD (95.45%) で、7世紀初頭～中頃の暦年代を示した。試料No.2 (遺物No. SI01-C-3: PLD-49806) は、674-752 cal AD (73.39%)、757-775 cal AD (9.04%)、789-825 cal AD (13.01%) で、7世紀後半～9世紀前半の暦年代を示した。SI01の推定時期は8世紀中葉～後葉であり、試料No.2は整合的な年代であるが、試料No.1は80年以上古い年代を示した。

SK15の試料No.3 (遺物No. SK15-C-1: PLD-49807) は、671-709 cal AD (39.07%) および711-774 cal AD (56.38%) で、7世紀後半～8世紀後半の暦年代を示した。今回の測定結果は、遺構の推定時期 (8世紀中葉～後葉) に対して整合的である。

なお、木材の場合、最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると内側であるほど古い年代が得られる (古木効果)。今回の試料は、いずれも最終形成年輪が残存しておらず、残存している最外年輪のさらに外側にも年輪が存在していたはずである。したがって、木が実際に枯死もしくは伐採されたのは、測定結果の年代よりもやや新しい時期であったと考えられる。

(パレオ・ラボAMS年代測定グループ)

伊藤 茂・加藤和浩・廣田正史・佐藤正教・山形秀樹・Zaur Lomtadze・黒沼保子)

参考文献

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51(1), 337-360.

中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の¹⁴C年代編集委員会編「日本先史時代の¹⁴C年代」: 3-20, 日本第四紀学会.

Reimer, P.J., Austin, W.E.N., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., Manning, S.W., Muscheler, R., Palmer, J.G., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Turney, C.S.M., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen, U., Capano, M., Fahrni, S.M., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A. and Talamo, S. (2020) The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP). *Radiocarbon*, 62(4), 725-757, doi:10.1017/RDC.2020.41. <https://doi.org/10.1017/RDC.2020.41> (cited 12 August 2020)

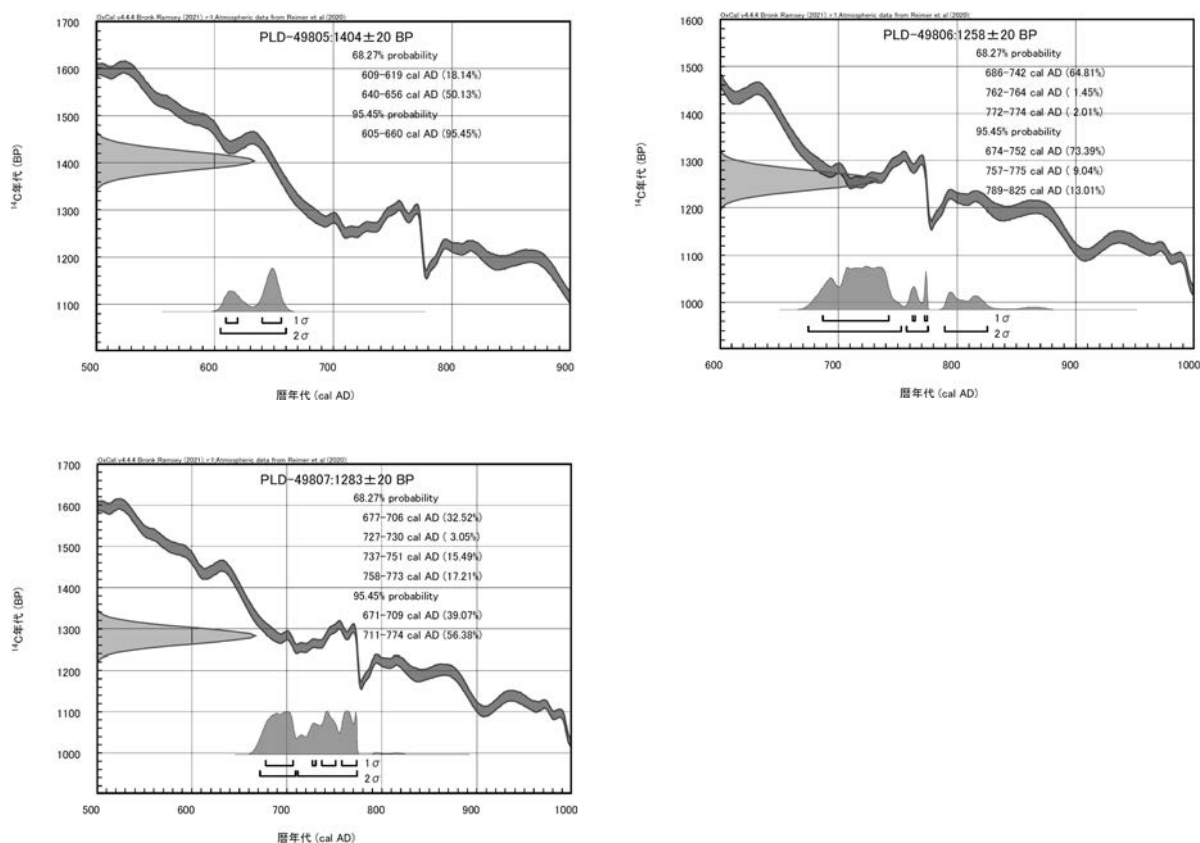


図1 暦年校正結果

第2節 炭化材の樹種同定

株式会社パレオ・ラボ

1 はじめに

八戸市の毛合清水(3)遺跡から出土した炭化材の樹種同定を行った。なお、一部の試料については、放射性炭素年代測定も行われている(第2章第1節参照)。

2 試料と方法

試料は炭化材6点で、SI01から4点とSK15から2点である。調査所見による遺構の推定時期は、いずれも8世紀中葉～後葉であり、放射性炭素年代測定でも整合的な年代が得られている。

樹種同定に先立ち、肉眼観察と実体顕微鏡観察による形状の確認と、残存年輪数および残存径の計測を行った。その後、カミソリまたは手で3断面(横断面・接線断面・放射断面)を割り出し、試料台に試料を両面テープで固定した。次に、イオンスパッタで金コーティングを施し、走査型電子顕微鏡(KEYENCE社製 VHX-D510)を用いて樹種の同定と写真撮影を行った。

3 結果

樹種同定の結果、広葉樹のコナラ属コナラ節(以下、コナラ節)が確認された。結果を付表に示す。

表1 遺構別の樹種同定結果

樹種	遺構 推定時期	SI01 8世紀中葉～後葉	SK15	合計
コナラ属コナラ節		4	2	6

以下に、同定根拠となった木材組織の特徴を記載し、走査型電子顕微鏡写真を図版に示す。

(1) コナラ属コナラ節 *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科 図版1 1a-1c (整理番号1)

大型の道管が年輪のはじめに1列程度並び、晩材部では薄壁で角張った小道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で、単列と広放射組織の2種類がある。

コナラ節は暖帯から温帯下部に分布する落葉高木で、カシワとミズナラ、コナラ、ナラガシワがある。材は全体的に重硬で、加工困難である。

4 考察

遺構別の樹種同定結果を表1に示す。SI01とSK15の炭化材は、いずれもコナラ節であった。

青森県内の遺跡において古代の住居跡から出土した炭化材では、クリやコナラ節を中心とした広葉樹が多く確認されている(伊東・山田編, 2012)。今回の分析結果もコナラ節を中心とした樹種構成であり、周辺地域の木材利用傾向と類似している。(黒沼 保子)

引用・参考文献

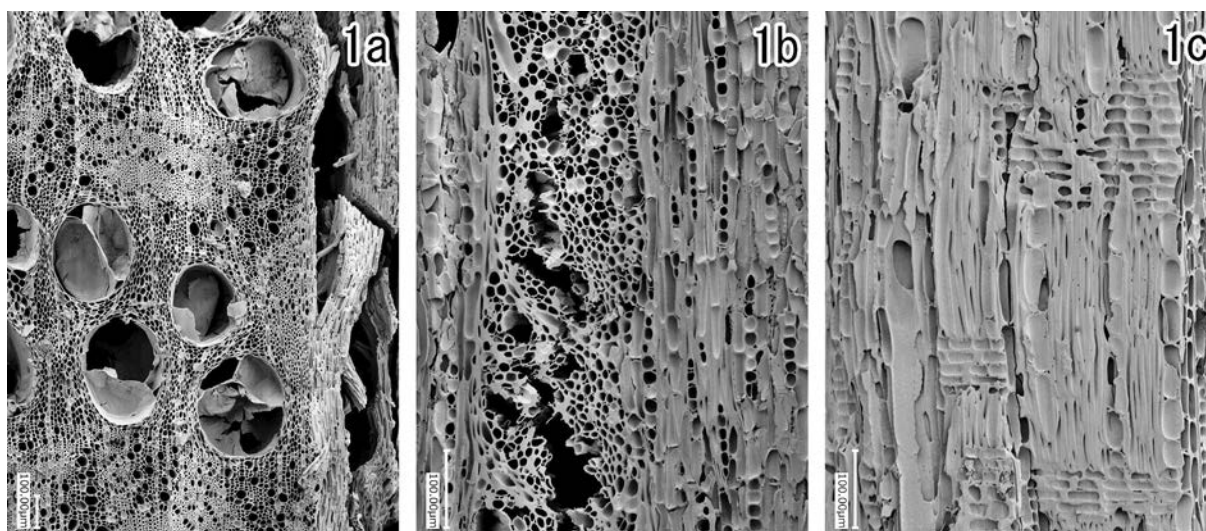
平井信二(1996)木の大本科. 394p, 朝倉書店.

伊東隆夫・山田昌久編(2012)木の考古学—出土木製品用材データベース—. 449p, 海青社.

伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和穂(2011)日本有用樹木誌. 238p, 海青社.

付表 樹種同定結果一覧

整理番号	遺構	層位	取上番号	所見	樹種	形状	残存径 (cm、最大)	年代測定 番号	推定時期
1	SI01	床面	SI01-C-2	板状	コナラ属コナラ節	破片	1.0×2.5	PLD-49805	8世紀中葉～後葉
2	SI01	床面	SI01-C-3	板状	コナラ属コナラ節	破片	2.5×1.0	PLD-49806	
3	SI01	床面	SI01-C-4	板状	コナラ属コナラ節	破片	1.3×1.3		
4	SI01	床面	SI01-C-7	板状	コナラ属コナラ節	柁目状	1.0×3.8		
5	SK15	堆積土	SK15-C-1		コナラ属コナラ節	不明	1.5×1.0?	PLD-49807	
6	SK15	1層	SK15-C-2		コナラ属コナラ節	不明	3.0×0.5?		



図版1 炭化材の走査型電子顕微鏡写真

1a-1c. コナラ属コナラ節（整理番号1） a：横断面、b：接線断面、c：放射断面

第3章 総括

毛合清水(3)遺跡では、縄文時代と飛鳥～奈良時代の遺構と遺物が検出された。以下、それらについて記述する。

1 縄文時代

土坑2基と溝状土坑21基を検出した。第1号土坑は縄文時代中期のフラスコ状土坑である。第12号土坑の堆積土中からは、ほぼ完形の縄文時代前期前葉の小型土器が出土しており、底面に検出された焼土と合わせると墓坑の可能性も考えられる。

溝状土坑は調査区内から散漫に検出しているが、特に南東斜面からの検出が多い。これら溝状土坑の主軸方向を見ると第6・8・10・12号は4基で一単位、第11号と第13号及び第9号と第14号は2基一単位で機能した可能性が考えられる。また、平坦面東側の第16号と第17号も2基で一単位と考えられるが、南東斜面の溝状土坑とは主軸方向が異なる。第13号と第14号の重複関係や南東斜面と平坦面にある溝状土坑の主軸方向の違いから、少なくとも3期の構築時期が想定される。

遺物は、縄文時代早期中葉と前期前葉、中期の土器と石器が出土した。土器の多くは、縄文時代前期前葉の土器で調査区西側のIA～IG-71～80グリッドから出土している。

石器は、大半のものが縄文時代前期前葉の土器が出土しているグリッドとほぼ同じエリアから出土していることから、同時期のものと思われる。

2 飛鳥～奈良時代

竪穴建物跡3棟と土坑2基を検出した。竪穴建物跡の規模をみると第1号竪穴建物跡は、一辺が約6m、第2号及び第3号竪穴建物跡は削平をうけているが一辺は約3mである。カマドは第1号及び第3号竪穴建物跡共に、建物跡の北側壁に作られている。第1号竪穴建物跡から検出した出入口や間仕切り溝、出入口からカマドへのびる硬化面が注目され、これらの位置関係から竪穴建物跡内での人々の動線をうかがい知ることができる。

土坑は第10号と第15号がある。第10号土坑は一辺が約3mの隅丸方形であり、土坑としたが、第2・3号と規模的な類似から竪穴遺構の可能性も考えられる。第15号土坑は第1号竪穴建物跡の南東側に近接して構築されており、同竪穴建物跡と同土坑出土の土師器甕が接合していることから、竪穴建物跡に付随して機能し、ほぼ同時期に廃絶している可能性がある。

遺物は第1号及び第3号竪穴建物跡の床面やカマド周辺、ピットから土師器の甕や坏、第15号土坑の堆積土から甕が出土している。土師器のうち、坏は口径が10cmと15cm前後のものがあり、口縁部は内湾するものと直立するものがみられる。底部は丸底で外面には段を有する。内面は黒色処理が施される。甕は長胴甕と球胴甕、小型甕があり、底部の突き出しは弱い。宇部則保による編年(宇部2013)に照らすと7世紀後葉から8世紀前葉に位置づけられる。この他、第1号竪穴建物跡からはミニチュア土器や土製紡錘車、第10号土坑からは鎌が出土している。(齋藤)

引用・参考文献

- 青森県 2005『青森県史 資料編 考古3 弥生～古代』青森県史編さん考古部会編
- 青森県 2013『青森県史 資料編 考古2 縄文後期・晩期』青森県史編さん考古部会編
- 青森県 2017『青森県史 資料編 考古1 旧石器 縄文草創期～中期』青森県史編さん考古部会編
- 青森県教育委員会 1980『長七谷地貝塚遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第57集
- 青森県教育委員会 1984『和野前山遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第82集
- 青森県教育委員会 1985『売場遺跡（第1次、第2次、第3次、第4次調査）・大タルミ遺跡』
青森県埋蔵文化財調査報告書93集
- 青森県教育委員会 1999『櫛引遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書263集
- 青森県教育委員会 2000『岩ノ沢平遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第287集
- 青森県教育委員会 2003『櫛館遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第342集
- 青森県教育委員会 2021『青森県遺跡詳細分布調査報告書33』青森県埋蔵文化財調査報告書第624集
- 八戸市 2009『新編八戸市史 考古資料編』八戸市史編纂員会編
- 八戸市 2015『新編八戸市史 通史編Ⅰ 原始・古代・中世』八戸市史編纂員会編
- 八戸市教育委員会 1980『長七谷地貝塚発掘調査報告書』八戸市埋蔵文化財調査報告第3集
- 八戸市教育委員会 1987『八戸新都市区域内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ 古宮遺跡 湯浅屋新田
遺跡(2) 丹後平遺跡(3)』八戸市埋蔵文化財調査報告書第19集
- 八戸市教育委員会 1989『毛合清水(1)・(2)遺跡』八戸市埋蔵文化財調査報告書29集
- 八戸市教育委員会 1989『八戸新都市区域内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ - 田面木平(1)遺跡 - 』
八戸市埋蔵文化財調査報告書第34集
- 八戸市教育委員会 1992『岩ノ沢平遺跡』八戸市埋蔵文化財調査報告第46集
- 八戸市教育委員会 2000『人首沢遺跡・毛合清水(3)遺跡・大仏遺跡』
八戸市埋蔵文化財調査報告書第84集
- 八戸市教育委員会 2001『酒美平遺跡Ⅱ』八戸市埋蔵文化財調査報告書第88集
- 八戸市教育委員会 2002『盲堤沢(3)遺跡』八戸市埋蔵文化財調査報告書92集
- 宇部則保 2013「古代馬淵川流域周辺の土器様相」『研究紀要』第2号 八戸市埋蔵文化財センター
是川縄文館

表2 毛合清水(3)遺跡遺構計測表

竪穴建物跡 (S1)

図	遺構名	略号	位置	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	床面積 (㎡)	周溝 (cm)		カマド 位置	主軸方向	Pit 付属施設 長軸×短軸×深さ (cm)	備考
								幅	深さ				
6~8	第1号 竪穴建物跡	SI01	Y~IB -75~77	632	617	66	30.7	6~8	5~8	北壁 中央	N-27°-W	Pit1: 29×29×66 Pit2: 31×25×28 Pit3: 31×30×71 Pit4: 33×32×47 Pit5: 35×31×83 Pit6: 28×27×29 Pit7: 37×33×83 Pit8: 15×14×25 Pit9: 27×24×36 Pit10: 70×54×30 Pit11: 24×21×27 火床面 42×37×10	
10	第2号 竪穴建物跡	SI02	IA-79・80	(254)	(220)	-	-	-	-	-	-	-	
10	第3号 竪穴建物跡	SI03	V-77・78	300	277	3	8.0	-	-	北西壁 中央	N-28°-W	Pit1: 37×35×10 Pit2: 40×34×11 Pit3: 27×24×29 Pit4: 22×17×7 Pit5: 26×23×21 Pit6: 27×22×32 火床面 39×30×3	SV20と重複

土坑 (SK)

図	遺構名	略号	位置	平面形状	開口部平面長軸 (cm)	開口部平面短軸 (cm)	底面平面長軸 (cm)	底面平面短軸 (cm)	深さ (cm)	備考
11	第1号土坑	SK01	P-64	不整円形	245	232	252	209	163	
11	第2号土坑	SK02	P-76	円形	96	90	80	76	16	
11	第3号土坑	SK03	P-75	楕円形	73	61	53	45	12	
11	第4号土坑	SK04	Q-75	長楕円形	127	88	109	57	16	
11	第5号土坑	SK05	M-77	長楕円形	68	49	52	31	17	
11	第6号土坑	SK06	L-75	楕円形	96	67	75	54	35	
11	第7号土坑	SK07	L-74・75	隅丸方形	157	140	140	126	43	
12	第8号土坑	SK08	K-71	不整楕円形	255	191	212	154	32	
12	第9号土坑	SK09	M-65	不整楕円形	113	96	78	49	98	
12	第10号土坑	SK10	M・N-68・69	隅丸方形	301	284	289	271	44	
12	第11号土坑	SK11	Q-70	長楕円形	264	151	175	120	92	
13	第12号土坑	SK12	K-73	楕円形	105	87	80	58	31	
13	第15号土坑	SK15	ID-75	隅丸長方形	198	104	185	86	30	
13	第16号土坑	SK16	IG-79	円形	101	96	65	61	37	SV16と重複
13	第17号土坑	SK17	W・X-67	隅丸長方形	138	103	113	78	32	
13	第18号土坑	SK18	Q-65	楕円形	138	116	108	91	55	
13	第19号土坑	SK19	M-70	不整楕円形	86	66	60	21	27	
13	第20号土坑	SK20	IF-74・75	楕円形	107	82	75	53	42	

溝状土坑 (SV)

図	遺構名	略号	位置	開口部長軸 (cm)	開口部短軸 (cm)	底面長軸 (cm)	底面短軸 (cm)	深さ (cm)	主軸方向	備考
15	第1号溝状土坑	SV01	O・P-75	302	92	259	7	169	N-73.3°-E	
15	第2号溝状土坑	SV02	Q-73・74	287	66	261	14	130	N-10.5°-E	
15	第3号溝状土坑	SV03	S・T-71、T-72	220	33	195	7	77	N-21.1°-E	
15	第4号溝状土坑	SV04	T-75	345	52	310	5	121	N-58.0°-W	
16	第5号溝状土坑	SV05	U・V-73	336	39	326	7	97	N-44.2°-W	
16	第6号溝状土坑	SV06	IC-69	428	78	397	13	137	N-63.5°-E	
16	第7号溝状土坑	SV07	IC・D-70	377	73	380	9	107	N-80.9°-W	
16	第8号溝状土坑	SV08	IE・F-70	402	74	408	20	167	N-66.1°-E	
17	第9号溝状土坑	SV09	ID-71	363	73	303	10	134	N-88.8°-W	

図	遺構名	略号	位置	開口部長軸 (cm)	開口部短軸 (cm)	底面長軸 (cm)	底面短軸 (cm)	深さ (cm)	主軸方向	備考
17	第10号溝状土坑	SV10	IC・D-68・69	392	100	303	13	146	N-68.9°-E	
17	第11号溝状土坑	SV11	IC-68	355	83	342	13	139	N-52.3°-E	
17	第12号溝状土坑	SV12	IF・G-68	356	93	335	8	163	N-71.0°-E	
18	第13号溝状土坑	SV13	IE-66	356	54	340	14	123	N-53.5°-E	SV14と重複
18	第14号溝状土坑	SV14	IE-66	344	55	347	12	170	N-87.7°-E	SV13と重複
18	第15号溝状土坑	SV15	ID-65・66	324	37	319	7	128	N-36.7°-E	
18	第16号溝状土坑	SV16	IG-79	339	70	324	14	142	N-66.8°-W	SK16と重複
19	第17号溝状土坑	SV17	IC-74・75	279	83	249	16	146	N-71.1°-W	
19	第18号溝状土坑	SV18	S-66	280	20	256	13	56	N-71.1°-W	
19	第19号溝状土坑	SV19	P-66~Q-65	353	38	334	12	135	N-53.3°-W	
19	第20号溝状土坑	SV20	V-77	357	53	358	9	94	N-3.77°-W	SI03と重複
19	第21号溝状土坑	SV21	Y-67	(183)	17	(177)	7	59	N-60.3°-E	

表3 土師器観察表

図	番号	種別	器種	出土位置	層位	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内面調整	外面調整	備考
9	1	土師器	坏	SI01	床	10.0	-	3.6	ミガキ、黒色処理	ミガキ	
9	2	土師器	坏	SI01	床	(13.1)	-	(5.2)	ミガキ	ミガキ	
9	3	土師器	坏	SI01	床	(14.9)	-	(5.9)	ミガキ、黒色処理	ミガキ	
9	4	土師器	高台坏	SI01	床	-	(4.7)	-	ミガキ、黒色処理	ミガキ	
9	5	土師器	甕	SI01	床 1層	12.3	5.9	12.6	ヨコナデ、ミガキ	ヨコナデ、ミガキ 底面：刻み	
9	6	土師器	甕	SI01	床	12.4	-	(15.1)	ヨコナデ、ミガキ	ヨコナデ、ミガキ	
9	7	土師器	甕	SI01	床	17.9	-	(17.4)	ヨコナデ、ミガキ	ヨコナデ、ミガキ	
9	8	土師器	甕	SI01 SK15	床 1層	17.4	-	12.6	ヨコナデ、ハケメ	ヨコナデ、ナデ、ハケメ	
9	9	土師器	甕	SI01	床 貼床	(9.5)	-	(2.9)	ヨコナデ	ヨコナデ	
9	10	土師器	甕	SI01	1層	-	-	(3.0)	ヨコナデ	ヨコナデ	
9	11	土師器	甕	SI01	床	(11.0)	-	(4.5)	ヨコナデ、ヘラナデ	ヨコナデ、ナデ	
9	12	土師器	甕	SI01	カマド部分 カクラン	-	-	(4.5)	ナデ	ヨコナデ	
9	13	土師器	甕	SI01	床	20.0	-	(3.2)	ヨコナデ	ヨコナデ	
9	14	土師器	甕	SI01	床	-	-	(3.1)	ハケメ	ハケメ	
9	15	土師器	甕	SI01	カマド 火床面	-	6.2	(7.6)	ハケメ	ナデ	支脚
9	16	土師器	球胴甕	SI01	床	(15.0)	-	(13.7)	ヨコナデ、ミガキ	ヨコナデ、ハケメ、ナデ	
9	17	土師器	球胴甕	SI01	床	-	-	(9.1)	ミガキ	ナデ	
9	18	土師器	球胴甕	SI01	床	-	6.7	(15.6)	ハケメ	ハケメ	
10	1	土師器	坏	SI03	床直 Pit2 覆土	15.9	-	(5.2)	ミガキ	ミガキ	
10	2	土師器	球胴甕	SI03	カマド部分 カクラン	-	-	(4.4)	ナデ、輪積痕	ハケメ	
14	6	土師器	甕	SK15	1層	-	(7.0)	(2.3)	ナデ	ケズリ	
14	7	土師器	甕	SK15	1層	-	(7.4)	(3.2)	ナデ	ハケメ	
14	8	土師器	甕	SK15	1層	-	(8.5)	(4.0)	ミガキ	ミガキ	

表4 土製品観察表

図	番号	種別	器種	出土位置	層位	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内面調整	外面調整	備考
9	19	土製品	ミニチュア土器	SI01	3層	2.9	2.3	1.3	ナデ	ナデ	
9	20	土製品	ミニチュア土器	SI01	カマド部分カクラン	(2.9)	(2.5)	1.5	指頭圧痕	ナデ	
9	21	土製品	紡錘車	SI01	床	-	-	2.0	-	ミガキ	

表5 鉄製品観察表

図	番号	種別	器種	出土位置	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
14	4	鉄製品	鎌	SK10	覆土	12.4	3.0	0.6	26.1	

表6 縄文土器観察表

図	番号	器種	部位	出土位置	出土層位	内面特徴	外面特徴	胎土	時期	備考
14	1	深鉢	胴部上半	SK01	確認面	ナデ	隆帯 LR縦	石英	縄文時代中期	
14	2	深鉢	胴部	SK01	確認面	ナデ	隆帯 LR縦	石英	縄文時代中期	
14	3	深鉢	胴部	SK01	1層	ナデ	沈線、RL充填		縄文時代中期	
14	5	深鉢	口縁部～底部	SK12	1層	ナデ	結束第一種 LR・RL横	繊維	縄文時代前期前葉	P-1
20	1	深鉢	胴部	IA-71	Ⅲ層	ナデ	爪形		縄文時代早期中葉	
20	2	深鉢	胴部	Q-76	Ⅲ層上面	ナデ	刺突		縄文時代早期中葉	
20	3	深鉢	口縁部	S-71	Ⅱ層下位	ナデ	無文 口唇部刻み目	小礫	縄文時代早期中葉	
20	4	深鉢	胴部下半	IA-73	Ⅲ層	ナデ	沈線		縄文時代前期前葉	
20	5	深鉢	口縁部～底部	IB-74 IC-73・74 ID・F-74	Ⅲ層	ナデ	沈線	繊維	縄文時代前期前葉	
20	6	深鉢	口縁部～胴部	IB-73	Ⅲ層	ナデ	LR横	繊維・石英	縄文時代前期前葉	
20	7	深鉢	口縁部	IB-73	Ⅲ層	ナデ	LR横	繊維・石英	縄文時代前期前葉	
20	8	深鉢	胴部～底部	IA-72 IB-73 IC-73 ID-74	Ⅲ層	ナデ	LR横	繊維・石英	縄文時代前期前葉	
20	9	深鉢	口縁部～底部	IB-73・74 IB-76 IC-73・76 IC・D-75 ID-74	Ⅲ層 Ⅱ層 Ⅲ層 攪乱8 Ⅲ層	ナデ	LR横 斜 補修孔		縄文時代前期前葉	
21	1	深鉢	口縁部	IC-73・74 ID-74	Ⅲ層	ナデ	LR横 補修孔	繊維・石英	縄文時代前期前葉	
21	2	深鉢	口縁部～胴部	IG-77・78	Ⅲ層	ナデ	LR横	繊維・浮石	縄文時代前期前葉	
21	3	深鉢	口縁部	IG-71	Ⅲ層	ナデ	RL横	繊維・石英	縄文時代前期前葉	
21	4	深鉢	口縁部～胴部	SK15 ID-75 IE-79	底面 Ⅲ層	ナデ	RLR横	繊維	縄文時代前期前葉	P-17
21	5	深鉢	口縁部	IF-77	Ⅲ層	ナデ	LR横 (0段多条)	繊維	縄文時代前期前葉	
21	6	深鉢	口縁部	SI01 IB-76 IF-75	床、1層 Ⅲ層	ナデ	LR横 (0段多条)	繊維	縄文時代前期前葉	P-11
21	7	深鉢	口縁部	IG-75・76	Ⅲ層	ナデ	LR横	小礫	縄文時代前期前葉	
21	8	深鉢	口縁部	IG-71	Ⅲ層	ナデ	LR横	繊維	縄文時代前期前葉	
21	9	深鉢	口縁部	IF-75	Ⅲ層	ナデ	LR縦 補修孔	繊維	縄文時代前期前葉	
21	10	深鉢	口縁部	IF-79	Ⅲ層	ナデ	LR横	小礫	縄文時代前期前葉	
21	11	深鉢	口縁部	IC-79・80	Ⅲ層	ナデ	LR・RL横	繊維・浮石	縄文時代前期前葉	
21	12	深鉢	口縁部	IE-75	Ⅲ層	ナデ	RLR横	石英	縄文時代前期前葉	
21	13	深鉢	口縁部	IG-71	Ⅲ層	ナデ	LR横	繊維	縄文時代前期前葉	
21	14	深鉢	口縁部	IE-74	Ⅲ層	ミガキ	LR横	繊維	縄文時代前期前葉	
21	15	深鉢	口縁部	IC-75	Ⅲ層	ナデ	RLR横 指頭圧痕	繊維	縄文時代前期前葉	
21	16	深鉢	口縁部	IC-75	Ⅲ層	ナデ	LR横	繊維・浮石	縄文時代前期前葉	
21	17	深鉢	口縁部	IE-75	Ⅲ層	ミガキ	LR横	繊維	縄文時代前期前葉	

図	番号	器種	部位	出土位置	出土層位	内面特徴	外面特徴	胎土	時期	備考
21	18	深鉢	口縁部	IF-77	Ⅲ層	ナデ	LR横		縄文時代 前期前葉	
21	19	深鉢	口縁部	ID-78	Ⅲ層	ナデ	LR横 斜	繊維	縄文時代 前期前葉	
21	20	深鉢	胴部～底部	IE・F-77 IG-74	Ⅲ層	ナデ	LR横	繊維・石英	縄文時代 前期前葉	
21	21	深鉢	底部	IF-79・80	Ⅲ層	ナデ	LR横		縄文時代 前期前葉	
21	22	深鉢	底部	IE-75・76	Ⅲ層	ナデ	LR横	繊維	縄文時代 前期前葉	
21	23	深鉢	底部	ID-73 IE-71	Ⅲ層	ナデ	LR横	繊維	縄文時代 前期前葉	
21	24	深鉢	底部	ID-77	Ⅲ層	ナデ	LR横	繊維	縄文時代 前期前葉	
21	25	深鉢	底部	IB-74	Ⅲ層	ナデ	LR横		縄文時代 前期前葉	
21	26	深鉢	底部	IB-72	Ⅲ層	ナデ	LR横	繊維	縄文時代 前期前葉	
21	27	深鉢	底部	IC-73	Ⅲ層	ナデ	LR横	小礫	縄文時代 前期前葉	
21	28	深鉢	底部	IC-74	Ⅲ層	ナデ	LR横		縄文時代 前期前葉	
21	29	深鉢	胴部	L-67	Ⅲ層	ナデ	隆帯 RL縦	砂	縄文時代 中期以降	
21	30	深鉢	底部	T-66	I層	ナデ	指頭圧痕 底面：網代圧痕	石英	縄文時代	
21	31	深鉢	底部	P-73	II層	ナデ	ナデ		縄文時代	

表7 石器観察表

図	番号	出土位置	層位	器種	細分	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石材	備考
22	1	ID-73	Ⅲ層上位	石鏃		17.1	12.8	2.9	0.6	珪質頁岩	
22	2	ID-74	Ⅲ層	石鏃		18.9	11.8	3.0	0.6	珪質頁岩	
22	3	IC-77	Ⅲ層	石鏃		33.2	14.5	4.6	2.1	珪質頁岩	
22	4	SI01	I層	石鏃		40.5	12.6	3.8	1.8	珪質頁岩	
22	5	Q-71	II層下位	石鏃		31.2	12.5	6.1	1.6	珪質頁岩	
22	6	K-67	Ⅲ層下位	石錐		42.2	8.2	6.1	2.0	珪質頁岩	
22	7	IA-79	Ⅲ層	石匙		62.0	22.6	11.6	3.5	珪質頁岩	
22	8	IA-75	Ⅲ層	微細剥離を有する剥片		54.3	32.5	12.8	18.2	珪質頁岩	
22	9	IC-75	Ⅲ層	微細剥離を有する剥片		39.6	31.9	9.3	7.1	珪質頁岩	
22	10	ID-74	Ⅲ層	両極剥片		23.1	12.4	9.0	2.9	珪質頁岩	
22	11	ID-76	Ⅲ層	磨製石斧		89.9	48.1	25.6	180.9	閃緑岩	
22	12	IB-74	Ⅲ層	磨製石斧		(81.9)	46.8	26.8	162.9	粗粒玄武岩	
22	13	IE-75	Ⅲ層	磨石	I	149.6	61.7	64.5	727.7	砂岩	三角柱状磨石
22	14	ID-76	Ⅲ層	磨石	II	101	57.9	26.5	201.5	砂岩	
22	15	IB-76	Ⅲ層	磨石	II	126.7	76	56.7	605.7	安山岩	
22	16	IF-76	Ⅲ層	磨石	II	122.5	79.4	34.6	451.7	安山岩	
22	17	IE-73	Ⅲ層	磨石	III	92.5	87	47.2	556.0	ひん岩	
22	18	IE-75	Ⅲ層	磨石	III	120.4	94.2	50	834.2	デイサイト	
23	1	IG-79	Ⅲ層	敲石	I	103.7	71.3	53.2	512.6	安山岩	
23	2	IF-77	Ⅲ層	敲石	I	103.3	93.2	31.5	437.3	砂岩	
23	3	IG-78	Ⅲ層	敲石	I	108.5	89.3	74	988.0	安山岩	
23	4	IF-71	Ⅲ層	敲石	I	71.6	57.3	31.4	199.3	安山岩	
23	5	ID-75	Ⅲ層	敲石	I	81.9	61.5	41.4	260.5	安山岩	
23	6	R-68	I層	敲石	II	84.5	66.9	29.9	215.5	安山岩	
23	7	IB-75	Ⅲ層	敲石	II	73.6	63.2	46.5	272.0	安山岩	
23	8	IE-76	Ⅲ層	敲石	II	101.9	87	35.6	455.0	安山岩	
23	9	IE-78	Ⅲ層	敲石	II	80.4	58.6	46.1	265.8	安山岩	
23	10	ID-76	Ⅲ層	敲石	III	70.7	63.2	42.5	218.7	デイサイト	
23	11	ID-73	Ⅲ層	敲石	III	134	80.9	43	560.6	砂岩	



調査区 完掘(東→)



基本土層(東→)

写真1 調査区・基本土層



第1号竖穴建物跡 完掘(南東→)



第1号竖穴建物跡 土層(南→)



第1号竖穴建物跡 カマド 完掘(南東→)



第1号竖穴建物跡 カマド 土層(南西→)

写真2 第1号竖穴建物跡(1)



第1号竖穴建物跡 カマド煙道 土層(南西→)



第1号竖穴建物跡 火床面 断ち割り(南西→)



第1号竖穴建物跡 炭化材・遺物出土(東→)



第1号竖穴建物跡 北西隅 遺物出土(北東→)



第1号竖穴建物跡 北東隅 遺物出土(南→)

写真3 第1号竖穴建物跡(2)



第2号竖穴建物跡 土層(南東→)



第2号竖穴建物跡 完掘(南東→)



第3号竖穴建物跡 完掘(南→)



第3号竖穴建物跡 カマド火床面 断ち割り(南→)



第3号竖穴建物跡 掘方 断ち割り(南→)

写真4 第2・3号竖穴建物跡



第1号土坑 土層(東→)



第1号土坑 完掘(南東→)



第2号土坑 土層(南→)



第2号土坑 完掘(南→)



第3号土坑 土層(南→)



第3号土坑 完掘(南→)



第4号土坑 土層(南→)



第4号土坑 完掘(南→)

写真5 土坑(1)



第5号土坑 土層(南→)



第5号土坑 完掘(南→)



第6号土坑 土層(南→)



第6号土坑 完掘(南→)



第7号土坑 掘方断ち割り(南→)



第7号土坑 完掘(南→)



第8号土坑 土層(南→)



第8号土坑 完掘(南→)

写真6 土坑(2)



第9号土坑 土層(東→)



第9号土坑 完掘(東→)



第10号土坑 土層(西→)



第10号土坑 完掘(西→)



第11号土坑 土層(北西→)



第11号土坑 完掘(北西→)



第12号土坑 土層(南東→)



第12号土坑 遺物出土(北西→)

写真7 土坑(3)



第12号土坑 遺物出土(拡大)(西→)



第12号土坑 焼土 検出(南東→)



第12号土坑 焼土 断ち割り(南西→)



第12号土坑 完掘(南東→)



第15号土坑 土層(南→)



第15号土坑 土層(東→)



第16号土坑 土層(南東→)



第16号土坑 完掘(北西→)

写真8 土坑(4)



第17号土坑 土層(北東→)



第17号土坑 完掘(南東→)



第18号土坑 土層(南東→)



第18号土坑 完掘(南東→)



第19号土坑 土層(西→)



第19号土坑 完掘(西→)



第20号土坑 土層(北東→)



第20号土坑 完掘(北東→)

写真9 土坑(5)



第1号溝状土坑 土層(北東→)



第2号溝状土坑 土層(南西→)



第3号溝状土坑 土層(南西→)



第1号溝状土坑 完掘(北東→)



第2号溝状土坑 完掘(南西→)



第3号溝状土坑 完掘(南西→)

写真10 溝状土坑 (1)



第4号溝状土坑 土層(南東→)



第5号溝状土坑 土層(南東→)



第6号溝状土坑 土層(北東→)



第4号溝状土坑 完掘(南東→)



第5号溝状土坑 完掘(南東→)



第6号溝状土坑 完掘(北東→)

写真11 溝状土坑(2)



第7号溝状土坑 土層(東→)



第8号溝状土坑 土層(東→)



第9号溝状土坑 土層(東→)



第7号溝状土坑 完掘(東→)



第8号溝状土坑 完掘(東→)



第9号溝状土坑 完掘(東→)

写真12 溝状土坑 (3)



第10号溝状土坑 土層(北東→)



第11号溝状土坑 土層(北東→)



第12号溝状土坑 土層(南西→)



第10号溝状土坑 完掘(北東→)



第11号溝状土坑 完掘(北東→)



第12号溝状土坑 完掘(南西→)

写真13 溝状土坑(4)



第13・14号溝状土坑 土層(西→)



第13号溝状土坑 土層(西→)



第14号溝状土坑 土層(西→)



第13・14号溝状土坑 完掘(南西→)

写真14 溝状土坑(5)



第15号溝状土坑 土層(南西→)



第16号溝状土坑 土層(南東→)



第17号溝状土坑 土層(南東→)



第15号溝状土坑 完掘(南西→)



第16号溝状土坑 完掘(北東→)



第17号溝状土坑 完掘(南東→)

写真15 溝状土坑(6)



第18号溝状土坑 土層(南東→)



第20号溝状土坑 土層(南東→)



第19号溝状土坑 土層(南東→)



第18号溝状土坑 完掘(南東→)



第20号溝状土坑 完掘(南東→)



第21号溝状土坑 土層・完掘(南西→)

写真16 溝状土坑(7)



調査区東側 調査状況(西→)



調査区中央 調査状況(西→)



調査区南側 調査状況(東→)



I B・C-73・74グリッド 調査状況(南東→)



I E・F-75~77グリッド 調査状況(北→)



I G-78グリッド 調査状況(北→)

写真17 調査状況

第 1 号竖穴建物跡



写真18 第 1 号竖穴建物跡出土遺物

第3号竖穴建物跡



图10-1



图10-2

第1号土坑



图14-1



图14-2



图14-3

第12号土坑



图14-5

第10号土坑



图14-4

第15号土坑



图14-6



图14-7



图14-8

遺構外



图20-1



图20-2



图20-3



图20-4

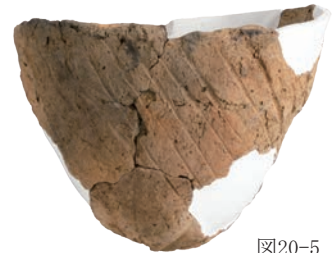


图20-5



图20-6



图20-7



图20-8

写真19 第3号竖穴建物跡、第1・10・12・15号土坑、遺構外出土遺物(1)



图20-9



图21-1



图21-2



图21-3



图21-4



图21-5

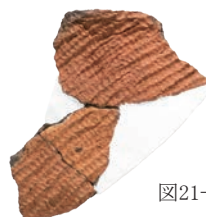


图21-6



图21-7



图21-8



图21-9



图21-10



图21-11



图21-12



图21-13



图21-14



图21-15



图21-16

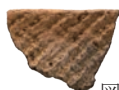


图21-17



图21-18



图21-19



图21-20



图21-21



图21-22



图21-23



图21-24



图21-25



图21-26



图21-27



图21-28



图21-29



图21-30



图21-31

写真20 遺構外出土遺物(2)



写真21 遺構外出土遺物(3)

第3編 北熊ノ沢(2)遺跡

第1章 検出遺構と出土遺物

第1節 概要

北熊ノ沢(2)遺跡の調査区は、工事用幅杭No. 203～210の範囲に位置する(図2)。調査区南側の範囲は当初、東側の杭No. 209と西側の杭No. 210とを結んだラインまでとしていたが、調査区南東壁で貝殻の堆積を確認したため(写真64下段)、南東斜面にトレンチを設定し、人力で掘り下げたところ、遺構・遺物を検出したため、東側も調査範囲を杭No. 210まで拡張することとした。

調査区北半は、北東から南西へ傾斜する標高57～69mの斜面地で、縄文土器や土師器、石器がわずかに出土したのみで、遺構は分布していない。南半の標高56～57mにかけては、北東から南西に向かって舌状に延びる平坦地が広がる。平坦地は、後世の区画溝と思われる溝や、攪乱により一部遺構が破壊されていたが、残存状況は概ね良好であった。平坦地の西側及び南東側は再び斜面地となるが、西側の方が傾斜がやや緩やかである。

遺構は竪穴建物跡9棟、掘立柱建物跡4棟、土坑44基、溝状土坑26基、焼土遺構9基、貝殻集中地点3か所、ピット15基を検出した(図24)。平安時代の遺構は竪穴建物跡、掘立柱建物跡、土坑があるが、すべてこの平坦地及び西側の緩斜面に構築されている。縄文時代の遺構は円形の落とし穴、フラスコ状土坑、溝状土坑、貝殻集中地点がある。円形の落とし穴は平坦地に分布する一方、溝状土坑は標高58m付近の斜面裾に分布するものと、西側緩斜面の標高55～57mの範囲で等高線に沿って分布するものがある。調査区西側隣接地で、過去に八戸市教育委員会が行った発掘調査でも、同様に等高線に沿って並ぶ溝状土坑を検出している(八戸市教委 2013)。調査区南東斜面は標高50～56mの斜面で、円形の土坑が分布するほか、標高53.5m前後で第3号貝殻集中地点を検出した。出土遺物から、縄文時代早期中葉～前期初頭、後期～晩期の活動が想定される。全体的に黒色土の堆積が薄く、中礫軽石は基本土層では確認できず、いくつかの遺構覆土中で確認できたのみであった。

遺物は、縄文時代の土器・石器・土製品・石製品、平安時代の土器・石器・土製品・石製品・鉄製品・鉄生産関連遺物が計40箱出土した。なお、平安時代の遺構から出土した縄文時代の遺物については、原位置を失っているとの判断から遺構外出土遺物として扱うこととした。

鉄生産関連遺物として取り上げた遺物は、洗浄後、タジマツール製のピックアップMを用いて磁着確認を行い、KDS社製のMEATL CHECKER MR-50によってメタル度を確認した。メタル度については、鉄関連遺物の分析評価研究グループ2005『鉄関連遺物の分析評価に関する研究報告会』を参考とし、L(●)、M(◎)、H(○)、なしに分類した。鉄滓は、形状やメタル度を元に、次のとおり分類した。**【腕形鍛冶滓】** 炉内の凹みに残って腕形に固結した滓。**【鍛冶滓】** 鍛冶工程で生成した滓で、腕形以外の形状のものや、小割されて分類が困難なもの。**【含鉄腕形鍛冶滓・含鉄鍛冶滓】** 腕形鍛冶滓・鍛冶滓の内、磁着反応がありメタル度がH以上のもの。

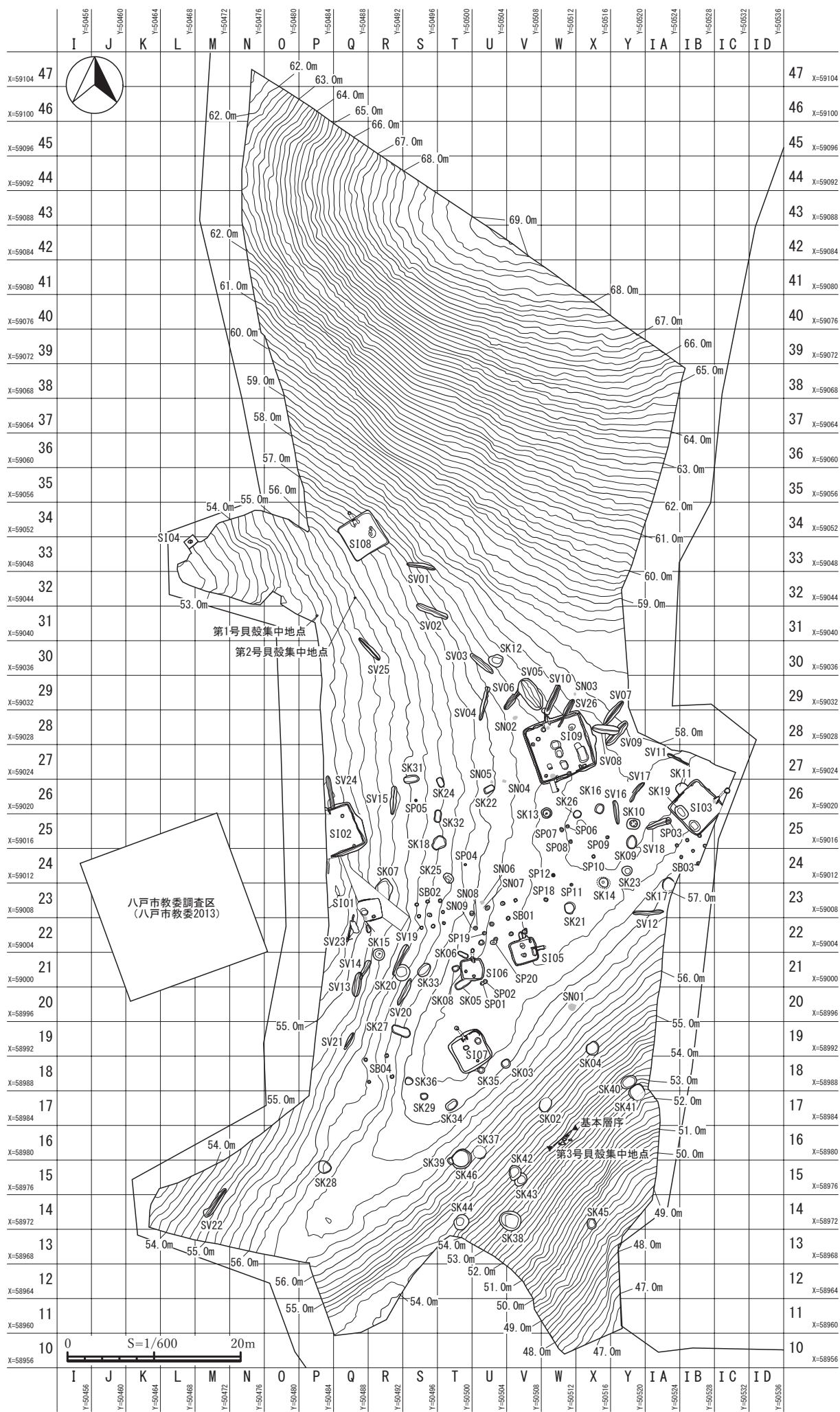


图24 北熊ノ沢 (2) 遺跡 遺構配置図

第2節 竪穴建物跡

竪穴建物跡は計9棟検出した。土坑や掘立柱建物跡と重複する事例はあるものの、竪穴建物同士で重複するものはない。堆積土中に十和田 a テフラのみを含むものが3棟 (SI01・SI02・SI03)、白頭山- 苫小牧テフラのみを含むものが1棟 (SI07)、十和田 a テフラ・白頭山- 苫小牧テフラ両方を含むものが1棟 (SI09) ある。若干の時期差はあるものの、いずれも白頭山- 苫小牧テフラの降下前には廃絶されたと考えられる。調査区東西両側には平坦な地形が延びており、まだ数棟の竪穴建物跡が埋蔵されている可能性が高い。

竪穴建物跡の計測や分類は、北東北古代集落遺跡研究会の竪穴集成要項の基準に準拠し (北東北古代集落遺跡研究会2014: 6-8)、属性を表9にまとめた。

建物規模の分類は、八木光則氏による分類に準拠し (八木2010: 68)、検出面での住居規模の縦横軸の長さに乗じた面積を基準とし、以下のように分類した。

超大形: 60㎡以上 特大形: 40~60㎡ 大形: 25~40㎡ 中形: 15~25㎡ 小形: 15㎡以下

第1号竪穴建物跡 (SI01、図25~27、写真22・23・66)

[位置・確認] Q・R-22・23グリッド、標高55.0~55.3mの緩斜面に位置し、第IV層中で確認した。重複する遺構はないが、西側が後世の攪乱を受けているほか、北東部は試掘調査トレンチにより堆積土の一部が消失している。

[規模・平面形] 平面形は南北長257cm、東西長 (235) cmの隅丸方形で、床面積は (5.2) ㎡である。検出面から床面までの深さは最大49cmで、壁は開き気味に立ち上がる。主軸方向は、N-160°-Eである。

[床面・壁溝] 東側約4分の1は地山をそのまま床面とし、残りの範囲は掘方埋土によってほぼ平坦に整えられている。掘方は深さ10cm程度で、北側は建物焼失時の影響により被熱している。壁溝は検出できなかった。

[柱穴] 検出できなかった。

[炭化材] 北西側の床面で、建物焼失に伴う炭化材や焼土を検出し、建築部材・屋根材と思われる炭化材8点の樹種同定を行った (第2章第5節)。建築部材はクリ1点、コナラ属コナラ節6点を検出した。屋根材と思われる草本類1点は、焼土に挟まれた状態で出土したため、草本類を葺いた後に土で覆った構造であったと考えられるが、植物組織を確認することはできなかった。

[カマド] 南壁西寄りで見出した。攪乱により煙道及び煙出坑の上部を破壊されている。残存する煙道底部が床面より40cmほど低くなることから、地下式であったと考えられる。火床面の範囲は長軸52cm×短軸40cmの楕円形、約8cmの厚さで被熱している。袖は確認できなかったが、火床面の東側で人頭大の軽石が出土しており、袖石もしくは袖の芯材であった可能性がある。煙出坑の底面よりやや上からチャートの自然礫が、2層中から土師器片 (図26-7) のほか、須恵器の大甕破片 (図27-5) が折り重なるように出土した (写真23左下)。5層にロームとの混合土が堆積していることから、カマドの廃絶に際して、煙出坑にチャートの自然礫を置いた後に、ある程度人為的に埋め戻し、その上に大甕破片を置いたという行為が想定される。

[その他の施設] 土坑1基、ピット1基を検出した。いずれも建物床面で検出したが、直上に廃絶時の焼失に伴う焼土や炭化材、遺物の散布が確認されていることから、本遺構の機能時にはすでに埋没していたと考えられる。

[堆積土] 9層に分層した。1～8層は黒褐色土を主体とした自然堆積で、3層中に火山灰を層状に含む。火山灰は分析の結果、十和田aテフラに帰属すると推定される(第2章第7節)。9層は床面直上の層で、炭化材や焼土を面的に含み、建物廃絶時の焼失行為による堆積と考えられる。

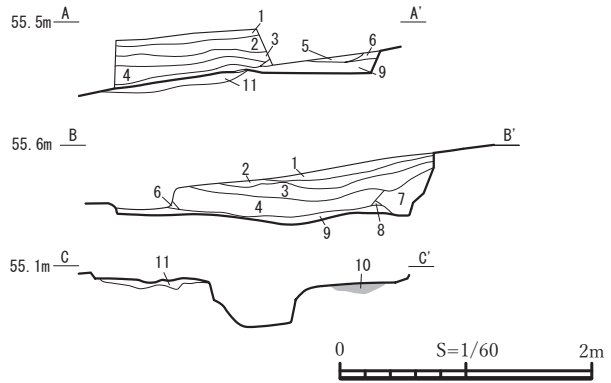
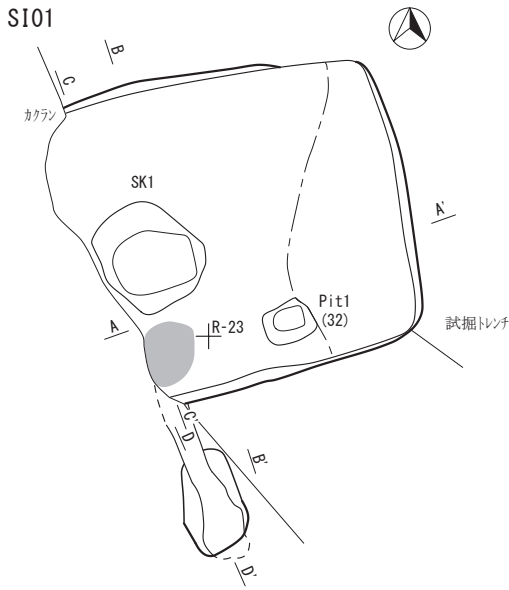
[出土遺物] 堆積土中から土師器2,554g、須恵器727g、土製品1点、石製品1点、鉄製品4点、石器1,725g、縄文土器2,534g、自然礫7,900gが出土した。土師器甕は胴部が丸みを帯びるものと、直立気味のものがある。いずれも外面にススの付着や、被熱による赤色化が確認でき、煮炊き調理に用いられたと考えられる。図26-1・7、図27-1は、ナデ調整の後、仕上げにミガキ調整を施している。そのほかは、外面ヘラケズリ、内面ヘラナデによる調整を基本とする。底部はヘラ切りにより作出している(図27-2・3)。図26-2は、直立気味の胴部をもつ甕で、外面にススが付着している。SK26出土遺物と接合した。図26-5はSI09出土遺物と接合した。図27-4は、ロクロ成形による土師器坏、外面に貼瘤を持つが、装飾であるかは不明である。内面は丁寧な磨きが施されて光沢を持ち、黒色処理がなされていた可能性がある。前述のカマドから出土した須恵器片は大甕の胴部破片である(図27-5)。須恵器はこのほか、ロクロ成形で外面ヘラケズリを施した壺の底部が出土している(図27-6)。底面はヘラ切りにより作出し、周囲に砂粒が付着している。還元焼成が不十分だったためか、赤褐色を呈する。図27-7は、スサを多量に含む焼成粘土塊である。炉壁の可能性があるが、被熱の痕跡は確認できない。図27-8は、手鎌である。一端に目釘穴が確認でき、装着していたと思われる木製用具の痕跡が残る。図27-9～11は、「コ」の字状の棒状鉄製品で、3つ重なったまま錆で癒着した状態で出土した。いずれも断面長方形で両端を曲げて内湾させている。図27-11は末端に引きちぎったような痕跡があり、鋸等のように先端を尖らせてはいない。そのため、これらは鉄素材として持ち込まれ、建物の一角に重ねて保管していたものと考えられる。図27-12は砂岩製の砥石である。鉄製品の研磨に使われたとみられる線条痕が一部に残る。図27-13はデイサイト製の石製品である。先端部の両面が研磨されており、磨製石斧未製品の可能性もある。自然礫は前述のカマド煙出坑から出土した礫と同じチャートが他に3点、軽石が1点床面から出土している。

[小結] 出土遺物や土層堆積状況から、9世紀後葉～10世紀初頭の小型の竪穴建物跡である。建物の廃絶に際し、カマドを破壊し、建物を焼失している。床直及び4層出土の炭化材年代測定結果はそれぞれ690-880 cal AD (2 σ)、892-991 cal AD (2 σ)であり、考古学的所見と矛盾しない(第2章第2節)。

第2号竪穴建物跡 (SI02、図28～30、写真24・25・67)

[位置・確認] Q-24～26グリッド、標高54.7～55.2mの緩斜面に位置し、第IV層中で確認した。西側約3分の1は調査区外へ延びる。第24号溝状土坑と重複し、本遺構が新しい。また、南西側の一部で後世の攪乱を受けており、上端の一部が消失している。

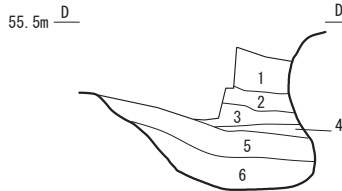
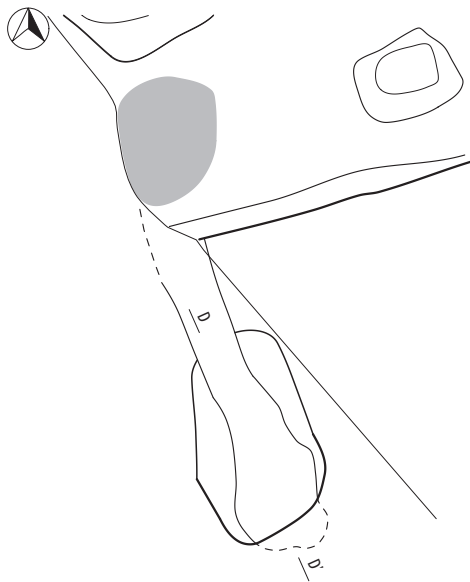
[規模・平面形] 平面形は南北長583cm、東西長(434)cmの隅丸方形で、床面積は(19.7)m²である。検出面から床面までの深さは最大90cmで、壁は開き気味に立ち上がる。建物の主軸方向は、N-23°-Wである。



SI01 (A-A'・B-B'・C-C')

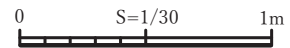
- 1層 10YR 1.7/1 黒色土 浮石1%
- 2層 10YR 2/3 黒褐色土 浮石1%、十和田aテフラ1%
- 3層 10YR 2/3 黒褐色土 浮石1%、十和田aテフラ40% (層全体に満遍なく堆積)
- 4層 10YR 3/3 暗褐色土 浮石5%
- 5層 10YR 2/3 黒褐色土 浮石1% (東側に厚く堆積)
- 6層 10YR 3/4 暗褐色土 ローム混じりの土
- 7層 10YR 3/4 暗褐色土 浮石3% (南側に厚く堆積)
- 8層 10YR 3/4 暗褐色土 浮石5%、根株による攪乱土
- 9層 10YR 3/1 黒褐色土 浮石5%、底面付近で炭化物・焼土が面的に堆積、床面直上か
- 10層 5YR 5/8 暗赤褐色土 カマド火床面
- 11層 10YR 4/4 褐色土 10YR 2/3黒褐色土、10YR 5/6黄褐色土の混じった土、掘方埋土

SI01カマド



SI01カマド (D-D')

- 1層 10YR 3/3 暗褐色土 黄褐色浮石1%
- 2層 10YR 4/3 にぶい黄褐色土 天井崩落土含む、焼土をブロック状に含む、黄褐色ローム10% (壁際に堆積)
- 3層 10YR 3/3 暗褐色土 天井崩落土含む、黄褐色ローム1%
- 4層 10YR 6/6 明黄褐色土 黄褐色浮石層 (壁崩落土)、褐灰色の砂3%
- 5層 10YR 2/2 黒褐色土 黄褐色ローム5%、焼土1%
- 6層 10YR 5/8 黄褐色土 浮石層、黒色土混じる



SI01遺物出土状況

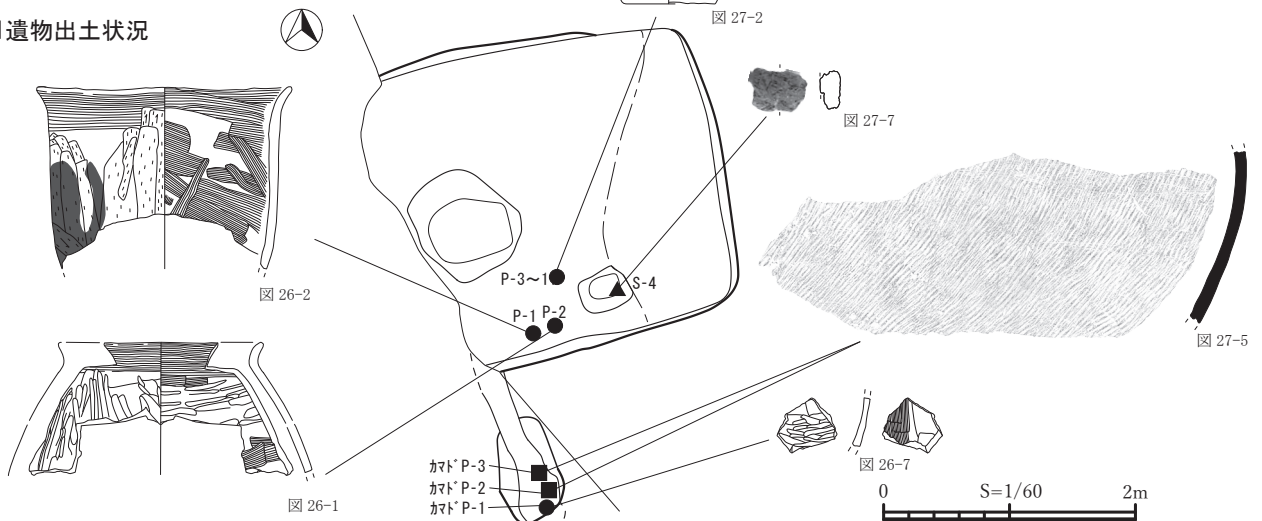
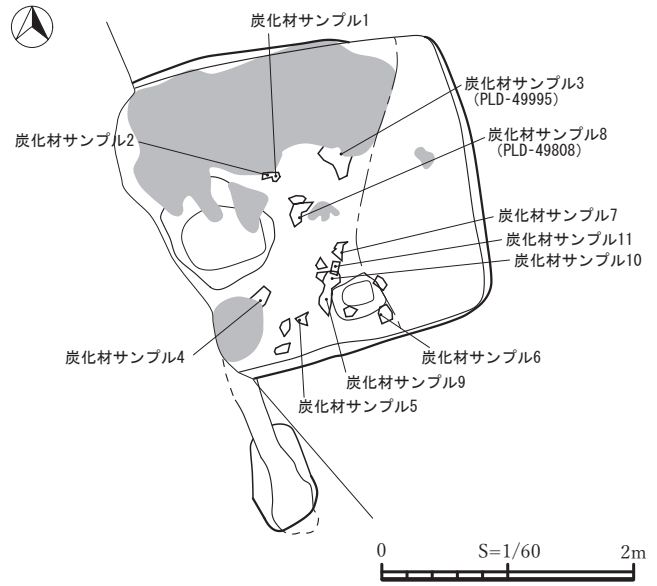


図25 第1号竪穴建物跡 (1)

SI01火山灰検出状況



SI01炭化材・焼土検出状況



SI01 土師器

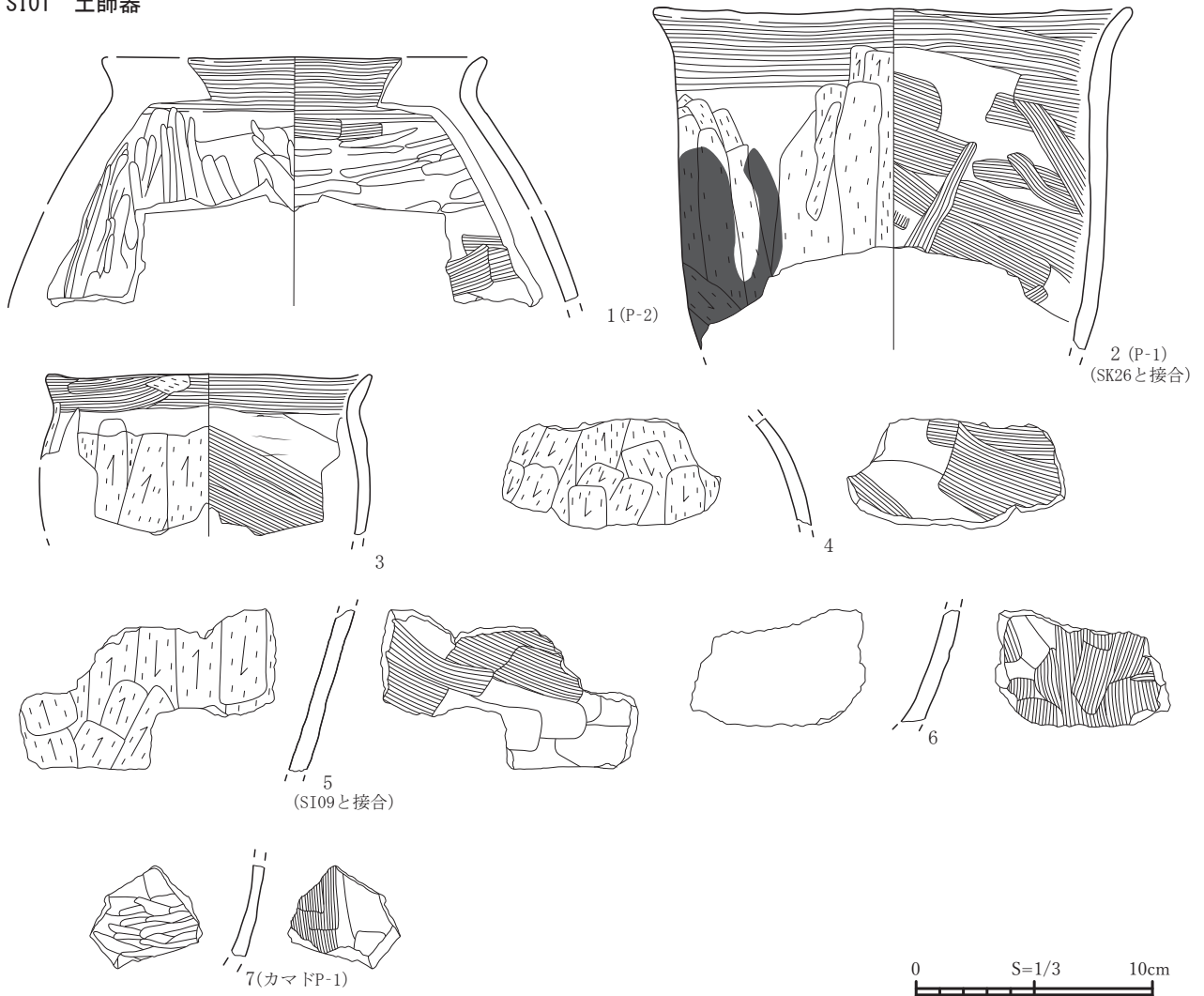


図26 第1号竪穴建物跡(2)・第1号竪穴建物跡出土遺物(1)

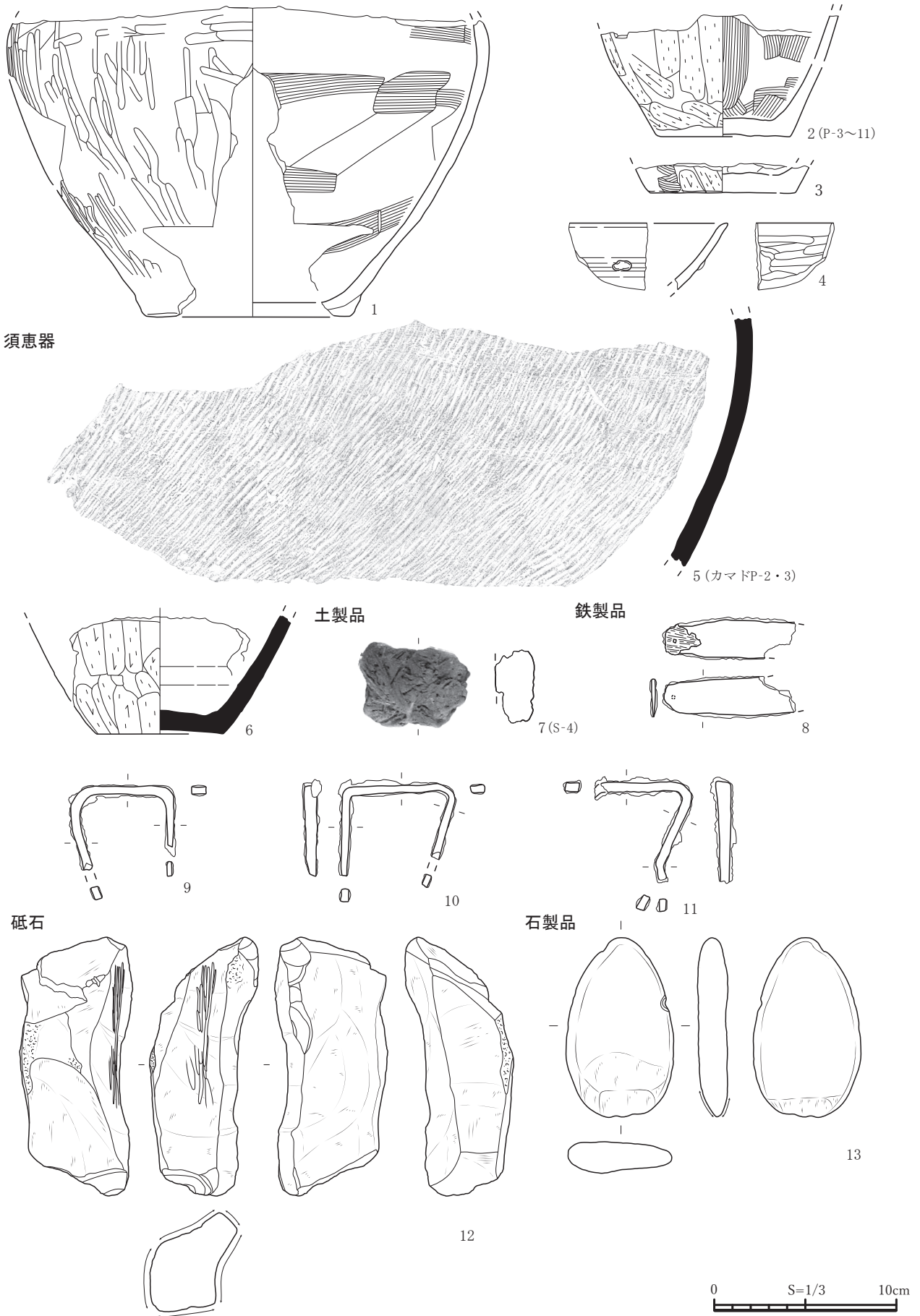


図27 第1号竪穴建物跡出土遺物(2)

[床面・壁溝] 地山をそのまま床面とし、ほぼ平坦に整えられている。壁溝は全周にめぐり、幅13～39cm、深さ5～6cmである。

[柱穴] 柱穴2基を検出した。Pit 1は壁溝に接して構築されており、径39×28cm、深さ31cmである。Pit 2は北東の床面に構築されており、径39×38cm、深さ47cmである。4本の支柱穴配置と推定され、残る2本は西側調査区外に埋蔵されていると考えられる。

[カマド] 北壁の調査区際で検出した。煙道の大部分及び煙出坑は北西調査区外へ延びる。煙道は地下式で、火床面の範囲は32×21cmの不整形、被熱厚は約5cmである。火床面の焼土直上に灰白色粘土層が堆積しており、天井が崩落したと思われる。右袖は灰白色粘土が最大11cmの高さで残存しており、全体がこの灰白色粘土を用いて構築されていたと考えられる。周辺で小礫や土師器坏(図30-10)の破片が出土しているが、出土状況や破片の大きさから、袖の芯材とは考え難い。

[その他の施設] なし。

[堆積土] 11層に分層した。1～6層は暗褐色土を主体とした自然堆積で、2層下方で火山灰を層状に含む。火山灰は分析の結果、十和田aテフラに帰属すると推定される(第2章第7節)。7～10層はカマドの堆積土及び袖と考えられる。11層は壁溝埋土である。

[出土遺物] 堆積土中から土師器1,900g、石器3,355g、石製品1点、縄文土器8,092g、自然礫589gが出土した。土師器甕は口縁部が短く外反し、外面はヨコナデ及びヘラケズリ、内面はヘラナデによる調整を施したものが主体である。図30-4は、口縁部が短く外反し、内外面ともミガキ調整が施されており、内面は黒色処理がなされている。図30-5は、建物跡の南東隅の壁際で破片がまとまって出土した。土師器坏は、ロクロ成形で内面にミガキを施し、黒色処理がなされたものが主体を占める(図30-9・11・13)。図30-11は口唇部がわずかに外反する刻書土器で、胴下部に「×」印が刻まれている。図30-9・13は床面やや上から、図30-11は壁溝埋土の直上で出土している。図30-10は、カマド袖脇から出土した破片と床面直上から出土した破片が接合したもので、表面の摩耗が著しい。図30-10・12は、黒色処理を施さない赤焼坏の可能性がある。図30-14は、ロクロ成形による須恵器の壺の底部破片である。胎土や質感から須恵器に分類したが、還元焼成が不十分だったためか褐色を呈する。また、床面やや上から頁岩製の円盤状石製品が出土した(図30-15)。表面の一部に整形時の擦痕が残り、中央には穿坑がなされている。

[小結] 出土遺物や土層堆積状況から、9世紀後葉から10世紀初頭の大形の竪穴建物跡である。(中門)

第3号竪穴建物跡(SI03、図31～34、写真25・26・67・68)

[位置・確認] IA・B-25・26グリッド、標高57.4～57.6mの平坦面に位置し、第IV層中で確認した。調査区東壁付近から検出しているため東端隅の一部が調査区外へと延びている。第11号土坑、第19号土坑と重複しており、第11号土坑より新しく、第19号土坑より古い。

[規模・平面形] 平面形は長軸長491cm、短軸長481cmの隅丸方形で、床面積は(20.1)m²である。検出面から床面までの深さは最大44cmで、壁は開き気味に立ち上がる。主軸方向は、N-43°-Eである。

[床面・壁溝] 掘方は壁際を幅50～100cm、深さ30～40cm程度で全周するように掘り込まれている。そのため床面は第IV層と掘方埋土が混在しているが、ほぼ平坦に整えられている。壁溝は北西壁の一部に長さ160cm、幅10～20cm、深さ13cmの規模で検出した。

S102

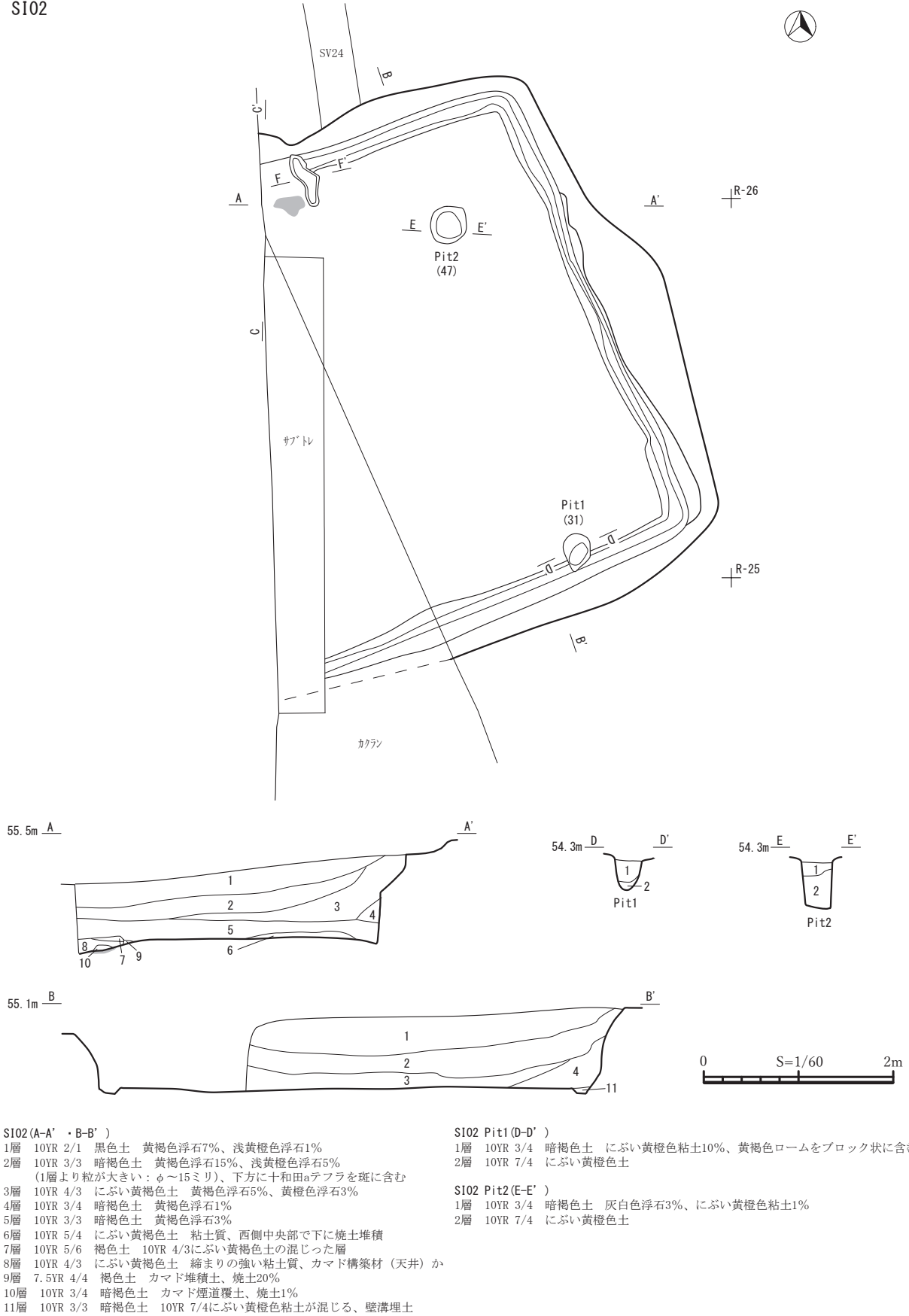
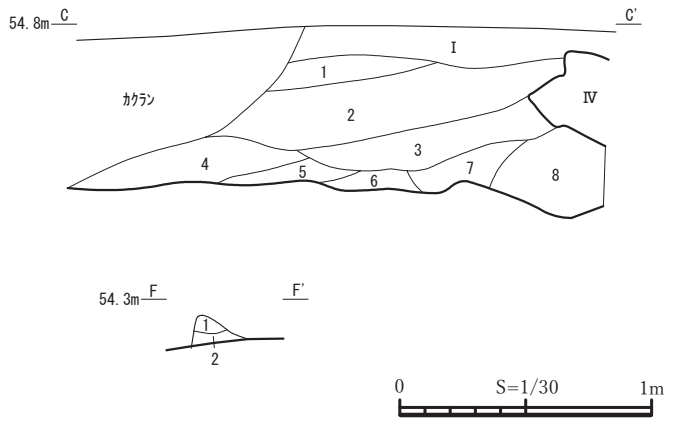
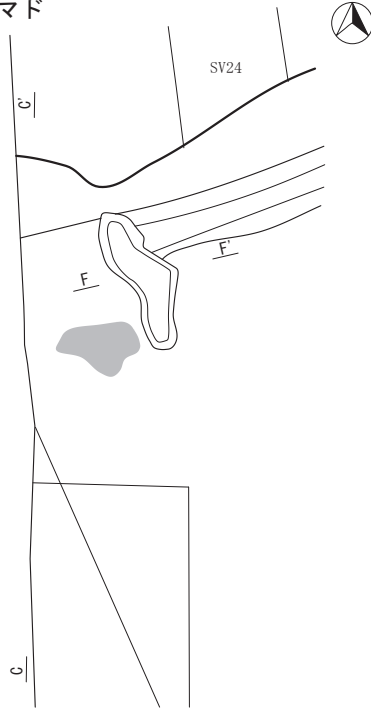


図28 第2号竖穴建物跡(1)

S102カマド



S102カマド(C-C')

- 1層 10YR 1.7/1 黒色土 黄褐色浮石1%
- 2層 10YR 3/3 暗褐色土 黄褐色浮石5% 炭化物粒1%
- 3層 10YR 3/4 暗褐色土 黄褐色浮石1% 褐色ロームをブロック状に含む
- 4層 10YR3/3 暗褐色土 黄褐色浮石1%
- 5層 10YR4/4 褐色土 にぶい黄褐色土混じる(6層の土?)
- 6層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 カマド袖? しまり強 粘土質
- 7層 7.5YR4/4 褐色土 カマド覆土 焼土 20%
- 8層 10YR3/4 暗褐色土 カマド煙道覆土 堆積土 焼土1%

S102カマド袖(F-F')

- 1層 10YR 7/4 にぶい黄褐色土 袖構築材の粘土、炭化物1%
- 2層 10YR 5/4 にぶい黄褐色土 袖構築土

S102遺物出土・火山灰検出状況

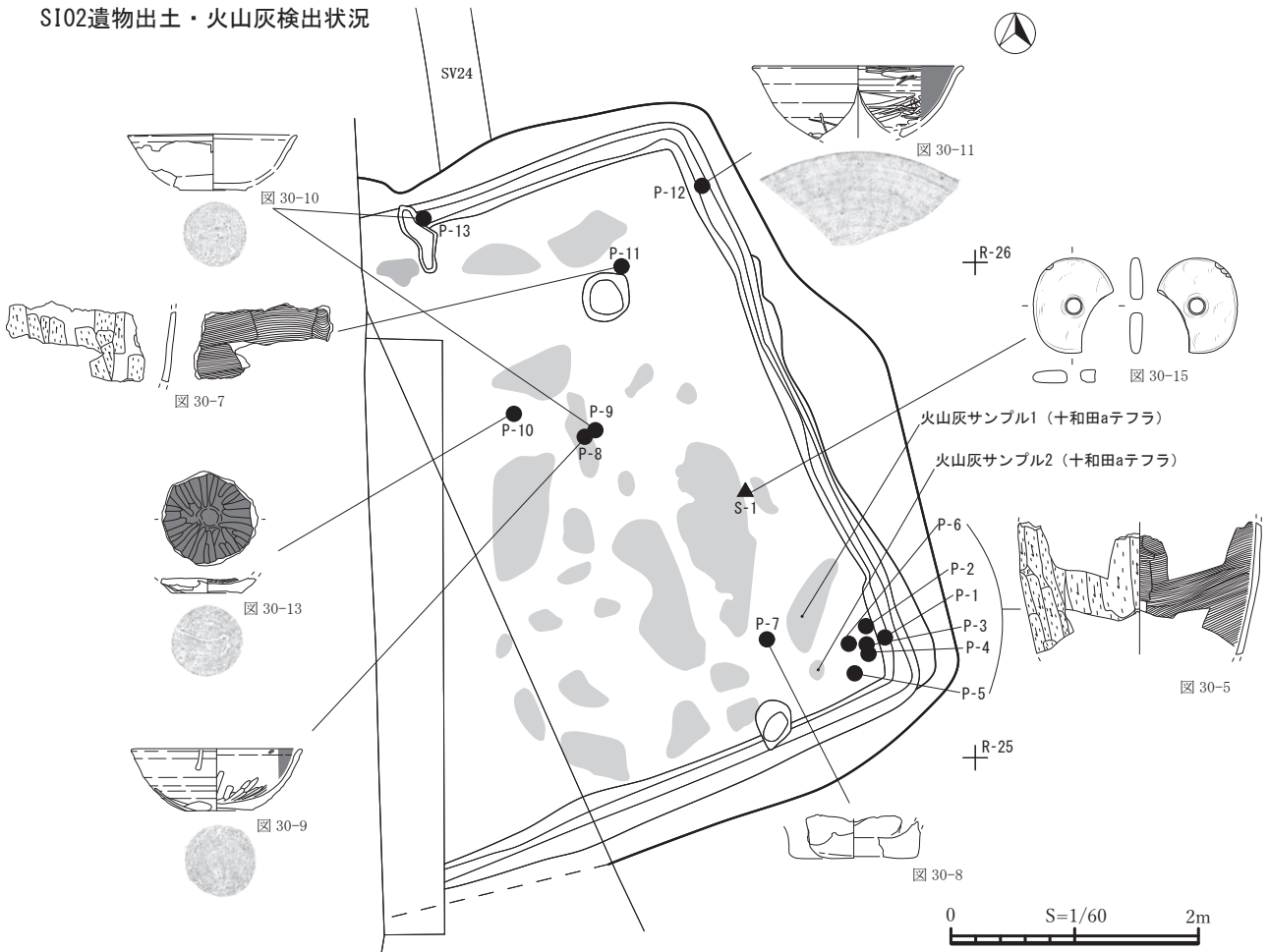


図 29 第2号竪穴建物跡(2)

S102 土師器

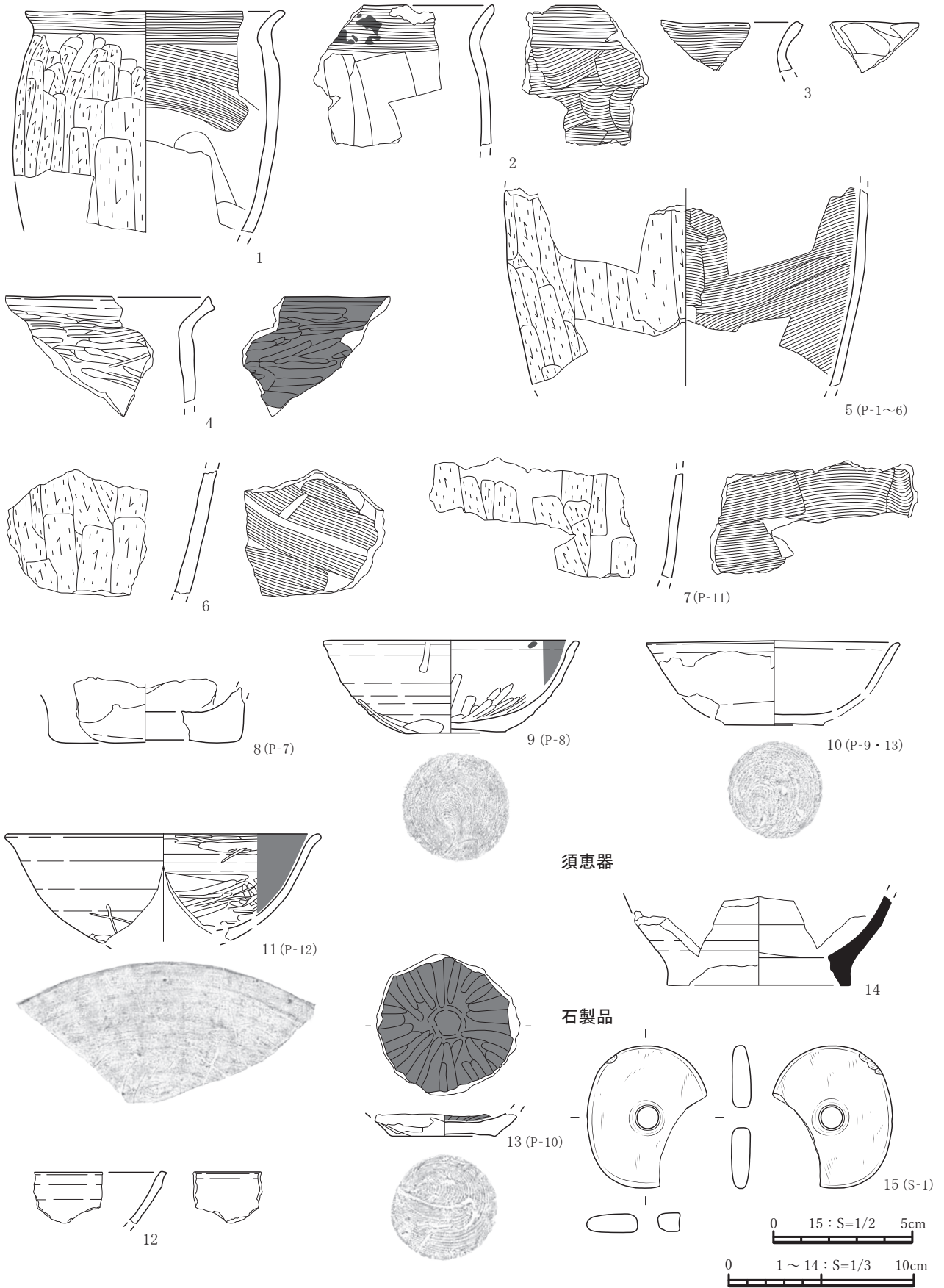


図30 第2号竪穴建物跡出土遺物

[柱穴] 検出されなかった。

[炭化材] 床面南東端の床面直上から長さ20cm程度の炭化材が出土したが、残存状況が悪かったため記録せず取り上げた。それ以外は出土しなかった。

[カマド] 北壁東寄りで検出した。袖周辺に若干の粘土材が残存していた。カマドは地下式で、煙道は長さ187cmで煙出坑底面へ向かって緩やかに下っている。煙出坑は64×60cm、深さ約90cmの規模で掘り込まれている。袖は両袖共に幅13cm、最大高さ19cm程度で残存している。火床面は42×40cm、最大深度5cmで被熱している。火床面の上部付近カマド覆土1・2層中からチャートの自然礫及び、甕の破片が出土した(図32-1、図33-5・9)。

[その他の施設] 床面南西端から土坑1基を検出した。平面形は楕円形で開口部規模は141×104cm、深さ45cmで掘り込まれている。断面形状は浅鉢状で、壁は開くように立ち上がっている。1層にはロームとの混合土が堆積していることから人為的に埋め戻されたものと考えられるが、その時期は建物跡使用時なのか廃絶時なのかは不明である。

[堆積土] 黒褐色土を主体とした自然堆積で、7層及び8層中に十和田aテフラがブロック状に堆積している(第2章第7節)。

[出土遺物] 堆積土中から土師器5, 531g、須恵器49g、鉄滓1点(図34-9)、羽口1点(図34-10)、土製支脚1点(図34-11)、石製品1点(図34-12)、縄文土器466g、剥片2点が出土した。図32-1、図33-5・9はカマドから、図33-7は床面直上から出土した土師器甕である。土師器甕の口縁は短く外反するものが多く(図32-1～図33-4)、口縁部幅は概ね3cm以内にある。中でも図32-4、図33-4は外反の度合いが強く、口縁部幅は極端に短い。胴部は丸みを帯びるものと、直立気味のものがある。図34-5は床面直上から出土した略完形の坏で、内面は黒色処理が施されている。図34-6は堆積土中から出土した破片で、外面には墨書とみられる痕跡が確認でき、内面には黒色処理が施されている。図34-7、8は須恵器片で、いずれも断面色調は10YR5/1～6/1の褐灰色である。7はカマド脇から出土した。8は堆積土中から出土した破片と重複しているSK19出土の破片が接合したものである。鉄滓(図34-9)は磁着度が6ある含鉄鍛冶滓で、堆積土から出土した。土製支脚(図34-11)は筒状に成形され堆積土中から出土した。石製品(図34-12)は床面直上から出土した。安山岩を素材としており、周縁に加工が施され、器面中央に凹み痕がある。縄文時代のものが混在した可能性もある。

[小結] 出土遺物から9世紀後葉～10世紀初頭の中型の建物跡と考えられる。また、十和田aテフラが自然堆積したとみられる事から、これ以前に廃絶された建物跡といえる。(小山)

第4号竪穴建物跡(SI04、図35、写真25・68)

[位置・確認] 調査区西端中央のV-77・78、W-78グリッドに位置する。標高約53mの第V層中で確認した。調査区際で壁面の一部を確認したため、調査範囲を拡張したが、切り株等のため幅1.3m・奥行き1m程度しか拡張できなかった。調査範囲内で重複する遺構はない。

[形状・規模] 調査できたのは南東壁の一部、壁長で(136)cm・床面積(1.3)m²の範囲である。他の竪穴建物跡の状況から、方形を呈すると推定される。第IV層を掘り込んで構築している。壁高は、検出面からは32cm、掘り込み面からは100cm、掘方の掘削深度は最大で15cmである。壁は床面から垂直に立ち上がった後に、中位から外反する。

SI03

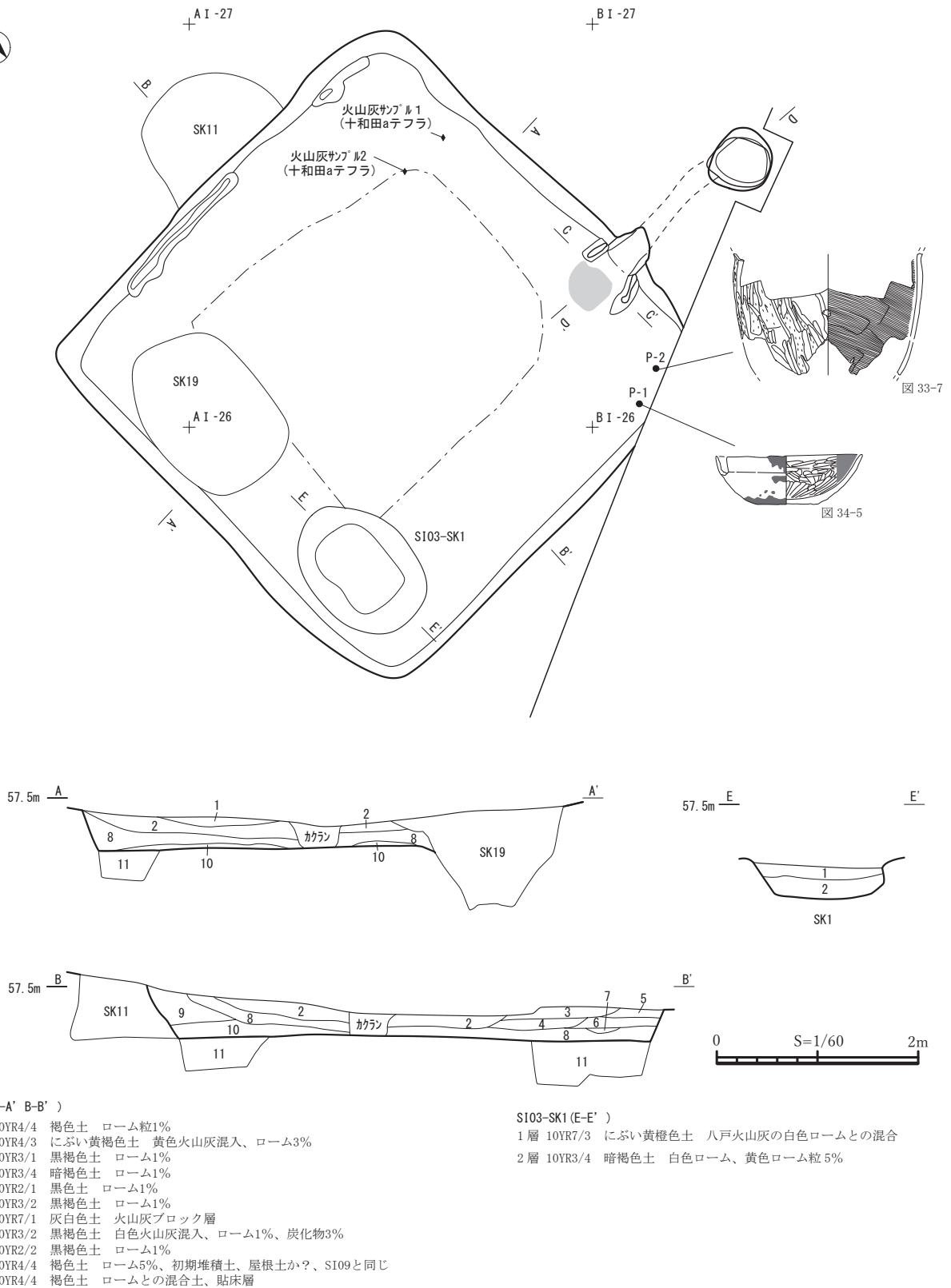
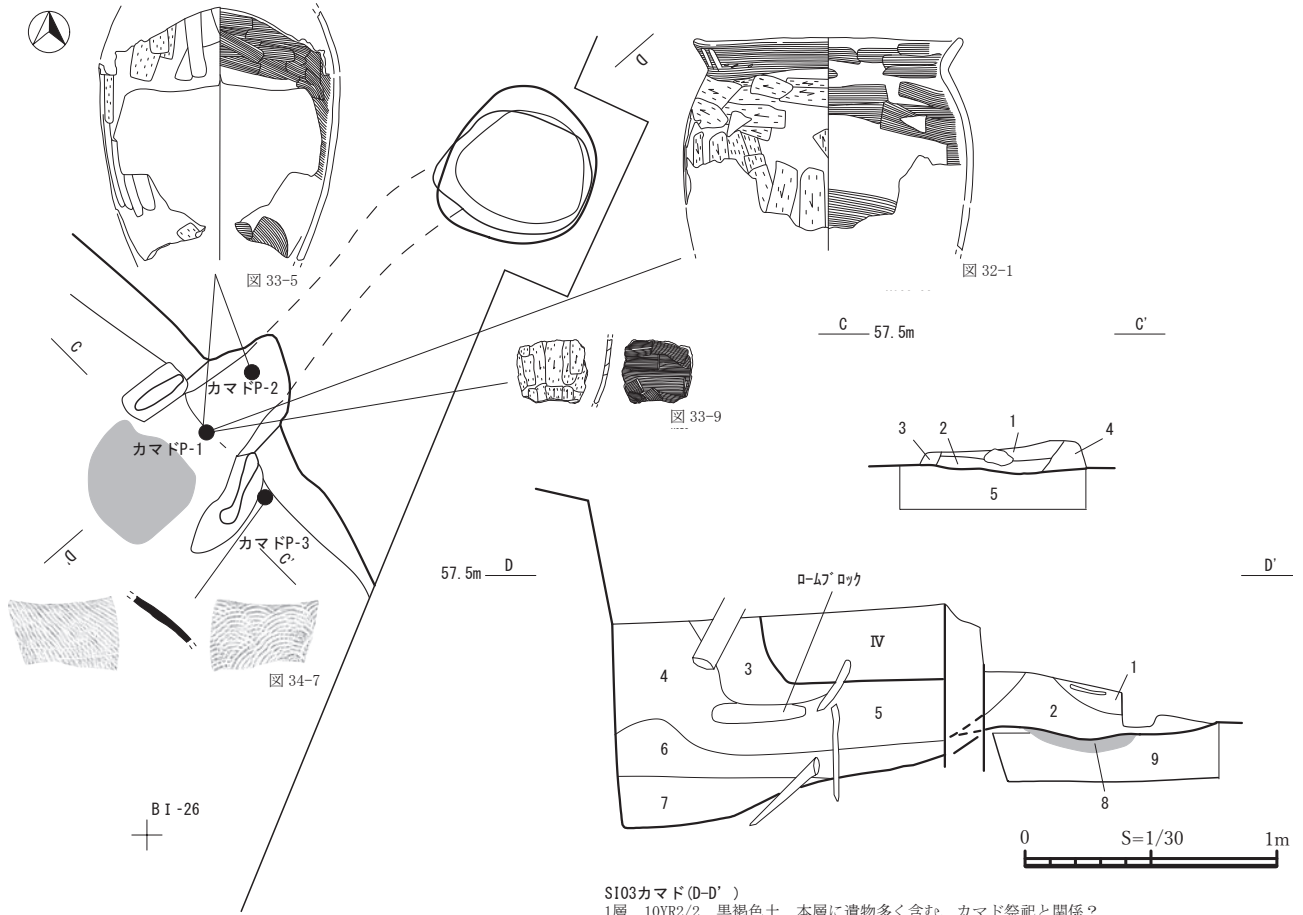


図31 第3号竪穴建物跡(1)

SI03カマド



SI03カマド(C-C')

- 1層 10YR2/2 黒褐色土 本層に遺物多く含む、カマド祭祀と関係?
- 2層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 浮石1%
- 3層 10YR4/4 褐色土 ロームとの混合土、袖
- 4層 10YR3/4 暗褐色土 ロームとの混合土、袖
- 5層 10YR4/4 褐色土 ロームとの混合土、貼床

SI03カマド(D-D')

- 1層 10YR2/2 黒褐色土 本層に遺物多く含む、カマド祭祀と関係?
- 2層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 浮石1%
- 3層 10YR2/2 黒褐色土 ローム1%
- 4層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 層上位に黄色火山灰ブロック、白色ローム粒多量
- 5層 10YR3/3 暗褐色土 ローム粒5%
- 6層 10YR6/4 にぶい黄褐色土 煙出し部分は白色ローム主体、煙道部は黄色浮石の崩落主体
- 7層 10YR2/2 黒褐色土 ローム3%
- 8層 7.5YR4/4 褐色土 火床面
- 9層 10YR4/4 褐色土 ロームとの混合土、貼床

SI03 土師器

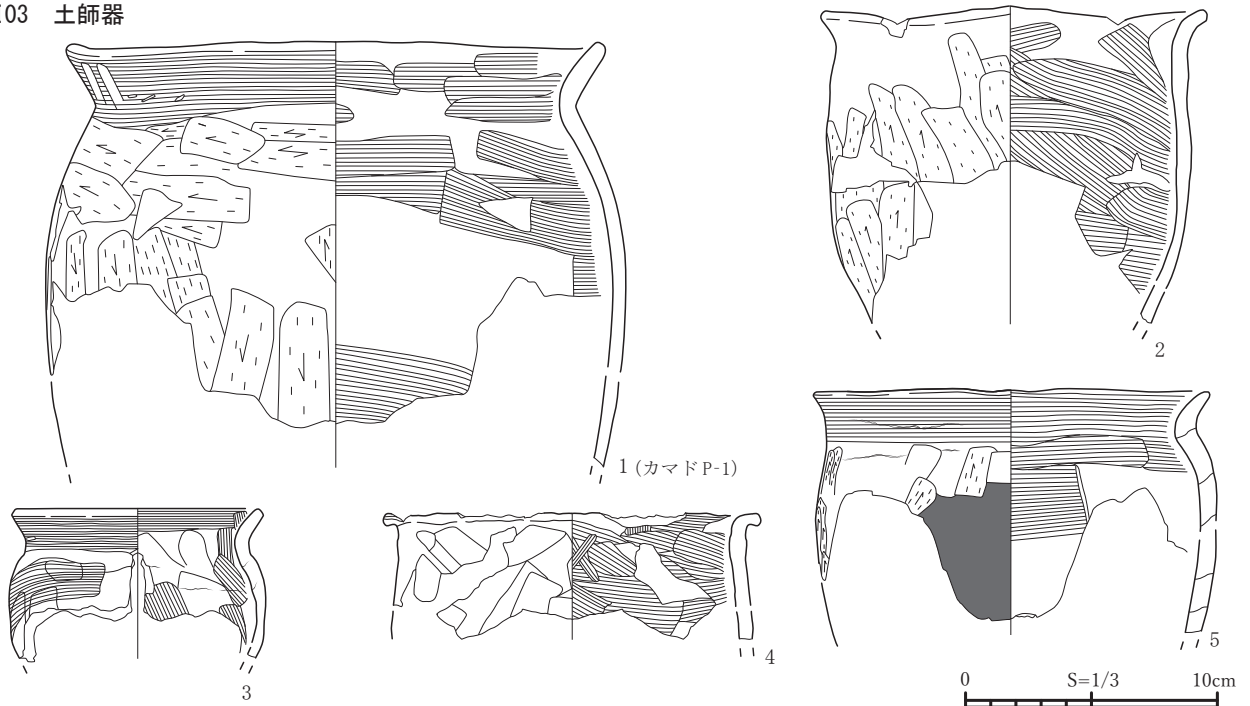


図32 第3号竪穴建物跡(2)・第3号竪穴建物跡出土遺物(1)

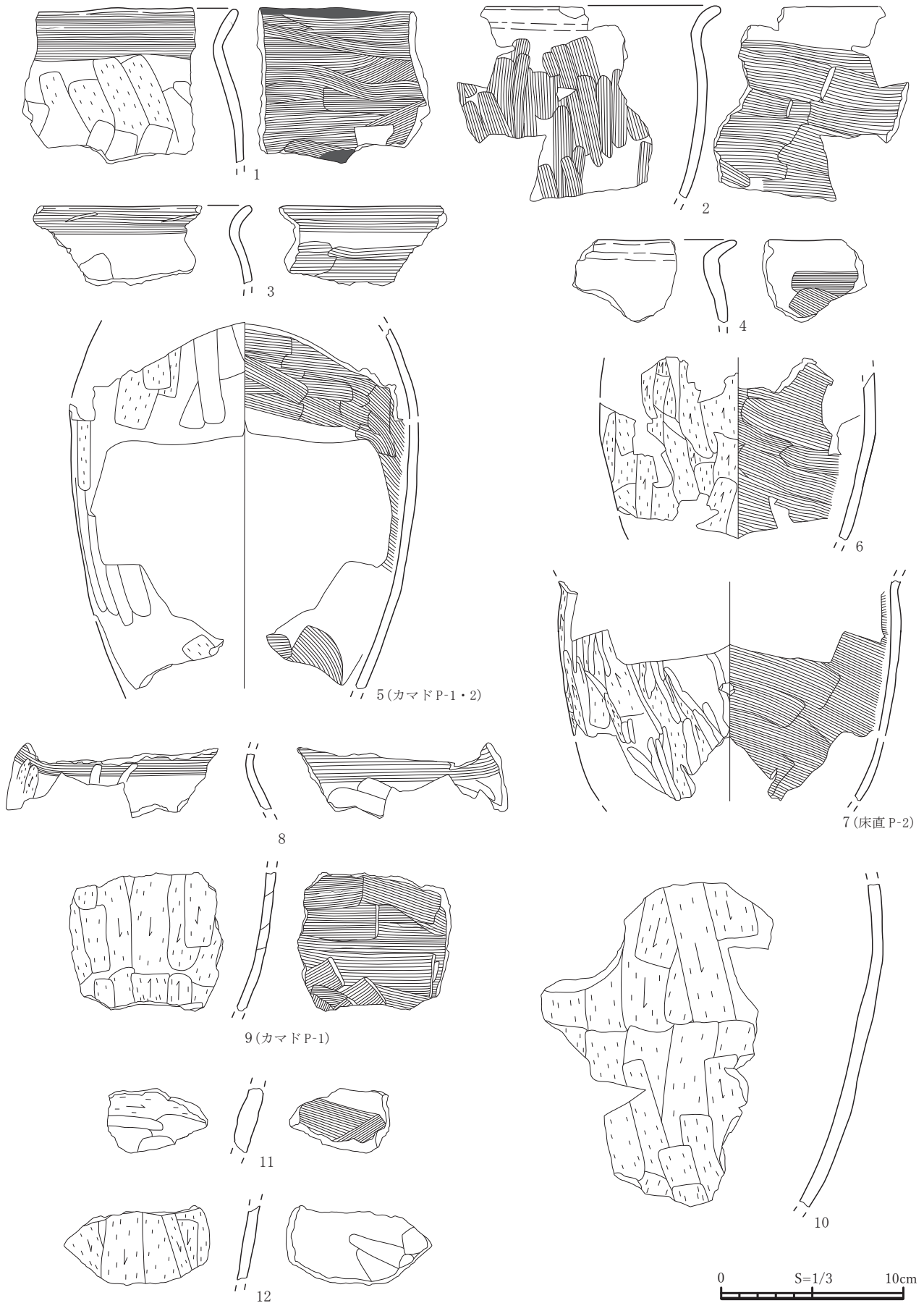


図33 第3号竖穴建物跡出土遺物(2)

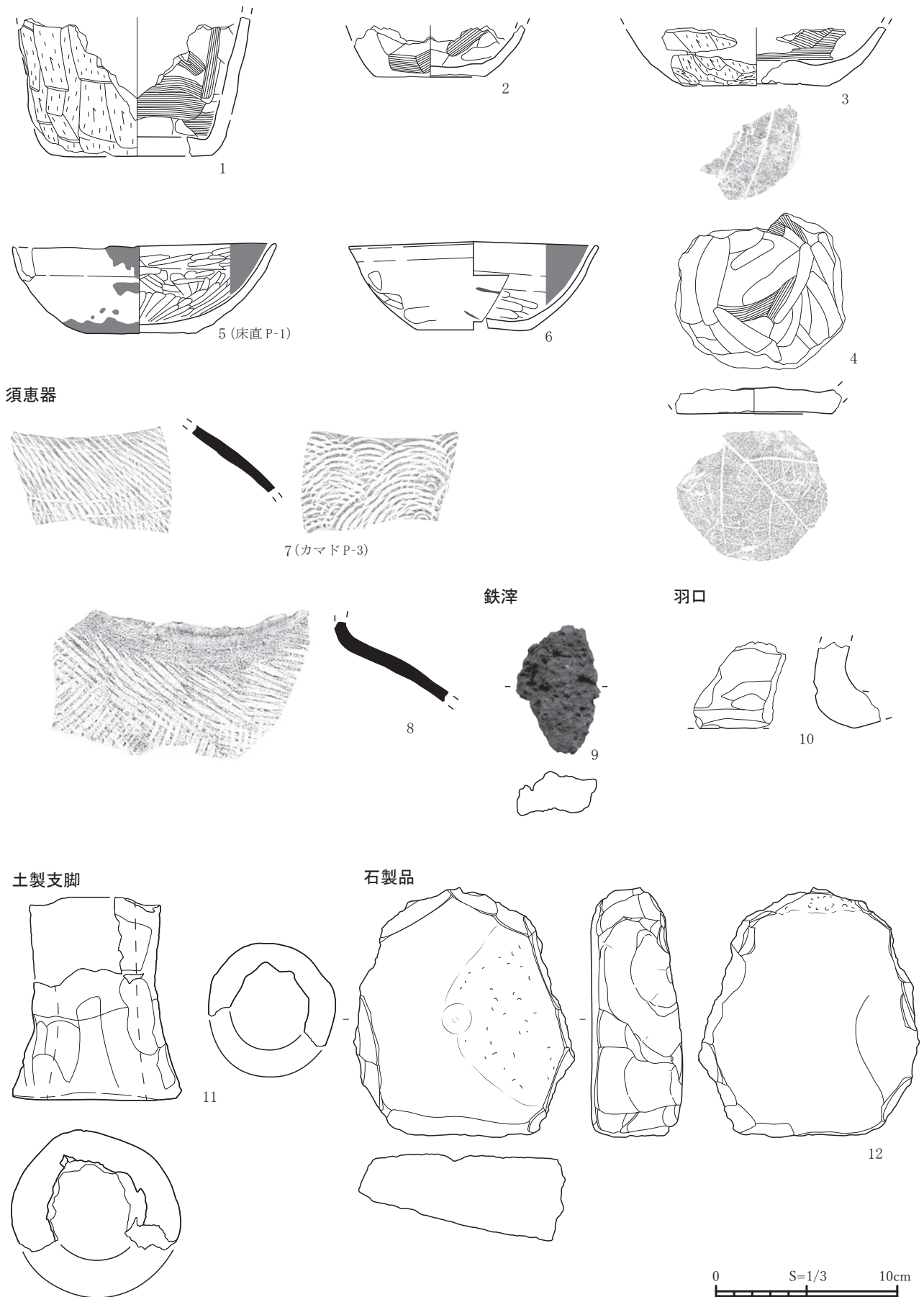


図34 第3号竪穴建物跡出土遺物(3)

[床面・壁溝] 床面は、確認された範囲ではローム塊が多量に混合する掘方埋土で、ほぼ平坦に整えられている。壁溝は検出されなかった。

[柱穴] 柱穴は2基確認された。重複しており、Pit1が新しい。規模は、Pit1：33×27cm、深さ16cm、Pit2：46×38cm、深さ25cmである。柱穴の重複が認められることから、建替の可能性がある。

[炭化材] 床面及び床面から2～5cmの高さから、4×3cm～21×13cmで枝状・板状の炭化材の小片が散布した状態で出土した。

[カマド] 検出されなかった。

[付属施設] 西端に36×10cm・29×13cmの不整形な被熱痕を検出した。焼成厚は11cmである。地床炉の可能性もあるが詳細は不明である。

[堆積土] 黒～黒褐色土主体で、掘方埋土を含め4層に分けられる。3層は掘方埋土の被熱層である。堆積土上半（2層上面）に、白頭山～苫小牧テフラと推定される火山灰がブロック状に堆積する。掘方埋土以外は自然堆積と推定される。

[出土遺物] 土師器片66gが出土し、うち3点を図示した（図35-1～3）。1は甕の口縁部である。短い口縁部が「く」字状に屈曲する。小型甕と思われる。2は甕の胴部である。外面は縦位方向のケズリ、内面は横位にナデが施されている。3は坏の口縁部である。内面は横位のミガキ調整が施され、黒色処理されている。

[小結] 精査範囲が狭小であり、諸情報に欠けるものの、焼失家屋で、柱穴に重複が確認されたことから、建替の可能性がある。火山灰や出土した土師器の特徴から、9世紀後葉から10世紀前葉の年代が推定される。
(平山)

第5号竪穴建物跡（SI05、図36～38、写真27・28・69）

[位置・確認] V・W-21・22グリッド、標高57.3～57.4mの平坦面に位置し、第IV層中で確認した。カマド煙道及び煙出坑が第1号掘立柱建物跡Pit1と重複し、本遺構が新しい。

[規模・平面形] 平面形は南北長301cm、東西長285cmの隅丸方形で、床面積は6.7㎡である。検出面から床面までの深さは最大20cmで、壁は開き気味に立ち上がる。建物の主軸方向は、N-17°-Wである。

[床面・壁溝] 床面は掘方埋土によってほぼ平坦に整えられている。壁溝は検出できなかった。

[柱穴] 検出できなかった。

[カマド] 北壁で2基、東壁で1基検出した。袖構築材の粘土の残存状況及び検出状況から、古い順に1・2・3と番号を付した。

カマド1は北壁中央に構築されている。主軸方向はN-12°-Wである。煙道は残存長96cmで緩やかに上昇しており、半地下式であったと考えられる。堆積土中に構築材と思われる白色粘土及び褐色粘土が堆積しており、廃絶時に破壊され、埋め戻されたとみられる。

カマド2は、東壁やや南寄りに構築されている。主軸方向はN-77°-Eである。煙道と左袖が残存していた。煙道は残存長114cmで緩やかに下降し、末端は袋状に膨らむ。底面が建物跡床面より低くなることから、地下式もしくは半地下式であったと考えられる。袖は灰白色粘土で構築されており、左袖のみ長さ54cm、高さ8cmで残存していた。袖は貼床除去中に検出したことから、カマド3構築前には廃絶・破壊され、貼床により被覆されたものと考えられる。

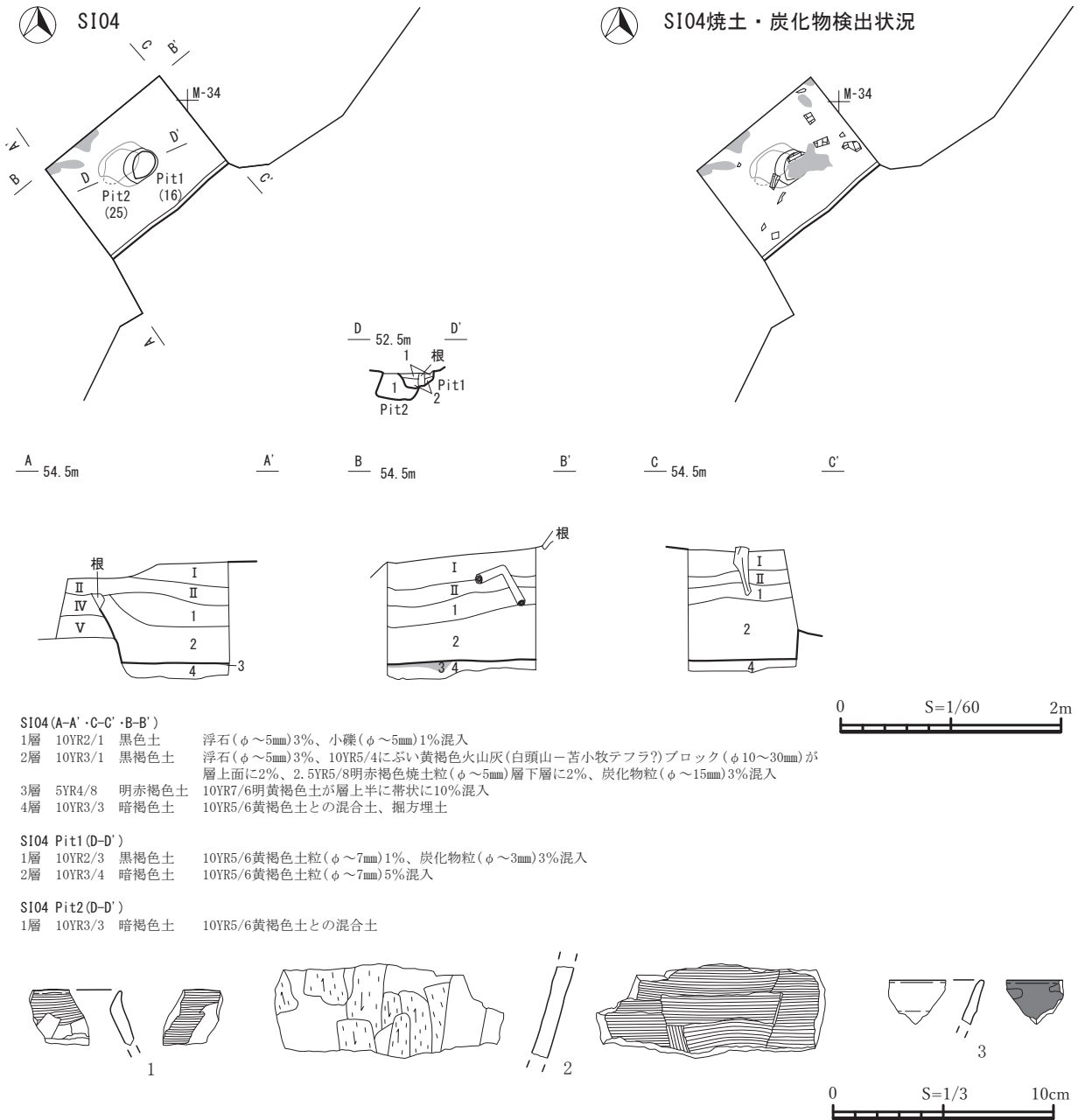


図35 第4号竪穴建物跡・出土遺物

カマド3は、北壁東寄りに構築されている。主軸方向はN-6°-Wである。煙道は地下式で、残存長109cmで緩やかに下降し、底面は建物跡床面より低くなる。煙出坑は27×24cmの円形で、深さ41cmで煙道と直結する。袖は灰白色粘土で構築されており、右袖のみ長さ48cm、高さ9cmで残存していた。検出状況及び残存状況から、建物の廃絶時まで機能していたものと捉えられる。明確な火床面を確認できなかったことから、カマド3も廃絶時に片付け・破壊されたものと考えられる。

[その他の施設] 土坑3基を検出した。SK1は平面形57×43cmの不整形で、深さ37cm、SK2は平面形96×46cmの楕円形で、深さ22cmである。いずれも貼床下で検出したことから、最終段階では既に埋没していたものと考えられる。また、カマド2はSK2の上に構築されていることから、カマド2が構築

された時点でSK2は埋没していたと考えられる。SK3は床面で検出した。平面形65×49cmの不整楕円形で、深さ22cmである。

[堆積土] 4層に分層した。黒色土を主体とした自然堆積である。2層中で灰白色土がブロック状に堆積する状況を確認し、火山灰の可能性を考えサンプルを採取した。分析の結果白頭山-苫小牧テフラ降下後に形成された風成の再堆積物と判断された(第2章第7節)。

[出土遺物] 堆積土中から土師器1,194g、須恵器3,098g、石器922g、自然礫829g、含鉄椀形鍛冶滓24g、縄文土器599gが出土した。図37-1・図38-2・3は、建物跡南西隅の床面直上に破片をばらまいたような形で出土した(写真28-2段目左)。土師器は口縁部が肥厚し開き気味になるもの(図37-1)と、短く強く外反するもの(図37-2~4)がある。外面はヘラケズリ、内面はヘラナデが基本である。須恵器は大甕と壺が出土している。図38-1~4はいずれも大甕の口縁部~胴部破片で、断面の色調や内面の当て具痕等の特徴が共通しており、同一個体とみられる。図38-2は第9号竪穴建物跡出土遺物と、図38-3はSI07出土遺物と接合した。図38-5はロクロ成形による壺の破片である。

[小結] カマド及び付属施設の調査所見から、第1段階:カマド1・SK1・SK2機能時→第2段階:カマド2機能時(カマド1廃絶、SK1・SK2埋没)→第3段階:カマド3・SK3機能時(カマド2廃絶、貼床構築)の3段階の変遷が考えられる(図37)。出土遺物からは、10世紀前半の小形の竪穴建物跡と考えられるが、3段階の時期的変遷が想定される点や、遺構間接合の状況を加味すると、9世紀後葉から10世紀中葉の比較的長い期間存続した可能性がある。

第6号竪穴建物跡(SI06、図39・40、写真29・69)

[位置・確認] T・U-21グリッド、標高57.1~57.2mの平坦面に位置し、第IV層中で確認した。重複する遺構はない。

[規模・平面形] 平面形は南北長250cm、東西長296cmの隅丸方形で、床面積は4.8m²である。検出面から床面までの深さは最大40cmで、壁は開き気味に立ち上がる。建物の主軸方向は、N-7°-Wである。

[床面・壁溝] 床面は掘方埋土によってほぼ平坦に整えられている。壁溝は検出できなかった。

[柱穴] 2基検出した。Pit1は東壁寄り中央に位置し、平面形34×30cm、深さ6cmである。Pit2は南壁寄り中央に位置し、平面形34×34cm、深さ21cmである。Pit1は非常に浅いため、柱穴でない可能性もある。その場合、Pit2のみがカマドとは反対側の壁際に位置することとなるため、出入り口施設として使われていた可能性が考えられる。

[炭化材] 建物東側中央の床面で、炭化材を検出した。樹種同定を行った結果、コナラ属コナラ節であることが判明した(第2章第4節)。炭化材はこの1点のみで、周辺や直上に焼土が堆積していたが、建物廃絶時に焼失行為が行われたかは不明である。

[カマド] 北壁中央に構築されている。主軸方向はN-5°-Wである。煙道は地下式で、残存長95cm、底面はわずかに上昇する。煙出坑の堆積土最上層に、構築材に使ったと思われる白色粘土の廃棄層を確認しており、廃絶時に破壊し人為的に埋め戻したと考えられる。煙出坑は、50×36cmの不整形を呈し、深さ19cmで煙道に直結する。火床面は、20×17cmの略円形を呈する。袖は床面に黒色土や黄褐色土を盛った上に、灰白色粘土を用いて構築されている。左袖は長さ24cm、高さ17cm、右袖は長さ38cm、高さ16cmで残存していた。

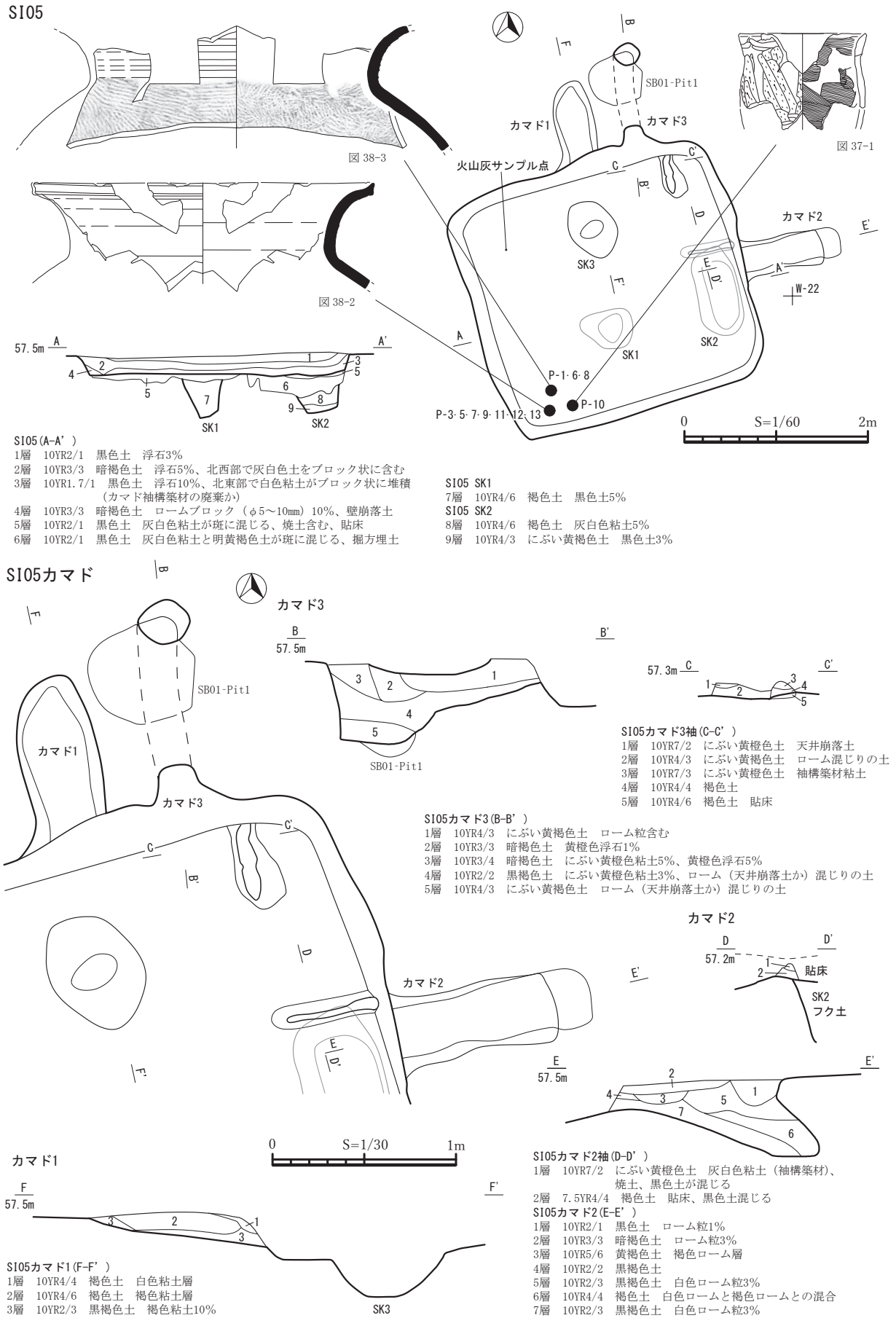
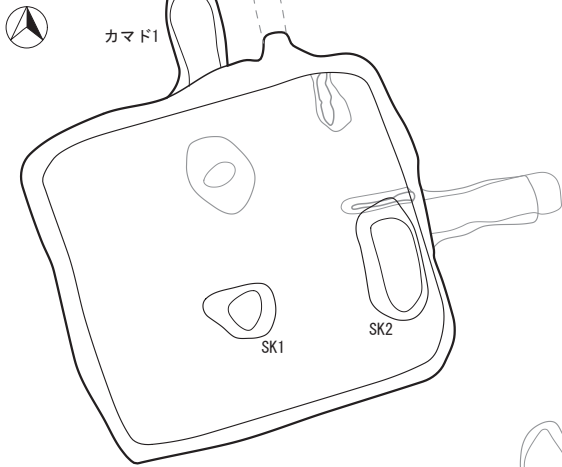


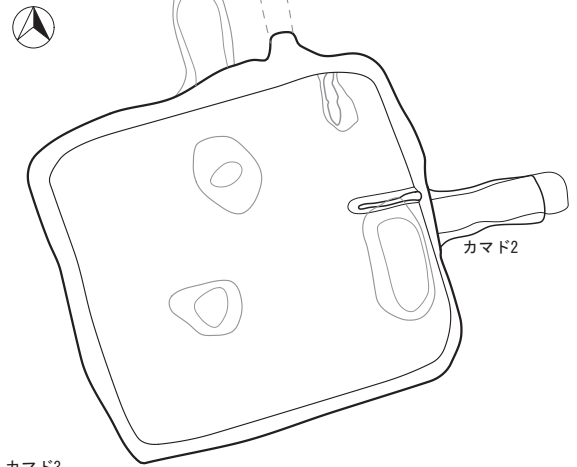
図36 第5号竪穴建物跡 (1)

S105変遷図

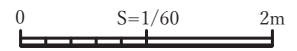
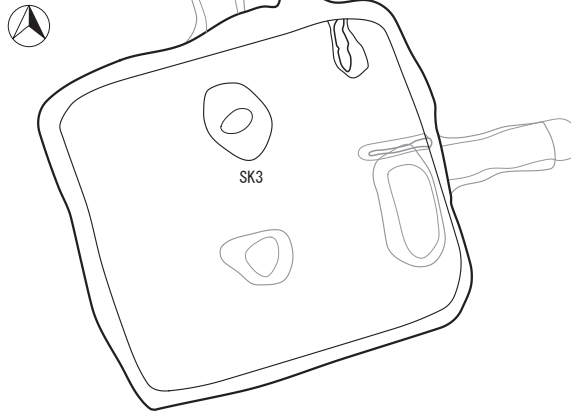
第1段階



第2段階



第3段階



S105 土師器

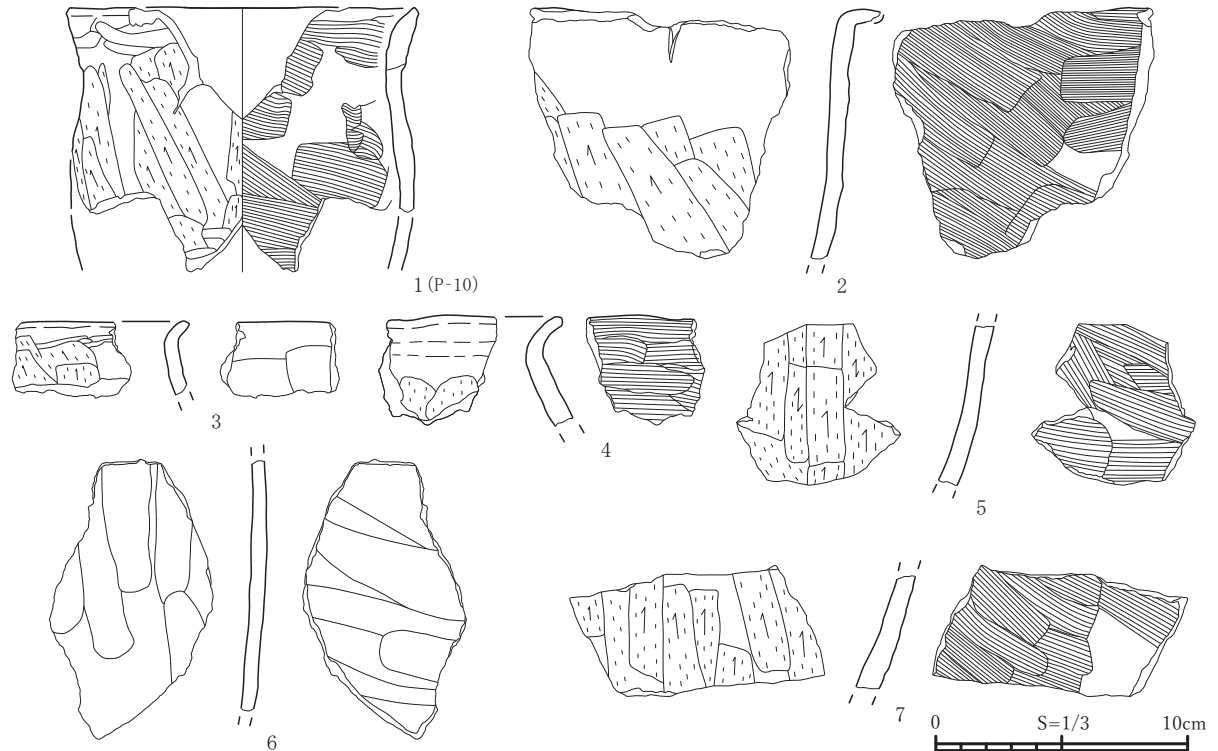


図37 第5号竖穴建物跡(2)・第5号竖穴建物出土遺物(1)

須恵器

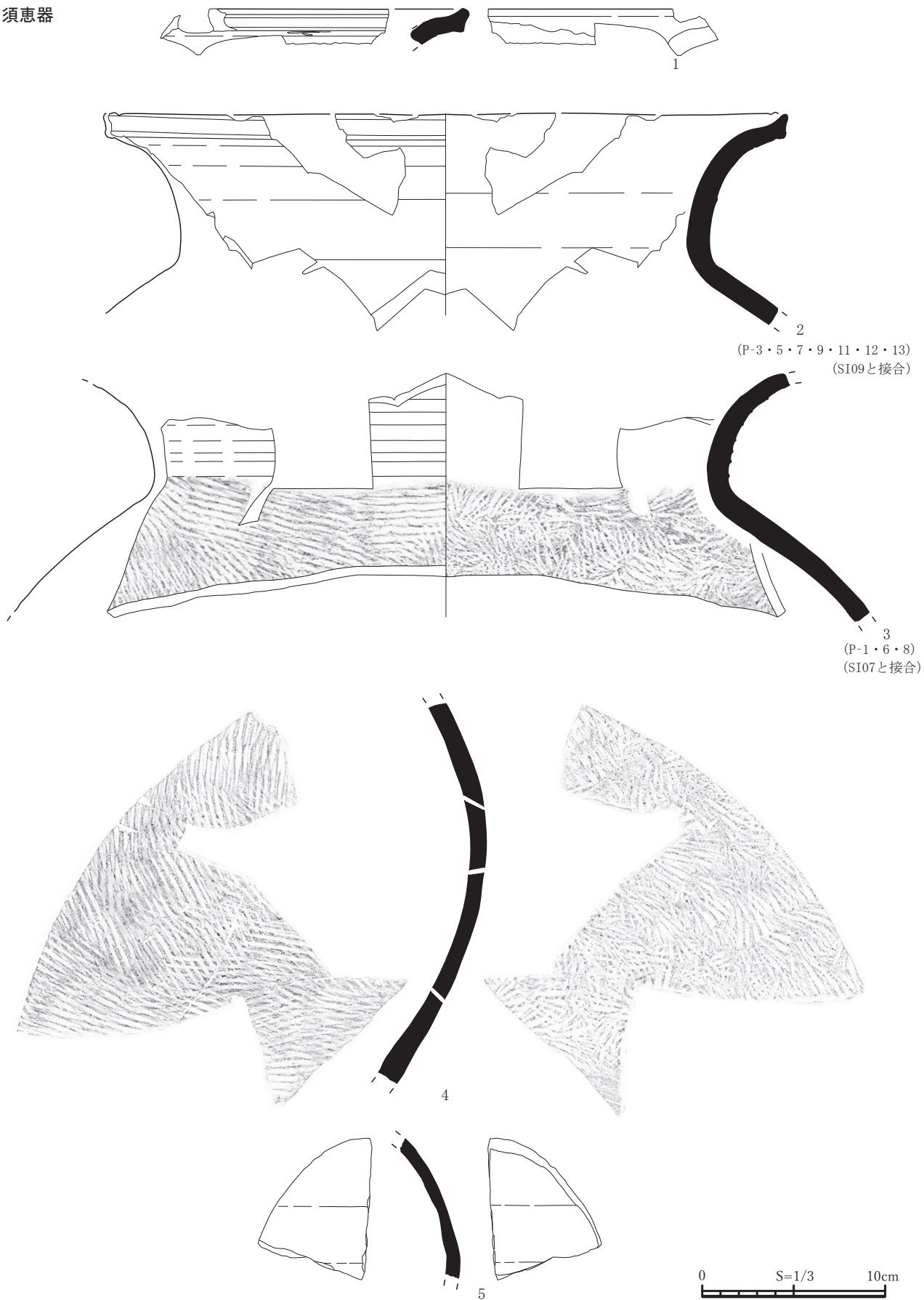


図38 第5号竪穴建物跡出土遺物(2)

[その他の施設] なし

[堆積土] 5層に分層した。1層は黒褐色土を主体とした自然堆積である。2～6層は焼土やカマド構築材の白色粘土が混じっており、建物跡廃絶時の人為堆積によるものと考えられる。

[出土遺物] 堆積土中から土師器426g、石器158g、鍛冶滓9g、縄文土器313gが出土した。土師器はいずれも甕で、外面はヨコナデ及びヘラケズリ、内面はヘラナデにより調整を行うものが基本である。口縁部はくの字状に短く外反し屈曲部が肥厚するもの(図40-1)、強く短く外反するもの(図40-2)、緩やかに外反するもの(図40-3)がみられる。底部は木葉痕を持つもの(図40-4・5)や、ヘラ切りにより作出した後、ヘラケズリによる調整を施すものがある(図40-6)。いずれも底径10cm程度の小型の甕である。

[小結] 検出状況及び出土遺物の様相から、9世紀後葉～10世紀前葉の小形の竪穴建物跡と考えられる。床直出土の炭化材年代測定結果は674-827 cal AD (2σ)で(第2章第1節)、考古学的所見より古い年代を示しており、古木効果による影響と考えられる。

第7号竪穴建物跡(SI07、巻頭写真4、図41～45、写真30～32・69・70)

[位置・確認] T・U-18・19グリッド、標高57.2～57.3mの平坦面に位置し、第IV層中で確認した。重複する遺構はない。

[規模・平面形] 平面形は長軸428cm、短軸413cmの隅丸方形で、床面積は15.5㎡である。検出面から床面までの深さは最大45cmで、壁は開き気味に立ち上がる。建物の主軸方向は、N-30°-Wである。

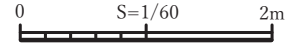
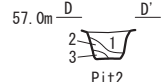
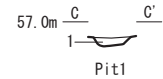
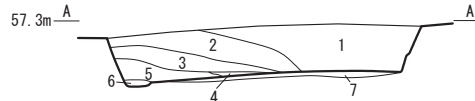
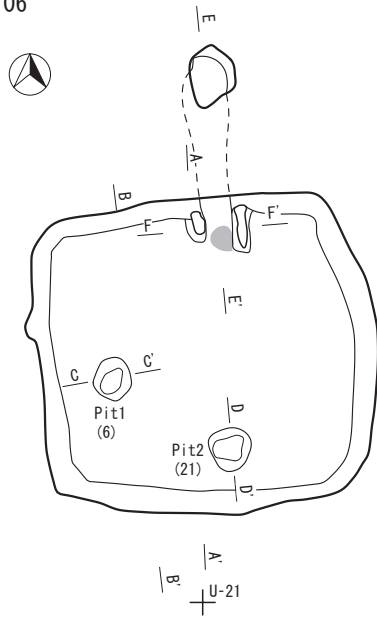
[床面・壁溝] 北側隅約4分の1の範囲は地山をそのまま床面とし、残り4分の3の範囲は掘方埋土によってほぼ平坦に整えられている。壁溝は北側隅でのみ確認でき、幅は10～19cmである。

[柱穴] 南壁寄り中央の床面で1基検出した。平面規模は31×30cm、深さは25cmである。カマド対面の壁際にあり、出入口施設に伴うものであった可能性がある。

[炭化材] 床面直上及び3層下方で建物跡の構築部材と思われる炭化材を多数検出した。樹種同定を行った結果、コナラ属コナラ節、クリ-コナラ節、ハンノキ科ハンノキ亜属、クリ、イネ科が確認された(第2章第4節)。炭化材の周辺では焼土を検出しており、一部焼土に挟まれた炭化材もあることから(SI07-C-9)、土葺き屋根構造の建物が、焼失倒壊したと考えられる。各部材及び建物跡の構造の詳細については、中村隼人調査員が現地状況を確認し、検討している(第3章第3節)。

[カマド] 北壁中央に構築されている。主軸方向はN-36°-Wである。煙道は地下式で、長さ112cm、緩やかに下降し、底面は床面よりわずかに低くなり、奥壁は15cmほど袋状に膨らむ。煙出坑は46×44cmの円形を呈し、深さ45cmで煙道に直結する。袖は灰白色粘土により構築され、左袖は長さ31cm、高さ17cm、右袖は長さ37cm、高さ17cmで残存しており、それぞれ先端に幅約10cm、高さ約30cmの軽石を据えている(巻頭写真4下段)。両袖に挟まれる形で、底部～胴下半部を打ち欠いた土師器甕(図44-1)が正位に据え置かれた状態で出土した。甕の後方には、甕を支えるように砂岩の自然礫が置かれている(写真30右下)。火床面の範囲は35cm×10cmでの不整形で、被熱は弱く、一部黒色土が混ざる状況であったことから、廃絶時に片付けられた可能性がある。当該期には、土師器甕や坏を、支脚として転用した事例が散見されるため(青森県教育委員会2000ほか)、図44-1も支脚として使用されていたものと考えられる。一方で、火床面の検出状況や、天井の構築材の堆積を確認できなかった

SI06



SI06 (A-A'・B-B')

- 1層 10YR2/2 黒褐色土 浮石・粘土粒8%
- 2層 10YR3/3 暗褐色土 浮石・粘土10%
- 3層 10YR3/4 暗褐色土 浮石・粘土15%
- 4層 10YR2/2 黒褐色土 浮石3%
- 5層 10YR8/3 浅黄褐色土 白色粘土主体層(袖か)
- 6層 10YR2/3 黒褐色土 浮石1%
- 7層 黒色土、黄褐色土、にぶい黄褐色土、黄褐色浮石が混じった土、貼床

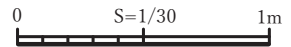
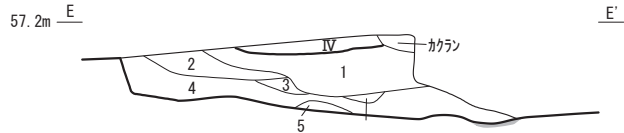
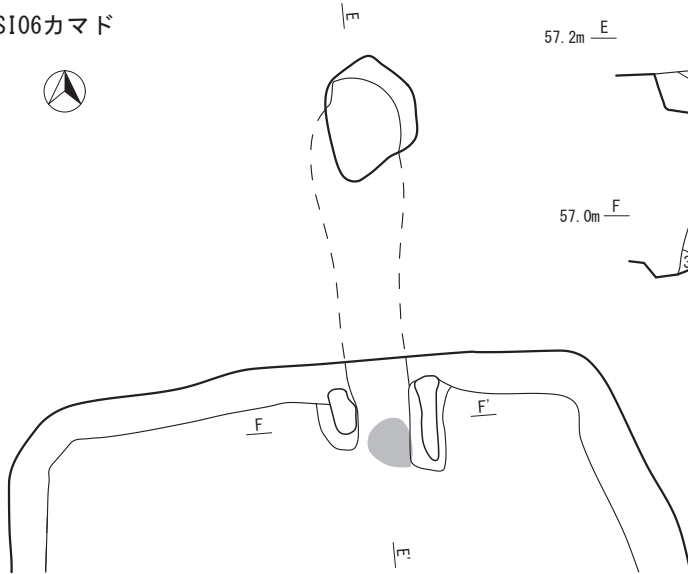
SI06 Pit1 (C-C')

- 1層 10YR 1.7/1 黒色土 浮石10%、灰白色粘土5%

SI06 Pit2 (D-D')

- 1層 10YR 2/3 黒褐色土 浮石3%、10YR7/4にぶい黄褐色土をブロック状に含む(10%)、にぶい黄褐色の粘土(10YR6/3)5%
- 2層 10YR 7/4 にぶい黄褐色土 黒色土混じりの土
- 3層 10YR 5/6 黄褐色土

SI06カマド



SI06 カマド (E-E')

- 1層 10YR 2/3 黒褐色土 浮石3%、灰白色粘土1%
- 2層 10YR 5/4 にぶい黄褐色土 灰白色粘土の廃棄層
- 3層 10YR 5/8 黄褐色土 天井の崩落土
- 4層 10YR 3/3 暗褐色土 浮石5%
- 5層 10YR 5/6 黄褐色土 粘土質

SI06 カマド袖 (F-F')

- 1層 10YR 7/3 にぶい黄褐色土 袖構築材の粘土
- 2層 10YR 2/3 黒褐色土 ローム粒含む
- 3層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロック含む
- 4層 10YR 6/6 明黄褐色土 ローム質土
- 5層 10YR 5/4 にぶい黄褐色土 粘土質の土混じる

SI06炭化材・焼土検出状況

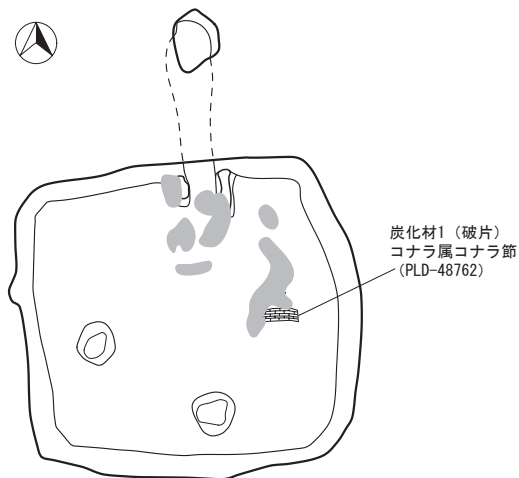


図39 第6号竪穴建物跡

SI06 土師器

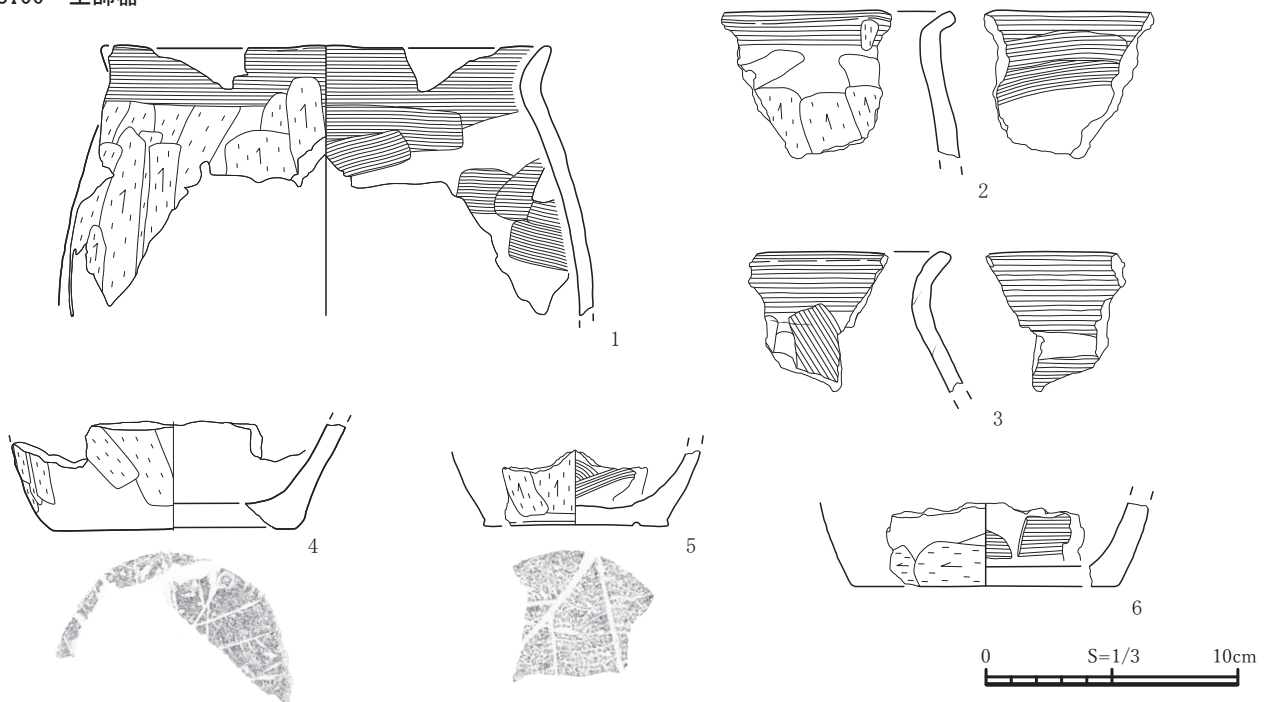


図40 第6号竪穴建物跡出土遺物

ことなどから、使用後そのまま放置されたものではなく、建物廃絶時にカマドを片付け・破壊し、支脚だけを残したという儀礼的な側面を思わせる。

[その他の施設] 土坑2基を検出した。SK1は平面形62×50cmの隅丸方形で、深さ19cm、SK2は平面形78×69cmの略円形で、深さ41cmである。いずれも床面で検出した。このうち、SK2は、覆土中から土師器坏(図45-1)や炭化材(クリ、コナラ属コナラ節)が出土しているほか、検出面に白頭山-苦小牧テフラが堆積していたことから、廃絶時まで開口・機能していたものと考えられる。また、SK2南側の壁際には、被熱により硬化した火床面が広がっており、被熱は約4cmに及ぶ。

[堆積土] 13層に分層した。1~5層は黒褐色土及び暗褐色土を主体とした自然堆積である。3層上面で火山灰を層状に含む。火山灰は分析の結果、白頭山-苦小牧テフラに帰属すると推定される(第2章第7節)。6層~13層はカマド覆土である。

[出土遺物] 堆積土中から土師器7,429g、須恵器1,521g、石器1,973g、自然礫4,320g、土製品1点、縄文土器611gが出土した。甕は胴部が丸みを帯び口縁がくの字に外反するもの(図44-1・4)と、直立気味の胴部で口縁部が斜めに外反するもの(図44-2・3・5)とがある。いずれも外面はヨコナデ及びヘラケズリ、内面はヘラナデによる調整が基本である。図44-12は甕底部で、底面は胴部と同様にヘラケズリが施される。円盤状の底部を先に作出し、輪積みにより成形をおこない、最後にヘラケズリで整形しているとみられ、底部の粘土が一部はみ出している。同様の製作技法によると思われる甕は、岩ノ沢平遺跡でも多く出土している(青森県教育委員会2000)。図45-1はSK2の3層中から出土した土師器坏である。ロクロ成形で内面はミガキを施し黒色処理がなされる。図45-2・3は壺の破片である。図45-3はロクロ成形で底部は回転糸切りによる。薄手で固く、質感的に須恵器の可能性もある。須恵器は、大甕と壺の破片が出土している。大甕破片のうち図45-4は、断面の色

調や内面の当て具痕の特徴、遺構間接合の状況から、図38-1～4 (SI05) と同一個体と思われる。図45-5～8は、ロクロ成形の後、タタキによる整形が行われている。いずれも還元焼成が不十分であったためか浅黄橙色を呈しており、同一個体と考えられる。図45-9・10は壺である。ロクロ成形の後、外面はヘラケズリ、内面はヘラナデによる調整が施される。図45-10は、SI09カマド2出土破片と接合しており、器形や調整、胎土の特徴などから図59-7 (SI09) と同一個体と思われる。図45-11はキノコ形土製品である。胎土がキメ細かく、砂粒の動きは確認できないが、ヘラケズリによる面取りのような痕跡が傘部分の外面及び軸部分に確認できる。縄文時代のキノコ形土製品が紛れ込んだ可能性はあるものの、白頭山-苦小牧テフラの直上から出土しており(写真30中段右)、胎土や調整の特徴から平安時代の所産と判断した。平安時代のキノコ形土製品とすれば、青森県内では青森市野尻(2)遺跡(青森県教育委員会1996)に次いで2例目の出土である。

[小結] 出土遺物及び土層堆積状況から、9世紀後葉～10世紀前葉の中形の堅穴建物跡である。出土炭化材の年代測定結果は775-989 cal AD (2σ)、889-990 cal AD (2σ)、889-990 cal AD (2σ)、774-887 cal AD (2σ)であり、いずれも考古学的所見と矛盾しない(第2章第1節)。 (中門)

第8号堅穴建物跡 (SI08、図46～48、写真33・34・71)

[位置・確認] 調査区中央北西のQ-33・34グリッドに位置する。調査区北半斜面の南端、傾斜が緩やかになる箇所、標高約56.2～57.2mの第IV層中で確認した。重複する遺構はない。

[形状・規模] 平面形は隅丸長方形で、規模は長軸440cm、短軸437cm、床面積は19.4m²である。壁高は北東壁が78cm、北西壁が51cm、南東壁が37cm、南西壁が5cmで、掘方の掘削深度は最大で30cmである。壁は床面から外反しながら立ち上がり、北東壁・北西壁では中位から外反する。遺存の良い斜面上方側の壁の上部が崩落したものと推測される。建物の主軸方向はN-29°-Wである。

[床面・壁溝] 床面は全面がローム塊の混合する掘方埋土でほぼ平坦である。壁溝は検出されなかった。

[柱穴] 柱穴は検出されなかった。

[カマド] 北西壁のほぼ中央に構築されている。右袖・左袖ともに褐色粘土が最大14cmの高さで残存していた。カマド芯材は確認できなかった。火床面の規模は長軸20cm、短軸12cmの楕円状で、被熱厚は2cmである。カマド内は、火床面から煙道に向かって緩やかに上昇する。カマド内から土師器甕・坏(図48-2・11)が出土している。カマド付近からは天井部が崩落したと思われるにぶい黄褐色～にぶい黄橙色粘土が確認されており、周囲から甕や坏の破片(図48-1・3・7・10)が出土している。

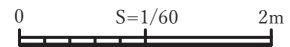
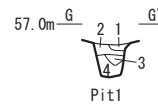
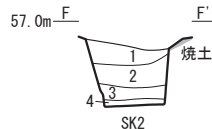
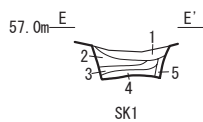
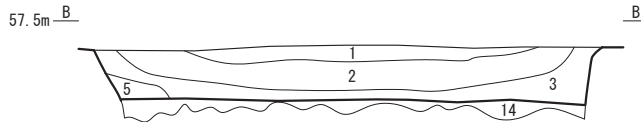
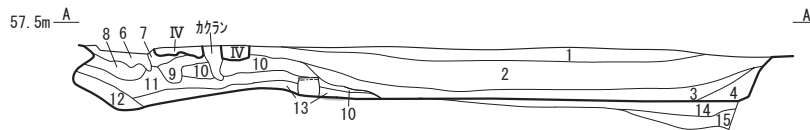
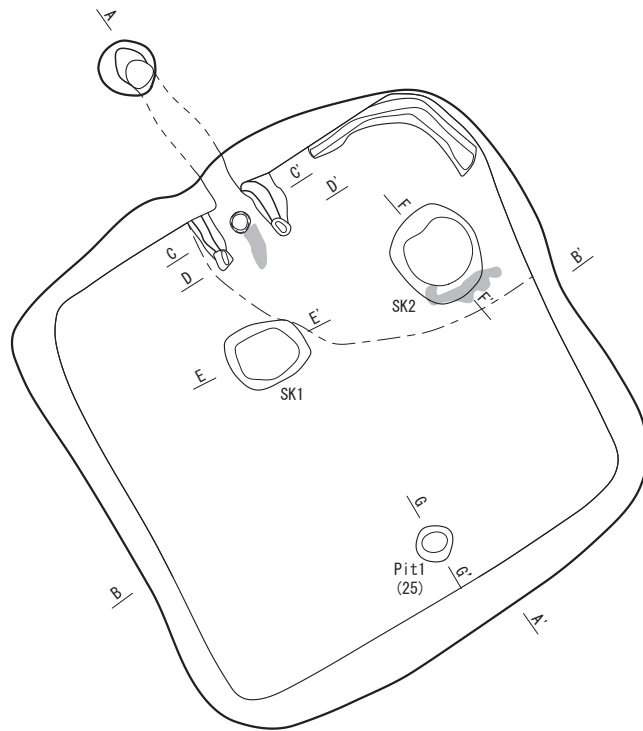
煙道は地下式である。煙道長は120cmで、カマド軸方位はN-31°-Wである。煙出坑は34cm×32cmのほぼ円形、深さは87cmで、ほぼ垂直に掘り込まれている。煙道の底面は、建物跡の壁面付近から煙出坑に向かって傾斜する。

[付属施設] 床面の東半で土坑を2基検出した。重複しており、SK1が新しい。SK1は77×49cmの楕円形で深さ12cm、SK2は122×63cmの不整楕円形で深さ13cmである。ともに単層で人為堆積と思われる。用途は不明である。

[堆積土] 暗褐色～にぶい黄褐色主体で、掘方埋土を含め9層に分けられる。掘方埋土以外は自然堆

S107

U-20



S107 (A-A'・B-B')

- 1層 10YR 2/1 黒色土 浮石1%
- 2層 10YR 3/3 暗褐色土 浮石10%
- 3層 10YR 4/3 にぶい黄褐色土 白頭山-苦小牧テフラを層状に含む (30~50%)、壁際の三角堆積で特に厚く堆積
- 4層 10YR 4/4 褐色土 壁の崩落土含む、浮石5%
- 5層 10YR 3/3 暗褐色土 浮石5%
- 6層 10YR 4/4 にぶい黄褐色土 黄橙色浮石10%、浅黄橙色粘土3%、カマド覆土
- 7層 10YR 3/4 暗褐色土 黄橙色浮石40% (天井の崩落土混じる)、カマド覆土
- 8層 10YR 4/3 にぶい黄褐色土 黄橙色浮石30%、カマド覆土
- 9層 10YR 4/4 褐色土 黄橙色浮石1%、カマド覆土
- 10層 10YR 4/3~4/6 にぶい黄褐色~褐色土 焚き口側で明黄褐色土を含む (袖構築材か?)、浮石1%、焼土1%、カマド覆土
- 11層 10YR 3/4~4/3 暗褐色~にぶい黄褐色土 黄橙色浮石1%、焼土5%、北端に白色粘土 (袖構築材か?) が斑状に堆積、カマド覆土
- 12層 10YR 4/6 褐色土、焼土1%、炭化物含む、カマド覆土
- 13層 7.5YR 5/6 明褐色土 カマド覆土
- 14層 7.5YR 4/4 褐色の粘土を主体に浅黄橙色土、黄橙色浮石、黒色土が混じる、貼床
- 15層 10YR 8/4 浅黄橙色土を主体に黒色土、にぶい黄褐色土、浮石が混じる、掘方埋土

S107 SK1 (E-E')

- 1層 10YR 2/2 黒褐色土 黄橙色浮石1%
- 2層 10YR 4/6 褐色土 黄橙色浮石5%、ローム混じりの土
- 3層 10YR 6/4 褐色土 にぶい黄褐色 粘土質
- 4層 10YR 3/3 暗褐色土 ローム混じりの土
- 5層 10YR 4/3 にぶい黄褐色土 黄橙色浮石3%

S107 SK2 (F-F')

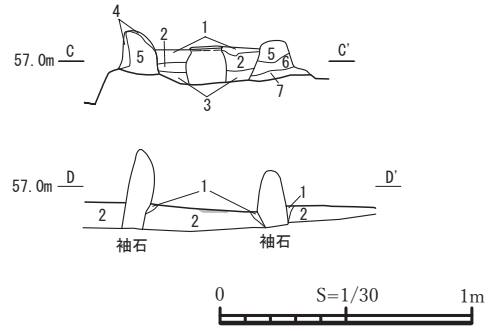
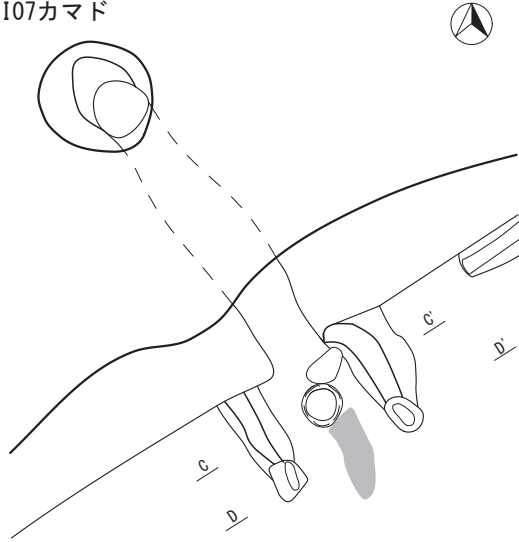
- 1層 10YR 2/2 黒褐色土 黄橙色浮石3%、上部に白頭山-苦小牧テフラ堆積
- 2層 10YR 2/3 黒褐色土 黄橙色浮石1%
- 3層 5YR 4/6 赤褐色土 焼土層 (燃焼面ではない)、炭化材をバックしている
- 4層 10YR 3/2 黒褐色土 焼土混じる

S107 Pit1 (G-G')

- 1層 10YR 2/2 黒褐色土
- 2層 10YR 3/3 暗褐色土 黄橙色浮石10%
- 3層 10YR 7/4 にぶい黄褐色土 壁崩落土か
- 4層 10YR 3/4 暗褐色土 黄褐色浮石1%

図41 第7号竪穴建物跡 (1)

SI07カマド



SI07カマド (C-C')

- 1層 10YR3/3 暗褐色土 黄褐色浮石1%、焼土5% (一部ブロック状に含む)
- 2層 10YR3/2 黒褐色土 黄褐色浮石3%、灰白色粘土3%、焼土1%
- 3層 10YR3/3 暗褐色土 灰白色粘土5%、焼土1%、ロームブロック混入
- 4層 10YR4/4 褐色土 黄褐色浮石10%、炭化物5%、一部被熱し赤色化 (7.5YR 5/3)
- 5層 10YR7/3 にぶい黄橙色土 袖構築材の粘土
- 6層 10YR4/4 褐色土 黄褐色浮石5%、焼土1%
- 7層 10YR7/3 にぶい黄橙色土 袖構築材の粘土

SI07カマド (D-D')

- 1層 10YR4/4褐色土 黒色土混じる、袖石掘方埋土
- 2層 貼床

SI07遺物出土状況

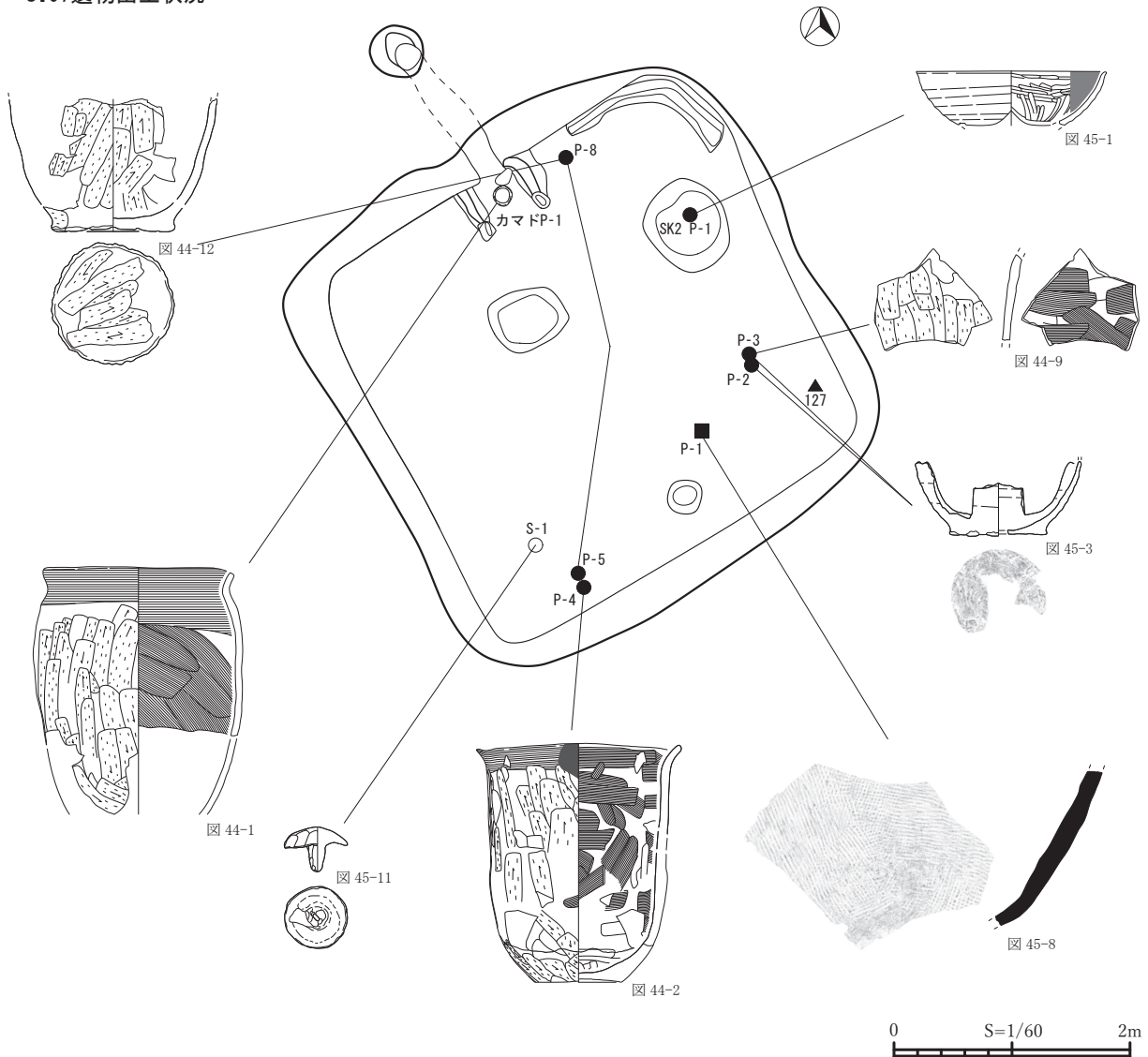
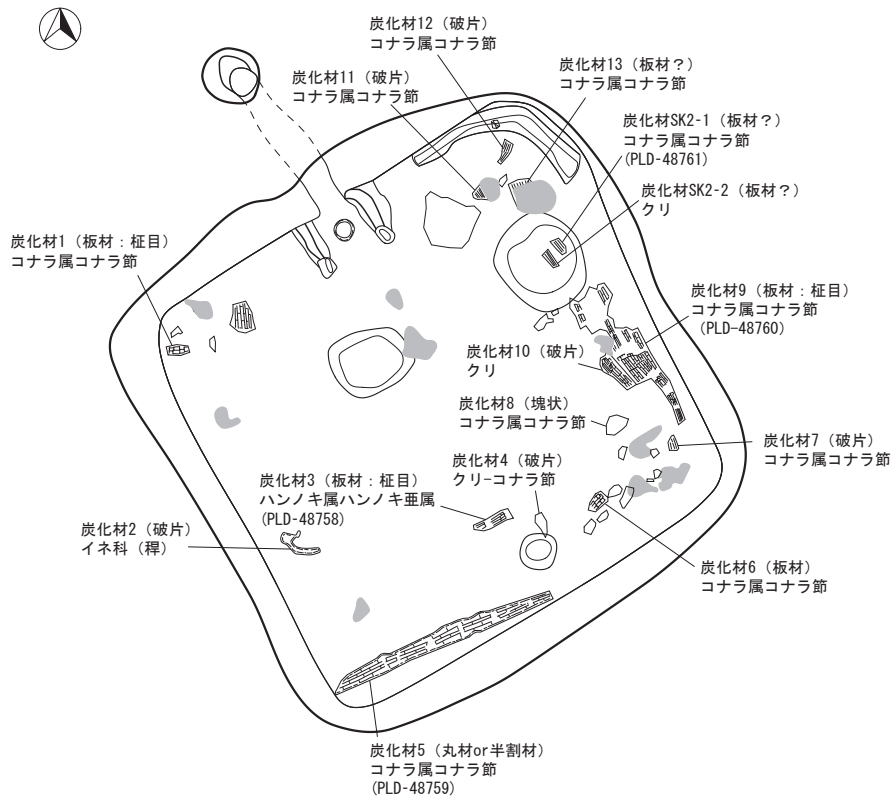


図42 第7号竪穴建物跡(2)

SI07炭化材・焼土検出状況



SI07火山灰検出状況

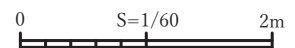
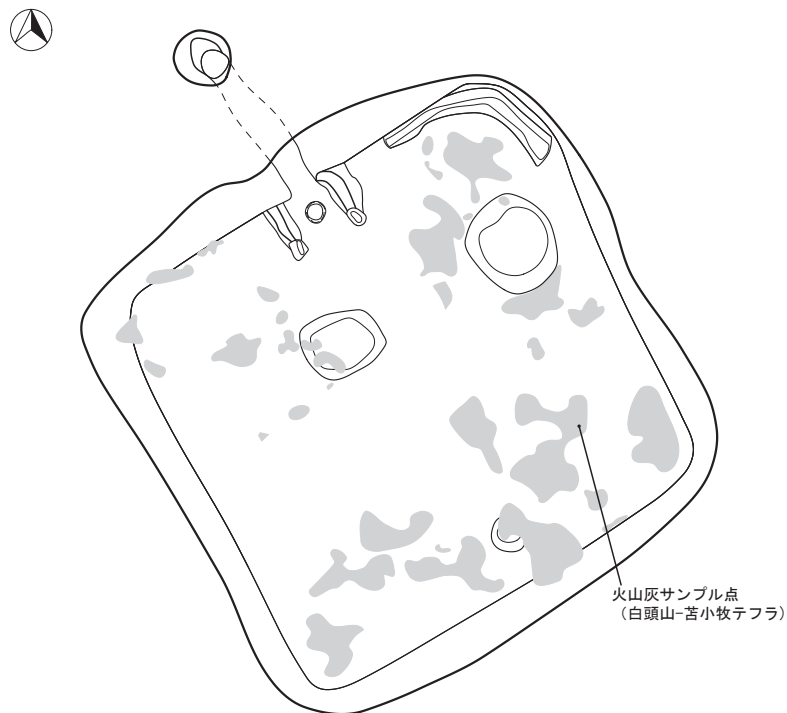


図43 第7号竪穴建物跡 (3)

S107 土師器

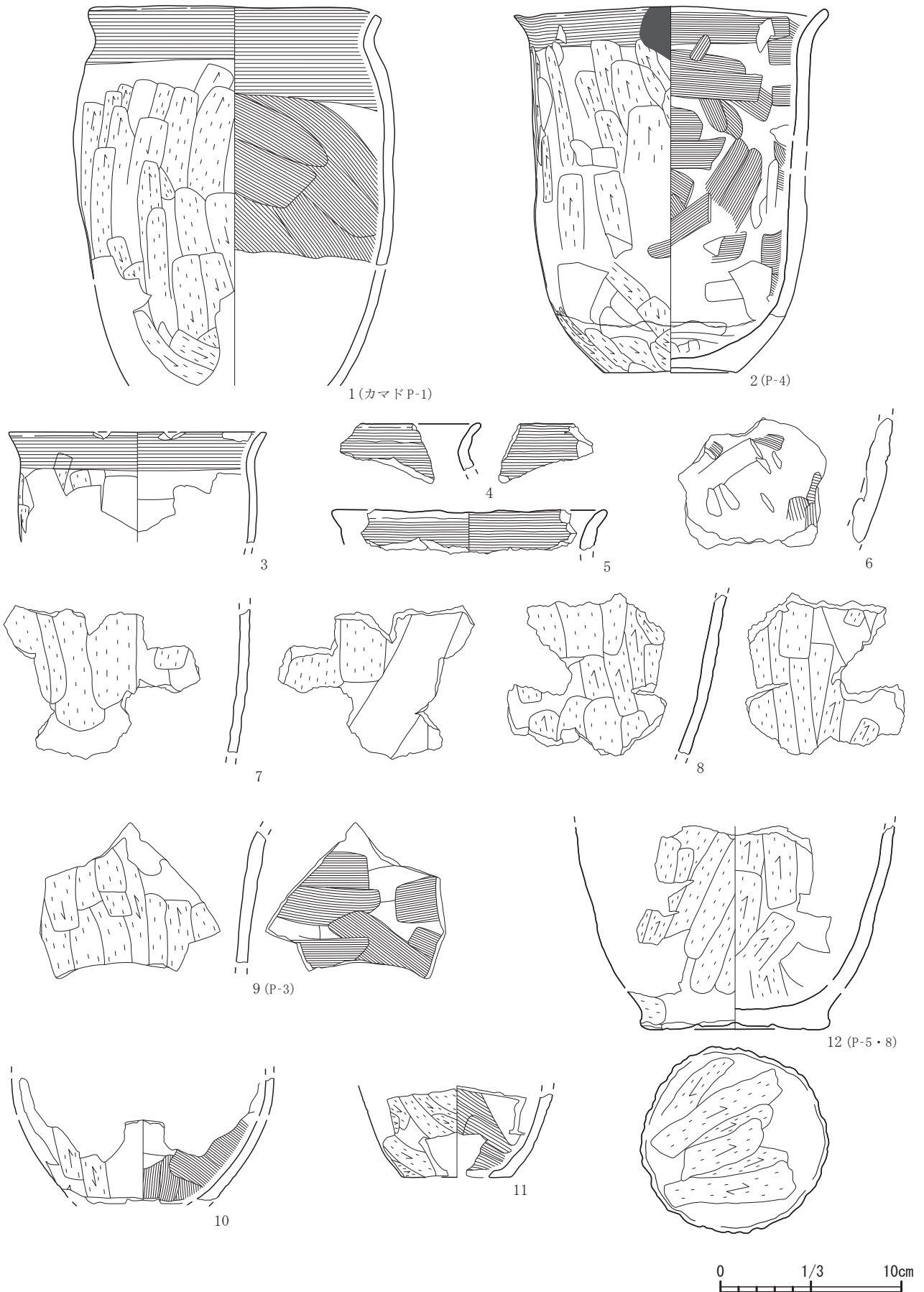


図44 第7号竪穴建物跡出土遺物(1)

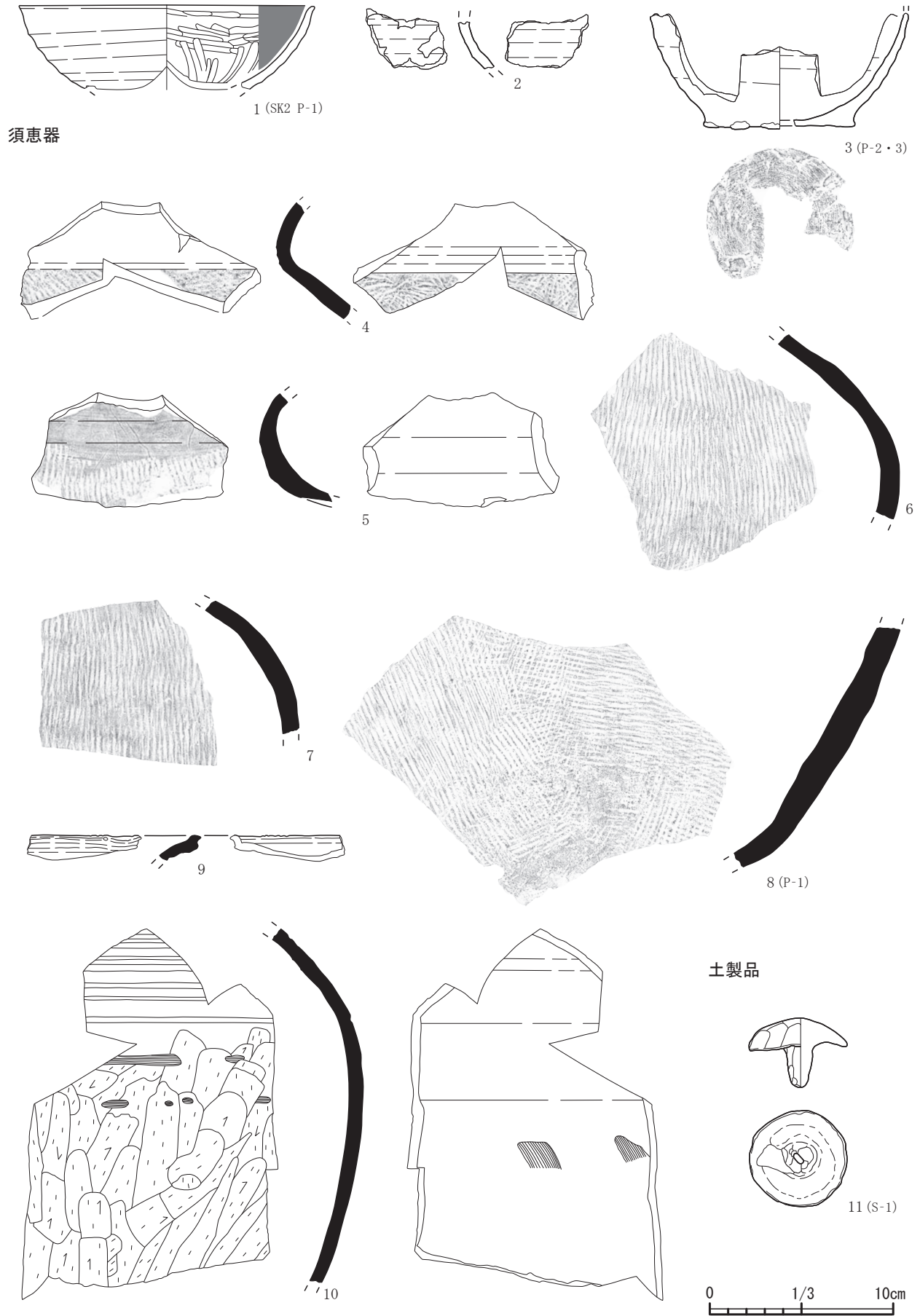


図45 第7号竪穴建物跡出土遺物（2）

積と推定される。壁際の6～8層は壁の崩落土と考えられる。床面付近の5層には、白頭山一苦小牧テフラと推定される火山灰がブロック状に堆積する。中位以上の1～4層は軽石が混入しており、斜面からの流入土と推測される。

[出土遺物] 土師器片2,549g・須恵器25gが出土した。出土箇所別の比率は、床面35% (900g)、カマド(カマド堆積土含む) 28% (716g)、堆積土中37% (958g) で、建物跡南半の床面とカマド周辺からほとんどである。土師器12点・須恵器1点を図示した。

図48-1～12は土師器で、1～8は甕、9は鉢、10～12は坏である。1・2はほぼ完形の小型甕である。短い口縁部が「く」字状に屈曲する。外面にケズリ、内面にナデが施されている。1は外面に径3cm程の剥離やひび割れが認められ、被熱痕跡と考えられる。また、内面には口唇部直下に煤状の付着物が帯状に観察される。支脚の可能性はある。2は底部付近が赤化しており、こちらも被熱と考えられる。3～5は甕の口縁部片である。3・4は短い口縁部が「く」字状に屈曲するもので、1・2と同様に小型甕と思われる。5は口縁部が外傾するものである。器面は摩耗が激しく、調整の観察は困難である。胎土の密度は他に比して粗く、焼成は軟質である。器面・断面ともに赤褐色をしており、脆い。被熱痕跡と考えられ、製塩土器の可能性はある。6～8は甕の胴部片である。6・7の外面はナデ、8はケズリが施されている。内面はいずれもナデである。9は鉢である。短い口縁部が「く」字状に屈曲する。頸部から底部に向かって窄まる器形と思われるが、底部を欠いている。外面はケズリ、内面はナデが施されている。外面には部分的に平滑な箇所があり、ミガキが施された可能性がある。10～12は坏である。いずれもロクロ形成のものである。10・12は内面に横位方向のミガキが施され、黒色処理されている。11は内面の黒色処理がされていない。10は器高が他より高く、底部には再調整痕がある。これらの坏は胎土中に海綿骨針の混入が目立つほか、器面が粗く、粉っぽい。11は器面・断面ともに赤褐色であるため、二次被熱を受けて赤化している可能性がある。また、出土位置からカマド支脚の可能性も考えられるが、赤化は顕著ではない。

13は須恵器である。長頸壺の口縁～頸部で、逆「ハ」字状に外反する。胴部との境に凸帯は認められない。胎土は灰白色で、径4mm前後の白色粒の混入が目立つ。産地は不明である。

[小結] 火山灰や出土遺物特徴から、9世紀後葉から10世紀前葉の年代が考えられる。 (平山)

第9号竪穴建物跡 (SI09、巻頭写真5、図49～61、写真35～40・71～74)

[位置・確認] V～W-26～28グリッド、標高57.2～57.7mの平坦面に位置し、第IV層中で確認した。第10号・第26号溝状土坑と重複し、本遺構が新しい。また、北西側の一部は近現代の溝跡や重機による攪乱を受けている。

[規模・平面形] 計測規模は南北長692cm、東西長776cmを測り、特大形の建物跡に分類される。今回検出した竪穴建物跡の中では最も大型である。検出面から床面までの深さは57cmである。床面積は38.3㎡で、壁は開き気味に立ち上がる。建物の主軸方向は、N-19°-Wである。

[床面・壁溝] 掘方は50～200cmの幅、深さ最大30cm程度で壁際を全周するように掘り込まれている。床面は7割が掘方埋土となっており、平坦に整えられている。壁溝は幅10～30cm、深さ12～36cmで掘方埋土を掘り込んでおり、南壁で一部途切れるがほぼ全周している。

[柱穴] 床面から11基の柱穴を検出した。いずれも掘方埋土を掘り込んでいる。

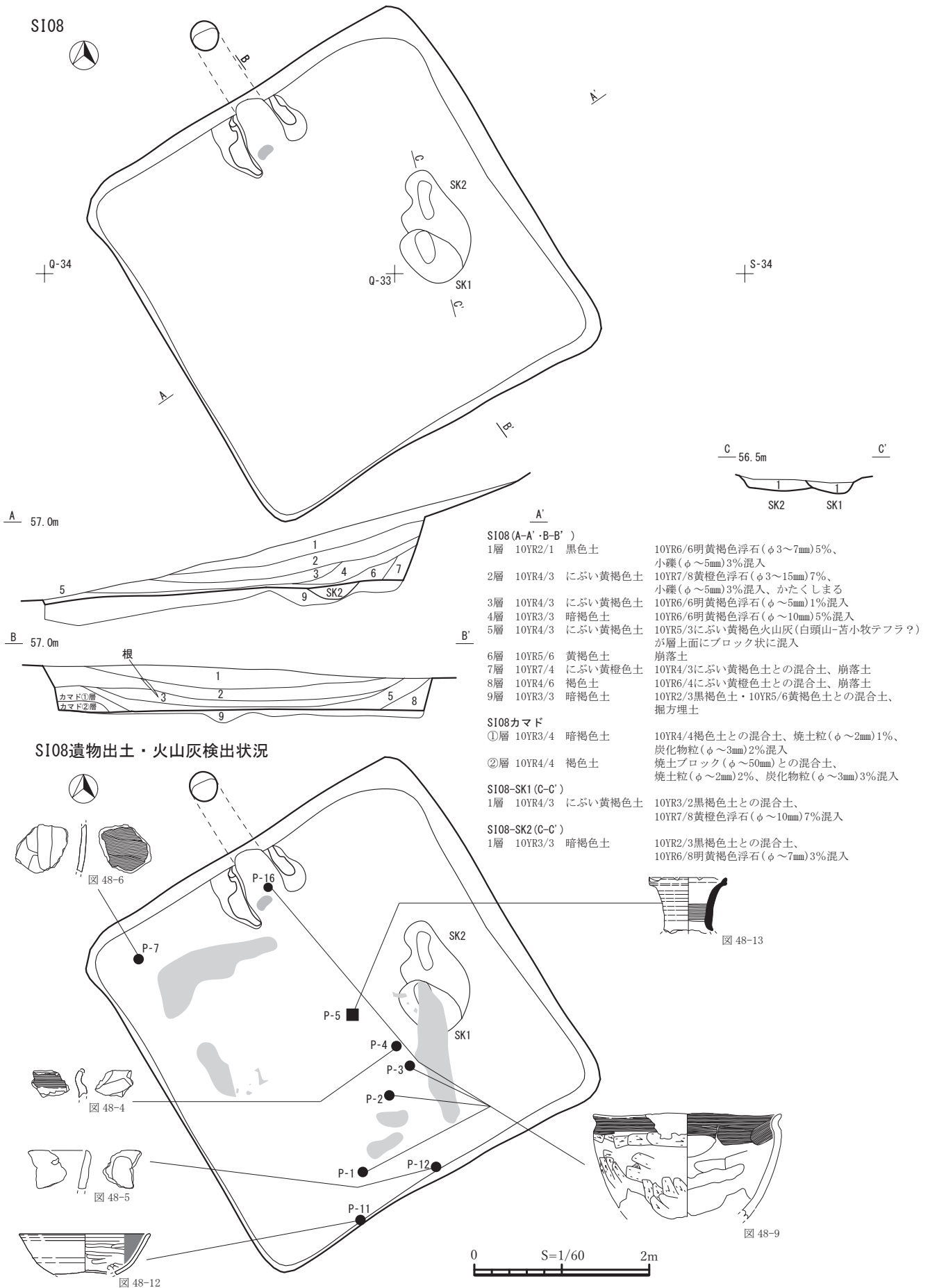


図46 第8号竪穴建物跡(1)

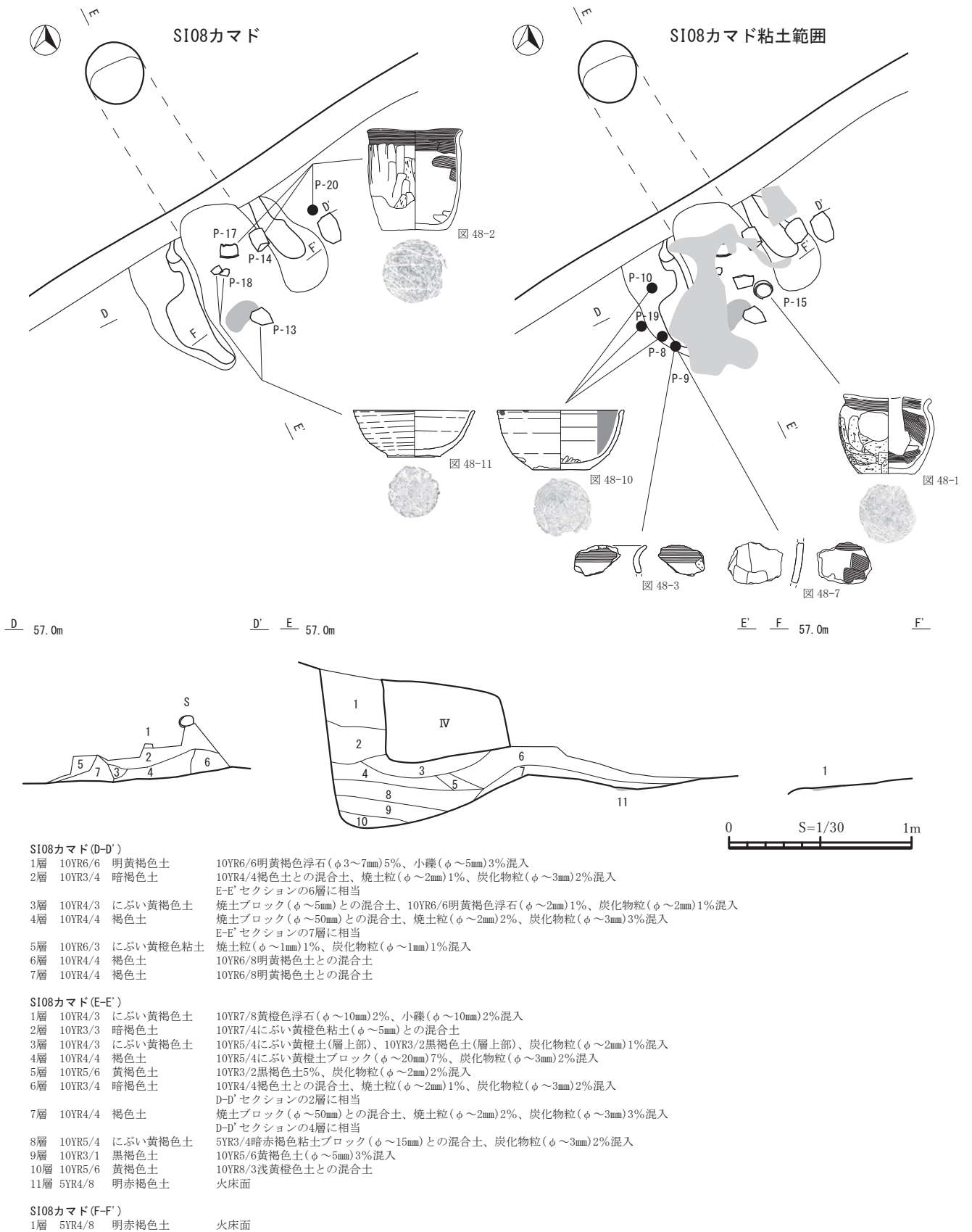


図47 第8号竪穴建物跡(2)

SI08 土師器

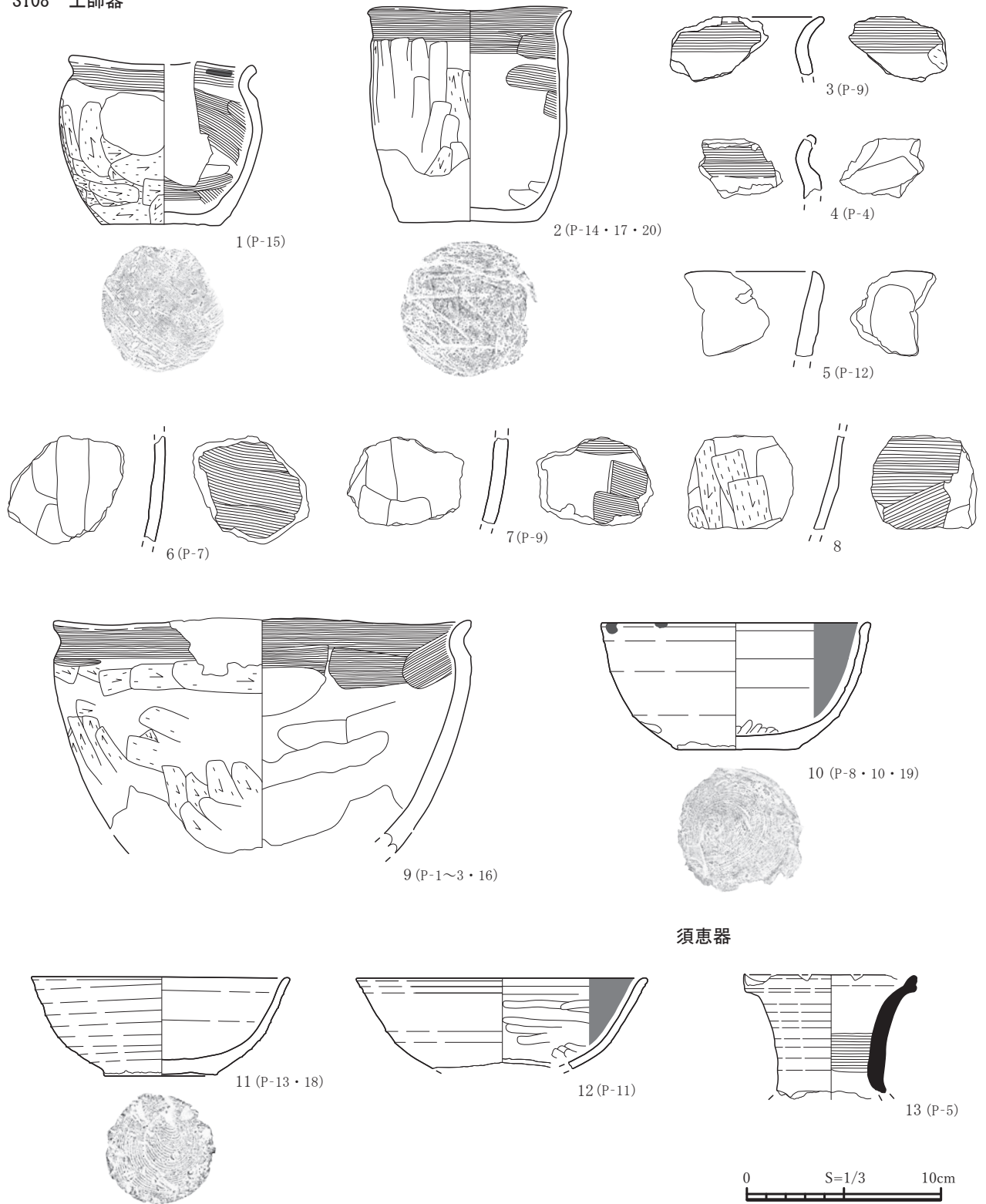


図48 第8号竪穴建物跡出土遺物

・Pit 1 : 床面北西側でカマド 2 の火床面に隣接した位置から検出。平面形は円形で、開口部規模は 52×49cm、深さは 52cm である。焼土 1 よりも新しい。また、検出位置からカマド 2 と重複関係にあると思われるが、直接切り合っていないため、新旧関係は不明である。しかし、後述するがカマド 2 が建物跡廃棄時に破壊されたと推測できることから、Pit 1 の方が古い可能性がある。

・Pit 2 : 床面北東側から検出。平面形は円形で、開口部規模は 73×70cm、深さは 68cm である。支柱穴を構成する Pit と考えられる。

・Pit 3 : 床面南東側から検出。平面形は長方形で、開口部規模は 47×28cm、深さは不明であるが、調査時の所見としては隣接する Pit 6 と同程度の深さを有しており、支柱穴を構成する Pit と認識していた。

・Pit 4 : 床面北西側から検出。平面形は円形で、開口部規模は 40×36cm、深さは 39cm である。

・Pit 5 : 床面南西側から検出。平面形は円形で、開口部規模は 36×34cm、深さは 28cm である。

・Pit 6 : 床面南東側から検出。平面形は長方形で、開口部規模は 43×24cm、深さは 61cm である。支柱穴を構成する Pit と考えられる。

・Pit 7 : 床面北西側から検出。平面形は円形で、開口部規模は 48×43cm、深さは 32cm である。焼土 2 と重複しているが、上端縁辺がわずかに重複している程度であり、新旧関係は不明である。

・Pit 8 : 床面南西側から検出。平面形は長方形で、開口部規模は 63×46cm、深さは 71cm である。底面が長方形に一段低くなっており、この部分が柱痕である可能性がある。

・Pit 9 : 床面南西側で、カマド 1 の火床面に隣接して検出した。検出位置からカマド 1 と重複関係にあると思われるが、新旧は不明である。しかし、カマド 1 は建物跡の最終段階に破壊されていると判断できる事から、これより古いと考えられる。平面形は円形で、開口部規模は 29×26cm、深さは 33cm である。

・Pit 10 : 南壁中央付近から検出した。壁溝が一部途切れる端部に位置している。完掘した結果、西側が一段低くなっていたことから、この部分を Pit 11 としたが、同一遺構である可能性もある。平面形は円形で、開口部規模は 47×38cm、深さは 42cm である。

・Pit 11 : 前述したように Pit 10 に隣接して検出した。深さは 12cm である。

(小結) : 調査時には Pit 2・6 (ないしは 3)・7・8 が配置と深さから支柱穴と捉えており、第 3 章第 3 節で中村氏もこれを肯定している。しかし、Pit 7 と焼土 2 の関係から、Pit 2・3 (ないしは 6)・4・5 で支柱穴を構成していた段階があった事も想定できる。カマド 1 が建物跡の最終段階まで機能していたことを考えると、カマド 1 の火床面から離れた Pit 8 を含む Pit 2・6・7・8 の組み合わせが最終段階での柱穴配置であった可能性がある。

[カマド] 南壁側と北壁側で検出した。南壁側では粘土の広がりを検出できた一方で、北壁側では検出できなかったことから、南壁側を新しいと想定しカマド 1 とした。

・カマド 1 : 南壁の西端付近に位置している。覆土掘り下げ時に 193×51cm の不正形範囲で粘土の広がりを検出した。主軸方向は N-163°-E である。カマドは地下式で、煙道は長さ 117cm、深さ 15~25cm、約 60 度の角度で第 IV 層を掘り込み煙出坑底面へ向かって下っている。煙出坑は 37×32cm、深さ約 100cm の規模で掘り込まれており、煙出坑底面からは須恵器甕の口縁~肩部が出土した。整理時に床面から出土した他の破片と接合しほぼ完形に復元されており (図 58-3)、建物跡廃絶時にカマド封

じのような儀礼的な事が行われたと思われる。袖は両袖共に壊されており検出できなかった。火床面の上面は硬化しており、62×58cm、最大深度9cmで被熱している。

・カマド2：北壁の中央から若干西寄りに位置している。煙出坑が2つ、火床面も2面検出されたことから、新旧2段階があると考えられる。

(新段階)：主軸方向はN-7°-Eである。カマドは地下式で、煙道は長さ151cm、深さ20cm程度で、第IV層を掘り込み煙出坑底面へ向かって下っている。煙出坑は80×60cmである。なお、調査時に壁やベルトが崩落しトレンチ状に掘り上げたことから、本来の深さは不明である。土層図では約60cmの掘り込みを確認している。袖は両袖共に長さ約40cm、幅20cm、最大高さ23cmで残存し、ロームと黒色土の混合土が材とされている。残存袖の延長線上にあたり、かつ火床面の脇からレンガ状土製品が出土した。土製品が埋設されており、調査時には芯材の一部として捉えていた。この土製品は整理時にSI09-SK3の1層中から出土したS-1、住居の壁際で住居堆積土7層から出土したS-7と接合した(図61-1)。この状況から、建物跡廃絶時にカマドを破壊し、芯材として使用していたものをSK3の堆積土上位及び建物跡の壁際に廃棄したものと推測できる。火床面の上面は非常に硬化しており、46×42cm、最大深度5cmで被熱している。また、火床面の中央付近には25×20cmで、深さが3cm程度ある円形の落ち込みを検出した。検出位置から掛け口底面である可能性もある。

(古段階)：主軸方向はN-15°-Wである。新段階より23°西側へ振れており、古段階の方が壁に対して90°に近い角度で煙道が伸びている。煙道は長さ159cmで煙出底面へ向かって緩やかに下っている。煙出坑は約50cmの円形に掘り込まれている。深さに関しては前述したとおり不明であるが、煙道の傾きから新段階と大差のない60cm程度であると推測できる。火床面は新段階同様に非常に硬化しており、51×45cm、最大深度7cmで被熱している。

(小結)：カマド1、2共に建物跡廃絶時に破壊されたと考えられるが、遺物の出土状況には大きな違いがある。カマド1の煙出坑底面には須恵器の口縁部が置かれ、床面出土の須恵器片と接合しほぼ完形に復元できたことから、カマド封じなどの儀礼的なことが行われたと推測できる。一方、カマド2に関しては特に際だった遺物の出土状況は示していない。この状況から、カマド1の方が最終段階まで機能していた可能性がある。

[その他の施設] 床面から4基の土坑と、9基の焼土跡を検出した。このうち土坑3基は南北の中軸線上に並列して検出した。また、焼土跡は火床面上面が硬化するほど被熱していること、焼土跡よりも新しい土坑が存在することから(焼土7はSK2より古い)、建物跡焼失時の崩落焼土等とは区別した。これらの施設は時間差を持って存在していたと言えるが、そのセット関係は不明である。ただ、後述するが4基の土坑は火山灰の出土状況及び堆積状況、遺物の接合状況から建物跡廃絶時にほぼ同程度の深さで開口していた可能性がある。

・微細遺物抽出：調査時には鍛冶関連遺構の可能性を想定していたため、土坑は堆積土の底面直上の土を半截分、焼土遺構に関しては焼土を全量回収し、委託により土壌水洗を行い微細遺物の抽出を行った。結果、鍛造剥片や粒状滓など鍛冶に関する遺物は一切抽出されなかった。

・SK1：東西中軸線上より若干北側から検出した。平面形は隅丸方形で開口部規模は118×100cm、断面形は箱形で壁は開き味に立ち上がり、深さは59cmで、底面は平坦である。堆積土は6層に分層し、3層中には白頭山-苦小牧テフラと思われる火山灰が自然堆積している。検出面から3層下面までは

約30cmあり、火山灰堆積時にその深さで開口していた状況が推測できる。また、5層は炭化物を多量に含んだ黒色土層である。遺物は堆積土中から土師器片27gが出土しており、建物跡堆積土出土破片、SK2堆積土出土破片と接合した(図54-4)。

・SK2：ほぼ東西中軸線上から検出した。焼土7と重複しており、本遺構の方が新しい。平面形は隅丸方形で開口部規模は108×85cm、断面形は箱形で壁は開き気味に立ち上がり、深さは67cmで、底面は平坦である。堆積土は4層に分層した。堆積土上位には火山灰が小ブロック状に混在している。2層は炭化材等を多量に含んだ黒色土層で、SK1の5層と似たような特徴が見られる。遺物は堆積土中からSK1と接合した土師器甕片のほかに、壺の破片(図56-15)など362gが出土した。また、須恵器甕の破片(図59-4・5)が出土したが、図59-5は壺の可能性もある。また、手鎌(図60-3)、靱尻金具(図60-8)などの鉄製品が出土した。

・SK3：東西中軸線の南側から検出した。平面形は隅丸方形で開口部規模は111×82cm、断面形は箱形で壁は開き気味に立ち上がり、深さは64cmで、底面は平坦である。堆積土は4層に分層した。1層中には火山灰が小ブロック状に混在している。遺物は堆積土中から土師器甕の破片(図55-14)171.9gが出土したほか、須恵器大甕(図56-16)、須恵器壺(図59-6)が出土した。それぞれ堆積土から出土した破片と接合している。また、カマド2でも記載したが、1層中から出土したレンガ状土製品がカマド2の芯材や、堆積土中から出土したものと接合している。この接合状況から建物跡廃棄時には開口していたと考えられる。検出面から1層下面までは約34cmあることから、土製品廃棄時にはその深さで開口していた状況が推測できる。また、同じ1層中から炉壁片1点(図61-3)が出土した。

・SK4：床面南東側で東壁に沿うように検出した。平面形は隅丸長方形で張り出しを有している。張り出し部を含めた開口部規模は237×103cm、断面形は箱形で壁は開き気味に立ち上がっている。深さは長方形部で69cm、張り出し部で38cmで、底面は平坦である。堆積土は5層に分層した。5層はロームとの混合土が堆積し、3・4層には炭化材等を多量に含んだ黒色土層が堆積している。この黒色土層はSK1・2でも確認できている。検出面から15cm下位には火山灰が層状に堆積しており、白頭山-苦小牧テフラとの分析結果が得られている(第2章7節)。白頭山-苦小牧テフラ堆積時には15cm程度開口していたものと推測できる。遺物は堆積土中から土師器甕の破片697gが出土したほか、張り出し部の堆積土5層から刀子が出土した(図60-6)。

・焼土1：床面北側でPit1とカマド2に隣接して検出した。Pit1より古い。カマド2と重複関係にあったと思われるが、検出状態では直接重複していないため新旧関係は不明である。しかし、カマド2が前述のように建物跡廃棄時まで存在していたとすると、これより古い可能性がある。49×33cmの規模で被熱している。上面は比較的硬化しているが、最も強く硬化している焼面と比すると弱い。

・焼土2：床面北西側から検出した。Pit7と接しているが、新旧関係は不明である。81×45cm、最大深度2cmの規模で被熱しており、焼面は非常に硬化している。

・焼土3：床面北西側から検出した。近接して検出した3基の焼土跡をまとめて遺構名を付した。焼土3-1は20×8cm、焼土3-2は20×14cm、焼土3-3は63×27cm、最大深度4cmの規模で被熱している。また、焼土3-3の焼面は非常に硬化している。

・焼土4：床面北側から検出した。近接して検出した3基の焼土跡をまとめて遺構名を付した。焼土4-1は21×14cm、焼土4-2は12×10cm、焼土4-3は32×28cm、最大深度4cmの規模で被熱している。ま

た、焼土4-3の焼面は非常に硬化している。

・焼土5：床面ほぼ中央でSK1の東側に隣接して検出した。47×45cm、最大深度3cmの規模で被熱しており、焼面は比較的硬化しているが、強く硬化している焼面と比べると弱い。

・焼土6：床面ほぼ中央で焼土5の東側に隣接して検出した。63×47cm、最大深度2cmの規模で被熱しており、焼面は比較的硬化しているが、強く硬化している焼面と比べると弱い。

・焼土7：床面ほぼ中央、SK2の西側で重複して検出した。本遺構の方が古い。61×(25)cm、最大深度3cmの規模で被熱しており、焼面は非常に硬化している。

・焼土8：床面ほぼ中央で、SK2に隣接して検出した。42×41cm、最大深度5cmの規模で被熱しており、焼面は非常に硬化している。

・焼土9：SK2の南東側から検出した。71×47cm、最大深度3cmの規模で被熱しており、焼面は比較的硬化しているが、強く硬化している焼面と比べると弱い。

(小結)：火山灰はSK1が検出面から30cm、SK4が15cm下位に白頭山-苫小牧テフラが自然堆積している。次に炭化物・炭化材、焼土ブロックを多量に含む層が堆積している土坑はSK1、SK2、SK4である。この層は建物跡焼失時に堆積した土と捉えるのが妥当と思われる、SK1、SK4は火山灰層よりも下位に堆積していることから矛盾しない。遺物の接合状況では、SK1とSK2出土のものが接合し、SK4と建物跡堆積土出土の破片が接合している。これらのことから、SK2には白頭山-苫小牧テフラが堆積していないが、SK1・2・4は廃棄時に同程度開口していたと推測できる。一方、火山灰も黒色土も堆積していないSK3であるが、1層中から出土したレンガ状土製品がカマド2の芯材及び建物跡堆積土から出土したものの接合していること、ほかにも建物跡堆積土出土破片と接合した須恵器片があることから、SK3も開口していた事が想定でき、土坑全てが開口していたと捉えられる。

焼土跡の焼面はいずれも硬化しており、特に焼土2、3-3、4-3、7、8は硬化の度合いが強い。しかし、還元まではしていない。調査時には鍛冶関連の工房跡と想定していたため、土坑堆積土の一部と焼土を全量回収し微細遺物の抽出を行ったが鍛造剥片や粒状滓など鍛冶に関する遺物は含まれていなかった。

[堆積土] 8層に分層した。1～3層は自然堆積層で、4～7層が人為堆積もしくは焼失時の堆積土で遺物を多く含んでいる。8層は掘方埋土である。3層下面に堆積していた火山灰を分析したところ十和田aテフラとの結果が得られた(第2章第7節)。一方で前述したようにSK4に堆積していた火山灰は白頭山-苫小牧テフラとの結果が得られていることから、建物跡に堆積した火山灰は十和田aテフラが二次堆積したものと捉えられる。

[炭化材] 床面から多量の炭化材が出土し、形状の判別できる30点を図化した(図50)。炭化材は主に建物跡北半に偏って出土した。形状や出土位置を加味して8点の樹種同定を行ったところ7点(炭化材1・4・8・10・19・25・29)がコナラ属コナラ節で、1点がクリ(炭化材22)であった(第2章第5節)。材種としては、柎目板状(炭化材4・8・22)や角材(炭化材29)と思われるものが含まれていた。さらに、炭化材19は放射性炭素年代測定も行っており、894-1020 cal AD(2σ)との結果が得られた(第2章第2節)。

[出土遺物] 堆積土及び施設内から土師器18,239g、須恵器10,584g、鉄関連遺物としては鉄製品10点、鉄滓類8点、羽口2点が出土した。鉄製品は遺跡全体でも12点しか出土しておらず、本建物跡に集中

しているといえる。鉄滓も同様に出土量の9割が本建物跡から出土している。建物跡に伴う可能性のある石器としては砥石が1点、土製品はレンガ状土製品が5点、炉壁片2点、石製品は軽石製品3点が出土した。その他に縄文土器1,074g、石器16点、自然礫11,124gが出土した。

(遺構間接合状況) SI01、SI05、SI07出土遺物と遺構間接合した。SI01の堆積土中から出土した土師器片と本遺構の堆積土出土破片が(図26-5)、SI05の床面直上から出土した須恵器大甕と本遺構の堆積土中から出土した破片が(図38-2)、SI07の堆積土出土須恵器片と本遺構のカマド2検出面から出土した破片が(図45-10)接合した。

(土師器) 甕(図54-1～図56-4)、小壺(図56-5)、坏(図56-6～12)、壺(図56-13～15)が出土した。図54-1は口縁の外反度合いが弱く、屈曲部に段を有し、胴部が膨らむ器形で、外面はミガキ調整されている。外面調整はヨコナデやケズリがほとんどで、1や図55-14のようにミガキが施されているものは非常に少ない。成形は輪積みによるものが多いが、図55-6・7のようにロクロ成形されているものが混在する。また、ロクロ成形されているものは口縁の外反度が強い。なお、底面には木葉痕が付着しているものもある(図56-2～4)。小壺(図56-5)は器高4.5cmほどで、口縁部との境界で段を持ち、口縁部は短く直立気味に立ち上がっている。外面調整はヘラケズリ・ミガキが、内面調整はミガキ・ヘラナデ・黒色処理が施されており、内面の黒色処理は一部外面に及んでいる箇所もある。坏(図56-6～12)はロクロ成形されており、内面には黒色処理が施され、底面には回転糸切り痕を残している(図56-6・9・10)。なお、静止糸切り痕のものは出土しなかった。壺(図56-13～15)はロクロ成形されている。13は焼きが硬質で、須恵器の可能性もあるが、須恵器壺と比較すると胎土に2～5mm大の砂礫が多く含まれていること、割れ口の色調が異なっている事などから土師器とした。

(須恵器) 大甕(図56-16～図57-6)、甕(図58-1・2)、壺(図58-3～図59-7)、坏(図59-8・9)が出土した。大甕及び甕の断面色調は10YR4/1～6/1の褐灰色をしているものが多く、胎土には2～5mm大の砂礫が比較的多く混在している。砂礫は坏の胎土にも多く含まれている。一方、壺は断面色調10YR7/1・8/1の灰白色をしているものが多く、甕・坏に比して砂礫の混入は少ない。

大甕破片の図57-1は外面及び割れ口の色調が他とは異なり10YR6/8の橙色をしている。還元焼成が不十分のためこのような色調となった可能性がある。図57-4・5は外面観及び胎土・調整の度合いが似ており、同一個体である可能性がある。甕破片の図58-1は胎土に砂粒が多く含まれているせいか触感は非常にザラザラしており、他とは異なる。図58-3は既述しているが、口縁部～肩部がカマド1の煙出坑底面から、それ以外が床面直上に破片で出土していたものが接合し、完形に復元できた壺である。外面色調は10YR3/1黒褐色に近く、断面色調は10YR7/1の灰白色である。口縁部は大きく歪んでおり、今でいう訳あり品の類いであると思われる。このような粗悪品でも廃絶に伴う儀礼的なものに使用されており、本建物跡で日常的に使用されていたと推測できる。須恵器の価値観を考える上でも興味深い。図59-1は外面及び割れ口の色調が10YR6/8の橙色をしている。還元焼成が不十分のためこのような色調となった可能性がある。坏破片である図59-8は底部がわずかに高台状となっており、底面には回転糸切り痕が残る。また、内面には火轆痕がみられる。

(鉄滓) 含鉄碗形鍛冶滓、碗形鍛冶滓、含鉄鍛冶滓、鍛冶滓など8点出土しており、含鉄碗形鍛冶滓2点を図化した(図59-10、11)。

(鉄製品) 図60-1～3が手鎌、4、5が鉄鏝、6が刀子、7が鑿、8が鞆尻金具、9が延板、10が不明鉄製品である。

(羽口) 図60-11は現存する長さは23cm、最大幅10.1cm、最大厚さ8.8cm、内径が4cm程度で、断面形は蒲鋒形である。先端部の被熱が最も強く溶解しガラス質の物質が付着している。被熱角度は60～70度である。図60-12は先端部付近と思われる破片である。

(石器) 砥石が1点出土した(図60-13)。チャート素材としており、4面使用している。

(土製品) 図61-1はレンガ状土製品で、カマド2の底面に埋設されていたものとSK3の1層、建物跡堆積土から出土したものが接合し、ほぼ完形に復元できたものである。長さ38cm、幅18cm、厚さ35cmで、同じく完形に復元できたSK26出土のレンガ状土製品とほぼ同規模である。また、長辺の片側側面が湾曲し、焼成面よりも新しい擦切痕が認められる点も同じである。いずれも焼成後に加工を施したものと考えられる。焼成前の加工としては器面及び側面にケズリ痕が確認できる。大きさや、形状、調整が同じであることから定型的な作り方がされているといえる。また、胎土に含まれている砂礫は非常に少なく、土師器の胎土と似ている。一方、繊維は比較的多く含まれており、表面には抜け落ちた痕跡などが観察できる。これは図61-2・3も同様である。図61-4・5は胎土や焼成度合いはレンガ状土製品と似ているが、厚みがあること、被熱していることから、炉壁片と判断した。

(石製品) 図61-6は軽石製品である。器面には弱く湾曲した面を有し擦痕が認められる。また、折れ面も石の凹凸がなくなり平らになるまで擦られている。

[小結] 本遺構は南北長692cm、東西長776cmを測り、今回の調査では最も規模の大きい特大形になる建物跡である。床面からは土坑4基、焼土跡9基が検出され、土坑は堆積状況や遺物の接合状況から建物跡廃棄時にはほぼ同程度の深さで開口していたと考えられ、4基同時に機能していたことが推測できる。焼土跡は焼面が強く被熱し硬化しているが還元まではしていない。土坑とセットになり機能していた可能性もあるが関係は不明である。カマドは2基検出され、2基共に建物跡廃棄時に破壊されたと考えられるが、一方のカマドにのみ儀礼的なことが行われていることから、建物跡廃棄時に稼働していたのは1基であった可能性もある。また、柱穴配置と焼土跡の位置関係から、建て替え等が行われた可能性もある。

調査時は鍛冶関連の工房跡であることを想定し、床面や焼土・土坑精査時に鍛造剥片等の発見に努めたが出土しなかった。また、土坑堆積土の一部と焼土全量を持ち帰り水洗・微細遺物の抽出を行ったが、鍛冶に関連する遺物は一切抽出できなかった。本建物跡の用途・目的に関しては不明であるが、建物跡廃絶時には須恵器壺を割り、カマドや床面に散布するなど儀礼的な行為が行われている。また、鉄製品や鉄滓の出土量が突出しているのも廃絶儀礼に関連する可能性がある。最後には焼失するが、その時期は火山灰の堆積状況から10世紀前半の十和田aテフラ降下以降、白頭山-苫小牧テフラ降下以前と捉えられる。土師器の年代観が9世紀後葉～10世紀前半であることも符合する。また、遺構間の接合状況から、SI01、SI05、SI07とほぼ同時期に埋没過程にあったといえる。(小山)

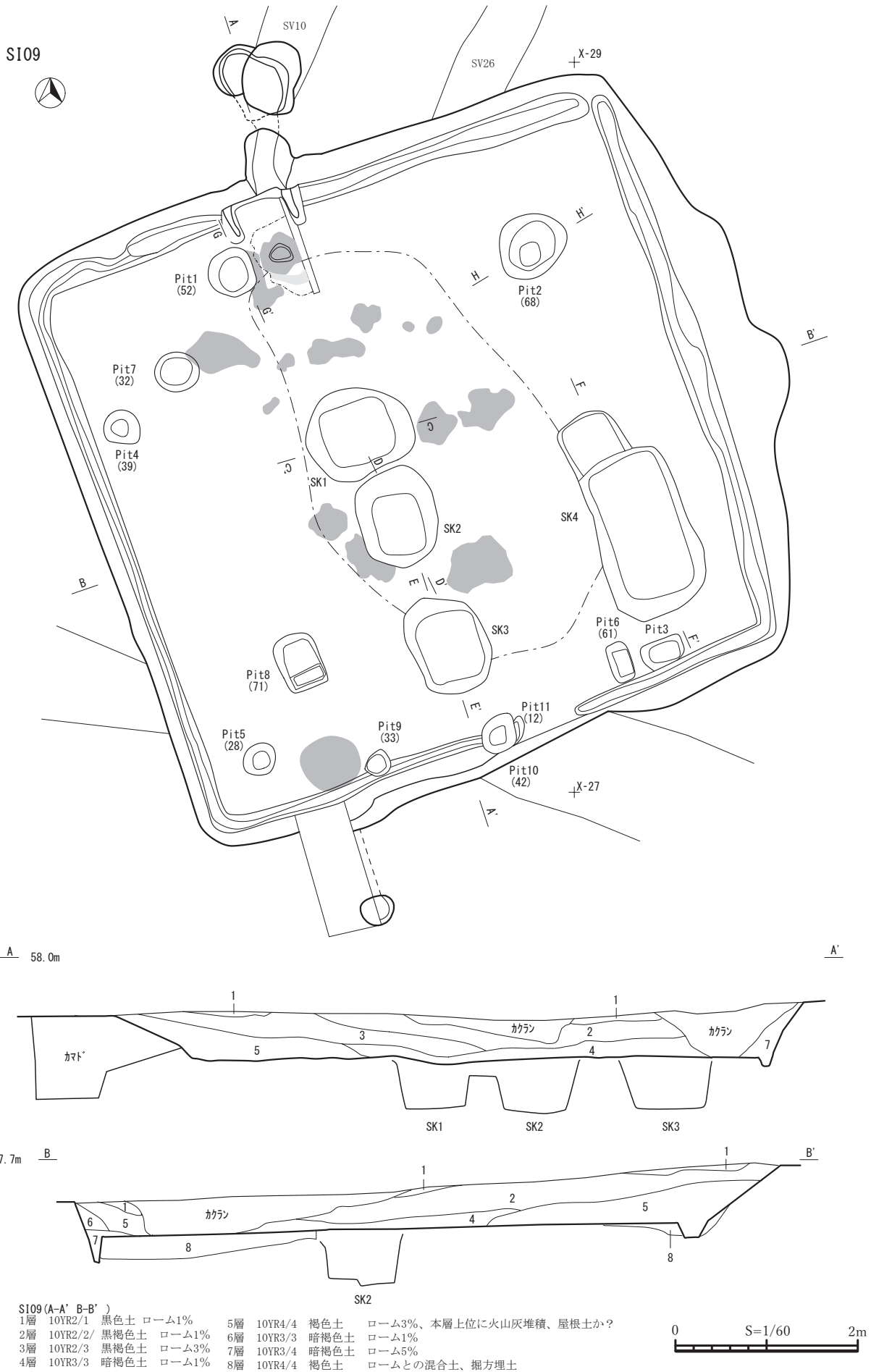


図49 第9号竪穴建物跡(1)

S109遺物出土状況

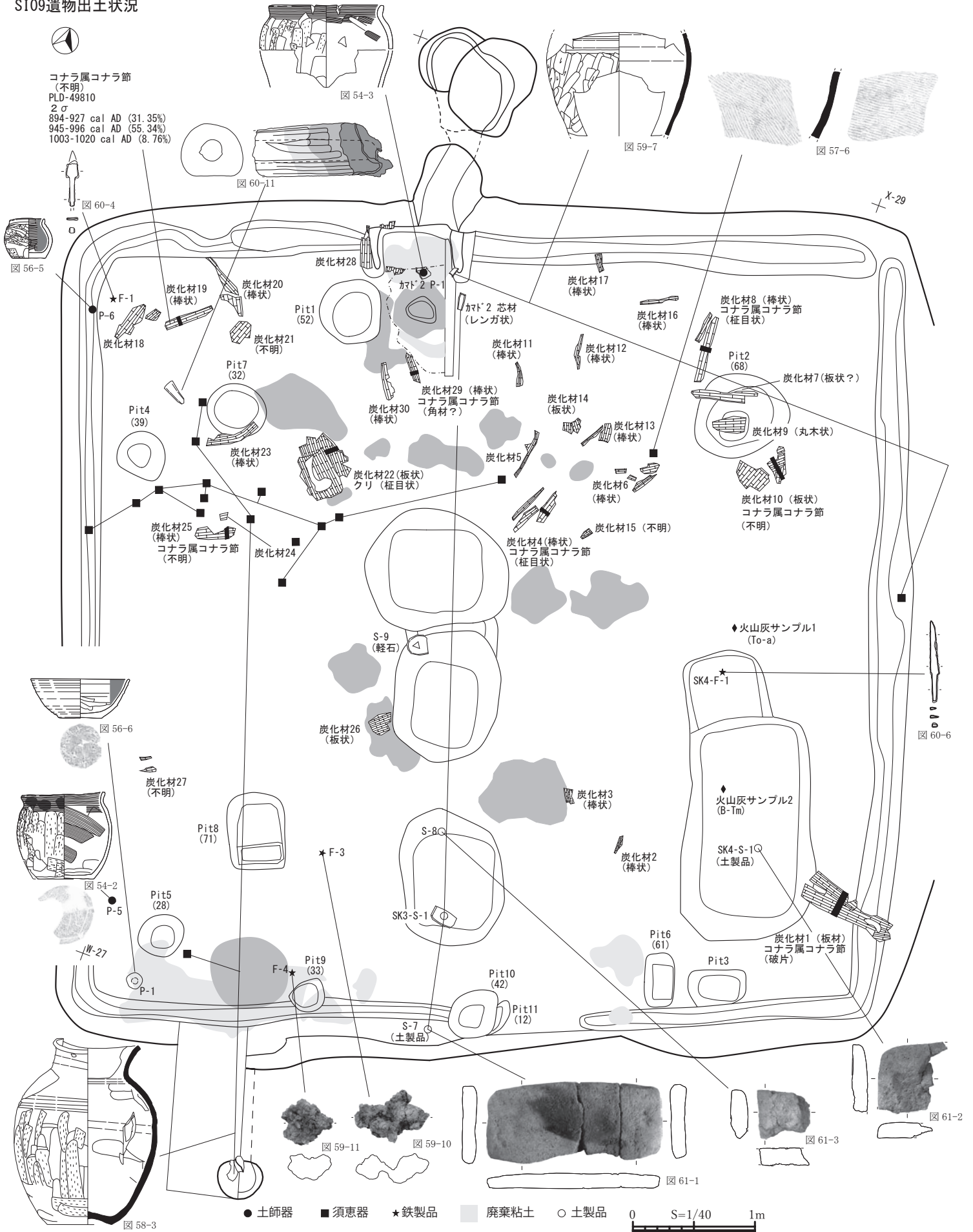
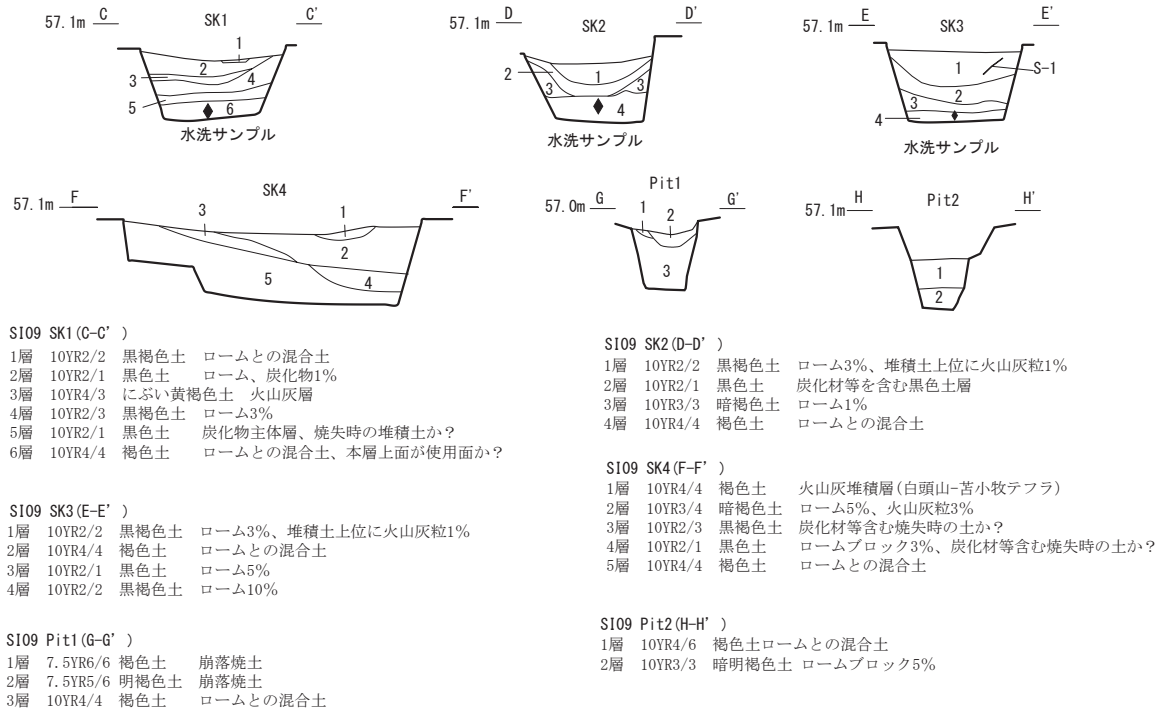


図50 第9号竖穴建物跡(2)



S109焼土検出状況

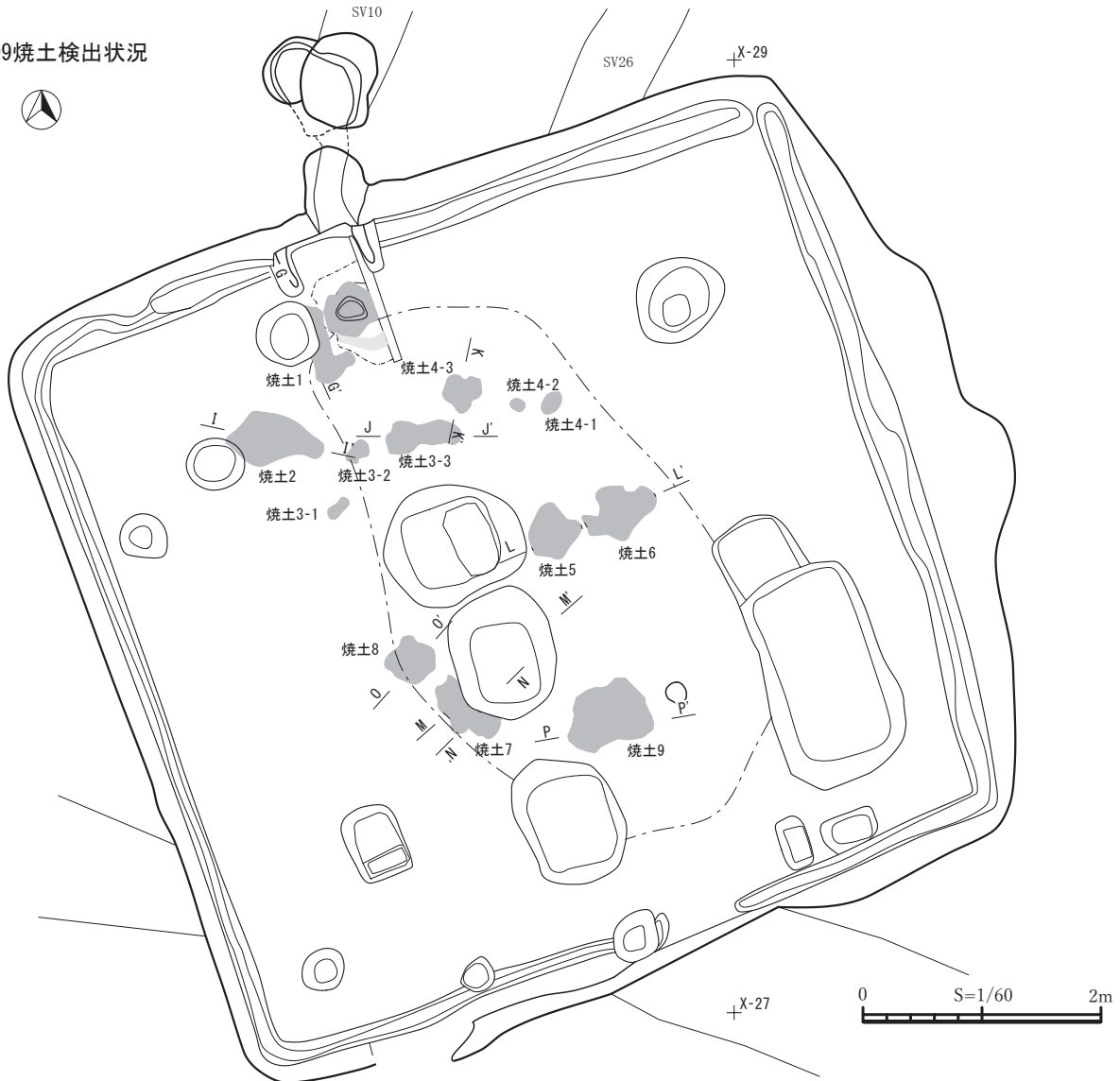
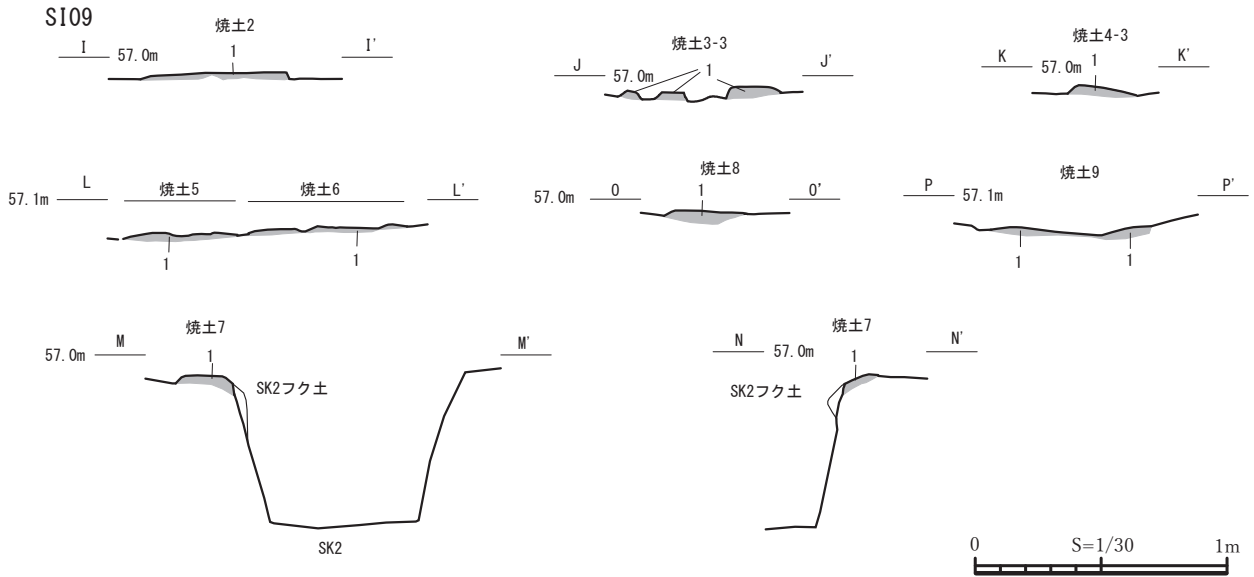


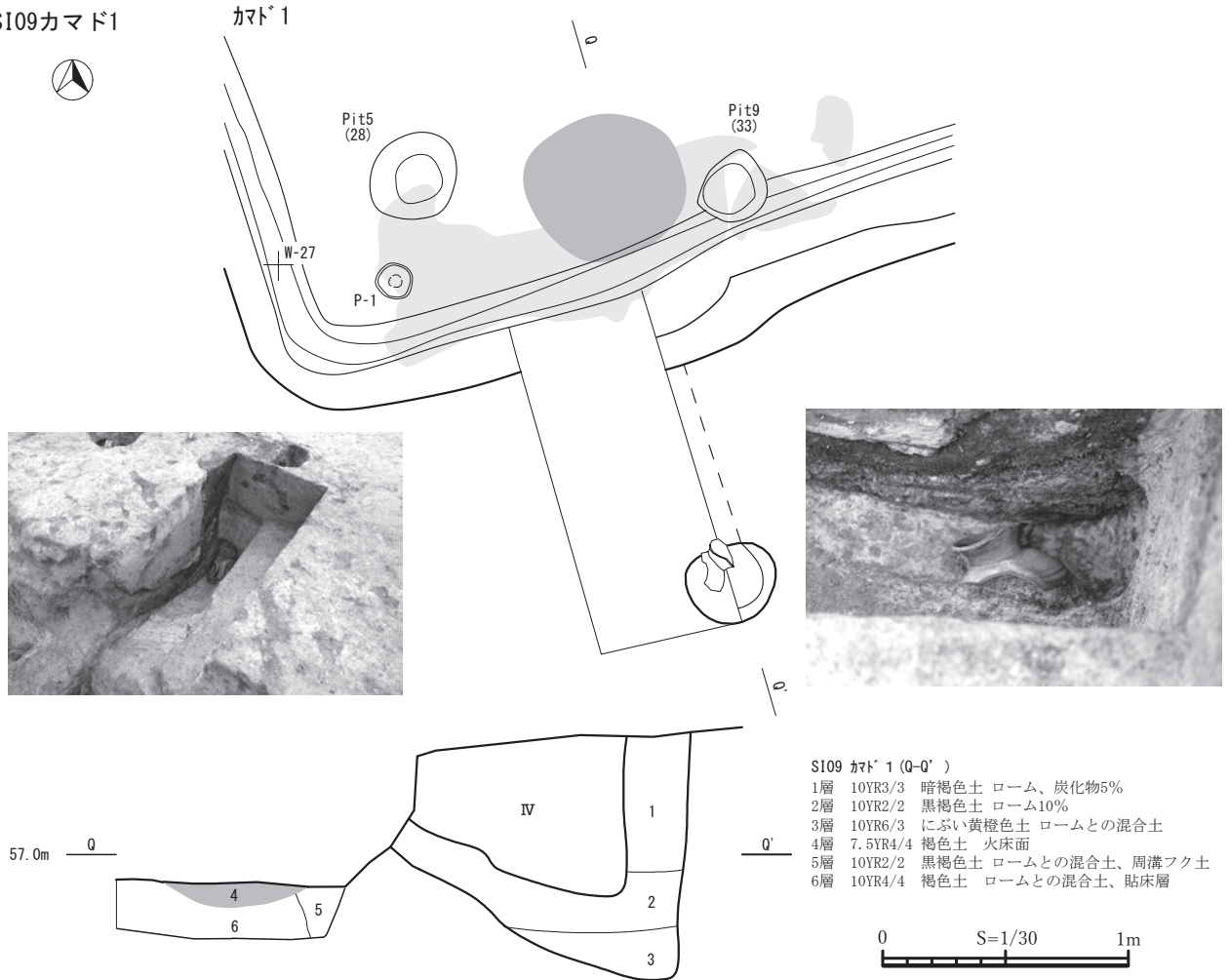
図51 第9号竪穴建物跡(3)



- SI09 焼土2 (I-I')
1層 7.5YR4/6 褐色土 焼土上面硬化、微細遺物抽出用サンプル
- SI09 焼土3-3 (J-J')
1層 7.5YR4/6 褐色土 焼土上面硬化、微細遺物抽出用サンプル
- SI09 焼土4-3 (K-K')
1層 7.5YR4/6 褐色土 焼土上面硬化、微細遺物抽出用サンプル
- SI09 焼土5 (L-L')
1層 7.5YR4/6 褐色土 焼土上面硬化、微細遺物抽出用サンプル

- SI09 焼土6 (L-L')
1層 7.5YR4/6 褐色土 焼土上面硬化、微細遺物抽出用サンプル
- SI09 焼土7 (M-M' N-N')
1層 7.5YR4/4 褐色土 焼土上面硬化、微細遺物抽出用サンプル
- SI09 焼土8 (O-O')
1層 7.5YR4/4 褐色土 焼土上面硬化、微細遺物抽出用サンプル
- SI09 焼土9 (P-P')
1層 7.5YR4/4 褐色土 被熱度合いは弱い、微細遺物抽出用サンプル

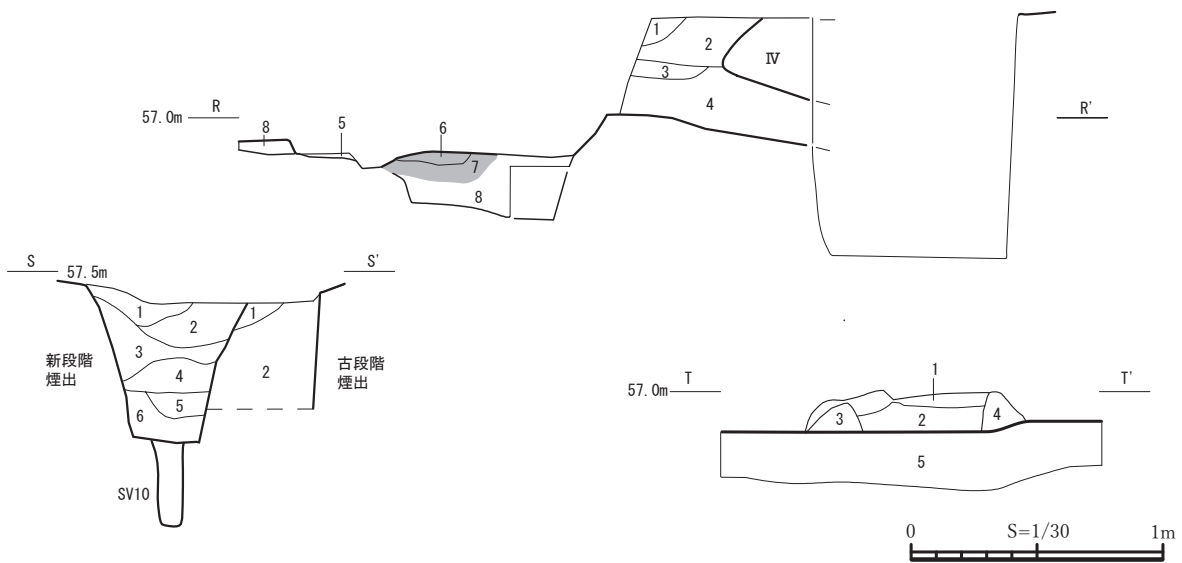
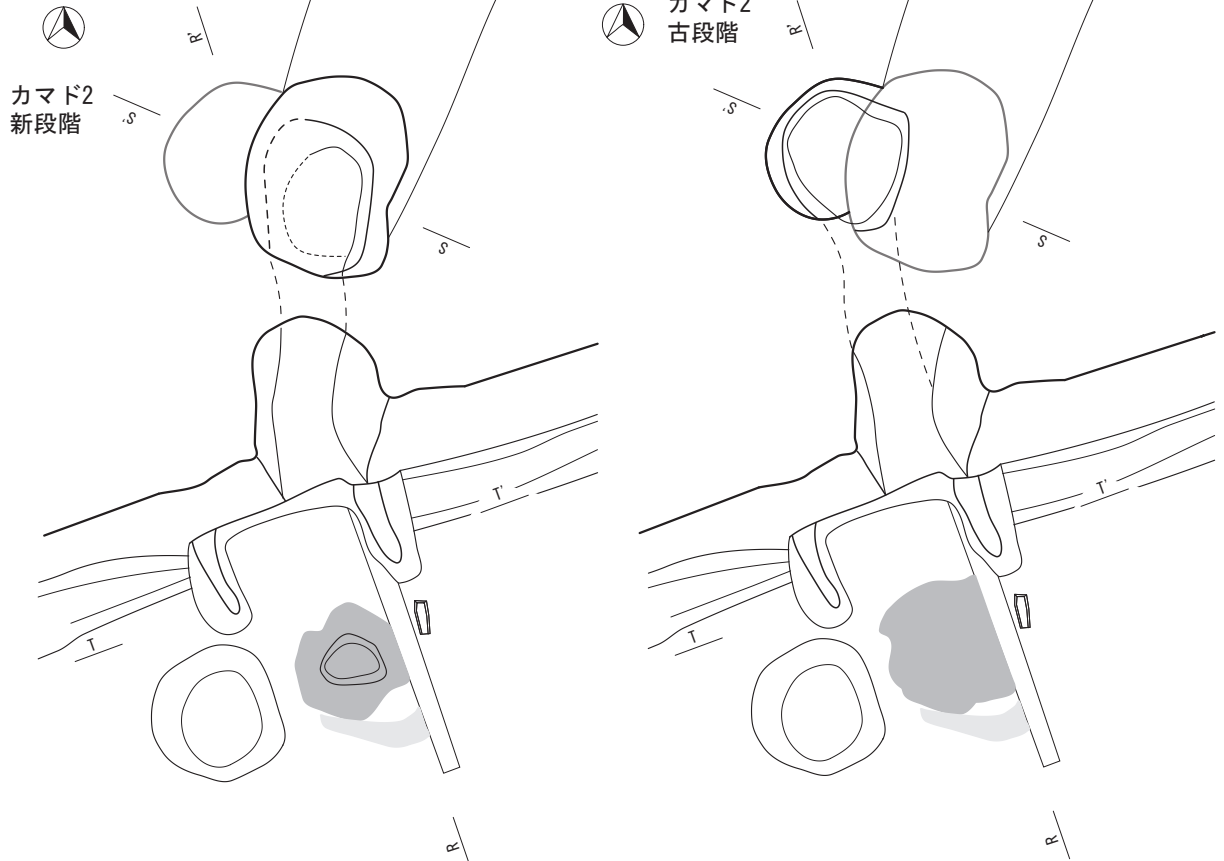
SI09カマド1



- SI09 カマド 1 (Q-Q')
- 1層 10YR3/3 暗褐色土 ローム、炭化物5%
 - 2層 10YR2/2 黒褐色土 ローム10%
 - 3層 10YR6/3 にぶい黄褐色土 ロームとの混合土
 - 4層 7.5YR4/4 褐色土 火床面
 - 5層 10YR2/2 黒褐色土 ロームとの混合土、周溝フク土
 - 6層 10YR4/4 褐色土 ロームとの混合土、貼床層

図52 第9号竪穴建物跡 (4)

S109カマド2



S109 カマド2(R-R')

- 1層 10YR2/2 黒褐色土 浮石1%
- 2層 10YR2/3 黒褐色土 浮石3%
- 3層 10YR2/2 黒褐色土 火山灰ブロック混入、浮石1%
- 4層 10YR3/3 暗褐色土 浮石ブロック75%
- 5層 10YR6/4 にぶい黄橙色土 粘土層 貼り粘土か?
- 6層 7.5YR4/4 褐色土 新段階火床面
- 7層 7.5YR4/6 褐色土 古段階火床面
- 8層 10YR4/4 褐色土 貼床層、ロームとの混合土

S109 カマド2袖(T-T')

- 1層 10YR6/4 にぶい黄橙色土 白色ローム層
- 2層 10YR4/4 褐色土 ローム主体層
- 3層 10YR4/6 褐色土 ロームとの混合土 袖
- 4層 10YR3/3 暗褐色土 ロームとの混合土 袖
- 5層 10YR4/4 褐色土 貼床層、ロームとの混合土

S109 カマド2煙出し(S-S')

- 新段階煙出し
- 1層 10YR2/2 黒褐色土 ローム1%
 - 2層 10YR3/3 暗褐色土 火山灰ブロック状に混入
 - 3層 10YR2/2 黒褐色土 火山灰粒混入、浮石1%
 - 4層 10YR3/3 暗褐色土 白色ローム粒1%
 - 5層 10YR2/2 黒褐色土 ローム粒3%
 - 6層 10YR6/3 にぶい黄橙色土 ロームとの混合土

古段階煙出し

- 1層 10YR2/3 黒褐色土 ローム1%
- 2層 10YR3/3 暗褐色土 白色ローム粒5%、炭化物3%混入

図53 第9号竪穴建物跡(5)

SI09 土師器

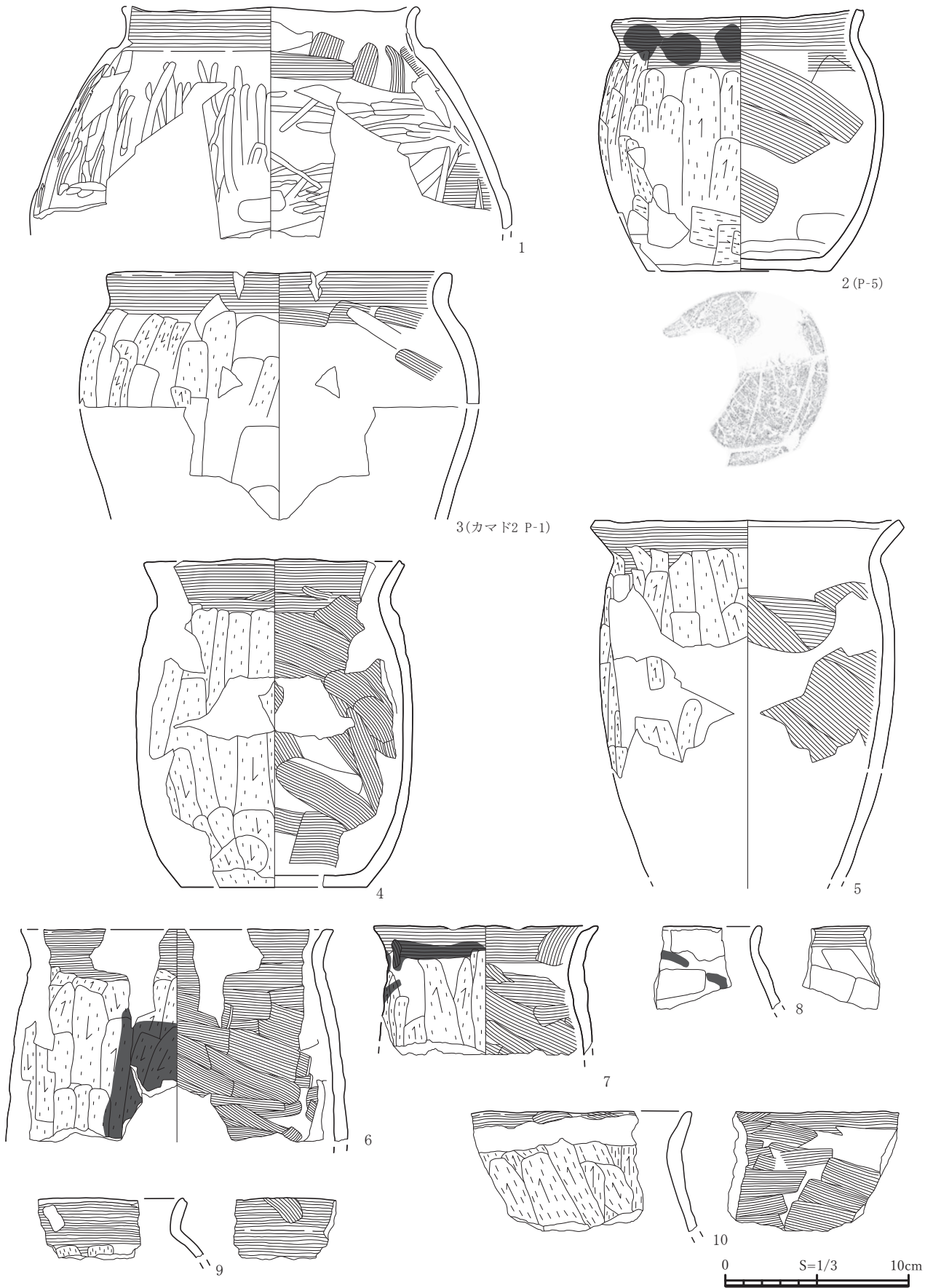


図54 第9号竖穴建物跡出土遺物 (1)

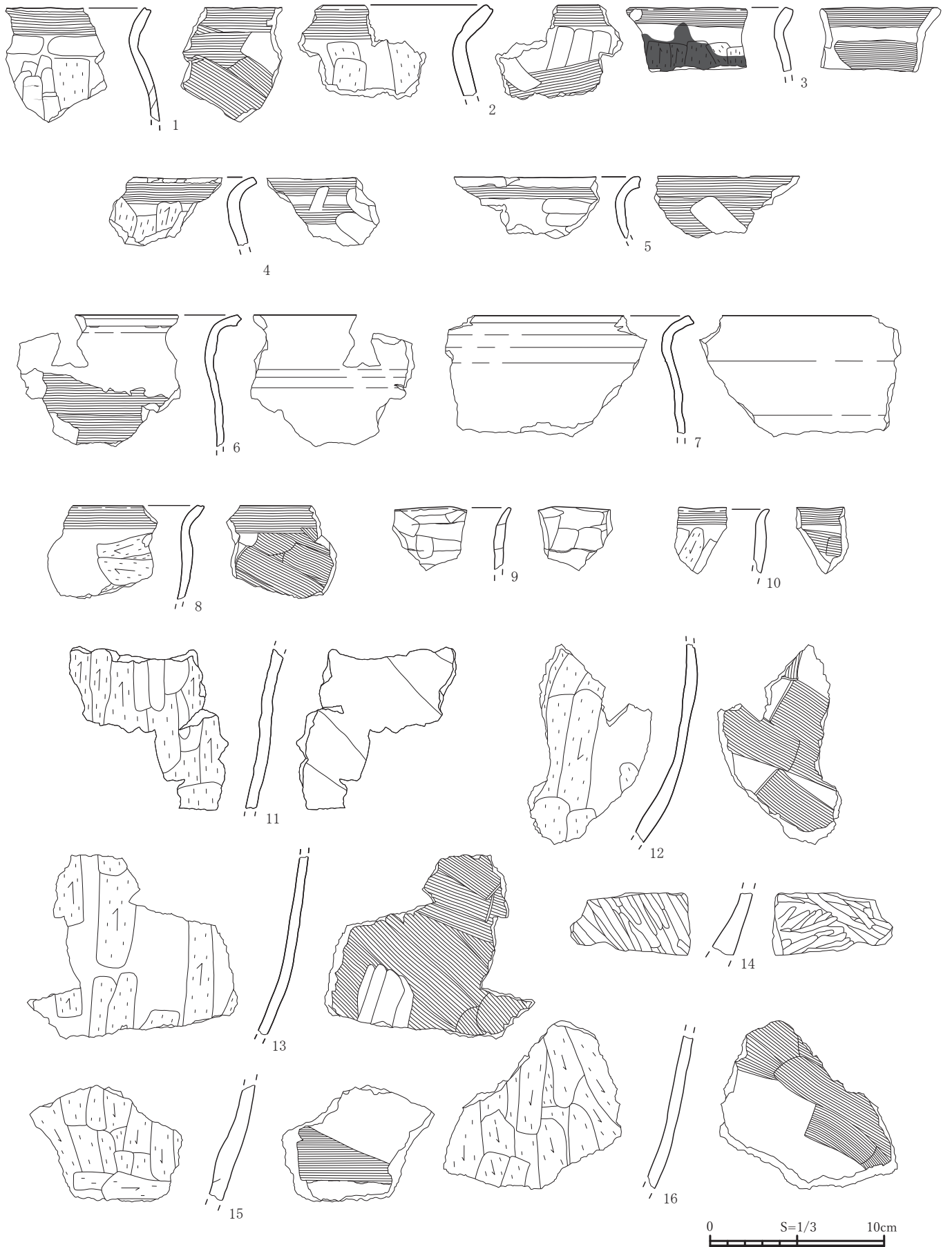


图55 第9号竖穴建物跡出土遺物(2)

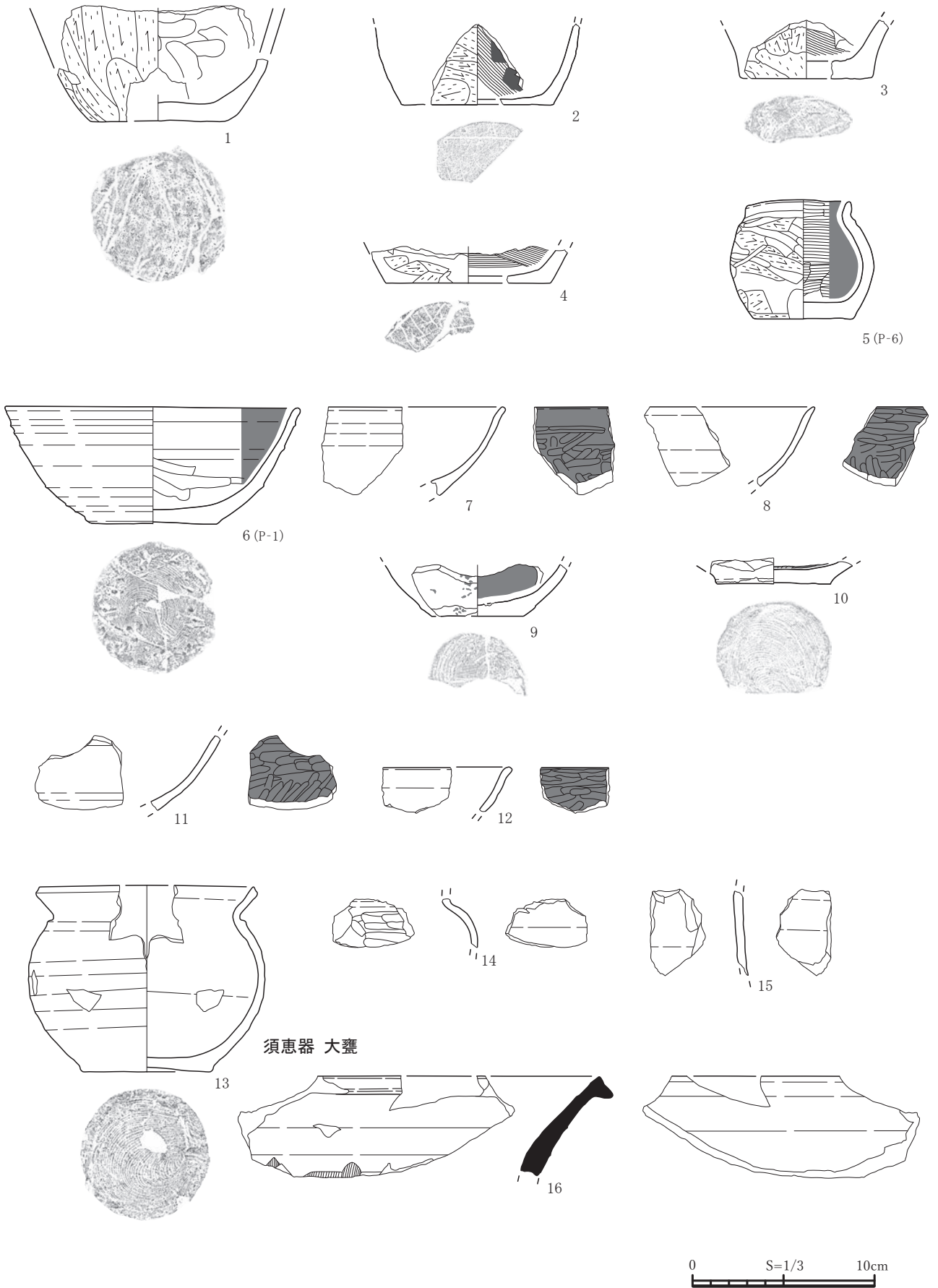


図56 第9号竪穴建物跡出土遺物（3）

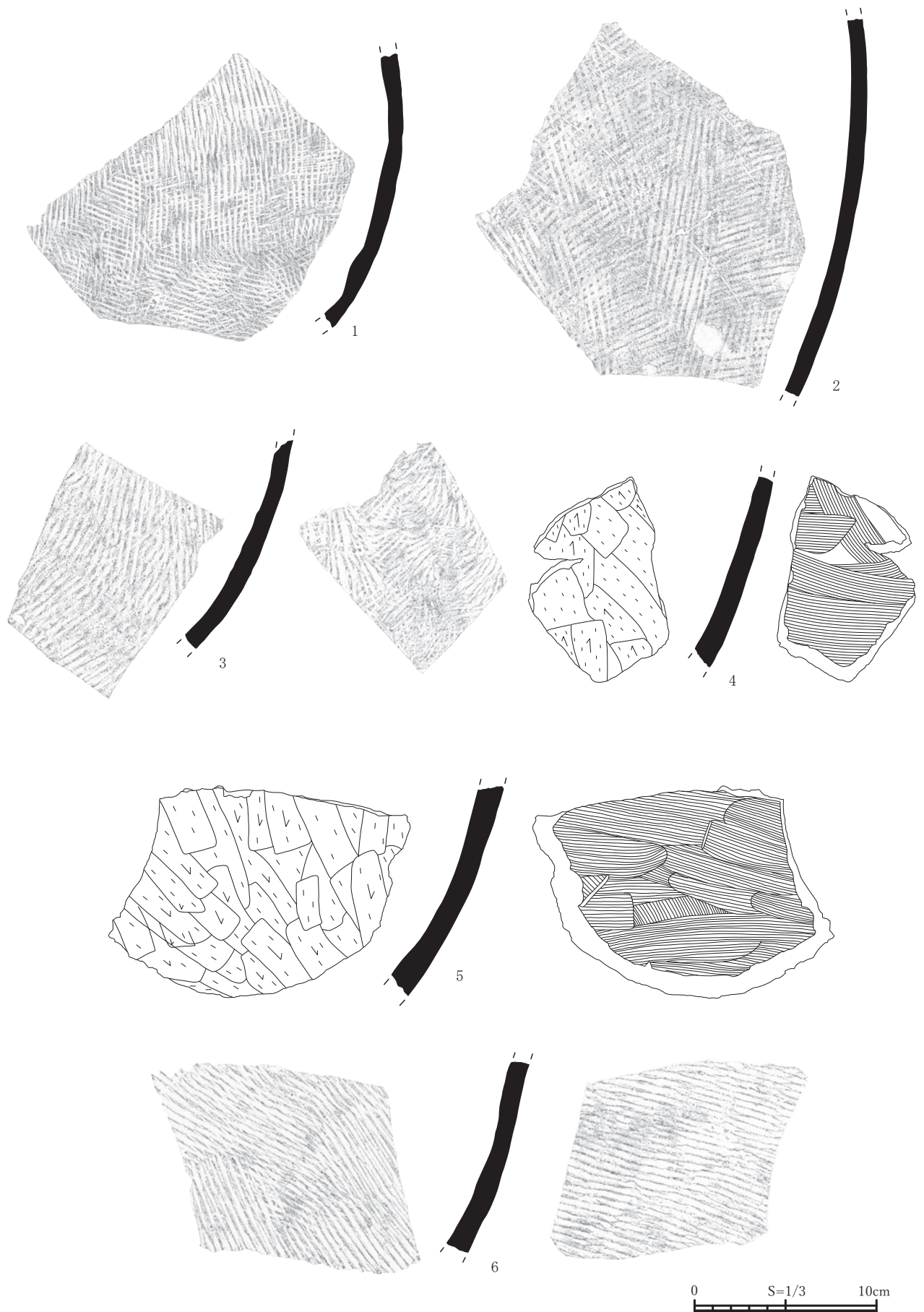
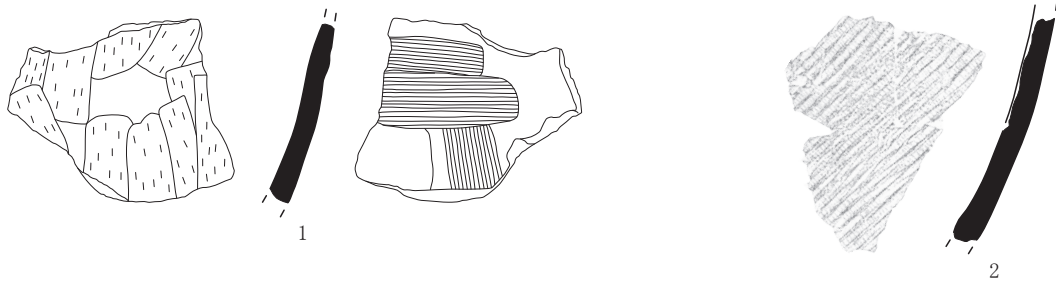


图57 第9号竖穴建物跡出土遺物(4)

須恵器 甕



須恵器 壺

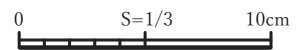
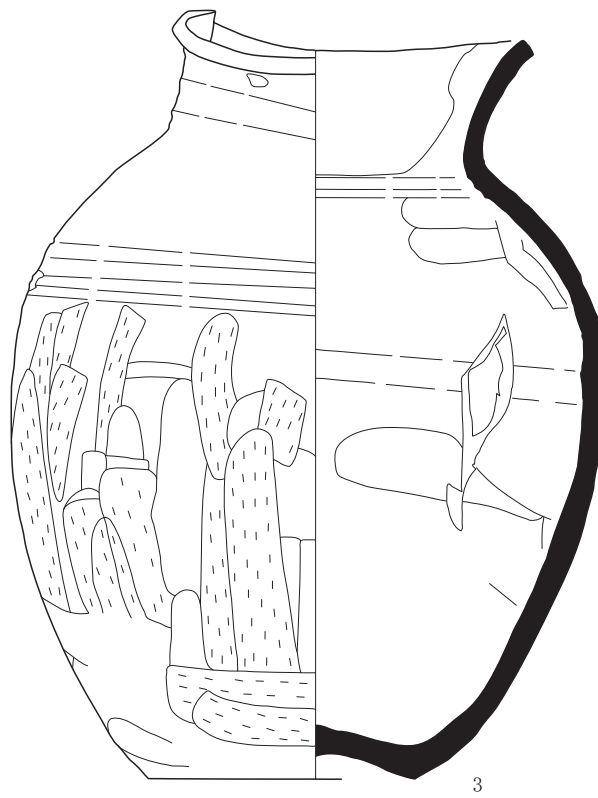
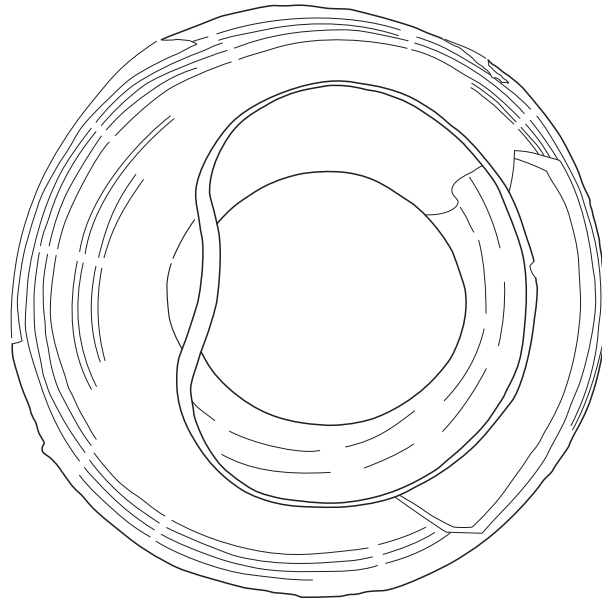
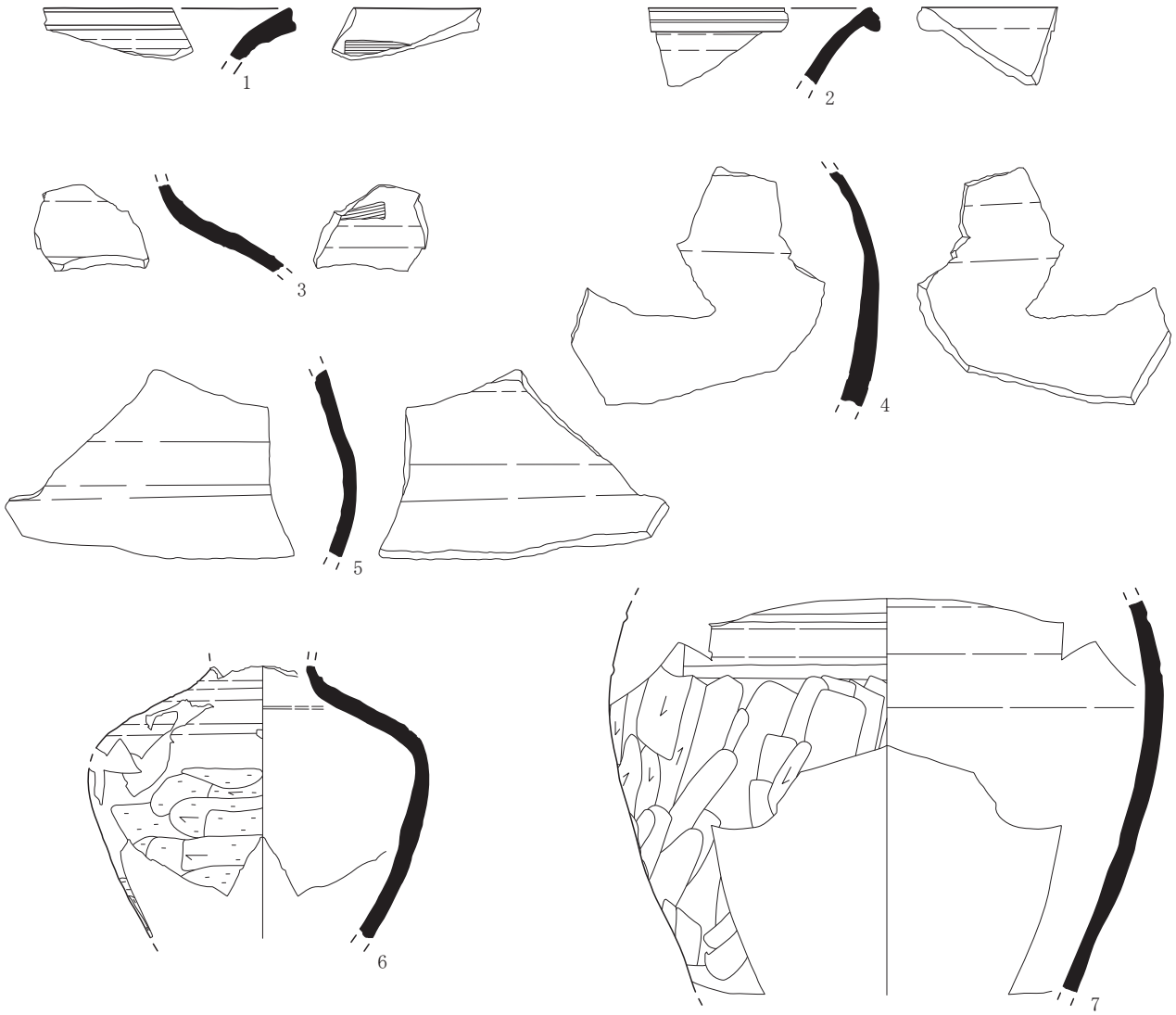
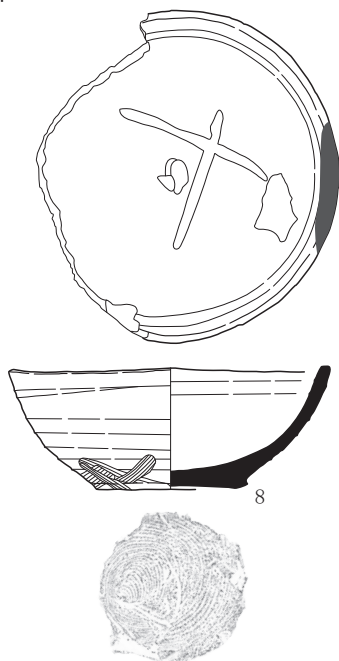


図58 第9号竪穴建物跡出土遺物（5）



須恵器 坏



鉄滓

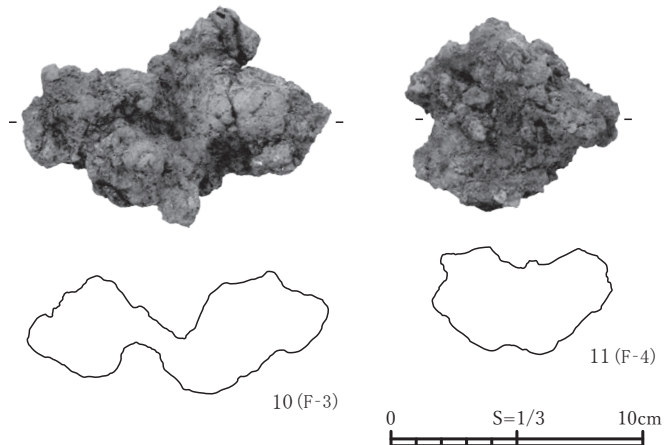
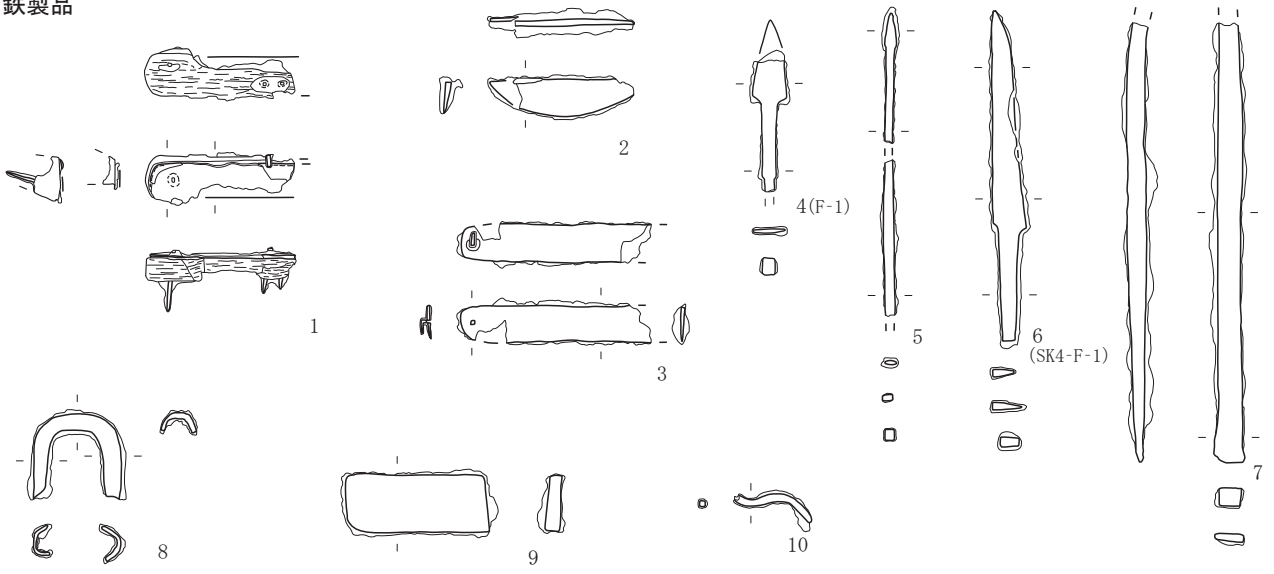
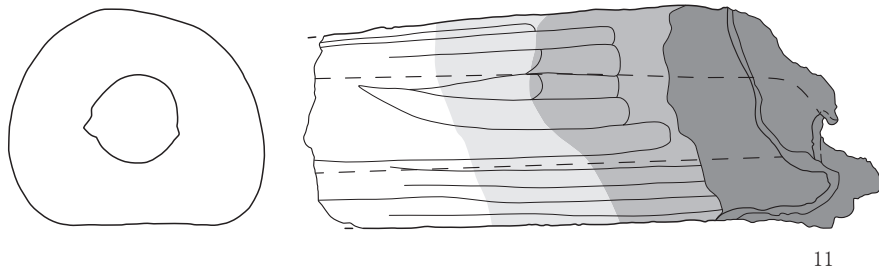


図59 第9号竖穴建物跡出土遺物(6)

鉄製品



羽口



砥石

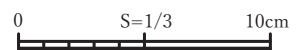
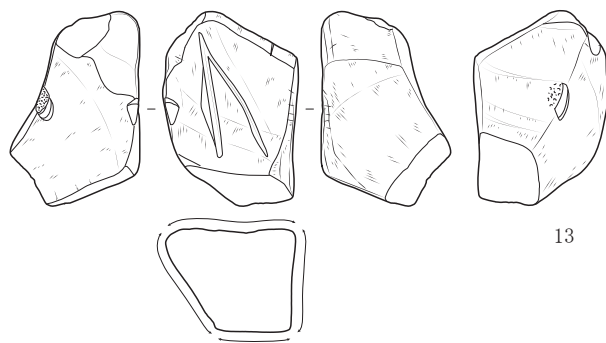
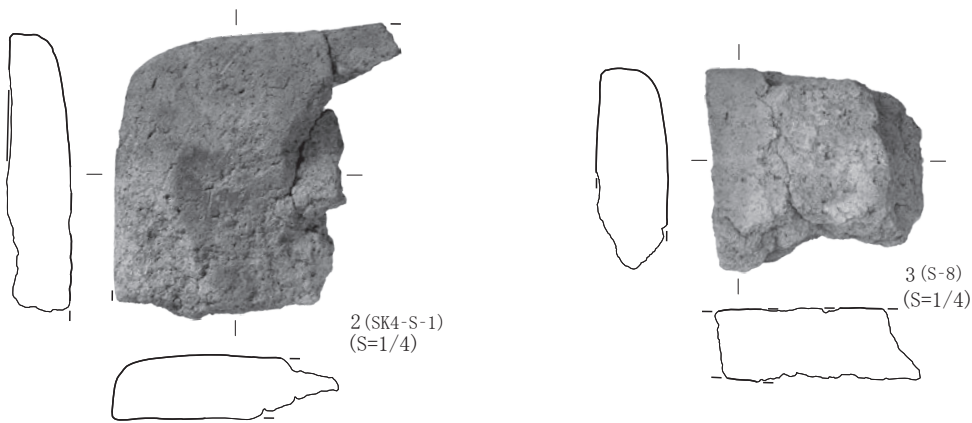
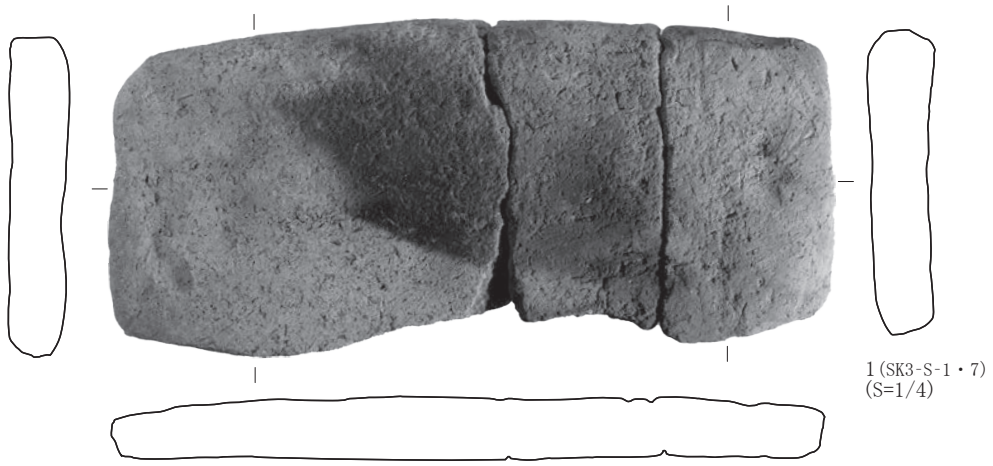


図60 第9号竖穴建物跡出土遺物（7）

土製品



炉壁



軽石製品

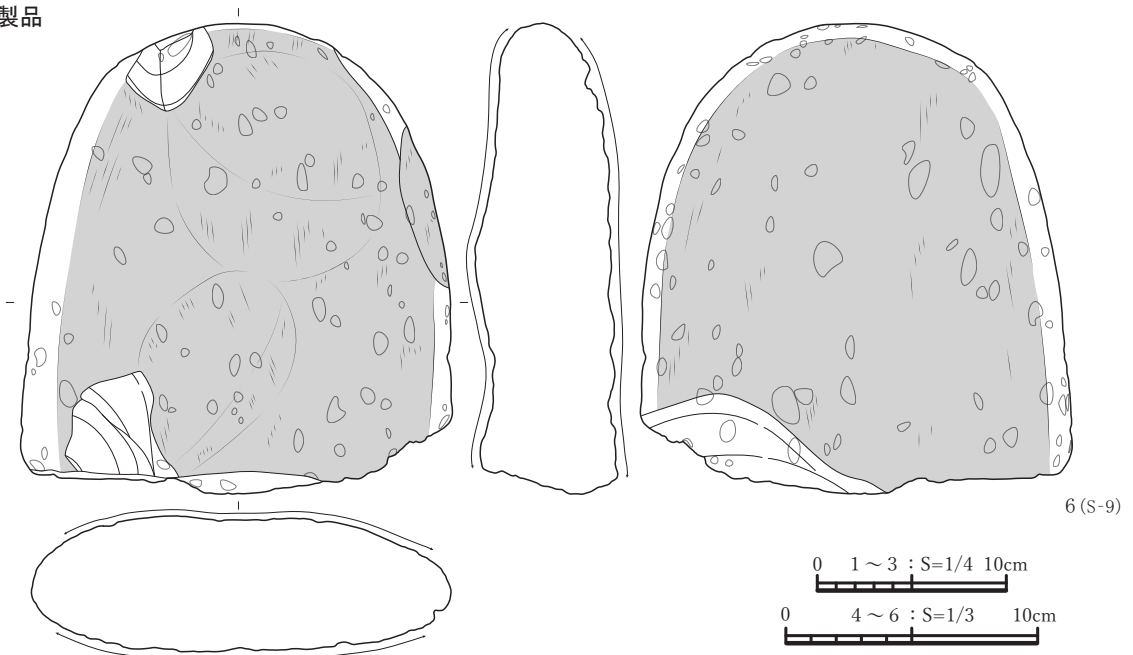


图61 第9号竖穴建物跡出土遺物(8)

第3節 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は計4棟検出した。いずれも平坦面から西側の緩斜面上に構築されている。第1号及び第3号掘立柱建物跡は、竪穴建物跡と近接するが、柱穴とカマド煙道及び煙出坑が重複関係にあつたり、軸方向が揃わなかったりすることから、竪穴建物跡に伴うものではないと判断される。いずれも規模が小さく、簡易な構造であったと考えられる。

第1号掘立柱建物跡（SB01、図62・64、写真41・42）

[位置・確認] U・V22-グリッド、T・U・V-21グリッド、標高56.9～57.4mの平坦面に位置し、第IV層中で確認した。Pit1が第5号竪穴建物跡のカマド煙道及び煙出坑と重複し、本遺構が古い。また、Pit3は第20号柱穴と、Pit5は第9号焼土遺構と重複し、いずれも本遺構が新しい。

[規模等] 平面形は梁間2間×桁行3間、短軸355cm×長軸530cmの長方形を呈し、北東-南西方向を桁行とする。1間の間尺は約6尺（180～190cm）を基本とするが、東辺のPit1・Pit11と、それらの隣に位置するPit2・Pit10との間のみ約5尺（150～160cm）となる。東辺のみ柱穴が2本であるため、入り口施設や庇などが設けられていた可能性がある。

[柱穴] 11基の柱穴から構成されている。径45～50cm程度の円形を呈するものが主体で、深さは最大のもので70cmを測る。Pit1・2・3・5・6・8・10では柱痕を確認したほか、Pit1・3・4・6・7・9～11では、底面で柱当たりと思われる硬化面を確認した。

[出土遺物] Pit2から縄文土器23.6g、Pit10から土師器18g、須恵器16g、Pit11から土師器25gが出土し、土師器2点（図64-1・2）、須恵器1点（図64-3）を図示した。

[小結] 出土遺物及び遺構の重複関係から、平安時代の掘立柱建物跡と考えられる。

第2号掘立柱建物跡（SB02、図63・64、写真41・42）

[位置・確認] S・T-22・23グリッド、標高56.2～56.7mの緩斜面に位置し、第IV層中で確認した。重複する遺構はない。

[規模等] 平面形は梁間2間×桁行2間、長軸280cm×短軸280cmの正方形を呈し、桁行方向は不明である。1間の間尺は130～150cmである。

[柱穴] 9本の柱穴から構成されている。径35～45cm程度の円形を呈するものが主体で、深さは最大のもので62cmを測る。

[出土遺物] Pit1から土師器14g、Pit3から縄文土器5g、Pit5から縄文土器4g、Pit9から土師器42gが出土し、土師器3点（図64-4～6）を図示した。

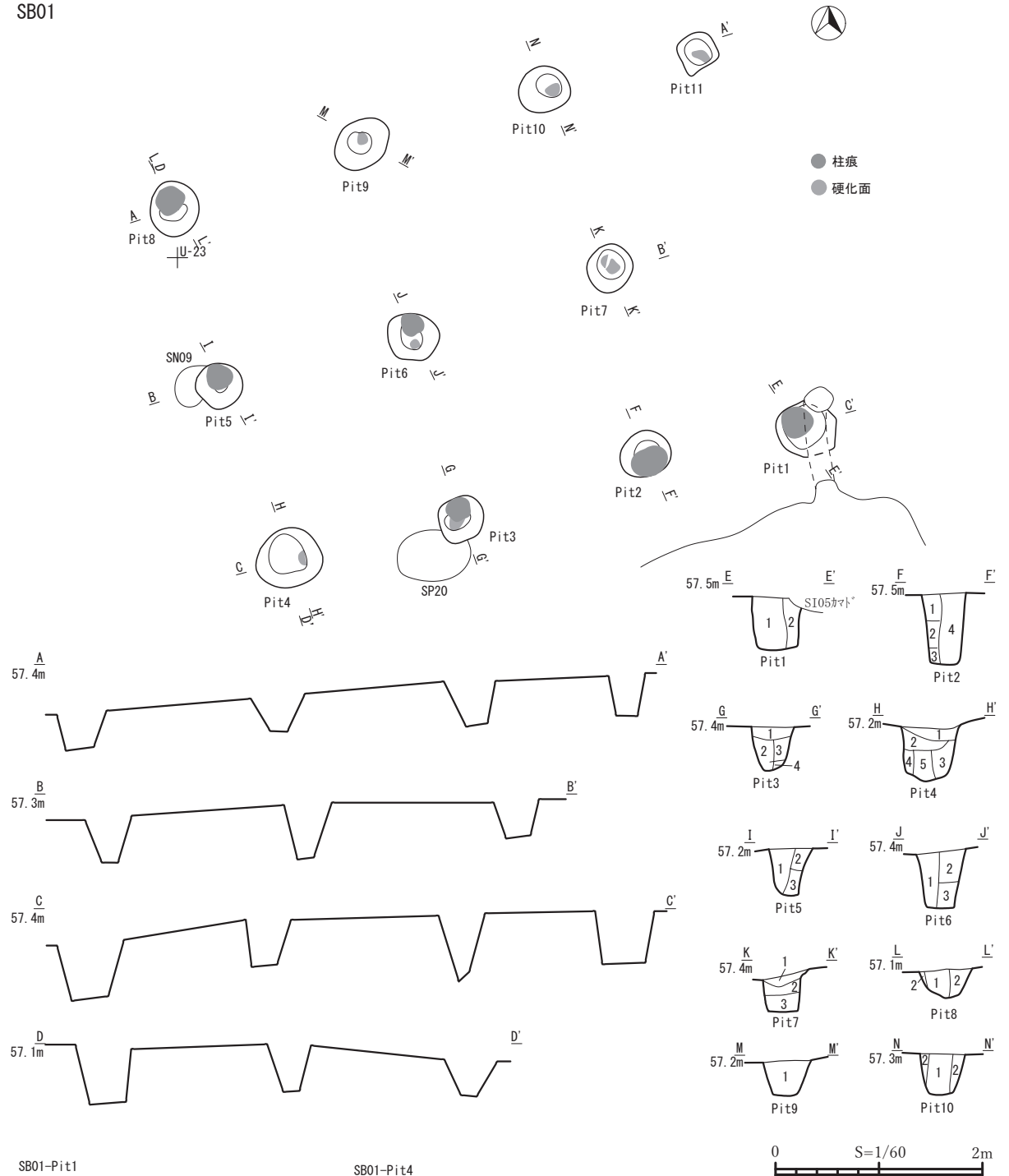
[小結] 出土遺物から、平安時代の掘立柱建物跡と考えられる。

第3号掘立柱建物跡（SB03、図63、写真42）

[位置・確認] I A-25・I B-24・25グリッド、標高56.6～56.9mの平坦面に位置し、第IV層中で確認した。Pit3が第3号竪穴建物跡とわずかに重複するが、新旧関係は不明である。

[規模等] 調査区内で確認できた範囲では、梁間2間×桁行2間、平面形は長軸310cm×短軸290cmの

SB01



- SB01-Pit1**
 1層 10YR2/2 黒褐色土 浮石3% (柱痕)
 2層 10YR5/6 黄褐色土 白色ロームと橙色ロームの混合 (裏込め)
- SB01-Pit2**
 1層 10YR5/6 黄褐色土 ロームとの混合 (裏込め)
 2層 10YR2/2 黒褐色土 浮石1% (裏込め)
 3層 10YR5/6 黄褐色土 白色ローム (裏込め)
 4層 10YR2/2 黒褐色土 ローム5%、層下に白色粘土ブロック (柱痕)
- SB01-Pit3**
 1層 10YR4/6 褐色土 白色ロームと褐色ロームの混合土
 2層 10YR4/4 褐色土 白色ロームと褐色ロームの混合土 (柱痕)
 3層 10YR5/6 黄褐色土 白色ロームと褐色ロームの混合土 (裏込め)
 4層 10YR5/6 黄褐色土 白色ローム層 (裏込め)

- SB01-Pit4**
 1層 10YR2/3 黒褐色土 浮石3%
 2層 10YR2/2 黒褐色土 浮石5%
 3層 10YR2/2 黒褐色土 白色ロームとの混合 (裏込め)
 4層 10YR5/6 黄褐色土 白色ローム層 (裏込め)
 5層 10YR2/2 黒褐色土 白色ローム5%、浮石3% (裏込め)
- SB01-Pit5**
 1層 10YR2/2 黒褐色土 ローム粒5%
 2層 10YR3/3 暗褐色土 ローム粒1%
 3層 10YR5/6 黄褐色土 ロームとの混合土
- SB01-Pit6**
 1層 10YR2/2 黒褐色土 ローム3% (柱痕)
 2層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 ロームとの混合土 (裏込め)
 3層 10YR4/4 褐色土 ロームとの混合 (裏込め)

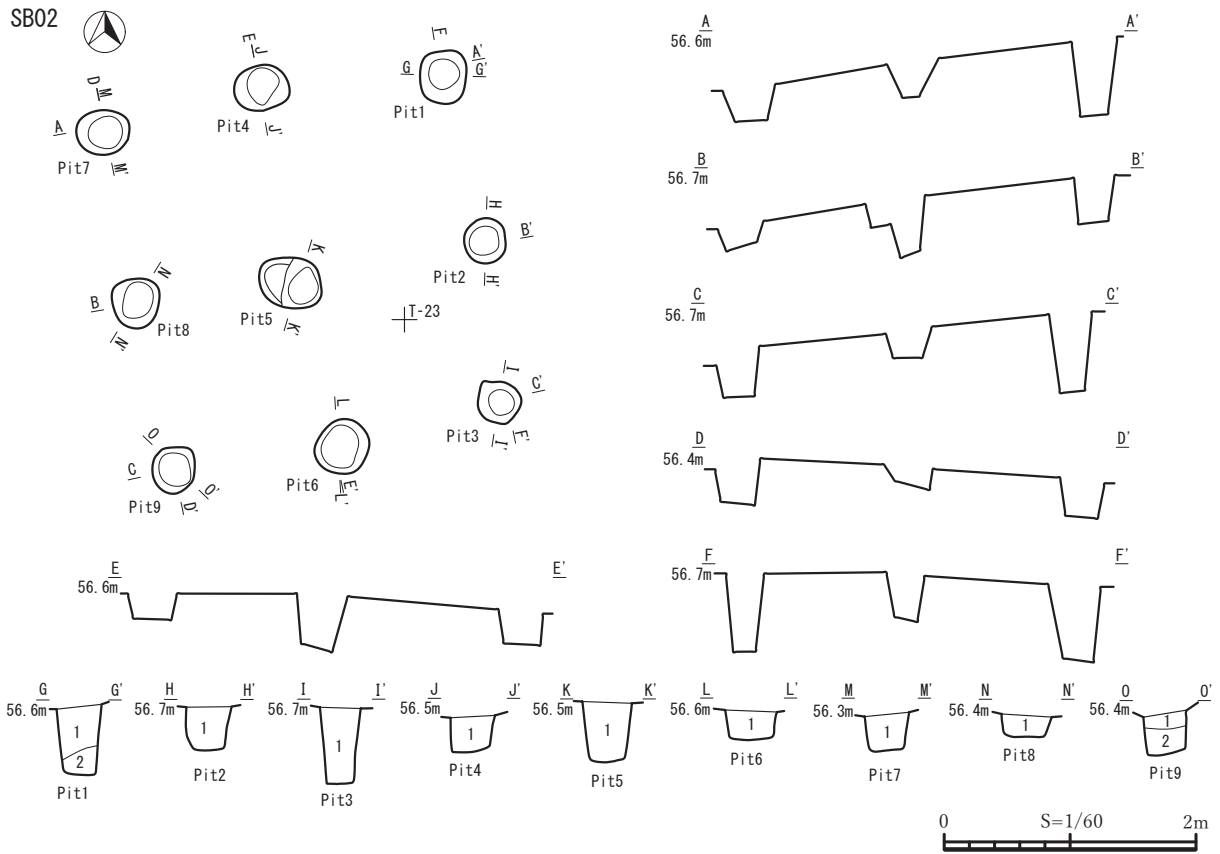
- SB01-Pit7**
 1層 10YR3/3 暗褐色土 ローム3%
 2層 10YR5/6 黄褐色土 ロームとの混合土
 3層 10YR2/3 黒褐色土 ローム5%

- SB01-Pit8**
 1層 10YR2/3 黒褐色土 ローム5% (柱痕)
 2層 10YR3/3 暗褐色土 ローム10% (裏込め)

- SB01-Pit9**
 1層 10YR3/3 黒褐色土 ローム8%

- SB01-Pit10**
 1層 10YR2/3 黒褐色土 ローム5% (柱痕)
 2層 10YR5/6 黄褐色土 ロームとの混合土 (裏込め)

図62 掘立柱建物跡 (1)



SB02-Pit1

1層 10YR3/4 暗褐色土 10YR2/3黒褐色土との混合（黒褐色土は層上部に多い）、
10YR5/6黄褐色浮石（ $\phi \sim 5\text{mm}$ ）5%、しまりなし
2層 10YR3/2 黒褐色土 10YR7/8黄褐色浮石（ $\phi \sim 5\text{mm}$ ）7%、しまりなし

SB02-Pit2

1層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 10YR2/3黒褐色土との混合、10YR4/8明黄褐色浮石
（ $\phi \sim 20\text{mm}$ ）5%、しまりなし

SB02-Pit3

1層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 10YR2/3黒褐色土との混合、10YR4/8明黄褐色浮石
（ $\phi \sim 20\text{mm}$ ）5%、しまりなし

SB02-Pit4

1層 10YR3/2 黒褐色土 10YR3/4暗褐色土との混合、10YR6/8明黄褐色浮石
（ $\phi \sim 5\text{mm}$ ）1%

SB02-Pit5

1層 10YR3/2 黒褐色土 10YR3/4暗褐色土との混合、10YR6/8明黄褐色浮石（ $\phi \sim 5\text{mm}$ ）1%

SB02-Pit6

1層 10YR3/2 黒褐色土 10YR3/4暗褐色土との混合、10YR6/8明黄褐色浮石（ $\phi \sim 5\text{mm}$ ）1%

SB02-Pit7

1層 10YR3/1 黒褐色土 壁際に10YR4/3にぶい黄褐色土が混入、10YR6/8明黄褐色浮石
（ $\phi \sim 2\text{mm}$ ）1%

SB02-Pit8

1層 10YR3/2 黒褐色土 10YR3/4暗褐色土との混合、10YR6/8明黄褐色浮石（ $\phi \sim 5\text{mm}$ ）1%

SB02-Pit9

1層 10YR3/4 暗褐色土 10YR2/2黒褐色土との混合、10YR7/8黄褐色浮石（ $\phi \sim 5\text{mm}$ ）3%、
しまりなし
2層 10YR3/2 黒褐色土 10YR5/6黄褐色ブロック（ $\phi \sim 30\text{mm}$ ）壁際に10%、10YR8/6黄褐色
浮石（ $\phi \sim 3\text{mm}$ ）5%、しまりなし

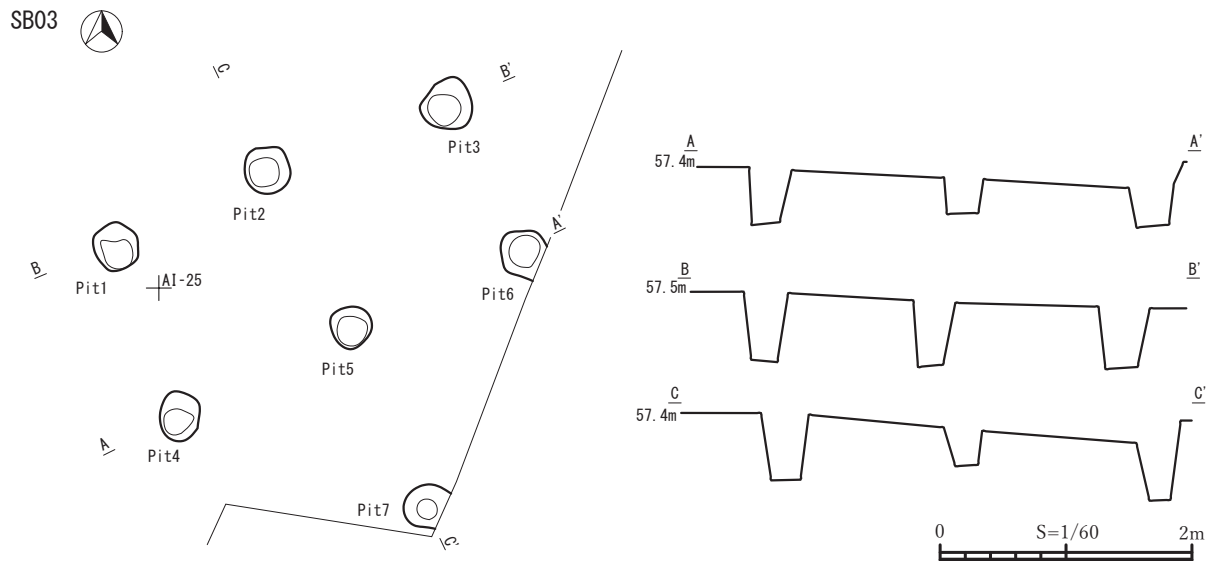


図63 掘立柱建物跡（2）

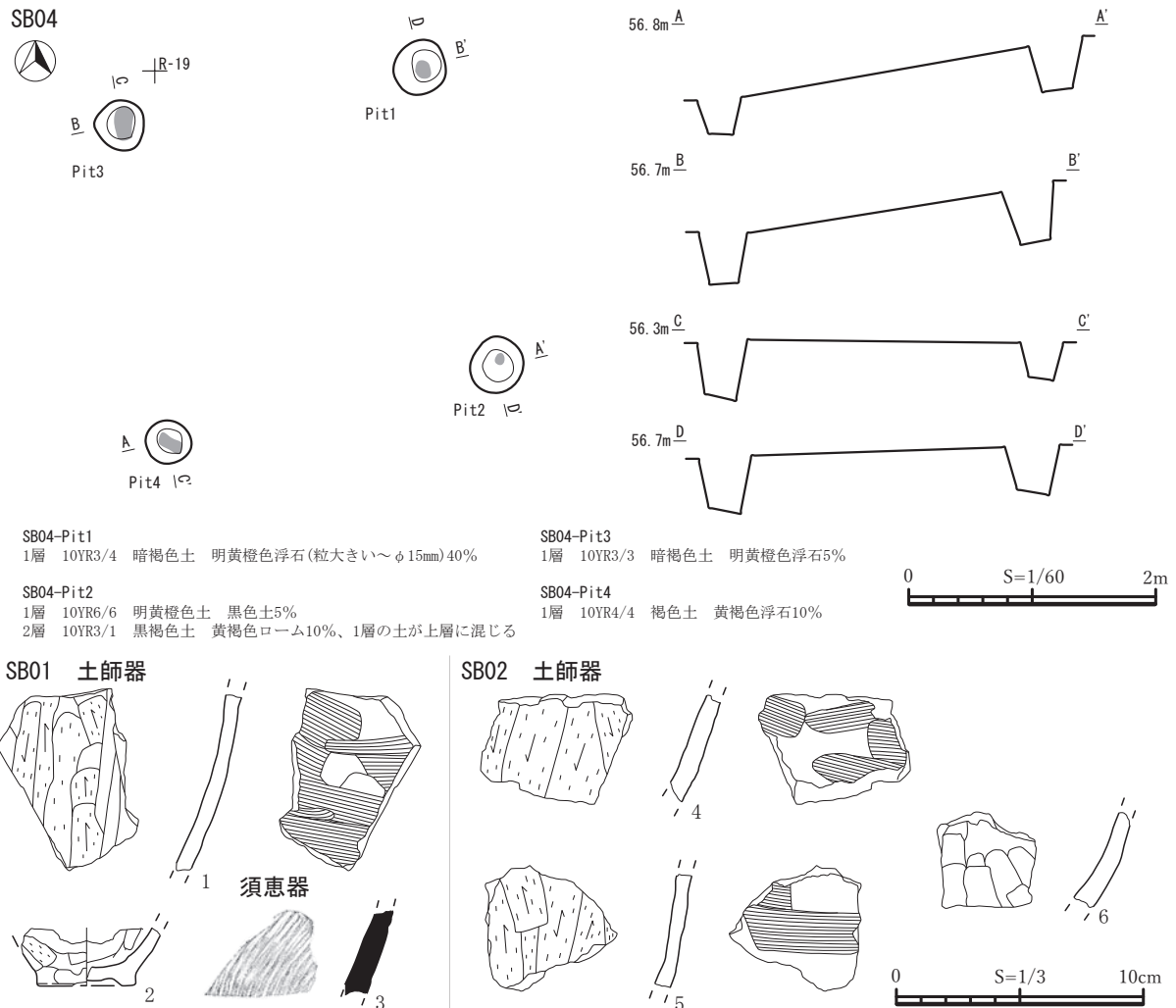


図64 掘立柱建物跡(3)・掘立柱建物跡出土遺物

方形を呈すると捉えられるが、南東部が調査区外へ延びており、建物規模の全容は不明である。1間の間尺は140~160cmである。

[柱穴] 調査区内では7本の柱穴を検出した。径35~40cm程度の円形を呈するものが主体で、深さは最大のもので52cmを測る。

[出土遺物] なし。

[小結] 検出状況から、平安時代の掘立柱建物跡と考えられるが規模などの詳細は不明である。

第4号掘立柱建物跡(SB04、図64、写真41・42)

[位置・確認] Q・R-18、R-19グリッド、標高56.2~56.7mの斜面に位置し、第IV層中で確認した。重複する遺構はない。

[規模等] 平面形は梁間1間×桁行1間、長軸275cm×短軸265cmの正方形を呈し、桁行方向は不明である。1間の間尺は北辺245cm、東辺255cm、南辺275cm、西辺265cmで、北から南にわずかに開く。

[柱穴] 4本の柱穴から構成されている。径35~45cm程度の円形を呈するものが主体で、深さは最大のもので46cmを測る。4本すべての底面で、柱当たりと思われる硬化面を確認している。

[出土遺物] なし。

[小結] 検出状況から、平安時代の掘立柱建物跡と考えられる。

(中門)

第4節 土坑

土坑は計44基検出した。うち、遺物が出土した土坑は27基である。調査所見や出土遺物に基づく内訳は、平安時代の土坑2基、縄文時代の円形落とし穴3基、フラスコ状土坑1基、縄文時代早期の土坑15基、縄文時代（細別時期不明）の土坑10基、構築時期不明の土坑13基である。このうち、平安時代の土坑及び縄文時代の円形落とし穴、フラスコ状土坑は標高57～58mの平坦面に分布し、縄文時代早期の土坑は多くが標高50～56mの調査区南東斜面に分布する。

なお、第1号土坑並びに第30号土坑は、調査の過程で遺構ではないと判断したため、欠番とした。

第2号土坑（SK02、図65・70、写真42・75）

[位置・確認] V・W-17グリッド、標高55.0～55.6mの斜面に位置し、第IV層中で確認した。重複する遺構はない。

[形態・規模等] 平面形は長軸167cm、短軸131cmの楕円形で、深さは最大30cmを測る。北側の一部がオーバーハングする。

[堆積土] 2層に分層した。褐色土及び黒褐色土を主体とした自然堆積である。

[出土遺物] 縄文土器36gが出土した。図70-1は無文の深鉢破片であるが、胎土や器形の特徴、ミガキ調整が見られることなどから、縄文時代早期中葉貝殻文土器の胴下部破片と考えられる。

[小結] 出土遺物から、縄文時代早期中葉の土坑と考えられる。

第3号土坑（SK03、図65、写真42）

[位置・確認] U・V-18グリッド、標高56.9～57.1mの平坦面に位置し、第IV層中で確認した。重複する遺構はない。

[形態・規模等] 平面形は長軸108cm、短軸102cmの円形で、深さは最大21cmを測る。断面形は皿形を呈する。

[堆積土] 3層に分層した。暗褐色土及び黒褐色土を主体とした自然堆積である。北側の底面が39cm×35cmの範囲で被熱しており、被熱厚は約5cmに及ぶ。

[出土遺物] なし。

[小結] 出土遺物がなく、構築時期などの詳細は不明である。

第4号土坑（SK04、図65・70、写真43・75）

[位置・確認] X-19グリッド、標高55.2～55.8mの斜面に位置し、第IV層中で確認した。重複する遺構はない。

[形態・規模等] 平面形は長軸157cm、短軸149cmの円形で、深さは最大35cmを測る。南向きの斜面に構築されており、北側の壁はほぼ垂直に立ち上がるが、南側はわずかに底面が上昇するのみで、そのまま地山へ連続する。

[堆積土] 4層に分層した。暗褐色土を主体とした自然堆積である。

[出土遺物] 堆積土中から縄文土器315gが出土した。図70-2は貝殻腹縁文と爪形刺突が、図70-3は

貝殻腹縁文が、図70-4は貝殻による条痕文が施される。図70-5・6は深鉢の胴下部破片である。いずれも縄文時代早期中葉に比定される。

[小結] 出土遺物から、縄文時代早期中葉の土坑と考えられる。

第5号土坑 (SK05、図65、写真43)

[位置・確認] T-20・21グリッド、標高57.2～57.3mの平坦面に位置し、第IV層中で確認した。第6号竪穴建物跡と重複し、本遺構が古い。

[形態・規模等] 平面形は長軸(191)cm、短軸88cmの楕円形で、深さは最大11cmを測る。断面形は皿形を呈する。

[堆積土] 単層で、黒褐色土を主体とした自然堆積である。

[出土遺物] なし

[小結] 出土遺物がなく、構築時期などの詳細は不明である。

第6号土坑 (SK06、図65、写真43)

[位置・確認] T-21・22グリッド、標高57.0～57.2mの平坦面に位置し、第IV層中で確認した。重複する遺構はない。

[形態・規模等] 平面形は長軸128cm、短軸52cmの楕円形で、深さは最大15cmを測る。断面形は台形を呈する。

[堆積土] 2層に分層した。黒褐色土及び暗褐色土を主体とした自然堆積である。

[出土遺物] なし。

[小結] 出土遺物がなく、構築時期などの詳細は不明である。

第7号土坑 (SK07、図65・70、写真43・75)

[位置・確認] R-23・24グリッド、標高55.4～55.8mの緩斜面に位置し、第IV層中で確認した。試掘トレンチにより南西部が消失しており、南側に近接する第1号竪穴建物跡と、一部重複していた可能性がある。

[形態・規模等] 平面形は長軸(203)cm、短軸(171)cmで不整楕円形を呈すると思われ、深さは最大39cmを測る。西壁はわずかにオーバーハングし、東壁はほぼ垂直に立ち上がるが、根攪乱による影響で壁面は凹凸が著しい。

[堆積土] 2層に分層した。2層は大きめのロームブロックが混入しており人為的に埋め戻された層、1層は自然堆積と考えられる。

[出土遺物] 堆積土中から土師器14g、縄文土器318g、石器84gが出土し、縄文土器4点、石器1点を図示した。図70-7は貝殻押引文を横位に施し、刺突により区画する。図70-9は地文縄文、図70-10は表裏縄文土器である。図70-11はトランシェ様石器である。土師器は南側に近接する第1号竪穴建物跡構築時に混入したものと考えられる。

[小結] 出土遺物から、縄文時代早期後葉の土坑と考えられる。

第8号土坑（SK08、図65・70、写真44・75）

[位置・確認] T-21グリッド、標高57.0～57.2mの平坦面に位置し、第IV層中で確認した。重複する遺構はない。

[形態・規模等] 平面形は長軸83cm、短軸68cmの楕円形で、深さは最大14cmを測る。断面形は台形を呈する。

[堆積土] 単層で、暗褐色土を主体とした自然堆積である。

[出土遺物] 堆積土中から縄文土器17gが出土した。図70-12は貝殻腹縁文を地文に持ち、口唇にキザミを施した口縁部破片で、穿孔がなされている。

[小結] 出土遺物から、縄文時代早期中葉の土坑と考えられる。

第9号土坑（SK09、図65・70、写真44・75）

[位置・確認] Y-25グリッド、標高57.6～57.7mの平坦面に位置し、第IV層中で確認した。重複する遺構はない。

[形態・規模等] 平面形は長軸152cm、短軸114cmの楕円形で、深さは最大10cmを測る。断面形は台形を呈する。

[堆積土] 単層で、黒褐色土を主体とした自然堆積である。

[出土遺物] 堆積土中から縄文土器が27g出土した。図70-13は地文縄文を持つ胴部破片である。

[小結] 出土遺物から、縄文時代早期後葉の土坑と考えられる。

第10号土坑（SK10、図65・70、写真44・75）

[位置・確認] Y-25グリッド、標高57.6～57.7mの平坦面に位置し、第IV層中で確認した。重複する遺構はない。

[形態・規模等] 平面形は長軸151cm、短軸124cmの隅丸方形で、深さは最大69cmを測る。壁面は底面から30cm程度ほぼ垂直に立ち上がり、そこから開口部へは放射状に開く。

[底面施設] 底面で逆茂木痕と考えられるピット4基を検出した。径は10～15cm、深さは最大33cmを測る。

[堆積土] 8層に分層した。1・2層は黒色土を主体とした自然堆積で、中掬軽石を斑に含む。3層は底面付近で黄橙色軽石をブロック状に含み、機能時もしくは廃絶直後の人為堆積土と考えられる。4層は壁の崩落土である。

[出土遺物] 堆積土中から縄文土器13g、剥片74gが出土した。図70-14は地文縄文を持つ口縁部破片で、口唇は内削ぎ気味にやや薄く仕上げられる。

[小結] 出土遺物や形態から、縄文時代早期の円形の落とし穴と考えられる。

第11号土坑（SK11、図66、写真44）

[位置・確認] I A・I B-26グリッド、標高57.5～57.8mの平坦面に位置し、第IV層中で確認した。第3号堅穴建物跡と重複し、本遺構が古い。

[形態・規模等] 平面形は長軸141cm、短軸(93)cmで楕円形を呈すると思われ、深さは最大63cmを測る。

壁面はわずかにオーバーハングする。

[堆積土] 4層に分層した。黒褐色土及び暗褐色土を主体とした自然堆積で、1層は中礫軽石を斑に含む。

[出土遺物] なし。

[小結] 検出面や土層堆積状況から、縄文時代の土坑と考えられるが、詳細は不明である。

第12号土坑 (SK12、図66、写真45)

[位置・確認] U-30グリッド、標高57.3～57.6mの平坦面に位置し、第IV層中で確認した。重複する遺構はない。

[形態・規模等] 平面形は長軸166cm、短軸150cmの不整円形で、深さは最大34cmを測る。断面形は皿形を呈する。

[堆積土] 4層に分層した。黒褐色土を主体とした自然堆積である。

[出土遺物] 堆積土中から縄文土器47g、剥片5gが出土したが、いずれも細片のため図示していない。

[小結] 出土遺物から、縄文時代の土坑と考えられるが、詳細は不明である。

第13号土坑 (SK13、図66、写真45)

[位置・確認] W-25・26グリッド、標高57.4～57.6mの平坦面に位置し、第IV層中で確認した。重複する遺構はない。

[形態・規模等] 平面形は長軸121cm、短軸119cmの円形で、深さは最大85cmを測る。壁面は底面から50cm程度ほぼ垂直に立ち上がり、そこから開口部へは放射状に開く。

[底面施設] 底面で逆茂木痕と考えられるピット4基を検出した。径は10cm前後、深さは最大31cmを測る。

[堆積土] 12層に分層した。7・8・10層は黒褐色土を主体とし、ロームと粘性の強い黒色土が層状に堆積していることから、人為堆積層と思われる。6層より上層は、壁の崩落土を含む自然堆積層で、1・2層では中礫軽石が斑に堆積する状況を確認した。

[出土遺物] なし。

[小結] 形態や土層堆積状況から、縄文時代前期以前の落とし穴と考えられる。

第14号土坑 (SK14、図66、写真46)

[位置・確認] X-23・24グリッド、標高57.4～57.6mの平坦面に位置し、第IV層中で確認した。重複する遺構はない。

[形態・規模等] 平面形は長軸112cm、短軸100cmの楕円形で、深さは最大114cmを測る。断面はフラスコ形で、底面から70cm程度はオーバーハングし、そこから開口部へはほぼ垂直に立ち上がる。

[底面施設] 底面中央付近で径25cm、深さ12cmのピットを検出した。

[堆積土] 8層に分層した。黒色土・黒褐色土・暗褐色土を主体とする自然堆積である。1～3層で中礫軽石が斑に堆積する状況を確認した。

[出土遺物] なし。

[小結] 形態や土層堆積状況から、縄文時代のフラスコ状土坑と考えられる。

第15号土坑 (SK15、図66・70、写真46・75)

[位置・確認] R-21・22グリッド、標高55.6～55.9mの緩斜面に位置し、第IV層中で確認した。重複する遺構はない。

[形態・規模等] 平面形は長軸134cm、短軸132cmの円形で、深さは最大103cmを測る。断面はやや開き気味に立ち上がる。

[底面施設] 底面で逆茂木痕と考えられるピット4基を検出した。径は5～10cm、深さは最大35cmを測る。

[堆積土] 11層に分層した。5～11層は黒褐色土を主体とした自然堆積層、3・4層は壁際の崩落土と考えられる。1・2層は、黄橙色軽石を多量に含み、ある程度埋没していたところを掘り返したような様相が見られることから、人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 堆積土中から縄文土器473g、剥片2gが出土した。図70-16は内外面に貝殻条痕文を持つ。図70-17は尖底深鉢の底部、図70-18は胴下部破片である。図70-19は地文縄文に鋸歯状の沈線が描かれる口縁部破片で、口唇には横方向からの刺突が巡る。図70-20は撚り戻した原体を使っていると思われる。

[小結] 出土遺物や形態から、縄文時代早期後葉の落とし穴と考えられる。

第16号土坑 (SK16、図66、写真47)

[位置・確認] X-26グリッド、標高57.6～57.7mの平坦面に位置し、第IV層中で確認した。重複する遺構はない。

[形態・規模等] 平面形は長軸111cm、短軸100cmの隅丸方形で、深さは最大6cmを測る。断面形は皿形を呈する。

[堆積土] 単層で、黒色土を主体とした自然堆積である。

[出土遺物] なし。

[小結] 出土遺物がなく、構築時期などの詳細は不明である。

第17号土坑 (SK17、図66・70、写真47)

[位置・確認] I A-23・24グリッド、標高57.0～57.3mの平坦面に位置し、第IV層中で確認した。重複する遺構はない。

[形態・規模等] 平面形は長軸(150)cm、短軸146cmの円形で、深さは最大14cmを測る。遺構検出を行っていた際に、不整形の焼土散布範囲を2カ所検出し、周囲を精査したところ北側でわずかに立ち上がりを確認し、遺物も出土したことから土坑と認識した。

[堆積土] 上記経緯から、堆積状況は記録できていない。

[出土遺物] 堆積土中から縄文土器が60g出土した。図70-15は貝殻腹縁文を施す深鉢の胴部破片である。

[小結] 出土遺物から、縄文時代早期の土坑の可能性はあるが、詳細は不明である。

第18号土坑 (SK18、図67・70、写真47・75)

[位置・確認] S・T-24・25グリッド、標高56.3～56.5mの緩斜面に位置し、第IV層中で確認した。重複する遺構はない。

[形態・規模等] 平面形は長軸172cm、短軸146cmの不整楕円形で、深さは最大41cmを測る。断面形台形を呈する。

[堆積土] 3層に分層した。3層は周囲からの流れ込み、1・2層は黒褐色土及び暗褐色土を主体とした自然堆積と考えられる。

[出土遺物] 堆積土中から縄文土器229g、磨製石斧破片1点が出土した。図70-21・22は、いずれも無文の深鉢胴部破片である。

[小結] 出土遺物や土層堆積状況から、縄文時代の土坑と考えられる。

第19号土坑 (SK19、図67・70)

[位置・確認] I A・I B-25・26グリッド、標高57.3～57.6mの平坦面に位置する。第3号竪穴建物跡を掘り込んで構築されており、同建物跡の堆積土中で確認した。

[形態・規模等] 平面形は長軸169cm、短軸120cmの楕円形で、深さは最大95cmを測る。断面形は台形を呈する。

[堆積土] 8層に分層した。黒褐色～黄褐色土を主体とした自然堆積で、4・5層で白色火山灰の堆積を確認した。

[出土遺物] 堆積土中から土師器41g、須恵器51g、剥片19gが出土した。図70-23は甕の底部で、外面へラケズリ、内面へラナゲ調整が施され、底面には木葉痕が残る。図70-24は内面黒色処理が施された坏である。なお、このほか第3号竪穴建物跡から出土した土師器との接合関係が確認されているが(図34-8)、本遺構の構築時に第3号竪穴建物跡の遺物が紛れ込んだものと考えられる。

[小結] 遺構の重複関係及び出土遺物から、10世紀前葉以降の土坑と考えられる。

第20号土坑 (SK20、図67・70・71、写真47・75)

[位置・確認] R・S-21グリッド、標高56.1～56.5mの緩斜面に位置し、第IV層中で確認した。第19号溝状土坑と重複し、本遺構が古い。

[形態・規模等] 平面形は長軸190cm、短軸(150)cmの略円形で、深さは最大105cmを測る。断面形は筒形で、底面から約60cmのあたりで段を持つ。

[堆積土] 14層に分層した。黒色～黄褐色土を主体とした自然堆積である。

[出土遺物] 堆積土中から土師器5g、縄文土器1,066g、剥片7g、敲磨器類2点が出土した。縄文土器は吹切沢式が1点(図70-25)出土しているが、主体を占めるのは早期中葉の鳥木沢式で(図70-26～33・図71-1～3)、そのほかに早期後葉の赤御堂式(図71-4・5)、後期初頭の土器が出土している(図71-6)。図71-7は側縁部の一面が擦痕により面取りされたような状態となっており、三角柱状磨石の破片と考えられる。

[小結] 出土遺物から、縄文時代早期中葉の土坑と考えられるが、十分に埋まりきらずしばらくの間窪地のような状況を呈していたと考えられる。

第21号土坑（SK21、図67、写真47）

[位置・確認] W-22・23グリッド、標高57.4～57.6mの平坦面に位置し、第IV層中で確認した。重複する遺構はない。

[形態・規模等] 平面形は長軸126cm、短軸108cmの略円形で、深さは最大89cmを測る。断面形は筒形で、北東側がオーバーハングし、南西側はほぼ垂直に立ち上がる。

[堆積土] 5層に分層した。1・2層は黒色土を主体とした堆積土、3～5層は黒色土とロームブロックが混じり合っており、一見すると柱痕と裏込め土のような様相を呈するが、柱当たりのような硬化面や、掘立を組めるような他の柱穴は検出できなかった。

[出土遺物] なし。

[小結] 形態から、縄文時代のフラスコ状土坑の可能性はあるが、出土遺物がなく、構築時期などの詳細は不明である。

第22号土坑（SK22、図67、写真48）

[位置・確認] U-26グリッド、標高56.8～57.0mの平坦面に位置し、第IV層中で確認した。重複する遺構はない。

[形態・規模等] 平面形は長軸124cm、短軸70cmの隅丸方形で、深さは最大12cmを測る。断面形は皿状を呈する。

[堆積土] 単層で、黒褐色土を主体とした自然堆積である。

[出土遺物] なし。

[小結] 出土遺物がなく、構築時期などの詳細は不明である。

第23号土坑（SK23、図67・71、写真48・75）

[位置・確認] Y-24グリッド、標高57.5～57.6mの平坦面に位置し、第IV層中で確認した。重複する遺構はない。

[形態・規模等] 平面形は長軸113cm、短軸111cmの円形で、深さは最大32cmを測る。断面形は皿状を呈する。

[堆積土] 3層に分層した。黒褐色～褐色土を主体とした自然堆積で、3層は軽石主体の層である。

[出土遺物] 堆積土中から縄文土器6g、磨石1点が出土した。図71-9は閃緑岩製の磨石で中央部に磨滅の痕跡が残る。

[小結] 出土遺物や土層堆積状況から、縄文時代の土坑と考えられるが、詳細は不明である。

第24号土坑（SK24、図67・71、写真48・75）

[位置・確認] S・T-26・27グリッド、標高56.3～56.4mの平坦面に位置し、第IV層中で確認した。重複する遺構はない。

[形態・規模等] 平面形は長軸110cm、短軸71cmの隅丸方形で、深さは最大26cmを測る。断面形は方形を呈する。

[堆積土] 2層に分層した。黒褐色土を主体とした自然堆積である。

[出土遺物] 堆積土中から土師器51g、縄文土器191gが出土した。縄文土器は、早期中葉の貝殻文系土器(図71-10~12)と早期後葉の赤御堂式土器(図71-13・14)が出土している。

[小結] 出土遺物況から、縄文時代早期後葉の土坑と考えられる。

第25号土坑 (SK25、図67・71、写真49・75)

[位置・確認] T-24グリッド、標高56.5~56.7mの平坦面に位置し、第IV層中で確認した。重複する遺構はない。

[形態・規模等] 平面形は長軸125cm、短軸93cmの楕円形で、深さは最大37cmを測る。底面から15cm程度ほぼ垂直に立ち上がったのち、開口部へ放射状に開く。

[堆積土] 3層に分層した。褐色~浅黄橙色土を主体とした自然堆積である。

[出土遺物] 堆積土中から縄文土器658g、両面調整剥片1点(図71-21)が出土した。縄文土器は早期後葉の赤御堂式土器が主体を占める(図71-15~20)。

[小結] 出土遺物や土層堆積状況から、縄文時代早期後葉の土坑と考えられる。

第26号土坑 (SK26、図67・71、写真48・75)

[位置・確認] W・X-25・26グリッド、標高57.6~57.7mの平坦面に位置し、第IV層中で確認した。重複する遺構はない。

[形態・規模等] 平面形は長軸93cm、短軸85cmの略円形で、深さは最大28cmを測る。底面西寄りには径約40cm、深さ約15cmで掘り込まれ一段低くなる。

[堆積土] 遺物の出土状況記録を優先したため、堆積土の記録はとっていない。

[出土遺物] 堆積土中から土師器121g、軽石62g、レンガ状土製品1点、含鉄鍛冶滓1点が出土した。いずれも検出面直下辺り、堆積土の上方から出土している。土師器は第1号竪穴建物跡出土遺物と接合した(図26-2)。レンガ状土製品(図71-22)は略完形で、長さ37.1cm、幅18.6cm、厚さ4.1cmで表面は粘土を削いで面取りしたような痕跡が確認できる。緩やかにS字状に湾曲している。同様の土製品は、第9号竪穴建物跡からも出土している。炉壁やカマドの芯材の素材である可能性があるが、被熱を受けた痕跡はなく、詳細は不明である。含鉄鍛冶滓(図71-23)は、レンガ状土製品の上に乗っかる形で出土した。底面に炉壁由来と思われる白色粒子が付着しており、土と共に木炭を噛み込んでいる。

[小結] 出土遺物から、9世紀後葉から10世紀前葉の土坑と考えられる。なお、含鉄鍛冶滓が噛み込んでいた木炭の放射性炭素年代測定結果は、772-893 cal AD (2 σ)で、考古学的所見よりも若干古く古木効果の可能性はある(第2章第3節)。

第27号土坑 (SK27、図68・72、写真49)

[位置・確認] R・S-19グリッド、標高56.5~57.0mの平坦面に位置し、第IV層中で確認した。重複する遺構はない。

[形態・規模等] 平面形は長軸226cm、短軸95cmの楕円形で、深さは最大23cmを測る。断面形は台形を呈する。

[堆積土] 4層に分層した。黒褐色土～褐色土を主体とした自然堆積である。

[出土遺物] 堆積土中から縄文土器32gが出土した。いずれも地文縄文を持つ深鉢破片であるが、縄文の雰囲気から図72-1は縄文時代早期後葉、図72-2は縄文時代後期に比定されると考えられる。

[小結] 出土遺物や土層堆積状況から、縄文時代の土坑と考えられるが、詳細は不明である。

第28号土坑（SK28、図68、写真49）

[位置・確認] P-15グリッド、標高56.2～56.6mの緩斜面に位置し、第IV層中で確認した。重複する遺構はない。

[形態・規模等] 平面形は長軸153cm、短軸139cmの不整円形で、深さは最大33cmを測る。断面形は台形を呈する。

[堆積土] 4層に分層した。褐色土～にぶい黄褐色土を主体とした自然堆積である。

[出土遺物] なし。

[小結] 出土遺物がなく、構築時期などの詳細は不明である。

第29号土坑（SK29、図68・72、写真49）

[位置・確認] S-17グリッド、標高57.1～57.2mの平坦面に位置し、第IV層中で確認した。重複する遺構はない。

[形態・規模等] 平面形は長軸82cm、短軸75cmの略円形で、深さは最大20cmを測る。断面形は台形を呈する。

[堆積土] 3層に分層した。褐色土を主体とした自然堆積である。

[出土遺物] 堆積土中から縄文土器31gが出土した。図72-3は貝殻文土器で、外面には貝殻腹縁文が、内面には貝殻条痕が残る。

[小結] 出土遺物から、縄文時代早期中葉の土坑と考えられるが詳細は不明である。

第31号土坑（SK31、図68・72、写真49）

[位置・確認] S-26・27グリッド、標高55.9～56.2mの緩斜面に位置し、第IV層中で確認した。重複する遺構はない。

[形態・規模等] 平面形は長軸176cm、短軸89cmの楕円形で、深さは最大24cmを測る。平面形は台形を呈する。

[堆積土] 単層で、黒褐色土を主体とした自然堆積である。

[出土遺物] 堆積土中から縄文土器41gが出土した。図72-4は貝殻腹縁文、図72-5は縄文（0段多条）を地文に持つ土器である。

[小結] 出土遺物から、縄文時代早期の土坑と考えられるが詳細は不明である。

第32号土坑（SK32、図68、写真50）

[位置・確認] S・T-25・26グリッド、標高56.3～56.5mの平坦面に位置し、第IV層中で確認した。重複する遺構はない。

[形態・規模等] 平面形は長軸143cm、短軸75cmの楕円形で、深さは最大15cmを測る。断面形は台形を呈する。

[堆積土] 単層で、暗褐色土を主体とした自然堆積である。

[出土遺物] 堆積土中から縄文土器18gが出土したが、細片のため図示していない。

[小結] 出土遺物から、縄文時代の土坑と考えられるが詳細は不明である。

第33号土坑 (SK33、図68、写真50)

[位置・確認] S-21グリッド、標高56.5～56.8mの平坦面に位置し、第IV層中で確認した。重複する遺構はない。

[形態・規模等] 平面形は長軸173cm、短軸118cmの楕円形で、深さは最大11cmを測る。断面形は皿形を呈する。

[堆積土] 単層で、黒褐色土を主体とした自然堆積である。

[出土遺物] なし。

[小結] 出土遺物がなく、構築時期などの詳細は不明である。

第34号土坑 (SK34、図68・72、写真50)

[位置・確認] T-17グリッド、標高57.0～57.1mの平坦面に位置し、第IV層中で確認した。重複する遺構はない。

[形態・規模等] 平面形は長軸148cm、短軸95cmの隅丸方形で、深さは最大18cmを測る。断面形は皿形を呈する。

[堆積土] 単層で、褐色土を主体とした自然堆積である。

[出土遺物] 堆積土中から縄文土器31gが出土した。図72-6は節の細かい縄文を地文に持つ。

[小結] 出土遺物から、縄文時代の土坑と考えられるが詳細は不明である。

第35号土坑 (SK35、図68・72、写真50・75)

[位置・確認] U-18グリッド、標高57.1～57.3mの平坦面に位置し、第IV層中で確認した。重複する遺構はない。

[形態・規模等] 平面形は長軸81cm、短軸72cmの略円形で、深さは最大37cmを測る。断面形は台形を呈する。

[堆積土] 単層で、褐色土を主体とした自然堆積である、

[出土遺物] 堆積土中から縄文土器96g、剥片2点、石核2点が出土した。図72-7は地文縄文を持つ深鉢の口縁部破片で、口縁部には側面圧痕が巡り、その下に穿孔がなされる。図72-8は珪質頁岩製の石核である。

[小結] 出土遺物から、縄文時代早期の土坑と考えられるが詳細は不明である。

第36号土坑 (SK36、図68・72、写真50・75)

[位置・確認] S-18グリッド、標高57.0～57.2mの平坦面に位置し、第IV層中で確認した。重複する

遺構はない。

[形態・規模等] 平面形は長軸90cm、短軸87cmの略円形で、深さは最大9cmを測る。断面形は皿形を呈する。

[堆積土] 単層で、褐色土を主体とした自然堆積である。

[出土遺物] 堆積土中から土師器2g、縄文土器62gが出土した。図72-9は節の細かい縄文を地文に持つ。

[小結] 出土遺物から、縄文時代の土坑と考えられるが詳細は不明である。

第37号土坑 (SK37、図68・72、写真51・75)

[位置・確認] U-16グリッド、標高54.5～56.0mの斜面に位置し、第IV層中で確認した。重複する遺構はない。

[形態・規模等] 平面形は長軸139cm、短軸125cmの略円形で、深さは最大72cmを測る。断面形は筒形を呈し、北西側の壁がオーバーハングする。

[堆積土] 4層に分層した。黒褐色土を主体とした自然堆積である。

[出土遺物] 堆積土中から縄文土器41gが出土した。いずれも深鉢の胴部破片で、図72-10はケズリ調整が施され、図72-11は地文縄文を持つ。

[小結] 出土遺物から、縄文時代早期の土坑と考えられるが詳細は不明である。

第38号土坑 (SK38、図68・72、写真51・75)

[位置・確認] U-14グリッド、V-13・14グリッド、標高52.5～53.5mの斜面に位置し、第IV層中で確認した。重複する遺構はない。

[形態・規模等] 平面形は長軸249cm、短軸224cmの略円形で、深さは最大92cmを測る。断面形は台形を呈し、北西側は壁の崩落により段が形成されている。

[堆積土] 5層に分層した。1・2層は黒褐色土、3～5層は壁の崩落土を含むにぶい黄褐色土を主体とした自然堆積である。

[出土遺物] 堆積土中から縄文土器149g、剥片1点が出土した。図72-12は内面にケズリ調整、外面に貝殻腹縁文による羽状の文様が描かれる。貝殻腹縁文は滑らかで放射肋の痕跡が見られないことから、施文具にハマグリなどを使用したものと考えられる。図72-13は表裏縄文土器である。

[小結] 出土遺物から、縄文時代早期の土坑と考えられる。

第39号土坑 (SK39、図69、写真51)

[位置・確認] T-15・16グリッド、標高56.1～56.4mの斜面に位置し、第IV層中で確認した。第46号土坑と重複し、本遺構が新しい。

[形態・規模等] 平面形は長軸81cm、短軸72cmの略円形で、深さは最大16cmを測る。断面形は皿形を呈する。

[堆積土] 2層に分層した。黒褐色土及びにぶい黄褐色土を主体とし、覆土中に炭化物や焼土粒を含むことから、人為堆積と考えられる。

[出土遺物] なし。

[小結] 出土遺物がないため、構築時期などの詳細は不明である。

第40号土坑 (SK40、図69・72、写真51・75)

[位置・確認] Y-18グリッド、標高52.9～53.6mの斜面に位置し、第IV層中で確認した。重複する遺構はない。

[形態・規模等] 平面形は長軸191cm、短軸137cmの楕円形で、深さは最大56cmを測る。断面形は台形を呈する。

[堆積土] 5層に分層した。2・4層はにぶい黄褐色土を主体とした壁崩落土、1・3・5層は黒褐色土を主体とし、炭化物やロームを含むことから人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 堆積土中から縄文土器562gが出土した。いずれも貝殻腹縁による鋸歯状文をもつ鳥木沢式の深鉢破片である。図72-15は大型の口縁部破片で、竹管状工具による刺突列で文様帯を区画している。口唇部には指頭状の突起を4単位配する。

[小結] 出土遺物から、縄文時代早期中葉の土坑と考えられる。

第41号土坑 (SK41、図69・72、写真51・76)

[位置・確認] Y-17・18グリッド、標高52.2～53.0mの斜面に位置し、第IV層中で確認した。重複する遺構はない。

[形態・規模等] 平面形は長軸185cm、短軸(141)cmの隅丸方形で、深さは最大41cmを測る。断面形は台形を呈する。斜面地に立地しており、南東部の壁面が一部消失している。

[堆積土] 2層に分層した。1層は黒褐色土を主体、2層はにぶい黄褐色土を主体とした自然堆積である。

[出土遺物] 堆積土中から縄文土器726g、磨石1点、土製品1点が出土した。土器はケズリやミガキを施した無文のもの(図72-16～18)や、縄文を持つもの(図72-19)が出土している。図72-17は平底の底部破片である。

[小結] 出土遺物から、縄文時代早期の土坑と考えられる。

第42号土坑 (SK42、図69、写真52)

[位置・確認] V-15グリッド、標高54.0～54.6mの斜面に位置し、第IV層中で確認した。第43号土坑と重複し、本遺構が新しい。

[形態・規模等] 平面形は長軸171cm、短軸134cmの不整楕円形で、深さは最大54cmを測る。断面形は皿形を呈する。

[堆積土] 3層に分層した。黒褐色土～褐色土を主体とした自然堆積である。

[出土遺物] なし。

[小結] 出土遺物がないため、構築時期などの詳細は不明である。

第43号土坑（SK43、図69、写真52）

[位置・確認] V-15グリッド、標高53.6～54.1mの斜面に位置し、第IV層中で確認した。第42号土坑と重複し、本遺構が古い。

[形態・規模等] 平面形は長軸158cm、残存短軸97cmの不整楕円形で、深さは最大39cmを測る。断面形は皿形を呈する。

[堆積土] 2層に分層した。黒褐色土及び褐色土を主体とした自然堆積である。

[出土遺物] なし。

[小結] 出土遺物がないため、構築時期などの詳細は不明である。

第44号土坑（SK44、図69、写真52）

[位置・確認] T-14グリッド、標高54.2～54.7mの斜面に位置し、第IV層中で確認した。重複する遺構はない。

[形態・規模等] 平面形は長軸183cm、短軸149cmの楕円形で、深さは最大95cmを測る。断面形は台形を呈する。

[堆積土] 8層に分層した。黒褐色土～にぶい黄橙色土を主体とした自然堆積である。

[出土遺物] なし。

[小結] 出土遺物がないため、構築時期などの詳細は不明である。

第45号土坑（SK45、図69、写真52）

[位置・確認] X-14グリッド、標高49.5～50.0mの斜面に位置し、第IV層中で確認した。重複する遺構はない。

[形態・規模等] 平面形は長軸123cm、短軸102cmの楕円形で、深さは最大36cmを測る。断面形は皿形を呈する。

[堆積土] 4層に分層した。黒褐色土～褐色土を主体とした自然堆積である。

[出土遺物] なし。

[小結] 出土遺物がないため、構築時期などの詳細は不明である。

第46号土坑（SK46、図69・72、写真52・76）

[位置・確認] T-15・16グリッド、標高55.8～56.4mの斜面に位置し、第IV層中で確認した。第39号土坑と重複し、本遺構が古い。

[形態・規模等] 平面形は長軸237cm、短軸213cmの略円形で、深さは最大143cmを測る。断面形は筒形を呈する。

[堆積土] 10層に分層した。黒褐色土を主体とした自然堆積である。

[出土遺物] 堆積土中から縄文土器61g、磨石1点が出土した。土器は地文縄文を持つものが出土しているが、縄文原体や胎土の観察所見から図72-21は縄文時代早期、図72-22は縄文時代後期の所産と考えられる。磨石は粗粒玄武岩製で、中央部及び側面に使用面が確認される。

[小結] 出土遺物から、縄文時代の土坑と考えられるが、詳細は不明である。 (中門)

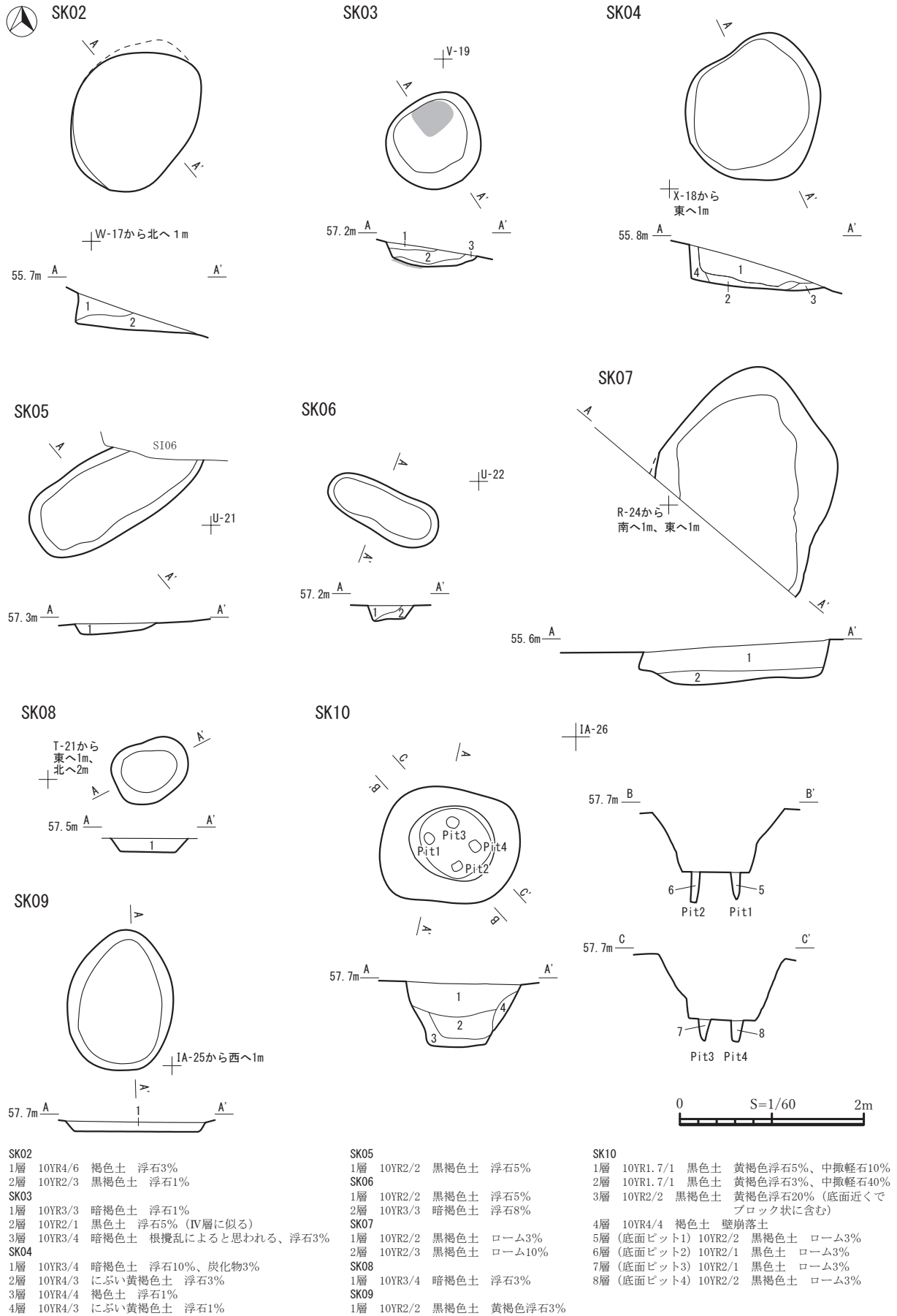
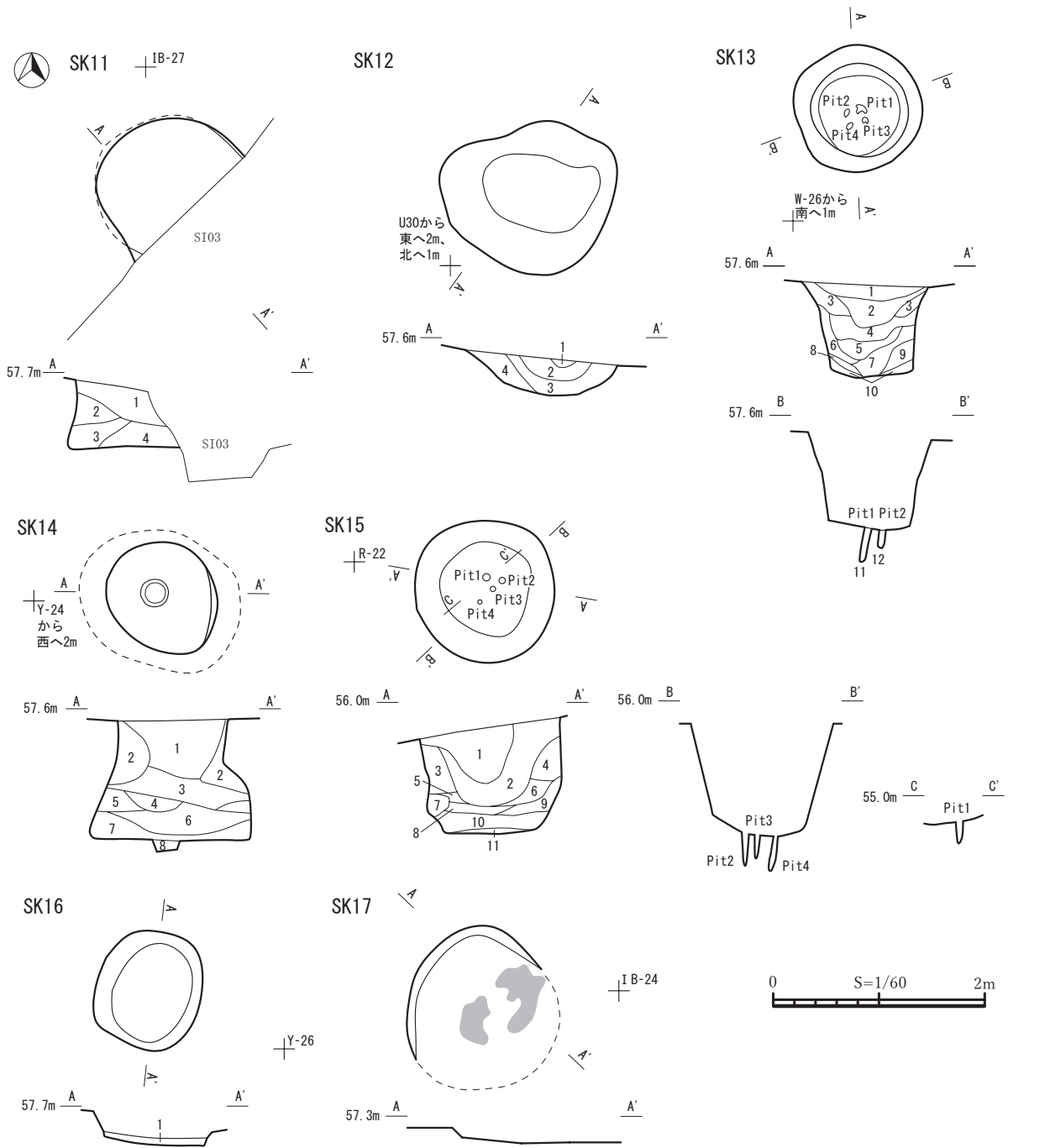


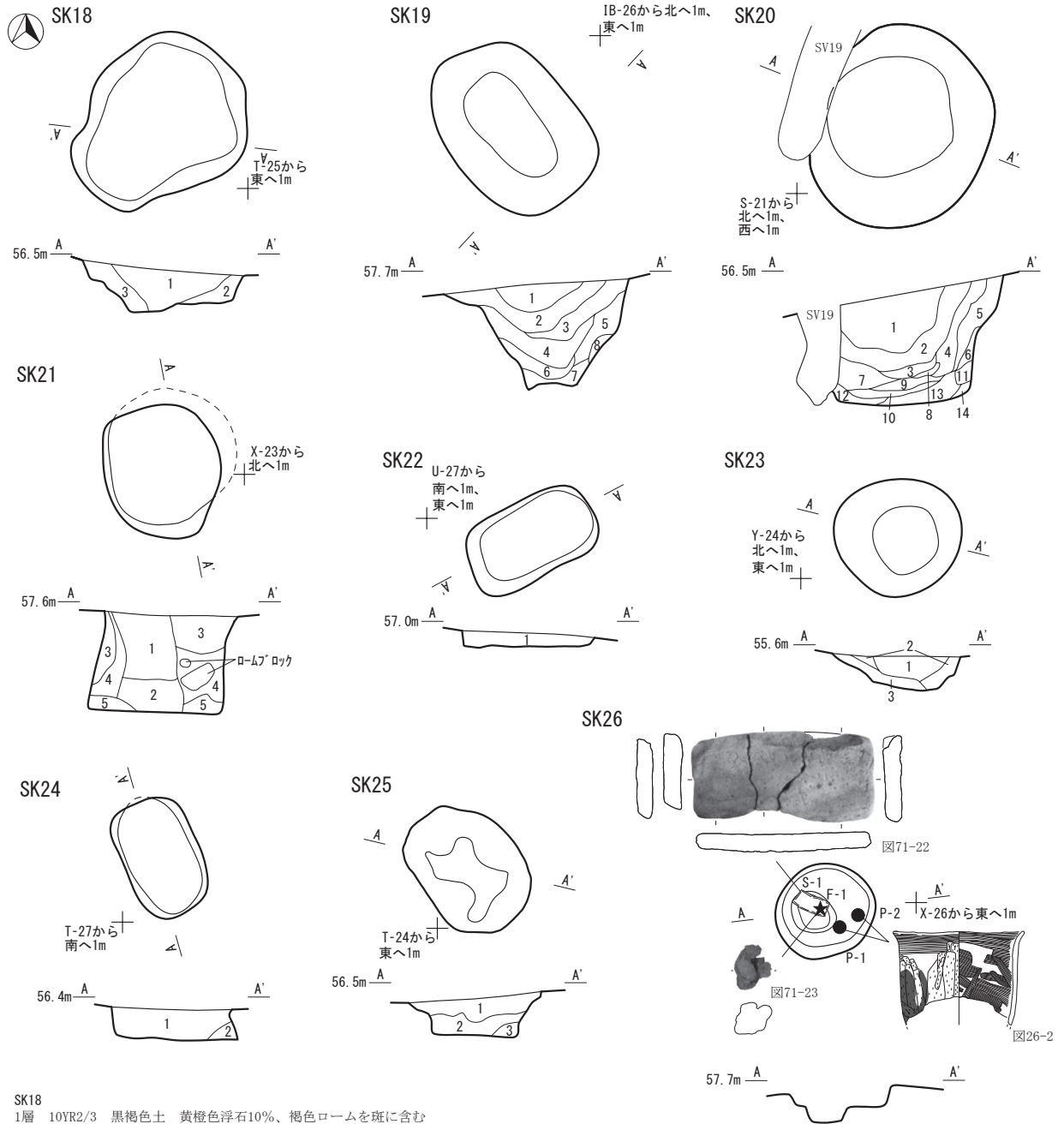
図65 土坑(1)



- SK11**
- 1層 10YR3/2 黒褐色土 中礫軽石混入、ローム1%
 - 2層 10YR3/4 暗褐色土 ローム10%
 - 3層 10YR3/3 暗褐色土 ローム5%
 - 4層 10YR2/2 黒褐色土 ローム1%
- SK12**
- 1層 10YR6/8 黄褐色土
 - 2層 10YR2/3 黒褐色土 10YR/4褐色土との混合、10YR6/8黄褐色ブロック (φ20mm前後) 2%
 - 3層 10YR2/2 黒褐色土 10YR3/3暗褐色土との混合、10YR7/8黄褐色浮石 (φ~15mm) 2%
 - 4層 10YR2/3 黒褐色土 10YR4/4褐色土との混合、10YR7/8黄褐色浮石 (φ~10mm) 2%
- SK13**
- 1層 10YR1.7/1 黒色土 黄褐色浮石1%、中礫軽石15%
 - 2層 10YR3/1 黒褐色土 黄褐色浮石20%、中礫軽石5%
 - 3層 10YR3/2 黒褐色土 ローム混じりの土、壁際に崩落土含む
 - 4層 10YR2/1 黒色土 黄褐色浮石5%
 - 5層 10YR2/1 黒色土 黄褐色浮石10%
 - 6層 10YR4/6 褐色土 壁崩落土
 - 7層 10YR2/3 黒褐色土 ローム混じりの土 灰白色粒3%
 - 8層 10YR3/2 黒褐色土 粘性に富む黒色土が層状に堆積
 - 9層 10YR4/6 褐色土 壁崩落土
 - 10層 10YR3/2 黒褐色土 ローム混じりの土
 - 11層 (底面ビット1) 10YR2/2 黒褐色土
 - 12層 (底面ビット2) 10YR5/6 黄褐色土

- SK14**
- 1層 10YR2/2 黒褐色土 中礫軽石混入、ローム粒5%
 - 2層 10YR3/3 暗褐色土 中礫軽石混入、ローム粒10%
 - 3層 10YR2/1 黒色土 中礫浮石混入、ローム粒3%
 - 4層 10YR2/2 黒褐色土 ローム粒5%
 - 5層 10YR5/6 黄褐色土 ロームとの混合土
 - 6層 10YR2/1 黒色土 ローム粒3%
 - 7層 10YR3/3 暗褐色土 ローム粒3%
 - 8層 (底面ビット) 10YR2/2 黒褐色土 ローム粒3%
- SK15**
- 1層 10YR1.7/1 黒色土 黄褐色浮石30% (φ10mm以上の大粒のものあり)
 - 2層 10YR2/2 黒褐色土 黄褐色浮石5%
 - 3層 10YR3/3 暗褐色土 黄褐色浮石5%、ローム混じりの土
 - 4層 10YR4/6 褐色土 黄褐色浮石5%
 - 5層 10YR2/2 黒褐色土
 - 6層 10YR2/3 黒褐色土 黄褐色浮石5%
 - 7層 10YR4/6 褐色土 壁崩落土 黄褐色浮石1%、黄褐色浮石1%
 - 8層 10YR1.7/1 黒色土 黄褐色浮石5%
 - 9層 10YR4/6 褐色土 黄褐色浮石層 壁崩落土
 - 10層 10YR3/3 暗褐色土 黄褐色浮石5%
 - 11層 10YR4/4 褐色土 黄褐色浮石主体の層
- SK16**
- 1層 10YR2/1 黒色土 浮石10% (基本層IV層に類似)

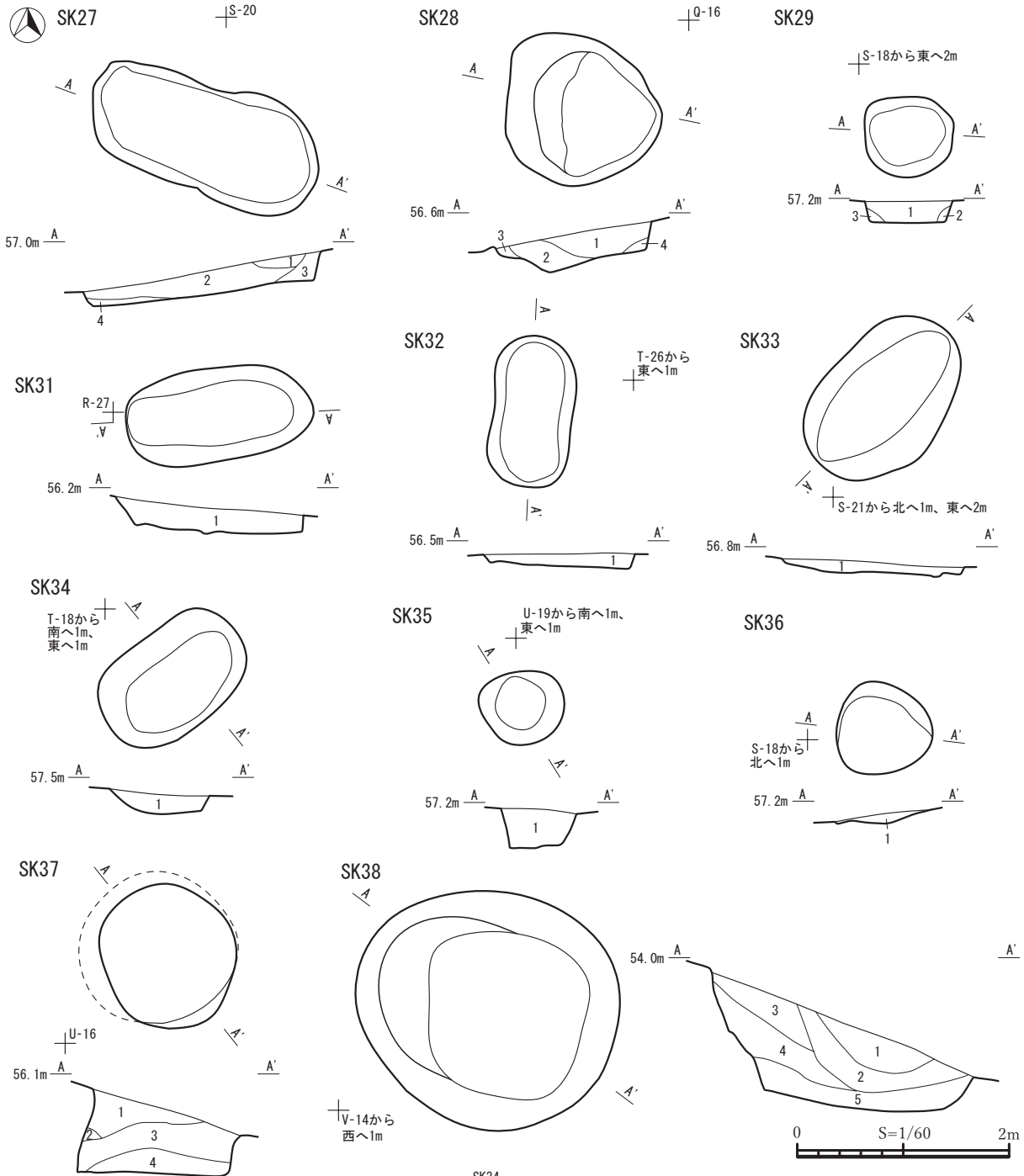
図66 土坑(2)



- SK18**
 1層 10YR2/3 黒褐色土 黄橙色浮石10%、褐色ロームを斑に含む
 2層 10TR3/4 暗褐色土 黄橙色浮石10%
 3層 10YR5/6 黄褐色土 黄橙色浮石5%、黒色土を斑に含む
- SK19**
 1層 10YR3/4 暗褐色土 ローム5%
 2層 10YR4/4 褐色土 ロームとの混合土
 3層 10YR2/2 黒褐色土 ローム5%
 4層 10YR4/4 褐色土 ロームとの混合土、白色火山灰をブロック状に含む
 5層 10YR3/4 暗褐色土 白色火山灰3%、ローム1%
 6層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 白色粘土粒(φ5~10mm) 3%
 7層 10YR6/4 にぶい黄褐色土 壁崩落土
 8層 10YR5/6 黄褐色土
- SK20**
 1層 10YR2/1 黒色土 黄橙色浮石30% (粒大きい、φ~15mm)
 2層 10YR2/3 黒褐色土 黄橙色浮石20% (粒大きい、φ~15mm)
 3層 10YR3/3 暗褐色土 黄橙色浮石10%
 4層 10YR3/4 暗褐色土 黄橙色浮石5%
 5層 10YR4/6 褐色土 黄橙色浮石5%
 6層 10YR5/6 黄褐色土 粘性の強い層
 7層 10YR2/2 黒褐色土 黄褐色浮石1%
 8層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 黄褐色浮石30%
 9層 10YR3/2 黒褐色土 黄褐色浮石20% (粒大きい、φ~20mm)
 10層 10YR2/2 黒褐色土 黄褐色浮石1%
 11層 10YR5/8 黄褐色土 壁崩落土
 12層 10YR4/4 褐色土 底面で明黄褐色土をブロック状に含む
 13層 10YR3/3 暗褐色土 黄褐色浮石40%
 14層 10YR5/4 にぶい黄褐色土 浮石層 (壁崩落土か)

- SK21**
 1層 10YR2/2 黒褐色土 浮石5%
 2層 10YR2/1 黒色土 浮石3%
 3層 10YR5/6 黄褐色土 地山の崩落土
 4層 10YR2/2 黒褐色土 ロームとの混合土
 5層 10YR6/3 にぶい黄褐色土 崩落土
- SK22**
 1層 10YR2/2 黒褐色土 ローム1%
- SK23**
 1層 10YR2/2 黒褐色土 浮石5%
 2層 10YR3/3 暗褐色土 浮石3%
 3層 10YR4/4 褐色土 浮石50%、浮石集中層
- SK24**
 1層 10YR2/1 黒褐色土 黄褐色浮石10%
 2層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 黄褐色浮石1%、ローム混じりの土
- SK25**
 1層 10YR4/4 褐色土 10YR3/2黒褐色土との混合 10YR7/8黄褐色浮石(φ~5mm) 2%
 2層 10YR5/8 黄褐色土 10YR7/8黄褐色浮石(φ~2mm) 3%
 3層 10YR6/4 浅黄褐色土 浮石層

図67 土坑(3)



SK27

- 1層 10YR3/4 暗褐色土 黄橙色浮石5%
- 2層 10YR2/3 黒褐色土 黄橙色浮石15% (粒が大きい、φ~15mm)
- 3層 10YR4/6 褐色土 黄橙色浮石5%
- 4層 10YR4/4 褐色土 黄橙色浮石50%

SK28

- 1層 10YR4/6 褐色土 黄橙色浮石3%
- 2層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 黄橙色浮石20%
- 3層 10YR4/4 褐色土
- 4層 10YR5/8 黄褐色土 浅黄橙色浮石5%

SK29

- 1層 10YR4/4 褐色土 黄橙色浮石40%
- 2層 10YR5/4 にぶい黄褐色土 黄橙色浮石20%
- 3層 10YR5/6 黄褐色土 明黄褐色土混じる

SK31

- 1層 10YR2/2 黒褐色土 粒の細かい黄橙色浮石 (φ1~5mm) 15%

SK32

- 1層 10YR3/3 暗褐色土 黄橙色浮石3%

SK33

- 1層 10YR2/3 黒褐色土 黄橙色浮石10%

SK34

- 1層 10YR4/4 褐色土 黄橙色浮石10%

SK35

- 1層 10YR4/6 褐色土 黄橙色浮石20% (下層が粒大きいφ~20mm)

SK36

- 1層 10YR4/4 褐色土 黄橙色浮石15%

SK37

- 1層 10YR3/1 黒褐色土 10YR3/3暗褐色土との混合、10YR5/4にぶい黄褐色土壁際に混入、10YR8/6黄橙色浮石 (φ~5mm) 3%

SK38

- 2層 10YR8/2 灰白色土 壁崩落土
- 3層 10YR4/4 褐色土 10YR8/6黄橙色浮石 (φ~1mm) 1%
- 4層 10YR3/1 黒褐色土 10YR3/3暗褐色土との混合、10YR8/4浅黄橙色浮石 (φ~5mm) 2%

SK38

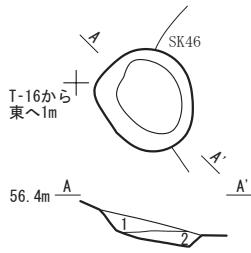
- 1層 10YR3/1 黒褐色土 10YR3/4暗褐色土との混合、10YR8/4浅黄橙色浮石 (φ~10mm) 5%
- 2層 10YR2/2 黒褐色土 10YR2/2黒色土 (φ~30mm) ブロック状に含む (5%)、10YR5/6明黄褐色浮石 (φ~5mm) 3%

SK38

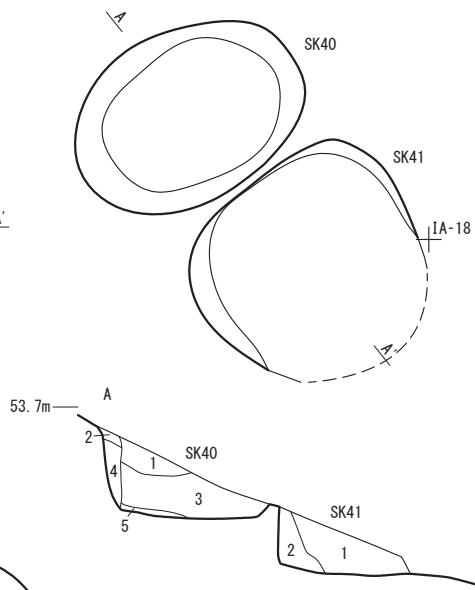
- 3層 10YR5/4 にぶい黄褐色土 10YR3/2黒褐色土が2層との層理面に混入、10YR8/6黄橙色浮石 (φ~5mm) 3%、壁崩落土含む
- 4層 10YR4/4 にぶい黄褐色土 10YR3/1黒褐色土が5層との層理面に層状に混入、10YR8/6浅黄橙色浮石 (φ~7mm) 7%、壁崩落土含む
- 5層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 10YR3/4暗褐色土と10YR7/4にぶい黄褐色土との混合、10YR7/6明黄褐色浮石 (φ~5mm) 10%、壁崩落土含む

図68 土坑 (4)

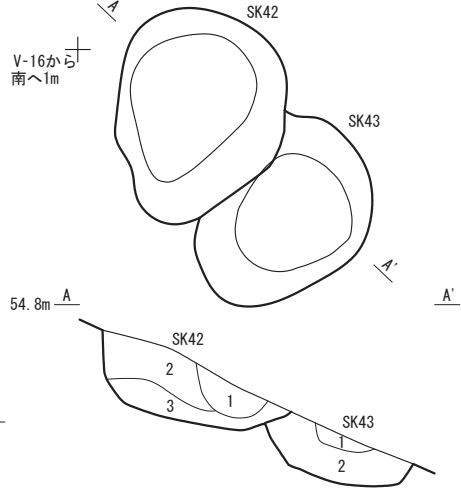
SK39



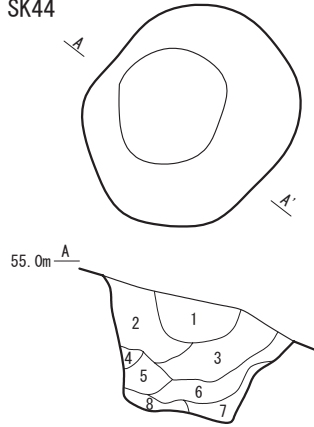
SK40・41



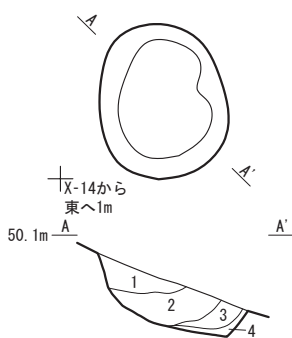
SK42・43



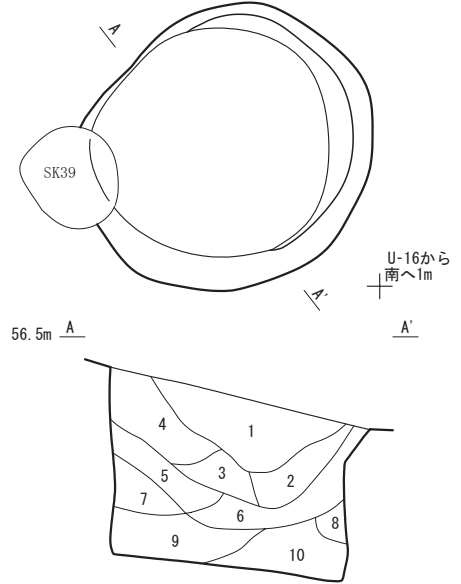
SK44



SK45



SK46



SK39

- 1層 10YR2/2 黒褐色土 10YR8/6黄橙色浮石 (φ~3mm) 2%、炭化物 (φ~1mm) 1%、焼土粒 (φ~1mm) 1%
- 2層 10YR2/3 にぶい黄褐色土 浮石 (φ~2mm) 5%、炭化物 (φ~3mm) 1%

SK40

- 1層 10YR3/1 黒褐色土 10YR4/3にぶい黄褐色土との混合、炭化物粒 (φ~5mm) 1%、焼土粒 (φ~3mm) 1%、10YR8/4浅黄橙色浮石 (φ~10mm) 5%
- 2層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 壁崩落土
- 3層 10YR2/3 黒褐色土 10YR4/3にぶい黄褐色土との混合、炭化物粒 (φ~10mm) 1%、10YR7/2にぶい黄橙色浮石 (φ~15mm) 7%
- 4層 10YR6/4 にぶい黄橙色土 壁崩落土
- 5層 10YR4/4 褐色土 10YR7/4にぶい黄橙色浮石 (φ~3mm) 10%

SK41

- 1層 10YR3/2 黒褐色土 10YR4/3にぶい黄橙色浮石が斑状に混入、10YR8/4浅黄橙色浮石 (φ~5mm) 5%
- 2層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 10YR3/2黒褐色土が底面付近に混入、10YR8/3浅黄橙色浮石 (φ~5mm) 7%

SK42

- 1層 10YR2/3 黒褐色土 10YR4/3にぶい黄褐色土との混合、10YR8/6浅黄橙色浮石1%
- 2層 10YR4/6 褐色土 10YR3/3暗褐色土が層上面に混入、10YR8/6黄橙色浮石2%
- 3層 10YR6/4 にぶい黄褐色土 10YR8/3浅黄橙色浮石 (φ~5mm) 1%

SK43

- 1層 10YR2/3 黒褐色土 10YR4/3にぶい黄褐色土との混合、10YR8/6浅黄橙色浮石1%
- 2層 10YR4/6 褐色土 10YR3/3暗褐色土が層上面に混入、10YR8/6黄橙色浮石2%

SK44

- 1層 10YR3/1 黒褐色土 10YR8/4浅黄橙色浮石 (φ~7mm) 1%
- 2層 10YR4/4 褐色土 10YR3/4暗褐色土との混合、10YR8/4浅黄橙色浮石2%
- 3層 10YR2/2 黒褐色土 10YR3/3暗褐色土との混合、10YR8/4浅黄橙色浮石2%
- 4層 10YR7/3 にぶい黄褐色土
- 5層 10YR5/4 にぶい黄褐色土 10YR8/4浅黄橙色浮石 (φ~3mm) 3%
- 6層 10YR4/3 にぶい褐色土 10YR5/4にぶい黄褐色土との混合、10YR8/3浅黄橙色浮石 (φ~3mm) 3%
- 7層 10YR7/3 にぶい黄褐色土 10YR7/6明黄褐色浮石 (φ~7mm) 2%
- 8層 10YR5/4 にぶい黄褐色土 10YR8/4浅黄橙色火山灰との混合、10YR8/4浅黄橙色浮石 (φ~5mm) 2%

SK45

- 1層 10YR3/1 黒褐色土 10YR3/3暗褐色土との混合、10YR8/6浅黄橙色浮石 (φ~7mm) 2%
- 2層 10YR4/4 褐色土 10YR3/3暗褐色土と10YR6/4にぶい黄褐色粘土との混合、10YR8/6黄橙色浮石 (φ~15mm) 5%
- 3層 10YR3/1 黒褐色土 10YR3/3暗褐色土との混合、10YR8/6浅黄橙色浮石 (φ~7mm) 2%
- 4層 10YR5/4 にぶい黄褐色土 10YR8/6黄橙色浮石 (φ~10mm) 1%

SK46

- 1層 10YR2/3 黒褐色土 炭化物粒 (φ~5mm) 1%、10YR8/3浅黄橙色浮石 (φ~10mm) 3%
- 2層 10YR3/1 黒褐色土 10YR4/6褐色土との混合、10YR8/3浅黄橙色浮石 (φ~7mm) 3%
- 3層 10YR5/6 黄褐色土 10YR3/2黒褐色土が1層との層理面に混入、10YR8/4浅黄橙色浮石 (φ~7mm) 3%
- 4層 10YR3/2 黒褐色土 10YR5/4にぶい黄褐色土との混合、10YR8/4浅黄橙色土ブロック (φ~30mm) 2%、10YR8/6黄橙色浮石 (φ~7mm) 3%
- 5層 10YR5/6 黄褐色土 10YR8/4浅黄橙色土との混合、10YR8/4浅黄橙色浮石 (φ~5mm) 2%
- 6層 10YR3/2 黒褐色土 10YR6/4にぶい黄褐色土との混合、10YR8/6黄橙色浮石 (φ~15mm) 5%
- 7層 10YR8/4 浅黄褐色土 同色の浮石 (φ~15mm) との混合
- 8層 10YR5/4 にぶい黄褐色土 10YR8/2灰白色火山灰との混合、10YR8/6黄橙色浮石 (φ~3mm) 3%
- 9層 10YR8/3 浅黄褐色土 同色の浮石 (φ~10mm) と10YR4/3黄褐色土との混合
- 10層 10YR3/1 黒褐色土 10YR4/3にぶい黄褐色土との混合、10YR8/6黄橙色浮石 (φ~3mm) 3%

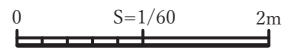


図69 土坑 (5)

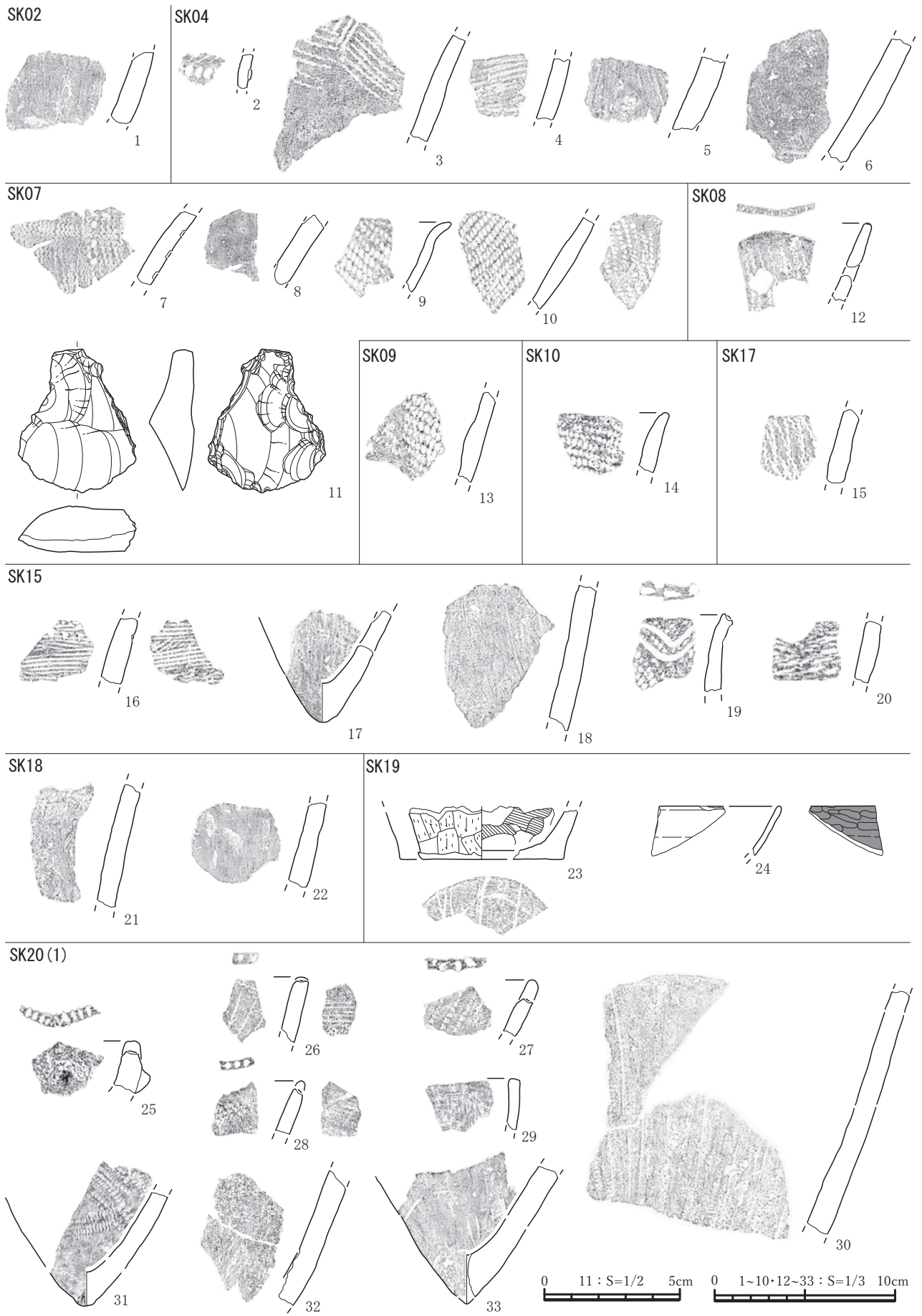


図70 土坑出土遺物（1）

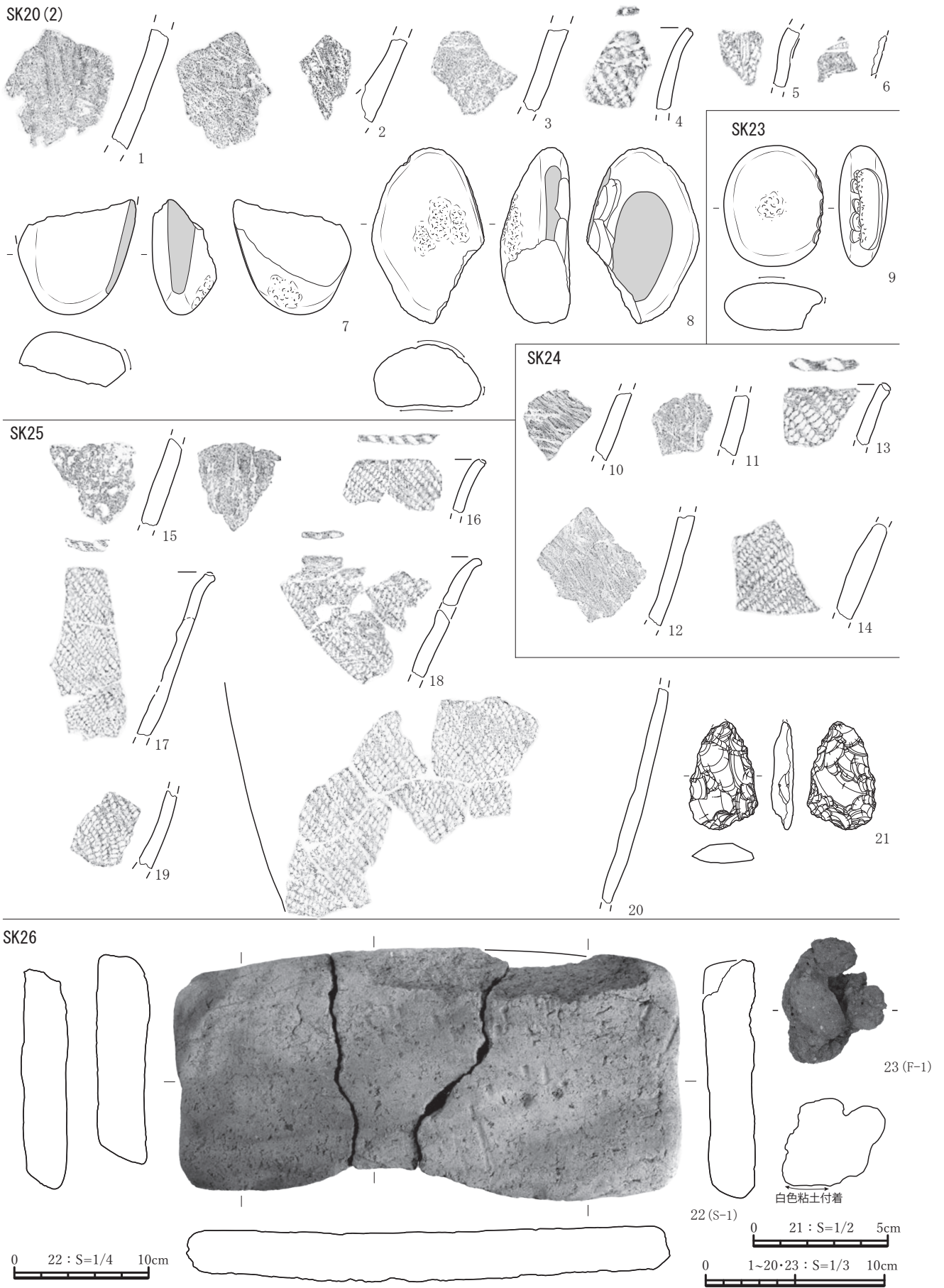


図71 土坑出土遺物(2)

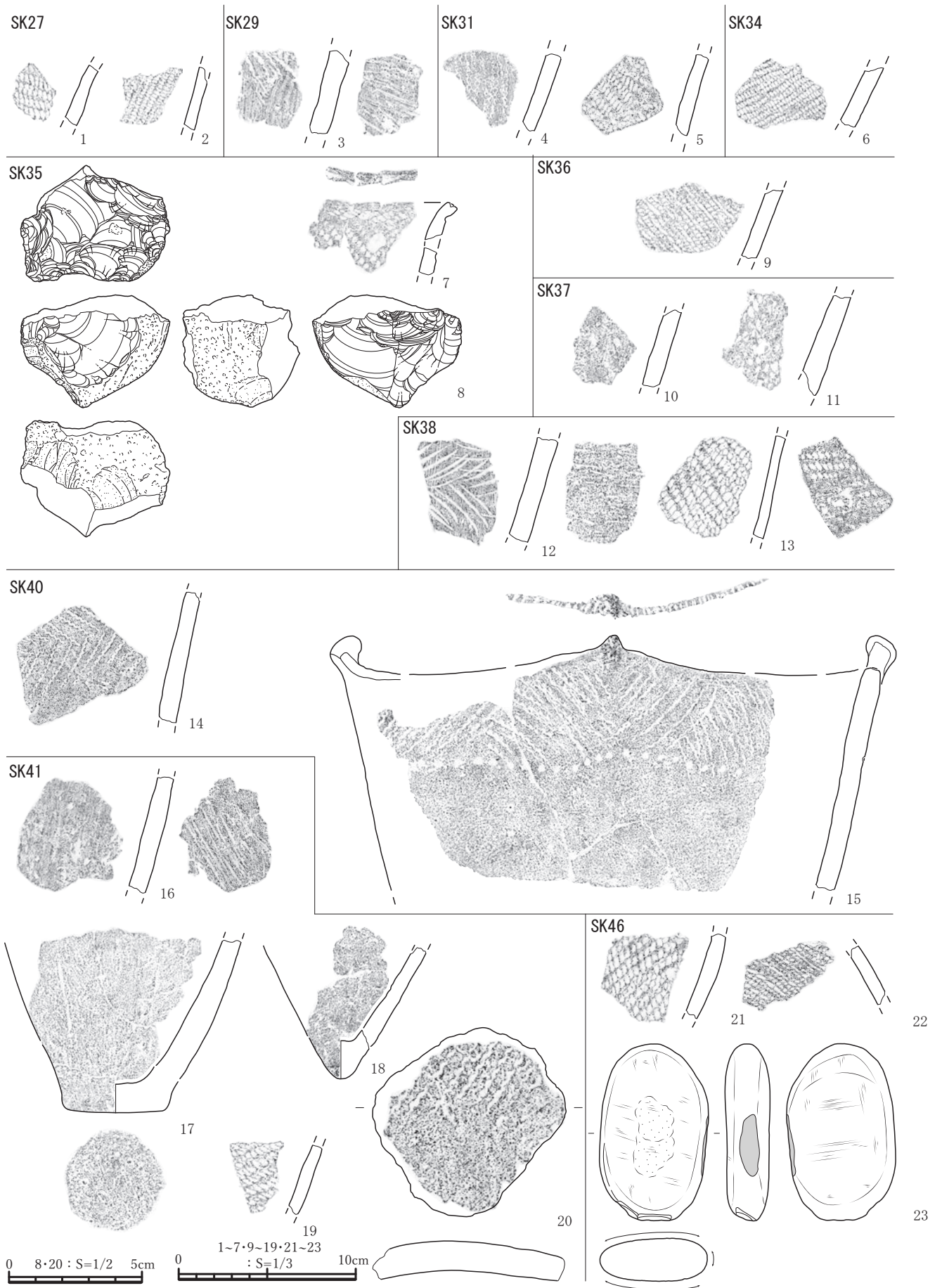


図72 土坑出土遺物（3）

第5節 溝状土坑

溝状土坑は26基検出した。調査区北半の斜面南端（R～I B-25～33）もしくは中央西側の緩斜面（Q～S-19～26）に集中し、調査区南東の斜面からは検出されていない。等高線に沿って列状に配置されるようである。長軸方向が等高線に平行するもの（SV03・05・13・14・15・18・19・20・21・22・23・24・25）と直行するもの（SV06・07・09・10・11・26）斜交するもの（SV01・02・04・08・12・16・17）とがある。竪穴建物跡と重複するものは、すべて竪穴建物跡が新しい。溝状土坑同士が重複するものは3例（SV05・06、SV08・09、SV13・14）ある。

第1号溝状土坑（SV01、図73・78、写真53・76）

〔位置・確認〕 S-33グリッドに位置する。標高約57.0～57.6mの第IV層中で確認した。

〔重複〕 なし。

〔形状・規模〕 平面形状は長楕円形である。規模は開口部長軸332cm、短軸52cm、底面長軸315cm、底面短軸14cm、深さは103cmで、底面は西端に向かって傾斜する。長軸断面形は両端がほぼ直立する箱状で、短軸断面形はV字状である。長軸方向はN-79.4°-Wである。

〔堆積土〕 壁の崩落を伴う自然堆積で、11層に分けられる。

〔出土遺物〕 縄文土器724g、石器4点1,356gが出土し、土器2点（図78-1・2）と礫石器3点（図78-3～5）を図示した。1・2は早期後葉である。3は磨石、4は磨石・敲石、3は敲石である。

〔小結〕 これまでの類例から縄文時代中期後葉以降に帰属するものと捉えておく。

第2号溝状土坑（SV02、図73・78、写真53・76）

〔位置・確認〕 S-31・32、T-32グリッドに位置する。標高約56.8～57.1mの第IV層中で確認した。

〔重複〕 なし。

〔形状・規模〕 平面形状は長楕円形で、開口部西側縁辺が不整である。規模は開口部長軸387cm、短軸66cm、底面長軸369cm、底面短軸22cm、深さは125cmで、底面は西端に向かって傾斜する。長軸断面形は両端がほぼ直立する箱状で、短軸断面形はV字状である。長軸方向はN-67.6°-Wである。

〔堆積土〕 壁の崩落を伴う自然堆積で、11層に分けられる。

〔出土遺物〕 縄文土器1,858g、石器5点399gが出土し、縄文土器3点を図示した（図78-6～8）。いずれも縄文時代早期後葉のものである。

〔小結〕 これまでの類例から縄文時代中期後葉以降に帰属するものと捉えておく。

第3号溝状土坑（SV03、図73・78、写真53）

〔位置・確認〕 T・U-30グリッドに位置する。標高約57.2m付近の第IV層中で確認した。

〔重複〕 なし。

〔形状・規模〕 平面形状は長楕円形である。規模は開口部長軸338cm、短軸64cm、底面長軸292cm、底面短軸24cm、深さは136cmである。底面は弱い起伏がみられるが、北西端に向かって緩やかに傾斜している。長軸断面形は南東端の下位に屈曲がみられるものの、概ね両端が開く逆台形状で、短軸断面

形は両端がほぼ直立するU字状である。長軸方向はN-49.3°-Wである。

[堆積土] 壁の崩落を伴う自然堆積で、8層に分けられる。

[出土遺物] 縄文土器444g・石器7点408gが出土し、縄文土器3点を図示した(図78-9~11)。9は縄文時代早期中葉、10・11は縄文時代早期後葉のものである。

[小結] これまでの類例から縄文時代中期後葉以降に帰属するものと捉えておく。

第4号溝状土坑 (SV04、図73・78、写真54・76)

[位置・確認] U-28・29グリッドに位置する。標高約56.9~57.2mの第IV層中で確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 平面形状は、開口部北東縁辺が不整な長楕円形である。規模は開口部長軸396cm、短軸59cm、底面長軸386cm、底面短軸14cm、深さは95cmで、底面は西端に向かって緩やかに傾斜する。長軸断面形は両端が直立する箱状で、短軸断面形は中位で開くY字状である。長軸方向はN-43.3°-Wである。

[堆積土] 壁の崩落を伴う自然堆積で、8層に分けられる。

[出土遺物] 縄文土器131g、石器4点431gが出土し、縄文土器1点(図78-12)と礫石器1点(図78-13)を図示した。12は縄文時代早期後葉のもの、13は磨石・敲石である。

[小結] これまでの類例から縄文時代中期後葉以降に帰属するものと捉えておく。

第5号溝状土坑 (SV05、図74・78、写真54・76)

[位置・確認] V・W-29グリッドに位置する。標高約57.5mの第IV層中で確認した。

[重複] 本遺構の北西端が第6号溝状土坑と重複しており、本遺構の方が新しい。

[平面形・規模] 平面形状は楕円形で、規模は開口部長軸400cm、短軸189cm、底面長軸359cm、底面短軸140cm、深さは171cmである。底面はほぼ平坦であるが、両端が外側に傾斜する。長軸断面形は両端がオーバーハングする台形状で、短軸断面形はV字状である。長軸方向はN-30.8°-Wである。

[堆積土] 壁の崩落を伴う自然堆積で、17層に分けられる。

[出土遺物] 縄文土器1,508g、石器10点657gが出土し、縄文土器9点(図78-14~22)・石器3点(図78-23~25)を図示した。14~18は縄文時代早期中葉、19~22は縄文時代早期後葉のものである。23は石鏃、24は石匙、25は敲石である。

[小結] これまでの類例から縄文時代中期後葉以降に帰属するものと捉えておく。

第6号溝状土坑 (SV06、図74・79、写真55)

[位置・確認] U・V-29グリッドに位置する。標高約57.2~57.5mの第IV層中で確認した。

[重複] 本遺構の北東端が第5号溝状土坑と重複しており、本遺構の方が古い。

[形状・規模] 本遺構北東端が第5号溝状土坑との重複で削られているが、開口部全体が不整な長楕円形である。規模は開口部長軸が残存で254cm、短軸73cm、底面長軸315cm、底面短軸16cm、深さは116cmで、底面は南西端に向かって傾斜する。長軸断面形は両端がほぼ直立する箱状で、短軸断面形はY字状である。長軸方向はN-40.7°-Eである。

[堆積土] 壁の崩落を伴う自然堆積で、7層に分けられる。

[出土遺物] 縄文土器168g、石器1点2gが出土し、縄文土器2点を図示した(図79-1・2)。1は縄文時代早期後葉、2は縄文時代後期のものである。

[小結] これまでの類例から縄文時代中期後葉以降に帰属するものと捉えておく。

第7号溝状土坑(SV07、図74・79、写真55)

[位置・確認] X-28、Y-28・29グリッドに位置する。標高57.8~58.1m付近の第IV層中で確認した。

[重複] なし。

[形状・規模] 平面形状は長楕円形である。規模は開口部長軸349cm、短軸83cm、底面長軸309cm、底面短軸10cm、深さは117cmである。底面は中央に窪みがみられるものの、ほぼ平坦である。長軸断面形は両端がほぼ直立する箱状で、短軸断面形はY字状である。長軸方向はN-38.7°-Eである。

[堆積土] 壁の崩落を伴う自然堆積で、11層に分けられる。

[出土遺物] 縄文土器46gが出土し、1点を図示した(図79-3)。縄文時代後期のものである。

[小結] これまでの類例から縄文時代中期後葉以降に帰属するものと捉えておく。

第8号溝状土坑(SV08、図74、写真55)

[位置・確認] X・Y-28グリッドに位置する。標高約57.8m付近の第IV層中で確認した。

[重複] 本遺構の東端が第9号溝状土坑と重複しており、本遺構の方が新しい。

[形状・規模] 平面形状は楕円形である。規模は開口部長軸314cm、短軸95cm、底面長軸304cm、底面短軸14cm、深さは124cmで、底面は東端に向かって緩やかに傾斜する。長軸断面形は両端が直立する箱状で、短軸断面形はV字状である。長軸方向はN-83.8°-Wである。

[堆積土] 壁の崩落を伴う自然堆積で、13層に分けられる。

[出土遺物] なし。

[小結] これまでの類例から縄文時代中期後葉以降に帰属するものと捉えておく。

第9号溝状土坑(SV09、図75、写真56)

[位置・確認] X・Y-27・28グリッドに位置する。標高約57.8~58.0mの第IV層中で確認した。

[重複] 本遺構の西辺が第8号溝状土坑と重複しており、本遺構の方が古い。

[平面形・規模] 平面形状は長楕円形である。規模は開口部長軸350cm、短軸が残存で94cm、底面長軸350cm、底面短軸12cm、深さは147cmで、底面は北東端に向かって緩やかに、かつ、起伏をもって傾斜する。長軸断面形は両端がオーバーハングする台形状で、短軸断面形はY字状である。長軸方向はN-40.7°-Eである。

[堆積土] 壁の崩落を伴う自然堆積で、6層に分けられる。

[出土遺物] なし。

[小結] これまでの類例から縄文時代中期後葉以降に帰属するものと捉えておく。

第10号溝状土坑 (SV10、図75、写真56)

[位置・確認] W-28・29グリッドに位置する。標高約57.5～58.8m付近の第IV層中で確認した。

[重複] 本遺構の南西端が第9号竪穴建物跡の煙道煙出しと重複しており、本遺構の方が古い。

[平面形・規模] 第9号竪穴建物跡の重複で削られているが、開口部全体が不整な長楕円形と推測される。規模は開口部長軸が残存で325cm、短軸73cm、底面長軸332cm、底面短軸12cm、深さは117cmである。底面は南西端に向かって緩やかに傾斜する。長軸断面形は、残存する北東端では僅かに屈曲がみられるものの、ほぼ直立する箱状と推測される。短軸断面形はY字状である。長軸方向はN-24.8°-Eである。

[堆積土] 壁の崩落を伴う自然堆積で、7層に分けられる。

[出土遺物] 縄文土器21gが出土したが、図示しなかった。

[小結] これまでの類例から縄文時代中期後葉以降に帰属するものと捉えておく。

第11号溝状土坑 (SV11、図75、写真56)

[位置・確認] I A・I B-27グリッドに位置する。標高約57.6～57.9m付近の第IV層中で確認した。

[重複] なし。

[形状・規模] 開口部全体が不整な長楕円形である。規模は開口部長軸268cm、短軸30cm、底面長軸249cm、底面短軸12cm、深さは94cmで、底面は南東に向かって緩やかに傾斜する。長軸断面形は両端がほぼ直立する箱状で、短軸断面形はU字状である。長軸方向はN-63.0°-Wである。

[堆積土] 壁の崩落を伴う自然堆積で、4層に分けられる。

[出土遺物] なし。

[小結] これまでの類例から縄文時代中期後葉以降に帰属するものと捉えておく。

第12号溝状土坑 (SV12、図75・79、写真57)

[位置・確認] Y・I A-23グリッドに位置する。標高約56.9～57.2mの第IV層中で確認した。

[重複] なし。

[形状・規模] 平面形状は長楕円形である。規模は開口部長軸354cm、短軸45cm、底面長軸353cm、底面短軸22cm、深さは113cmで、底面は東端に向かって傾斜し、東端付近はほぼ平坦である。長軸断面形は両端が直立する箱状で、短軸断面形はU字状である。長軸方向はN-87.6°-Eである。

[堆積土] 壁の崩落を伴う自然堆積で、4層に分けられる。

[出土遺物] 縄文土器56gが出土し、1点を図示した(図79-4)。縄文時代早期中葉のものである。

[小結] これまでの類例から縄文時代中期後葉以降に帰属するものと捉えておく。

第13号溝状土坑 (SV13、図75・79、写真57)

[位置・確認] Q-20・21グリッドに位置する。標高約55.2mの第IV層中で確認した。

[重複] 本遺構の北東端が第14号溝状土坑と重複しており、本遺構の方が新しい。

[形状・規模] 平面形状は楕円形である。規模は開口部長軸285cm、短軸90cm、底面長軸287cm、底面短軸26cm、深さは141cmである。底面は北端に向かって傾斜し、中央から北側はほぼ平坦である。長

軸断面形は両端が僅かにオーバーハングするものの、ほぼ箱状である。短軸断面形はV字状である。長軸方向はN-10.9°-Eである。

[堆積土] 壁の崩落を伴う自然堆積で、14層に分けられる。

[出土遺物] 縄文土器179gが出土し、3点を図示した(図79-7~9)。縄文時代早期中葉である。

[小結] これまでの類例から縄文時代中期後葉以降に帰属するものと捉えておく。

第14号溝状土坑 (SV14、図75・79、写真57)

[位置・確認] Q・R-21グリッドに位置する。標高約55.3m付近の第IV層中で確認した。

[重複] 本遺構の南西端が第13号溝状土坑と重複しており、本遺構の方が古い。

[平面形・規模] 第13号溝状土坑の重複で削られているが、平面形状は長楕円形と推測される。規模は開口部長軸が残存で192cm、短軸62cm、底面長軸195cm、底面短軸22cm、深さは128cmで、底面は南西端に向かって傾斜する。長軸断面形は残存する北東端がほぼ直立することから、箱状と推測される。短軸断面形はV字状である。長軸方向はN-31.1°-Eである。

[堆積土] 壁の崩落を伴う自然堆積で、6層に分けられる。

[出土遺物] 縄文土器45gが出土し、2点を図示した(図79-5・6)。縄文時代早期中葉である。

[小結] これまでの類例から縄文時代中期後葉以降に帰属するものと捉えておく。

第15号溝状土坑 (SV15、図76・79、写真58)

[位置・確認] R-25・26グリッドに位置する。標高約55.8m付近の第IV層中で確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 開口部全体が不整な長楕円形である。規模は開口部長軸326cm、短軸68cm、底面長軸312cm、底面短軸13cm、深さは83cmで、底面には緩やかな起伏がある。長軸断面形は両端が直立する箱状で、短軸断面形はV字状である。長軸方向はN-4.4°-Eである。

[堆積土] 壁の崩落を伴う自然堆積で、8層に分けられる。

[出土遺物] 縄文土器35g、石器1点14gが出土し、土器1点を図示した(図79-10)。

[小結] これまでの類例から縄文時代中期後葉以降に帰属するものと捉えておく。

第16号溝状土坑 (SV16、図76、写真58)

[位置・確認] Y-25・26グリッドに位置する。標高約57.7mの第IV層中で確認した。

[重複] なし。

[形状・規模] 平面形状は長楕円形である。規模は開口部長軸275cm、短軸53cm、底面長軸263cm、底面短軸14cm、深さは106cmで、底面には多少起伏がある。長軸断面形は両端の中位が僅かにオーバーハングするものの箱状に近く、短軸断面形はU字状である。長軸方向はN-7.5°-Wである。

[堆積土] 壁の崩落を伴う自然堆積で、6層に分けられる。

[出土遺物] なし。

[小結] これまでの類例から縄文時代中期後葉以降に帰属するものと捉えておく。

第17号溝状土坑（SV17、図76、写真58）

[位置・確認] Y-26グリッドに位置する。標高約57.7mの第IV層中で確認した。

[重複] 南半が後世の攪乱と重複している。

[形状・規模] 本遺構南半が攪乱で削られているが、長楕円形と推測される。規模は開口部長軸が残存で151cm、短軸47cm、底面長軸267cm、底面短軸19cm、深さは105cmで、底面はほぼ平坦である。長軸断面形は、南西端が中位までほぼ直立したのちに、上半が開くと推測され、北東端がオーバーハングする袋状である。短軸断面形はU字状である。長軸方向はN-41.6°-Eである。

[堆積土] 壁の崩落を伴う自然堆積で、4層に分けられる。

[出土遺物] なし。

[小結] これまでの類例から縄文時代中期後葉以降に帰属するものと捉えておく。

第18号溝状土坑（SV18、図76、写真59）

[位置・確認] I A-25グリッドに位置する。標高約57.6mの第IV層中で確認した。

[重複] 本遺構の東端がSP03と重複しており、本遺構の方が古い。

[形状・規模] SP03の重複で削られているが、全体的に長楕円形と推測される。規模は開口部長軸が残存で254cm、短軸64cm、底面長軸266cm、底面短軸13cm、深さは111cmである。底面の東半はほぼ平坦であるが、西端から中央に向かって窪む。長軸断面形は南端がほぼ直立する箱状で、北側は開くように立ち上がる。短軸断面形はU字状である。長軸方向はN-70.1°-Eである。

[堆積土] 壁の崩落を伴う自然堆積で、4層に分けられる。

[出土遺物] なし。

[小結] これまでの類例から縄文時代中期後葉以降に帰属するものと捉えておく。

第19号溝状土坑（SV19、図76・79、写真59・76）

[位置・確認] R・S-21・22グリッドに位置する。標高約56.2mの第IV層中で確認した。

[重複] 本遺構の南東端が第20号土坑と重複しており、本遺構の方が新しい。

[平面形・規模] 長楕円形の平面形状で、規模は開口部長軸385cm、短軸43cm、底面長軸416cm、底面短軸13cm、深さは95cm。底面は起伏が認められる。長軸断面形は、南西端がほぼ直立する箱状、北東端はオーバーハングする袋状で、短軸断面形はU字状である。長軸方向はN-24.1°-Eである。

[堆積土] 壁の崩落を伴う自然堆積で、8層に分けられる。

[出土遺物] 縄文土器338gが出土し、6点を図示した（図79-11~16）。11~15は縄文時代早期中葉、16は縄文時代早期後葉のものである。

[小結] これまでの類例から縄文時代中期後葉以降に帰属するものと捉えておく。

第20号溝状土坑（SV20、図76・79、写真59・76）

[位置・確認] R-20、S-20・21グリッドに位置する。標高約56.6m付近の第IV層中で確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 開口部全体が不整な長楕円形である。規模は開口部長軸337cm、短軸64cm、底面長軸

312cm、底面短軸25cm、深さは129cmで、底面は中央付近が窪んでいる。長軸断面形は両端がほぼ直立する箱状で、短軸断面形はV字状である。長軸方向はN-25.5°-Eである。

[堆積土] 壁の崩落を伴う自然堆積で、7層に分けられる。

[出土遺物] 縄文土器30gが出土し、1点を図示した(図79-17)。早期中葉のものである。

[小結] これまでの類例から縄文時代中期後葉以降に帰属するものと捉えておく。

第21号溝状土坑 (SV21、図77・79、写真60)

[位置・確認] Q-19グリッドに位置する。標高約55.8mの第IV層中で確認した。

[重複] なし。

[形状・規模] 平面形状は長楕円形である。規模は開口部長軸217cm、短軸42cm、底面長軸181cm、底面短軸9cm、深さは94cmで、底面は南西端に向かって緩やかに傾斜する。長軸断面形は北東端の中位が僅かにオーバーハングするものの、概ね両端が開く逆台形状で、短軸断面形はV字状である。長軸方向はN-27.6°-Eである。

[堆積土] 壁の崩落を伴う自然堆積で、8層に分けられる。

[出土遺物] 縄文土器29gが出土し、1点を図示した(図79-18)。縄文時代後期中葉のものである。

[小結] これまでの類例から縄文時代中期後葉以降に帰属するものと捉えておく。

第22号溝状土坑 (SV22、図77・79、写真60)

[位置・確認] M-14・15グリッドに位置する。標高約54.7mの第IV層中で確認した。

[重複] なし。

[形状・規模] 長楕円形で、開口部北西側縁辺が不整である。規模は開口部長軸400cm、短軸73cm、底面長軸353cm、底面短軸15cm、深さは139cmで、底面はほぼ平坦である。長軸断面形は北東端がほぼ直立する箱状で、南西端は開くように立ち上がる逆台形状である。短軸断面形はV字状である。長軸方向はN-35.8°-Eである。

[堆積土] 壁の崩落を伴う自然堆積で、8層に分けられる。

[出土遺物] 縄文土器109g、石器1点3gが出土し、縄文土器3点を図示した(図79-19~21)。19・20は縄文時代早期中葉、21は縄文時代後期のものである。

[小結] これまでの類例から縄文時代中期後葉以降に帰属するものと捉えておく。

第23号溝状土坑 (SV23、図77・79、写真60)

[位置・確認] Q-22・23グリッドに位置する。標高約54.7mの第IV層中で確認した。

[重複] 後世の攪乱と重複する。

[形状・規模] 開口部が攪乱で削られているが、全体的に長楕円形と推測される。規模は開口部長軸が残存で24cm、短軸28cm、底面長軸173cm、底面短軸13cm、深さは16cmで、底面は緩く起伏している。長軸断面形は北端がほぼ直立する箱状で、南端は開くように立ち上がる逆台形状である。短軸断面形はU字状である。長軸方向はN-12.0°-Eである。

[堆積土] 壁の崩落を伴う自然堆積の単層である。

[出土遺物] 縄文土器28gが出土し、1点を図示した(図79-22)。縄文時代早期中葉のものである。

[小結] これまでの類例から縄文時代中期後葉以降に帰属するものと捉えておく。

第24号溝状土坑 (SV24、図77・79、写真61・76)

[位置・確認] P-26・27、Q-26グリッドに位置する。標高約54.8mの第IV層中で確認した。

[重複] 本遺構の南端が第2号竪穴建物跡と重複しており、本遺構の方が古い。

[平面形・規模] 第2号竪穴建物跡の重複で削られているが、平面形状は長楕円形と推測される。規模は開口部長軸が残存で211cm、短軸44cm、底面長軸386cm、底面短軸16cm、深さは105cmで、底面はほぼ平坦である。長軸断面形は両端が開くように立ち上がる逆台形状である。短軸断面形はU字状である。長軸方向はN-9.3°-Wである。

[堆積土] 壁の崩落を伴う自然堆積で、4層に分けられる。

[出土遺物] 縄文土器881g、石器2点163gが出土し、縄文土器5点を図示した(図79-23~27)。23・24は縄文時代早期中葉、25~27は縄文時代早期後葉のものである。

[小結] これまでの類例から縄文時代中期後葉以降に帰属するものと捉えておく。

第25号溝状土坑 (SV25、図77・79、写真61)

[位置・確認] Q-30・31、R-30グリッドに位置する。標高約55.6mの第IV層中で確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 開口部全体が不整な長楕円形である。規模は開口部長軸340cm、短軸64cm、底面長軸347cm、底面短軸10cm、深さは111cmで、底面には起伏がある。長軸断面形は両端がほぼ直立する箱状で、短軸断面形はV字状である。長軸方向はN-43.9°-Wである。

[堆積土] 壁の崩落を伴う自然堆積で、8層に分けられる。

[出土遺物] 縄文土器507g、石器2点63gが出土し、縄文土器3点を図示した(図79-28~30)。28は縄文時代早期中葉、29・30は縄文時代早期後葉のものである。

[小結] これまでの類例から縄文時代中期後葉以降に帰属するものと捉えておく。

第26号溝状土坑 (SV26、図77、写真61)

[位置・確認] W-28・29グリッドに位置する。標高約57.6~57.8mの第IV層中で確認した。

[重複] 本遺構の南半が第9号竪穴建物跡と重複しており、本遺構の方が古い。

[形状・規模] 第9号竪穴建物跡の重複で削られているが、長楕円形と推測される。規模は開口部長軸が残存で187cm、短軸65cm、底面長軸379cm、底面短軸12cm、深さは113cmで、底面の中央付近が窪んでいる。長軸断面形は両端が僅かにオーバーハングする台形状で、短軸断面形はV字状である。長軸方向はN-27.5°-Eである。

[堆積土] 壁の崩落を伴う自然堆積で、5層に分けられる。

[出土遺物] 縄文土器40gが出土したが、図示しなかった。

[小結] これまでの類例から縄文時代中期後葉以降に帰属するものと捉えておく。 (平山)

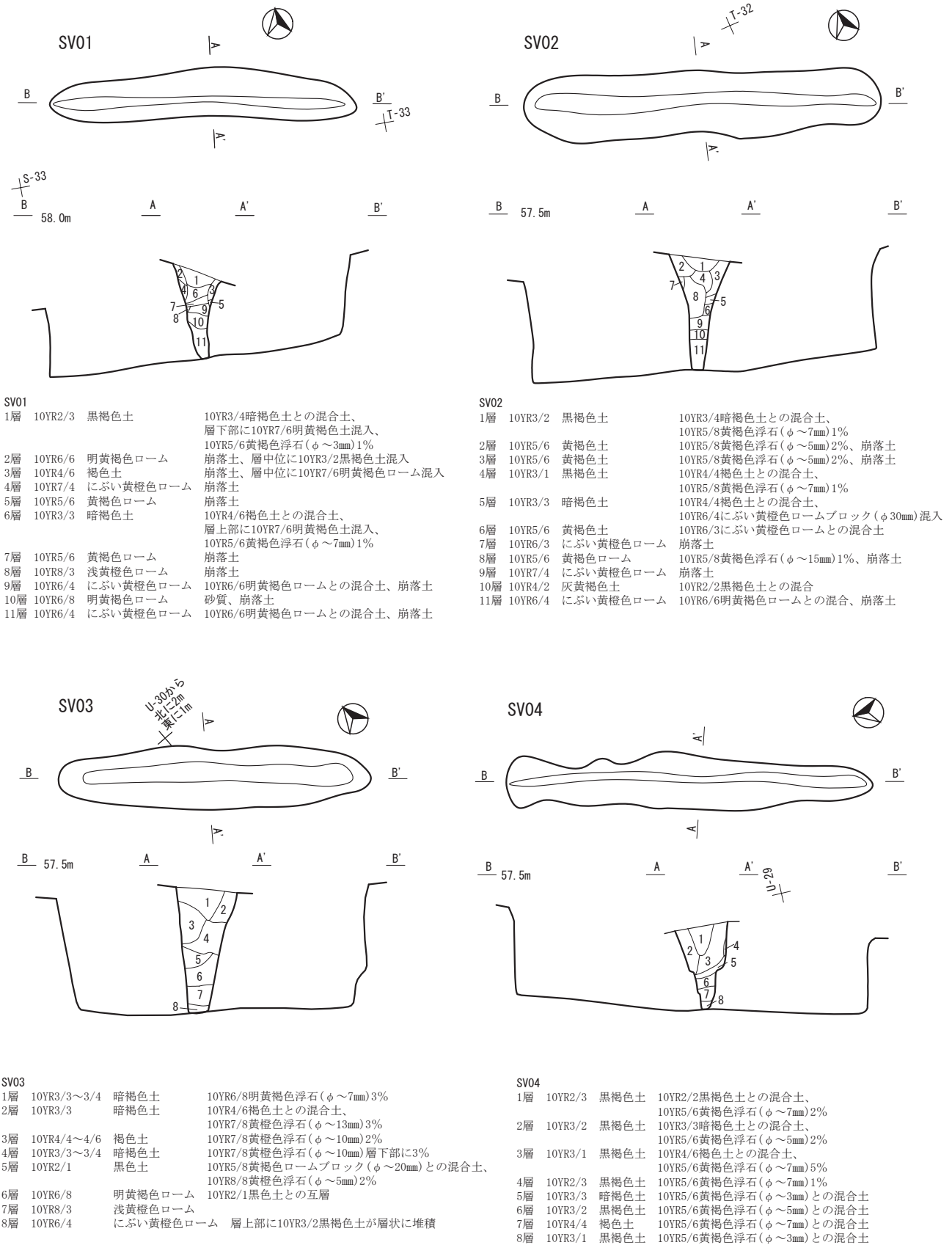


図73 溝状土坑(1)

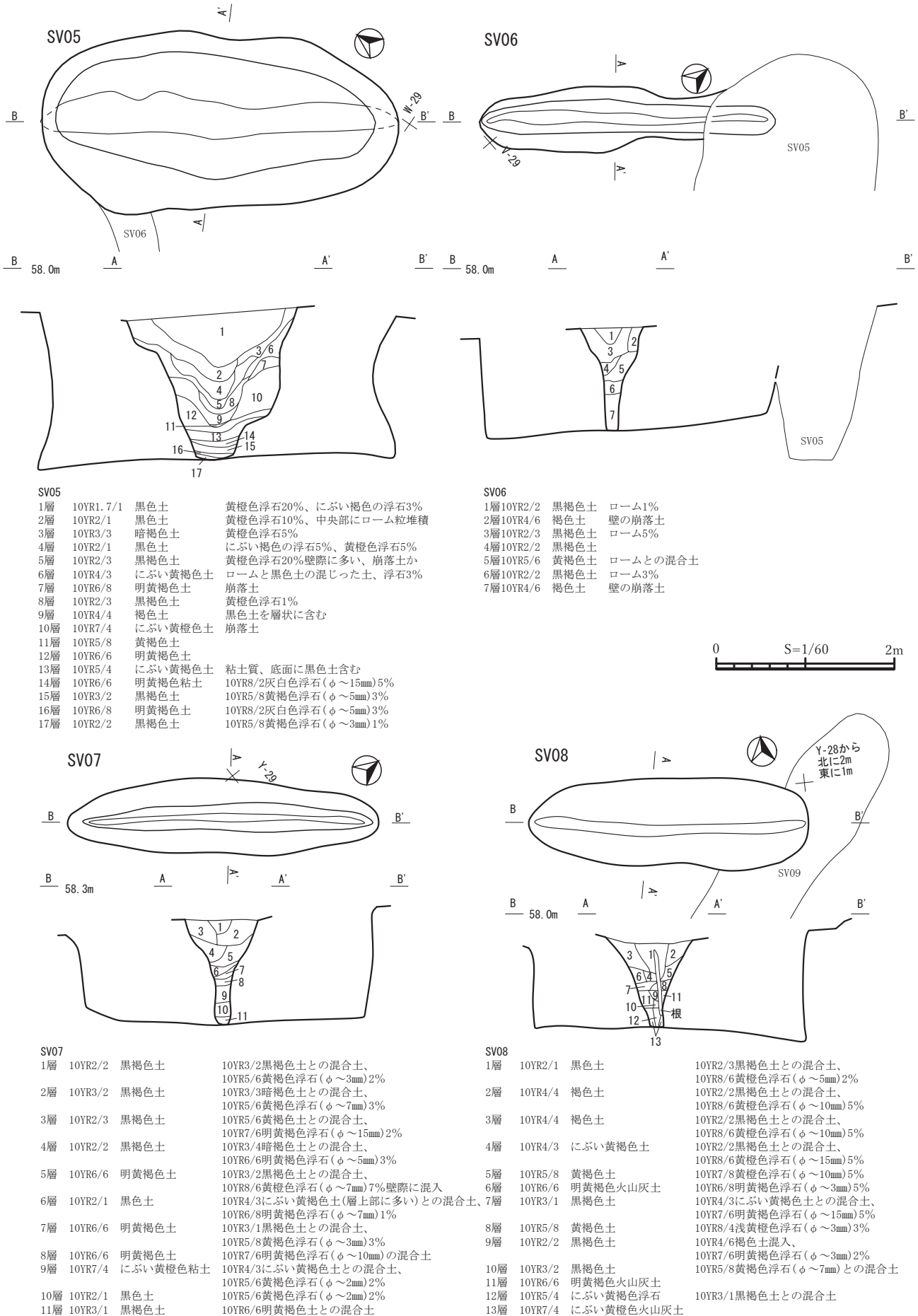


図74 溝状土坑(2)

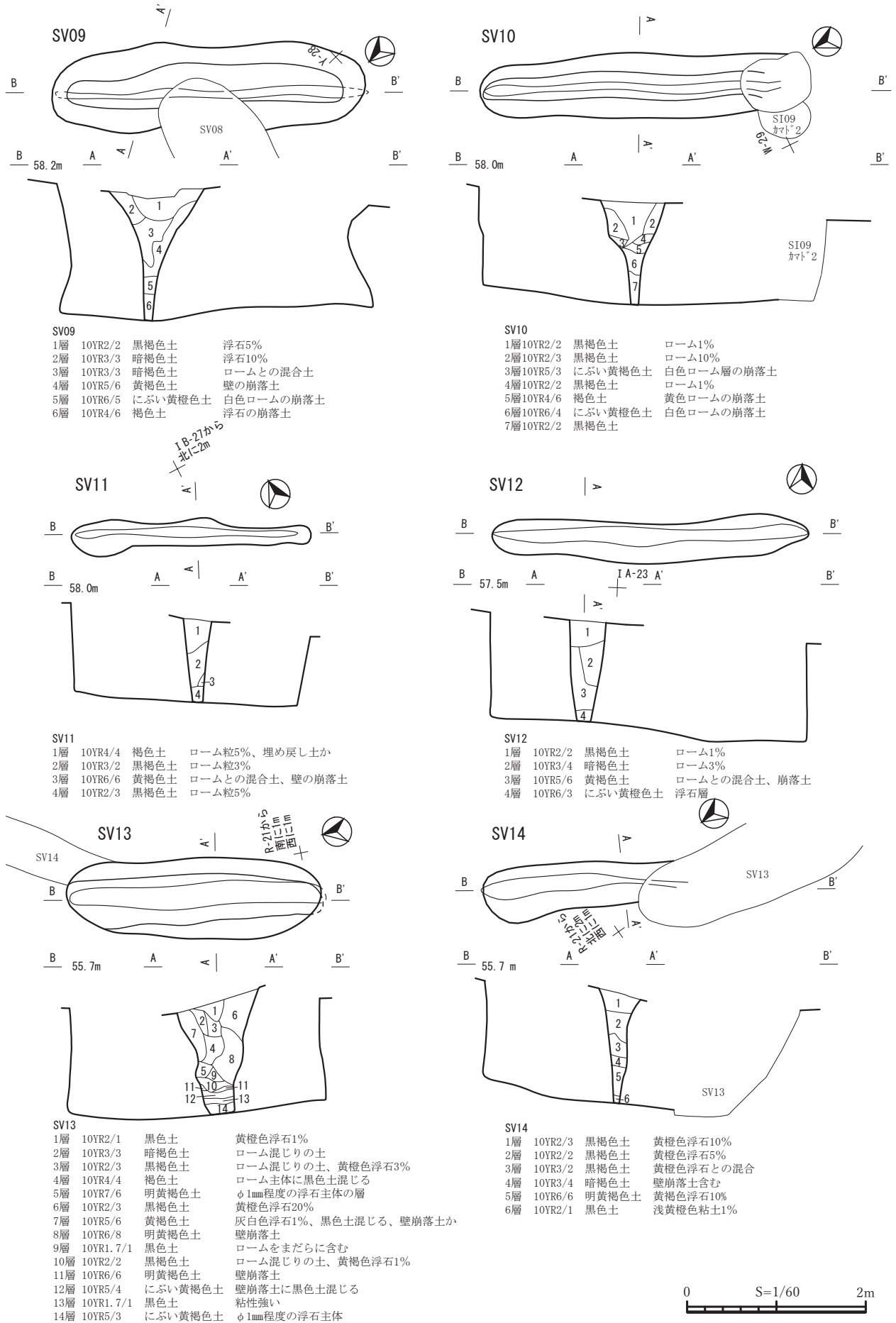


図75 溝状土坑(3)

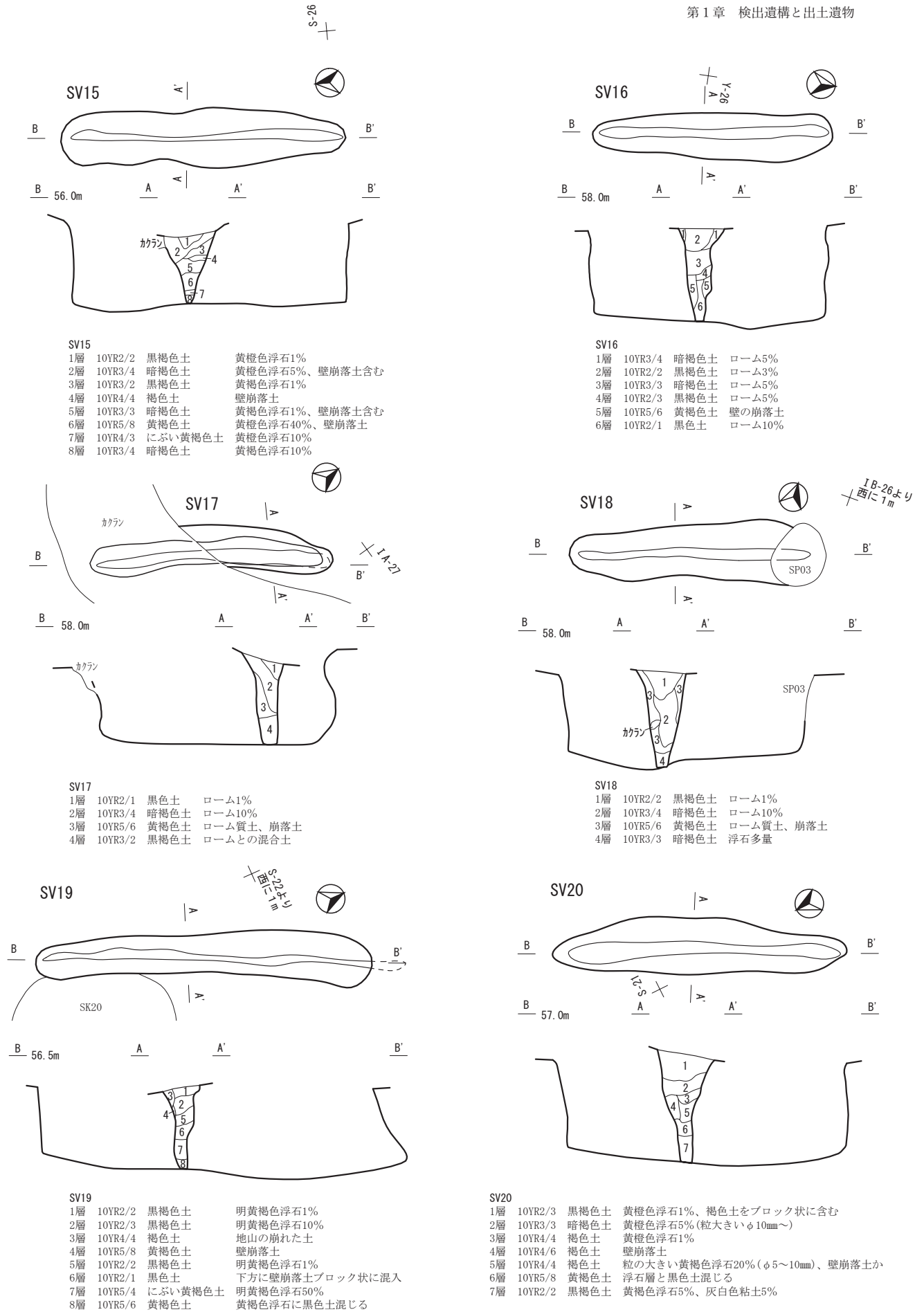
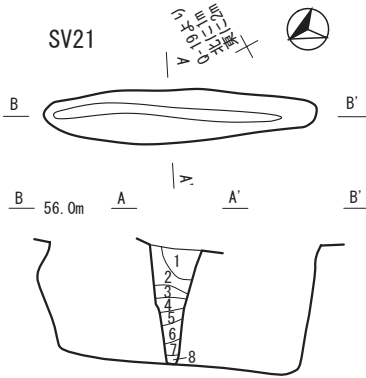
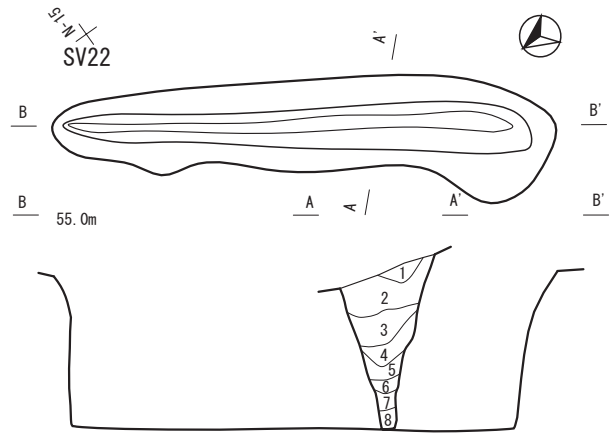


図76 溝状土坑(4)



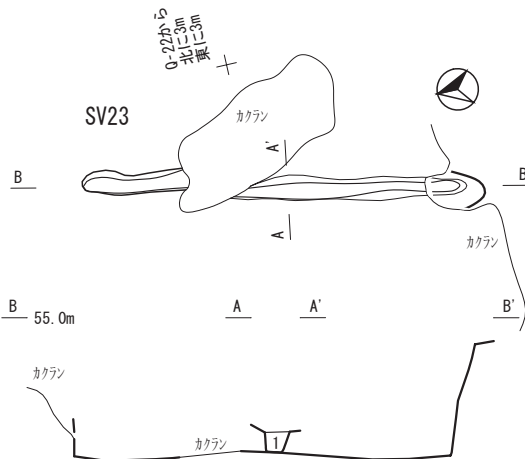
SV21

- | | | | |
|----|---------|---------|-------------------------|
| 1層 | 10YR3/4 | 暗褐色土 | 黄橙色浮石5% |
| 2層 | 10YR4/4 | 褐色土 | 黄橙色浮石1% |
| 3層 | 10YR4/3 | にぶい黄褐色土 | 黄橙色浮石1% |
| 4層 | 10YR5/8 | 黄褐色土 | 黄褐色浮石層 |
| 5層 | 10YR4/3 | にぶい黄褐色土 | 黄褐色浮石5%、黒色土混じる |
| 6層 | 10YR5/8 | 黄褐色土 | 黄褐色浮石層、黒色土混じる |
| 7層 | 10YR5/6 | 黄褐色土 | 黄褐色浮石層(6層より粒大きい)、黒色土混じる |
| 8層 | 10YR4/4 | 褐色土 | 黒色土混じる |



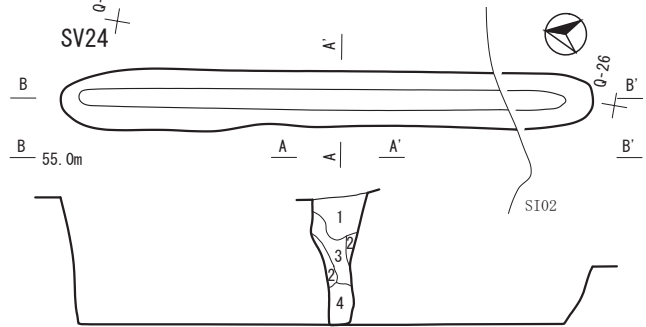
SV22

- | | | | |
|----|---------|---------|---|
| 1層 | 10YR4/4 | 褐色土 | 10YR8/8黄橙色浮石(φ~5mm)1% |
| 2層 | 10YR4/3 | にぶい黄褐色土 | 10YR8/8黄橙色浮石(φ~15mm)5% |
| 3層 | 10YR4/4 | 褐色土 | 10YR8/8黄橙色浮石(φ~15mm)3% |
| 4層 | 10YR4/6 | 褐色土 | 10YR3/3暗褐色土との混合土、10YR7/8黄褐色浮石(φ~5mm)10% |
| 5層 | 10YR4/3 | にぶい黄褐色土 | 10YR6/8明黄褐色浮石(φ~5mm)3% |
| 6層 | 10YR4/3 | にぶい黄褐色土 | 10YR6/6明黄褐色土との混合土、10YR8/4浅黄褐色粘土粒(φ~5mm)1%、10YR7/6明黄褐色浮石(φ~5mm)15% |
| 7層 | 10YR8/4 | 浅黄褐色粘土 | 10YR6/6明黄褐色土と10YR7/6明黄褐色浮石(φ~5mm)の混合土が層中央に7% |
| 8層 | 10YR8/4 | 浅黄褐色粘土 | 10YR6/6明黄褐色土との混合土、10YR4/3にぶい黄褐色土が層下部に層状に混入 |



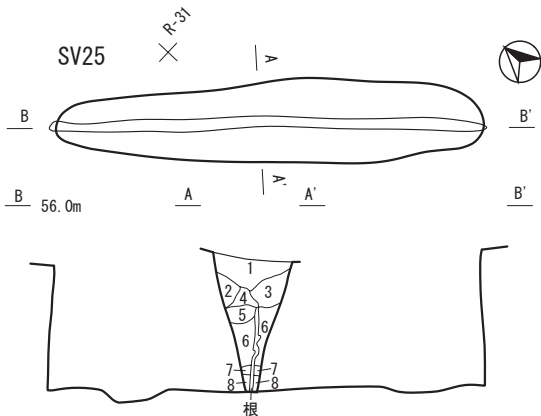
SV23

- | | | | |
|----|---------|---------|----------------------------|
| 1層 | 10YR4/3 | にぶい黄褐色土 | 10YR8/4浅黄褐色浮石(φ~15mm)との混合土 |
|----|---------|---------|----------------------------|



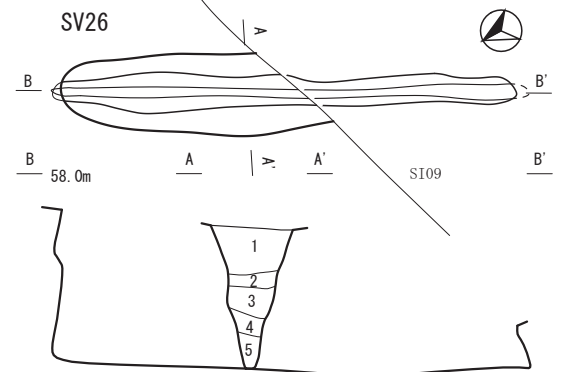
SV24

- | | | | |
|----|---------|------|---------------------|
| 1層 | 10YR3/4 | 暗褐色土 | 褐色ローム混じる、黄橙色浮石1% |
| 2層 | 10YR5/6 | 黄褐色土 | 壁崩落土 |
| 3層 | 10YR4/4 | 褐色土 | 2層の崩落土混じる |
| 4層 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | 粒の小さい黄橙色浮石(φ~2mm)1% |



SV25

- | | | | |
|----|---------|---------|--|
| 1層 | 10YR2/3 | 黒褐色土 | 10YR3/3暗褐色土との混合土、10YR7/4にぶい黄橙色浮石(φ~7mm)2% |
| 2層 | 10YR4/4 | 褐色土 | |
| 3層 | 10YR4/6 | 褐色土 | 10YR3/3暗褐色土との混合土、10YR7/4にぶい黄褐色浮石(φ~2mm)1% |
| 4層 | 10YR2/3 | 黒褐色土 | 10YR3/3暗褐色土との混合土、10YR7/4にぶい黄褐色浮石(φ~5mm)1% |
| 5層 | 10YR4/3 | にぶい黄褐色土 | 10YR7/4にぶい黄褐色浮石(φ~3mm)2% |
| 6層 | 10YR4/4 | 褐色土 | 10YR7/4にぶい黄褐色浮石(φ~3mm)2% |
| 7層 | 10YR4/3 | にぶい黄褐色土 | 10YR6/4にぶい黄褐色土との混合土、10YR8/4浅黄褐色浮石(φ~2mm)1%未満 |
| 8層 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | 10YR8/4浅黄褐色浮石(φ~2mm)1% |



SV26

- | | | | |
|----|---------|---------|--------------|
| 1層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | 浮石3% |
| 2層 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | 地山ローム5% |
| 3層 | 10YR3/2 | 暗褐色土 | 地山ロームブロック20% |
| 4層 | 10YR6/3 | にぶい黄褐色土 | 崩落土 |
| 5層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | ローム1% |

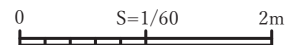


図77 溝状土坑(5)

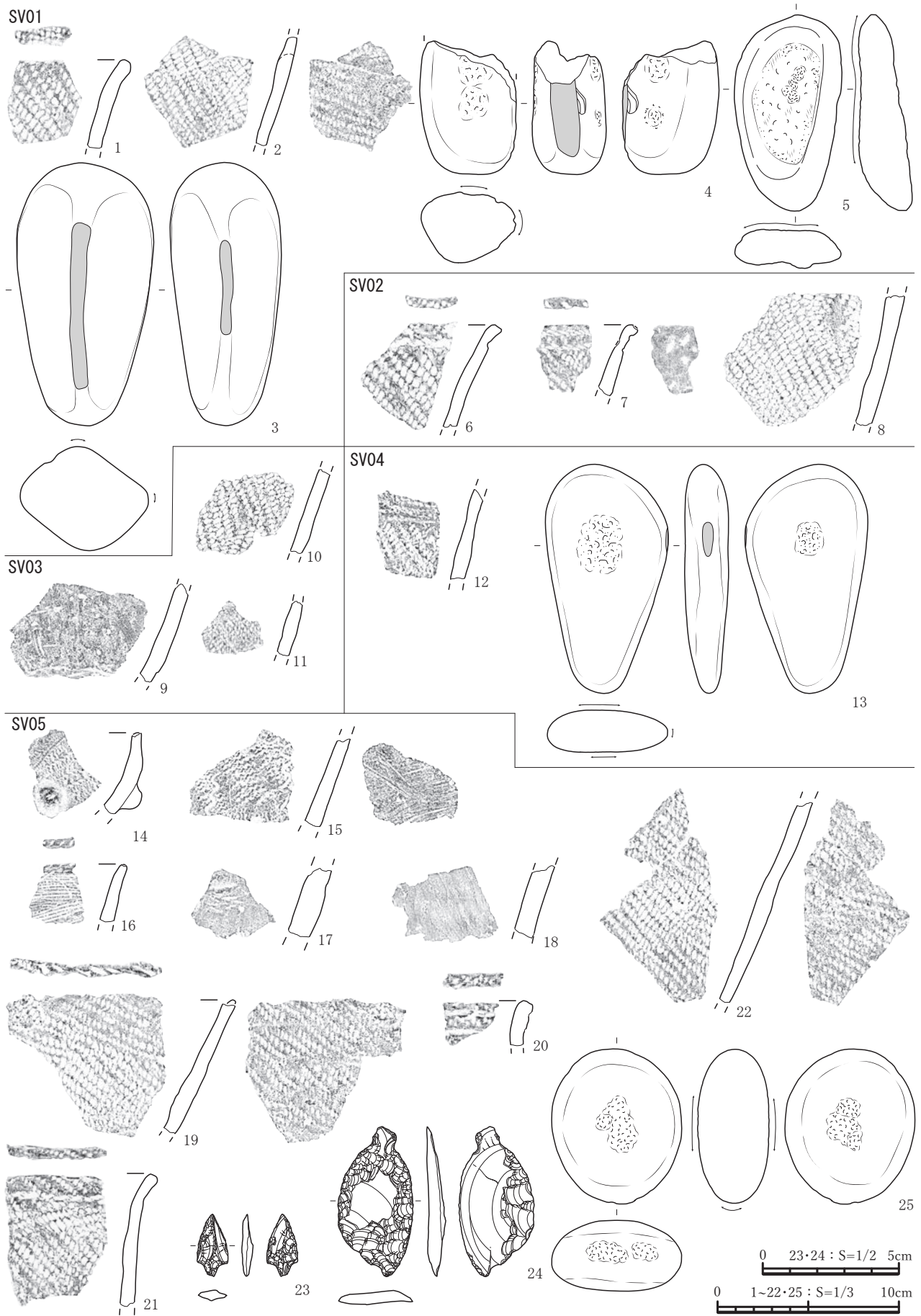


図78 溝状土坑出土遺物（1）

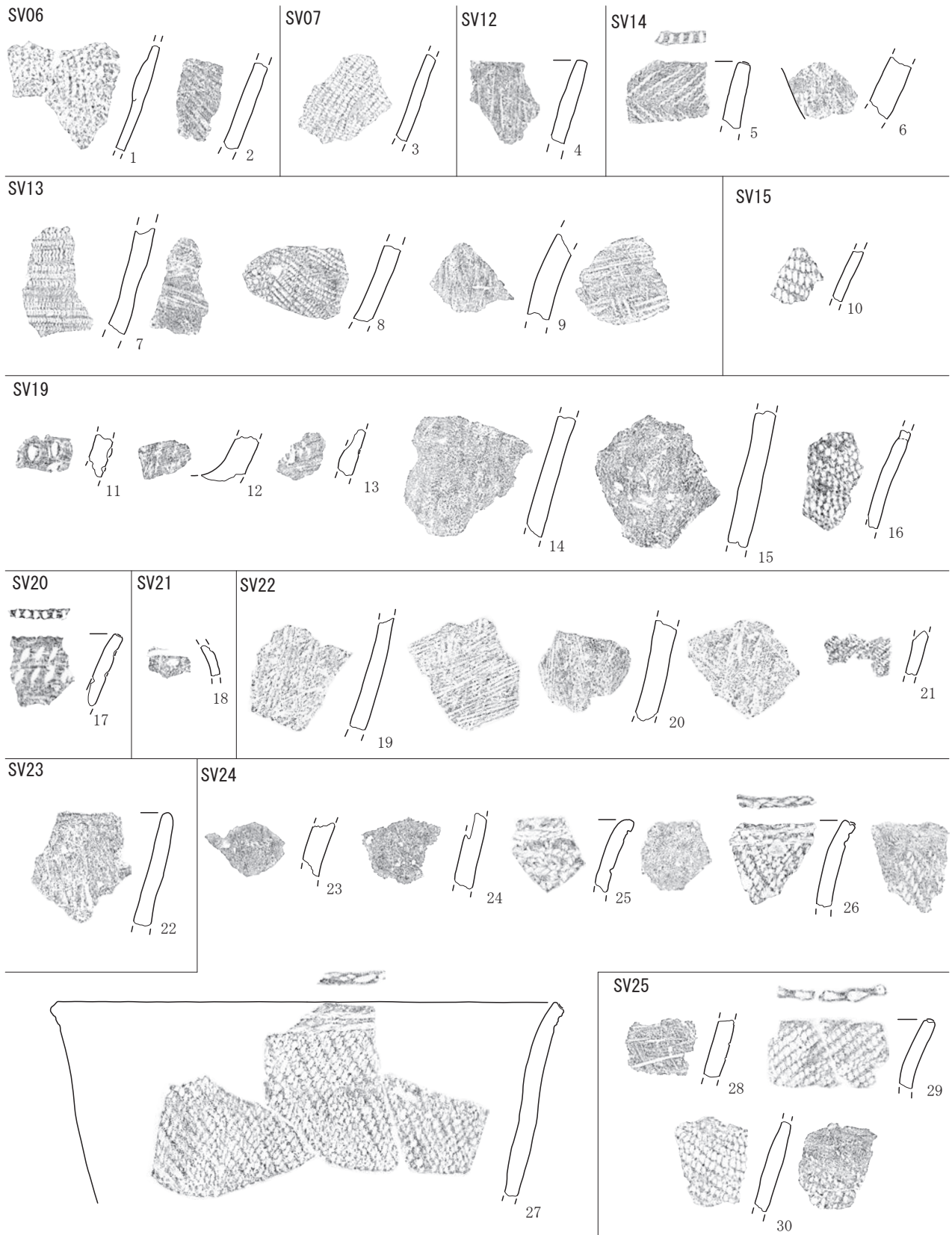


图79 溝状土坑出土遺物(2)

第6節 焼土遺構

焼土遺構は9基検出した。ほとんどが調査区中央の平坦部西側、第9号竪穴建物跡もしくは第1号掘立柱建物跡の周辺に位置している。焼土遺構が近接して位置するものがあり（SN04・05、SN06・07、SN08・09）、2基1対に配置されるようである。楕円もしくは不整円形を呈し、長軸規模は60cm以下の小規模なものが多い。

第1号焼土遺構（SN01、図80、写真62）

[位置・確認] 調査区中央からやや南東のW-20グリッドに位置する。斜面に面した平坦部の端部にあたり、標高約56.7mの第IV層中で確認した。

[重複] なし。

[形状・規模] 一端が突出する不整円形で、規模は長軸100cm、短軸88cm、焼土厚は8cmである。褐色土主体で、被熱は顕著である。

[出土遺物] 縄文土器25gが出土し、2点を図示した（図80-1・2）。1は貝殻押引文が施されたもので縄文時代早期中葉、2は縄文が施されたもので縄文時代早期後葉のものである。

[小結] 出土遺物から縄文時代早期後葉以降と推定されるが、詳細な時期は不明である。

第2号焼土遺構（SN02、図80、写真62）

[位置・確認] 調査区中央のV-28グリッドに位置する。平坦部の北西側にあたり、第9号竪穴建物跡から北西に約2m離れた場所である。標高約57.3mの第IV層中で確認した。

[重複] なし。

[形状・規模] 楕円形で、規模は長軸61cm、短軸47cm、焼土厚は5cmである。赤褐色土主体で、被熱は顕著である。

[出土遺物] なし。

[小結] 時期を示す遺物は出土しなかったため詳細な時期は不明である。

第3号焼土遺構（SN03、図80、写真62）

[位置・確認] 調査区中央のW-29グリッドに位置する。平坦部の北側にあたり、第9号竪穴建物跡から北に約2m離れた場所である。標高約57.9mの第IV層中で確認した。

[重複] なし。

[形状・規模] 楕円形で、規模は長軸40cm、短軸31cm、焼土厚は5cmである。明赤褐色土主体で、被熱は顕著である。

[出土遺物] なし。

[小結] 時期を示す遺物は出土しなかったため詳細な時期は不明である。

第4号焼土遺構（SN04、図80、写真62）

[位置・確認] 調査区中央のU-26グリッドに位置する。平坦部の西側にあたり、第9号竪穴建物跡か

ら西に約4m離れた場所である。本遺構の約1m西に第5号焼土遺構が位置する。標高約57.1mの第IV層中で確認した。

[重複] なし。

[形状・規模] 隅円長方形で、規模は長軸53cm、短軸40cm、焼土厚は7cmである。赤褐色土主体で、被熱は顕著である。

[出土遺物] なし。

[小結] 時期を示す遺物は出土しなかったため詳細な時期は不明である。

第5号焼土遺構 (SN05、図80、写真63)

[位置・確認] 調査区中央のU-26グリッドに位置する。平坦部の西側にあたり、第9号竪穴建物跡から西に約5m離れた場所である。本遺構の約1m東に第4号焼土遺構が、すぐ南に第22号土坑が位置する。標高約57.0mの第IV層中で確認した。

[重複] なし。

[形状・規模] 不整形で、規模は長軸43cm、短軸35cm、焼土厚は4cmである。明赤褐色土主体で、被熱は弱い。

[出土遺物] なし。

[小結] 時期を示す遺物は出土しなかったため詳細な時期は不明である。

第6号焼土遺構 (SN06、図80、写真63)

[位置・確認] 調査区中央のU-23グリッドに位置する。平坦部の南西にあたり、第1号掘立柱建物跡の北辺に隣接し、本遺構のすぐ南に第7号焼土遺構が位置する。標高約57.1mの第IV層中で確認した。

[重複] なし。

[形状・規模] 不整形で、規模は長軸58cm、短軸46cm、焼土厚は11cmである。赤褐色主体で、被熱は顕著である。

[出土遺物] なし。

[小結] 時期を示す遺物は出土しなかったため詳細な時期は不明である。

第7号焼土遺構 (SN07、図80、写真63)

[位置・確認] 調査区中央のU-23グリッドに位置する。平坦部の南西にあたり、第1号掘立柱建物跡の北辺に隣接し、本遺構のすぐ北に第6号焼土遺構が位置する。標高約57.1mの第IV層中で確認した。

[重複] なし。

[形状・規模] 楕円形で、長軸20cm、短軸12cmと小規模である。焼土は橙色主体で、焼土厚は1cmと薄い被熱は顕著である。

[出土遺物] なし。

[小結] 時期を示す遺物は出土しなかったため詳細な時期は不明である。

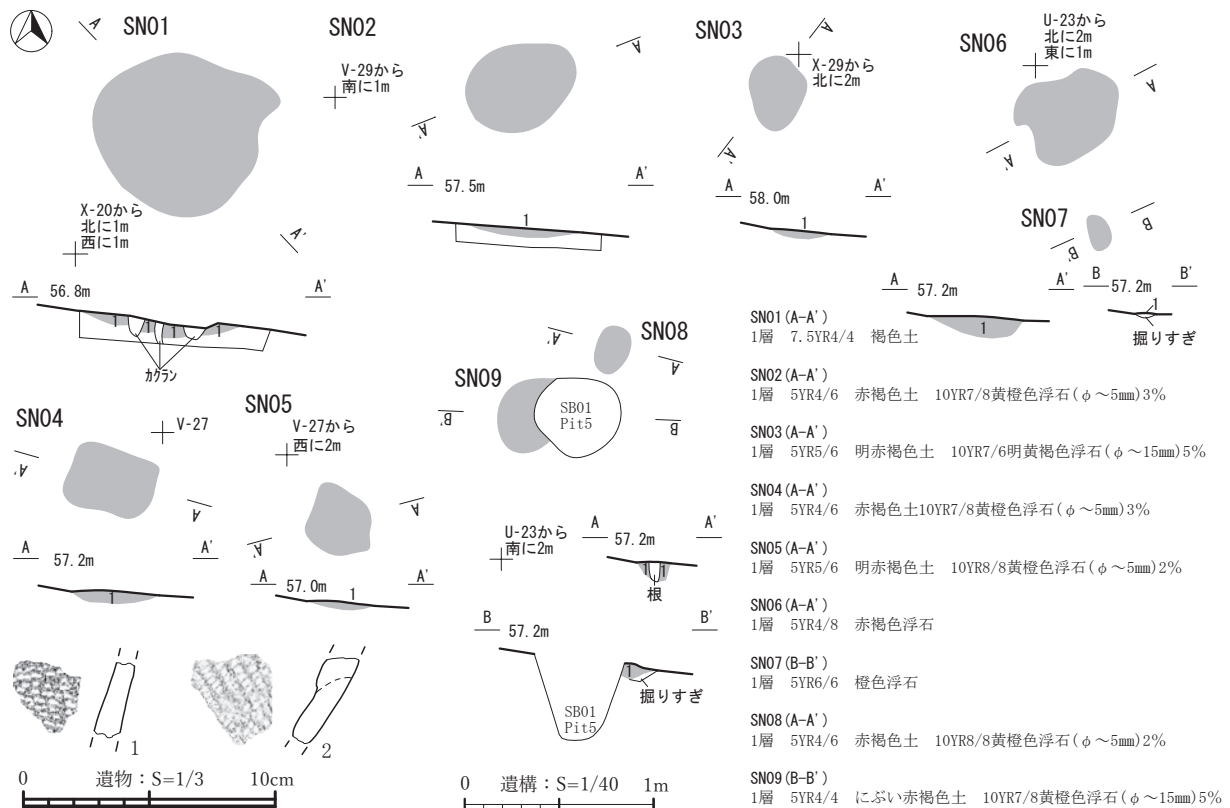


図80 焼土遺構・出土遺物

第8号焼土遺構 (SN08、図80、写真63)

[位置・確認] 調査区中央のU-22グリッドに位置する。平坦部の南西にあたり、第1号掘立柱建物跡の西辺に隣接し、本遺構のすぐ南に第9号焼土遺構が位置する。標高約57.1mの第IV層中で確認した。

[重複] なし。

[形状・規模] 楕円形で、規模は長軸26cm、短軸18cm、焼土厚は10cmである。赤褐色土主体で、被熱は顕著である。

[出土遺物] なし。

[小結] 時期を示す遺物は出土しなかったため詳細な時期は不明である。

第9号焼土遺構 (SN09、図80、写真64)

[位置・確認] 調査区中央のU-22グリッドに位置する。平坦部の南西にあたり、第1号掘立柱建物跡の西辺に隣接し、本遺構のすぐ北に第8号焼土遺構が位置する。標高約57.0mの第IV層中で確認した。

[重複] 第1号掘立柱建物跡のPit5と重複し、本遺構が古い。

[形状・規模] 不整形円形と思われる。規模は長軸45cm、短軸33cmで、焼土厚は9cmである。にぶい赤褐色土主体で、被熱は顕著である。

[出土遺物] なし。

[小結] 重複関係から第1号掘立柱建物跡より古いものの、時期を示す遺物は出土しなかったため詳細な時期は不明である。

(平山)

第7節 柱穴

柱穴は、第3節で掘立柱建物跡として報告したもの以外に、標高57m前後の平坦面を中心に、第IV層中で15基検出したが、これらは掘立柱建物跡や柵列の構成を確認できなかった。SP13～17は、整理作業において遺構ではないと判断し、欠番とした。位置については遺構配置図(図24)を、平面規模や深さについては計測表(表10)を参照されたい。いずれも構築時期などの詳細は不明である。

第8節 貝殻集中地点

貝殻集中地点は計3カ所、いずれもIV層中で検出した。第1号及び第2号貝殻集中地点は、規模が小さい。第3号貝殻集中地点では、貝層下に縄文時代早期後葉の赤御堂式土器が伴っており、遺構の形成時期も同時期であると思われる。

第1号貝殻集中地点(写真64)

[位置・確認] P-31グリッド、標高54.8mの緩斜面に位置し、重複する遺構はない。

[規模等] 分布範囲は31cm×28cm、厚さ10cm未満の極小規模な貝塚である。

[出土遺物] 貝層はすべて回収して持ち帰り、微細遺物抽出委託により水洗選別を行った結果、自然遺物(貝殻)33gを抽出した。すべて破片資料であったが、個体が特定できたものにシジミ属、ハマグリ、オオノガイがある(第2章第6節)。

[小結] 出土遺物及び検出状況から、縄文時代の極小規模な地点貝塚と考えられる。

第2号貝殻集中地点(写真64)

[位置・確認] Q-32グリッド、標高55.8mの緩斜面に位置し、重複する遺構はない。堆積が薄く、検出後しばらく別遺構の精査を優先して進めていたところ、消滅してしまった。

[規模等] 分布範囲は28cm×21cm、厚さ5cm未満の極小規模な貝塚である。

[出土遺物] 記録写真を見る限り、ハマグリやシオフキと見られる貝が散布していたようであるが、詳細は不明である。

[小結] 検出状況から、縄文時代の極小規模な地点貝塚と考えられる。

第3号貝殻集中地点(巻頭写真6、図81・82、写真64・65)

[位置・確認] V・W-16グリッド、標高53.2～53.9mの斜面に位置し、重複する遺構はない。

[規模等] 貝層は160cm×90cmの範囲で、大きく4つのブロックに分かれて堆積していた。分布範囲はブロック1が77cm×40cm、厚さ17cm、ブロック2が51cm×36cm、厚さ7cm、ブロック3が40cm×21cm、ブロック4が41cm×20cmである。なお、ブロックは調査時に便宜上名称を付したもので、廃棄単位を意味するものではない。

[出土遺物] 貝層はすべて回収して持ち帰り、微細遺物抽出委託により水洗選別を行った結果、貝殻を主体とした自然遺物15,640gを抽出した。個体が特定できたものにはマガキ、バカガイ、シオフキ、

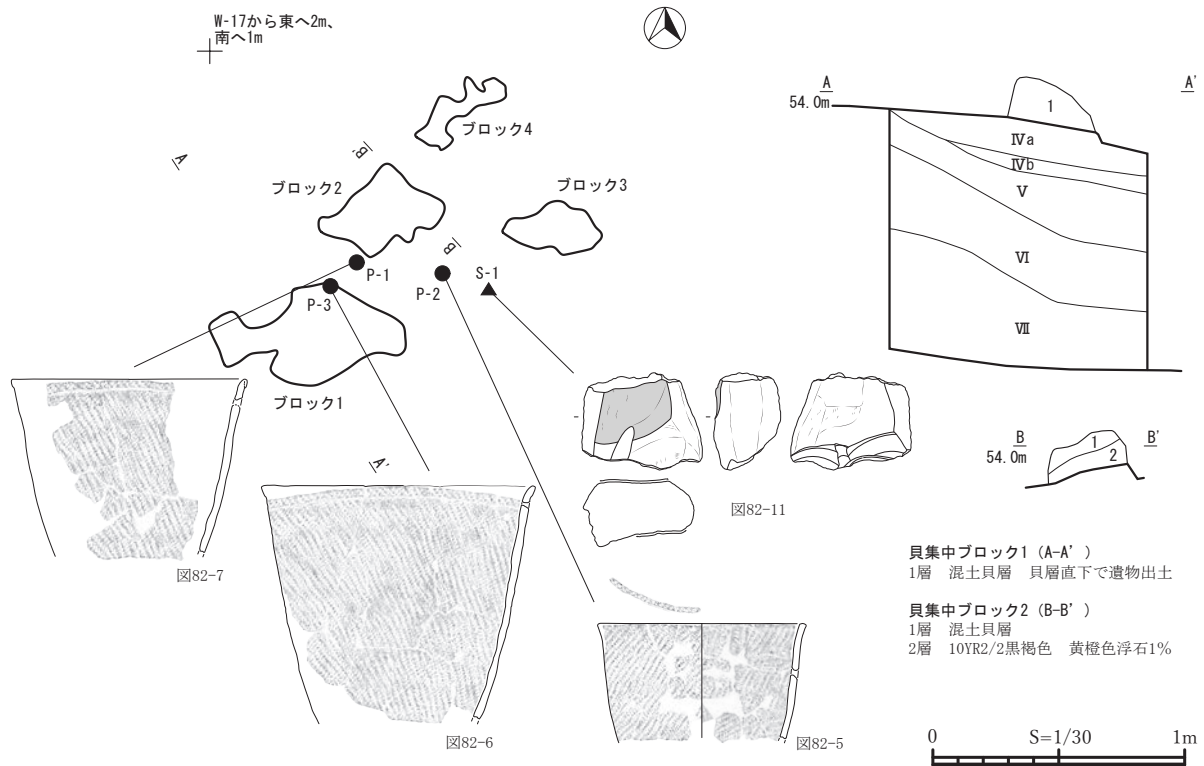


図81 第3号貝殻集中地点

イソシジミ、シジミ属、アサリ、オキシジミ、ハマグリ、オオノガイ、ソトオリガイ、ベッコウマイマイ科、パツラマイマイ科、サケ科があり（第2章第6節）、オオノガイ、ソトオリガイ、シジミ属が主体を占める。全体的に大型のものを選択して採取していることがうかがえる（第3章第1節）。また、貝層及び貝層下からは、縄文土器2,809g、石匙1点、磨石1点が出土した。土器は、貝殻押引文（図82-1）やケズリ調整を施したもの（図82-2）も見られるが、主体を占めるのは早期後葉の赤御堂式である。表裏縄文と（図82-4・5・8）、内面ナデ調整のものがある（図82-3・6・7）。口縁部は沈線（図82-3）や側面圧痕（図82-8）が巡るもののほか、口唇に貼り付けた粘土紐が隆帯状に巡るものがある（図82-6・7）。ブロック1の貝層直下からは、口縁部～胴部破片が横倒しで潰れた状態で出土している（図82-6、写真65右下）。

[小結] 出土遺物及び検出状況から、縄文時代早期後葉の地点貝塚と考えられる。（中門）

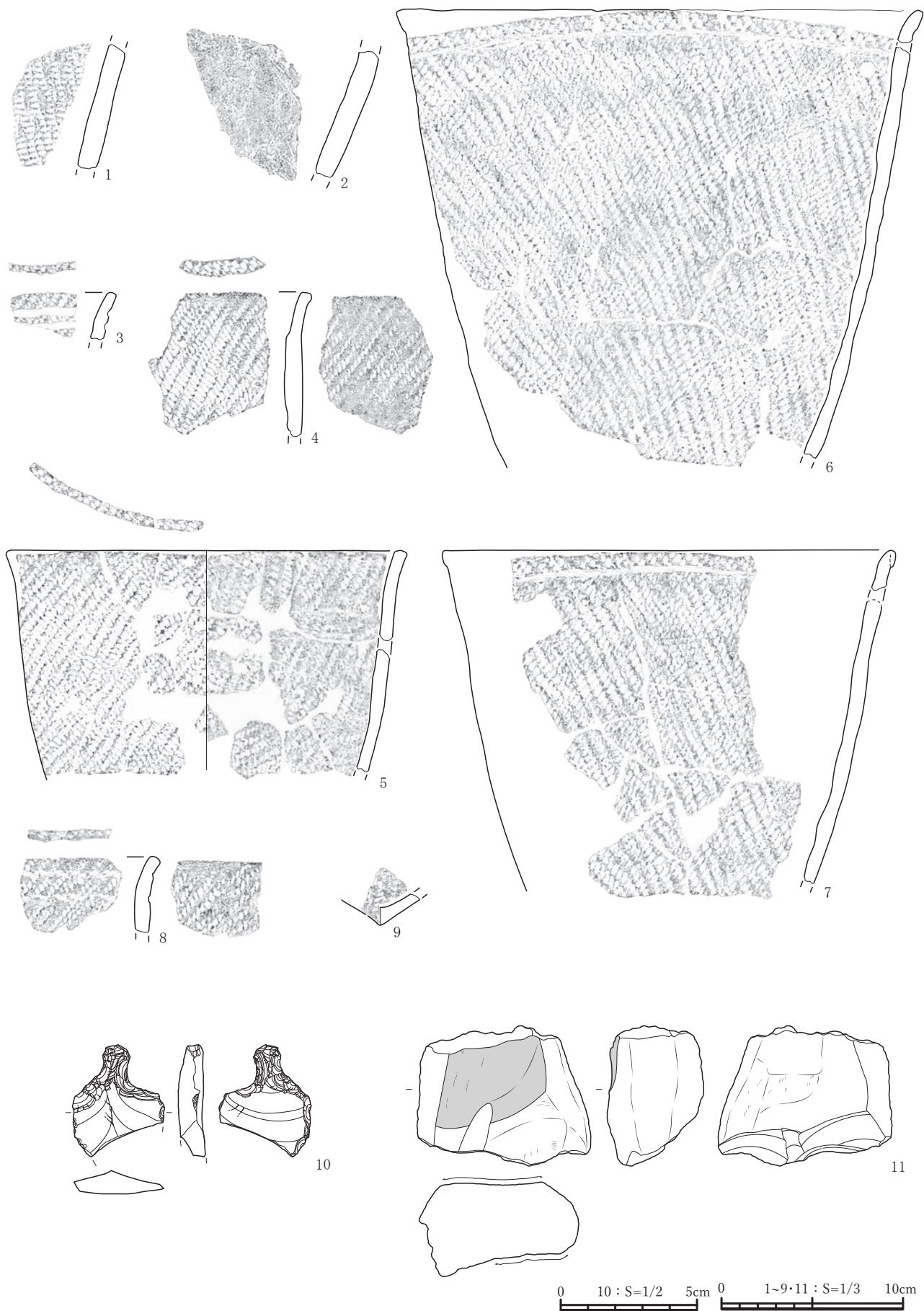


图82 第3号貝殼集中地点出土遺物

第9節 遺構外出土遺物

1 土器（図83～図88、写真77～79）

縄文土器と平安時代の土師器・須恵器が出土した。縄文土器は、遺構外および原位置を失っていると判断される平安時代の遺構（竪穴建物跡・掘立柱建物跡）や攪乱から出土したのものをまとめた。それぞれの時代や種類ごとに記述する。

縄文土器（図83-1～図88-29、写真77～79）

今回の調査では早期・前期・後期・晩期の縄文土器が総重量71,014g出土した。以下、時代ごとに述べる。

I 縄文時代早期の土器（図83～図87、写真77～79）

縄文時代早期の土器は、中葉のものとは後葉のものとはある。時期及び施文によって細分した。

1 早期中葉の土器（図83～図84、写真77）

(1) 白浜式に比定されるもの（図83-1～3、写真77）

口縁に平行して2～3段の爪形刺突列が施されるものである。平口縁であるが、全体形を把握できるものはない。焼成は良好で硬質である。

(2) 吹切沢式に比定されるもの（図83-4～8、写真77）

貝殻文に隆帯や沈線が施されるものである。波状口縁（4・5）もしくは平口縁（7）で、器形は砲弾型と思われる。器面全体に貝殻押引文や貝殻腹縁文が施されている。隆帯は波頂部に垂下したり（4・5）、口縁部に鋸歯状に屈曲して横位展開する（7）。7の隆帯は幅約7mmで、隆帯上にも貝殻押引文が施されている。沈線は口縁部と胴部に施され、口縁部では横位に、胴部では鋸歯状に屈曲して縦位もしくは斜位に展開する。沈線の幅は約2mm、断面は浅い箱状で、平坦な篋状工具によるものと考えられる。口唇部や胴部に篋状工具・棒状工具による刺突が認められる。胎土中に繊維や小礫・褐色土粒が混入し、焼成は良好であるがやや軟質である。器面が脆いもの（8）や黒色物質が付着するもの（7）があり、煮炊きや被熱によるものと推測される。

(3) 鳥木沢式に比定されるもの（図83-9～図84-37、写真77）

貝殻文を主体に施したものである。全体の器形がわかるまで復元できるものはなかったが、口縁は波状口縁もしくは平口縁、底部は尖底で、砲弾型の器形と思われる。施文は体部上半に集中し、体部下半は無文である。口唇部や体部上半に刺突が施されるものもある。刺突は、口唇部では篋状工具・貝・爪・指で施される。体部上半では篋状工具・棒状工具・貝で器面に対して斜方向に施され、縦位・横位等の列状に展開しており、文様帯を区画すると考えられる。胎土中に小礫や褐色土粒が混入する。焼成は良好であるがやや軟質である。器面が赤化していたり小円状に剥離したりして、被熱を推測されるものもある。内面は貝殻条痕・ミガキ・ケズリ等の調整で平滑に整えられている。

施文の種類と組み合わせによって細分した。

① 貝殻押引文を主体とするもの（図83-9～22）

施文方向が横位のもの（9～11・16・17・19・20）と斜位のもの（12～15・18・21）、横位と斜位の

もの(22)がある。斜位のもの、施文角度を変えて鋸歯状、もしくは三角形を基調とした幾何学的文様を横位に展開すると推測される。15・19～22は刺突が施されるもので、刺突列は斜位(15・19)、横位(20・21)、横位と縦位(22)に展開する。15は極細の棒状工具による。

②貝殻腹縁文を主体とするもの(図83-23～40)

貝殻腹縁文は、羽状のもの(23～25・27・33～37)、斜位のもの(28～30・38・39)、縦位のもの(31～32・40)、縦位と斜位のもの(26)がある。斜位のは、羽状の断片を含む可能性がある。羽状のものは、展開方向が横位(23・24・33・34)と縦位(25・35～37)がある。35は貝の外面で施文したもの、37は放射肋の発達しない貝(ハマグリ等)を使用したものである。23・34・36は刺突が施されたもので、刺突列は横位(23・34)と縦位(36)に展開する。36は貝の刺突が施されたものである。

③波状貝殻文を主体とするもの(図83-41～43)

展開方向が横位のもの(41・43)と斜位のもの(42)がある。41・42は貝の外表面、43は内面で施文したものである。42・43は間隔が特に狭い。43は貝による刺突列が横位に施されたものである。

④貝殻条痕文を主体とするもの(図84-1～10)

貝殻条痕文の施文方向は、横位(1・4～6・9)、斜位(3)、縦位(8)、横位と縦位(7)・縦位と斜位(10)、格子状(2)がある。8・9は篋状工具で刺突が施されたもので、刺突列は8が縦位、9は横位である。

⑤無文のもの(図84-11～37)

11・12は口縁部、13～29は胴部、30～37は底部である。底部に乳房状突起は認められない。小円状の剥離や赤化といった被熱を推測されるものが目立つ。ミガキ・ケズリ調整が認められるものもある。胴部のうち13～16は篋状工具で刺突が施されるもので、横位に展開する。口縁部文様帯直下の胴上部片と思われる。

2 早期後葉の土器(図85～87、写真78・79)

赤御堂式に比定されるものである。主に単節の斜縄文が施される。全体の器形がわかるまで復元できるものはなかったが、口縁は平口縁、底部は尖底で、口縁部端部が屈曲するものがあるが、概ね円錐型の器形と思われる。口唇部に縄文や、縄文原体・篋状工具・指による刺突が施されるものもある。内面はユビアトと推測される凹凸が認められるほか、縄文や条痕が施されるものがある。胎土中に褐色土粒が混入し、焼成は良好であるが軟質である。器面には黒色物質の付着や、小円状の剥離がみられるものもあり、煮炊きや被熱によるものと推測される。口縁部直下に施文されるものがあり、展開方向は横位で口縁と平行である。なお、刺突は器面に対して斜方向に行われている。

施文の種類によって細分した。

①側面圧痕を施すもの(図85-1～17)

施される側面圧痕は1条のもの(1・2・17)と、2条のもの(3～16)がある。側面圧痕の原体は、器面に施された縄文と同じである。15は横位と斜位に、16は縦位に側面圧痕が施されたものである。17は口縁部直下に棒状工具で刺突が施されるものである。1の縄文は横走する。

②沈線を施すもの(図85-18～27)

沈線は1条のもの(18~20)、2条のもの(21~26)、3条のもの(27)がある。沈線の幅は3mm前後、断面は半円状のものが多く、ほとんどが棒状の工具によるものと推測される。沈線間には、波状沈線を施すもの(24)・斜位の沈線を施すもの(25)・刺突を施すもの(26)がある。

③刺突を施すもの(図85-28・29)

断面形状から、28の刺突具は棒状、29は篋状と推定される。28の刺突列は2段である。

④隆帯を施すもの(図85-30・31)

口縁部に幅12mm前後の隆帯を施すもので、隆帯上には、側面圧痕(30)や刺突(31)が施される。側面圧痕の原体は器面の縄文と同じである。刺突具は篋状と思われる。

⑤縄文のみを施すもの(図86・87)

口縁部(図86-1~18)、胴部(図86-19~図87-17)、底部(図87-18~42)、ミニチュア土器(図87-43)である。図86-16はミニチュア土器の可能性はある。図86-17・18と図87-17は無節のものである。図86-17・18は同一個体の可能性はある。図86-19は組紐の圧痕を縦位に施すものである。図86-20・21は0段多条の縄文が間隔を空けて横走するものである。側面圧痕の可能性もあるが、①の側面圧痕のものと比較すると縄の圧痕が浅い。図87-11・15も縄文の間隔が広いものである。底部の図87-41は乳房状突起を有するもの、図87-42は平底のものである。

II 縄文時代前期の土器(図88-1~3、写真79)

前期前葉の土器を3点図示した。全体形を把握できるものはない。複節の縄文が方向を違えて施されている。内面は平滑で、ユビアトと推測される凹凸が認められる。胎土中に繊維と褐色土粒が混入する。焼成は良好で硬質で、外面に黒色物質の付着が認められる。青森県史(青森県2017)の前期前葉第2段階、早稲田6類cに包括される土器と推定される。

III 縄文時代後期の土器(図88-4~28、写真79)

縄文時代後期の土器は初頭から前葉までのものが出土しており、時期細分等で3群に分けた。

1 後期初頭の土器(図88-4~11、写真79)

隆帯が施される一群と磨消しで文様を構成するものである。7点を図示した。器種は深鉢と壺があるが、全体形を把握できるものはない。隆帯上には縄文が施される。4・6~9・11は青森県史(青森県2013)の後期1期(後期初頭古段階)、5・10は後期2期(後期初頭新段階)に比定される。

2 後期前葉の土器(図88-12~18、写真79)

沈線と磨消しで文様を構成する一群である。7点を図示した。器種は深鉢と壺とがある。全体形を把握できるものはない。これらは概ね青森県史(青森県2013)の後期3期(後期前葉「十腰内I群」併行)の第1段階に比定されるが、14は櫛歯状沈線であることから、第2段階のものと考えられる。

3 後期の粗製土器(図88-19~28、写真79)

地文縄文のみのも、及び無文のもの10点を図示した。いずれも深鉢で、19は口縁部~胴部、20は口縁部、21~25は胴部、26~28は底部である。28は外底面に圧痕がみられるものである。

IV 縄文時代晩期の土器(図88-29、写真79)

地文縄文のみの粗製土器の壺である。口縁部～頸部は無文で、胴部の縄文は節が小さい。

平安時代の土器 (図88-30・31、写真79)

遺構外からは土師器448g、須恵器25gが出土した。土師器は調査区中央の平場および周辺の西斜面からの出土が多く、須恵器は調査区中央の平場東端、第3号竪穴建物跡付近から出土しているが、いずれも散発的である。土師器1点、須恵器1点を図示した。30はロクロ成形の甕胴部で、外面は縦位のケズリが施されている。31は壺の底部で、小型のものである。外底面には、回転糸切り痕が認められる。(平山)

2 石器 (図89～99、写真80～83)

本稿では遺構外から出土した石器のほかに、平安時代の竪穴建物跡や近現代の溝跡から出土した石器も含めて記載する。石器は概ね土器の出土状況と一致しており、調査区南側斜面区及び平場から出土し、北側斜面からは出土しなかった。なお、今回の調査で出土した石器の多くは第I層から出土しており、帰属時期に関しては詳細にない。しかし、同じく第I層から出土した縄文土器は縄文時代早期～前期初頭が主体を占め、後期の遺物も若干数出土していることから、この範囲内に相当する可能性がある。実際、松原型石匙や、トランシェ様石器、特殊磨石(三角柱状磨石)など早期～前期初頭に特徴的な石器も出土している。剥片石器類は453点、礫石器類は161点出土した。以下に器種毎に記載していく。

石鏃 (図89-1)

1点出土した。珪質頁岩を素材とした尖基鏃である。

石槍 (図89-2～6)

5点出土した。いずれも珪質頁岩を素材としている。両面から調整が施されており2・3は押圧剥離、4は直接打撃により整形された様相を示している。調整の違いは石器の厚さにも表れており、2・3の器厚は最大1cm前後と薄手であるが、4は2cm強あり厚手である。また、4は破損部に微細剥離が認められることから、スクレイパーとして再利用された可能性もある。5・6は破損品である。

石匙 (図89-7～12)

遺構外からは10点出土し、6点図示した。抉りの作出が弱いものも石匙に含めた。いずれも珪質頁岩を素材としている。7は縦長剥片を素材とし、主要剥離面には背面調整用の連続した剥離が施され、背面には器面全体に及ぶ押圧剥離が施されている。このような特徴を持つ石匙は「松原型石匙」ともよばれており、早期後葉～前期前葉に特徴的な石匙形態である。長軸端の刃部背面に光沢痕がみられる。8～12は7のような技法的な製作法は認められず、周縁に加工が施されただけのものである。明瞭なつまみ部を作出している8と、抉りが弱くつまみ部が明瞭ではない9～11がある。12は抉りというよりも基部状の長いつまみが作出されており、つまみ先端部には黒色物質、背面の刃部右端部には強い光沢が付着している。なお、黒色物質は9の腹面にも付着している。

篋状石器 (図89-13～17)

5点出土した。両面加工が施され、長軸上の端部に背面、もしくは腹面から剥離調整を施し、急角



図83 遺構外出土土器 (1)

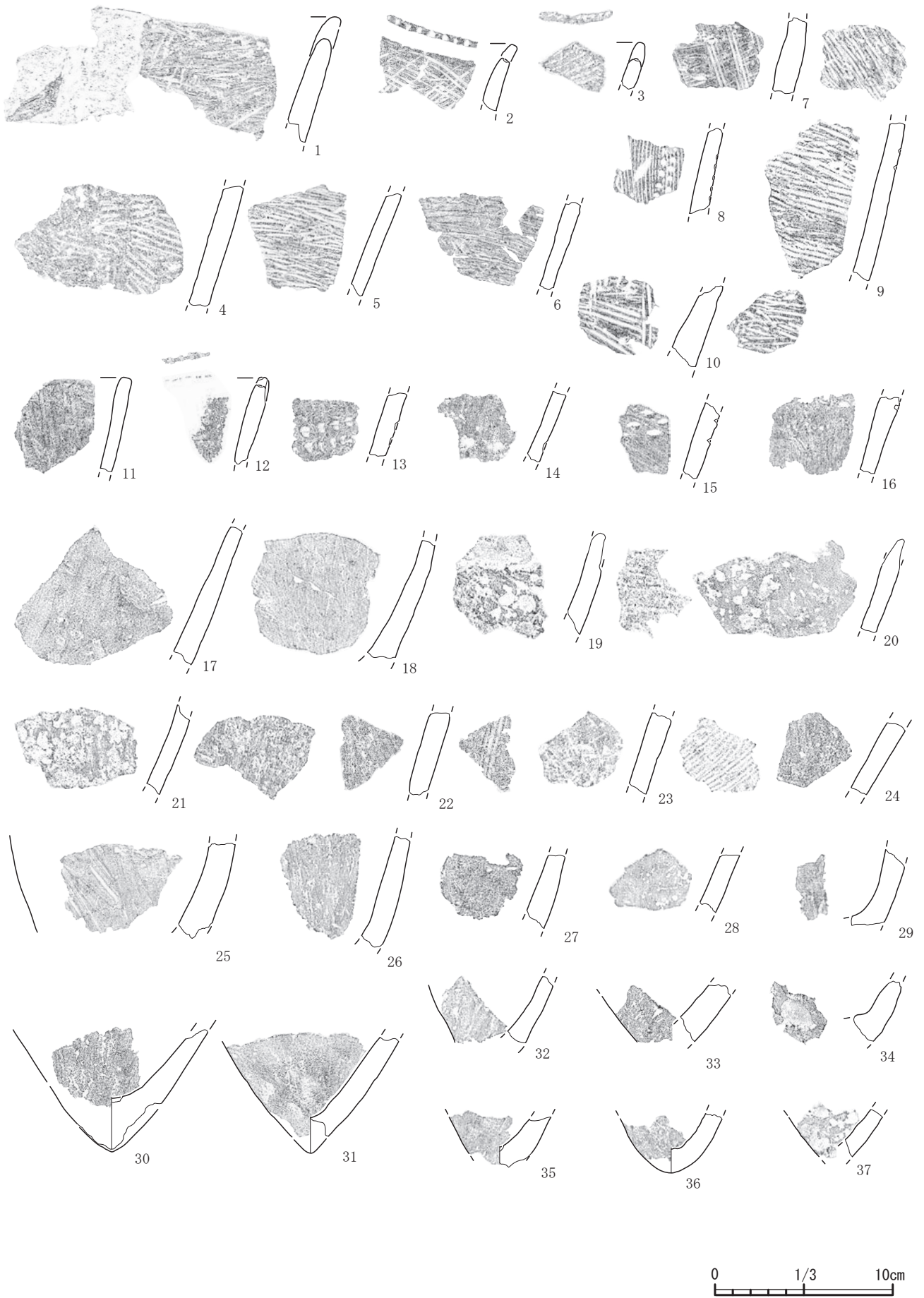


図84 遺構外出土土器(2)



図85 遺構外出土土器 (3)

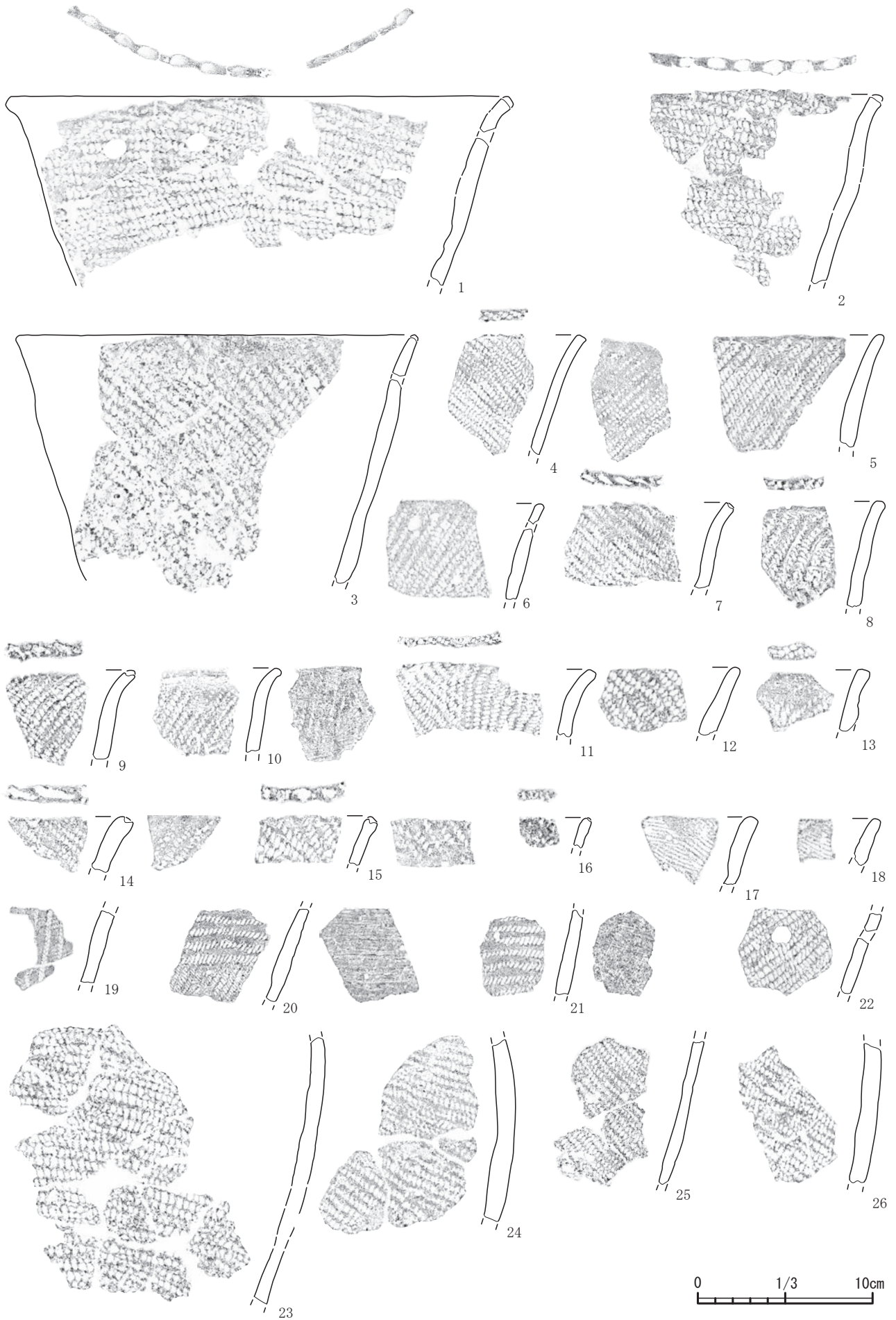


図86 遺構外出土土器(4)

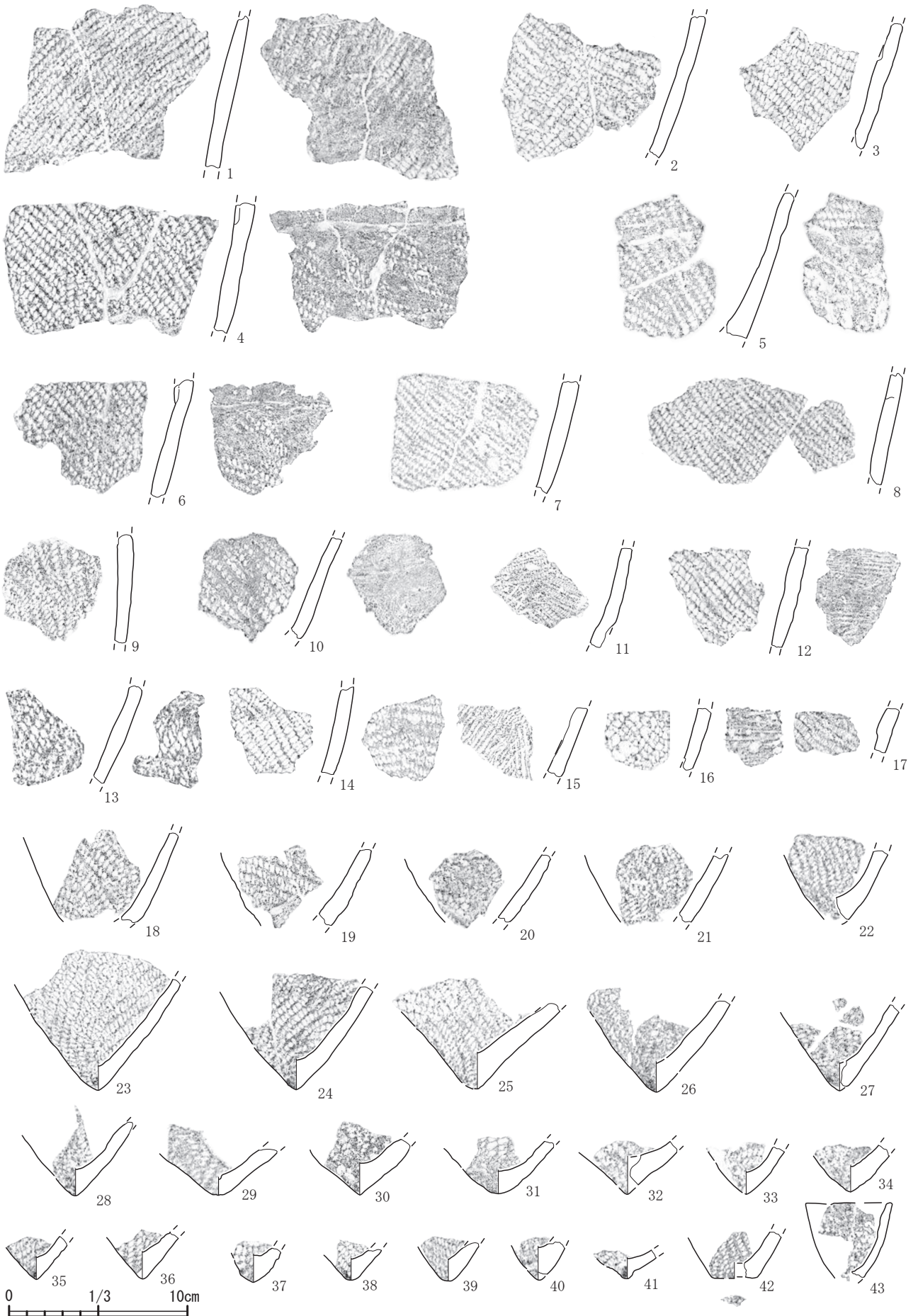


図87 遺構外出土土器 (5)

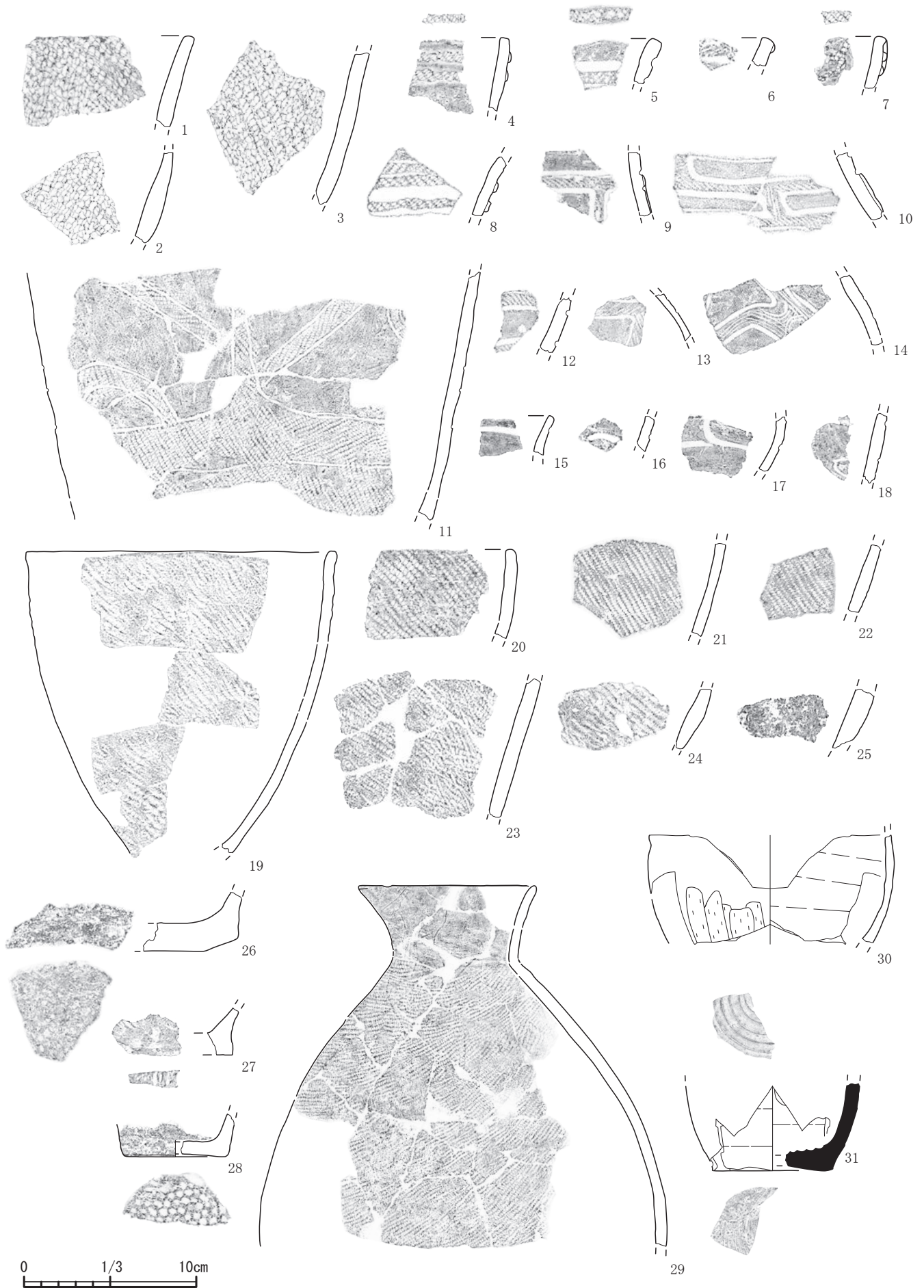


図88 遺構外出土土器(6)

度の刃部を有するものを筥状石器とした。いずれも珪質頁岩を素材としている。光沢の付着率が高く12～15に付着している。いずれも器面に付着していることから、装着痕である可能性もある。

トランシェ様石器（図90-1・2）

2点出土した。刃部は石器の中で最も古い面を使用し、かつ加工を施さない素刃であること、平面形が台形ないしは撥形をしたものを本類とした。早期中葉の貝殻文系土器に供伴するといわれている（富樫1976、高橋2017）。2点共に珪質頁岩を素材としている。

スクレイパー（図90-3～7）

11点出土し、5点を図示した。定形石器以外で削器的な刃部を有する石器を本類とした。全て珪質頁岩を素材としている。図90-7は縦長剥片を素材とし、刃部に強い光沢痕がみられた。石匙破損品である可能性もある。

石錐（図90-8～11）

4点出土し、全て図示した。いずれも、珪質頁岩を素材としている。4点共に錐部だけに加工を施した簡易なものである。8は長さ2.1cmの小型錐であるが端部が摩滅している。

二次加工剥片（図90-12）

17点出土し、1点を図示した。リタッチドフレイクともいわれる類で、二次加工が施されているが刃部等が確認できず、利器として認定できないものを本類に含めた。

石核（図90-13～図91-1）

13点出土し、4点を図示した。石材は珪質頁岩が11点で主体を占めており、その他にチャート、瑪瑙が1点ずつ選択されている。剥片採取が繰り返されたものと（13・15）、そうでないもの（14・図91-1）に二分される。当然のことながら現存する大きさと比例しており、前者にあたる13は長さ2cm台、15は4cm台になるまで剥片が採取されている。一方、後者にあたる図90-14・図91-1は長さ8センチ前後の大きさである。図90-14は瑪瑙を素材としており、石の目が不規則に形成されていることから、剥片採取に適さなかったものと推測できる。

剥片・両極剥片

図示していないが385点、3,346g出土した。珪質頁岩を主体とするが、ほかに頁岩、チャート、石英などがごく少数含まれている。

磨製石斧（図91-2～図92-3）

破片を含めると15点出土し、11点を図示した。頁岩、チャートなど剥片石器にも用いられる石材を使用した小型の石斧（図91-2～7）と安山岩、閃緑岩、粗粒玄武岩などいわゆる礫石器に使用される石材を使用した大型の石斧（図91-8～図92-3）に二分できる。

図91-2は破損品で、裏面は大きく剥離している。この剥離面には加工が施されており、破損後も再利用しようとした形跡がある。器面にみられる強い光沢痕は装着痕の可能性もある。図91-3は側縁に調整剥離を施し器形を整え研磨をしている。刃部断面形は片刃、形状は円刃である。図91-4～6は研磨により整形されている。4は擦切痕がみられ、意図した形状に切り出した後に研磨されている。刃部断面形は片刃で形状は平刃に近い。一方、5・6は刃部のみに研磨調整が施された簡易なもので、刃部断面形は両刃、形状は円刃である。図91-7は基部片である。緑色片岩を素材とし、擦切痕、敲打痕がみられる。変成岩である緑色片岩は青森県では採取できないため搬入品と考えられ、視覚的

特徴から北海道のアオトラ石である可能性がある。

図91-8は基部片で、主として研磨調整が施されている。また、破損面が摩滅しており、破損後も再利用された可能性がある。9も基部片であるが、剥離・敲打調整が主として行われている。図92-1～3は刃部片で、刃部断面形はいずれも両刃である。刃部形状は1は偏刃状、2・3は平刃状である。3の器面及び側縁には敲打痕がみられる。研磨痕よりも新しいことと付着部位から装着痕の可能性もある。

打製石斧（図92-4・5）

2点出土した。4は頁岩を、5は粘板岩を素材としている。4は片刃で刃部角は70度を有している。背面刃部付近と腹面基部付近に光沢痕がみられる。5は両刃の平刃で刃部縁辺がツブれないしは摩滅している。

磨石（図92-6～図95-1）

総数60点出土した。石材は安山岩、デイサイト、砂岩、頁岩、凝灰岩などが使用されている。以下のように細分した。

I類 - 側面を使用しているもの。

a. 素材形状が三角柱状をしているもの（図92-6～図93-5）

三角柱状磨石、特殊磨石ともいわれる類で早期～前期初頭に特徴的な石器を本類とした。21点が相当する。

b. それ以外のもの（図93-6～94-6）

28点が相当する。

II類 - 器面及び側面を使用しているもの（図94-7～図95-1）

12点が相当する。

敲石（図95-2～10）

総数31点出土した。凹み痕を有するものも本類に含めた。本器種は石材の選択性に傾向が見られ、安山岩が19点と最も多く、石材的に近いデイサイト3点を含めると約7割を占めている。その他はチャート5点、砂岩2点、頁岩1点である。以下のように細分した。

I類 - 器面を使用しているもの（図95-2～6）

全て安山岩を素材としている。2～6は器面が荒れる程度の敲打痕で、7は凹み痕がみられる。

21点が相当し、本類の方が多い。

II類 - 側面を使用しているもの（図95-7～10）

9、10はチャートを素材としている。いずれも、ツブれに近い敲打痕がみられハンマーとして使用されたと考えられる。10点が相当する。

磨石・敲石（図96-1～6）

総数6点出土した。複合機能を持つ類で、安山岩、砂岩、粗粒玄武岩を素材としている。

石錘（図96-7～図98-4）

33点出土した。本器種も敲き石同様に石材の選択性に傾向が見られ、安山岩とデイサイトが22点約7割を占めている。このほかには砂岩7点、チャート4点が使われている。以下のように細分した。

I類 - 長軸・単軸の比率がおよそ1：1となる礫を素材とするもの（図96-7～図97-6）

20点が相当し、本類の方が多。

Ⅱ類 - 長軸比が高い礫を素材として、長軸端に挟りが施されているもの (図97-7～98-4)

13点が相当する。

加工礫 (図98-5～10)

9点出土した。明確な使用痕跡は認められないが、器面に調整剥離が施されたものを本類とした。図98-5～7は素材の長軸上の端部に調整が施されていること、頁岩やチャートが素材としていることから石斧類の未製品である可能性もある。図98-8、9は側縁に剥離調整が施されている。図98-10は単軸上の一端に両面から剥離が施されており、石錘の可能性もある。

砥石 (図98-11)

1点出土した。磨り面が湾曲していることから砥石に分類した。砂岩を素材としており、石の表面観は比較的荒く、ザラついた印象を受ける。

台石 (図99-1・2)

4点出土した。いずれも安山岩を素材としている。 (小山)

3 土製品 (図99-3～8)

縄文時代の土器片利用土製品が5点、平安時代の土玉が1点出土した。3～7は縄文時代の土器片利用土製品である。土器片の側縁を加工したものを一括した。使用部位は全て胴部片で、形状は四角状 (4)・円状 (6・7)・不整形 (3・5) である。3～5は土器片の側縁を研磨したものである。加工部位は、3はほぼ全周、4・5は1側辺である。3・4の研磨面はざらついて敲打状であり、断面は凸レンズ状で、5は平滑で断面が平坦である。6・7は土器片を円状に整えたもので、7の側縁は部分的に摩滅している。3は貝殻押引文と貝殻条痕文、4は貝殻腹縁文と鋸歯状沈線、5は貝殻押引文、6・7は単節の縄文が施されている。4は沈線部を選択した可能性がある。3・5は縄文時代早期中葉の鳥木沢式、4は吹切沢式、6・7は早期後葉の赤御堂式である。

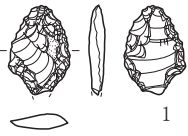
8は平安時代の土玉である。径15mmの球形で上下がわずかにつぶれ扁平となる。中央に径1mmの穿孔が施される。 (平山・中門)

4 石製品 (図99-9～12)

5点出土した。9は軽石を素材としたもので、器面に磨り調整が施されている。また、破断面を有し、そこには器面側から剥離が施されている。10はデイサイトが素材とし、両面共に器面の中央に凹痕を有している。凹痕の内部は磨られたように滑らかであることから、敲石とは区別し、石製品とした。有孔石製品の未製品である可能性もある。11は頁岩を素材としている。礫の器面両面に磨り調整が施され、その後、周縁に剥離・敲打・磨り調整が施され円形に仕上げられている。12は安山岩を素材とし、11と同じように器面に磨り、周縁に敲打・磨り調整が施されている。

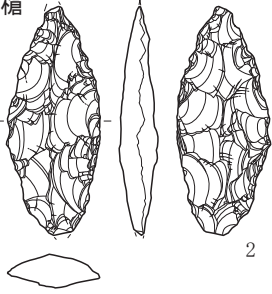
(小山)

石鏃

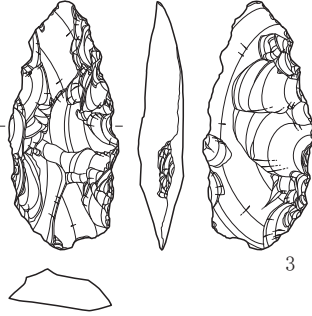


1

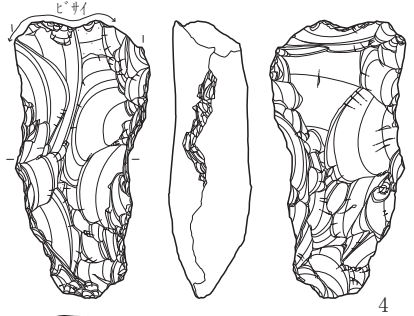
石槍



2



3

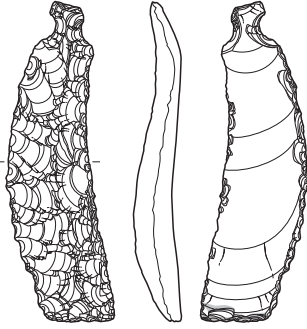


4

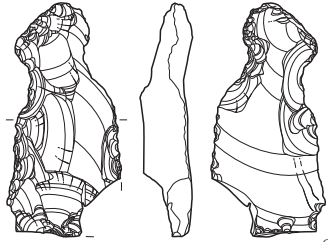


5 (SI02)

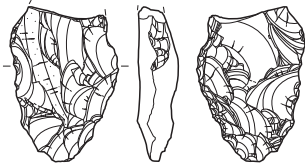
石匙



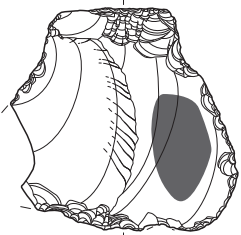
7



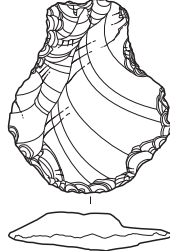
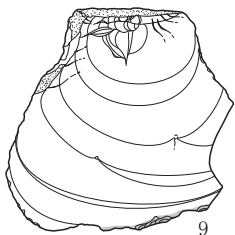
8



6



9

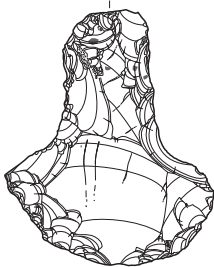


10

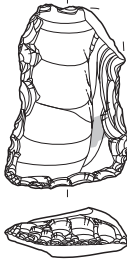
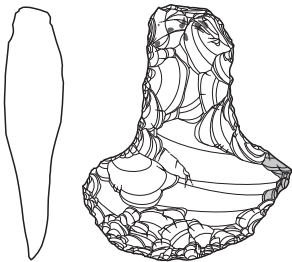


11

籠状石器



12



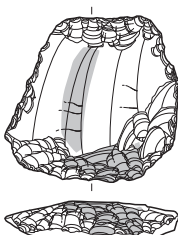
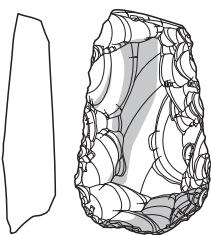
13



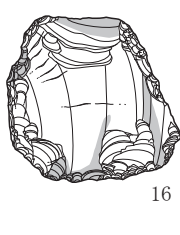
14 (SI09)



15 (SI08)



16



17

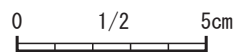


图89 遺構外出土石器 (1)

トランシェ様石器

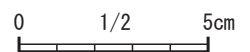
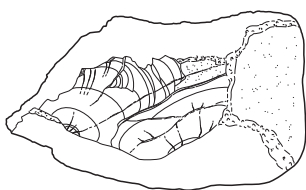
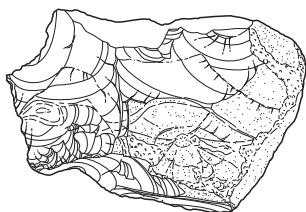
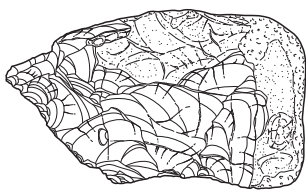
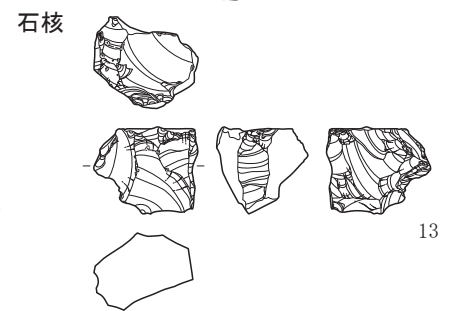
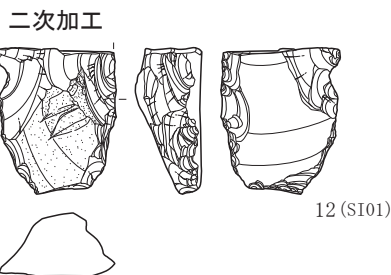
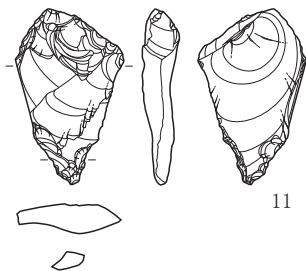
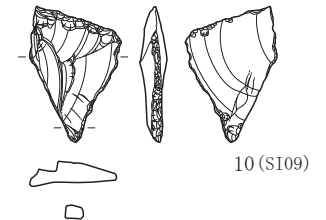
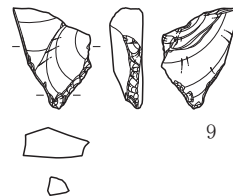
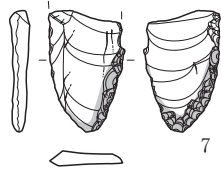
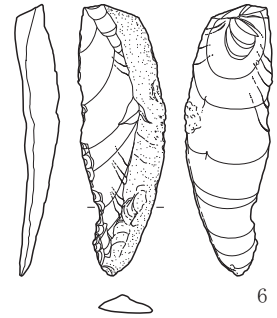
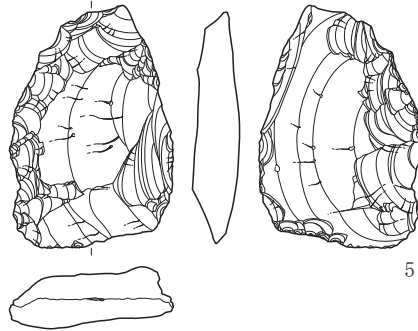
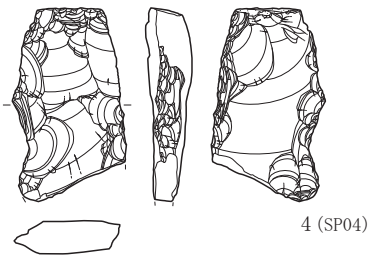
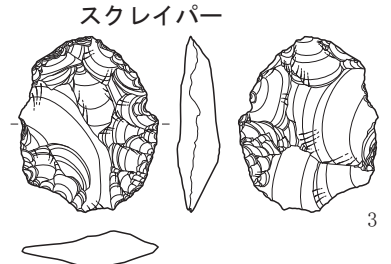
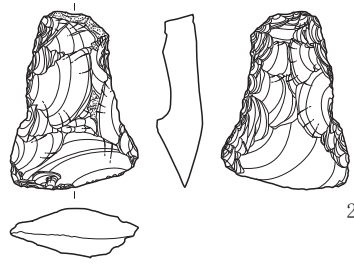
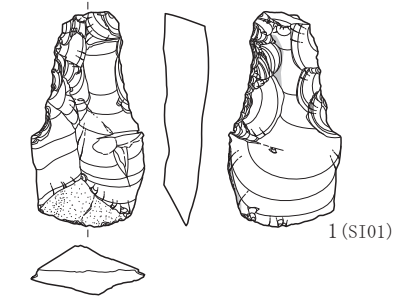
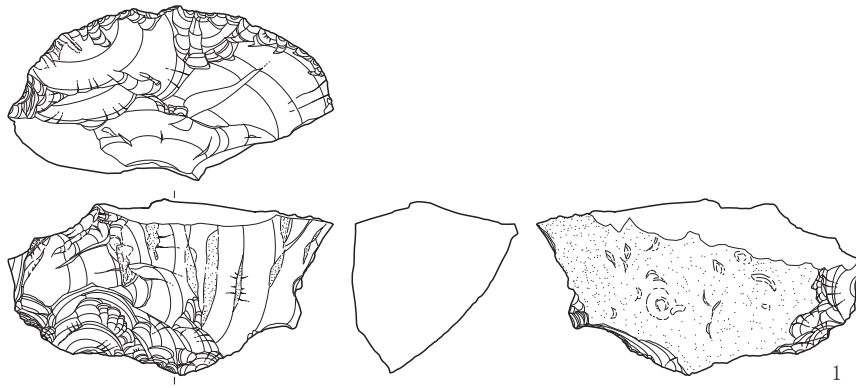


図90 遺構外出土石器 (2)



磨製石斧

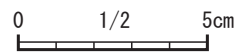
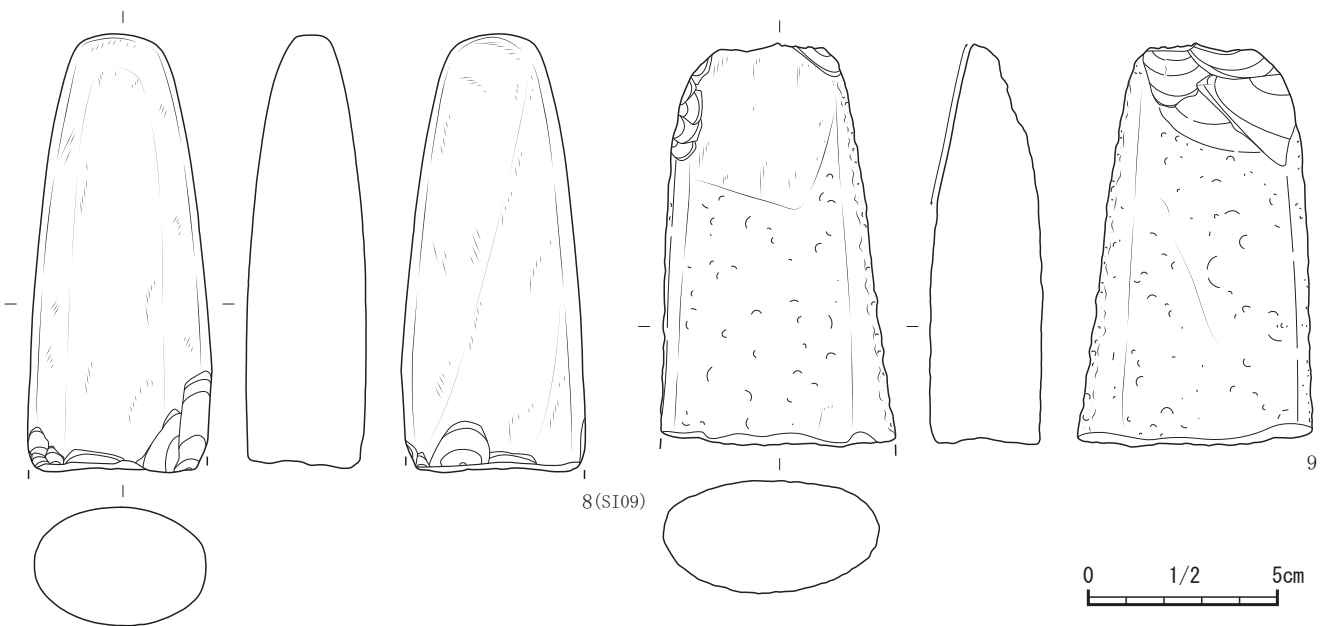
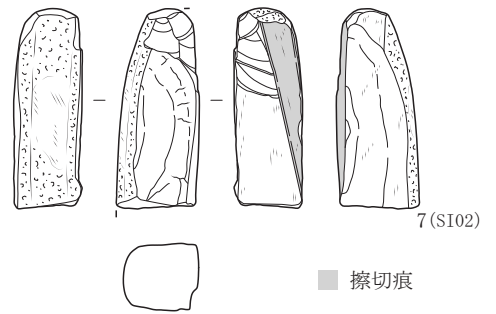
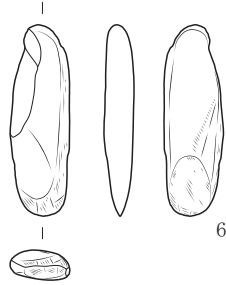
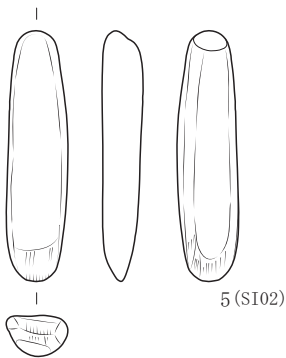
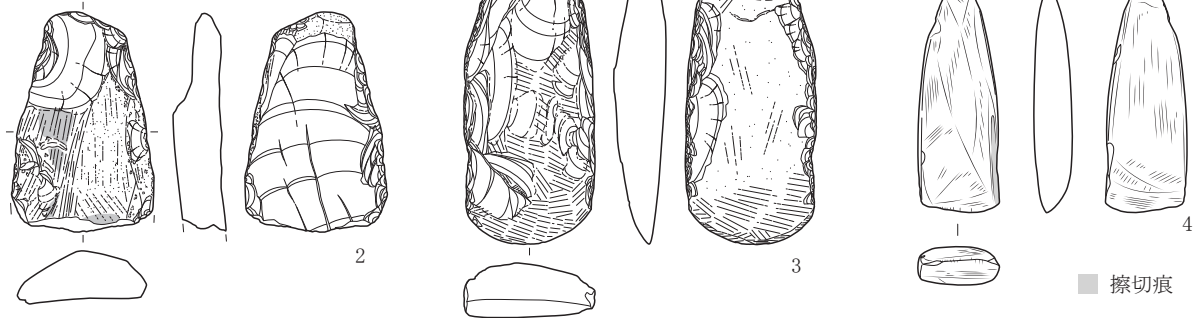


図91 遺構外出土石器(3)



図92 遺構外出土石器（4）

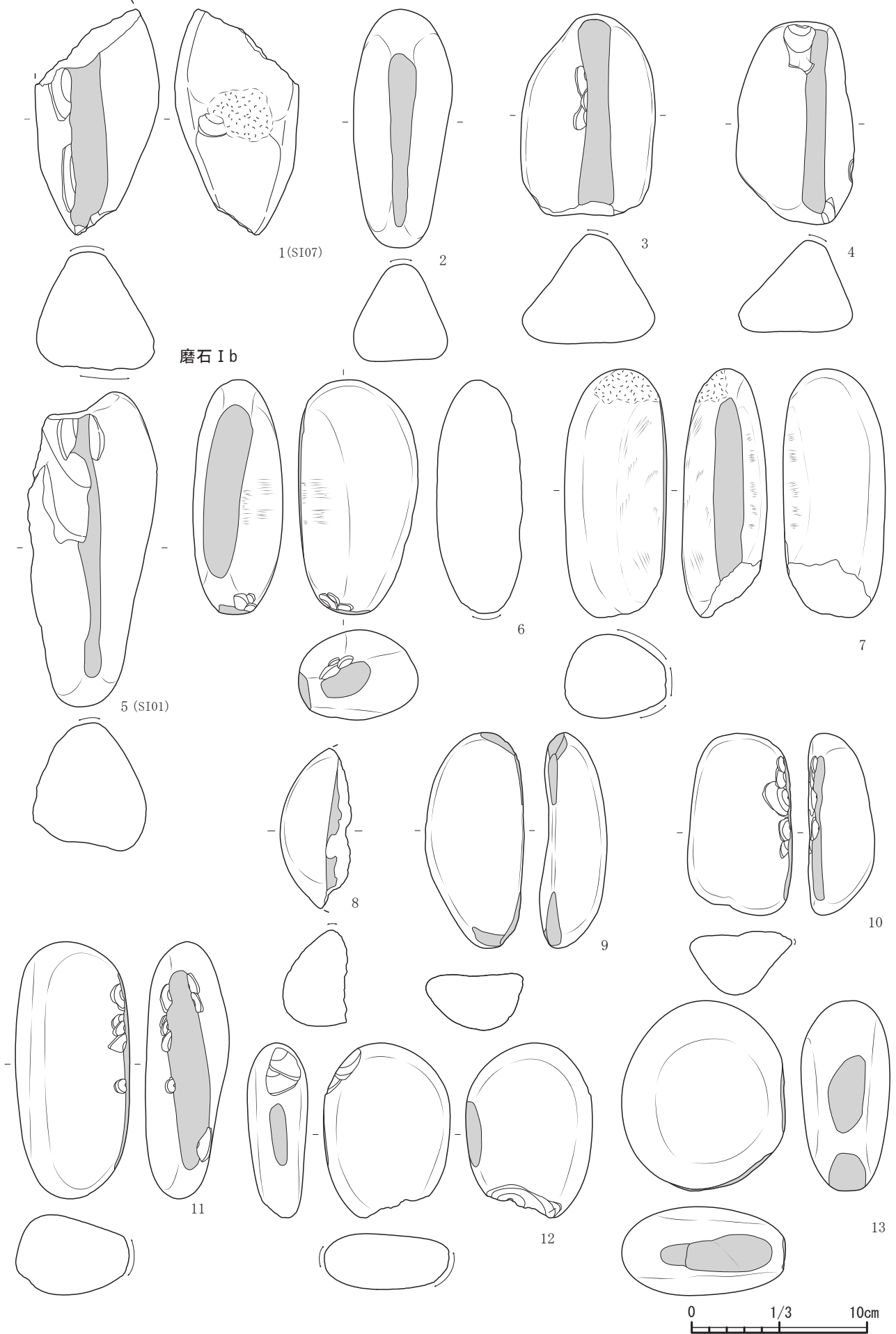


图93 遺構外出土石器 (5)

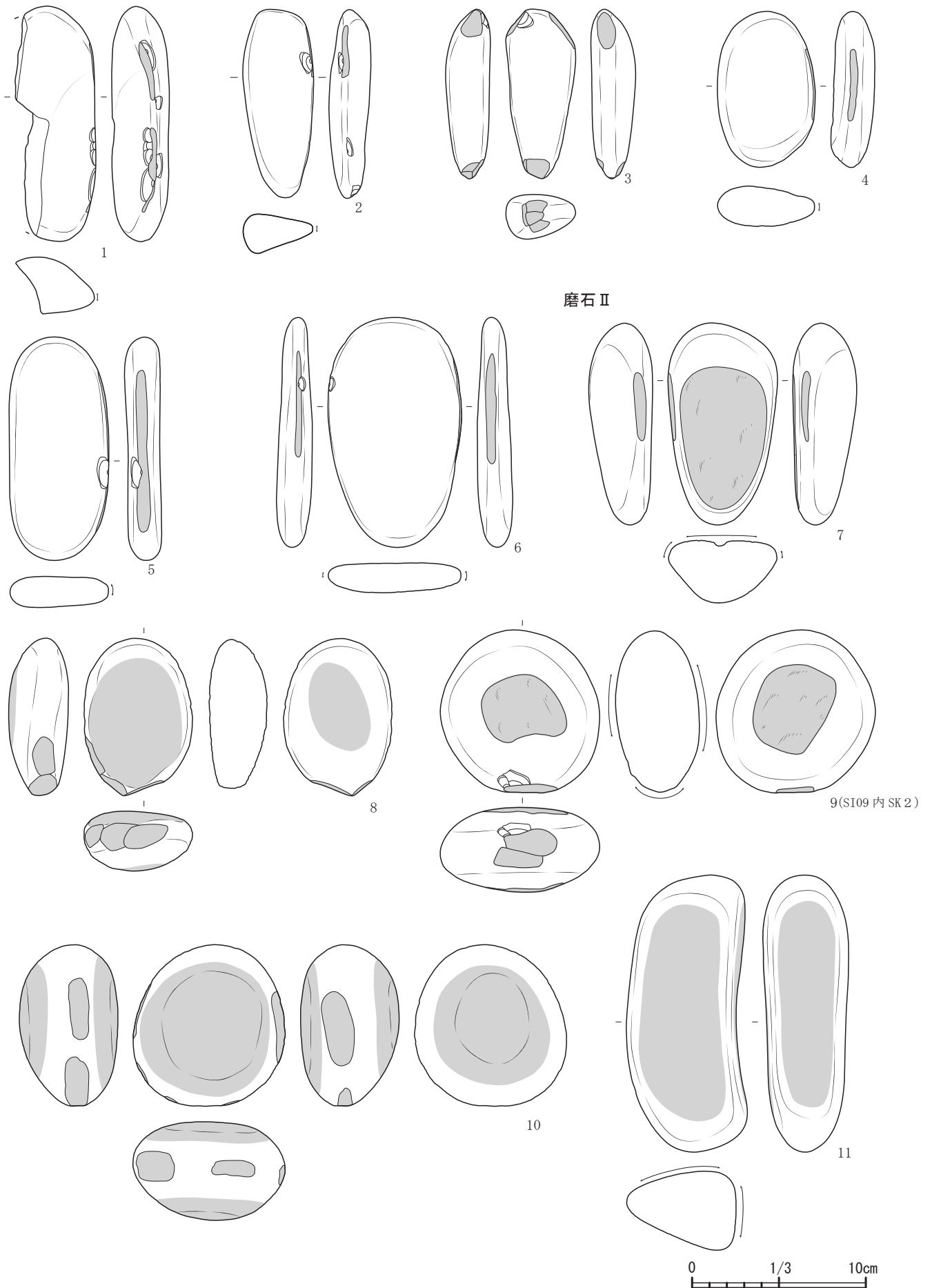


図94 遺構外出土石器 (6)



図95 遺構外出土石器(7)

磨石・敲石



石錘 I

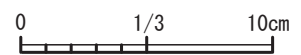
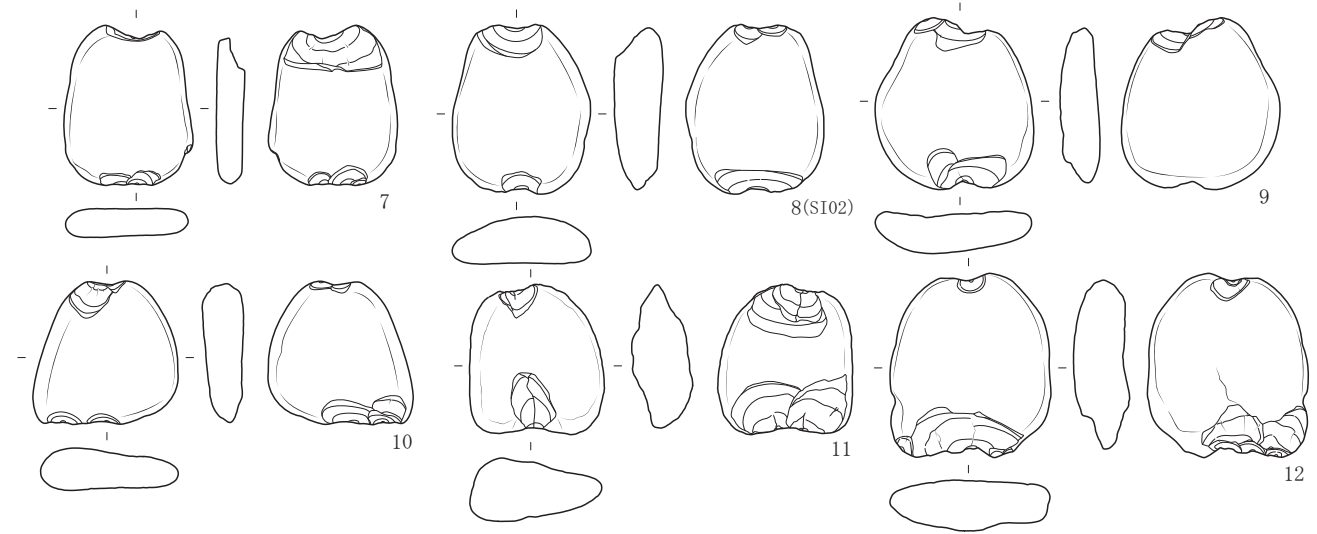


図96 遺構外出土石器 (8)

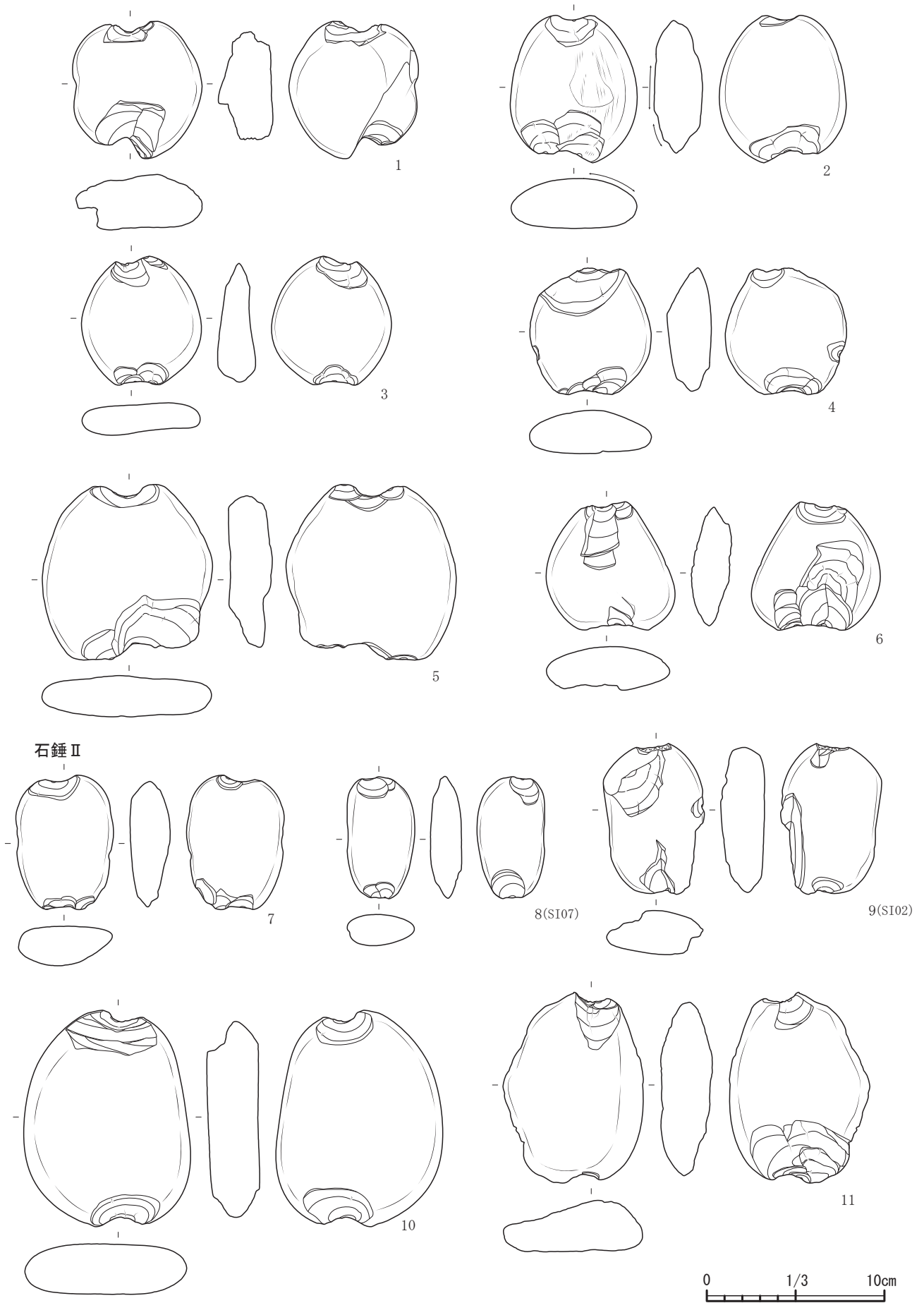


図97 遺構外出土石器(9)

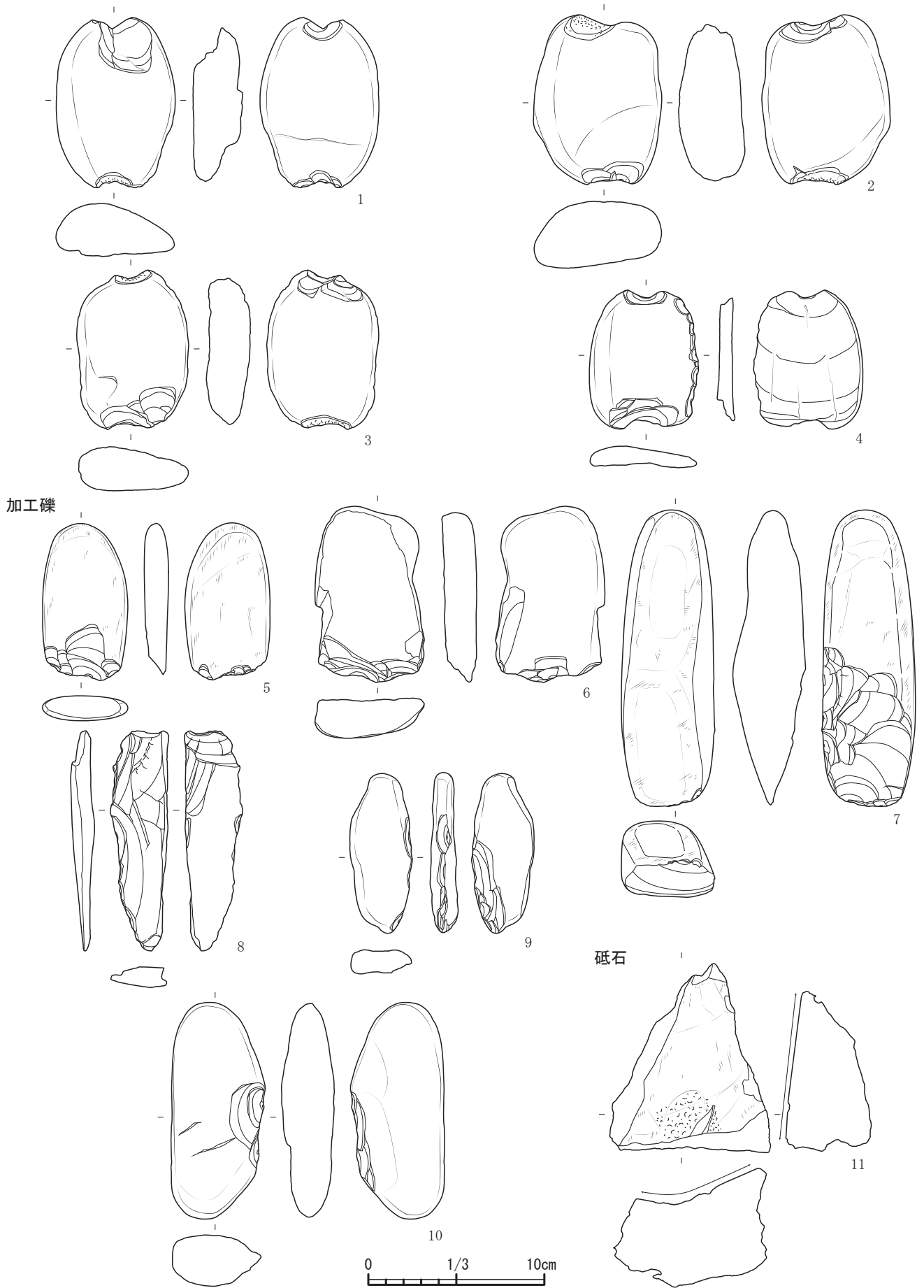
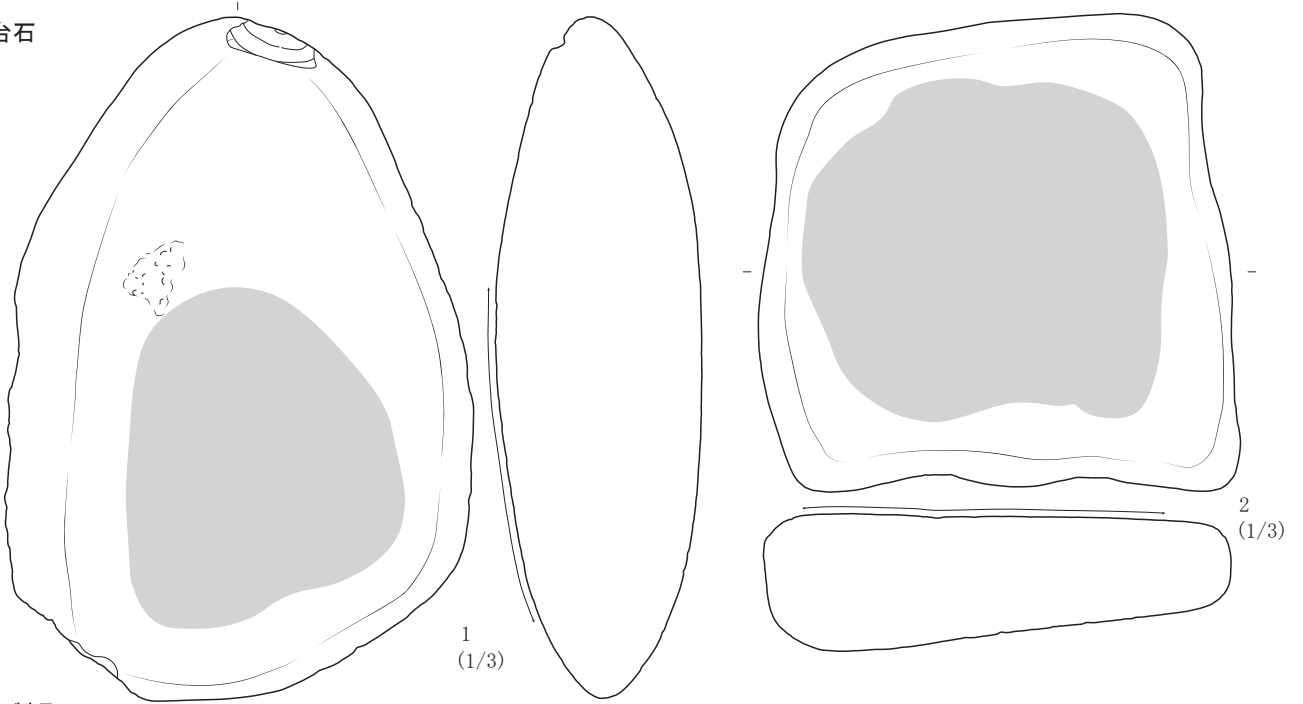
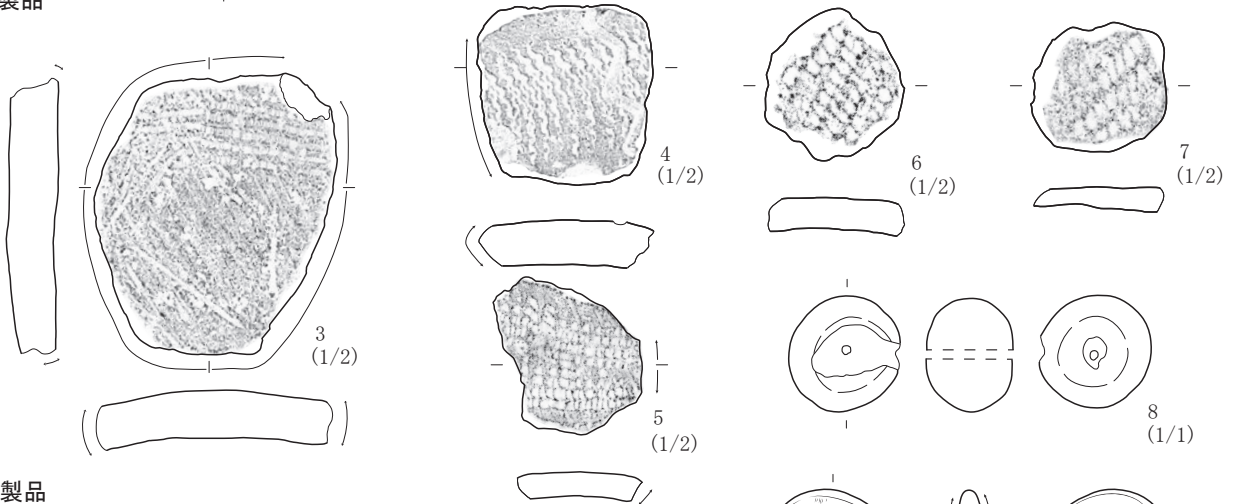


図98 遺構外出土石器 (10)

台石



土製品



石製品

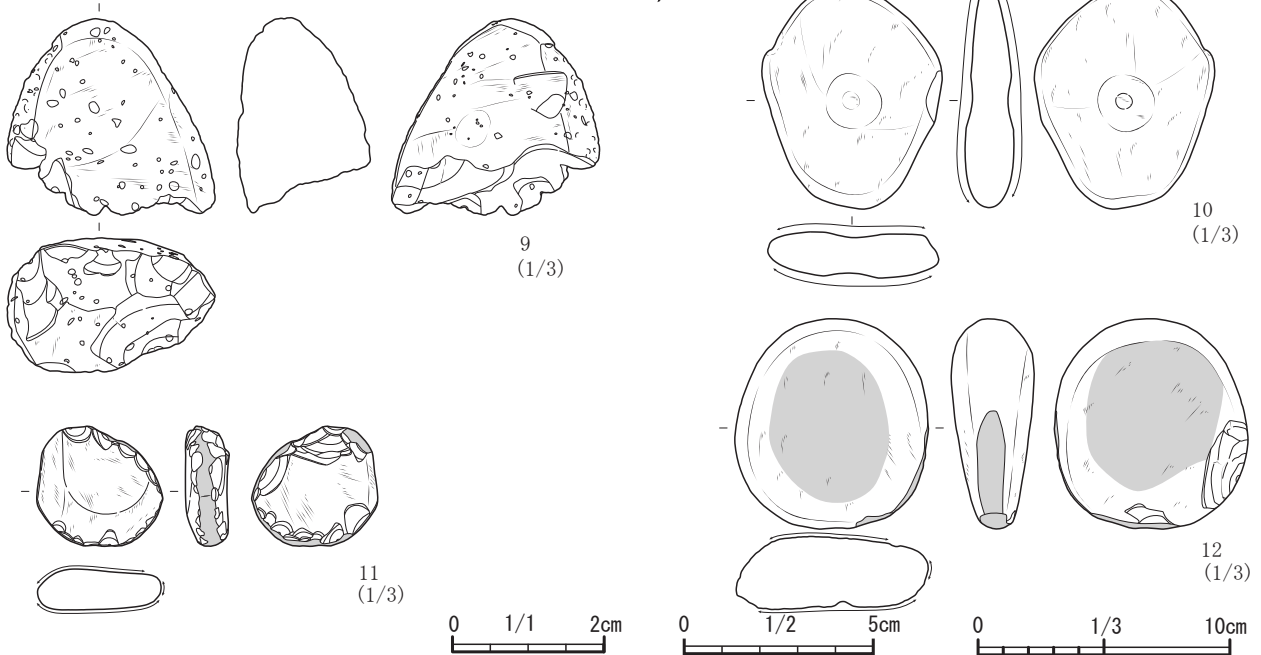


図99 遺構外出土石器 (11)・遺構外出土土製品・遺構外出土石製品

第2章 自然科学分析

第1節 放射性炭素年代測定 1

株式会社パレオ・ラボ

1 はじめに

八戸市の北熊ノ沢(2)遺跡から出土した試料について、加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定を行った。

2 試料と方法

試料は炭化材5点で、SI07からは床直出土(試料No.3:PLD-48758)、3層出土(試料No.5:PLD-48759)、床上出土(試料No.9:PLD-48760)、SK2の3層出土(試料No.14:PLD-48761)の4点、SI06からは床直出土(試料No.16:PLD-48762)の1点である。いずれも最終形成年輪は残存しておらず、部位不明であった。調査所見では、SI07は9世紀後半~10世紀前半、SI06は10世紀後半の遺構と推測されている。

測定試料の情報、調製データは表1のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計(パレオ・ラボ、コンパクトAMS:NEC製 1.5SDH)を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

表1 測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	考古学的手法による推定時期	前処理データ	前処理
PLD-48758	遺構:SI07 位置:床直 遺物No.SI07-C-3 試料No.3	種類:炭化材(ハンノキ属ハンノキ亜属) 試料の性状:最終形成年輪以外、部位不明 状態:dry	9世紀後半~ 10世紀前半	前処理前重量:36.06mg 燃焼量:5.47mg 精製炭素量:3.31mg 炭素回収量:1.02mg	超音波洗浄 有機溶剤処理:アセトン酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム:1.0 mol/L, 塩酸:1.2 mol/L)
PLD-48759	遺構:SI07 位置:3層 遺物No.SI07-C-5 試料No.5	種類:炭化材(コナラ属コナラ節) 試料の性状:最終形成年輪以外、部位不明 状態:dry	9世紀後半~ 10世紀前半	前処理前重量:57.33mg 燃焼量:5.87mg 精製炭素量:3.59mg 炭素回収量:1.02mg	超音波洗浄 有機溶剤処理:アセトン酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム:1.0 mol/L, 塩酸:1.2 mol/L)
PLD-48760	遺構:SI07 位置:床上 遺物No.SI07-C-9 試料No.9	種類:炭化材(コナラ属コナラ節) 試料の性状:最終形成年輪以外、部位不明 状態:dry	9世紀後半~ 10世紀前半	前処理前重量:77.00mg 燃焼量:5.39mg 精製炭素量:3.15mg 炭素回収量:1.04mg	超音波洗浄 有機溶剤処理:アセトン酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム:1.0 mol/L, 塩酸:1.2 mol/L)
PLD-48761	遺構:SI07 SK2 位置:3層 遺物No.SI07-SK2-C-1 試料No.14	種類:炭化材(コナラ属コナラ節) 試料の性状:最終形成年輪以外、部位不明 状態:dry	9世紀後半~ 10世紀前半	前処理前重量:113.91mg 燃焼量:5.50mg 精製炭素量:3.50mg 炭素回収量:1.02mg	超音波洗浄 有機溶剤処理:アセトン酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム:1.0 mol/L, 塩酸:1.2 mol/L)
PLD-48762	遺構:SI06 位置:床直 遺物No.SI06-C-1 試料No.16	種類:炭化材(コナラ属コナラ節) 試料の性状:最終形成年輪以外、部位不明 状態:dry	10世紀後半	前処理前重量:36.08mg 燃焼量:5.53mg 精製炭素量:3.13mg 炭素回収量:0.81mg	超音波洗浄 有機溶剤処理:アセトン酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム:1.0 mol/L, 塩酸:1.2 mol/L)

3 結果

表2に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代、表3に $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を、図1に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代 (yrBP) の算出には、 ^{14}C の半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差 ($\pm 1 \sigma$) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が68.27%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い (^{14}C の半減期5730 \pm 40年) を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正には0xCal4.4 (較正曲線データ: IntCal20) を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、0xCalの確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する68.27%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は95.45%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

表2 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1 \sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1 \sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-48758 試料 No.3 遺物 No.SI07-C-3	-24.13 \pm 0.24	1143 \pm 20	1145 \pm 20	777-779 cal AD (2.33%) 884-898 cal AD (16.71%) 919-957 cal AD (45.21%) 968-973 cal AD (4.02%)	775-785 cal AD (4.90%) 831-850 cal AD (4.18%) 875-978 cal AD (85.80%) 985-989 cal AD (0.57%)
PLD-48759 試料 No.5 遺物 No.SI07-C-5	-25.73 \pm 0.26	1121 \pm 20	1120 \pm 20	892-903 cal AD (11.17%) 913-931 cal AD (18.99%) 941-976 cal AD (38.11%)	889-990 cal AD (95.45%)
PLD-48760 試料 No.9 遺物 No.SI07-C-9	-23.22 \pm 0.28	1122 \pm 21	1120 \pm 20	892-902 cal AD (10.15%) 914-933 cal AD (19.59%) 939-976 cal AD (38.53%)	888-990 cal AD (95.45%)
PLD-48761 試料 No.14 遺物 No.SI07- SK2-C-1	-23.89 \pm 0.22	1194 \pm 20	1195 \pm 20	775-776 cal AD (1.20%) 781-789 cal AD (8.56%) 825-881 cal AD (58.50%)	774-793 cal AD (15.62%) 795-887 cal AD (79.83%)
PLD-48762 試料 No.16 遺物 No.SI06-C-1	-23.09 \pm 0.21	1256 \pm 20	1255 \pm 20	686-742 cal AD (64.74%) 762-764 cal AD (1.34%) 772-774 cal AD (2.19%)	674-753 cal AD (71.51%) 757-775 cal AD (8.38%) 788-827 cal AD (15.55%)

表3 各測定での $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比 (%)

測定番号	PLD-48758	PLD-48759	PLD-48760	PLD-48761	PLD-48762
1	1.0924	1.0903	1.0937	1.0929	1.0940
2	1.0934	1.0913	1.0937	1.0934	1.0946
3	1.0933	1.0914	1.0938	1.0934	1.0944
4	1.0930	1.0914	1.0945	1.0934	1.0944
5	1.0934	1.0918	1.0947	1.0939	1.0946
6	1.0936	1.0918	1.0948	1.0939	1.0947
7	1.0936	1.0920	1.0951	1.0938	1.0946
8	1.0937	1.0921		1.0939	

4 考察

以下、各試料の暦年較正結果のうち 2σ 暦年代範囲 (確率95.45%) に着目して結果を整理する。なお、木材は最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年

輪を測定すると、内側であるほど古い年代が得られる（古木効果）。今回の試料はいずれも最終形成年輪が残存しておらず、残存している最外年輪のさらに外側にも年輪が存在していたはずである。したがって、試料の木が実際に枯死もしくは伐採されたのは、測定結果の年代よりもやや新しい時期であったと考えられる。

SI07の床直の試料No. 3 (PLD-48758) は、775-785 cal AD (4.90%)、831-850 cal AD (4.18%)、875-978 cal AD (85.80%)、985-989 cal AD (0.57%) の暦年代範囲を示した。これは、8世紀後半～10世紀後半で、奈良時代から平安時代中期に相当する。3層出土の試料No. 5 (PLD-48759) は889-990 cal AD (95.45%)、床上出土の試料No. 9 (PLD-48760) は888-990 cal AD (95.45%) の暦年代範囲を示した。どちらも9世紀後半～10世紀後半で、平安時代前期から中期に相当する。また、Pit2の3層の試料No. 14 (PLD-48761) は、774-793 cal AD (15.62%) および795-887 cal AD (79.83%) の暦年代範囲を示した。これは、8世紀後半～9世紀後半で、奈良時代から平安時代前期に相当する。

SI06の床直の試料No. 16 (PLD-48762) は、674-753 cal AD (71.51%)、757-775 cal AD (8.38%)、788-827 cal AD (15.55%) の暦年代範囲を示した。これは、7世紀後半～9世紀前半で、飛鳥時代～平安時代前期に相当する。

調査所見によるSI07の推定時期は9世紀後半～10世紀前半であり、SI07の試料の測定結果はいずれも整合的であった。SI06は10世紀後半の遺構と推測されているが、測定結果は7世紀後半～9世紀前半で、古木効果の影響を考慮する必要があるが、130年以上古い値であった。

(パレオ・ラボAMS年代測定グループ)

伊藤 茂・加藤和浩・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・Zaur Lomtadze・黒沼保子)

参考文献

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51(1), 337-360.

中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の¹⁴C年代編集委員会編「日本先史時代の¹⁴C年代」日本第四紀学会, 3-20.

Reimer, P.J., Austin, W.E.N., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., Manning, S.W., Muscheler, R., Palmer, J.G., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Turney, C.S.M., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen, U., Capano, M., Fahrni, S.M., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A. and Talamo, S. (2020) The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP). *Radiocarbon*, 62(4), 725-757, doi:10.1017/RDC.2020.41. <https://doi.org/10.1017/RDC.2020.41> (cited 12 August 2020)

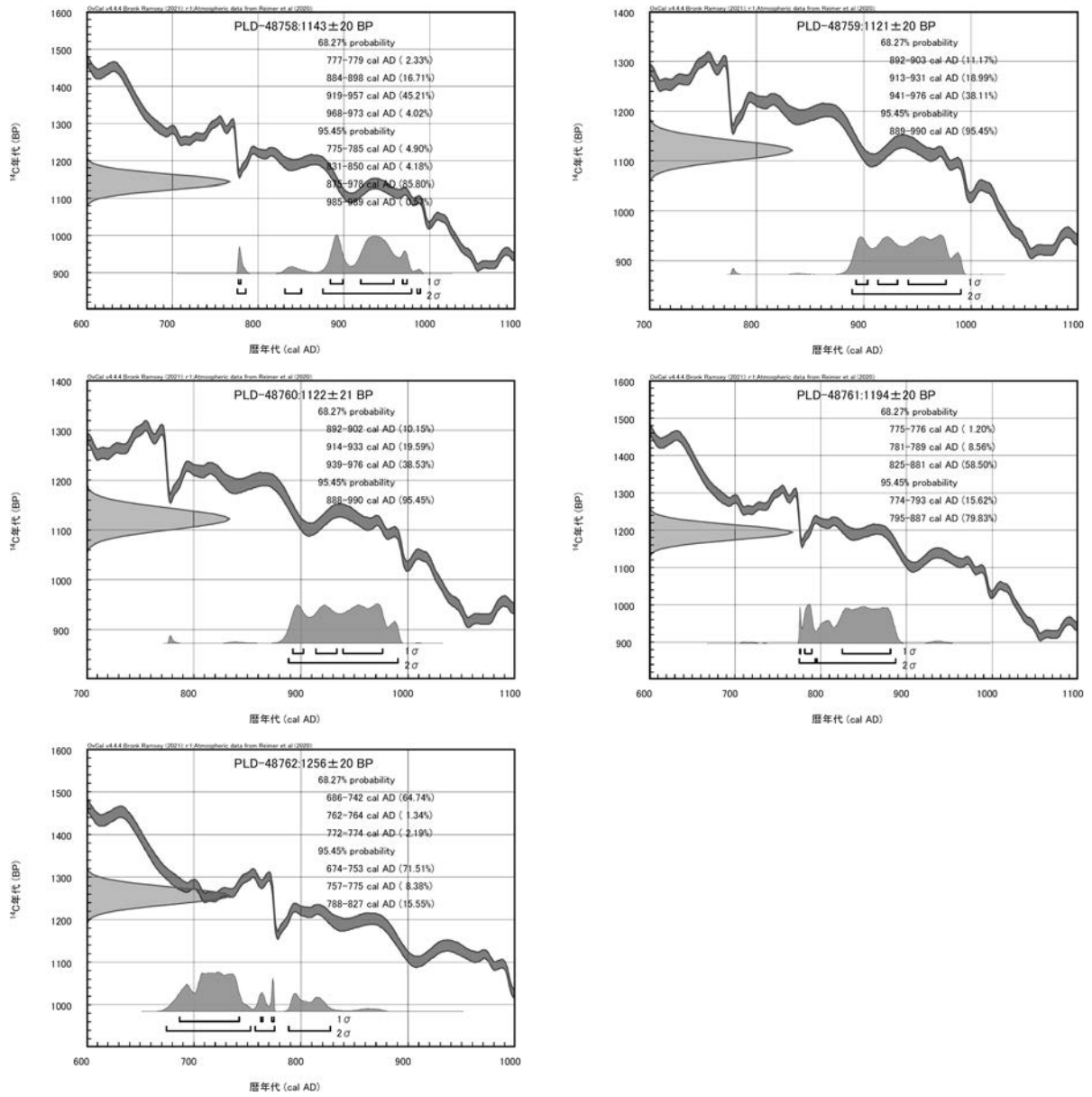


図1 暦年校正結果

第2節 放射性炭素年代測定2

株式会社パレオ・ラボ

1 はじめに

八戸市の北熊ノ沢(2)遺跡から出土した炭化材について、加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定を行った。

2 試料と方法

試料は、SI01から2点、SI04とSI09から各1点の、合計4点である。いずれも最終形成年輪は残存しておらず、部位不明であった。調査所見による遺構の推定時期は、SI01とSI09が9世紀後半～10世紀前半、SI04が平安時代である。

測定試料の情報、調製データは表1のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計(パレオ・ラボ、コンパクトAMS:NEC製1.5SDH)を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

表1 測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	考古学的手法による推定時期	前処理データ	前処理
PLD-49995	遺構:SI01 層位:床直 遺物 No.SI01-C-3 試料 No.3	種類:炭化材(コナラ属コナラ節) 試料の性状:最終形成年輪以外、 部位不明 状態:dry	9世紀後半～ 10世紀前半	前処理前重量:33.18mg 燃焼量:5.50mg 精製炭素量:3.10mg 炭素回収量:0.95mg	超音波洗浄 有機溶剤処理:アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム:1.0 mol/L, 塩酸:1.2 mol/L)
PLD-49808	遺構:SI01 層位:4層 遺物 No.SI01-C-8 試料 No.7	種類:炭化材(コナラ属コナラ節) 試料の性状:最終形成年輪以外、 部位不明 状態:dry	9世紀後半～ 10世紀前半	前処理前重量:104.97mg 燃焼量:5.72mg 精製炭素量:3.23mg 炭素回収量:0.99mg	超音波洗浄 有機溶剤処理:アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム:1.0 mol/L, 塩酸:1.2 mol/L)
PLD-49810	遺構:SI09 層位:床直 遺物 No.SI09⑧ (炭化材19) 試料 No.16	種類:炭化材(コナラ属コナラ節) 試料の性状:最終形成年輪以外、 部位不明 状態:dry	9世紀後半～ 10世紀前半	前処理前重量:109.61mg 燃焼量:5.38mg 精製炭素量:3.16mg 炭素回収量:0.97mg	超音波洗浄 有機溶剤処理:アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム:1.0 mol/L, 塩酸:1.2 mol/L)
PLD-49811	遺構:SI04 層位:床直 遺物 No.SI04-C-6 試料 No.17	種類:炭化材(コナラ属コナラ節) 試料の性状:最終形成年輪以外、 部位不明 状態:dry	平安時代	前処理前重量:84.95mg 燃焼量:5.73mg 精製炭素量:3.48mg 炭素回収量:0.94mg	超音波洗浄 有機溶剤処理:アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム:1.0 mol/L, 塩酸:1.2 mol/L)

3 結果

表2に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代、図1に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代(yrBP)の算出には、 ^{14}C の半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差($\pm 1\sigma$)は、測定の統

表2 放射性炭素年代測定および暦年校正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年時代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-49995 試料 No.3	-25.96 \pm 0.18	1232 \pm 20	1230 \pm 20	706-725 cal AD (15.57%)	690-696 cal AD (1.24%)
				773-775 cal AD (1.80%)	703-741 cal AD (23.92%)
				788-828 cal AD (45.09%)	772-776 cal AD (2.30%)
				859-869 cal AD (5.81%)	784-880 cal AD (67.99%)
PLD-49808 試料 No.7	-25.83 \pm 0.17	1113 \pm 19	1115 \pm 20	894-926 cal AD (33.12%)	892-991 cal AD (95.45%)
				948-978 cal AD (33.52%)	
				986-988 cal AD (1.63%)	
PLD-49810 試料 No.16	-27.36 \pm 0.17	1083 \pm 19	1085 \pm 20	899-918 cal AD (24.83%)	894-927 cal AD (31.35%)
				959-966 cal AD (6.58%)	945-996 cal AD (55.34%)
				974-994 cal AD (36.86%)	1003-1020 cal AD (8.76%)
PLD-49811 試料 No.17	-27.62 \pm 0.16	1165 \pm 21	1165 \pm 20	775-787 cal AD (13.17%)	774-790 cal AD (14.69%)
				829-855 cal AD (20.31%)	804-810 cal AD (0.85%)
				873-894 cal AD (21.27%)	820-900 cal AD (56.32%)
				927-946 cal AD (13.52%)	917-963 cal AD (22.17%)
					966-974 cal AD (1.41%)

計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が68.27%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5568年として算

出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い(^{14}C の半減期 5730 ± 40 年)を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正には0xCal14.4(較正曲線データ: IntCal20)を使用した。なお、1 σ 暦年代範囲は、0xCal1の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する68.27%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2 σ 暦年代範囲は95.45%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

4 考察

以下、各試料の暦年較正結果のうち2 σ 暦年代範囲(確率95.45%)に着目して結果を整理する。

SI01の試料 No.3(遺物 No. SI01-C-3: PLD-49995)は、690-696 cal AD (1.24%)、703-741 cal AD (23.92%)、772-776 cal AD (2.30%)、784-880 cal AD (67.99%)で7世紀末~9世紀後半の暦年代を示した。試料 No.7(遺物 No. SI01-C-8: PLD-49808)は、892-991 cal AD (95.45%)で、9世紀末~10世紀末の暦年代を示した。どちらも遺構の推定時期(9世紀後半~10世紀前半)に対して整合的であった。

SI09の試料 No.16(遺物 No. SI09⑧(炭化材19): PLD-49810)は、894-927 cal AD (31.35%)、945-996 cal AD (55.34%)、1003-1020 cal AD (8.76%)で、9世紀末~11世紀前半の暦年代を示し

表3 各測定での $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比(%)

測定番号	PLD-49995	PLD-49808	PLD-49810	PLD-49811
1	1.0950	1.0941	1.0921	1.0923
2	1.0946	1.0943	1.0927	1.0925
3	1.0944	1.0944	1.0926	1.0926
4	1.0943	1.0944	1.0929	1.0927
5	1.0942	1.0948	1.0932	1.0925
6	1.0939	1.0943	1.0928	1.0922
7	1.0940	1.0942	1.0927	1.0924
8	1.0944	1.0945	1.0928	1.0924
9	1.0945	1.0947	1.0928	1.0924
10	1.0941	1.0946	1.0927	-
11	1.0940	1.0947	1.0927	-

た。今回の測定結果は、遺構の推定時期（9世紀後半～10世紀前半）に対して整合的であった。

SI04の試料 No. 17（遺物 No. SI04-C-6 : PLD-49811）は、774-790 cal AD (14.69%)、804-810 cal AD (0.85%)、820-900 cal AD (56.32%)、917-963 cal AD (22.17%)、966-974 cal AD (1.41%) で、8世紀後半～10世紀後半の暦年代を示した。これは奈良時代～平安時代中期で、遺構の推定時期（平安時代）に対して整合的である。

なお、木材の場合、最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると内側であるほど古い年代が得られる（古木効果）。今回の試料は、いずれも最終形成年輪が残存しておらず、残存している最外年輪のさらに外側にも年輪が存在していたはずである。したがって、木が実際に枯死もしくは伐採されたのは、測定結果の年代よりもやや新しい時期であったと考えられる。

（パレオ・ラボAMS年代測定グループ

伊藤 茂・加藤和浩・廣田正史・佐藤正教・山形秀樹・Zaur Lomtavidze・黒沼保子）

参考文献

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51(1), 337-360.

中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の¹⁴C年代編集委員会編「日本先史時代の¹⁴C年代」: 3-20, 日本第四紀学会.

Reimer, P.J., Austin, W.E.N., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., Manning, S.W., Muscheler, R., Palmer, J.G., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Turney, C.S.M., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen, U., Capano, M., Fahrni, S.M., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A. and Talamo, S. (2020) The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP). *Radiocarbon*, 62(4), 725-757, doi:10.1017/RDC.2020.41. <https://doi.org/10.1017/RDC.2020.41> (cited 12 August 2020)

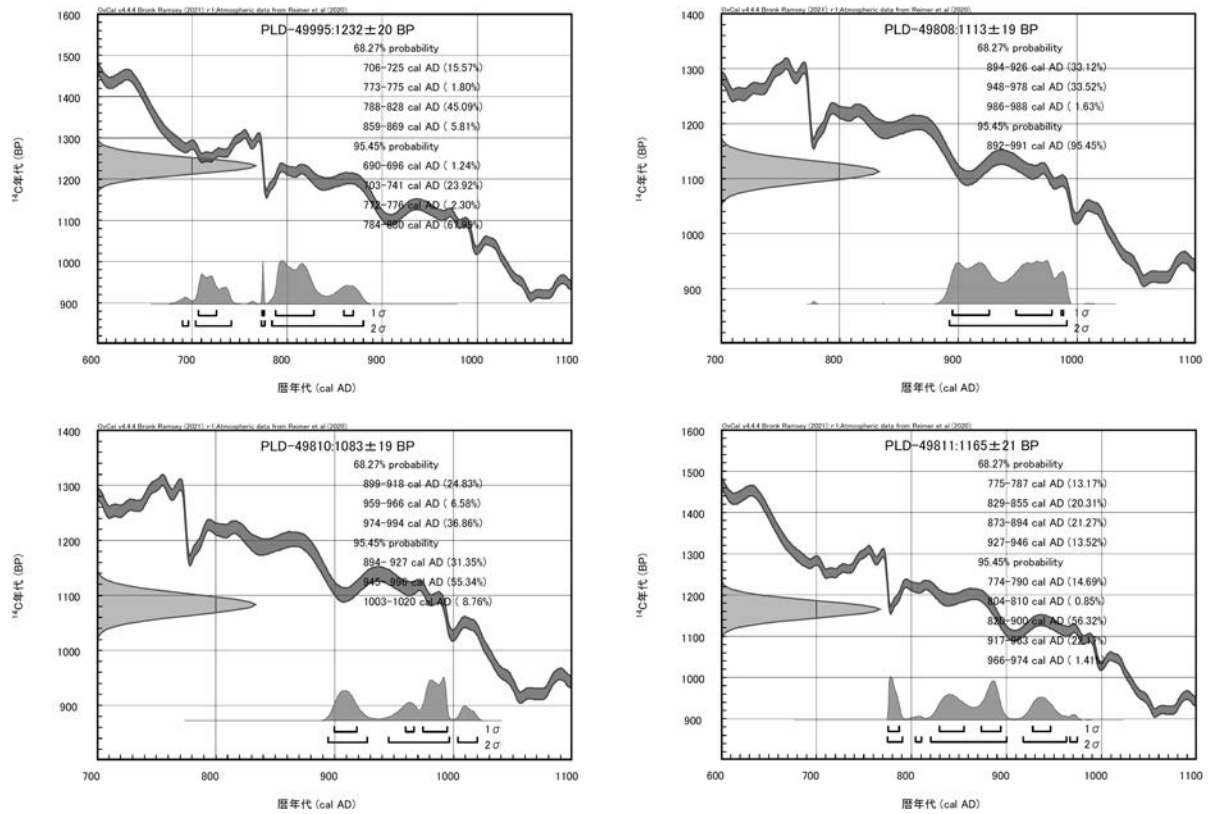


図1 暦年校正結果

第3節 放射性炭素年代測定 3

株式会社 加速器分析研究所

1 測定対象試料

北熊ノ沢(2)遺跡は、青森県八戸市大字尻内町字北熊ノ沢（北緯40° 31' 47"、東経141° 25' 42"）に所在し、検出された遺構は五戸川と馬淵川に挟まれた段丘面（標高57～59m）に立地する。測定対象試料は、土坑SK26から出土した鉄滓に噛み込まれた木炭1点である（表3）。試料の年代は、出土土器から9世紀後葉～10世紀前葉と推定される。

2 測定の意義

調査区内に位置する複数の竪穴建物跡と鍛冶作業の関連を明らかにする。

3 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、付着物、混入物を取り除き、必要量の試料を採取、乾燥させ、秤量する（表1「処理前試料量」）。
- (2) 酸-アルカリ-酸（AAA:Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させ、秤量する（表1「処理後試料量」）。AAA処理における酸処理では、通常1 mol/l（1M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。
- (3) 必要量を採取、秤量（表1「燃焼量」）した試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO₂）を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製、定量する。この二酸化炭素中の炭素相当量を算出する（表1「精製炭素量」）。
- (5) 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。
- (6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

表1 試料の処理状況

測定番号	試料名	処理前試料量 (mg)	処理後試料量 (mg)	燃焼量 (mg)	精製炭素量 (mg)
IAAA-230683	No. 1	25.45	14.00	4.63	3.12

4 測定方法

加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置（NEC社製）を使用し、¹⁴Cの計数、¹³C濃度（¹³C/¹²C）、¹⁴C濃度（¹⁴C/¹²C）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx II）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。測定回数、¹⁴Cカウント数、¹³C/¹²C比を表2に示す。

表2 試料のAMS測定状況

測定番号	試料名	測定回数	¹⁴ C Count	¹³ C/ ¹² C (%)
IAAA-230683	No. 1	13	161962	1.1045

5 算出方法

- (1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (‰) で表した値である (表 3)。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2) ^{14}C 年代 (Libby Age:yrBP、表 3) は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年 (0yrBP) として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期 (5568年) を使用し、 $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する (Stuiver and Polach 1977)。 ^{14}C 年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、 ^{14}C 年代の誤差 ($\pm 1\sigma$) は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。
- (3) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMCが小さい (^{14}C が少ない) ほど古い年代を示し、pMCが100以上 (^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上) の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正されている (表 3)。
- (4) 暦年較正年代 (または単に較正年代) とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差 ($1\sigma = 68.3\%$) あるいは2標準偏差 ($2\sigma = 95.4\%$) で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない ^{14}C 年代値である (表 4の「暦年較正用 (yrBP)」。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal20較正曲線 (Reimer et al. 2020) を用い、OxCalv4.4較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した。暦年較正の結果を表 4 ($1\sigma \cdot 2\sigma$ 暦年代範囲) に示す。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。今後、較正曲線やプログラムが更新された場合、「暦年較正用 (yrBP)」の年代値を用いて較正し直すことが可能である。

6 測定結果

測定結果を表 3、4 に示す。

試料の ^{14}C 年代は $1190 \pm 20\text{yrBP}$ 、暦年較正年代 (1σ) は778~885cal ADの間に2つの範囲で示される。推定される年代に重なる値となっている。

今回測定された試料は木炭で、樹皮は確認されていないことから、以下に記す古木効果を考慮する必要がある。

樹木は外側に年輪を形成しながら成長するため、その木が伐採等で死んだ年代を示す試料は最外年輪から得られ、内側の試料は年輪数の分だけ古い年代値を示す (古木効果)。今回測定された試料は樹皮が残存せず、本来の最外年輪を確認できないことから、測定された年代値は、その木が死んだ年代よりも古い可能性がある。

試料の炭素含有率は67%の十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

引用文献

Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51(1), 337-360

Reimer, P.J. et al. 2020 The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP), Radiocarbon 62(4), 725-757

Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, Radiocarbon 19(3), 355-363

表3 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 、 ^{14}C 年代 (Libby Age)、pMC)

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-230683	No.1	SK26 覆土	木炭	AAA	-26.54 ± 0.21	$1,190 \pm 20$	86.27 ± 0.24

[IAA登録番号: # C147]

表4 放射性炭素年代測定結果 (暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代)

測定番号	試料名	暦年較正用 (yrBP)	較正条件	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
IAAA-230683	No.1	$1,186 \pm 21$	OxCal v4.4 IntCal20	778calAD - 788calAD (9.9%) 827calAD - 885calAD (58.4%)	772calAD - 893calAD (95.4%)

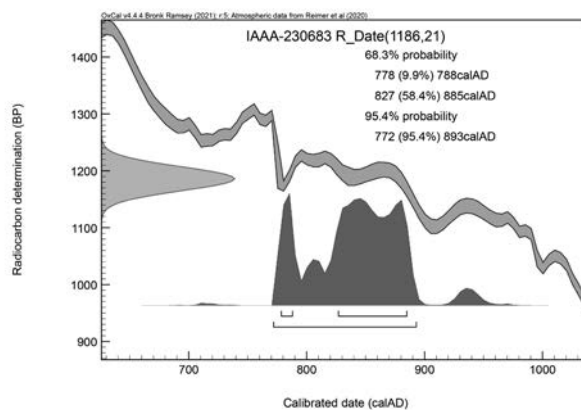


図1 暦年校正年代グラフ

第4節 出土炭化材の樹種同定 1

株式会社パレオ・ラボ

1 はじめに

八戸市の北熊ノ沢(2)遺跡から出土した炭化材の樹種同定を行った。なお、一部の試料については放射性炭素年代測定も行われている(第2章第1節参照)。

2 試料と方法

試料は、SI06から出土した炭化材1点と、SI07から出土した炭化材15点の、合計16点である。遺構の時期は、SI06が10世紀後半、SI07が9世紀後半～10世紀前半と推測されている。

樹種同定に先立ち、肉眼観察と実体顕微鏡観察による形状の確認と、残存径の計測を行った。その後、カミソリまたは手で3断面(横断面・接線断面・放射断面)を割り出し、試料台に試料を両面テープで固定した。次に、イオンスパッタで金コーティングを施し、走査型電子顕微鏡(KEYENCE社製VHX-D510)を用いて樹種の同定と写真撮影を行った。

3 結果

樹種同定の結果、広葉樹のクリとコナラ属コナラ節

(以下、コナラ節)、クリ-コナラ節、ハンノキ属ハンノキ亜属(以下、ハンノキ亜属)、単子葉類のイネ科の、5分類群が確認された。遺構別の樹種同定結果を表1、結果の一覧を付表に示す。

樹種 / 遺構	SI06	SI07	合計
		SK2	
クリ	1	1	2
コナラ属コナラ節	1	9	11
クリ-コナラ節		1	1
ハンノキ属ハンノキ亜属		1	1
イネ科		1	1
合計	1	13	16

以下に、同定根拠となった木材組織の特徴を記載し、走査型電子顕微鏡写真を図版に示す。

(1) クリ *Castanea crenata* Siebold et Zucc. ブナ科 図版1 1a-1c (整理番号10)

大型の道管が年輪のはじめに数列並び、晩材部では薄壁で角張った小道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で、主に単列である。

クリは暖帯から温帯下部に分布する落葉高木である。材は重硬で、耐朽性および耐湿性に優れ、保存性が高い。

(2) コナラ属コナラ節 *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科 図版1 2a-2c (整理番号6)、3a (整理番号9)、4a (整理番号12)、5a (整理番号16)

大型の道管が年輪のはじめに1列程度並び、晩材部では薄壁で角張った小道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で、単列と広放射組織の2種類がある。

コナラ節は暖帯から温帯下部に分布する落葉高木で、カシワとミズナラ、コナラ、ナラガシワがある。材は全体的に重硬で、加工困難である。

(3) クリ - コナラ属コナラ節 *Castanea crenata* Siebold et Zucc. - *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科
図版1 6a-6c (整理番号4)

晩材部において薄壁で角張った小道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で、主に単列である。試料が1年輪未満で小さく、早材部の道管配列や広放射組織の有無が確認できなかった。

(4) ハンノキ属ハンノキ亜属 *Alnus* subgen. *Alnus* カバノキ科 図版1 7a-7c (整理番号3)

小型の道管が放射方向に数個複合して分布する散孔材である。軸方向柔組織は短接線状もしくは散在状となる。道管の穿孔は10~20段程度の階段状である。放射組織は単列同性で、集合放射組織が存在する。

ハンノキ亜属は主に温帯に分布する落葉高木または低木で、ハンノキやヤマハンノキなど7種がある。材は全般に硬さおよび重さが中庸で、加工は容易である。

(5) イネ科 Poaceae 図版1 8a (整理番号2)

柔細胞と維管束で構成される単子葉類である。維管束が柔細胞中に散在する不斉中心柱で、維管束を囲む維管束鞘は薄い。稈の組織のみから属や種を識別するのは難しい。

4 考察

SI06から出土した炭化材はコナラ節、SI07から出土した炭化材はクリとコナラ節、ハンノキ亜属、イネ科であった。クリとコナラ節の材は重硬で、ハンノキ亜属の材は硬さ中庸である(平井, 1996)。いずれも建築部材と推測されており、一部の試料は板材と思われ、木取りは柾目であった。

青森県内で出土している古代の建築部材では、クリとコナラ節、スギが多く確認されている(伊東・山田編, 2012)。今回の樹種同定結果も同様の傾向を示しており、周辺地域の木材利用傾向と一致する。

(黒沼 保子)

引用・参考文献

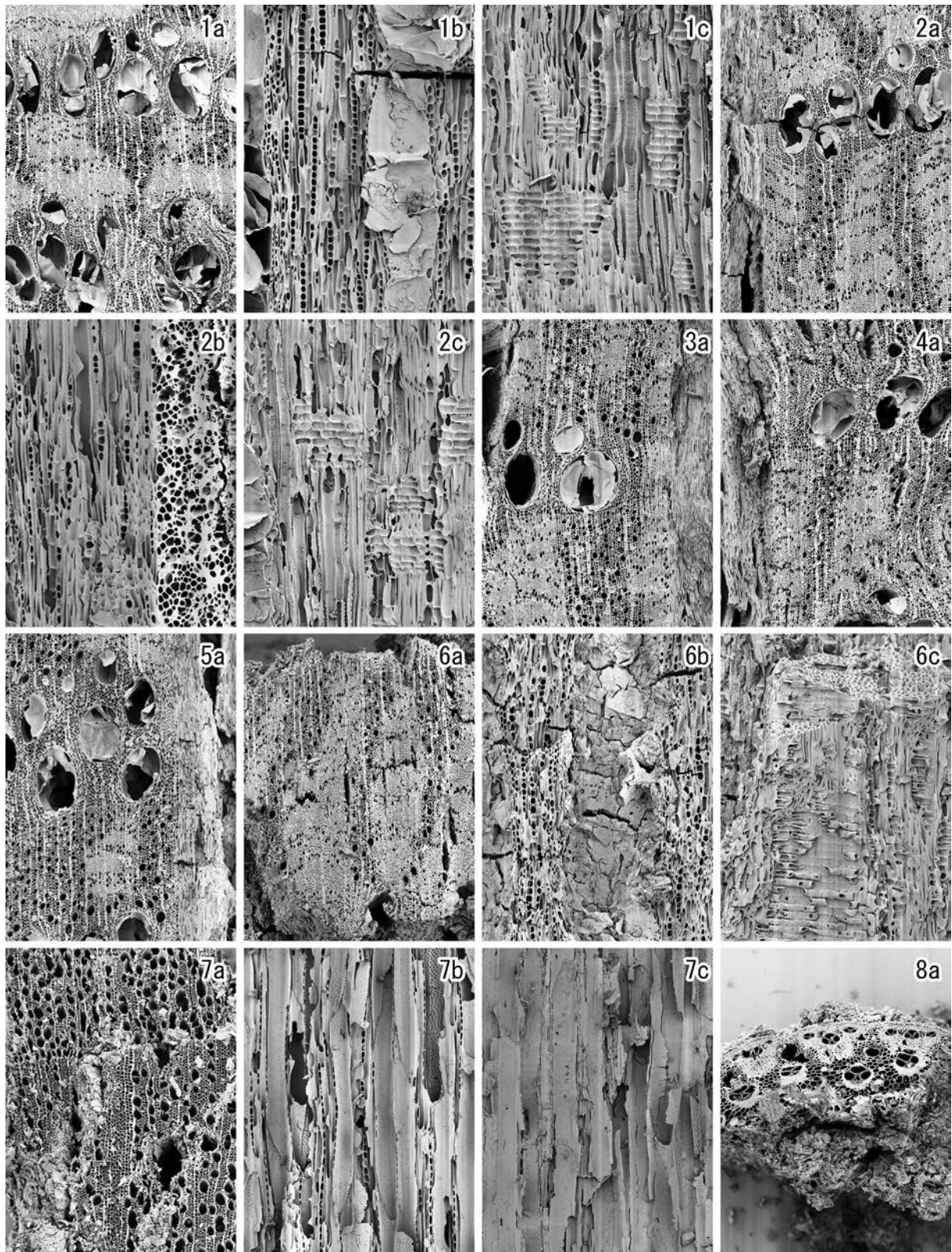
平井信二(1996) 木の大本科. 394p, 朝倉書店.

伊東隆夫・山田昌久編(2012) 木の考古学—出土木製品用材データベース—. 449p, 海青社.

伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和穂(2011) 日本有用樹木誌. 238p, 海青社.

付表 樹種同定結果一覧

整理番号	遺構	層位	取上番号	推定部位	樹種	木取り・部位	残存径 (cm)	現場所見	年代測定番号
1	SI07	床上	SI07-C-1	壁材の押え	コナラ属コナラ節	柾目	2.0 × 6.0	板材?	
2	SI07	床上	SI07-C-2	不明	イネ科	稈(破片)	-	細片?	
3	SI07	床直	SI07-C-3	壁材の押え or 梁 or 桁	ハンノキ属ハンノキ亜属	柾目	1.0 × 2.5	板材?	PLD-48758
4	SI07	床直	SI07-C-4	壁材の押え	クリ - コナラ節	不明(破片)	0.5 × 0.3	板材?	
5	SI07	3層	SI07-C-5	不明	コナラ属コナラ節	不明(破片)	1.0 × 1.3	丸材 or 半割材	PLD-48759
6	SI07	床上	SI07-C-6	不明	コナラ属コナラ節	不明(破片)	2.5 × 1.0	板材?	
7	SI07	3層	SI07-C-7	不明	コナラ属コナラ節	不明(破片)・節	2.0 × 2.0	塊状、直下に焼土	
8	SI07	3層	SI07-C-8	野地板	コナラ属コナラ節	不明(破片)	1.0 × 3.0	塊状	
9	SI07	床上	SI07-C-9	不明	コナラ属コナラ節	柾目	8.0 × 3.0	板材、一部焼土が被る箇所あり、直下に焼土	PLD-48760
10	SI07	3層	SI07-C-10	不明	クリ	不明(破片)	2.0 × 3.0	SI07-C-9より上のレベル、直下に焼土	
11	SI07	3層	SI07-C-11	不明	コナラ属コナラ節	不明(破片)	3.0 × 2.0	焼土の下にのめりこむ	
12	SI07	3層	SI07-C-12	不明	コナラ属コナラ節	不明(破片)	1.0 × 3.0	直下に焼土	
13	SI07	床上	SI07-C-13	不明	コナラ属コナラ節	不明(破片)	3.0 × 5.0	板材?、直下に焼土	
14	SI07SK2	3層	SI07-SK2-C-1	不明	コナラ属コナラ節	不明(破片)	1.0 × 3.0	焼土層	PLD-48761
15	SI07SK2	3層	SI07-SK2-C-2	不明	クリ	不明(破片)	1.0 × 2.0	焼土層	
16	SI06	床上	SI06-C-1	不明	コナラ属コナラ節	不明(破片)	1.0 × 5.0	周囲に焼土	PLD-48762



図版1 炭化材の走査型電子顕微鏡写真

1a-1c. クリ(整理番号10)、2a-2c. コナラ属コナラ節(整理番号6)、3a. コナラ属コナラ節(整理番号9)、4a. コナラ属コナラ節(整理番号12)、5a. コナラ属コナラ節(整理番号16)、6a-6c. クリ-コナラ節(整理番号4)、7a-7c. ハンノキ属ハンノキ亜属(整理番号3)、8a. イネ科(整理番号2) a:横断面、b:接線断面、c:放射断面

第5節 出土炭化材の樹種同定2

株式会社パレオ・ラボ

1 はじめに

八戸市の北熊ノ沢(2)遺跡から出土した炭化材の樹種同定を行った。なお、一部の試料については、放射性炭素年代測定も行われている(第2章第2節参照)。

2 試料と方法

試料は炭化材17点で、SI01から8点、SI04から1点、SI09から8点である。調査所見による遺構の推定時期は、SI01とSI09が9世紀後半～10世紀前半、SI04が平安時代であり、放射性炭素年代測定でも整合的な年代が得られている。

樹種同定に先立ち、肉眼観察と実体顕微鏡観察による形状の確認と、残存年輪数および残存径の計測を行った。その後、カミソリまたは手で3断面(横断面・接線断面・放射断面)を割り出し、試料台に試料を両面テープで固定した。次に、イオンスパッタで金コーティングを施し、走査型電子顕微鏡(KEYENCE社製 VHX-D510)を用いて樹種の同定と写真撮影を行った。

3 結果

樹種同定の結果、広葉樹のクリとコナラ属コナラ節(以下、表1 遺構別の樹種同定結果
コナラ節)が確認された。この他に、有機物は残存して
ないが草本と思われる圧痕状の試料が1点確認された。結
果を付表に示す。

以下に、同定根拠となった木材組織の特徴を記載し、走
査型電子顕微鏡写真を図版に示す。

樹種	遺構			合計
	SI01 9世紀後半～ 10世紀前半	SI09 平安 時代	SI04	
クリ	1	1		2
コナラ属コナラ節	6	7	1	14
草本?	1			1
合計	8	8	1	17

(1) クリ *Castanea crenata* Siebold et Zucc. ブナ科 図版1 1a-1c (整理番号2)

大型の道管が年輪のはじめに数列並び、晩材部では薄壁で角張った小道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で、主に単列である。

クリは暖帯から温帯下部に分布する落葉高木である。材は重硬で、耐朽性および耐湿性に優れ、保存性が高い。

(2) コナラ属コナラ節 *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科 図版1 2a (整理番号3)、3a (整理番号17)

大型の道管が年輪のはじめに1列程度並び、晩材部では薄壁で角張った小道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で、単列と広放射組織の2種類がある。

コナラ節は暖帯から温帯下部に分布する落葉高木で、カシワとミズナラ、コナラ、ナラガシワがある。材は全体的に重硬で、加工困難である。

(3) 草本? herbaceous plant? 図版1 4b (整理番号8)

植物の茎と思われる直径0.2~0.5mmほど直線的な筋の痕跡がみられたが、植物自体は残存しておらず、植物組織も確認できなかった。

4 考察

遺構別の樹種同定結果を表1に示す。SI01ではコナラ節が6点と、クリと草本?が各1点確認された。SI09ではコナラ節が7点とクリが1点確認された。SI04ではコナラ節が確認された。炭化材の形状は、不明の試料が多いが、板状や棒状の試料も多数確認された。

青森県内の遺跡において古代の住居跡から出土した炭化材では、クリやコナラ節を中心とした広葉樹が多く確認されている(伊東・山田編, 2012)。今回の分析結果もコナラ節を中心とした樹種構成であり、周辺地域の木材利用傾向と類似している。(黒沼 保子)

引用・参考文献

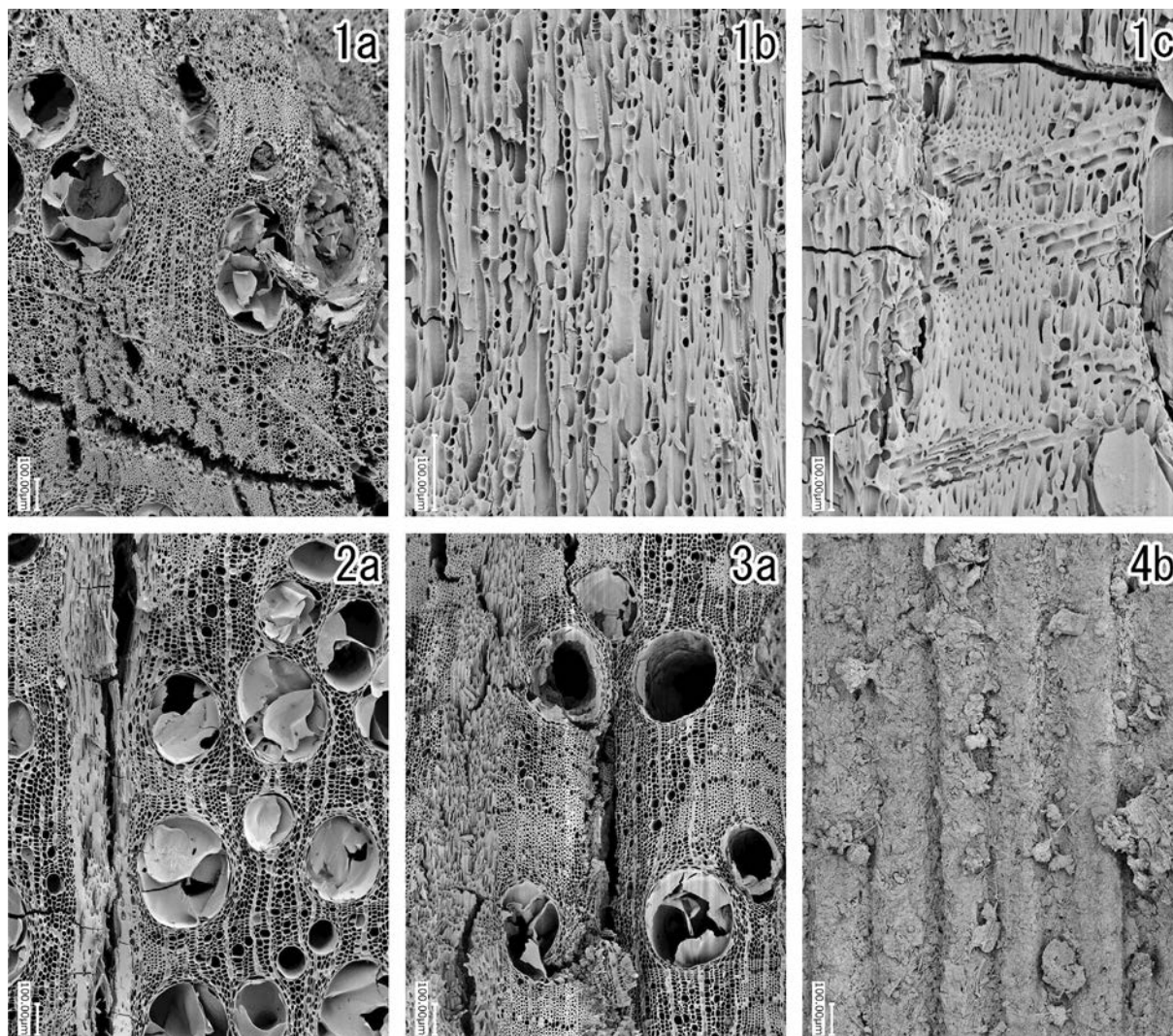
平井信二(1996)木の大本科, 394p, 朝倉書店.

伊東隆夫・山田昌久編(2012)木の考古学—出土木製品用材データベース—. 449p, 海青社.

伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和穂(2011)日本有用樹木誌, 238p, 海青社.

付表 樹種同定結果一覧

整理番号	遺構	層位	取上番号	所見	樹種	形状	残存径 (cm、最大)	年代測定 番号	推定時期
1	SI01	床直	SI01-C-1	SI01-C-2 と 直行、板状	コナラ属コナラ節	不明	1.5×5.0		9世紀後半～ 10世紀前半
2	SI01	床直	SI01-C-2	SI01-C-1 と 直行、板状	クリ	破片	2.0×2.0		
3	SI01	床直	SI01-C-3	直下に焼土、 板状	コナラ属コナラ節	破片	1.5×2.0	PLD-49995	
4	SI01	4層	SI01-C-4	板状、半割 材?	コナラ属コナラ節	みかん割り状	半径3.3		
5	SI01	4層	SI01-C-5	板状	コナラ属コナラ節	柁目状	2.0×9.0		
6	SI01	床直	SI01-C-7	板状	コナラ属コナラ節	みかん割り状	半径3.0		
7	SI01	4層	SI01-C-8	棒状	コナラ属コナラ節	不明	1.5×1.5	PLD-49808	
8	SI01	床直	SI01-C-11	上に焼土、 草本類、屋 根材?	草本?	不明	直径0.3?		
9	SI09	5層	SI09 ①(炭化材1)	板材(100× 50×5cm)	コナラ属コナラ節	破片	1.0×2.5		
10	SI09	床直	SI09 ②(炭化材8)	棒状	コナラ属コナラ節	柁目状	2.0×6.5		
11	SI09	床直	SI09 ③(炭化材10)	板状	コナラ属コナラ節	不明	2.0×3.0?		
12	SI09	床直	SI09 ④(炭化材4)	棒状	コナラ属コナラ節	柁目状	1.0×3.0		
13	SI09	床直	SI09 ⑤(炭化材22)	板材	クリ	柁目状	7.0×2.5		
14	SI09	床直	SI09 ⑥(炭化材29)	棒状	コナラ属コナラ節	角材?	2.5×4.0		
15	SI09	床直	SI09 ⑦(炭化材25)	棒状	コナラ属コナラ節	不明	1.0×1.5		
16	SI09	床直	SI09 ⑧(炭化材19)	棒状	コナラ属コナラ節	不明	1.5×2.0	PLD-49810	
17	SI04	床直	SI04-C-6		コナラ属コナラ節	柁目状	1.0×7.0?	PLD-49811	



図版1 炭化材の走査型電子顕微鏡写真

1a-1c. クリ (整理番号2)、2a. コナラ属コナラ節 (整理番号3)、3a. コナラ属コナラ節 (整理番号17)、4b. 草本? (整理番号8)

a: 横断面、b: 接線断面、c: 放射断面

第6節 北熊ノ沢(2)遺跡出土の動物遺体

株式会社パレオ・ラボ

1 はじめに

青森県八戸市の北熊ノ沢(2)遺跡から出土した動物遺体の同定結果を報告する。

2 試料および方法

試料は、貝塚から出土した動物遺体である。5mm目および1mm目のフルイを用いて動物遺体が回収された。時期は、縄文時代早期後葉とされている。試料は、肉眼および実体顕微鏡で観察し、現生標本との比較により、部位と分類群の同定を行った。

なお、抽出にあたり、腹足綱(巻貝)については殻頂部もしくは殻口部が残る試料を、斧足綱(二枚貝)については殻頂部が残る試料を主に抽出した。

3 結果

同定された分類群を表1に示し、同定結果を表2に示した。今回の貝殻集中地点から得られた動物遺体は、ほぼ斧足綱で占められている。腹足綱については、微小な巻貝を除き、ほぼ含まれていなかった。また、硬骨魚綱や鳥綱、哺乳綱などについてもほぼ含まれていない。なお、貝表面が灰色を呈し、亀裂を生じた試料が多く観察されたため、火を受けた試料が多く含まれると考えられる。

・第1号貝殻集中地点

第1号貝殻集中地点は、径20~30cm程度、厚さ10cm未満の非常に小さな貝塚である。貝類の破片が中心で、シジミ属、ハマグリ、オオノガイの殻頂部破片が得られている。

・第3号貝殻集中地点

第3号貝殻集中地点は、1m×1.5mほどの範囲で4つのブロックからなり、厚さは最大で20cmほどの貝塚である。同定された斧足綱で最も多く出土したのはシジミ属で、左殻で341点が認められた。形態による種の同定は難しいため属レベルに留めたが、成長脈が細かく密である特徴から、ヤマトシジミの可能性が高い。シジミ属と同程度に認められたのが、オオノガイである。右殻で323点が認められた。次いで多く出土したのは、ソトオリガイであった。右殻で245点が認められた。ソトオリガイは、左右の殻頂部に弾帯受を持つ。殻は薄く、今回抽出・同定できたのは、この弾帯受のつく殻頂部だけであった。

一般的に多くみられるハマグリは左殻で117点、アサリは左殻で69点、オキシジミは左殻で67点であった。シオフキ、バカガイ、イソシジミ、マガキは、さらに出土量が少ない。

腹足綱については、海産と思われる種不明の小さな巻貝のほか、陸産のパツラマイマイ科、ベッコウマイマイ科が認められたが、これらも出土量はごくわずかであった。

なお、魚類の微小な椎骨破片が数点確認された。網目状の構造が見られたため、サケ科の椎骨破片と考えられる。

4 考察

今回同定された動物遺体は、ほぼ貝類で占められている。中心となる貝類から、遺跡周辺にはシジミ属（ヤマトシジミ）が多く生息する汽水域と、オオノガイやソトオリガイが多く生息する泥干潟が広がっていたと推察される。

特に、オオノガイやソトオリガイが卓越した出土を示したのが特徴的である。オオノガイは潮間帯の砂泥底、内湾干潟の泥深いところにすみ、30cm近くも深く潜る（波部・奥谷，1996）。ソトオリガイについても、潮間帯から水深約20mの砂泥底、内湾干潟に潜入する。どちらも砂泥質の干潟に生息する点で共通するが、特にオオノガイは深く潜っているため、その採取は容易ではない。現在のオオノガイ漁を調査した猪熊によれば、オオノガイ漁は歯が3本の鍬を使い、干潟の上で正座するような姿勢で、手掘りで行われる。また、漁場確保のため、広大な干潟が利用できる大潮の日を狙って漁期が設定されるという（猪熊，2008）。貝集中からは、採取のための道具とみられる遺物は出土していないため、こうしたオオノガイ採取のための掘具のような道具についても考えていく必要がある。また、今回の貝集中は規模が小さいため、貝の採取が比較的短期間であった可能性も想定され、民俗例のように、漁期を絞ったオオノガイの一括採取が行われた可能性が高い。

なお、シジミ属をはじめ、オオノガイ、ハマグリ、アサリなどの複数の種類に、被熱の痕跡が認められた。これが、調理の際に受けた被熱なのか、貝を開ける際に受けた被熱なのかは定かではないが、今後、こうした事例について留意が必要である。

北熊ノ沢(2)遺跡と同じ台地上には、同じ時期の大規模な貝塚である長七谷地貝塚が立地する。長七谷地貝塚からは、ハマグリを中心にオオノガイ、ヤマトシジミなどの貝類のほか、スズキやクロダイ、カツオなどの魚類、シカ・イノシシなどの哺乳類も多量に出土している。今回の貝塚と比較すると、貝塚の規模、出土種の多様さ、出土量などをはじめ、出土の中心となる種にも違いがみられるのは、貝の採取範囲や採取時期、期間などが異なっていた可能性が考えられる。今後、同じ台地に立地する貝塚間の比較や、骨角器をはじめとした人工遺物の分析などから、当時の貝の採取活動について、より具体的に明らかにできると思われる。

（三谷 智広）

参考文献

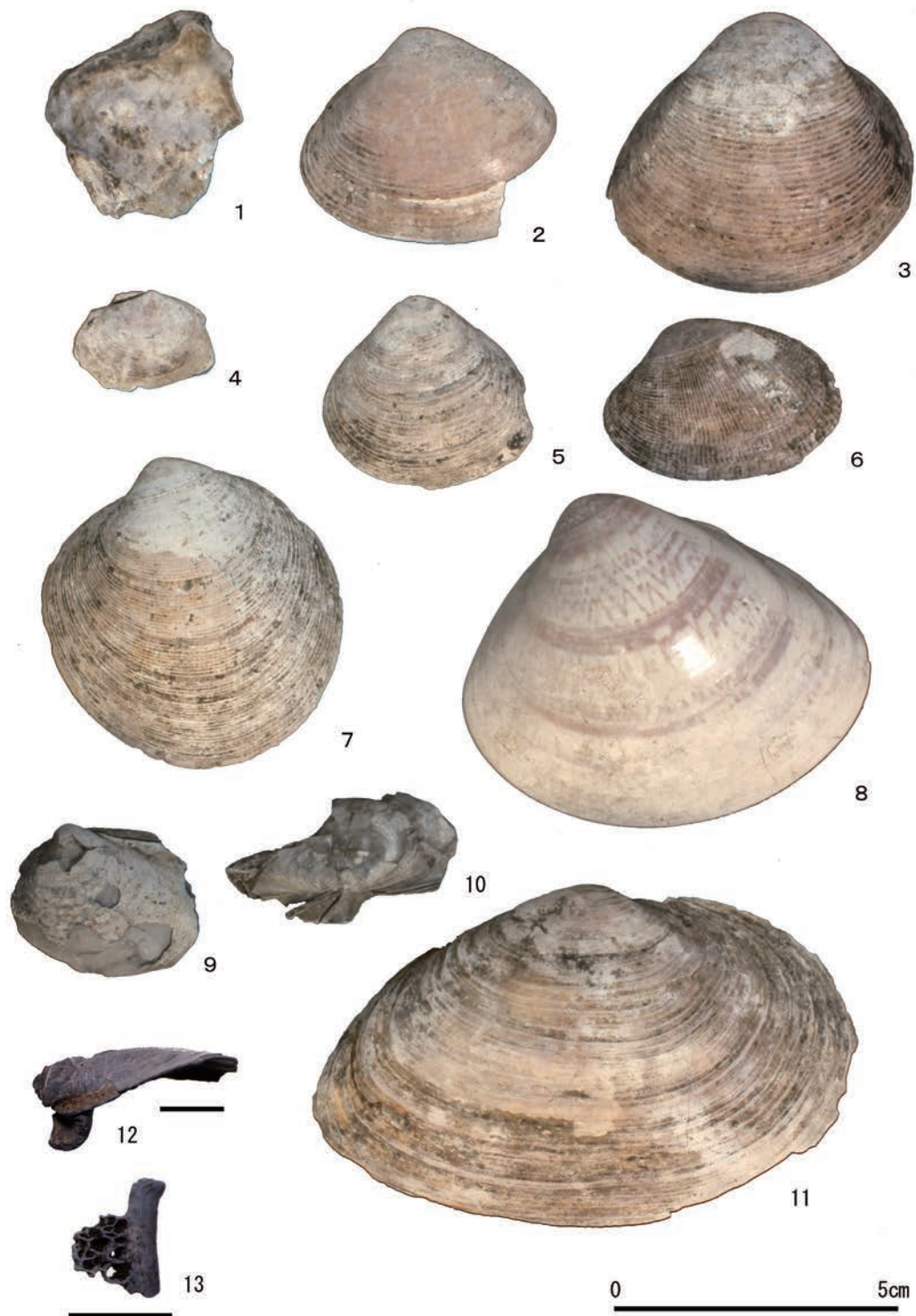
- 波部忠重・奥谷喬司（1996）貝Ⅱ—二枚貝・陸貝・イカ・タコほか—。294p，学習研究社。
- 猪熊樹人（2008）北海道根室市のオオノガイ漁。動物考古学，25，45-54。
- 工藤研治・高橋和樹・影浦 覚・越田雅司・福井淳一（2008）北海道埋蔵文化財センター調査報告書 254：釧路町 天寧1遺跡。355p，北海道埋蔵文化財センター。
- 奥谷喬司編（2000）日本近海産貝類図鑑。1173p，東海大学出版会。

表1 北熊ノ沢(2)遺跡出土の動物遺体一覧

軟体動物門	Mollusca
腹足綱	Gastropoda
	ベッコウマイマイ科 Helicarionidae sp.
	バツラマイマイ科 Discidae sp.
斧足綱	Pelecypoda
	マガキ <i>Crassostrea gigas</i>
	バカガイ <i>Mactra chinensis</i>
	シオフキ <i>Mactra veneriformis</i>
	イソシジミ <i>Nuttallia japonica</i>
	シジミ属 <i>Corbicula</i> sp.
	アサリ <i>Ruditapes philippinarum</i>
	オキシジミ <i>Cyclina sinensis</i>
	ハマグリ <i>Meretrix lusoria</i>
	オオノガイ <i>Mya arenaria</i>
	ソトオリガイ <i>Laternula marilina</i>
脊椎動物門	Vertebrata
硬骨魚綱	Osteichthyes
	サケ科 Salmonidae sp.

表2 北熊ノ沢(2)遺跡の動物遺体同定結果一覧

分類群	左右	第1号貝殻集中地点		第3号貝殻集中地点							合計	
		IV層相当	IV層相当	ブロック1	ブロック1の下	ブロック2	ブロック3	ブロック3の下	ブロック4	—		
マガキ	L			1	1							2
	R			2	1					3		6
バカガイ	L					1						1
	R											0
シオフキ	L			6		6				1	1	14
	R			3		3				1	1	8
イソシジミ	L										1	1
	R			1								1
シジミ属	L	1	1	180	1	57	5			41	56	342
	R	1	3	180		46	2			33	46	311
アサリ	L			61	4	1	1			2		69
	R			64	1	2				1	1	69
オキシジミ	L			32	6	11	1			9	8	67
	R			29	3	9				9	13	63
ハマグリ	L		1	34	3	44	3			5	27	117
	R	1	2	32	3	43	1			13	19	114
オオノガイ	L			187	17	22	7	1		41	28	303
	R	2		210	17	21	4			43	28	325
ソトオリガイ	L			163	18					12	3	196
	R			200	24					18	3	245
ベッコウマイマイ科				1				1	1	2	1	6
バツラマイマイ科					1	2	1	1		8	9	22
不明巻貝				3		1				2	1	7
サケ科										3		3



図版1 北熊ノ沢(2)遺跡出土の動物遺体(12・13のスケールバーは3mm)

1. マガキ左殻 2. バカガイ左殻 3. シオフキ右殻 4. イソシジミ右殻 5. シジミ属左殻 6. アサリ左殻
 7. オキシジミ左殻 8. ハマグリ左殻 9. ハマグリ左殻(被熱あり) 10. オオノガイ左殻(被熱あり)
 11. オオノガイ右殻 12. ソトオリガイ左殻 13. サケ科椎骨破片

第7節 火山灰同定

弘前大学大学院・理工学研究科 佐々木 実

1 試料

分析を行った試料は、表1に示す9試料である。

2 分析方法および分析結果

上記9試料の火山灰について、以下の分析を行った。

提供された試料は、約10gを分取し、超音波洗浄機を用いて繰り返し水洗を行い含まれる粘土鉱物等の粒径数マイクロメートル以下の粒子を除去した後、乾燥した。得られた粒子から目開き250 μm のふるいを通過したものを紫外線硬化樹脂により封止してスミアスライドを作成した。これを偏光顕微鏡により観察し、火山ガラスの形態、構成鉱物の種類を記載した。

分析結果を表2に示す。またスミアスライドの偏光顕微鏡写真を図1に示す。

3 火山灰の帰属

いずれの試料も産状から、白頭山ー苫小牧テフラあるいは十和田 a テフラに帰属すると予想されている(表1)。

白頭山ー苫小牧テフラ(B-Tm)は、中華人民共和国および朝鮮民主主義人民共和国の国境に位置する白頭山(長白山)の10世紀の噴火によって生じたテフラであり、軽石型およびバブル型の無色火山ガラス、アルカリ長石およびエジリンオーゾライトを含む(町田・新井, 2003)。本テフラの噴出年代は、AD946年の冬とされている(Oppenheimer et al., 2017; Hakozaki et al., 2018)。

十和田 a テフラは、平安時代に起きた十和田カルデラの最新噴火の噴出物である。軽石型およびバブル型の無色火山ガラスのほかに、褐色を呈する気泡の少ないガラス片を含む特徴がある。鉱物は斜長石、直方輝石、普通輝石を含む(町田・新井, 2003)。本テフラの噴出年代は従来AD915年とされてきたが(町田ほか, 1981; 早川・小山, 1998)、白頭山苫小牧テフラの年代がAD946年とされたことにより(Oppenheimer et al., 2017; Hakozaki et al., 2018)、今後再検討される可能性がある。

上記2テフラは、褐色ガラスの有無、無色鉱物の種類(斜長石およびアルカリ長石)、有色鉱物の種類(普通輝石、直方輝石およびエジリンオーゾライト)に違いが見られ、各試料がどのテフラに由来するのかを推定できる。

表2に示す特徴から、分析番号1~5および分析番号8の試料は十和田 a テフラ(To-a)に帰属すると推定される。いずれも斜長石、直方輝石、普通輝石を含み、アルカリ長石を含まない。分析番号7および9は、細粒のバブル型ガラスに富みアルカリ長石を含むことから白頭山ー苫小牧テフラ(B-Tm)に帰属すると推定される。これらの試料中に含まれる微量の普通角閃石は上下の土壌から混入した十和田八戸テフラに由来するものである可能性が考えられる。

分析番号6の試料はバブル型火山ガラスにやや乏しく、斜長石とアルカリ長石の両方を相当量含み普通角閃石も含まれる。また他の試料と異なる特徴として最大で径50 μm 長さ400 μm の円筒状で無色透

明非晶質の海綿骨針を含む（図1-6）。これは周囲に分布する海成新第三系に由来すると推定される。よって試料6は白頭山-苫小牧テフラ降下後に形成されたおそらくは風成の再堆積物と判断される。

引用文献

- Hakozaki, M., Miyake, F., Nakamura, T., Kimura, K., Masuda, K., & Okuno, M. (2018) Verification of the Annual Dating of the 10th Century Baitoushan Volcano Eruption Based on an AD 774-775 Radiocarbon Spike. *Radiocarbon*, 60, 261-268.
- 早川由紀夫・小山真人 (1998) 「日本海をはさんで10世紀に相次いで起こった二つの大噴火の年月日-十和田湖と白頭山-」『火山』43、403-407.
- Horiuchi, K., Sonoda, S., Matsuzaki, H. and Ohyama, M. (2007) Radiocarbon analysis of tree rings from a 15.5- kyr BP pyroclastically buried forest: a pilot study. *Radiocarbon*, 49, 1123-1132.
- 町田 洋・新井房夫 (2003) 『新編火山灰アトラス -日本列島とその周辺-』東京大学出版会、336p.
- 町田 洋・新井房夫・森脇 広 (1981) 「日本海を渡ってきたテフラ」『科学』51、562-569.
- Oppenheimer, C., L. Wacker, J. Xu, J.D. Galván, M. Stoffel, S. Guillet, C. Corona, M. Sigl, N. Di Cosmo, I. Hajdas, B. Pan, R. Breuker, L. Schneider, J. Esper, J. Fei, J.O.S. Hammond, U. Büntgen (2017) Multi-proxy dating the ‘Millennium eruption’ of changbaishan to late 946 CE. *Quat. Sci. Rev.*, 158, 164-171.

表1 北熊ノ沢（2）遺跡 火山灰サンプル

分析番号	遺構等	取上番号	層位等	備考	分析に使用した重量 (g)	洗浄後重量 (g)
1	SI01		3層	白頭山?	5.2	0.8
2	SI02	1	2層	白頭山?	5.1	1.6
3	SI02	2	2層	十和田 a ?	5.4	1.5
4	SI03	1	2層	白頭山?	5.2	2.5
5	SI03	2	8層	十和田 a ?	5.3	1.6
6	SI05		2層	白頭山?再堆積の可能性あり	5.6	1.4
7	SI07		3層	白頭山?	5.5	0.8
8	SI09	1	5・6層	白頭山?	5.6	0.9
9	SI09-SK04	2	1層	白頭山?	5.7	1.1

表2 北熊ノ沢（2）遺跡 火山灰記載

分析番号	火山ガラス				鉱物						その他		帰属
	bw	pm	br	pl	af	qz	opx	aug	ag-aug	ho	opq	sp	
1	○	△	+	○	-	-	△	△	-	+	△	-	To-a
2	○	△	+	○	-	-	△	△	-	+	△	-	To-a
3	○	△	+	○	-	-	△	△	-	+	△	-	To-a
4	△	△	+	○	-	-	△	△	-	+	△	-	To-a
5	△	△	+	○	-	-	+	+	-	-	+	-	To-a
6	△	△	+	△	△	-	△	△	-	△	△	+	風成再堆積物
7	○	+	+	+	△	-	+	+	+	-	+	-	B-Tm
8	○	△	+	△	+	-	+	+	-	+	+	-	To-a
9	○	△	-	+	△	-	+	+	+	-	+	-	B-Tm

○△+ : 含まれる (○ > △ > +); - : 含まれない

bw: バブル型ガラス、pm: 軽石型ガラス、br: 褐色ガラス、pl: 斜長石、af: アルカリ長石、qz: 石英、opx: 直方輝石、aug: 普通輝石、ag-aug: エジリンオージャイト、ho: 普通角閃石、opq: 不透明鉱物、sp: 海綿骨針
B-Tm: 白頭山苫小牧テフラ、To-a: 十和田 a テフラ

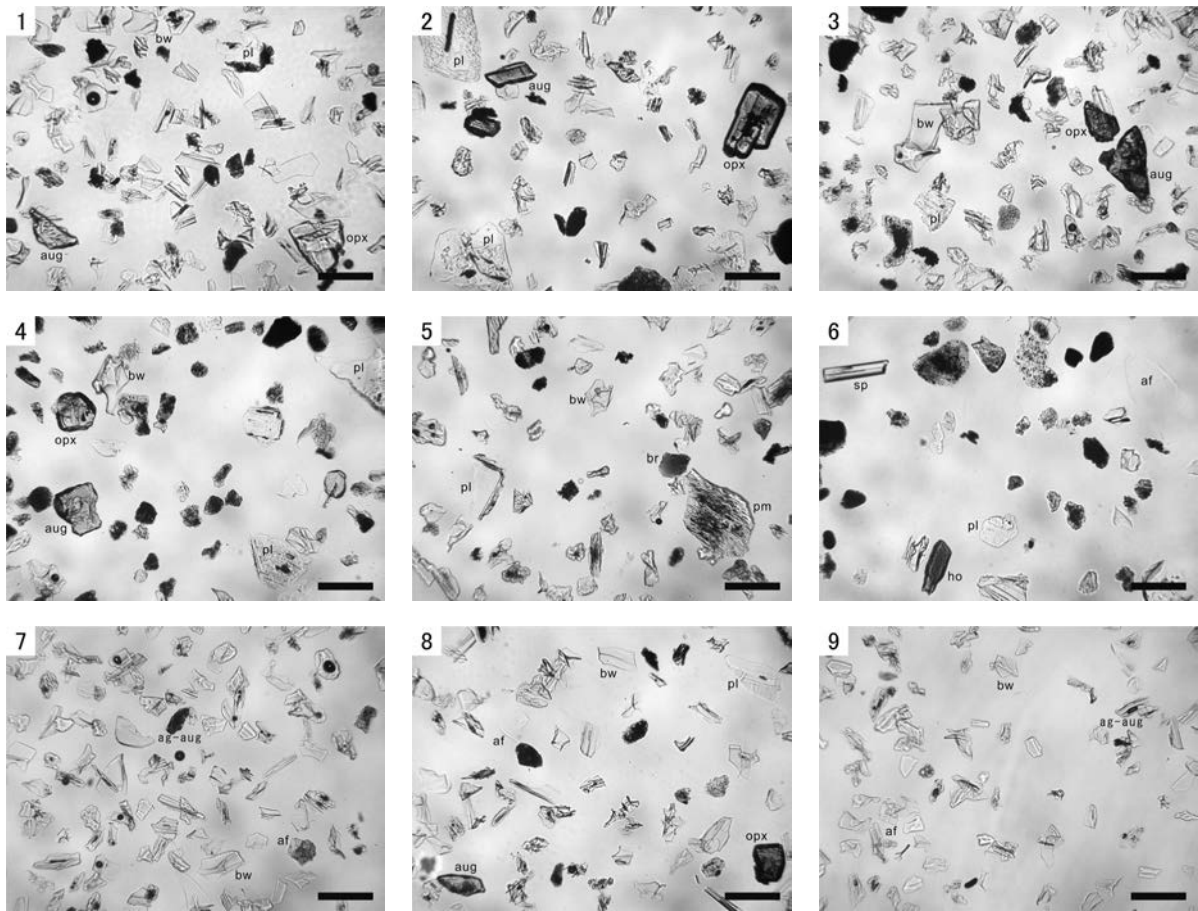


図1 火山灰試料の偏光顕微鏡写真。下方ポーラのみ（オープンニコル）。左下スケールの長さは200 μ m。記号は表2に同じ。左上の番号は分析番号に対応する。

第3章 総括

第1節 縄文時代

今回の調査では、土坑29基・溝状土坑26基・貝殻集中地点3箇所を検出し、縄文時代早期から晩期の縄文土器が出土した。土坑は貯蔵穴と目されるフラスコ状土坑や、底面に逆茂木痕を有する円形の落とし穴を含む。円形の落とし穴は縄文時代早期、溝状土坑は縄文時代中期後葉以降の構築年代が考えられており、当該期には狩猟場として利用されていた。第3号貝殻集中地点では、貝層下に赤御堂式土器が伴っていたことから、縄文時代早期後葉の地点貝塚と想定される。以下、土器と遺構について、特筆項目を記述する。

1 縄文土器について

今回の調査では、時期ごとにⅠ群（早期）～Ⅵ群（晩期）に分類した。Ⅵ群（図88-29とその同一個体）は調査区北半の斜面から、それ以外は調査区南半の平場とその周辺の南西斜面・南東斜面からの出土である。出土層位は第Ⅰ～Ⅳ層（第Ⅲ層は欠層）で、第Ⅰ層からが多い。Ⅰ～Ⅲ群の土器は層位や分布域が異なるのではなく、混在して出土した。第Ⅳ層は漸移層であり、また、調査区のほとんどの地区で第Ⅰ層直下が第Ⅳ層であった事を勘案すると、層を形成する土壌の堆積が未発達であった可能性がある。出土土器の主体はⅠ群で、中でもⅠ1（3）群、Ⅰ2群がほとんどである。以下、Ⅰ1（3）群、Ⅰ2群の土器に絞って総括する。

Ⅰ1（3）群は縄文時代早期中葉の鳥木沢式に比定されるものである。Ⅰ2群に次ぐ出土量であった。全て小片で、全体の器形がわかるまで復元できるものはなかったが、口縁は波状口縁もしくは平口縁、底部は尖底で、砲弾形の器形と思われる。底部に乳房状突起は認められない。ごく少数であるが、口縁部が内湾するもの（図70-29）や平底のもの（図72-17）もある。口唇部に篋状工具・貝・爪・指による刺突が施されるものが多い。胴上半に貝殻文を施文し、体部下半は無文である。刺突列で文様帯を区画するものもある。内面は貝殻条痕・ミガキ・ケズリ等の調整で平滑に整えられている。胎土中に小礫や褐色土粒が混入し、焼成は良好であるがやや軟質である。器面が赤化していたり小円状に剥離したりして、被熱を推測されるものもある。施文される貝殻文の種類と組み合わせによって①貝殻押引文を主体とするもの、②貝殻腹縁文を主体とするもの、③波状貝殻文を主体とするもの、④貝殻条痕文を主体とするもの、⑤無文のものに細分した。⑤以外は、それぞれの施文（展開）方向が、横位、縦位、斜位と、それらが組み合うものがあり、①では幾何学的文様になるもの、②では羽状になるものもある。文様展開が分かるものは図72-14以外にないものの、三角形を基調としたモチーフを構成するものと思われる。ごく少数であるが、放射肋の発達しない貝（ハマグリ等）を使用したもの（図72-12・図83-37）もある。施文の①（図70-7・21・27・28・31、図79-7・8、図80-1、図82-1、図83-9～22）、③（図83-41～43）、および波頂部に突起状の貼付があるもの（図72-14）は吹切沢式の要素を持つものと考えられる。キャリパー形の器形がないこと、波頂部に小突起がないこと、沈線を有するものがないこと、また、1点であるが平底のもの（図72-17）がある点が従来の鳥木沢式とは異なる。なお、貝殻沈線文系土器で平底のものは階上町小坂橋(2)遺跡（階上町

教育委員会2002、図面34-118~120・125：吹切沢式併行）・函館市石倉貝塚（北海道埋蔵文化財センター1996、図IV-1：物見台式相当）でも出土しており、貝殻沈線文系平底土器との関連が推察される。

I 2群は縄文時代早期後葉の赤御堂式に比定されるものである。本遺跡で出土した土器の主体となる。全体の器形がわかるまで復元できるものはないが、口縁は平口縁、底部は尖底で、概ね円錐形の器形と思われる。図87-43はミニチュア土器で、図86-16もその可能性がある。底部の図87-41は乳房状突起を有するもの、図87-42は平底のものである。口唇部に縄文や、縄文原体・篋状工具・指による刺突が施されるものが目立つ。外面には主に単節の斜縄文が施される。内面はユビアトと推測される凹凸が認められるほか、縄文や条痕が施されるものがある。胎土中に褐色土粒が混入し、焼成は良好であるが軟質である。器面には黒色物質の付着や、小円状の剥離がみられるものもあり、煮炊きや被熱によるものと推測される。口縁部直下に施文されるものがあり、施文の種類によって①側面圧痕を施すもの、②沈線を施すもの、③刺突を施すもの、④隆帯を施すもの、⑤縄文のみを施すものに細分した。①~④の施文の展開方向は基本的に横位で、口縁と平行であるが、①の図85-15は横位と斜位、16は縦位、②の図70-19・図85-24波状、図85-25は斜位である。また、地縄文は図86-17・18と図87-17は無節、図86-19は組紐の圧痕を縦位に施すものである。掲載外を含む口縁部点数比（総数361点）では、①30%・②7%・③1%・④1%・⑤61%で、口唇部は施文なしのもの34%・縄文回転が施されるもの42%・刺突が施されるもの24%である（表8）。

表8 I 2群土器 口縁部分類

施文分類	①側面圧痕					②沈線					③刺突			④隆帯			⑤縄文のみ				
	口唇部 施文	施文 なし	縄文 回転	刺突			施文 なし	縄文 回転	刺突			施文 なし	縄文 回転	縄文 回転	刺突	施文 なし	縄文 回転	刺突			
点数	25	57	5	12	9	7	7	2	7	1	2	1	3	1	88	84	10	34	6		

赤御堂式は古段階（横位の平行沈線と紡錘形文、斜行沈線文、隆帯、縦位の列点文等）・中段階（2~3条の撚糸圧痕・1~2条の押引列点・粘土帯貼付等）・新段階（鋸歯状・波状・横位の沈線等）の3段階に区分されており（工藤1989）、本遺跡出土の①は中段階、②は中段階・新段階、③は中段階・新段階、④は古段階・中段階に該当すると考えられる。

2 溝状土坑について

溝状土坑は26基検出した。調査区北半の斜面南端もしくは中央西側の緩斜面に集中し、等高線に沿って列状に配置されるようである。調査区南東の斜面からは検出されていない。長軸方向は等高線に平行・直行・斜交するものがある。特筆されるのは、大型の第5号溝状土坑である。平面形状は楕円形で、規模は開口部長軸400cm、短軸189cm、底面長軸359cm、底面短軸140cm、深さは171cmである。底面はほぼ平坦であるが、両端が外側に傾斜する。長軸断面形は両端がオーバーハングする台形状で、短軸断面形はV字状である。堆積土は壁の崩落を伴う自然堆積で、17層に分けられる。短軸が185cm以上の溝状土坑は、八戸市石ノ窪(2)遺跡・櫛引遺跡・岩ノ沢平遺跡、南部町前比良遺跡でも検出され、櫛引遺跡・岩ノ沢平遺跡では複数基認められている。それらは、傾斜の変換点付近に設置されていること、自然堆積であることが共通する。また、本遺跡周辺の和野前山遺跡・長七谷地貝塚・長七谷地7号遺跡・売場遺跡では100基以上の溝状土坑が検出されていることから、遺跡の所在する丘陵

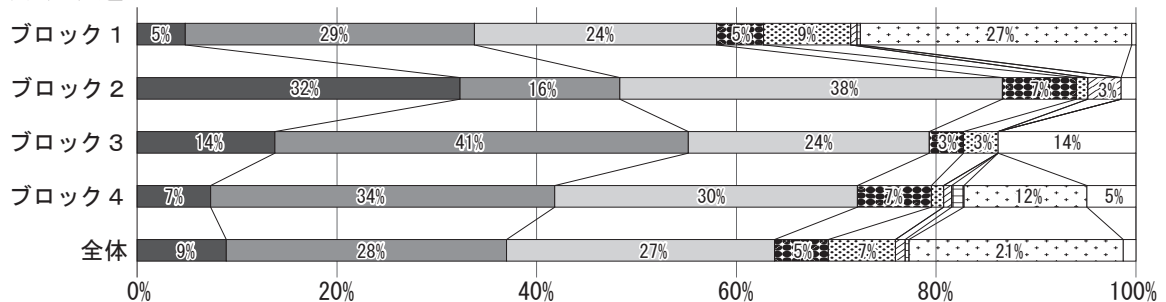
一帯は狩猟場であったものと推定される。溝状土坑の捕獲対象獣はシカと推察されているが、今のところ、ここまでの大きさのものは検出遺跡・検出数が限られている。この大きさに適応する対象獣が存在していた可能性もあるものの、対象獣が頻繁に通う獣道に特別に大型の溝状土坑を設けたものと考えたい。八戸市を中心とした県南地域にしか検出されていない特徴的な遺構である。 (平山)

3 第3号貝殻集中地点出土の貝類について

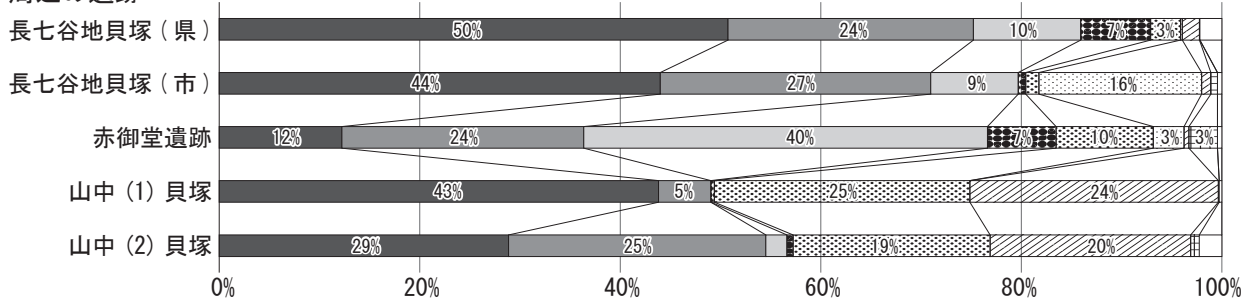
種組成 現地採集及び回収した貝層から抽出された貝類の組成は図100のとおりである(註1)。本遺跡で最も多く出土しているのはオオノガイ(28%)で、シジミ属(27%)がそれに次ぐ。このほか、ハマグリ(9%)、アサリ(7%)、オキシジミ(5%)が出土しており、わずかにシオフキ、マガキ、などがある。ブロック2のみハマグリが3割を超える割合で出土している。貝類以外では、サケ科の骨が3点出土したのみで、鳥類や哺乳類の出土は皆無であった。

同時期の周辺遺跡を見てみると、台地北岸に位置する長七谷地貝塚では、ハマグリとオオノガイが4分の3近くを占めている。本遺跡の南東約9kmに位置する赤御堂遺跡では、シジミ属が約半数を占め、ハマグリ、アサリ、オオノガイが次ぐ。小川原湖周辺に位置する山中(1)貝塚・山中(2)貝塚では、魚骨や獣骨類の出土がほぼ皆無であるという点で本遺跡と類似するが、種組成は、山中(1)貝塚ではハマグリが半数近くを占め、アサリ、シオフキを加えると全体の9割以上に達する。山中(2)貝塚は、ハマグリが最も多く、オオノガイ、アサリ、シオフキを合わせて全体の9割以上を占める組成となっている。本遺跡の種組成は、オオノガイとシジミ属で半数を占める点が特徴で、ハマグリが少なくシジミ属が多いという点では、同じ台地に位置する長七谷地貝塚よりも、古新井田湾に面した赤御堂遺跡にやや近いと言える。しかし、本遺跡は標高が高く、海進ピーク時でも海に面した立地とはならず、海産資源の採取はより限定的であったと考えられる。

北熊ノ沢(2)遺跡



周辺の遺跡



■ ハマグリ ■ オオノガイ ■ シジミ属 ■ オキシジミ ■ アサリ
 ■ エゾイソシジミ ■ シオフキ ■ マガキ ■ ソトオリガイ ■ その他

図100 北熊ノ沢(2)遺跡及び周辺遺跡の貝類組成

なお、本遺跡では、ソトオリガイの出土が全体の21%を占めるが、すべて殻頂部のみの出土である。ソトオリガイは、潮間帯から水深約20mの砂泥底、内湾干潟に潜入するとされるが（第2章第4節）、周辺遺跡はおろか、青森県内でも縄文時代の貝塚からの出土例はこれまで報告されていない。出土遺体の残存長は最大でも1cm未満であるため、食用目的で採取したのではなく、オオノガイなど他の貝類を採取する際に紛れ込んだものとして理解しておきたい。

殻長分布 出土した貝類の内、計測可能な個体数が多かったハマグリ、シジミ属、オキシジミについて、殻長分布を図101に示した。ハマグリは65～75mmが多く、70～75mmにピークがある。シジミ属は25～30mmにピークがあり、25mm以上の個体が半数を超える。オキシジミは、45mm以上のものが多く、全体の4割を占める。山中(2)貝塚でシジミ属が30～35mmにピークがあり、本遺跡より大きい個体が多いものの、全体として本遺跡では周辺の同時期の貝塚と比べ、大型の貝類を採取している様相が見て取れる。本遺構の形成は、短期集中的になされたものと考えられるため、効率よく大きい貝類を選んで採取したものと考えられる。

小結 第3号貝殻集中地点からは、オオノガイとシジミ属を主体とする、内湾性の貝類が多数出土した。長七谷地貝塚と比べ、ハマグリの割合が少なく、同じ台地上に立地しながら、南岸と北岸とで採取対象に違いが見られる結果となった。また、出土貝類の殻長分布から、本遺跡では大型の貝類を狙って漁が行われていたことがわかった。現代のオオノガイ漁を調査した猪熊樹人によると、オオノガイの漁場において「生きているアサリやウバガイを見ることはなく、混獲している様子もなかった。」ことを記録しており、縄文時代においても「異なる干潟環境の中でそれぞれに即した資源利用」がなされていた可能性を指摘している（猪熊2008）。八戸地域においても、一口に干潟環境といっても、資源の生息状況には違いがあったとみられる。八戸市と東京大学による近年の共同研究では、八戸地域における縄文海進のピークが約8,000年前の縄文時代早期であったことが指摘されている（辻ほか2018）。当時の周辺環境としては、長七谷地貝塚が「古奥入瀬湾」に面した立地であるのに対し、赤御堂遺跡は「古新井田湾」の湾奥部、本遺跡は「古八戸湾」の湾奥部に位置していた。本遺跡出土貝類の組成は、同じ台地上に位置する長七谷地貝塚より、湾奥という立地場所が似ている赤御堂貝塚と近い。一方で、より細かい地形で考えると、本遺跡は湾奥の入り江からさらに標高の高い台地に位置しており、海産資源利用が限定的であるという点で、赤御堂遺跡とも相違がある。

一方で、いずれの遺跡でも、貝塚に明確に伴う堅穴建物跡は見つかっていない。長七谷地貝塚においては、小堅穴遺構2基が報告されているが（青森県教育委員会1980：91-92）、報告書を見る限りは不整形や楕円形の土坑で、規模や出土遺物の内容からは墓坑の可能性が考えられる。杉山陽亮は、長七谷地貝塚を形成した人々の集落について、「貝塚から南方3.5kmの丘陵上に位置する売場遺跡のように、貝塚の南側の丘陵一帯に存在していた可能性」があり、「貝塚が捨て場として集落の一部を構成するのではなく、面前に広がる海で採取・漁労を行うための拠点であったと推定」している（杉山2019）。本遺跡の場合も、集落の一部としての貝塚ではなく、周辺で生活していた人々が、貝類採取を行う場の一つとして利用・機能していた痕跡と捉えられる。辻誠一郎らは当時の資源利用について、「前面に広がる干潟は漁労・採集の場、背後の台地は里山として利用」され、「海と陸の資源を利用して生活を維持していくという「集落生態系」のシステムができていたと考えられる」と指摘している（辻ほか2018：13）。本遺跡で活動した人々の集落についても、周辺遺跡に目を向け、広い視点

で今後検討していくことで、本遺跡を含めた古八戸湾周辺における「集落生態系」の復元が可能になるものと思われる。
(中門)

註1 今回の動物遺体同定では、ヤマトシジミとマシジミの分別は行っていない。そのため、過去の分析事例において「ヤマトシジミ」と報告されているものについては、本遺跡における「シジミ属」と同等に扱うこととした。

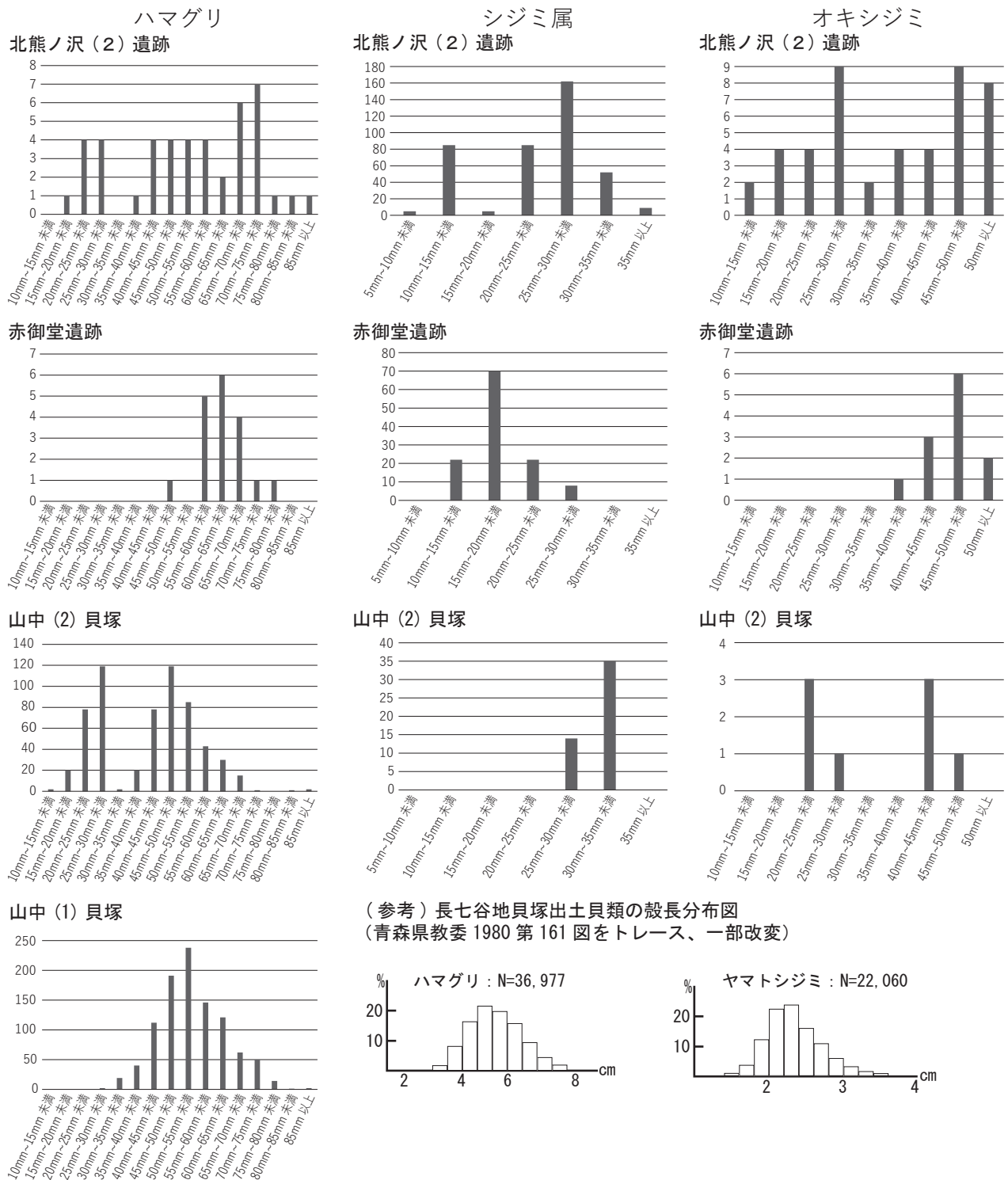


図101 北熊ノ沢(2)遺跡及び周辺遺跡出土貝類の殻長分布

第2節 平安時代

今回の調査では、竪穴建物跡9棟、掘立柱建物跡4棟、土坑2基を検出し、土師器、須恵器、土製品、石製品、鉄製品、鉄生産関連遺物が出土した。遺構はすべて平坦部から緩斜面に位置し、集落は舌状に伸びる段丘面に展開していたと考えられる。遺物は殆どが遺構内からの出土である。以下、竪穴建物跡と遺物について、特記事項を記述する。

1 竪穴建物跡

ここでは、今回の調査で検出した竪穴建物跡のうち、大部分が調査区外に位置しており詳細が不明であるSI04を除いた8棟について、規模や構造、廃絶過程などを整理し考察を行う。

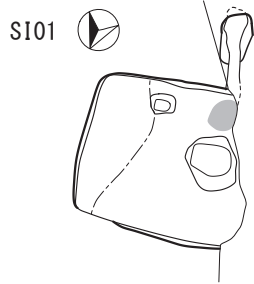
竪穴建物跡は、いずれも平坦部から西側の緩斜面に営まれている。火山灰の堆積状況から、時期的には、十和田aテフラ降下前に廃絶されたもの(SI01～03)と、十和田aテフラ降下を経て白頭山-苫小牧テフラ降下前に廃絶されたもの(SI05～09)とに大きく分かれるようである。

八木光則(2010)の分類に基づくと、今回の調査で検出した竪穴建物跡は小形3棟、中形1棟、大形3棟、特大形1棟である(図102)。建物の軸は、北-南方向を基本とし、わずかに西に振れるものが7棟(SI01・02・05～09)、北東-南西を指向するものが1棟(SI03)ある。

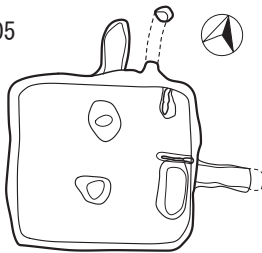
カマドは、1基のみで北壁に構築されているものが4棟で半数を占め、SI01は南壁に、SI03は北東壁に構築されている。複数カマドを持つものでは、SI05で北壁に2基、東壁に1基の計3基があり北壁東寄りのもので一番新しい。SI09は北壁・南壁それぞれに1基構築されており、南壁のものが最後まで機能していたと考えられる。また、北壁のSI09カマド2は、新旧2段階の変遷が考えられる。カマドの構造は、地山の上に、白色粘土で構築するものが基本である。天井石はいずれの遺構でも確認できなかった。SI02では、火床面の上に白色粘土が堆積している状況を確認しており、天井も含め白色粘土で構築していたものと考えられる。SI07は、白色粘土で構築された袖の先端に軽石を据えている。芯材は、SI09でレンガ状土製品が用いられていた以外、明確には確認できなかった。煙道は地下式が主体である。半数以上の建物跡で、袖が欠損していたり、構築材と考えられる白色粘土が遺構内覆土や煙出坑などにブロック状に堆積したりする状況を確認しており、建物廃絶時にカマドを破壊したのと考えられる。また、SI01・07・09では、カマド煙道や煙出坑、燃焼部などに意図的と思われる遺物の配置・散布状況を確認しており、カマド廃棄・建物廃絶にあたって何かしら儀礼的な行為が存在した可能性をうかがわせる。

柱穴構造は、SI02とSI09で確認できた。SI02は、調査区内で確認できた柱穴は2本であるが、調査区外にもう2本埋蔵されている可能性が高く、4本の支柱穴配置であったと思われる。SI09もまた、立て替えの可能性のあるものの支柱穴は4本と考えられている。SI02南側の柱穴は壁際で周溝に接する形で構築されている。このような壁寄り柱穴配置の建物について、七戸町太田野(2)遺跡の調査では、「冬期間における北西風の影響や日照方向等の自然条件等が強く作用し」、「東～南面した構造を持つ、壁寄り柱穴配置による竪穴住居跡が導入された可能性」を指摘しており(青森県教育委員会2007)、同様の傾向と見ることができる。さらに本遺跡は、南に向かって開けた地形となっているため、南を志向した建物構築は自然な流れであったかもしれない。SI06・07では、カマド反対側の壁面近く

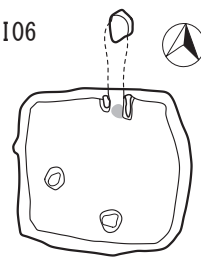
小形



SI05

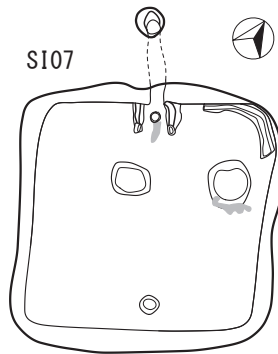


SI06



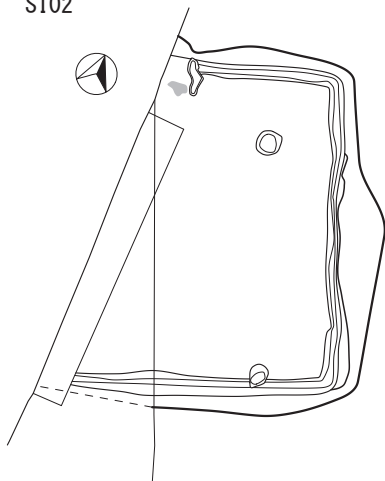
中形

SI07

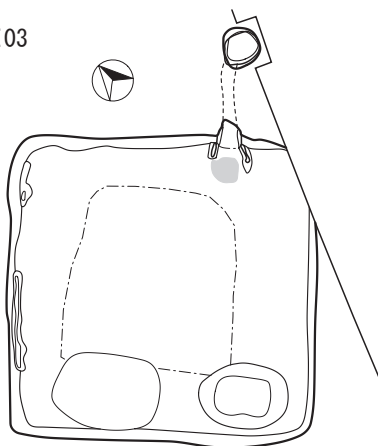


大形

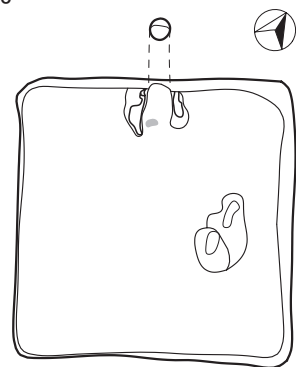
SI02



SI03

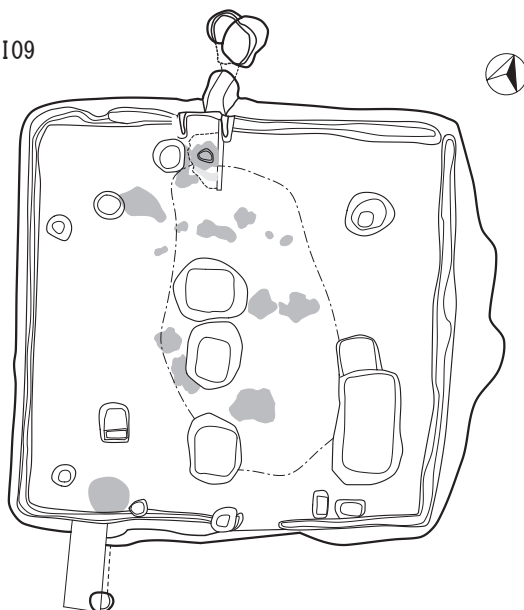


SI08



特大形

SI09



0 S=1/120 4m

図102 北熊ノ沢(2)遺跡 竪穴建物跡集成

中央に柱穴があり、出入り口施設に伴うものであった可能性がある。

SI07及びSI09では、建物内に構築され廃絶時まで開口・機能していたと考えられる土坑の周辺で、火床面を確認した。ある程度の堅さと厚さを持って被熱していることから、建物の機能時から、ある程度恒常的に火を焚いていたと考えられる。SI09からは、羽口や鉄製品も出土しており、調査中の所見では鍛冶作業を行っていた工房の可能性を考えていた。そのため、焼土周辺の土を回収し、微細遺物抽出委託により鍛造剥片や粒状滓の回収を狙ったが、鍛冶遺構を示唆する遺物は出土せず、遺構の性格については再考が求められた。恒常的に火を使いながらも、専門的な鍛冶作業の痕跡が認められない点を踏まえると、これらの焼土を伴う土坑は、鉄製品の補修やメンテナンスなどを行う小規模な作業の場であったと捉えたい。なお、羽口や鍛冶滓が出土していることから、精錬鍛冶や鍛錬鍛冶は今回の調査区外の周辺で行っていたと考えられる。

2 遺物

土師器 今回の調査で出土した土師器のうち、口縁部形態や器形がわかるものを集成した(図103)。編年的位置づけは(宇部2013、船木編2014)を参考とした。甕は非ロクロ成形のものが主体を占め、わずかにロクロ成形のものが見られる(図55-6・7)。非ロクロ成形のものは、口径が胴部径より小さく、丸く膨らんだ胴部から口縁部が短く外反するもの(図26-1・図54-1)、胴部が砲弾形で口縁部がくの字に外反するもの(図30-1・図44-1・図54-4～6)、最大径が胴部上半にあり口縁部が外反するもの(図32-1・図54-3)、胴部が直立気味に立ち上がり口縁部が外反するもの(図26-2・図32-2・図44-2・図44-3)等が見られる。完形復元できたものはわずかであるが、器高は30cm以下のものが殆どで、10～15cm程度の小形のものも目立つ。大きさを問わず、外面にススが付着している例が見られる。ススは、口縁部のくびれ部分に横位に付着しているものが多数見られる。

坏は、すべてロクロ成形で、内面黒色処理を施したものが主体を占める。わずかに丸みを帯びた胴部から直線的に立ち上がる器形で、底部は回転糸切り無調整のものが一般的である。胴部が丸みを帯びるもの(図48-10)や、口唇がわずかに外反するもの(図30-11)など、やや前後する様相を持つものも見られる。口縁部内面にススが付着している例がいくつかあり、灯明皿として利用された可能性がある(図30-9・図48-10)。また、図48-10は内面に靱殻と思われる圧痕が残る。口底比は、SI02出土の2点(図30-9・10)は0.4以下、それ以外は0.43～0.44である。

一部前後する様相のものが混じるものの、9世紀後葉～10世紀前葉を主体とする資料と考えられる。**須恵器** 須恵器は大甕、壺、坏が出土した。大甕は、内外面が褐灰色で断面は赤褐色を呈するものと、還元焼成が不十分だったためか全体に赤褐色を呈するものがある。いずれも大粒の砂礫を胎土に含む。壺は、大甕よりキメ細かい胎土で、全体に白みがかかった灰色を呈する。大甕は、完形復元できなかったものの、同一個体と思われる破片が、SI01・05・07・09で出土している。SI01はカマド煙出坑で、SI05は床面直上で散布したような状態で出土するという特徴的なあり方を示す。図58-3は、完形復元できた壺であるが、口縁部が大きく歪んでいる。口縁～肩部はSI09カマド1煙出坑底面から出土しており、大甕と同様に須恵器の特殊な扱いをうかがわせる。周辺の遺跡では、櫛引遺跡(9世紀末～10世紀初頭)、岩ノ沢平遺跡(9世紀中葉～10世紀前葉)、熊野堂遺跡(10世紀後半)などで、瀬谷子窯跡群とそれを含む水沢周辺の須恵器と、五所川原産の須恵器が併存する状況が報告されており



図103 北熊ノ沢(2)遺跡 出土土師器集成

(青森県教育委員会1999・2000、八戸市教育委員会1989)、本遺跡も両窯跡から須恵器を搬入していた可能性がある。

遺構間接合 SI01とSI09・SK26、SI03とSK19、SI05とSI07・SI09、SI07とSI09で接合関係を確認できた。このうち、SI03とSK19は重複関係にあるため、流れ込みと捉えられる。注目されるのは、SI01・SI07・SI09の接合関係である。前述のとおり、これらの竪穴建物跡は、いずれも焼失建物跡で、かつカマド周りでの儀礼的な行為の痕跡が確認されている。特に、SI07とSI09の間で接合した図45-10と同一個体と思われる図59-7 (SI09) は、破面にも被熱の痕跡が確認されることから、須恵器を意図的に壊して、各建物跡に散布したという行為を遺物の面からも捉えることができる。

土製品 キノコ形土製品、土玉、レンガ状土製品が出土した。キノコ形土製品は、SI07の覆土中、白頭山-苦小牧テフラの直上から出土した。縄文時代のキノコ形土製品が混入した可能性もあるが、胎土や調整の特徴から平安時代のものと判断した。平安時代の所産とすれば、青森県内で2例目、八戸市域では初出土である。レンガ状土製品は、計4点出土し、内2点が完形品である。いずれも緩く波状にカーブする形で、側面は面取りしたような痕跡が確認され、規格性の高いものとなっている。類例として、青森市山元(2)遺跡SI51-Pit23出土の埴状土製品や、同上野遺跡SI16出土の焼成粘土がある(青森県教育委員会1995・2010)。上野遺跡例は、ススが付着し二次被熱痕が認められるが、今回出土したものは、そのような痕跡が確認できず、用途については今後の課題である。出土状況はやや特殊で、SK26では土坑に横たえるような形で完形で出土している。SI09では、カマドの芯材として利用されていた破片と、壁面、住居内土坑の堆積土から出土した破片が接合して完形となっており、芯材以外の破片も、住居廃絶時まで何らかの利用がされていた可能性があるが、詳細は不明である。

鉄製品 手鎌、刀子、鏃、棒状鉄製品、延板、鑿、鞘尻金具が出土した。鋤や鍬などの大型の製品は出土していない。点数が最も多いのは手鎌で、穂摘具として利用された可能性がある。棒状鉄製品や延板は、素材として保管されていたものと考えられる。

鉄生産関連遺物 羽口や、一定量の金属鉄を含んだ鍛冶滓が出土している。これらの鉄生産関連遺物は、精錬鍛冶もしくは鍛錬鍛冶に伴うものと考えられるが、今回の調査区では鍛冶作業に関する遺構は検出できておらず、鍛冶作業は調査区外東側の平坦地～斜面で行われていたと考えられる。

3 小結

平安時代の本遺跡は、9世紀後葉～10世紀前葉を主体とする集落遺跡と考えられる。火山灰の堆積状況から2段階の変遷が考えられ、初期段階はSI01・02・03が構築され、十和田aテフラ降下以前に廃絶された。SI01では、廃絶時にカマド煙出坑に須恵器破片を置き、建物を焼失している。前後して、SI05～09が構築される。手鎌や穀殻圧痕を持つ土器が出土していることから、南に面する低位段丘では稲作などを行っていた可能性がある。SI07・09では、鉄製品の日常的な補修などが行われ、周辺では精錬鍛冶や鍛錬鍛冶も行っていたと考えられる。しかし、SI06～09も白頭山-苦小牧テフラの降下前には廃絶される。SI07・09はカマド周辺への遺物の配置や、建物の焼失など、廃絶にあたってSI01の流れを汲む儀礼的行為の痕跡が確認される。SI05は、その後も居住を続けていた可能性があるが、それも出土遺物の様相を見るに10世紀中葉までには廃絶され、本遺跡での人々の活動は途絶えることとなった。

(中門)

第3節 北熊ノ沢(2)遺跡で検出された焼失竪穴建物跡の復元検討

日本建築学会 中村隼人
(八戸市博物館史跡根城整備専門員)

1 はじめに

本稿は、北熊ノ沢(2)遺跡で検出された第7号竪穴建物跡と第9号竪穴建物跡の上屋構造の具体を検討したものである。両遺構はともに火災倒壊した竪穴建物で炭化材が良好に残されていた。

2. 第7号竪穴建物跡所見

(1) 火災時の平面

・掘方

第7号竪穴建物跡(以下SI07)は、ほぼ平坦面に造られた隅丸方形の竪穴建物で、機能年代は9世紀後葉～10世紀前葉である¹⁾(第1図)。掘方は南北4,280mm×東西4,130mmで、床面は北東隅4分の1を地山とし、それ以外は掘方埋土で平坦面を形成している。

・付属遺構

SI07に付属する遺構として2基の土坑と1基の柱穴がある。このうち、火災倒壊時に開口・機能していたのはSK2だけだろう。SK2の埋土下位にはSI07火災倒壊時の建築部材と考えられる炭化材と被熱粘土質土塊が堆積していた。つまり、SI07の火災倒壊時にSK2は開口しており、ここに被熱した建築部材が落下したという解釈ができる。一方、SK1とPit1では、同様の堆積が確認できない。また、Pit1の上面(SI07床面と同じ高さの層位)にも、先述の炭化材と被熱粘土質土塊が堆積していた。これらの検出状況から考えるとSK1とPit1はSI07の火災時には既に埋められており、埋土上面はSI07床面と平坦な関係にあったと考えるのが妥当である。

以上の観察から考えると、SI07の火災倒壊時の平面は第2図の通りになる。

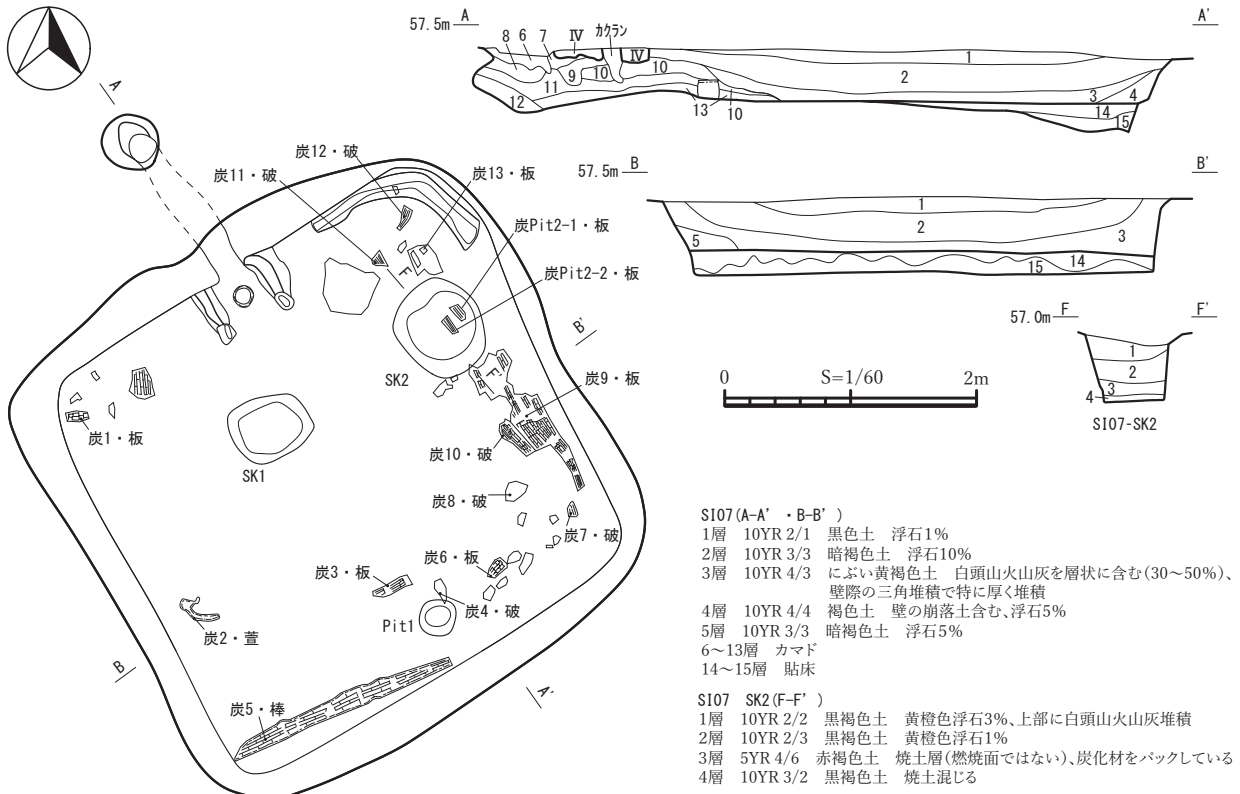
(2) 軸組

先述した通り、SI07の火災倒壊時に開口・機能していた付属遺構はSK2のみである。付属遺構の数と検出位置から考えると、SI07は柱を使わずに建てられた竪穴建物である蓋然性が高い。遺構のサイズと形状から考えると、SI07はサス組のみで自立する壁の無い竪穴建物であった可能性が大きい。

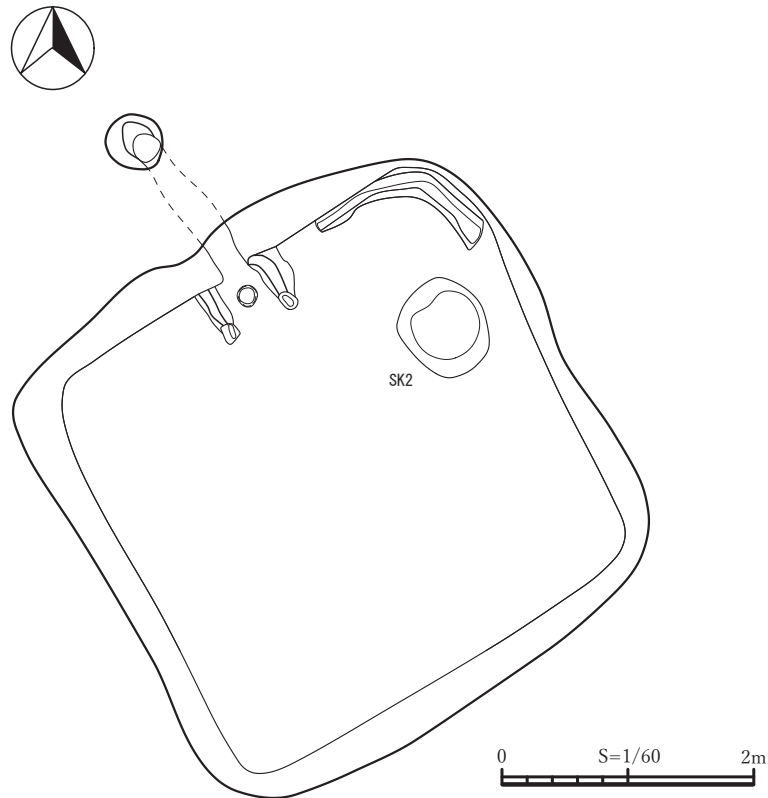
(3) 炭化材

・検出層位

炭化材はメインセク3・4層で検出された。3層上面に白頭山-苦小牧テフラが層状に堆積しているという注記から考えると、メインセク4層以下が小屋構築材や屋根葺き材など火災倒壊に伴う堆積、3層中位から下位が遺構廃絶後の自然堆積、3層上位が降下した白頭山-苦小牧テフラ層、1・2層が白頭山-苦小牧テフラ降下後の自然堆積と理解できる。



第1図 S107炭化材検出状況・断面



第2図 S107火災倒壊時平面

・材形と検出位置

炭化材の検出状況は第1図の通りである。検出された炭化材のうち形状を記録したものは15点で、内訳は板状材7点（炭化材1・3・6・9・13・Pit2-1・Pit2-2）・萱状材1点（炭化材2）・形状不定の破片6点（炭化材4・7・8・10・11・12）・棒状材1点（炭化材5）である。

板状材は全て掘方縁辺部で検出されている。部材方向は掘方東壁と西壁に並行するものばかりである（炭化材1・6・7・9・10・11・13・Pit2-1・Pit2-2）。唯一の棒状材である炭化材5は長さ2,000mm程度、径300mm程度の長大材である。同材は西壁に直交、ないしは南壁に並行する状態で検出されている。

（4）復元検討

・小屋組

唯一の棒状材である炭化材5はサスであろう。上述した通り、SI07は伏屋式サス組の竪穴建物である。検出位置と材径・材長から考えると、同材は小屋南西隅のサス材である可能性が高い。また、同所で西壁に直行、南壁に並行するようにサスが検出されたことから類推すると、SI07の伏屋形状は、南北面を妻・東西面を平とする切妻であった蓋然性が高い。

・屋根葺き材と下地

メインセク3・4層で検出される炭化材と強く被熱した粘土質土が火災倒壊時の小屋組材であろう。被熱粘土質土塊の多くは、炭化材の直上で検出されたが、一部は炭化材よりも下位にあたる床面直上で確認された。検出位置と層位、部材方向などから考えると、炭化材はサス上面に貼られた野地板、被熱粘土質土塊は屋根葺き土と比定できる。

まず、板状の炭化材について考えたい。屋根を葺く場合、小屋組材と葺き材の間に、下地材が必要になる。掘方東壁と西壁付近に多く分布する板状材は、この下地材である野地板だろう。野地板はサスや垂木など、屋根の傾斜方向に並行する棒状材の上面に直交方向に貼られる薄板である。SI07内で検出された板状材は、いずれも部材長辺方向が掘方東西の壁面に並行し、野地板の必要条件を満たしている。また、多くの炭化材が屋根葺き材と考えられる被熱粘土質土直下で検出されていることと併せて考えても野地板と推定するのが妥当であろう。

屋根葺き土と考えられる粘土質土は、強く被熱し、遺構全面に広く分布していた。被熱粘土質土の検出状況から考えると、SI07は全面土葺きの竪穴建物であった可能性が高い。

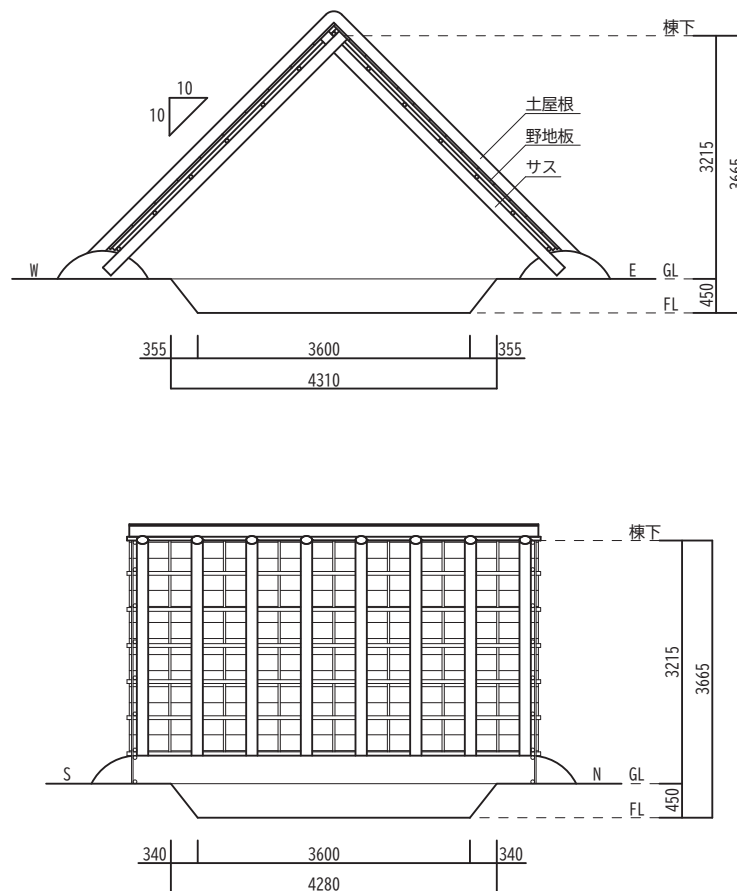
なお、被熱粘土質土塊の多くは、炭化材の直上で検出されているが、一部は炭化材の下位に相当する床面直上で確認されている。野地板の上面に葺かれていたはずの屋根葺き土が、野地板の下面から検出されるという観察内容は、一見すると矛盾するように見える。しかし、このような堆積は火災倒壊した土葺きの竪穴建物では一般的に起きる現象のようだ。

岩手県一戸町の御所野遺跡では、竪穴建物の火災実験を複数回実施している。この実験報告では、本来は炭化材（サス・垂木・小舞・野地板などの小屋組材）の上位に堆積するはずの屋根の葺き土が、炭化材よりも下位に堆積する事例があることが指摘されている²⁾。これは小屋組材が強く被熱したために焼亡し、その上面に載っていた屋根葺き土が脱落してしまうことによる。脱落した屋根葺き土は、強く被熱した状態で竪穴建物の床面直上に堆積する。そして、この上位に時間差をもって火災倒壊し

た小屋組材が載るというメカニズムが報告されている。本遺構の一部で確認できる炭化材下面で検出された被熱粘土質土も、これと同様の事例であると理解したい。

以上、ここまでの分析を総合すると、SI07は第3図のような建物であったと推論できる。SI07は伏屋式サス組の竪穴建物で、形状は南北面を妻・東西面を平とする切妻であろう。この小屋形状だと、サス下端が収まる周堤は、遺構東面と西面にしか作られなかったと想定できる

屋根勾配に関する情報は遺構中からは得られなかった。このためここではサス組という工法の特徴から勾配を推定した。一般に土葺き屋根の屋根勾配は35度程度が妥当であると言われている。土葺き屋根の場合、35度以上の勾配にすると屋根葺き土が流出する³⁾。一方で35度という角度は、サス組という工法にとっては適当ではない。サス組はサスと呼ばれる二本の長大材を、互いに寄りかかるように交差させ、交差部分を緊結する工法である。このためサス組の角度が緩いと構造は安定しない。サス組の安定角度は一般に45度から60度程度だとされている。このように屋根葺き土の流出を防ぐためには35度程度、サス組の安定を優先するなら45度から60度が適当なわけだが、ここでは後者を優先し、屋根勾配は45度にした。この角度にすると構造は安定し、内部空間も高くなる。屋根葺き土は経年で流出するが、都度葺き直しながら使用していたと考えた。



第3図 SI07復元案

3. 第9号竪穴建物所見

(1) 火災時の平面

・掘方

第9号竪穴建物跡（以下SI09）は、ほぼ平坦面に作られた隅丸方形の竪穴建物で、機能年代は9世紀後葉～10世紀前葉である⁴⁾。掘方は南北6,920mm×東西7,200mmと大型で、床面はほぼ平坦である。床面のうち、遺構中央部分は地山を削り出し平坦な床面を作っている。遺構縁辺部は貼床である。カマドと、南壁中央の一部を除き、壁周溝が廻る。カマドは北壁中央でカマド2（新・旧）、南壁西寄りでカマド1が検出されている。調査担当者の所見では、SI09の火災時に機能していたのはカマド1だという。また、カマド2は同位置で二度作り変えられているが、このうちの新段階のものもSI09火災倒壊時に機能していた可能性があるという。

・床面中央の現地性焼土

床面中央で検出された複数の焼土は、いずれも現地性焼土である。いずれの焼土も硬化し、被熱深度も深い。このうちのどれが遺構火災時に機能していたのかは特定できない。

・付属土坑

SI09に付属する土坑は4基あるが、いずれも火災倒壊時には開口・機能していたようだ。（第4図）。SK1は遺構底面に炭化材、その上位に白頭山-苦小牧テフラが堆積していた。これは先述したSI07Pit2と同様に、火災時に被熱した建築部材が遺構内に落下し、その後に白頭山-苦小牧テフラが降下したことを意味している。また、SK4も埋土中に白頭山-苦小牧テフラがあり、やはりSI09廃絶後にも開口していたことが分かる。SK2・SK3はともに白頭山-苦小牧テフラの堆積は認められなかったが、いずれも埋土下位に焼土・炭化物が堆積していた。また、ともに土坑内の遺物と竪穴建物埋土中の遺物が接合する。以上の条件から考えると、やはりSK2・SK3もSI09廃絶時に開口していたと考えられる。

・ピット

SI09に付属するピットは11基ある。遺構火災時に既に存在しなかったと断言できるのは、現地性焼土の下面にあるピットのみである（Pit1）。ピットの配置と深さから考えると、SI09の支柱はPit2・Pit6・Pit7・Pit8になる可能性が大きい。

以上の情報から考えると、SI09火災時の平面はおおよそ第5図の通りになる。

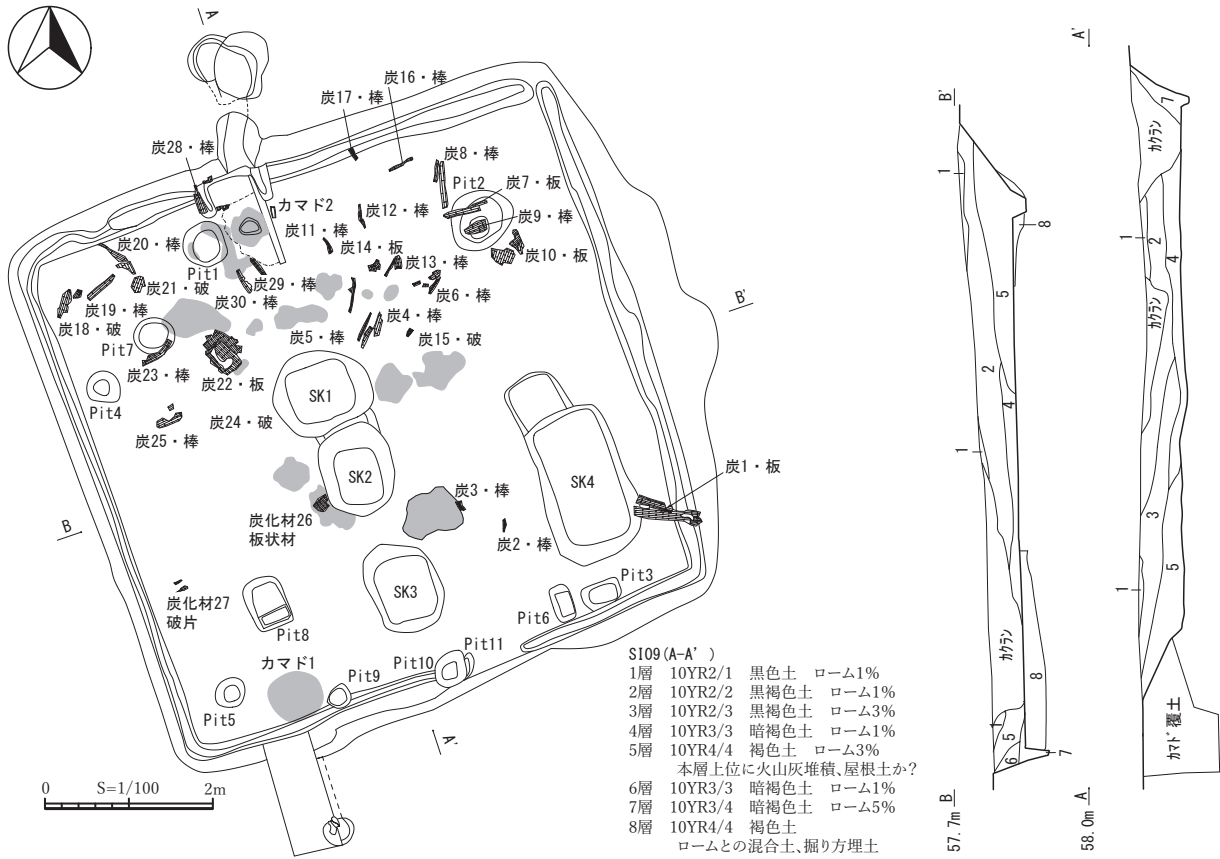
(2) 炭化材の検出傾向

・検出層位

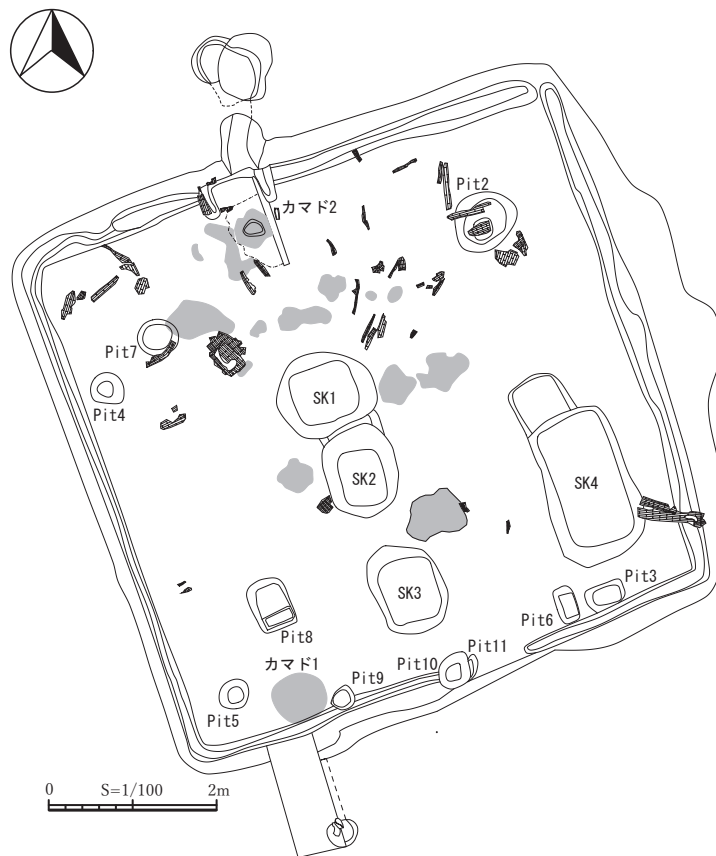
炭化材はメインセク4層以下で検出された。分層と注記から考えると4層以下がSI09の火災倒壊に伴う堆積、5層以上が遺構廃絶後の自然堆積と理解できる。

・材形と検出位置

SI09の炭化材出土状況は第4図の通りである。検出された炭化材のうち形状を記録したものは30点で、内訳は板状材6点（炭化材1・7・10・14・22・26）、棒状材19点（炭化材2・3・4・5・6・8・9・11・12・13・16・17・19・20・23・25・28・29・30）、形状不定の破片5点（炭化材15・18・21・24・27）である。炭化材は遺構北半と東半で多く検出された。棒状材・板状材とも、部材の長辺方向が遺構中央から放射状になる傾向がある。



第4図 S109炭化材検出状況・断面



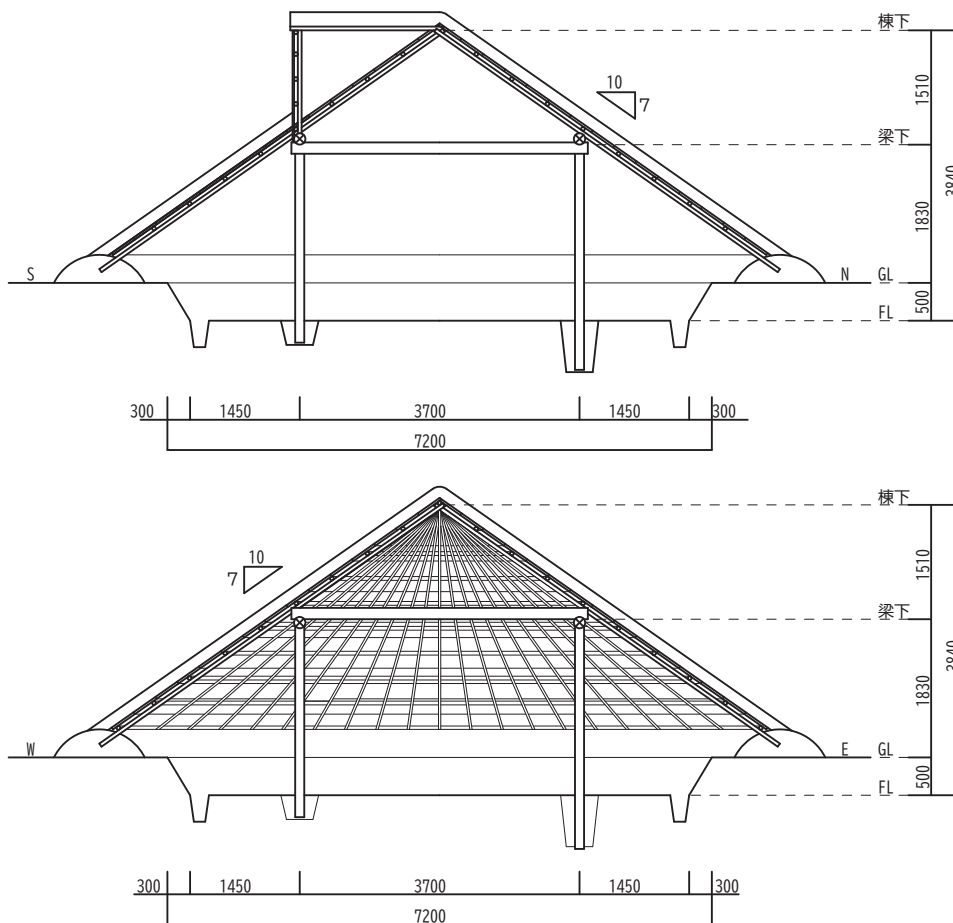
第5図 S109火災倒壊時平面

(3) 復元検討

・軸組

SI09はPit 2・Pit 6・Pit 7・Pit 8を主柱とし、この上に梁・桁を組む軸組であったと考えられる。また、殆どの炭化材の長辺方向が遺構中央から放射状になる傾向があることから考えると、梁・桁上から四方の周堤に向け、放射状に垂木が掛けられていたと考えるのが妥当である。

次に考えるべきなのは四本の主柱内の屋根形状である。四本の主柱外の屋根形状が四方の周堤に向け、放射状に垂木を掛ける形状であったことから考えると、四本の主柱内の屋根形状は、寄棟（方形）・入母屋・方形と入母屋の混用、のいずれかになる可能性が大きい。付属遺構の位置と炭化材の検出状況だけで、屋根形状を断定することはできないが、ここでは北側を寄棟・南側を入母屋とする屋根形状を想定したい。まず、北側を寄棟と考えた根拠だが、これは炭化材の部材方向に拠る。四本の主柱内でも北半で検出される炭化材は明確に放射状になる。このことから考えると同所の収まりは寄棟であった可能性が大きい。一方、南半は炭化材の検出が少なく、決め手に欠ける。復元案では同所を入母屋と考えたが、これはSI09の床面中央にある多くの現地性焼土の存在を勘案したものである。これら現地性焼土の存在からも分かるように、SI09は屋内で頻繁に火を使う建物だった。排煙を考慮するならば、煙り出しの無い寄棟よりも、開口を設けられる入母屋が優る。以上の理由からここでは北側を寄棟・南側を入母屋とする変則的な屋根形状を想定した。



第6図 SI09復元案

・屋根葺き材と勾配

SI09も遺構全面で屋根葺き土と推論できる被熱粘土質土が検出されている。SI09もやはり全面土葺き屋根の竪穴建物であったと考えたい。屋根勾配は35度と推論した。平面規模の大きいSI09は屋根を急勾配にしなくても、屋内には十分な高さがある。

以上、ここまでの分析を総合すると、SI07は第6図のような建物であったと推論できる。

4. おわりに

以上本稿では、北熊ノ沢(2)遺跡のSI07とSI09の上屋構造の具体について検討を行った。

結果、SI07は伏屋式切妻屋根の竪穴建物で全面土葺きである可能性が大きいことを明らかにした。また、SI09も同じく伏屋式で全面土葺きの竪穴建物であるが、屋根形状は寄棟か入母屋、ないしはその混用である可能性が大きいことなどを明らかにした。

註

1. 本書103ページ、SI07事実記載文参照
2. 村本周三他2006
3. 一戸町教育委員会2017
4. 本書112ページ、SI09事実記載文参照

参考文献

- 秋田県埋蔵文化財調査センター 2016『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第502集
一戸町教育委員会 2017『御所野遺跡環境整備事業報告書Ⅲ 総括報告書』一戸町文化財調査報告書第71集
中村隼人 2015「第410号竪穴建物跡の復元」『赤坂遺跡Ⅲ』青森県埋蔵文化財調査報告書第552集
中村隼人 2022「法霊林遺跡第6号竪穴建物跡の復元検討」『法霊林遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第629集
村本周三・高田和徳・中村明央 2006「岩手県御所野遺跡における竪穴住居火災実験」『考古学と自然科学』53 日本文化財科学会

第4節 まとめ

1 縄文時代

今回の調査では、落とし穴や土坑は一定数検出したものの、竪穴建物は検出できておらず、遺物も早期中葉～後葉の土器が比較的まとまって出土した以外は、散発的なものであった。そのため、本遺跡は縄文時代を通じて、海産資源の漁場へアクセスするためのキャンプサイト的な利用や、狩猟場としての利用など、限定的な利用が主であったと考えられる。

特筆される遺構として、早期後葉の貝殻集中地点がある。貝類は比較的大型のものを選んで採取している。採集時期の季節性などまでは考察できなかったが、短期集中的に貝類採取を行っていたと考えられる。同じ台地の北側に位置する長七谷地貝塚とは、やや組成が異なり、むしろ赤御堂貝塚と似る。遺跡の立地により、一口に砂泥性の貝類採取といっても、微妙な生息域の違いが影響していることが裏付けられ、当該期における周辺環境への適応、資源利用を知る上での貴重な事例となった。

2 平安時代

今回の調査では、9世紀後葉～10世紀前葉に営まれた集落遺跡であることが明らかとなった。

集落の変遷は、十和田 a テフラ降下前と、それ以後の白頭山・苫小牧テフラ降下前までという大きく2つの段階が捉えられる。鉄製品や鉄生産関連遺物も少量ながら出土していることから、調査区外の周辺で鍛冶作業も行い、南側の低位段丘を含め、小規模ながらも完結した集落生活を営んでいたものと考えられる。いくつかの竪穴建物跡では、カマド周りに遺物を散布し、建物に火を放って廃絶していることが確認できた。平安時代の焼失建物跡は周辺遺跡でも散見され、全国各地でも発掘されているが、その原因については、失火や戦乱に伴う焼き討ち、アイヌの民族例に見られる家送りの習俗など、様々な可能性が考えられ、炭化材の残り方や埋没状況、建物内の遺物分布状況など様々な要素を含めて検討する必要が指摘されている（岡村2007）。今回の調査における検出事例は、焼失建物跡にのみカマド周りの遺物の散布が見られる点、SI07・SI09に見られる遺構間接合の状況や遺物の被熱状況などから、遺物の散布と建物の焼失がセットとなっており、儀礼的な意味合いを持つ可能性が高い。また、規模は小さいが、掘立柱建物跡も4棟検出しており、倉庫等として竪穴建物跡と共に集落を構成する要素の一つであった可能性がある。

今回の調査で出土した土師器は、9世紀後葉～10世紀前葉を主体とする資料と考えられる。須恵器は、一定量の出土があったものの、大きく歪んだものや、焼成が不十分で赤褐色を呈するものなど、一般的な流通品と比べると、やや出来が劣るものが目につく。今回は胎土分析を行うことができなかったため、本遺跡における須恵器の流通についてはまだ検討の余地があり、今後の課題である。土製品では、八戸市域で初となる平安時代のキノコ形土製品が出土した。また、規格性の高いレンガ状土製品も特筆されるが、用途など不明な点が多く、今後の類例増加を待ちたい。

本遺跡周辺では、続く時期に林ノ前遺跡や熊野堂遺跡など、大規模な集落が展開する。本遺跡は、短時間で廃絶されたものの、それら大規模集落成立以前の生活を示す集落遺跡として重要な事例であると言える。

(中門)

引用・参考文献

- 猪熊樹人 2008 「北海道根室市のオオノガイ漁－縄文時代～近世のオオノガイ利用を考えるための漁業調査－」『動物考古学』第25号 動物考古学会
- 宇部則保 2013 「古代馬淵川流域周辺の土器様相」『研究紀要』第2号 八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館
- 岡村道雄 2007 「焼失竪穴建物研究の方法と可能性」『奈良文化財研究所紀要』奈良文化財研究所
- 工藤竹久 1989 「縄文尖底系土器様式」『縄文土器大観 第1巻 草創期 早期 前期』小林達雄・小川忠博編 小学館
- 熊谷常正 2008 「縄文条痕文系土器」『総覧 縄文土器』小林達雄編 アム・プロモーション
- 杉山陽亮 2019 「貝塚からみる海進・海退と生業の変化～八戸周辺の様相～」『岩手考古学会 第51回研究大会資料集 北日本の貝塚と縄文人』岩手考古学会
- 高橋 哲 2017 「川原平(4)遺跡出土石器の分析」『研究紀要』第22号 青森県埋蔵文化財調査センター
- 富樫泰時 1976 「トランシェ様式について」『東北考古学の諸問題』東北考古学会編
- 茅野嘉雄 2006 「八戸市潟野遺跡出土土器等から見た吹切沢式・鳥木沢式・物見台式」『第4回 縄文時代早期中葉土器群の再検討－資料集－』海峡土器編年研究会
- 辻誠一郎・安芸早穂子・早川裕弐・吉川昌伸・吉川純子・鈴木茂・植田弥生・安昭炫・一木絵里・市川健夫・西村広経 2018 「八戸地域における縄文時代の環境変動と景観復元」『研究紀要』第7号 八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館
- 福田友之 2012 『青森県の貝塚－骨角器と動物食料－』北方新社
- 船木義勝 編 2014 『9～11世紀の土器編年構築と集落遺跡の特質からみた、北東北世界の実態的研究』
- 松田光太郎 2008 「貝殻文」『総覧 縄文土器』小林達雄編 アム・プロモーション
- 八木光則 2010 『古代蝦夷社会の成立』ものが語る歴史21 同成社
- 領塚正浩 2008 「貝殻・沈線文系土器」『総覧 縄文土器』小林達雄編 アム・プロモーション
- 青森県 2005 『青森県史 資料編 考古3 弥生～古代』青森県史編さん考古部会編
- 青森県 2013 『青森県史 資料編 考古2 縄文後期・晩期』青森県史編さん考古部会編
- 青森県 2017 『青森県史 資料編 考古1 旧石器 縄文草創期～中期』青森県史編さん考古部会編
- 青森県教育委員会 1980 『長七谷地貝塚遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第57集
- 青森県教育委員会 1984 『和野前山遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第82集
- 青森県教育委員会 1985 『石ノ窪(1)・石ノ窪(2)・古宮遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第92集
- 青森県教育委員会 1985 『売場遺跡(第1次、第2次、第3次、第4次調査)・大タルミ遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第93集
- 青森県教育委員会 1988 『前比良遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第108集
- 青森県教育委員会 1995 『山元(2)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第171集
- 青森県教育委員会 1996 『野尻(2)遺跡Ⅱ・野尻(3)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第186集
- 青森県教育委員会 1999 『櫛引遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第263集
- 青森県教育委員会 2000 『岩ノ沢平遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第287集
- 青森県教育委員会 2006 『東道ノ上(3)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第424集
- 青森県教育委員会 2007 『太田野(2)遺跡・太田野(3)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第427集
- 青森県教育委員会 2010 『上野遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第486集
- 青森県立郷土館 1992 『小川原湖周辺の貝塚』青森県立郷土館調査報告書第31集
- (財)北海道埋蔵文化財センター 1996 『函館市 石倉貝塚』(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書第109集
- 階上町教育委員会 2002 『青森県階上町小板橋(2)遺跡』
- 八戸市教育委員会 1976 『赤御堂遺跡発掘調査概要報告書』
- 八戸市教育委員会 1980 『長七谷地貝塚発掘調査報告書』八戸市埋蔵文化財調査報告書第3集
- 八戸市教育委員会 1982 『長七谷地遺跡発掘調査報告書 長七谷地2・7・8号遺跡』八戸市埋蔵文化財調査報告書第8集
- 八戸市教育委員会 1986 『八戸新都市区域内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ』八戸市埋蔵文化財調査報告書第17集
- 八戸市教育委員会 1989 『熊野堂遺跡発掘調査報告書』八戸市埋蔵文化財調査報告書第32集
- 八戸市教育委員会 1989 『赤御堂遺跡発掘調査報告書』八戸市埋蔵文化財調査報告書第33集
- 八戸市教育委員会 1993 『岩ノ沢平遺跡発掘調査報告書Ⅱ』八戸市埋蔵文化財調査報告書第50集
- 八戸市教育委員会 2003 『市内遺跡発掘調査報告書16』八戸市埋蔵文化財調査報告書第96集
- 八戸市教育委員会 2013 『狼走(2)遺跡 北熊ノ沢(2)遺跡』八戸市埋蔵文化財調査報告書第145集
- 三沢市教育委員会 2004 『山中(1)貝塚』三沢市埋蔵文化財調査報告書第22集

表9 竪穴建物跡計測表

遺構	時期	形態及び構造										付属施設		カマド					火山灰	重複	遺構間 接合
		分類	焼失	長軸 (cm)	短軸 (cm)	床面積 (㎡)	深さ (cm)	主軸 方向	柱 構造	壁 溝	土 坑	構築 材	構築 位置	破壊	構築 方法	煙道長 (cm)	煙道 構造	煙道 傾き			
S101	9c後～ 10c初	小形	○	257	(235)	(5.2)	49	N- 160° -E	-	-	有	不明	SW	○	竪穴 内	(131)	地下	床面 以下	To-a	-	S109 SK26
S102	9c後～ 10c初	大形	-	583	(434)	(19.7)	90	N- 23° -W	4本?	有	-	粘土	NC	-	竪穴 内	(45)	地下	不明	To-a	-	-
S103	9c後～ 10c初	大形	-	491	481	(20.1)	44	N- 43° -E	-	有	有		NE	-	竪穴 内	187	地下	床面 以下	To-a	SK19 より古	SK19
S104	9c後～ 10c前	不明	○	(130)	(100)	(1.3)	100	不明	-	-	-	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	有	-	-
S105	9c後～ 10c中	小形	-	301	285	6.7	20	N- 17° -W	-	-	有	粘土	NC →ES →NE	○	竪穴 内	96 →114 →109	半地下 →地下 or 半地下 →地下	上昇 →床面 以下 →床面 以下	-	SB01 より新	S107 S109
S106	10c前	小形	-	269	250	4.8	40	N- 7° -W	-	-	-	粘土	NE	-	竪穴 内	95	地下	上昇	-	-	-
S107	9c後～ 10c前	中形	○	428	413	15.5	45	N- 30° -W	-	有	有	粘土 + 軽石	NC	-	竪穴 内	112	地下	床面 以下	B-Tm	-	S109
S108	9c後～ 10c前	大形	-	440	437	19.4	78	N- 29° -W	-	-	有	粘土	NC	○	竪穴 内	120	地下	床面 以下	有	-	-
S109	9c後～ 10c前	特大 形	○	776	692	38.3	57	N- 19° -W	4本	有	有	粘土	1:SW 2:NC	○	竪穴 内	1:117 2旧:159 2新:151	地下	床面 以下 →不明 →床面 以下	To-a B-Tm	-	S101 S105 S107

表10 柱穴計測表

遺構	位置	検出面	平面形 (cm)	深さ (cm)
SP01	U-21	IV	39 × 37	6
SP02	U-21	IV	46 × 44	7
SP03	Y-25	IV	73 × 63	55
SP04	U-24	IV	28 × 24	40
SP05	S-26	IV	29 × 27	26

遺構	位置	検出面	平面形 (cm)	深さ (cm)
SP06	W-25	IV	39 × 38	42
SP07	W-25	IV	50 × 42	48
SP08	W-25	IV	41 × 35	39
SP09	X-25	IV	37 × 34	67
SP10	X-24	IV	39 × 37	45

遺構	位置	検出面	平面形 (cm)	深さ (cm)
SP11	W-23	IV	33 × 30	24
SP12	W-24	IV	38 × 37	32
SP18	W-23	IV	48 × 43	35
SP19	U-22	IV	41 × 40	43
SP20	U-22	IV	75 × 49	37

表11 縄文土器観察表

図	No.	出土 位置	出土層位 取上番号等	器種	部位	内面特徴	外面特徴	分類	備考
70	1	SK02	覆土	深鉢	胴部		ミガキ	I 1 (3) ⑤	
70	2	SK04	覆土	深鉢	頸部		爪形刺突 (1列)、貝殻腹縁 文	I 1 (1)	
70	3	SK04	覆土	深鉢	胴部		貝殻腹縁文 (羽状、縦位)	I 1 (3) ②	
70	4	SK04	覆土	深鉢	胴部		貝殻条痕文	I 1 (3) ④	
70	5	SK04	覆土	深鉢	胴部		ケズリ	I 1 (3) ⑤	
70	6	SK04	覆土	深鉢	胴部		ミガキ	I 1 (3) ⑤	
70	7	SK07	覆土	深鉢	胴部		貝殻押引文・刺突 (籠状工具)	I 1 (3) ①	
70	8	SK07	覆土	深鉢	胴部		ミガキ	I 1 (3) ⑤	
70	9	SK07	覆土	深鉢	口縁部	ユピアト	R L (横位)	I 2 ⑤	
70	10	SK07	覆土	深鉢	胴部	L R (縦位)	L R (横位)	I 2 ⑤	
70	12	SK08	覆土	深鉢	口縁部	ケズリ?	貝殻腹縁文 (縦位)	I 1 (3) ②	波状口縁、口唇部刺突 (籠状 工具)、補修孔 (片側穿孔)
70	13	SK09	覆土	深鉢	胴部	ユピアト	L R (横位)	I 2 ⑤	小礫混入、海綿骨針混入
70	14	SK10	覆土	深鉢	口縁部	貝殻条痕文	R L (横位)	I 2 ⑤	
70	15	SK17	覆土	深鉢	胴部	ナデ?	貝殻腹縁文 (縦位)	I 1 (3) ②	小礫混入
70	16	SK15	覆土	深鉢	胴部	貝殻条痕文	貝殻条痕文、刺突 (籠状工 具?)	I 1 (3) ④	
70	17	SK15	覆土	深鉢	底部		ミガキ	I 1 (3) ⑤	小礫混入

図	No.	出土位置	出土層位 取上番号等	器種	部位	内面特徴	外面特徴	分類	備考
70	18	SK15	覆土	深鉢	胴部	ミガキ	ミガキ	I 1(3) ⑤	小礫混入、海綿骨針混入
70	19	SK15	覆土	深鉢	口縁部	ユビアト	R L (横位)、沈線(2条、波状)	I 2③	口唇部刺突(籠状工具)、小礫混入、海綿骨針混入
70	20	SK15	覆土	深鉢	胴部		R R (横走)	I 2⑤	砂粒混入、赤褐色粒混入、海綿骨針混入
70	21	SK18	覆土	深鉢	胴部	ナデ?	貝殻押引文(横位)、ケズリ?	I 1(3) ①	海綿骨針混入
70	22	SK18	覆土	深鉢	胴部		ミガキ	I 1(3) ⑤	土製品の可能性あり
70	25	SK20	覆土	深鉢	口縁部		貝殻押引文(斜位)	I 1(2)	波状口縁、口唇部刺突(籠状工具)
70	26	SK20	覆土	深鉢	口縁部	貝殻条痕文	貝殻腹縁文(斜位)	I 1(3) ②	波状口縁、口唇部刺突(籠状工具)
70	27	SK20	覆土	深鉢	口縁部		貝殻押引文(斜位)	I 1(3) ①	波状口縁、口唇部刺突(籠状工具)
70	28	SK20	覆土	深鉢	口縁部	ケズリ	貝殻押引文(斜位)	I 1(3) ①	波状口縁、口唇部刺突(籠状工具)
70	29	SK20	覆土	深鉢	口縁部	ケズリ	ケズリ	I 1(3) ⑤	ミニチュア土器か?
70	30	SK20	覆土	深鉢	胴部		ケズリ	I 1(3) ⑤	小礫混入
70	31	SK20	覆土	深鉢	底部	ナデ?	貝殻押引文(横位・斜位)	I 1(3) ①	小礫混入、海綿骨針混入
70	32	SK20	覆土	深鉢	胴部		ケズリ、赤化(被熱?)	I 1(3) ⑤	底部付近、小礫混入、赤褐色粒混入
70	33	SK20	覆土	深鉢	底部	ナデ?	ケズリ	I 1(3) ⑤	小礫混入
71	1	SK20	覆土	深鉢	胴部	ケズリ	ケズリ	I 1(3) ⑤	
71	2	SK20	覆土	深鉢	胴部	ケズリ	ケズリ	I 1(3) ⑤	底部付近
71	3	SK20	覆土	深鉢	胴部	ケズリ	ケズリ	I 1(3) ⑤	
71	4	SK20	覆土	深鉢	口縁部	ユビアト	R L (横位)、側面圧痕(R L、2条)	I 2①	口唇部刺突(縄文?)
71	5	SK20	覆土	深鉢	頸部	ユビアト	R L (横位)、刺突(籠状工具? 沈線状)	I 2③	
71	6	SK20	覆土	深鉢	胴部	内面剥離	R L? (縦位)、沈線、磨消	III 2	
71	10	SK24	覆土	深鉢	胴部		貝殻条痕文(斜位)	I 1(3) ④	やや硬質
71	11	SK24	覆土	深鉢	胴部		ケズリ	I 1(3) ⑤	砂粒多量混入、軟質
71	12	SK24	覆土	深鉢	胴部	ミガキ	ミガキ	I 1(3) ⑤	やや硬質
71	13	SK24	覆土	深鉢	口縁部	ユビアト	R L (横位)	I 2⑤	口唇部刺突(籠状工具)、軟質
71	14	SK24	覆土	深鉢	胴部		L R (横位)	I 2⑤	砂粒多量混入、多孔質、軟質
71	15	SK25	覆土	深鉢	胴部	ケズリ	ケズリ、小円状剥離(被熱?)	I 1(3) ⑤	
71	16	SK25	覆土	深鉢	口縁部	ユビアト	R L (横位)	I 2⑤	口唇部刺突(籠状工具)
71	17	SK25	覆土	深鉢	口縁部	ユビアト	R L (横位)	I 2⑤	輪積痕、口唇部刺突(籠状工具)
71	18	SK25	覆土	深鉢	口縁部	ユビアト	R L (横位)	I 2⑤	口唇部刺突(指?)、砂粒混入、赤褐色粒混入、海綿骨針混入、補修孔(外面穿孔)
71	19	SK25	覆土	深鉢	胴部		R L (横位)	I 2⑤	
71	20	SK25 T-24	覆土 IV層相当	深鉢	胴部	ユビアト	R L (横位)	I 2⑤	小礫混入、軟質
72	1	SK27	覆土	深鉢	胴部	ユビアト	R L (横位)	I 2⑤	褐色粒混入、海綿骨針混入
72	2	SK27	覆土	深鉢	胴部		R L (縦位)	III 3	砂粒混入
72	3	SK29	覆土	深鉢	胴部	ケズリ	貝殻腹縁文(斜位)	I 1(3) ②	小礫混入
72	4	SK31	覆土	深鉢	胴部	ケズリ?	貝殻腹縁文(縦位)	I 1(3) ②	
72	5	SK31	覆土	深鉢	胴部	ユビアト	R L (0段多条、横位)	I 2⑤	
72	6	SK34	覆土	深鉢	胴部	剥離(被熱?)	R L (縦位)	III 3	
72	7	SK35	覆土	深鉢	口縁部	ユビアト	R L (横位)、側面圧痕(R L、1条)	I 2①	口唇部刺突(籠状工具)、補修孔(外面穿孔)
72	9	SK36	覆土	深鉢	胴部	ミガキ	L R (縦位)	III 3	
72	10	SK37	覆土	深鉢	胴部	ケズリ?	ケズリ?	I 1(3) ⑤	砂粒混入
72	11	SK37	覆土	深鉢	胴部	ケズリ?	L R (横位)	I 2⑤	
72	12	SK38	覆土	深鉢	胴部	ケズリ	貝殻腹縁文(二枚貝3類、羽状、横位)	I 1(3) ②	小礫混入、赤褐色粒混入
72	13	SK38	覆土	深鉢	胴部	R L (横走)	L R (横位)	I 2⑤	
72	14	SK40	覆土	深鉢	胴部		貝殻腹縁文(羽状、横位)	I 1(3) ②	砂粒混入
72	15	SK40	覆土	深鉢	口縁部 ~胴部	ケズリ(横位)	貝殻腹縁文(羽状、縦位)、刺突(棒状工具)、ミガキ	I 1(3) ②	波状口縁、波頂部突起貼付、口唇部刺突(籠状工具)、小礫混入、口径(29.6)cm
72	16	SK41	覆土	深鉢	胴部	貝殻条痕文	ケズリ	I 1(3) ⑤	小礫混入、軟質
72	17	SK41	覆土	深鉢	底部	ユビアト、ナデ	ケズリ、ナデ?、赤化(被熱?)	I 1(3) ⑤	平底、小礫混入、底径5.6cm
72	18	SK41	覆土	深鉢	底部			I 1(3) ⑤	
72	19	SK41	覆土	深鉢	胴部	ナデ?	R L (0段多条、横走)	I 2⑤	小礫混入
72	21	SK46	覆土	深鉢	胴部	ナデ?	L R (横位)	I 2⑤	小礫混入、硬質
72	22	SK46	覆土	壺	肩部	ミガキ?	L R (縦位)	III 3	砂粒混入
78	1	SV01	覆土	深鉢	口縁部	ユビアト、R L (縦走)?	R L (横位)	I 2⑤	口唇R L回転
78	2	SV01	覆土	深鉢	胴部	R L (横走)	R L (横位)	I 2⑤	

図	No.	出土位置	出土層位 取上番号等	器種	部位	内面特徴	外面特徴	分類	備考
78	6	SV02	覆土	深鉢	口縁部	ユビアト	R L (横位)、側面圧痕 (R L、1条)	I 2①	口唇 R L 回転
78	7	SV02	覆土	深鉢	口縁部	ユビアト、爪形刺突	R L (横位)、側面圧痕 (R L、2条)	I 2①	口唇部刺突 (筥状工具)
78	8	SV02	覆土	深鉢	胴部	ユビアト	R L (横位)	I 2⑤	
78	9	SV03	覆土	深鉢	胴部		ケズリ	I 1(3) ⑤	海綿骨針混入
78	10	SV03	覆土	深鉢	胴部	ユビアト	R L (横位)	I 2⑤	
78	11	SV03	覆土	深鉢	胴部	ユビアト	R L (縦位)	III 3	
78	12	SV04	覆土	深鉢	胴部	ユビアト	R L (横位)	I 2⑤	
78	14	SV05	覆土	深鉢	口縁部		貝殻押引文、粘土隆貼付	I 1(2)	口唇部刺突 (筥状工具)
78	15	SV05	覆土	深鉢	胴部	貝殻条痕文	貝殻押引文、沈線 (鋸歯状、縦位)	I 1(2)	
78	16	SV05	覆土	深鉢	口縁部		貝殻条痕文、貝殻腹縁文	I 1(3) ④	口唇部刺突 (貝)
78	17	SV05	覆土	深鉢	胴部		ケズリ?	I 1(3) ⑤	底部付近
78	18	SV05	覆土	深鉢	胴部		ミガキ	I 1(3) ⑤	
78	19	SV05	覆土	深鉢	口縁部	R L (横位)	R L (横位)	I 2⑤	口唇部刺突 (筥状工具)
78	20	SV05	覆土	深鉢	口縁部		R L (横位)?、沈線 (2条)	I 2②	口唇部 R L 回転
78	21	SV05	覆土	深鉢	口縁部	貝殻条痕文、ユビアト	R L (横位・縦位)、側面圧痕 (R L、1条)	I 2①	口唇部 R L 回転
78	22	SV05	覆土	深鉢	胴部	R L (横走)	R L (横位)、黒色物質付着	I 2⑤	
79	1	SV06	覆土	深鉢	胴部	ユビアト	R L (横位)	I 2⑤	
79	2	SV06	覆土	深鉢	胴部		R (横位)	III 3	
79	3	SV07	覆土	深鉢	胴部		R L (縦位)	III 3	
79	4	SV12	覆土	深鉢	口縁部	黒色物質付着	ケズリ?	I 1(3) ⑤	
79	5	SV14	覆土	深鉢	口縁部		貝殻腹縁文 (羽状、横位)	I 1(3) ②	口唇部刺突 (筥状工具)
79	6	SV14	覆土	深鉢	底部		ケズリ、赤化 (被熱?)	I 1(3) ⑤	砂粒混入
79	7	SV13	覆土	深鉢	胴部	貝殻条痕文	貝殻押引文 (内面施文、横位)	I 1(3) ①	
79	8	SV13	覆土	深鉢	胴部		貝殻押引文 (斜位)	I 1(3) ①	小礫混入
79	9	SV13	覆土	深鉢	胴部	貝殻条痕文	ケズリ	I 1(3) ⑤	
79	10	SV15	覆土	深鉢	胴部		R L (0段多条、横位)	III 3	
79	11	SV19	覆土	深鉢	頸部		爪形刺突 (2列)	I 1(1)	
79	12	SV19	覆土	深鉢	底部			I 1(3) ⑤	
79	13	SV19	覆土	深鉢	胴部		ケズリ?、刺突 (貝、横位)	I 1(3) ⑤	
79	14	SV19	覆土	深鉢	胴部	ナデ?	ミガキ	I 1(3) ⑤	小礫混入
79	15	SV19	覆土	深鉢	胴部	ユビアト	ミガキ?	I 1(3) ⑤	小礫混入、軟質
79	16	SV19	覆土	深鉢	胴部	ユビアト、貝殻条痕文?	R L (横位)	I 2⑤	小礫混入
79	17	SV20	覆土	深鉢	口縁部	ナデ?	爪形刺突 (2列)	I 1(1)	口唇部刺突 (筥状工具)
79	18	SV21	覆土	壺	肩部		沈線	III 2	
79	19	SV22	覆土	深鉢	胴部	小円状剥離 (被熱?)	貝殻条痕文?	I 1(3) ④	小礫混入、赤褐色粒混入
79	20	SV22	覆土	深鉢	胴部	ケズリ?	ケズリ	I 1(3) ⑤	小礫混入
79	21	SV22	覆土	深鉢	胴部	ナデ?	R L (縦位)	III 3	
79	22	SV23	覆土	深鉢	口縁部	ユビアト、ナデ?	ケズリ	I 1(3) ⑤	砂粒混入、繊維混入?
79	23	SV24	覆土	深鉢	胴部	小円状剥離 (被熱?)	ミガキ?、脆い (被熱?)	I 1(3) ⑤	
79	24	SV24	覆土	深鉢	胴部	ナデ	ミガキ	I 1(3) ⑤	小礫混入
79	25	SV24	覆土	深鉢	口縁部	ユビアト	L R (横位)、側面圧痕 (L R、2条)	I 2①	口唇部 L R 回転
79	26	SV24	覆土	深鉢	口縁部	R L (0段多条・横位)	R L (0段多条、横位)、側面圧痕 (R L、2条)	I 2①	口唇部側面圧痕 (R L)、砂粒混入、海綿骨針混入、図79-27と同一個体
79	27	SV24	覆土	深鉢	口縁部 ~胴部	R L (0段多条・横位)	R L (0段多条、横位)、側面圧痕 (R L、2条)	I 2①	口唇部側面圧痕 (R L)、砂粒混入、海綿骨針混入、口径26.6cm、図79-26と同一個体
79	28	SV25	覆土	深鉢	胴部	小円状剥離 (被熱?)	ケズリ、沈線	I 1(3) ⑤	小礫混入、赤褐色粒混入
79	29	SV25	覆土	深鉢	口縁部	ユビアト	L R (横位)	I 2⑤	口唇部刺突 (筥状工具)、小礫混入、海綿骨針混入
79	30	SV25	覆土	深鉢	胴部	R L (横位)	R L (横位)	I 2⑤	R L (横位)
80	1	SN01	覆土	深鉢	胴部		貝殻押引文 (横位)	I 1(3) ①	
80	2	SN01	覆土	深鉢	胴部		R L (横位)	I 2⑤	
82	1	貝集中3		深鉢	胴部	ミガキ	貝殻押引文 (横位)	I 1(3) ①	
82	2	貝集中3 W-15	II・IV層	深鉢	胴部		ミガキ?	I 1(3) ⑤	小礫混入
82	3	貝集中3-1	貝層下	深鉢	口縁部	ユビアト	L R (横位)、沈線 (2条)	I 2②	口唇部 L R 回転
82	4	貝集中W-15	II~IV層	深鉢	口縁部	ユビアト、L R (0段多条・横位)	L R (0段多条、横位)、口縁ナデ	I 2⑤	口唇部 L R 回転
82	5	貝集中3	P-2、II~IV層	深鉢	口縁部 ~胴部	L R (0段多条・横位)	L R (0段多条、横位)	I 2⑤	口唇部 L R 回転、小礫混入、赤褐色粒混入、補修孔 (両面穿孔)、口径22.1cm
82	6	貝集中3 貝集中1 周辺 W-15	I~IV層	深鉢	口縁部 ~胴部	ユビアト	R L (横位)、隆帯、隆帯上に R L (横位)、隆帯直下に沈線状の縁取	I 2④	海綿骨針混入、赤褐色粒混入、補修孔 (外面穿孔)、口径29.0cm

図	No.	出土位置	出土層位 取上番号等	器種	部位	内面特徴	外面特徴	分類	備考
82	7	貝集中3 貝集中3 W-15	P-1 II・IV層	深鉢	口縁部 ~胴部	ユビアト	R L (横位)、隆帯、隆帯上にR L (横位)、隆帯直下に沈線状の縁取	I 2④	海綿骨針混入、赤褐色粒混入、補修孔(外面穿孔)、口径25.0 cm
82	8	貝集中 W-15	II~IV層	深鉢	口縁部	L R (横位)	L R (横位)、側面圧痕(L R、2条)	I 2①	口唇部L R回転
82	9	貝集中3 W-15		深鉢	底部		R L (横位)	I 2⑤	
83	1	S-27	攪乱	深鉢	口縁部	ナデ	爪形刺突(3列)、ナデ	I 1(1)	口唇部刺突(籠状工具?)、硬質
83	2	Q-27	確認面	深鉢	口縁部	ナデ?	爪形刺突(2列)、沈線	I 1(1)	口唇部刺突(籠状工具)
83	3	X-28周辺	I層	深鉢	口縁部	ナデ?	爪形刺突(3列)、貝殻条痕文	I 1(1)	口唇部刺突(貝?)
83	4	P-26	確認面	深鉢	口縁部	ミガキ?	貝殻押引文(横位)	I 1(2)	波状口縁、波頂部貼付、口唇部刺突(棒状工具)、小礫混入
83	5	V-17	IV層	深鉢	口縁部	貝殻条痕文?	貝殻腹縁文腹(縦位)、刺突(籠状工具)	I 1(2)	波状口縁、波頂部貼付、口唇部刺突(籠状工具)
83	6	S101	覆土	深鉢	胴部		貝殻押引文(横位)、沈線(鋸歯状、縦位)	I 1(2)	
83	7	I B-27 Y-24	確認面 I層	深鉢	口縁部 ~胴部	ユビアト、ナデ	貝殻押引文(縦位・斜位)、沈線(鋸歯状、斜位)、隆帯(鋸歯状)、隆帯上に刺突(貝)、黒色物質付着	I 1(2)	口唇部刺突(貝)、小礫混入、海綿骨針混入、補修孔(両側穿孔)、口径(23.0) cm
83	8	W-16	IV層	深鉢	底部		貝殻腹縁文(縦位)	I 1(2)	小礫混入、脆い(被熱?)
83	9	表探		深鉢	口縁部	ナデ?	貝殻押引文(横位)	I 1(3)①	波状口縁、口唇部刺突(籠状工具)、小礫混入、脆い
83	10	I B-27	確認面	深鉢	口縁部	ユビアト、ナデ?	貝殻押引文(横位)	I 1(3)①	波状口縁刺突、口唇部刺突(籠状工具)、小礫混入
83	11	W-16	IV層	深鉢	口縁部	ユビアト、ナデ?	貝殻押引文(横位)	I 1(3)①	口唇部刺突(籠状工具)、小礫混入
83	12	南斜面	トレンチ2	深鉢	口縁部	ミガキ?赤化(被熱?)	貝殻押引文(内面施文、斜位)	I 1(3)①	波状口縁、口唇面取、砂粒混入
83	13	南斜面	IV層相当	深鉢	口縁部	貝殻条痕文	貝殻押引文(斜位)、刺突(籠状工具)	I 1(3)①	波状口縁、口唇部刺突(籠状工具)、海綿骨針混入
83	14	S101	覆土	深鉢	口縁部		貝殻押引文(斜位)	I 1(3)①	口唇部刺突(籠状工具)
83	15	貝1周辺	I~IV層	深鉢	口縁部	ナデ?	貝殻押引文(内面施文、斜位)、刺突(極細の棒状工具)	I 1(3)①	波状口縁、口唇部刺突(籠状工具)、砂粒混入、補修孔(両側穿孔)
83	16	南東斜面	IV層相当	深鉢	頸部	ナデ?	貝殻押引文(横位)	I 1(3)①	小礫混入、脆い(被熱?)
83	17	表探		深鉢	頸部	貝殻条痕文	貝殻押引文(横位)	I 1(3)①	砂粒混入、海綿骨針混入
83	18	S102	覆土	深鉢	頸部	ケズリ	貝殻押引文(内面施文、斜位)	I 1(3)①	小礫混入
83	19	南斜面	トレンチ1	深鉢	頸部	ナデ	貝殻押引文(横位)、刺突(棒状工具、鋸歯状)	I 1(3)①	小礫混入、海綿骨針混入
83	20	S101	覆土	深鉢	頸部		貝殻押引文(横位)、刺突(棒状工具)	I 1(3)①	
83	21	南斜面区	I~IV層	深鉢	頸部	ナデ	貝殻押引文(内面施文、斜位)、刺突(籠状工具)	I 1(3)①	砂粒混入
83	22	南斜面区	IV層	深鉢	頸部	ナデ	貝殻押引文(横位・斜位)、刺突(棒状工具、横位・縦位)、ケズリ?	I 1(3)①	
83	23	南斜面区	IV層相当	深鉢	口縁部	貝殻条痕文	貝殻腹縁文(羽根、横位)、刺突(棒状工具)	I 1(3)②	口唇部刺突(籠状工具)、小礫混入、海綿骨針混入
83	24	南斜面区	I~IV層	深鉢	口縁部	ナデ?、赤化(被熱?)	貝殻腹縁文(羽根、横位)、黒色物質付着	I 1(3)②	波状口縁、口唇部刺突(籠状工具)、小礫混入
83	25	南斜面区	I~IV層	深鉢	口縁部	貝殻条痕文?	貝殻腹縁文(羽根、縦位)、赤化(被熱?)	I 1(3)②	口唇部刺突(籠状工具)、小礫混入、脆い(被熱?)
83	26	南斜面	トレンチ2	深鉢	口縁部	貝殻条痕文	貝殻腹縁文(縦位・斜位)	I 1(3)②	波状口縁、口唇部刺突(籠状工具)、砂粒混入
83	27	S101	覆土	深鉢	口縁部	条痕	貝殻腹縁文(羽状、横位)	I 1(3)②	波状口縁、口唇部刺突(籠状工具)
83	28	S102	覆土	深鉢	口縁部		貝殻腹縁文(斜位)	I 1(3)②	波状口縁、口唇部刺突(籠状工具)、小礫混入
83	29	N-15	IV層相当	深鉢	口縁部	ナデ?	貝殻腹縁文(斜位)、貝殻条痕文?	I 1(3)②	波状口縁、口唇部刺突(籠状工具)
83	30	南斜面区	I~IV層	深鉢	口縁部	ナデ	貝殻腹縁文(斜位)	I 1(3)②	口唇部刺突(籠状工具)
83	31	南斜面	トレンチ2	深鉢	口縁部	ミガキ?	貝殻腹縁文(縦位)	I 1(3)②	口唇部刺突(籠状工具)
83	32	S102	覆土	深鉢	口縁部	貝殻条痕文?	貝殻腹縁文(縦位)	I 1(3)②	口唇部刺突(籠状工具)
83	33	N-13	I層	深鉢	頸部	ナデ?	貝殻腹縁文(羽根、横位)	I 1(3)②	小礫混入、赤化、脆い(被熱?)
83	34	U-23	確認面	深鉢	頸部	ナデ?	貝殻腹縁文(羽状、横位)、刺突(棒状工具?)	I 1(3)②	
83	35	Q-30	IV層相当	深鉢	頸部	貝殻条痕文?	貝殻腹縁文(外面施文、羽根、縦位)、ケズリ?	I 1(3)②	小礫混入、海綿骨針混入
83	36	南斜面区	I~IV層	深鉢	頸部		貝殻腹縁文(羽状、縦位)、刺突(貝)	I 1(3)②	砂粒混入
83	37	T-18	I層	深鉢	頸部	ナデ?	貝殻腹縁文(二枚貝3類、羽状、縦位)	I 1(3)②	
83	38	X-17	IV層	深鉢	頸部	ナデ?	貝殻腹縁文(斜位)	I 1(3)②	小礫混入

図	No.	出土位置	出土層位 取上番号等	器種	部位	内面特徴	外面特徴	分類	備考
83	39	表探		深鉢	頸部	貝殻条痕文	貝殻腹縁文(斜位)、貝殻条痕文	I 1(3) ②	砂粒混入、海綿骨針混入
83	40	表探		深鉢	頸部	ケズリ?	貝殻腹縁文(縦位)	I 1(3) ②	砂粒混入
83	41	V-24	I層	深鉢	頸部		波状貝殻文(外面施文、横位)、ミガキ?	I 1(3) ③	砂粒混入、海綿骨針混入
83	42	W-21	V層	深鉢	頸部	ケズリ	波状貝殻文(外面施文、斜位)	I 1(3) ③	砂粒混入
83	43	表探		深鉢	頸部	ナデ?	波状貝殻文(横位)、刺突(貝)	I 1(3) ③	小礫混入
84	1	0-15 N-13	I層 IV層相当	深鉢	口縁部	貝殻条痕文	貝殻条痕文(横位)	I 1(3) ④	波状口縁、小礫混入
84	2	W-16	IV層	深鉢	口縁部	ナデ?	貝殻条痕文(格子状)	I 1(3) ④	波状口縁、口唇部刺突(籠状工具)、小礫混入、赤化(被熱?)
84	3	S102	覆土	深鉢	口縁部		貝殻条痕文(斜位)	I 1(3) ④	波状口縁、小礫混入
84	4	N-15	IV層相当	深鉢	頸部	ナデ?	貝殻条痕文(横位)	I 1(3) ④	小礫混入、海綿骨針混入、小円状剥離、脆い(被熱?)
84	5	攪乱		深鉢	頸部		貝殻条痕文(横位)	I 1(3) ④	小礫混入、硬質
84	6	SK40付近		深鉢	頸部	ナデ	貝殻条痕文(横位)	I 1(3) ④	砂粒混入
84	7	-	I層	深鉢	頸部	貝殻条痕文	貝殻条痕文(横位・縦位)	I 1(3) ④	小礫混入、赤褐色粒混入
84	8	X-22	I層	深鉢	頸部		貝殻条痕文(縦位)、刺突(籠状工具)	I 1(3) ④	砂粒混入
84	9	T-27	確認面・I層	深鉢	頸部	ミガキ	貝殻条痕文(横位)、刺突(籠状工具)	I 1(3) ④	小礫混入
84	10	S-24	攪乱	深鉢	頸部	貝殻条痕文	貝殻条痕文(斜位・横位)、貝殻腹縁文(縦位)	I 1(3) ④	
84	11	南斜面区	I~IV層	深鉢	口縁部	ユビアト、ナデ?	ケズリ	I 1(3) ⑤	小礫混入、硬質
84	12	W-16	IV層	深鉢	口縁部	ナデ?	ナデ?	I 1(3) ⑤	口唇部刺突(籠状工具)、小礫混入
84	13	W-15	I~IV層	深鉢	胴部	ナデ	ナデ?、刺突(籠状工具)	I 1(3) ⑤	
84	14	S-24	IV層相当	深鉢	胴部	ナデ?、 黒色物質付着	ケズリ?、刺突(棒状工具?)	I 1(3) ⑤	小礫混入
84	15	S101	覆土	深鉢	胴部		刺突(籠状工具)	I 1(3) ⑤	
84	16	表探		深鉢	胴部	ナデ?	ケズリ?、刺突(籠状工具)	I 1(3) ⑤	小礫混入
84	17	W-18	IV層	深鉢	胴部	ナデ?	ケズリ?	I 1(3) ⑤	砂粒混入
84	18	S103	覆土	深鉢	胴部		ミガキ	I 1(3) ⑤	
84	19	南斜面	トレンチ2	深鉢	胴部	貝殻条痕文、 黒色物質付着	ミガキ	I 1(3) ⑤	小礫混入、海綿骨針混入、小円状剥離(被熱?)
84	20	南斜面	トレンチ2	深鉢	胴部	ミガキ、 黒色物質付着	ミガキ?、小円状剥離(被熱?)	I 1(3) ⑤	
84	21	南斜面	トレンチ2	深鉢	胴部	ケズリ?	ケズリ?、小円状剥離(被熱?)	I 1(3) ⑤	砂粒混入、海綿骨針混入
84	22	南斜面区	I~IV層	深鉢	胴部	貝殻条痕文	ケズリ	I 1(3) ⑤	小礫混入
84	23	S-30	I層	深鉢	胴部	貝殻条痕文	ケズリ	I 1(3) ⑤	砂粒混入、海綿骨針混入
84	24	SB02-Pit2	覆土	深鉢	胴部		ミガキ	I 1(3) ⑤	
84	25	攪乱		深鉢	胴部		ミガキ	I 1(3) ⑤	小礫混入
84	26	南斜面	IV層相当	深鉢	胴部	ナデ?	ケズリ	I 1(3) ⑤	小礫混入
84	27	南斜面	IV層相当	深鉢	胴部	ユビアト、ケズリ?	ケズリ?	I 1(3) ⑤	小礫混入
84	28	S102	覆土	深鉢	胴部		ミガキ	I 1(3) ⑤	小円状剥離(被熱?)
84	29	南斜面区	I~IV層	深鉢	胴部	ミガキ	ミガキ?	I 1(3) ⑤	小礫混入、底部付近
84	30	N-13	I層	深鉢	底部	ナデ?	ケズリ?	I 1(3) ⑤	小礫混入、脆い(被熱?)
84	31	南斜面区	IV層	深鉢	底部	ナデ?	ミガキ?	I 1(3) ⑤	小礫混入
84	32	Q-23	攪乱	深鉢	底部		ケズリ	I 1(3) ⑤	小礫混入
84	33	Y-24	I層	深鉢	底部		ミガキ?	I 1(3) ⑤	小礫混入
84	34	W-25	IV層相当	深鉢	底部		ミガキ?、剥離(被熱?)	I 1(3) ⑤	砂粒混入
84	35	S102	覆土	深鉢	底部		ミガキ	I 1(3) ⑤	
84	36	表土		深鉢	底部		ケズリ	I 1(3) ⑤	砂粒混入
84	37	南斜面	トレンチ2	深鉢	底部	ユビアト	ミガキ?、小円状剥離(被熱?)	I 1(3) ⑤	
85	1	S103	覆土	深鉢	口縁部 ~胴部	ユビアト、 貝殻条痕文?	RL(横走)、側面圧痕(RL、1条)	I 2①	口唇部刺突(指)、小礫混入
85	2	W-21	I層	深鉢	口縁部	ユビアト	RL(横走)、側面圧痕(RL、1条)、	I 2①	口唇部刺突(指)、海綿骨針混入、黒色物質付着
85	3	S-31	確認面	深鉢	口縁部	ユビアト、 RL(横位)	RL(横位)、側面圧痕(RL、2条)	I 2①	口唇部刺突(RL)、小礫混入、海綿骨針混入
85	4	南斜面	トレンチ2	深鉢	口縁部	RL(横位)	RL(横位)、側面圧痕(RL、2条)	I 2①	口唇部刺突(指)、軟質
85	5	南斜面区	I~IV層	深鉢	口縁部	RL(縦位)、 ナデ?	RL(横位)、側面圧痕(RL、2条)	I 2①	口唇部刺突(籠状工具)、海綿骨針混入、赤褐色粒混入
85	6	南斜面区	I~IV層	深鉢	口縁部	ユビアト	LR(横位)、側面圧痕(LR、2条)	I 2①	口唇部刺突(籠状工具)、海綿骨針混入、赤褐色粒混入
85	7	南斜面	トレンチ1	深鉢	口縁部	ユビアト	RL(横位)、側面圧痕(RL、2条)	I 2①	口唇部刺突(RL?)、砂粒混入、海綿骨針混入

図	No.	出土位置	出土層位 取上番号等	器種	部位	内面特徴	外面特徴	分類	備考
85	8	南斜面区	I~IV層	深鉢	口縁部	LR (横位)	LR (横位)、側面圧痕 (LR、2条)	I 2①	口唇部LR回転、海綿骨針混入
85	9	S102	覆土	深鉢	口縁部	ユビアト、黒色物質付着、小円状剥離(被熱?)	LR (横位)、側面圧痕 (LR、2条)	I 2①	口唇部LR回転
85	10	I B-21	表土	深鉢	口縁部	ナデ?	RL (横走)、側面圧痕 (RL、2条)	I 2①	口唇部刺突(指)、砂粒混入、海綿骨針混入
85	11	南斜面	トレンチ2	深鉢	口縁部	ユビアト	RL (横位)、側面圧痕 (RL、2条)	I 2①	口唇部LR回転、赤褐色粒混入
85	12	S-27	攪乱	深鉢	口縁部	ユビアト	RL (横位)、側面圧痕 (RL、2条)	I 2①	小礫混入、海綿骨針混入
85	13	攪乱		深鉢	口縁部	RL (横位)	LR (縦位)?、側面圧痕 (RL、2条)	I 2①	口唇部刺突(籠状工具)
85	14	S108	覆土	深鉢	口縁部	ユビアト	RL (横位)、側面圧痕 (RL、2条)	I 2①	口唇部RL回転
85	15	南斜面	トレンチ1	深鉢	口縁部	ユビアト	LR (横位)、側面圧痕 (LR、2条、横位・斜位)	I 2①	口唇部刺突(LR)、砂粒混入、海綿骨針混入
85	16		I層	深鉢	口縁部	ユビアト、黒色物質付着	RL (横位)、側面圧痕 (RL、2条、縦位)、赤化(被熱?)	I 2①	赤褐色粒混入
85	17	南斜面区	IV層・I~IV層	深鉢	口縁部	ユビアト	RL (横位)、側面圧痕 (RL、1条)、刺突(籠状工具)	I 2①	口唇部RL回転、海綿骨針混入、赤褐色粒混入
85	18	表探		深鉢	口縁部	ユビアト	LR (横位)、沈線(1条)	I 2②	口唇部刺突(棒状工具?)、砂粒混入、海綿骨針混入
85	19	Q-30	I層	深鉢	口縁部	ナデ?	RL (横位)、沈線(1条)	I 2②	砂粒混入、海綿骨針混入、沈線は細い工具による浅い沈線のみ
85	20	南斜面区	I~IV層	深鉢	口縁部	RL (横位)、ナデ?、黒色物質付着	RL (横位)、沈線(1条)	I 2②	口唇部RL回転
85	21	南斜面	トレンチ1	深鉢	口縁部	ユビアト、黒色物質付着	RL (縦位)、沈線(2条)	I 2②	口唇部刺突(指)、海綿骨針混入、赤褐色粒混入
85	22	S102	覆土	深鉢	口縁部	貝殻条痕文	LR (横位)、沈線(2条)	I 2②	口唇部LR回転
85	23	南斜面区	I~IV層	深鉢	口縁部	ユビアト	RL (横位)、沈線(2条)	I 2②	口唇部刺突刺突(RL?)、赤褐色粒混入
85	24	南斜面	トレンチ2	深鉢	口縁部	ユビアト	LR (横位)、沈線(2条、波状)	I 2②	口唇部LR回転、海綿骨針混入
85	25		トレンチ10	深鉢	口縁部		LR (横位)、沈線(2条、横位・斜位)	I 2②	口唇部LR回転、砂粒混入、海綿骨針混入
85	26	表土	表土	深鉢	口縁部	ユビアト	沈線(2条)、刺突(籠状工具)	I 2②	口唇部RL回転、砂粒混入、海綿骨針混入
85	27		I層	深鉢	口縁部	ユビ	LR (横位)、沈線(3条)	I 2②	口唇部LR回転、海綿骨針混入、赤褐色粒混入
85	28	南斜面	トレンチ1	深鉢	口縁部	ユビアト	LR (横位)、刺突(棒状工具?)	I 2③	砂粒混入、海綿骨針混入
85	29	攪乱		深鉢	口縁部	ユビアト	RL (横位)、刺突(籠状工具)	I 2③	口唇部RL回転
85	30	攪乱		深鉢	口縁部	ユビアト、黒色物質付着	RL (横位)、隆帯、隆帯上に側面圧痕 (RL)	I 2④	口唇部RL回転、砂粒混入、海綿骨針混入、赤褐色粒混入
85	31	南斜面	トレンチ1	深鉢	口縁部	ユビアト	RL (横位)、隆帯、隆帯上に刺突(籠状工具)	I 2④	口唇部刺突(籠状工具)、砂粒混入、海綿骨針混入
86	1	W-21	IV層相当、V層	深鉢	口縁部~胴部	ユビアト	RL (横走)	I 2⑤	口唇部刺突(指)、小礫混入、海綿骨針混入、補修孔(両面穿孔)、黒色物質付着、口径28.4cm
		W-22	I層						
86	2	W-21	攪乱	深鉢	口縁部~胴部	ユビアト、黒色物質付着	RL (横走)	I 2⑤	口唇部刺突(指)、小礫混入、海綿骨針混入、図86-23と同一個体?
86	3	W-25	V層	深鉢	口縁部~胴部	ユビアト	RL (横位)	I 2⑤	小礫混入、海綿骨針混入、赤褐色粒混入、補修孔(外面穿孔)、黒色物質付着、小円状剥離(被熱?)、口径22.6cm
86	4	表探		深鉢	口縁部	RL (縦位)	RL (横位)	I 2⑤	口唇部RL回転、海綿骨針混入
86	5	南斜面	トレンチ2	深鉢	口縁部	ナデ	LR (横位)	I 2⑤	海綿骨針混入
86	6	S102	覆土	深鉢	口縁部	ユビアト	LR (横位)	I 2⑤	補修孔(両面穿孔)
86	7	T-29	I層	深鉢	口縁部	ユビアト	RL (0段多条、横位)	I 2⑤	口唇部刺突(籠状工具)、小礫混入、海綿骨針混入、硬質
86	8	W-15	I~IV層	深鉢	口縁部	ユビアト、ナデ?	LR (横位)	I 2⑤	口唇部LR回転、砂粒混入、赤褐色粒混入
86	9	南斜面	トレンチ2	深鉢	口縁部	ユビアト	LR (横位)	I 2⑤	口唇部刺突(LR)、小礫混入、海綿骨針混入
86	10	南斜面区	I~IV層	深鉢	口縁部	LR (縦走)	LR (横位)	I 2⑤	海綿骨針混入
86	11	Q-23	攪乱	深鉢	口縁部	ユビアト、黒色物質付着	RL (横位・縦走)	I 2⑤	口唇部RL回転、小礫混入、海綿骨針混入
86	12	攪乱		深鉢	口縁部	ユビアト	RL (横位)	I 2⑤	
86	13	S101	確認面	深鉢	口縁部	ユビアト	LR (横位)	I 2⑤	口唇部LR回転

図	No.	出土位置	出土層位 取上番号等	器種	部位	内面特徴	外面特徴	分類	備考
86	14	Q-30	I層	深鉢	口縁部	R L (縦位)	R L (横位)	I 2⑤	口唇部 R L 回転・刺突 (筥状工具)、小礫混入、海綿骨針混入
86	15	S-33	I層	深鉢	口縁部	R L (横位)	R L (横位)	I 2⑤	口唇部刺突 (R L)、砂粒混入、海綿骨針混入
86	16	南斜面	I~IV層	深鉢	口縁部	ユビアト	L R (横位)	I 2⑤	口唇部刺突 (筥状工具)、小礫混入、ミニチュア土器か?
86	17	S102	覆土	深鉢	口縁部		R (横位・横走)	I 2⑤	図 86-18 と同一個体?
86	18	S102	覆土	深鉢	口縁部	ユビアト	R (横位)	I 2⑤	図 86-17 と同一個体?
86	19	S109	覆土	深鉢	胴部	ユビアト	組紐側面圧痕	I 2⑤	
86	20	南斜面区	I~IV層	深鉢	胴部	ユビアト、ナデ?	L R (0段多条、横走・横位)	I 2⑤	砂粒混入、海綿骨針混入、条の間隔が広い
86	21	X-22	I層	深鉢	胴部	ユビアト	L R (0段多条、横走)	I 2⑤	砂粒混入、海綿骨針混入、条の間隔が広い
86	22	南斜面	トレンチ 1	深鉢	胴部	ユビアト	L R (横位)	I 2⑤	砂粒混入、海綿骨針混入、補修孔 (外面穿孔?)
86	23	W-21	攪乱	深鉢	胴部	ユビアト、 黒色物質付着	R L (横走)	I 2⑤	小礫混入、海綿骨針混入、軟質で脆い、図 86-2 と同一個体?
86	24	V-22 Q-23	攪乱 V層	深鉢	胴部	ユビアト、 黒色物質付着、 小円状剥離	R L (0段多条、横位)	I 2⑤	小礫混入、海綿骨針混入、赤褐色粒混入、軟質
86	25	S109	覆土	深鉢	胴部	ユビアト	R L (横位)	I 2⑤	海綿骨針混入、小円状剥離 (被熱?)
86	26	攪乱		深鉢	胴部	ユビアト、小円状剥離 (被熱?)	R L (横位)	I 2⑤	海綿骨針
87	1	南斜面区	I~IV層	深鉢	胴部	L R (横位)、 黒色物質付着	L R (横位)	I 2⑤	海綿骨針混入、赤褐色粒混入
87	2	Q-15	I層	深鉢	胴部	ナデ? 小円状剥離 (被熱?)	R L (横位)、L R (横位)	I 2⑤	小礫混入、海綿骨針混入、硬質
87	3	南斜面	トレンチ 2	深鉢	胴部	ユビアト、ナデ?	R L (0段多条、横位)	I 2⑤	小礫混入、海綿骨針混入
87	4	Q-31	I層	深鉢	胴部	R L (横位)	R L (横位)	I 2⑤	海綿骨針混入
87	5	S101 R-23	覆土 I層	深鉢	胴部	R L (横走)	R L (横位)	I 2⑤	
87	6	Q-31	I層	深鉢	胴部	ユビアト、R L (横位)	R L (横位)	I 2⑤	小礫混入、海綿骨針混入
87	7	S102	覆土	深鉢	胴部	小円状剥離 (被熱?)	R L (横位)	I 2⑤	海綿骨針混入
87	8	W-21	IV層	深鉢	胴部	ナデ?	R L (横位)	I 2⑤	小礫混入、海綿骨針混入、赤褐色粒混入
87	9	Q-31	I層	深鉢	胴部	ユビアト	R L (横位)	I 2⑤	小礫混入、海綿骨針混入
87	10	S108	覆土	深鉢	胴部	ユビアト	R L (横位)	I 2⑤	赤褐色粒混入、海綿骨針混入
87	11	Q-19	確認面	深鉢	胴部	ユビアト	L R (斜位・縦位)	I 2⑤	砂粒混入、海綿骨針混入
87	12	南斜面	トレンチ 1	深鉢	胴部	貝殻条痕文	R L (横位)	I 2⑤	小礫混入、海綿骨針混入
87	13	攪乱		深鉢	胴部	R L (横位)	R L (横位)	I 2⑤	
87	14	S107	覆土	深鉢	胴部	L R (0段多条・横走)	L R (0段多条、横位)	I 2⑤	
87	15	南東斜面	IV層相当	深鉢	胴部		R L (縦位・斜位)	I 2⑤	海綿骨針混入、組織混入?
87	16	P-26	IV層相当	深鉢	胴部	貝殻条痕文	L R (横位)?、小円状剥離 (被熱?)	I 2⑤	小礫混入、赤褐色粒混入、海綿骨針混入
87	17	南斜面区	IV層	深鉢	胴部		R (横位)	I 2⑤	
87	18	表探		深鉢	底部	ユビアト	R L (横位)	I 2⑤	小礫混入
87	19	T-29	I層	深鉢	底部	ナデ?	R L (横位)	I 2⑤	砂粒混入、赤褐色粒混入
87	20	V-24	I層	深鉢	底部	ユビアト	R L (横位)?	I 2⑤	磨滅、砂粒混入、赤化 (被熱?)
87	21		I層	深鉢	底部		R L (0段多条、縦走)	I 2⑤	赤化 (被熱?)
87	22	S108-SK 2	1層	深鉢	底部		R L (横位)	I 2⑤	小礫混入、海綿骨針混入
87	23	V-16	I層	深鉢	底部	ユビアト	L R (横位)	I 2⑤	小礫混入
87	24	南斜面	トレンチ 2	深鉢	底部	ユビアト	L R (横位)	I 2⑤	小礫混入、赤褐色粒混入
87	25	U-30 U-31周辺	確認面	深鉢	底部		R L (横位・縦走)、赤化 (被熱?)	I 2⑤	赤褐色粒混入
87	26	Q-30	I層	深鉢	底部	小円状剥離 (被熱?)	R L (縦走)、赤化 (被熱?)	I 2⑤	
87	27	V-25	確認面	深鉢	底部		R L (縦走)?	I 2⑤	小礫混入、赤化 (被熱?)
87	28	X-29	I層	深鉢	底部		R L (縦走)?、赤化 (被熱?)	I 2⑤	赤褐色粒混入
87	29	S105	覆土	深鉢	底部		R L (横位)	I 2⑤	赤褐色粒混入
87	30	南斜面区	I~IV層	深鉢	底部		R L (横位)	I 2⑤	
87	31	U-29	IV層相当	深鉢	底部	R L (横位)	R L (縦走)	I 2⑤	底径 (1.0) cm
87	32	Q-31	I層	深鉢	底部		R L?	I 2⑤	赤褐色粒混入
87	33	南斜面区	I~IV層	深鉢	底部		R L (横位・横走)?	I 2⑤	砂粒混入、赤褐色粒混入
87	34	Q-30	I層	深鉢	底部		L R?	I 2⑤	小礫混入
87	35	Q-31	I層	深鉢	底部		L R (横位)	I 2⑤	
87	36	R-24	IV層相当	深鉢	底部		R L (横位)	I 2⑤	砂粒混入、海綿骨針混入
87	37	R-24	IV層相当	深鉢	底部		R L (横走)	I 2⑤	赤褐色粒混入
87	38	南斜面区	IV層	深鉢	底部		R L (横位)	I 2⑤	赤褐色粒混入

図	No.	出土位置	出土層位取上番号等	器種	部位	内面特徴	外面特徴	分類	備考
87	39	S-32	確認面	深鉢	底部		R L (横位)	I 2⑤	
87	40	U-30	確認面	深鉢	底部		R L (縦走)、赤化(被熱?)	I 2⑤	
87	41	N-15	IV層相当	深鉢	底部	黒色物質付着	R L (縦位)	I 2⑤	乳房状突起
87	42	表土		深鉢	底部		R L (横位)	I 2⑤	平底、底径(2.6)cm
87	43	V-26	I層	ミニチュア器	口縁部~胴部		R L (横走)?	I 2⑤	小円状剥離(被熱?)、口径4.8cm
88	1	I B-27	確認面	深鉢	口縁部	ユビアト?	R L R (横位)	II	小礫混入、海綿骨針混入、図88-3と同一個体?
88	2	Y-24	I層	深鉢	胴部	ユビアト?	R L R (横位)	II	小礫混入、海綿骨針混入
88	3	I B-27	確認面	深鉢	胴部	ユビアト?	R L R (横位)	II	小礫混入、海綿骨針混入、赤褐色粒混入、図88-1と同一個体?
88	4	W-30		深鉢	口縁部	ナデ	隆帯、隆帯上にL R (縦位)	III 1	口唇部L R回転、砂粒混入、海綿骨針混入
88	5	S101	確認面	深鉢	口縁部	L R (横位)	R L (横位)?	III 1	口唇部R L回転?
88	6	S103	覆土	深鉢	口縁部		隆帯、隆帯上に刺突(籠状工具)	III 1	
88	7	X-29	I層	深鉢?	口縁部	ナデ	隆帯、隆帯上R L (縦位)	III 1	口唇部L R回転、砂粒混入、海綿骨針混入
88	8	S109	覆土	深鉢	頸部	ナデ?	R L (縦位)、隆帯、隆帯上にL R (縦位)	III 1	
88	9	Q-27	確認面	壺	肩部	ナデ	隆帯、隆帯上にL R (横位)、沈線	III 1	砂粒混入
88	10	S102	覆土	壺	肩部		隆帯、隆帯上にR L (横位・縦走)?、沈線	III 1	
88	11	南斜面	I~IV層、IV層	深鉢	胴部	ミガキ	L R (横位・縦位)、沈線、磨消	III 1	砂粒混入、海綿骨針混入
88	12	S102	覆土	深鉢	胴部		R L (横位)、沈線、磨消	III 2	海綿骨針混入
88	13	S107	覆土	壺	肩部	ナデ?	L R (横位・縦位)、沈線、磨消	III 2	
88	14	S107	覆土	壺	肩部	ナデ?	沈線、櫛歯状沈線	III 2	
88	15	南斜面区	I~IV層	深鉢?	口縁部	ミガキ	ミガキ、沈線	III 2	
88	16	S109	覆土	深鉢?	胴部		沈線	III 2	
88	17	南斜面	トレンチ1	壺	胴部	ミガキ	ミガキ、沈線	III 2	
88	18	南斜面区	I~IV層	深鉢	胴部	ミガキ?	R L (縦位)、沈線(弧状)、磨消、黒色物質付着	III 2	
88	19	S107	覆土	深鉢	口縁部~胴部	ミガキ	L (縦位)	III 3	小礫混入、海綿骨針混入、口径(18.0)cm、図88-27と同一個体?
88	20	南斜面	トレンチ2	深鉢	口縁部	ユビアト	L R (縦位)?	III 3	小礫混入、赤褐色粒混入
88	21	S106	覆土	深鉢	胴部	ミガキ?	L R (縦位)	III 3	海綿骨針混入
88	22	S108	覆土	深鉢	胴部	ミガキ	L R (縦位)	III 3	小礫混入
88	23	南斜面区	IV層	深鉢	胴部	ナデ	L L (縦位)?	III 3	小礫混入、海綿骨針混入、脆い(被熱?)
88	24	南斜面	トレンチ1	深鉢	胴部	ミガキ	L (縦位)	III 3	砂粒混入
88	25	S107	S-1	深鉢	胴部	ナデ?	ナデ?	III 3	小礫混入
88	26	S102	覆土	深鉢	底部		ナデ?	III 3	小礫混入
88	27	S107	覆土	深鉢	底部	ナデ?	L (縦位)	III 3	小礫混入、海綿骨針混入、図88-19と同一個体か?
88	28	南斜面	トレンチ2	深鉢	底部	ナデ	ナデ、外底面網物圧痕	III 3	砂粒混入、底径(6.0)cm
88	29	調査区北	表採、トレンチ11	壺	口縁部~胴部		口縁部ヨコナデ、胴部L R (横位)	IV	小礫混入、黒斑、口径10.0cm

表12 平安時代土器観察表

図	No.	種別	器種	遺構	出土層位取上番号等	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	内面特徴	外面特徴	備考
26	1	土師器	甕	S101	P-2	16.4	-	-	ヨコナデ、ヘラナデ、ミガキ	ヨコナデ、ミガキ	
26	2	土師器	甕	S101 SK26	P-1 覆土、P-1・2	20.3	-	-	ヘラナデ 一部黒色化	ヨコナデ、ヘラケズリス付着	
26	3	土師器	甕	S101	覆土	13.8	-	-	ヨコナデ、ヘラナデ、ナデ、輪積痕	ヘラケズリ、ヘラナデ、ナデ	
26	4	土師器	甕	S101	覆土	-	-	-	ヘラナデ	ヘラケズリ	
26	5	土師器	甕	S109 S101	覆土 覆土	-	-	-	ヘラナデ、ナデ	ヘラケズリ	
26	6	土師器	甕	S101カマド	煙出坑覆土	-	-	-	ヘラケズリ→ナデ	二次被熱による焼け爆ぜが著しい	
26	7	土師器	甕	S101	P-1	-	-	-	ヘラナデ、ナデ	ミガキ、ナデ 黒色化	

図	No.	種別	器種	遺構	出土層位 取上番号等	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内面特徴	外面特徴	備考
27	1	土師器	甕	S101	覆土	-	10.8	-	ヘラナデ	ヘラナデ→ミガキ	
				S101カマド	煙出坑覆土						
27	2	土師器	甕	S101	P-3~11 覆土	-	7.2	-	ヘラナデ	ヘラケズリ 底部ヘラ切り	
27	3	土師器	甕	S101	貼床(焼土)層	-	8.0	-	ヘラナデ	ヘラケズリーナデ 底部ヘラ切り	
27	4	土師器	坏	S101	覆土	-	-	-	ロクロナデ→ミガキ	ロクロナデ、貼瘤	黒色処理が落ちたか?
27	5	須恵器	大甕	S101カマド	煙出坑1層 P-2・3	-	-	-	当て具痕(石?)	タタキ	
27	6	須恵器	壺	S101	覆土	-	(7.0)	-	ロクロナデ	ロクロナデ→ヘラケズリ 底部砂付着	還元焼成不十分で赤い
30	1	土師器	甕	S102	覆土	14.1	-	-	ヨコナデ、ヘラナデ	ヨコナデ、ヘラケズリ	
30	2	土師器	甕	S102	覆土	-	-	-	ヨコナデ、ヘラナデ	ヨコナデ、ケズリーナデ スス付着	口縁部スス付着被熱受け赤い
30	3	土師器	甕	S102	覆土	-	-	-	ナデ	ヨコナデ	
30	4	土師器	甕	S102	覆土	-	-	-	ミガキ、黒色処理	ミガキ(一部強く陰刻状になる)	
30	5	土師器	甕	S102	床直、P-1~6	-	-	-	ヘラナデ	ヘラケズリーナデ	
30	6	土師器	甕	S102	覆土	-	-	-	ヘラナデ(ケズリに近い)	ヘラケズリ	
30	7	土師器	甕	S102	床面、P-11	-	-	-	ヘラナデ	ヘラケズリ	
30	8	土師器	甕	S102	3層、P-7	-	(10.4)	-	ナデ	剥落著しい 底面砂底?	
30	9	土師器	坏	S102	3層、P-8	(13.8)	5.5	5.0	ミガキ、黒色処理	ナデ、ロクロナデ 底面回転糸切	口唇にスス付着箇所あり、灯明利用?
30	10	土師器	坏	S102	覆土、P-9・13	13.8	5.3	4.6	ロクロナデ	ロクロナデ	赤焼坏 外面剥落
30	11	土師器	坏	S102	覆土、4層、 P-12	17.2	-	-	ロクロナデ、ミガキ、 黒色処理	ロクロナデ、ナデ、刻書(×)	
30	12	土師器	坏	S102	覆土	-	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ	
30	13	土師器	坏	S102	3層、P-10	-	5.7	-	ミガキ、底面中央が円形に盛り上がる、黒色処理	ナデ 底面回転糸切	
30	14	須恵器	壺	S102	覆土	-	10.0	-	ロクロナデ	ロクロナデ	
32	1	土師器	甕	S103	覆土	21.4	-	-	ヨコナデ、ヘラナデ	ヨコナデ、ヘラケズリ	
				S103カマド	覆土、1層、 P-1						
32	2	土師器	甕	S103	覆土	15.6	-	-	ヘラナデ	ヘラケズリ	
32	3	土師器	甕	S103	覆土	10.0	-	-	ヨコナデ、ヘラナデ、 輪積痕	ヘラケズリーナデ	
32	4	土師器	甕	S103	覆土	15.0	-	-	ヘラナデ	ヘラケズリーナデ	
32	5	土師器	甕	S103	覆土	15.7	-	-	ヨコナデ、ヘラナデ、 輪積痕	ヨコナデ、ヘラケズリ、 輪積痕、被熱	一部に焼け爆ぜ、 外面スス付着激しい箇所あり
33	1	土師器	甕	S103	覆土	-	-	-	ヘラナデ、スス付着	ヨコナデ、ヘラケズリ	
33	2	土師器	甕	S103	覆土、1層	-	-	-	ヘラナデ	ヘラナデ	
33	3	土師器	甕	S103	覆土	-	-	-	ヨコナデ、ヘラナデ	ヨコナデ、ナデ	
33	4	土師器	甕	S103	覆土	-	-	-	ヘラナデ	磨滅著しい	
33	5	土師器	甕	S103	覆土	-	-	-	ヘラナデ	ヘラケズリーナデ	
				S103カマド	P-1・2						
33	6	土師器	甕	S103	覆土	-	-	-	ヘラナデ	ヘラケズリ	
33	7	土師器	甕	S103	覆土、床直、 P-2	-	-	-	ヘラナデ	ヘラケズリーミガキ、 ナデ	
33	8	土師器	甕	S103	覆土	-	-	-	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ヘラケズリ、 ナデ	
33	9	土師器	甕	S103カマド	覆土、P-1	-	-	-	ヘラナデ、輪積痕	ヘラケズリ	
33	10	土師器	甕	S103	覆土	-	-	-	ヘラナデ(磨滅)	ヘラケズリ	内外面磨滅
33	11	土師器	甕	S103	覆土	-	-	-	ヘラナデ、ナデ	ヘラケズリ、ナデ	
33	12	土師器	甕	S103	覆土	-	-	-	ナデ	ヘラケズリ	
34	1	土師器	甕	S103	覆土	-	8.4	-	ヘラナデ	ヘラケズリ	砂礫多量
34	2	土師器	甕	S103	覆土	-	6.0	-	ヘラナデ	ヘラナデ、底面砂底	
34	3	土師器	甕	S103	覆土	-	(8.0)	-	ヘラナデ	ヘラケズリ 底面木葉痕	
34	4	土師器	甕	S103	覆土	-	8.8	-	ヘラナデ、ナデ	底面木葉痕	
34	5	土師器	坏	S103	床直、P-1	(14.1)	6.0	5.0	ミガキ、黒色処理	ロクロナデ 焼け爆ぜ著しい	
34	6	土師器	坏	S103	覆土	13.8	6.0	4.9	ロクロナデ、ミガキ、 黒色処理	ロクロナデ、ヘラナデ	墨書か?

図	No.	種別	器種	遺構	出土層位 取上番号等	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内面特徴	外面特徴	備考
34	7	須恵器	甕	S103	床直、P-3	-	-	-	青海波状当て具痕	タタキ	
34	8	須恵器	大甕	S103 SK19	覆土	-	-	-	ロクロナデ、当て具痕 (石?)	ロクロナデ、タタキ	
35	1	土師器	甕	S104	掘方	-	-	-	ヨコナデ、ヘラナデ	ヨコナデ、ヘラケズリ	
35	2	土師器	甕	S104	検出面	-	-	-	ヘラナデ	ヘラケズリーナデ	
35	3	土師器	坏	S104	床面	-	-	-	ミガキ、黒色処理	ロクロナデ	
37	1	土師器	甕	S105	覆土、P-10	14.0	-	-	ヘラナデ、ナデ	ナデ、ヘラケズリ	
37	2	土師器	甕	S105	覆土	-	-	-	ヘラナデ	ヘラケズリ	
37	3	土師器	甕	S105	覆土	-	-	-	ナデ	ヘラケズリ	
37	4	土師器	甕	S105	覆土	-	-	-	ヘラナデーヨコナデ	ヘラケズリ	
37	5	土師器	甕	S105	覆土	-	-	-	ヘラナデ	ヘラケズリ	
37	6	土師器	甕	S105	覆土	-	-	-	ヘラナデ(磨滅著しい)	ヘラケズリ(磨滅著しい)	
37	7	土師器	甕	S105	覆土	-	-	-	ヘラナデ	ヘラケズリ	
38	1	須恵器	大甕	S105	覆土	-	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ	断面赤い
38	2	須恵器	大甕	S105 S109	覆土 P-3・5・7・9・ 11・12・13	(37.4)	-	-	口~頸部:ロクロナデ 胴部:当て具痕	口~頸部:ロクロナデ 胴部:タタキ	口唇の稜直下、胴部上半で一部摩擦により白色化 断面赤い
38	3	須恵器	大甕	S105 S107	P-1・6・8 覆土	-	-	-	頸部:ロクロナデ 胴部:平行当て具痕	頸部:ロクロナデ 胴部:タタキ	断面赤い
38	4	須恵器	大甕	S105	覆土	-	-	-	平行当て具痕	タタキ	断面赤い
38	5	須恵器	壺	S105	覆土	-	-	-	ロクロナデ	ロクロナデーナデ	
40	1	土師器	甕	S106	覆土	17.8	-	-	ヘラナデ、ヨコナデ	ヘラケズリ、ヨコナデ	
40	2	土師器	甕	S106	覆土	-	-	-	ヨコナデ、ヘラナデ	ヨコナデ、ヘラケズリ、 ナデ	
40	3	土師器	甕	S106	覆土	-	-	-	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ヘラナデ、 輪積痕	
40	4	土師器	甕	S106	覆土	-	9.8	-	ナデ	ヘラケズリ(二次被熱著しい) 底面木葉痕	
40	5	土師器	甕	S106	覆土	-	7.4	-	ナデ	ヘラケズリ 底面木葉痕	
40	6	土師器	甕	S106	覆土	-	10.6	-	ヘラナデ	ヘラケズリ	
44	1	土師器	甕	S107 S107カマド	覆土 P-1	16.2	-	-	ヨコナデ、ヘラナデ、 胴部上半内面にスス付着	ヨコナデ、ヘラケズリ、 胴部上半外面に「C」 形の黒斑	カマド支脚か
44	2	土師器	甕	S107 S107-Pit2	覆土、P-4 覆土	17.4	7.2	20.1	ヘラナデ、ユビナデ、 輪積痕	ヨコナデ、ヘラケズリ、 輪積痕、底部ヘラ切り	口唇部にスス付着箇所あり
44	3	土師器	甕	S107 S107-Pit2	覆土 3層	14.2	-	-	ヨコナデ、ナデ	ヘラケズリーナデ、 ヨコナデ	
44	4	土師器	甕	S107	覆土	-	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	
44	5	土師器	甕	S107	覆土	15.2	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	
44	6	土師器	甕	S107	覆土	-	-	-	剥落著しい	ヘラナデ、摩擦著しい	
44	7	土師器	甕	S107 S107-SK2	覆土 3層	-	-	-	ヘラケズリ、ナデ	ヘラケズリ	
44	8	土師器	甕	S107	覆土	-	-	-	ヘラケズリ、ナデ	ヘラケズリ	
44	9	土師器	甕	S107	P-3	-	-	-	ヘラナデ	ヘラケズリーナデ	
44	10	土師器	甕	S107 S107-SK2	覆土 覆土	-	-	-	強いヘラナデ	ヘラケズリ	底部付近
44	11	土師器	甕	S107	覆土	-	6.0	-	ヘラナデ	ヘラケズリ	
44	12	土師器	甕	S107	覆土、P-5、 P-8	-	10.4	-	ヘラケズリ	ヘラケズリ 底面ヘラナデ	
45	1	土師器	坏	S107-SK2	P-1	16.1	-	-	ミガキ、黒色処理	ロクロナデ	
45	2	土師器	壺	S107	貼床	-	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ	
45	3	土師器	甕	S107	P-2・3	-	8.2	-	ロクロナデ	ロクロナデ 底面回転糸切り	須恵器?
45	4	須恵器	大甕	S107	覆土	-	-	-	頸部:ロクロナデ 胴部:平行当て具痕	頸部:ロクロナデ 胴部:タタキ	屈曲部~胴上半部で一部摩擦により白色化 断面赤い、図38-1~4と同一個体か
45	5	須恵器	大甕	S107	覆土	-	-	-	ロクロナデ、ヘラナデ	ロクロナデータタキ→ 一部ナデ	還元焼成不十分で赤い
45	6	須恵器	大甕	S107	覆土	-	-	-	当て具痕(板状?)、 ナデ	タタキ	還元焼成不十分で赤い
45	7	須恵器	大甕	S107	覆土	-	-	-	当て具痕(板状?)、 ナデ	タタキ	還元焼成不十分で赤い
45	8	須恵器	大甕	S107	P-1	-	-	-	当て具痕(板状?)、 ナデ	タタキ	還元焼成不十分で赤い
45	9	須恵器	壺	S107	覆土	-	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ	

図	No.	種別	器種	遺構	出土層位 取上番号等	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内面特徴	外面特徴	備考
45	10	須恵器	壺	S107	覆土	-	-	-	ロクロナデ、ヘラナデ	ロクロナデ、ヘラケズリ	白っぽい 図59-7と同一か
				S109カマド2	5層						
48	1	土師器	甕	S108カマド	4層、P-15	9.6	6.1	8.9	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ヘラケズリ	一部剥落 口縁内面にスス 付着(帯状に広がる)
48	2	土師器	甕	S108	覆土、カマド 覆土、床面、 カマド4層、 P-14・17・20	10.5	7.1	11.1	ヨコナデ、ヘラナデ、 ユビナデ	ヨコナデ、ヘラケズリ、 被熱(剥落) 底面ヘラケズリ	二次被熱により 一部剥落、赤色化
48	3	土師器	甕	S108	床面直上、P-9	-	-	-	ヨコナデ、ヘラケズリ	ヨコナデ	
48	4	土師器	甕	S108	床面、P-4	-	-	-	ナデ	ヨコナデ	
48	5	製塩土器	深鉢	S108	床面、P-12	-	-	-	ヘラナデ	被熱・摩耗著しい	製塩土器
48	6	土師器	甕	S108	床面直上、P-7	-	-	-	ヘラナデ	ナデ	
48	7	土師器	甕	S108	床面直上、P-9	-	-	-	ヘラナデ	ヘラケズリーナデ	
48	8	土師器	甕	S108	覆土	-	-	-	ヘラナデ	ヘラケズリーナデ	
48	9	土師器	鉢	S108 S108カマド	覆土、床面、 P-1~3、カマ ド4層 P-16	21.5	-	-	ヨコナデ、ヘラナデ	ヨコナデ、ヘラケズリ	口縁部一部黒色 化
48	10	土師器	坏	S108	床面、P-8・ 10・19	13.8	6.0	6.5	ロクロナデ、ミガキ、 黒色処理	ロクロナデ 底面回転系切り	口縁部にスス付 着、灯明利用? 内面にコメ圧痕? 2カ所
48	11	土師器	坏	S108カマド	覆土、床面、 P-13・18	13.3	5.7	5.1	ロクロナデ	ロクロナデ 底面回転系切り	赤焼坏
48	12	土師器	坏	S108	覆土、P-11	15.0	-	-	ロクロナデ、ミガキ 黒色処理	ロクロナデ	
48	13	須恵器	壺	S108 S108-SK2	床面、1層 P-5	(8.9)	-	-	ロクロナデ、カキメ	ロクロナデ	
54	1	土師器	甕	S109	覆土	16.2	-	-	ヘラナデーミガキ	ヨコナデ、ミガキ	
54	2	土師器	甕	S109 S109カマド1	覆土 床直、P-3~5	13.6	9.9	14.2	ヨコナデ、ヘラナデ	ヨコナデ、ヘラケズリ 底面木葉痕	口縁の屈曲部に ススが帯状に付 着
54	3	土師器	甕	S109 S109カマド2	覆土、1層、 P-1	14.2	-	-	ヨコナデ、ヘラナデ	ヨコナデ、ヘラケズリ →ナデ	口縁内外面の一 部に赤褐色の顔 料?付着
54	4	土師器	甕	S109	覆土	14.2	10.0	17.7	ヘラナデ	ヨコナデ、ヘラケズリ	外面二次被熱に より赤色化
				S109-SK1	覆土						
				S109-SK2	覆土						
54	5	土師器	甕	S109	覆土	17.0	-	-	ヘラナデ	ヨコナデ、ヘラケズリ	
				S109-SK4	覆土						
54	6	土師器	甕	S109	覆土	17.0	-	-	ヨコナデ、ヘラナデ	ヨコナデ、ヘラケズリ	外面にスス付着
54	7	土師器	甕	S109	床直	11.0	-	-	ヨコナデ、ヘラナデ	ヨコナデ、ヘラケズリ	口縁~胴上半部 にスス付着
54	8	土師器	甕	S109	覆土	-	-	-	ヨコナデ、ヘラナデ	ナデ、スス付着	外面にスス付着
54	9	土師器	甕	S109	貼床	-	-	-	ヨコナデ、ナデ	ヘラケズリーナデ	
54	10	土師器	甕	S109	掘方	-	-	-	ヘラナデ、ヨコナデ	ヘラケズリ、ナデ、剥 落	
55	1	土師器	甕	S109	覆土	-	-	-	ヘラナデ、ヨコナデ	ヨコナデ、ヘラケズリ →ナデ、輪積痕	
55	2	土師器	甕	S109 SK4	覆土	-	-	-	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ヘラケズリ	
55	3	土師器	甕	S109	攪乱	-	-	-	ヨコナデ、ヘラナデ	ヨコナデ、ヘラケズリ	外面にスス付着
55	4	土師器	甕	S109	覆土	-	-	-	ヨコナデ、ヘラナデ	ヨコナデ、ヘラケズリ	
55	5	土師器	甕	S109	覆土	-	-	-	ヨコナデ、ナデ	ナデ	
55	6	土師器	甕	S109	覆土	-	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ、ナデ	
55	7	土師器	甕	S109カマド2	左袖	-	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ	
55	8	土師器	甕	S109	床直	-	-	-	ヨコナデ、ヘラナデ	ヨコナデ、ヘラケズリ	
55	9	土師器	甕	S109	床直	-	-	-	ナデ、輪積痕	ナデ、輪積痕	
55	10	土師器	甕	S109-SK4	覆土	-	-	-	ヨコナデ、ヘラナデ	ヨコナデ、ヘラケズリ →ナデ	
55	11	土師器	甕	S109	覆土	-	-	-	ナデ	ヘラケズリーナデ	
55	12	土師器	甕	S109	覆土、床直、 P-2	-	-	-	ヘラナデ	ヘラケズリ	
55	13	土師器	甕	S109-SK4	覆土	-	-	-	ヘラナデ、ナデ	ヘラケズリ	
55	14	土師器	甕	S109-SK3	覆土	-	-	-	ミガキに近いナデ	ミガキ	
55	15	土師器	甕	S109-SK4	覆土	-	-	-	ヘラナデ、輪積痕	ヘラケズリ	
55	16	土師器	甕	S109カマド2	煙道覆土	-	-	-	ヘラナデ	ヘラケズリ	
56	1	土師器	甕	S109	掘方、床直、 貼床	-	7.4	-	ナデ	ヘラケズリ 底面ヘラケズリ	
56	2	土師器	甕	S109	覆土	-	8.4	-	ヘラナデ	ヘラケズリ 底面木葉痕	内面スス付着
56	3	土師器	甕	S109	覆土	-	7.2	-	ヘラナデ	ヘラケズリ 底面木葉痕	

図	No.	種別	器種	遺構	出土層位 取上番号等	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内面特徴	外面特徴	備考
56	4	土師器	甕	S109	床直	-	9.0	-	ヘラナデ	ヘラケズリ 底面木葉痕	
56	5	土師器	小壺	S109	5層中、P-6	5.7	5.4	6.5	ミガキ、ヘラナデ、黒色処理	ヨコナデ、ヘラケズリ、ミガキ(胴部上半)	黒色処理が一部外面にも及ぶ
56	6	土師器	坏	S109	床直、P-1	16.2	7.1	6.4	ロクロナデ、ミガキ、黒色処理	ロクロナデ 底面回転系切り	
56	7	土師器	坏	S109	覆土	-	-	-	ロクロミガキ、黒色処理	ロクロナデ	口縁部一部摩耗
56	8	土師器	坏	S109	覆土	-	-	-	ロクロミガキ、黒色処理	ロクロナデ	
56	9	土師器	坏	S109	覆土	-	5.0	-	ミガキ、黒色処理	ヘラナデ 底面回転系切り→ヘラナデ?	
56	10	土師器	坏	S109	覆土	-	6.2	-	黒色処理、ミガキ	ナデ 底面回転系切り	
56	11	土師器	坏	S109	床直	-	-	-	ロクロミガキ、黒色処理	ロクロナデ	
56	12	土師器	坏	S109-SK4	覆土	-	-	-	ロクロミガキ、黒色処理	ロクロナデ	
56	13	土師器	壺	S109	覆土	12.2	7.2	10.2	ロクロナデ	ロクロナデ 底面回転系切り	
56	14	土師器	壺	S109	床直	-	-	-	ロクロナデ→ミガキ	ロクロナデ	
56	15	土師器	壺	S109-SK2	覆土	-	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ	
56	16	須恵器	大甕	S109 S109-SK3	覆土 覆土	-	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ、ヘラナデ	口唇部摩耗により白くなる
57	1	須恵器	大甕	S109	床直	-	-	-	当て具痕(板状?)、ナデ	タタキ	スエキ21 還元焼成不十分で赤い
57	2	須恵器	大甕	S109	床直	-	-	-	ナデ	タタキ→ナデ	スエキ20
57	3	須恵器	大甕	S109カマド2	検出面	-	-	-	平行当て具痕	タタキ、摩耗(被熱?)による白色化	スエキ1 断面赤い
57	4	須恵器	大甕	S109	覆土	-	-	-	ヘラナデ	ヘラケズリ	
57	5	須恵器	大甕	S109	覆土	-	-	-	ヘラナデ	ヘラケズリ	
57	6	須恵器	大甕	S109	床直	-	-	-	平行当て具痕	タタキ	スエキ15
58	1	須恵器	甕	S109	覆土	-	-	-	ヘラナデ	ヘラケズリ	内外面とも摩耗著しい
58	2	須恵器	甕	S109	覆土	-	-	-	ナデ、一部剥落	タタキ	
58	3	須恵器	壺	S109 S109-SK1 S109カマド1	覆土、床直、スエキ2~14・22・23 覆土 3層(煙道底面)、スエキ1	16.9	10.5	30.5	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ	口縁部歪みあり 口唇及び肩部の一部が磨耗し白くなる
59	1	須恵器	壺	S109	覆土	-	-	-	ロクロナデ、一部カキメ	ロクロナデ	還元焼成不十分で赤い
59	2	須恵器	壺	S109カマド2	5層	-	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ	外面灰黄褐色
59	3	須恵器	壺	S109	覆土	-	-	-	ヘラナデ、ロクロナデ	ロクロナデ 灰かぶり	
59	4	須恵器	甕	S109-SK2	覆土	-	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ、灰かぶり	外面白っぽい
59	5	須恵器	壺	S109-SK2	覆土	-	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ、灰かぶり	外面白っぽい
59	6	須恵器	壺	S109 S109-SK3	覆土 覆土、1層	-	-	-	ロクロナデ	(全体)ロクロナデ(胴下部)ヘラケズリ→ナデ	色調がややくすんでいる
59	7	須恵器	壺	S109 S109カマド2	床直 5層	-	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ→ヘラケズリ	スエキ50 白っぽい、割れ口被熱、図45-10と同一か
59	8	須恵器	坏	S109	覆土	13.0	5.7	4.9	ロクロナデ、火禱	ロクロナデ、ヘラナデ、底面回転系切り	口唇内面の一部にスス付着、灯明利用?
59	9	須恵器	坏	S109	覆土	-	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ 灰かぶり	口縁部歪みあり
64	1	土師器	甕	SB01-Pit11	覆土	-	-	-	ナデ	ヘラケズリ→ナデ	
64	2	土師器	甕	SB01-Pit10	覆土	-	(4.0)	-	ヘラナデ	ヘラケズリ→ナデ、底:ナデ	
64	3	須恵器	甕	SB01-Pit10	覆土	-	-	-	当具痕?	タタキ	
64	4	土師器	甕	SB02-Pit9	覆土	-	-	-	ヘラナデ	ヘラケズリ	
64	5	土師器	甕	SB02-Pit9	覆土	-	-	-	ヘラナデ	ヘラケズリ	
64	6	土師器	甕	SB02-Pit1	覆土	-	-	-	ナデ	ナデ	二次被熱により一部黒色・赤色化
70	23	土師器	甕	SK19	覆土	-	(9.0)	-	ナデ	ヘラケズリ→ユピナデ(一部)、底面木葉痕	
70	24	土師器	坏	SK19	覆土	-	-	-	ロクロナデ、黒色処理	ロクロナデ	
88	30	土師器	甕	Q-22・23	攪乱	-	-	-	ロクロナデ	ヘラケズリ	須恵器?
88	31	須恵器	壺	I B-26	表土、確認面	-	(7.0)	-	ロクロナデ、当て具?による同心円	ロクロナデ 底面回転系切り	

表13 土製品観察表

図	番号	種別	出土位置	層位	計測値 (mm)			重量 (g)	観察所見
					長さ	幅	厚さ		
27	7	炉壁	S101	床上 (S-4)	46	59	21	64.3	スサ混
34	11	土製支脚	S103	覆土	(111)	93	92	245.0	輪積みによる成形
45	11	キノコ形土製品	S107	覆土 (火山灰直上、S-1)	52	53	37	37.0	ヘラケズリによる調整
61	1	レンガ状土製品	S109	底面	384	179	35	2630.0	ケズリ・ナデ (ヘラ状工具) による成形・面取り・調整 表面黒斑あり
			S109-SK3	1層 (S-1)					
			S109カマド2	検出面 (住6層中) (S-7)					
61	2	レンガ状土製品	S109	床直	151	154	34	652.4	ケズリ・ナデ (ヘラ状工具) による成形・面取り・調整 裏面剥落が激しい
			S109-SK4	検出面 (S-1)					
61	3	レンガ状土製品	S109-SK3	検出面	114	107	39	408.5	ケズリ・ナデ (ヘラ状工具) による成形・面取り・調整 表裏面剥落が激しい
61	4	炉壁	S109	攪乱	72	54	30	72.6	底面に白色粘土付着
61	5	炉壁	S109-SK3	1層	66	47	31	56.7	破面も黒色化している
71	22	レンガ状土製品	SK26	覆土	371	186	41	2920.2	ケズリ・ナデ (ヘラ状工具) による成形・面取り・調整 表裏面剥落が激しい
72	20	土器片利用土製品	SK41	覆土	71	72	11	59.7	不整形・周縁整形・胴部・貝殻腹縁文
99	3	土器片利用土製品	N-13	IV層相当	74	64	13	72.2	不整形・周縁研磨 (敲打状)・胴部・貝殻押引文・貝殻条痕文
99	4	土器片利用土製品	S-30	I層	47	46	12	33.4	四角状・1側面研磨 (敲打状)・胴部・貝殻腹縁文・沈線 (鋸歯状)
99	5	土器片利用土製品	南斜面	トレンチ2	42	40	6	12.4	不整形・1側面研磨 (平坦)・胴部・貝殻押引文
99	6	土器片利用土製品	Q-18	確認面	40	37	8	12.5	円状・周縁整形・胴部・LR
99	7	土器片利用土製品	南斜面	IV層	34	36	6	9.0	円状・周縁整形・部分的に摩滅・胴部・LR・摩滅
99	8	土玉	I B-27	確認面	15	15	11	2.3	穿孔

表14 石器・石製品観察表

遺構内出土石器

図	番号	遺構名	グリッド	層位	器種	細分	計測値 (mm)			重さ (g)	石質	備考 (S番)
							長さ	幅	厚さ			
27	12	S101		覆土	砥石		142	59.8	62	463.4	砂岩	
60	13	S109内SK02		覆土	砥石		77.1	53.8	51.7	248.9	チャート	
70	11	SK07		覆土	トランジ		52.9	43.2	16.9	29.1	珪頁	
71	7	SK20		覆土	磨石・敲石		64.4	66.1	35.9	143.8	砂岩	
71	8	SK20		覆土	磨石・敲石		98.5	62.9	39.4	257.0	安山岩	
71	9	SK23		覆土	磨石	I c	67.4	55.4	27.3	154.6	閃緑岩	
71	21	SK25		覆土	両面調整		40.1	25.4	8.4	8.5	珪頁	先端部に黒色付着物
72	8	SK35		覆土	石核		42.2	56.0	43.7	102.4	珪頁	
72	23	SK46		覆土	磨石	II	100.1	62	25.6	260.3	粗粒玄武岩	
78	3	SV01		覆土	磨石	I a	144.9	75.5	61.6	937.1	チャート	
78	4	SV01		覆土	磨石・敲石		73.3	53	40.6	190.2	安山岩	
78	5	SV01		覆土	磨石・敲石		108.3	59.5	29.5	219.9	安山岩	
78	13	SV04		覆土	磨石・敲石		126.1	67.7	24.2	367.1	粗粒玄武岩	
78	23	SV05		覆土	石鏃		22.8	11.3	4.1	0.9	チャート	
78	24	SV05		覆土	石匙		55.0	27.4	7.0	7.0	珪頁	
78	25	SV05		覆土	敲石	II	85.7	71.9	39.0	327.2	砂岩	
82	10	貝集中3	W-15	II・III層	石匙		41.1	33.7	10.0	9.7	珪頁	破損品
82	11	貝集中3		貝層下 (IV層)	磨石	II	77.4	95.8	53.1	188.0	安山岩	S-1, 器面・側縁にスリ痕

遺構内出土石製品

図	番号	遺構名	グリッド	層位	器種	細分	計測値 (mm)			重さ (g)	石質	備考 (S番)
							長さ	幅	厚さ			
27	13	S101		確認面	石製品		68.8	39.3	11.4	38.9	チャート	
30	15	S102		床直	石製品		51.2	43	6.7	16.0	頁岩	S-1
34	12	S103		床面	石製品		137.8	121.6	50.5	1074.7	安山岩	
61	6	S109		床直	軽石製品		186.7	171.2	57.1	511.3	軽石	S-9

遺構外出土石器

図	番号	遺構名	グリッド	層位	器種	細分	計測値 (mm)			重さ (g)	石質	備考 (S番)
							長さ	幅	厚さ			
89	1		Q-22	攪乱	石鏃		23.5	16.2	4.1	1.7	珪頁	
89	2		X-20	I層	石槍		60.4	24.8	10.1	12.3	珪頁	
89	3		X-29	I層	石槍		65.6	29.0	12.0	18.5	珪頁	
89	4		T-31	確認面	石槍		73.4	36.0	21.6	58.4	珪頁	欠損部に微細剥離、破損後にスクレイパーとして転用か？
89	5	S102		覆土	両面調整		28.6	20.6	11.4	6.3	珪頁	破損品
89	6	SD02		覆土	両面調整		40.8	28.6	10.7	11.2	珪頁	
89	7			表探	石匙		84.6	28.6	12.8	16.4	珪頁	松原型石匙
89	8			表探	石匙		61.8	30.2	13.8	19.0	珪頁	
89	9			表探	スクレイパー		59.0	60.0	14.1	38.3	珪頁	黒色付着物、つまみを意識した調整か？石匙の可能性もあり
89	10	南側斜面		I～IV層	石匙		51.2	43.1	10.1	17.3	珪頁	
89	11		T-29	I層	石匙		47.4	31.3	12.6	12.7	珪頁	
89	12		V-20	I層	石匙		67.5	55.1	16.1	40.1	珪頁	基部に黒色付着物。器面全体に光沢があるが、背面右端部に強い光沢有
89	13	南側斜面		Ⅲ層	籠状石器		48.7	32.8	13.0	20.7	珪頁	器面全体に光沢があるが、腹面に残存する礫面に強い光沢有
89	14	S109		覆土	籠状石器		45.9	35.6	18.9	31.3	珪頁	刃部裏面に強い光沢 上端部欠損後顕著な加工あり
89	15	S108		覆土	籠状石器		59.4	35.9	14.5	34.7	珪頁	刃部裏面に強い光沢
89	16	南側斜面		I～IV層	籠状石器		44.0	46.0	9.9	23.7	珪頁	刃部裏面に強い光沢
89	17		T-29	I層	籠状石器		42.6	36.8	11.4	19.6	珪頁	上端部欠損後加工あり
90	1	S101		覆土	トランシェ		56.8	29.9	12.9	18.4	珪頁	背面基部付近に光沢
90	2	南側斜面		Ⅲ層	トランシェ		47.0	33.6	12.9	15.4	珪頁	
90	3		X-29	I層	スクレイパー		46.4	36.8	11.2	13.0	珪頁	
90	4	SP04		覆土	スクレイパー		51.1	30.1	12.3	19.6	珪頁	破損品
90	5			I層	スクレイパー		64.1	43.2	16.3	43.3	珪頁	
90	6		X-29	I層	スクレイパー		71.7	23.1	11.6	13.0	珪頁	
90	7		Y-25	I層	スクレイパー		32.1	20.1	5.2	3.0	珪頁	刃部裏面に強い光沢 石匙の破損品か
90	8		X-29	I層	石錐		21.2	13.8	6.2	1.4	珪頁	錐部弱い摩滅
90	9		V-15	IV層	石錐		26.6	20.4	8.6	3.9	珪頁	
90	10	S109		覆土	石錐		35.9	24.1	7.1	4.1	珪頁	錐部弱い摩滅
90	11		S-32	確認面	石錐		46.4	28.6	9.7	8.8	珪頁	
90	12	S101		Q-25	攪乱	二次加工	38.6	31.5	17.5	23.2	珪頁	
90	13			表探	石核		22.9	27.4	24.1	14.3	珪頁	
90	14	南側斜面		I～Ⅲ層	石核		53.7	79.0	47.2	226.5	珪頁	めのう
90	15		V-25	I層	石核		22.6	40.2	22.5	20.9	珪頁	
91	1		S-30	I層	石核		46.5	85.8	46.1	166.6	珪頁	
91	2	南側斜面		I～Ⅲ層	磨製石斧		58.2	37.5	14.4	38.4	頁岩	おもて面中央付近に強い光沢、下半部欠損。裏面欠損後縁辺加工あり
91	3			覆土	磨製石斧		73.2	34.5	14.4	49.3	頁岩	
91	4		Y-23	V層	磨製石斧		59.2	21.5	10.3	20.87	チャート	擦切痕
91	5	S102		覆土	磨製石斧		66.3	16.2	10.9	166.55	緑色片岩	
91	6		T-29	I層	磨製石斧		50.6	15.8	7.9	14.32	頁岩	
91	7	S102		覆土	磨製石斧		52.9	22	18.2	43.1	チャート	敲打痕、擦切痕
91	8	S109		床	磨製石斧		116	48.6	32.1	256.9	閃緑岩	S-2
91	9			表土	磨製石斧		106.8	62	30.2	287.4	粗粒玄武岩	
92	1		W-27	I層	磨製石斧		116.6	45.6	28.6	217.1	粗粒玄武岩	
92	2		X-24	I層	磨製石斧		80.2	60.4	33.1	261.8	安山岩	
92	3		P-28	確認面	磨製石斧		108.8	64.2	29.2	305.4	粗粒玄武岩	
92	4			表探	打製石斧		71.0	36.7	18.7	52.8	頁岩	背面刃部付近、腹面基部付近に光沢
92	5			表探	打製石斧		69.2	56.1	12.0	50.9	粘板岩	
92	6		X-27	確認面	磨石	I a	165.2	73.9	57.7	902.6	デコイ	
92	7		Y-25	I層	磨石	I a	128.6	87.7	77.7	873.7	砂岩	
92	8		SK46 付近		磨石	I a	76.3	65.2	62.9	369.7	砂岩	
93	1	S107		覆土	磨石	I a	128.7	70.8	68.1	657.3	ひん岩	
93	2	SD02		覆土	磨石	I a	136.6	56.5	64.4	597.4	デコイ	
93	3	南側斜面		トレンチ2	磨石	I a	115.1	76.8	64.1	726.4	砂岩	

図	番号	遺構名	グリッド	層位	器種	細分	計測値 (mm)			重さ (g)	石質	備 考 (S番)
							長さ	幅	厚さ			
93	4		R-32	確認面	磨石	I a	115.8	66.9	55.3	550.1	流紋岩	
93	5	S101			磨石	I a	179.6	73.5	77.8	1186.4	安山岩	S-5
93	6		X-24	I層	磨石	I b	133.7	68.3	51.3	719.7	安山岩	
93	7	南側斜面		トレンチ2	磨石	I b	142.1	58.2	48.5	645.5	安山岩	
93	8		S-30	I層	磨石	I b	91.3	40.5	55.3	243.8	安山岩	
93	9	SD02		覆土	磨石	I b	122.9	56.3	38.1	306.7	テイイト	
93	10	南側斜面		トレンチ1	磨石	I b	103.6	59.8	37.8	312.1	砂岩	
93	11		X-23	I層	磨石	I b	146.6	65.1	47.8	672.1	安山岩	
93	12		S-30	I層	磨石	I b	99.4	72.1	34.4	345.4	砂岩	
93	13		V-28	確認面	磨石	I b	108.5	93.3	50.7	785.0	砂岩	
94	1		N-15	IV層相当	磨石	I b	135.3	46.6	33.2	278.1	頁岩	
94	2		O-15	IV層相当	磨石	I b	108.4	40.7	24	127.8	砂岩	
94	3		R-29	I層	磨石	I b	97.6	40.1	25.5	125.3	安山岩	
94	4	南側斜面		I~IV層	磨石	I b	136.6	56.5	64.4	181.0	砂岩	
94	5		P-13	IV層相当	磨石	I b	128.4	57.3	21.1	258.9	砂岩	
94	6		Y-25	I層	磨石	I b	132.1	76.9	20.4	334.6	砂岩	
94	7			表土	磨石	II	116.1	62.7	36.5	293.9	安山岩	
94	8		T-29	確認面	磨石	II	90.6	62.4	34.5	290.9	凝灰岩	
94	9	S109内SK02		覆土	磨石	II	93.5	91.6	48.8	622.3	チャート	
94	10	南側斜面		トレンチ2	磨石	II	92.9	87.4	56.5	699.3	安山岩	
94	11		W-29	確認面	磨石	II	159.3	69.7	49.5	815.1	安山岩	
95	1	S107			磨石	II	93.3	68	36.9	368.8	安山岩	S-2
95	2	S102		覆土	敲石	I	93	84.2	29.9	357.8	安山岩	
95	3			I層	敲石	I	80.3	64.3	42.5	296.3	安山岩	
95	4		S-28	確認面	敲石	I	78.7	63.1	30.8	211.7	安山岩	
95	5		I A-25	確認面	敲石	I	112.1	51.6	28.6	244.2	安山岩	
95	6		U-30	確認面	敲石	I	64.3	91.9	30.9	156.8	安山岩	敲石 (くぼみあり)
95	7	南側斜面		I~IV層	敲石	II	114.3	77.9	34.3	304.9	チャート	
95	8			表探	敲石	II	64.1	56.1	33.2	954.4	テイイト	
95	9	S105カマド2		覆土	磨石	II	149.6	86.2	48.7	917.3	安山岩	
95	10	南側斜面		I~IV層	敲石	II	128.7	70.8	68.1	185.7	チャート	
96	1	S107		覆土	磨石・敲石		120.7	87.7	48.2	675.3	安山岩	
96	2		R-29	I層	磨石・敲石		126.3	80.7	43.5	637.5	砂岩	
96	3	南側斜面	W-16	IV層	磨石・敲石		93.1	77.5	34.1	307.6	安山岩	
96	4		W-24	IV層相当	磨石・敲石		92.5	65.9	46.7	418.0	安山岩	
96	5			表探	磨石・敲石		115.4	64.1	41.3	381.8	安山岩	
96	6	S102		覆土	磨石・敲石		105.3	57.7	20.7	196.2	粗粒玄武岩	
96	7		P-31	I層	石錘	I	63.7	51.3	11.9	73.5	安山岩	
96	8	S102		覆土	石錘	I	67.3	55.1	19.5	100.9	テイイト	
96	9	南側斜面		トレンチ2	石錘	I	68.2	62.9	17.8	92.3	砂岩	
96	10		P-27	確認面	石錘	I	57.2	57.8	17.5	67.8	安山岩	
96	11		S-24	確認面	石錘	I	59.6	54.3	26.0	112.0	テイイト	
96	12			表探	石錘	I	73.3	64.2	20.4	124.4	テイイト	
97	1		Y-21	I層	石錘	I	77.3	72.7	31.3	213.0	チャート	
97	2			表探	石錘	I	83.0	71.5	28.1	228.5	テイイト	
97	3	南側斜面		I~IV層	石錘	I	72.5	67.5	21.7	116.0	砂岩	
97	4	南側斜面		トレンチ2	石錘	I	71.3	68.3	24.7	150.1	砂岩	
97	5	南側斜面		トレンチ2	石錘	I	98.8	95.7	24.3	295.2	砂岩	
97	6		S-24	IV層相当	石錘	I	72.3	72.5	25.2	163.3	安山岩	
97	7	南側斜面	P-35	表土	石錘	II	75.9	55.1	23	136.3	テイイト	
97	8	S107		覆土	石錘	II	68.6	38.1	17.2	67.7	安山岩	
97	9	S102		覆土	石錘	II	84.8	56.9	25.0	150.1	砂岩	
97	10		SK40付近		石錘	II	121.8	93.8	30.1	553.3	砂岩	
97	11		Q-31	I層	石錘	II	107.5	79.1	30.4	292.4	チャート	
98	1			I層	石錘	II	96.7	67.6	30.2	216.2	安山岩	
98	2			表探	石錘	II	96.3	72.9	38.6	435.2	安山岩	
98	3		Y-25	I層	石錘	II	90.3	63.6	26.4	194.4	安山岩	
98	4		Y-25	I層	石錘	II	78.8	62.1	13.2	74.6	砂岩	
98	5	南側斜面	P-35	表土	加工礫		89.2	48.3	14.3	93.8	頁岩	石斧未製品?
98	6	南側斜面		I~III層	加工礫		100.2	62	22.7	206.3	チャート	石斧未製品?

図	番号	遺構名	グリッド	層位	器種	細分	計測値 (mm)			重さ (g)	石質	備考 (S番)
							長さ	幅	厚さ			
98	7		V-28	確認面	加工礫		168.3	52.8	42.9	527.7	頁岩	石斧未製品?
98	8		U-31 周辺	I層	加工礫		124.9	33.1	13.6	50.1	頁岩	
98	9			表探	加工礫		90.9	35.5	15.8	60.2	チャート	
98	10	南側斜面		トレンチ1	加工礫		122.9	53.5	30.4	252.6	チャート	
98	11		T-29	確認面	砥石		107.6	90.9	49.1	373.7	砂岩	
99	1		X-23	I層	台石		272.5	199.2	94.9	5500.0	安山岩	
99	2	南側斜面		トレンチ2	台石		188	191.4	58.2	3700.0	安山岩	

遺構外出土石製品

図	番号	遺構名	グリッド	層位	器種	細分	計測値 (mm)			重さ (g)	石質	備考 (S番)
							長さ	幅	厚さ			
99	9			表探	石製品		78.1	82.5	53.2	83.5	軽石	側縁にスリ痕あり
99	10		U-31 周辺	I層	石製品		88.4	71.6	19.6	191.3	チャート	
99	11		P-31	I層	石製品		47.6	50.1	17.4	67.4	頁岩	
99	12		Q-27	確認面	石製品		83.6	76.9	33	299.6	安山岩	

表15 鉄製品観察表

図	番号	出土位置	層位	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	観察所見
					長さ	幅	厚さ		
27	8	S101	覆土	手鎌	(72)	29	4	11.3	目釘穴、木質痕あり
27	9	S101	覆土	棒状	4.7	5.8	0.8	20.1	図27-10・11と重なって出土、「コ」の字状に曲げている
27	10	S101	覆土	棒状	5.3	6.5	0.8	16.2	図27-9・11と重なって出土、「コ」の字状に曲げている
27	11	S101	覆土	棒状	5.8	5.4	1.0	21.8	図27-9・10と重なって出土、「コ」の字状に曲げている 末端に引きちぎったような痕跡
60	1	S109	5層	手鎌	(62)	(19)	(24)	10.4	目釘、木質残存
60	6	S109-SK04	覆土	刀子	133	15	8	18.3	
60	3	S109-SK02	覆土	手鎌	(81)	16	7	7.7	目釘残存
60	4	S109	5層	鏃	(61)	18	7	7.0	
60	9	S109	5層	延板	60	28	11	63.9	
60	2	S109	床直	手鎌	(63)	18	11	14.7	割れてズレたまま錆で固着
60	8	S109-SK02	覆土	鞘尻金具	35	42	15	13.3	
60	10	S109	覆土	不明	32	12	4	1.3	針金状
60	5	S109	床直	鏃	(118)	10	5	5.0	
60	7	S109	5層	鏃	(171)	18	14	65.6	炭化材層とともに出土

表16 羽口観察表

図	番号	部位	出土位置	層位	計測値 (mm)			内径 (mm)	重量	装着角度	観察所見
					長さ	幅	厚さ				
34	10	体部	S103	覆土	(48)	(51)	(32)	46	58.4	不明	底面平ら ヘラケズリによる調整
60	11	先端部 ~体部	S109	覆土	(230)	101	88	37	1690.0	60~70	底面平ら ヘラケズリによる調整 先端部溶解、ガラス質滓・溶解物付着
60	12	先端部	S109	覆土	(44)	(47)	(107)	不明	18.2	不明	被熱による変色・発泡

表17 鉄生産関連遺物観察表

図	番号	出土位置	層位	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	磁着度	メタル度	観察所見
					長さ	幅	厚さ				
34	9	S103	覆土	含鉄鍛冶滓	70	46	24	96.6	6	●	小割、木炭痕あり、一部チタン化
59	10	S109	5・6層	含鉄碗形鍛冶滓	84	121	49	317.7	14	◎	2個癒着、黒錆・クラックあり
59	11	S109	床直	含鉄碗形鍛冶滓	71	83	43	255.7	9	●	粘土・木炭噛み込み
71	23	SK26	覆土	含鉄鍛冶滓	69	59	49	189.1	9	●	白色粘土付着 木炭噛み込み (I AAA-230683、第2章第3節)



第1号竖穴建物跡 焼土・炭化材検出(西→)



第1号竖穴建物跡 完掘(北→)

写真22 第1号竖穴建物跡(1)



第1号竖穴建物跡 土層(西→)



第1号竖穴建物跡 土層(南→)



第1号竖穴建物跡 焼土(貼床)・カマド火床面 土層(西→)



第1号竖穴建物跡 カマド 土層(北西→)



第1号竖穴建物跡 掘方 完掘(北→)

写真23 第1号竖穴建物跡(2)



第2号竖穴建物跡 完掘(南→)



第2号竖穴建物跡 土層(西→)



第2号竖穴建物跡 土層(南西→)



第2号竖穴建物跡 遺物出土(南東→)

写真24 第2号竖穴建物跡(1)



第2号竖穴建物跡 カマド 土層(南東→)



第2号竖穴建物跡 カマド 土層(南→)



第2号竖穴建物跡 Pit 1 土層(北→)



第2号竖穴建物跡 Pit 2 土層(南→)



第3号竖穴建物跡 土層(南西→)



第3号竖穴建物跡 土層(北西→)

写真25 第2号竖穴建物跡(2)・第3号竖穴建物跡(1)



第3号竪穴建物跡 火山灰検出(北西→)



第3号竪穴建物跡 カマド 完掘(北西→)



第3号竪穴建物跡 カマド煙道 土層(北→)



第3号竪穴建物跡 カマド火床面 断ち割り(西→)



第3号竪穴建物跡 床面検出(南→)

写真26 第3号竪穴建物跡 (2)



第4号竖穴建物跡 完掘(南西→)



第4号竖穴建物跡 炭化物・焼土検出(南西→)



第4号竖穴建物跡 土層(南東→)



第5号竖穴建物跡 完掘(南→)

写真27 第4号竖穴建物跡・第5号竖穴建物跡(1)



第5号竖穴建物跡 土層(南→)



第5号竖穴建物跡 南西部壁際 遺物出土(東→)



第5号竖穴建物跡 掘方 完掘(南→)



第5号竖穴建物跡 カマド1 土層(西→)



第5号竖穴建物跡 カマド2 土層(南→)



第5号竖穴建物跡 カマド3 土層(北西→)



第5号竖穴建物跡 カマド3袖 土層(南→)

写真28 第5号竖穴建物跡 (2)



第6号竖穴建物跡 完掘(南→)



第6号竖穴建物跡 土層(西→)



第6号竖穴建物跡 カマド煙道 土層(西→)



第6号竖穴建物跡 カマド袖 土層(南→)

写真29 第6号竖穴建物跡



第7号竪穴建物跡 炭化材検出(南東→)



第7号竪穴建物跡 火山灰検出(南西→)



第7号竪穴建物跡 キノコ形土製品出土(北西→)



第7号竪穴建物跡 SK2 炭化材検出(北東→)



第7号竪穴建物跡 カマド 遺物出土(南西→)

写真30 第7号竪穴建物跡(1)



第7号竖穴建物跡 土層(南西→)



第7号竖穴建物跡 土層(南東→)



第7号竖穴建物跡 完掘(南東→)

写真31 第7号竖穴建物跡(2)



第7号竖穴建物跡 カマド 土層(南東→)



第7号竖穴建物跡 カマド 完掘(南東→)



第7号竖穴建物跡 カマド煙道 土層(東→)



第7号竖穴建物跡 貼床 土層(南西→)



第7号竖穴建物跡 貼床 土層(南東→)

写真32 第7号竖穴建物跡 (3)



第8号竖穴建物跡 完掘(南東→)



第8号竖穴建物跡 土層(南西→)



第8号竖穴建物跡 土層(南東→)

写真33 第8号竖穴建物跡(1)



第8号竖穴建物跡 カマド 完掘(南東→)



第8号竖穴建物跡 カマド 土層(南東→)



第8号竖穴建物跡 カマド 土層(南西→)



第8号竖穴建物跡 カマド 崩落粘土(南東→)



第8号竖穴建物跡 カマド煙道 土層(南西→)



第8号竖穴建物跡 火山灰検出(南西→)



第8号竖穴建物跡 SK 1・2 土層(西→)

写真34 第8号竖穴建物跡 (2)



第9号竖穴建物跡 炭化材・遺物出土(北→)



第9号竖穴建物跡 炭化材・遺物出土拡大(西→)

写真35 第9号竖穴建物跡(1)



炭8 検出(西→)



炭8 断面(南→)



炭1 検出(南→)



炭22・須恵器 出土(北→)



カマド2袖 土製品出土(北→)



SK3堆積土 土製品出土(西→)



SI09堆積土 土製品出土(南西→)



図61-1 土製品接合状況

写真36 第9号竖穴建物跡(2)



第9号竪穴建物跡 床面施設検出 空撮(上が北)



第9号竪穴建物跡 SK 1～3 検出(西→)



SK 1 火山灰検出(北→)



SK 1 土層1回目(北→)

写真37 第9号竪穴建物跡(3)



SK 2 焼土検出(東→)



SK 3 土層(西→)



SK 3 土層(西→)



SK 4 火山灰検出(西→)



SK 4 堆積焼土土層(西→)



SK 4 完掘(西→)



Pit 2 土層(南→)



Pit 8 完掘(西→)

写真38 第9号竖穴建物跡(4)



第9号竪穴建物跡 焼土7・8 検出(西→)



焼土7 断ち割り(南→)



焼土8 断ち割り (北→)



第9号竪穴建物跡 焼土5・6 検出(南→)



カマド1 煙道部 土層(西→)



カマド1 煙出部底面 須恵器出土(西→)



カマド1 完掘(北→)



カマド1 火床面 断ち割り(西→)

写真39 第9号竪穴建物跡 (5)



カマド2 検出(南西→)



カマド2煙道 土層(東→)



カマド2煙出 土層(北→)



カマド2火床面 断ち割り(北→)



第9号竖穴建物跡 完掘(南→)

写真40 第9号竖穴建物跡(6)



第1号掘立柱建物跡と竖穴建物跡 空撮(北→)



第1号・第2号・第4号掘立柱建物跡 空撮(下が北)

写真41 掘立柱建物跡 (1)



第1号掘立柱建物跡 完掘(東→)



第2号掘立柱建物跡 完掘(北→)



第3号掘立柱建物跡 空撮(北西→)



第4号掘立柱建物跡 完掘(北東→)



第2号土坑 土層(南西→)



第2号土坑 完掘(南東→)



第3号土坑 土層(南西→)



第3号土坑 完掘(南西→)

写真42 掘立柱建物跡(2)・土坑(1)



第4号土坑 土層(南西→)



第4号土坑 完掘(南東→)



第5号土坑 土層(南西→)



第5号土坑 完掘(南西→)



第6号土坑 土層(北西→)



第6号土坑 完掘(北西→)



第7号土坑 土層(南西→)



第7号土坑 完掘(南西→)

写真43 土坑(2)



第8号土坑 土層(南東→)



第9号土坑 土層(西→)



第10号土坑 土層(西→)



第10号土坑 完掘(西→)



第10号土坑 逆茂木 土層(南西→)



第10号土坑 逆茂木 土層(北東→)



第11号土坑 土層(南西→)



第11号土坑 完掘(南西→)

写真44 土坑(3)



第12号土坑 土層(北西→)



第12号土坑 完掘(北西→)



第13号土坑 土層(西→)



第13号土坑 逆茂木 土層(北→)



第13号土坑 完掘(西→)

写真45 土坑(4)



第14号土坑 土層(南東→)



第14号土坑 完掘(南→)



第15号土坑 完掘(南→)



第15号土坑 逆茂木 土層(北西→)



第15号土坑 土層(南→)

写真46 土坑 (5)



第16号土坑 完掘(西→)



第17号土坑 焼土検出(南西→)



第18号土坑 土層(北→)



第18号土坑 完掘(北→)



第20号土坑 土層(南西→)



第20号土坑 完掘(南西→)



第21号土坑 土層(西→)



第21号土坑 完掘(西→)

写真47 土坑(6)



第22号土坑 土層(北西→)



第23号土坑 土層(南→)



第24号土坑 土層(北東→)



第24号土坑 完掘(南西→)



第26号土坑 遺物出土(西→)

写真48 土坑 (7)



第25号土坑 土層(南→)



第27号土坑 完掘(南西→)



第28号土坑 土層(南→)



第28号土坑 完掘(南→)



第29号土坑 土層(南→)



第29号土坑 完掘(南→)



第31号土坑 土層(北→)



第31号土坑 完掘(北→)

写真49 土坑(8)



第32号土坑 土層(西→)



第32号土坑 完掘(西→)



第33号土坑 土層(北西→)



第36号土坑 土層(南→)



第34号土坑 土層(南西→)



第34号土坑 完掘(南東→)



第35号土坑 土層(南西→)



第35号土坑 土層(北東→)

写真50 土坑(9)



第37号土坑 土層(南西→)



第37号土坑 完掘(南西→)



第38号土坑 土層(南西→)



第38号土坑 完掘(南西→)



第39号土坑 土層(南西→)



第39号土坑 完掘(南西→)



第40・41号土坑 土層(南西→)



第40・41号土坑 完掘(南西→)

写真51 土坑 (10)



第42・43号土坑 土層(南西→)



第42・43号土坑 完掘(南西→)



第44号土坑 土層(南西→)



第44号土坑 完掘(南西→)



第45号土坑 土層(南西→)



第45号土坑 完掘(西→)



第46号土坑 土層(南西→)



第46号土坑 完掘(南→)

写真52 土坑 (11)



第1号溝状土坑 土層(西→)



第2号溝状土坑 土層(西→)



第3号溝状土坑 土層(北西→)



第1号溝状土坑 完掘(西→)



第2号溝状土坑 完掘(西→)



第3号溝状土坑 完掘(北西→)

写真53 溝状土坑(1)



第4号溝状土坑 土層(南→)



第5号溝状土坑 土層(北西→)



第4号溝状土坑 完掘(南→)



第5号溝状土坑 完掘(北西→)

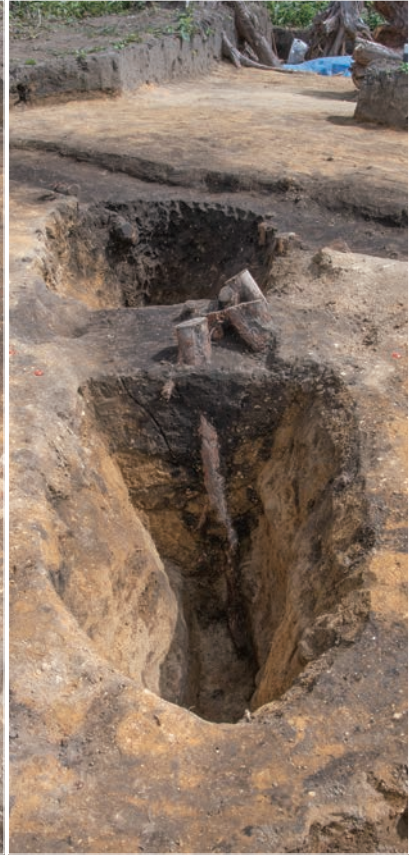
写真54 溝状土坑(2)



第6号溝状土坑 土層(南西→)



第7号溝状土坑 土層(南西→)



第8号溝状土坑 土層(西→)



第6号溝状土坑 完掘(南西→)



第7号溝状土坑 完掘(南西→)



第8号溝状土坑 完掘(西→)

写真55 溝状土坑(3)



第9号溝状土坑 土層(南西→)



第10号溝状土坑 土層(北西→)



第11号溝状土坑 土層(東→)



第9号溝状土坑 完掘(南西→)



第11号溝状土坑 完掘(東→)

写真56 溝状土坑(4)



第12号溝状土坑 土層(西→)



第13号溝状土坑 土層(南→)



第14号溝状土坑 土層(北東→)



第12号溝状土坑 完掘(西→)



第13号溝状土坑 完掘(南→)



第14号溝状土坑 完掘(北東→)

写真57 溝状土坑(5)



第15号溝状土坑 土層(南→)



第16号溝状土坑 土層(南→)



第17号溝状土坑 土層(南西→)



第15号溝状土坑 完掘(南→)



第16号溝状土坑 完掘(南→)



第17号溝状土坑 完掘(南西→)

写真58 溝状土坑 (6)



第18号溝状土坑 土層(西→)



第19号溝状土坑 土層(南→)



第20号溝状土坑 土層(北東→)



第18号溝状土坑 完掘(西→)



第19号溝状土坑 完掘(南→)



第20号溝状土坑 完掘(南西→)

写真59 溝状土坑(7)



第21号溝状土坑 土層(北東→)



第22号溝状土坑 土層(南西→)



第23号溝状土坑 土層(南→)



第21号溝状土坑 完掘(北東→)



第22号溝状土坑 完掘(南西→)



第23号溝状土坑 完掘(南→)

写真60 溝状土坑(8)



第24号溝状土坑 土層(南→)



第25号溝状土坑 土層(北西→)



第26号溝状土坑 土層(北東→)



第24号溝状土坑 完掘(南→)



第25号溝状土坑 完掘(北西→)



第26号溝状土坑 完掘(南西→)

写真61 溝状土坑(9)



第1号焼土遺構 検出(南東→)



第1号焼土遺構 断ち割り(南西→)



第2号焼土遺構 検出(北西→)



第2号焼土遺構 断ち割り(北→)



第3号焼土遺構 検出(西→)



第3号焼土遺構 断ち割り(北西→)



第4号焼土遺構 検出(北→)



第4号焼土遺構 断ち割り(北→)

写真62 焼土遺構 (1)



第5号焼土遺構 検出(北→)



第5号焼土遺構 断ち割り(北→)



第6号焼土遺構 検出(北→)



第6号焼土遺構 断ち割り(北→)



第7号焼土遺構 検出(北→)



第7号焼土遺構 断ち割り(北→)



第8号焼土遺構 検出(北→)



第8号焼土遺構 断ち割り(北→)

写真63 焼土遺構(2)



第9号焼土遺構 検出(北→)



第9号焼土遺構 断ち割り(北→)



W-21グリッド 縄文土器出土(西→)



W-23グリッド 縄文土器出土(西→)



第1号貝殻集中地点 検出(西→)



第2号貝殻集中地点 検出(西→)



第3号貝殻集中地点(拡張前壁際) 検出(北西→)

写真64 焼土遺構(3)・貝殻集中地点(1)



第3号貝殻集中地点 検出(北西→)



第3号貝殻集中地点 ブロック1 土層(南西→)



第3号貝殻集中地点 ブロック2 土層(北東→)



第3号貝殻集中地点 遺物出土(北西→)



第3号貝殻集中地点 ブロック1貝層下
遺物出土(北西→)

写真65 貝殻集中地点(2)

第1号竖穴建物跡



図27-9～11出土状態(左)とX線透過写真(右)

写真66 第1号竖穴建物跡出土遺物

第2号竖穴建物跡



第3号竖穴建物跡



写真67 第2号竖穴建物跡・第3号竖穴建物跡出土遺物(1)

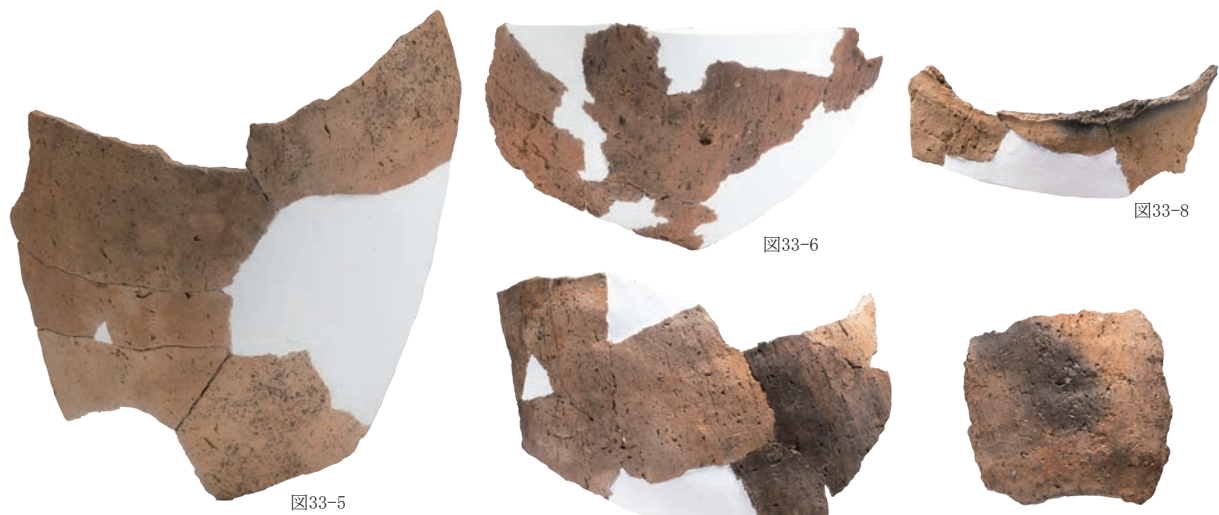


图33-5

图33-6

图33-8

图33-7

图33-9



图33-10

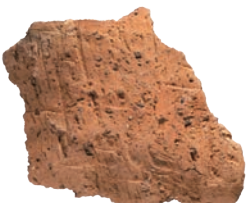


图34-1



图34-2



图34-3



图34-4



图34-5



图34-6

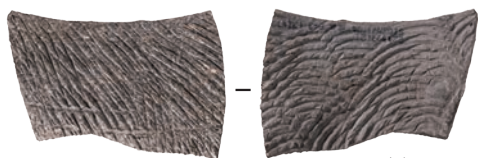


图34-7



图34-8



图34-9



图34-11



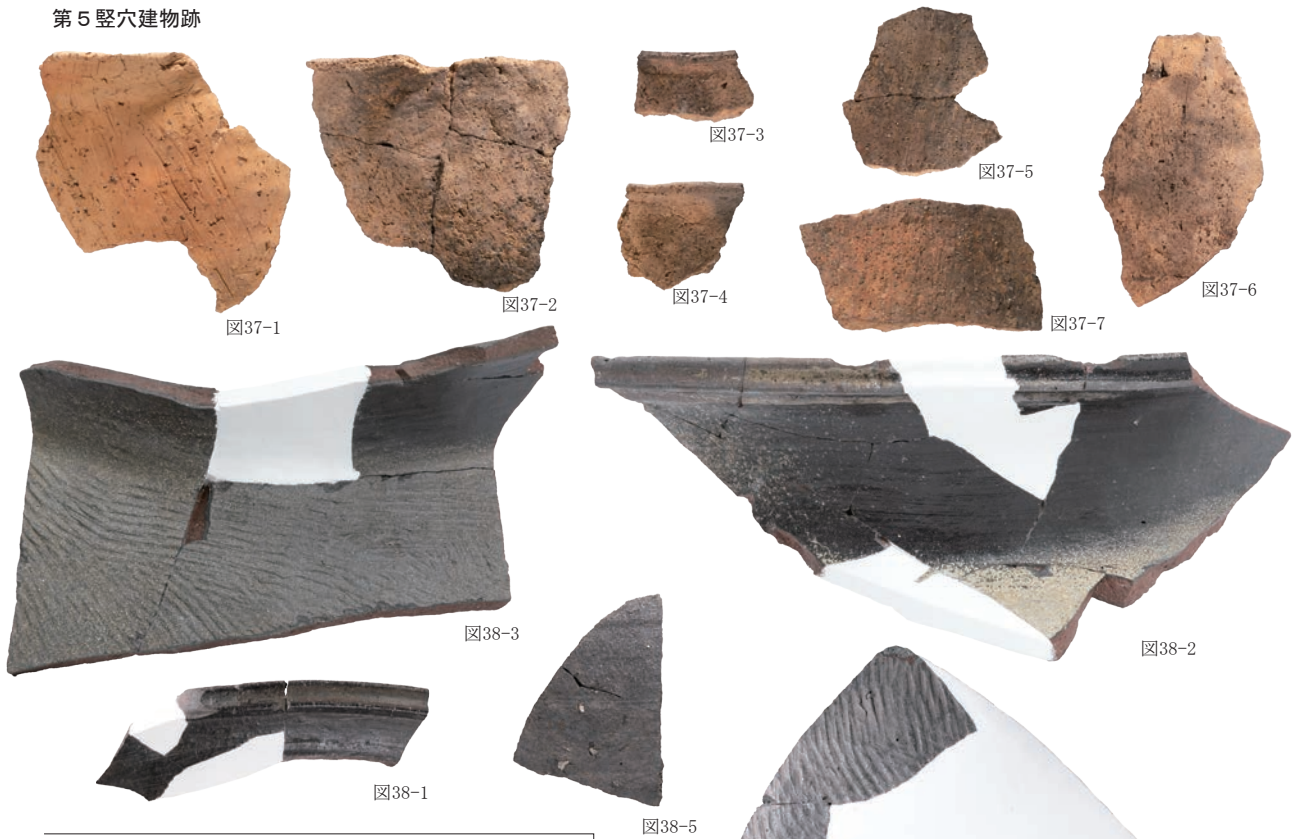
图34-12



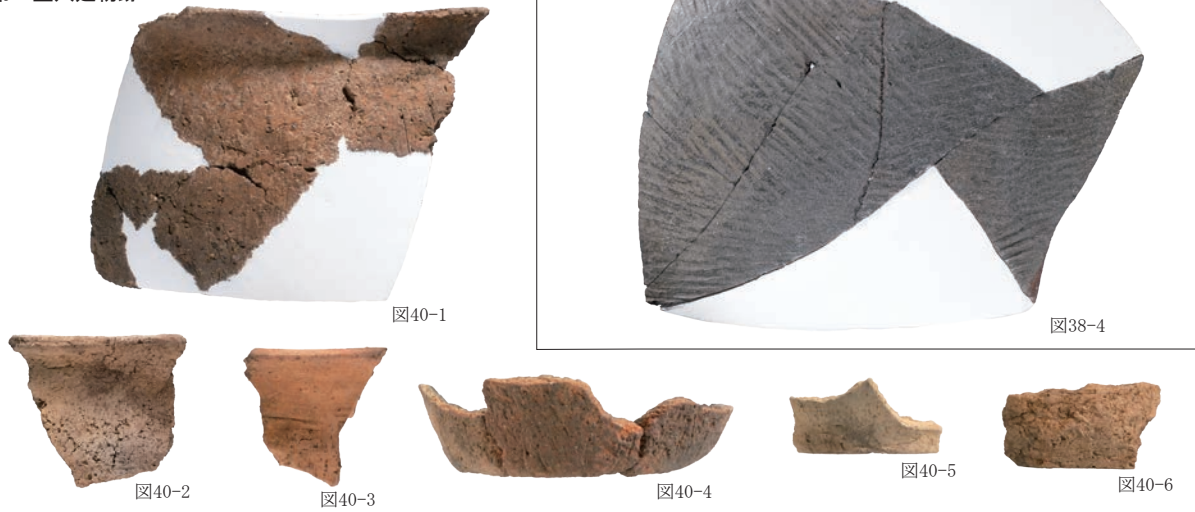
图35-2

写真68 第3号竖穴建物跡出土遺物(2)・第4号竖穴建物跡出土遺物

第5 竖穴建物跡



第6 竖穴建物跡



第7 竖穴建物跡

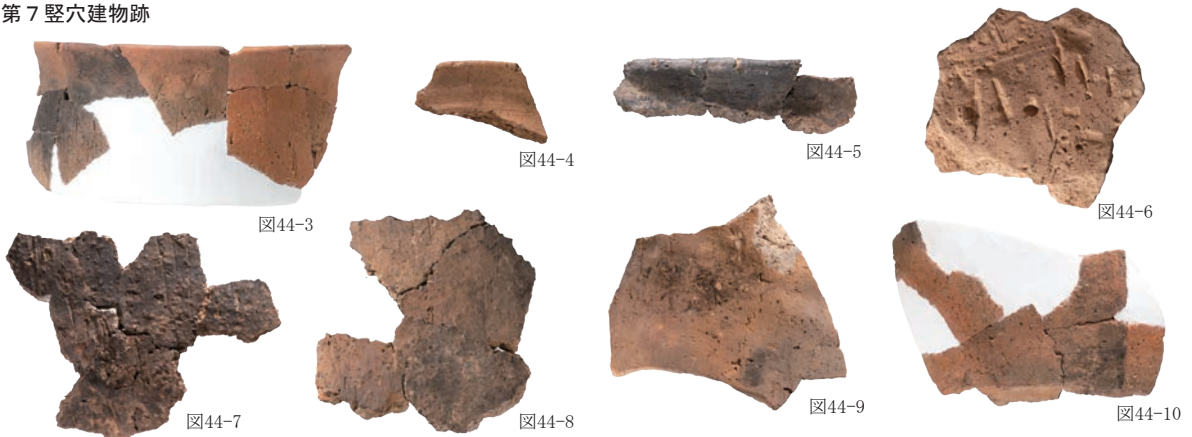


写真69 第5号竖穴建物跡・第6号竖穴建物跡・第7号竖穴建物跡出土遺物(1)



图 44-1



图 44-2



图 44-11



图 44-12



图 45-1



图 45-3



图 45-4



图 45-5



图 45-6

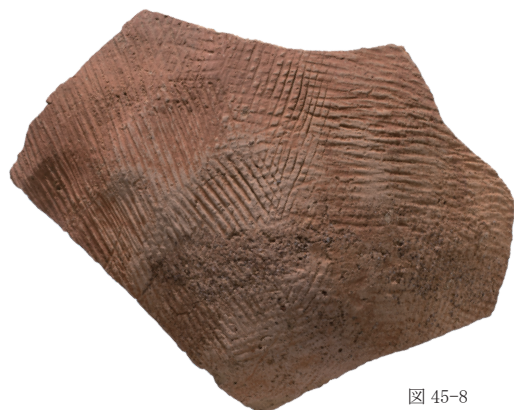


图 45-8



图 45-7



图 45-9



图 45-11



图 45-10

写真70 第7号竖穴建物跡出土遺物(2)

第8号竖穴建物跡



第9号竖穴建物跡



写真71 第8号竖穴建物跡・第9号竖穴建物跡出土遺物(1)

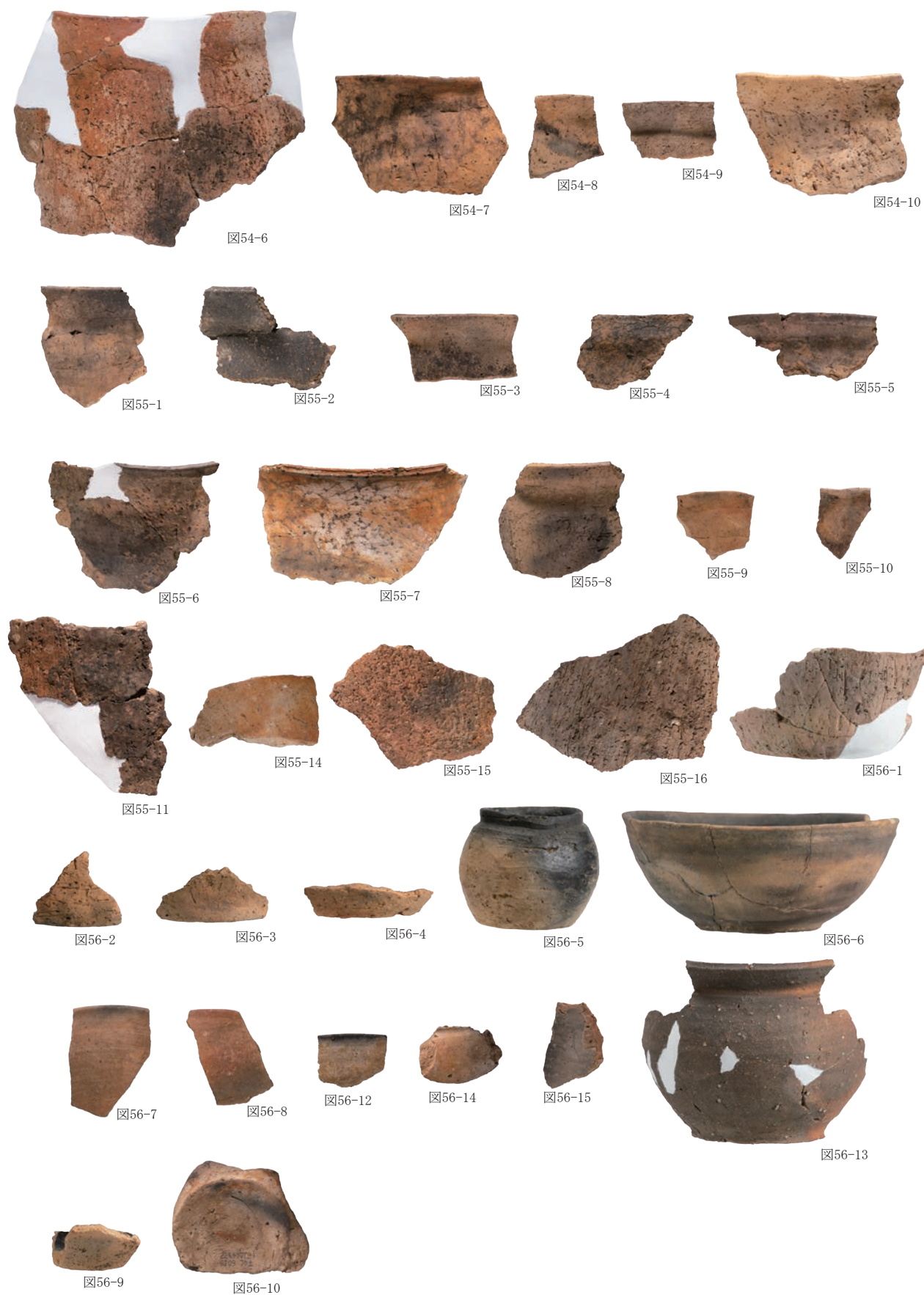


写真72 第9号竖穴建物跡出土遺物(2)



写真73 第9号竖穴建物跡出土遺物(3)



写真74 第9号竖穴建物跡出土遺物(4)

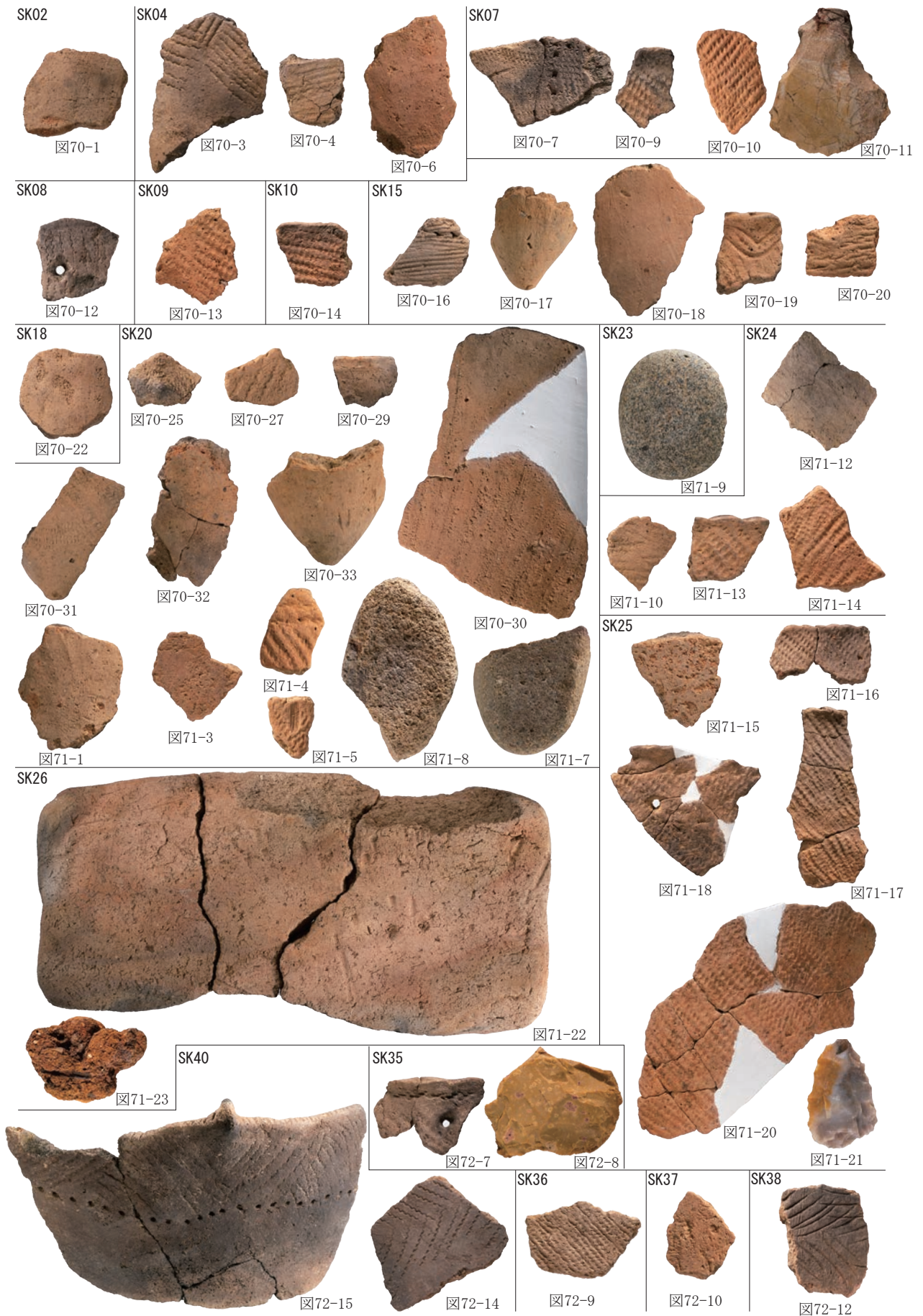


写真75 土坑出土遺物(1)



写真76 土坑出土遺物(2)・溝状土坑出土遺物・貝殻集中地点出土遺物



写真77 遺構外出土土器(1)

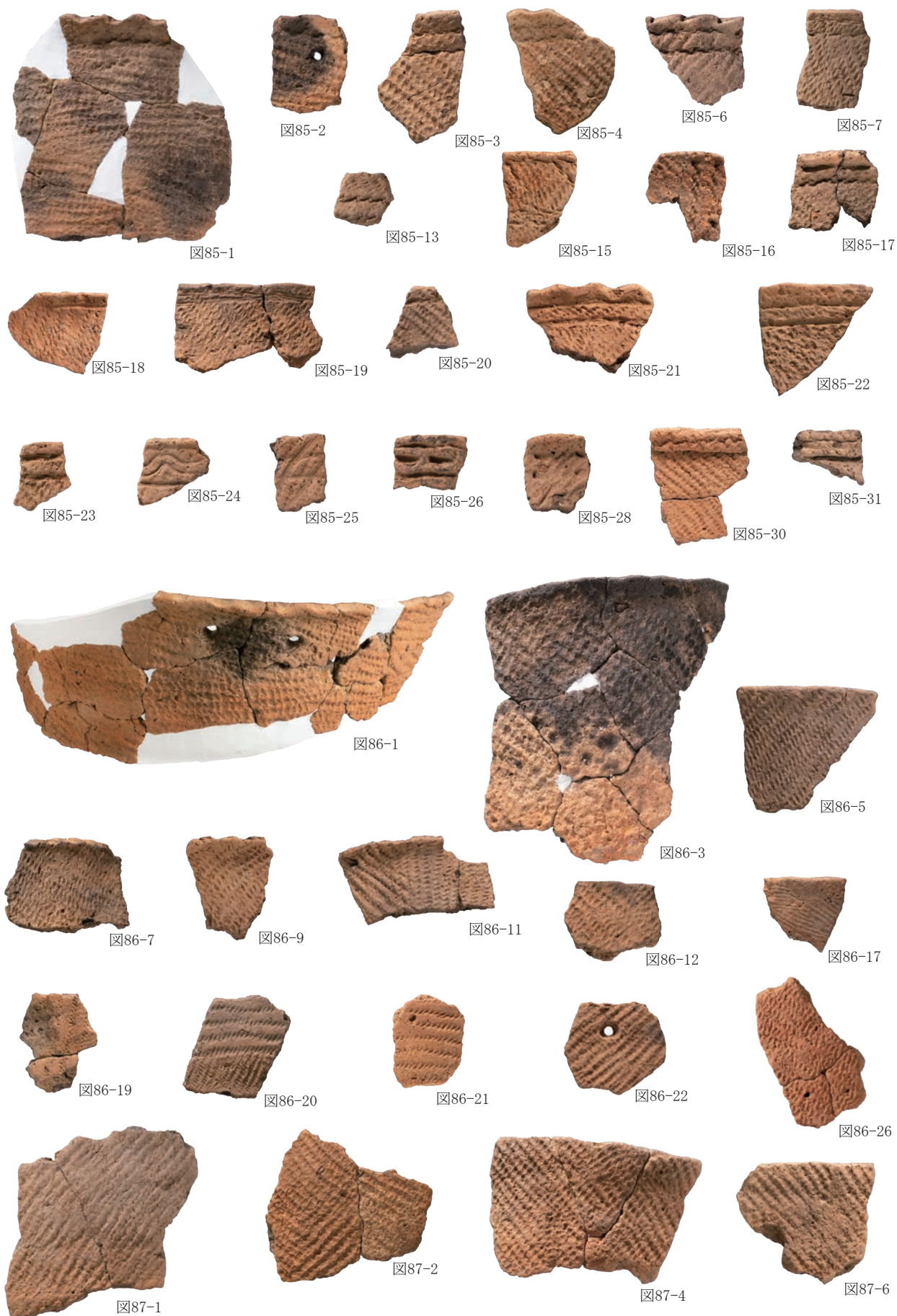


写真78 遺構外出土土器 (2)

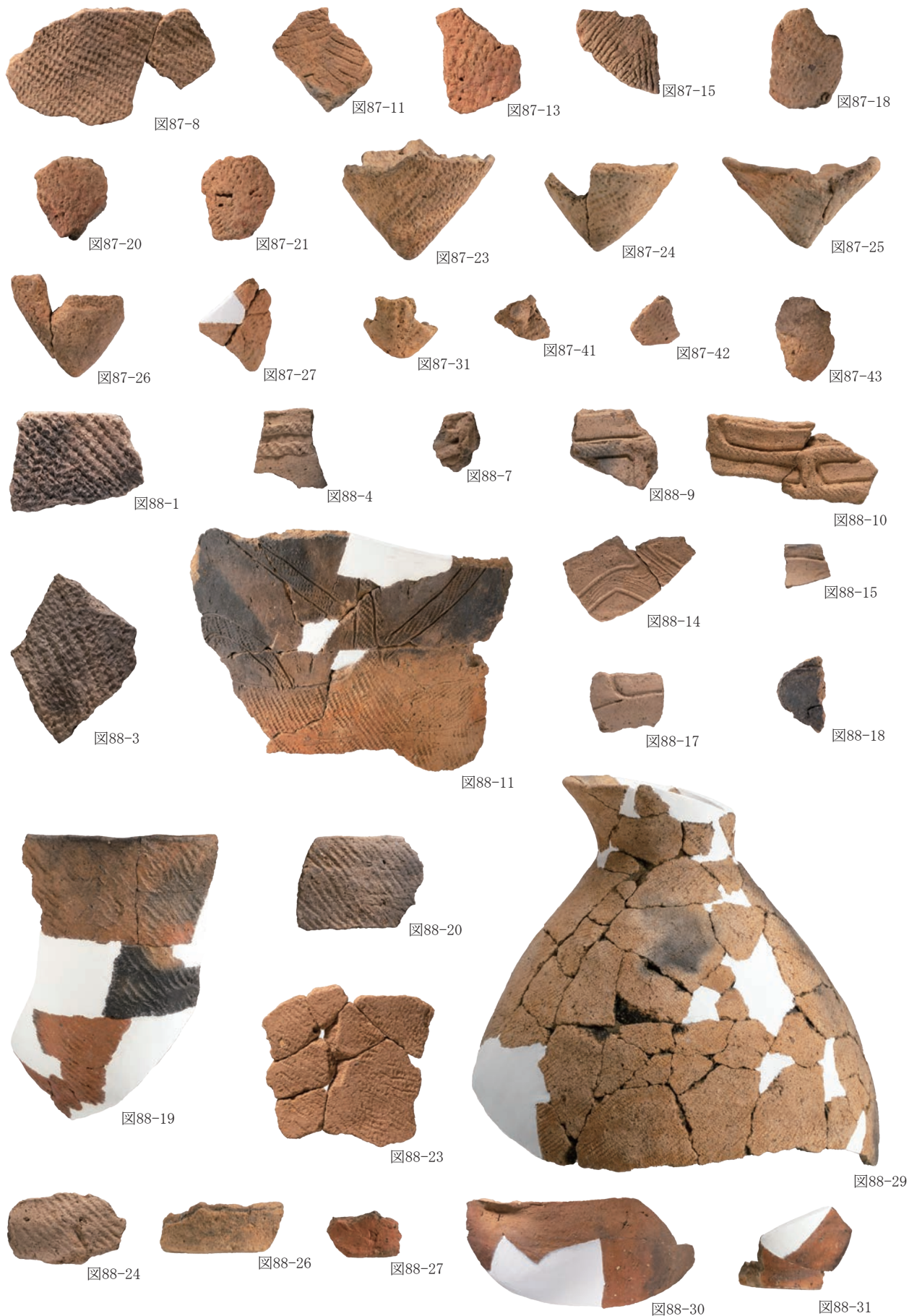


写真79 遺構外出土土器(3)

打製石斧



図92-4



図92-5

磨石 I a



図92-6



図92-7



図92-8



図93-1



図93-2



図93-3



図93-4



図93-5

磨石 I b



図93-6



図93-7



図93-8



図93-9



図93-10



図93-11



図93-12



図93-13



図94-1



図94-2



図94-3



図94-4



図94-5



図94-6



図94-7



図94-8

磨石 II



図94-9



図94-10



図94-11



図95-1



図95-2

敲石 I

写真81 遺構外出土石器(2)



写真82 遺構外出土石器(3)



写真83 遺構外出土石器(4)・遺構外出土土製品・遺構外出土石製品

報告書抄録

ふりがな	けあいしみずかつこさんいせき きたくまのさわかつこにいせき							
書名	毛合清水(3)遺跡 北熊ノ沢(2)遺跡							
副書名	八戸環状線道路建設事業(天久岱工区)に伴う遺跡発掘調査報告							
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第643集							
編著者名	中門 亮太・齋藤 正・平山 明寿・小山 浩平・神 康夫							
編集機関	青森県埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒038-0042 青森県青森市大字新城字天田内152-15 TEL 017-788-5701							
発行機関	青森県教育委員会							
発行年月日	2024年3月15日							
ふりがな	ふりがな	コード		世界測地系 (JGD2011)		調査期間	調査面積 m ²	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	北緯	東経			
けあいしみずかつこさん 毛合清水(3) 遺跡	あおもりけんはちのへしおおあざしりうちまち 青森県八戸市大字尻内町 あざけあいしみず きたくまのさわ 字毛合清水、北熊ノ沢	02203	203122	40° 31' 56"	141° 25' 43"	20220510 ～ 20221028	5,403	記録保存調査
きたくまのさわかつこに 北熊ノ沢(2) 遺跡	あおもりけんはちのへしおおあざしりうちまち 青森県八戸市大字尻内町 あざきたくまのさわ 字北熊ノ沢	02203	203520	40° 31' 47"	141° 25' 42"	20220510 ～ 20221028	5,492	記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
毛合清水(3) 遺跡	散布地 狩猟場	縄文時代	土坑2 溝状土坑21		縄文土器(早期～中期)、 石器		溝状土坑を検出した。	
	集落	飛鳥～ 奈良時代	竪穴建物跡3 土坑2		土師器、土製品、鉄製品		飛鳥～奈良時代の集落 跡を検出した。	
		時期不明	土坑14					
北熊ノ沢(2) 遺跡	狩猟場	縄文時代	土坑29 溝状土坑26 貝殻集中地点3		縄文土器(早期・前期・ 後期・晩期)、石器、土製品、 石製品、動物遺体(貝類)		逆茂木痕のある土坑と 早期の地点貝塚を検出 した。	
	集落	平安時代	竪穴建物跡9 掘立柱建物跡4 土坑2		土師器、須恵器、土製品、 鉄製品、鉄生産関連遺物		平安時代(9世紀後葉 ～10世紀中葉)の集落 跡を検出した。	
		時期不明	柱穴15 土坑13 焼土遺構9					
要約	<p>毛合清水(3)遺跡は、標高約76.8～84.0mの段丘上に立地している。調査の結果、縄文時代は溝状土坑が確認され、狩猟場として利用されていたことがわかった。飛鳥～奈良時代は竪穴建物跡が確認され集落が営まれていたことがわかった。遺物は縄文土器(早期～中期)、石器、飛鳥～奈良時代の土師器、土製品、鉄製品が出土した。</p> <p>北熊ノ沢(2)遺跡は標高約46.8～69.0mの段丘上に立地している。調査の結果、逆茂木痕を有する円形土坑や溝状土坑が検出したことから縄文時代を通して狩猟場であったことがわかった。第3号貝殻集中地点からオオノガイ、シジミ属といった多くの貝類が出土し、生業活動の一端を知ることができた。</p> <p>平安時代は竪穴建物跡、掘立柱建物跡、土坑が確認され集落が営まれていたことがわかった。遺物は縄文土器(早期・前期・後期・晩期)、石器、土製品、石製品、平安時代の土師器、須恵器、砥石、土製品、鉄製品、鉄生産関連遺物が出土した。</p>							

青森県埋蔵文化財調査報告書第643集

毛合清水(3)遺跡
北熊ノ沢(2)遺跡

発行年月日 2024年3月15日
発行 青森県教育委員会
編集 青森県埋蔵文化財調査センター
〒038-0042 青森県青森市大字新城字天田内152-15
TEL 017-788-5701 FAX 017-788-5702
印刷 株式会社 新印刷興業
〒030-0142 青森県青森市野木字野尻 37-728
TEL 017-739-6431 FAX 017-762-1804

この印刷物は300部作成し、印刷経費は1部あたり10,560円(うち県負担5,808円)です。